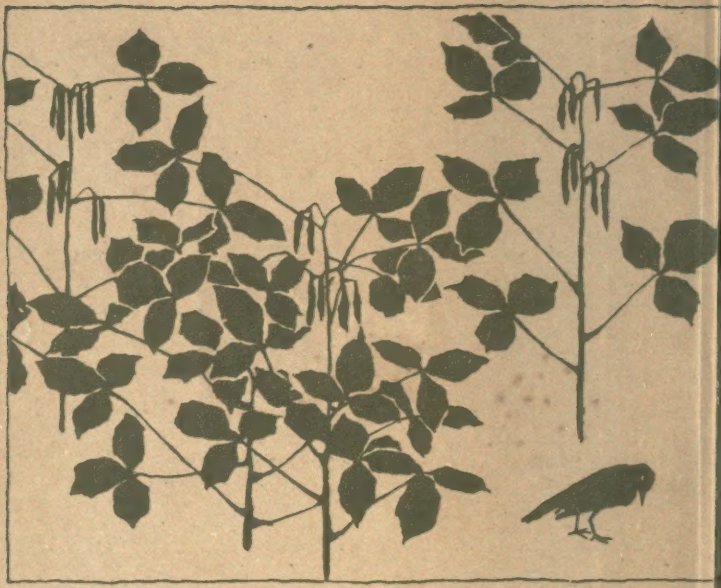
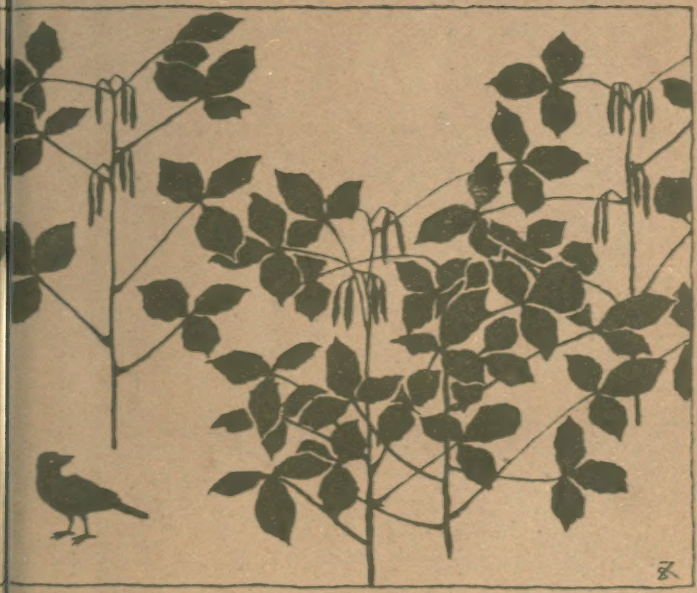
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03043 2876





大正元年十月七日印刷
大正元年十月十一日發行

有朋堂文庫
常山紀談（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

常山紀談 終

て削りたる條どもは、此書第二條の次に黒田滿徳丸殿袴著の段、第五條の次に板倉伊賀守殿所司代の段、其次に同内膳正殿言行の段、其次に土屋但馬守殿の段、其次に番大膳申開の段、第六條の次に台徳院樣御行儀の段、其次に奥平家の士の妻節操の段、第七條の次に細川越中守殿胄の物すきを論ぜられし段、第九條の次安藤帶刀殿、本多上野介殿を評せられし段、其次に那波道圓直諫の段、第十一條の次に水野日向守殿行狀の段、第十二條會津神公の御事、其次に松平左衛門督殿士卒を扱はれし段など、すべて十三條なり。さるは書肆の好にてかくは削りたるものから、さばかり思ひて物せられたる原書の姿を失はじとて、其事の由をかくはことわりおくになん。

平野敬邁識

赤木周憲

右雨夜燈一卷。備藩湯常山先生所述也。臣嘗借諸松崎君脩氏謄寫。以爲家珍焉。今命筆工。寫取一本。以備棲霞公子之覽。仰希公子旦夕誦之。有以助爲人君盡天職之志云爾。

明和八年辛卯秋九月八日

臣赤松勳　恐惶謹跋

雨夜の燈原書三十一條なりしを、此度常山紀談を彫刻したる序に此書をも彫んとするに、彼紀談と同じ條どもをば悉く省きたり。其中に太田持資の條、飯田角兵衛の條、中院内府の條、井伊掃部頭殿の條などは、同事を再擧たれど、其は其條に并せられたる物語有て、異なる趣もあればなり。但末の佐藤直方の條のみは全く同事なれど、これは作者の意ありとのよし紀談の末にいはれたれば、此書も其ぢやうにこそとて、さながらさし置つ。さ

知る事大事なり。下の情を知らざれば、恩信も威も用に立つまじきぞ。兎にも角にも聖賢の教を稽古なくては、此一事は知難し、と仰せありしとなり。

○佐藤五郎左衛門咄の事

前橋の城主酒井雅樂頭清佐藤五郎左衛門直方を殊の外崇敬にて客人の遇なりき。或時五郎左衛門、井伊掃部頭の許に招請せられ、未だ掃部頭對面し給はざるうち、家老用人物語しける時、五郎左衛門申しけるは、大事と申すものは、勿論少しのわざにても傳授稽古と申すこと御座候て、師匠に便りて習ひ受け、其上を工夫を盡して、漸と合點參るものにて候に、日本にては至極大切の事に傳授もなく稽古もなく、自己の分別にて埒を明け候こと有之候。各達御存じに候哉、といふ。家老ども、いや皆々不存候。如何、と問ひければ、其時五郎左衛門、されば其事にて候。一國の仕置にて候。數萬の士民の一命にかゝり候大事にて、安危の至極にて候。夫故異國にては、聖人賢人の教へおかれ候詞、萬世の鏡に成り候道を稽古いたし候に、今の君臣ともに此稽古なく、自己の分別にて埒を明られ候は、さても〳〵危き事の至極に候、と語りけり。

る事なり。其重き士を數多持給ふを大名と申す事なれば、天下の貴人は大名にてぞ御座します。然るに今の大名貧乏にさしつまり、買ひたる物の價を遣らず、國中の士民の艱難を救はず。四民の中の第一の下劣の町人を賴み、金銀を借り、其にて漸く取續給ふこと、口惜き事の至極なり。天下の貴人として天下の賤しき町人に手をさけて、彼等が料簡によりて、漸く身體を持せ給ふといふ事やはあるべき。されども世のならはしと成りたれば、是を恥とも思はず御座しますこそうたてけれ。つく〳〵思慮おはしまさば、大名の恥辱此上やあるべき。されば古より、質素を能き事に奢をあしき事とするは、故ある事ならずや。

○威恩を以つて國を治められし事

新太郎樣常々御意なされ候は、家中國中を能治めんとならば、威と恩との二つなるべし。威なくして恩ばかりなれば、あまやかしたる子の教訓を聞かぬ如くにて、用に立つべからず。又威ばかりにて嚴しきを第一とせば、上むきに納得するとも、眞實になつきたるに非れば、是又散散の事なり。恩にて能なつけ、法度の少しも崩れざる如くに賞罰を行ふを威といふべし。恩信なければ威も無用の事なり。威なければ恩信も用に立たず。然れども畢竟の所は、能下の情を

に、供の士一同に木綿なりしかば、不審する所に、旦那掃部頭、いかにもよごれたる木綿の衣を著られ、駕籠の戸を開き、それ〴〵に言葉をかけらるゝを見て、己が身を顧て、りつぱの衣服引さきたき心地して、それより人質素に成りけるとぞ。國清院樣、村々庄屋に高一石に附米二升宛免ゆるし候へ、とて、年號月日堀甚五兵衞殿、と御自筆に遊ばされたるを、今其家に持傳へたり。百萬石の御身の上にて、斯く有りけん事怪しき程の事なれども、是は戰國の世とも申すべし。新太郎樣こゝの竹を栽ゑて杭にせよ、何村の種米はかやうにせよ。何の役はかやうにせよ、と云ふ類、御自筆に遊されたる御書の、予が曾祖父に下されたる數十通、箱一つに有りて傳へたり。今は斯樣の事は郡代も知らざる體なり。衰へたる世の有樣にこそ。太平久しく亂を忘れて人々油斷し、暖なる儘に士の風俗以の外になりて、明暮酒もり茶の會に無益の費をし、川遊物詣に日を送りて、禮儀の方には心をも附けず。馬具武具いかに成りたらんをも知らず。多く町人の家に質に遣はし、物語するを聞けば、女色の戲言のみにて、士の道はつゆ語り出しもせず。又儉約に事よせて利欲に耽り、あらぬむさき事をしても恥とも思はず。親族朋友の難義を救ふ心もなく、人の物を借りて返す事を忘るゝ類、口惜き世のありさまなり。但し此事は士の上ばかりにも非ず。すべて天下の人を四つに別ちて、士農工商とする事は、古より定りた

に大名の辨へ知し召されんには、人にだまされ給ふ事あるべからず。

○名將たち質素にして下情に達せられし事

井伊掃部頭直孝大坂冬陣に物見二人をやる。雨に濡れて歸りければ、樣子を聞きて後、則ち著られし小袖二つを脫ぎて兩人にやられけり。さて安藤帶刀次へ小袖をもらひに遣はし、我等かやうの事にて、著るもの二つながら家來に遣し、著替無之候、とて帶刀の贈られし小袖を著て革袴にて、權現樣の御前へも度々出でられけるとぞ。今の世を以て見れば、三十萬石の身體にて著替のなかりしといふは、あまりなる事と不審する人もあれども、大樣其節の有樣如此なりしなり。權現樣大坂夏の御陣に、御旅所御用意の事仰せ出されしに、精米五升、干鯛一枚、味噌醬油等にて事足るべし。味噌も多く持すな、と上意有之候由、斯樣の事なれば、武備は曾て以てはか行難き事なるべし。掃部頭かやうに質素なりけれども、彦根は、湖上より船にて都にゆくに便よかりしかば、太平の後は彦根の士ども大に驕り、風俗あしく衣服美麗になりしを、掃部頭儉約にかへすべき道を積り、江戸より歸る時、木綿の衣服を供の士の數ほど用意し、彦根へ到著の朝俄にくばり與へて著せられけり。彦根の家中、旦那を待受に著かざりて迎に出でける

ば、御召仕の女房大勢なくて不叶事なり。何とぞして秀賴卿の御男子御誕生にて、豐臣家の御血脈御相續あるやうに願ふ所なれば、必ず美人を撰み出し、あまた御傍に置かれよ。もし嫉妬する人あらば、女とは云はせじ、我等科に申し行ふべし、と同じく云ひ含めけり。又秀賴卿の近習の面々に逢ひては、御賢く御座なされ候事、大御所殊の外悦びに御座候。常々猿樂を御慰になされ、少々の間も御油斷なく御かゝり御座候やうに有度く候。御養生第一の事に御座候。唯今御年若きうち何かと御心勞の事有りては、鬱症を御煩ひなされ候。此段氣の毒千萬に御座候。ゆめ〳〵御仕置の事に御心をかけさせられぬやうに、とかく猿樂の諸舞にて御養生第一に然るべき由、身になりがほに大切らしく云ひなしければ、皆尤と聞請けて、秀賴卿色に耽り猿樂を好み給ひ、仕置の事毛頭も知り給はず。況てや下の情は夢にだにも合點無く、あへなく終に滅亡し、蕭田矢倉にて自害し給ひ、日本の主を失ひ申されし事、本多正信の計なるべし。秀賴卿にも中院內府公の如き人後見たりせば、本多の計も徒となるべし。此事は今太平の世なれば、敵國より大名を愚にすべきには非れども、今の大名は皆家老を初て重き用人の爲に愚に成り給へる事ぞかし。其子細は、主君下の情を知り能人を用ひ給へば、己が恣なる事なり難き故、如何にもして主君を愚にならせ給へと、明暮心の中に願ふ事、和漢同じためしにぞある。此所だ

司坊官を呼びて、何とて斯樣のはしたなき物を置きたるぞ。はしたなき業は本よりあしければ、假令有りても、御年ゆきての後は御心附きて止事も有るものなり。是等はさして惡事にあらざれども、此事に慣れ空しく月日を過し、御學問の御志怠るものなればあしきものなり、と云はれけり。誠に內府公の詞尤至極たるべきなり。又或時其宮へ出入する者、尺八の名高きを御目に掛けたり。大事の器とて折紙など附けたり。かゝる所へ內府公御入り有りて、是は誰が業ぞ。斯樣の物御目にかくる事やある、と云ふまゝに、柱に打當てて碎かれけり。其後尺八の主參りけるに、其由を語り聞せ、返す〳〵寶物打碎かれける事氣の毒なり、と坊官なと云ひしに、尺八の主、少も苦しからず。唯私の持ちたると內府公の聞し召されん事恐しく候。御聞なきは私の仕合なり、と申けるとぞ。其子通躬卿も嚴なる人にて御座しけり。人の後見にかゝる人をつけ度き事なり。豐臣秀賴に權現樣御對面の後、本多佐渡守正信を召して、秀賴はかしこき人なり。中々人の下知を受くべき人に非ず。父太閤の跡を繼ぎなん、と驚き給ひて上意ありけり。正信承り、いや私はかり事にて、秀賴卿を愚になし申さん事、いと安き事に御座候、と申して退出しけり。秀賴卿の御臺所は、將軍樣の御娘にて御座しましければ、佐渡守御臺所の上臈女房に對面し、すべて上下共に女は嫉妬を惡しき事の至極とせり。秀賴卿は日本の主にて御座候へ

殺すべしとの巧なり。一徹數奇屋に入る時、相伴の三人、挨拶に掛物の繪の讀を讀み給へ、といふ。是は韓退之の詩にて、

雲橫二秦嶺一家何在　雪擁二藍關一馬不レ前

といふ句なり。一徹少し學問ありて讀けるに、相伴其故を問ふ。一徹大略子細を咄しければ、信長壁越に是を聞き、つと走出て、一徹には荒勝負許する勇士と思ひしに、今聞く處文字にも達せり、奇特の事感ずる餘に實を語るべし。今日の遇は茶の湯にあらず、其方を刺殺さんとせし巧みなり。相伴の三人皆懷劍を差したり、今日より永く我に從ひて謀を致されよ。ゆめ〳〵害心を止たり、と云はれければ、三人の相伴懷より小脇差を取出す。一徹平伏して、死罪を御免下され候事忝く候。私も內々今日殺さるべきにて候はんと察し申候へば、詮方なく是非一人相手を取可レ申と存用意仕候、とて、是も懷劍を取出して信長に見せ申しければ、信長いよいよ其心がけを譽られけり。

○中院內府幼き宮に後見の事竝本多佐渡守謀計の事

青蓮院の宮にや、幼き宮方に中院前內府通茂公御後見たりしに、或時將棊盤のあるを見て、家

ば、尾張守二心を持つきざし有り。毛利元就是を察し、或夜密に義隆の前に出て、古より國を奪ひ候事皆その家の家老にて候。それ故明君はよく家來を引廻し、威を家老に奪はれず候。威を家老に奪はれ候ては、役義を云附け知行をやり候ても、其主君よりの下知と不レ存、家老より取計ひ申すと心得候故、其主君は有れども無きが如くに候。家老役人の勢次第に強くなつて、後には其主君を殺し國をも奪ひ候。今の樣子危く候間、御心を附けられ候へ、と申給ひしかども、義隆合點なく、遂に尾張守に殺され給ひけり。案ずるに是は亂國の世の事にて、太平の時は君を殺し奉る事はなけれども、主君をだまして其威を奪ひ取るは、家老用人の常の事なり。されば熊澤助右衞門（後に了介と號す）新太郎樣の御時執政たりしが、常に人に語りて、やがて今の大名は家老用人にだまされ、我國は皆家老用人の物と成るを知らず。下の敬ふを能事として、だますといふ事少しも知らず。下の情露ばかりも心附なく、何十萬石の身上にても、國を持ちたるにては有るべからず、と語られし由、智者の詞何かは違ふべき。思ひ當れる世と成りぬるぞ悲しき。

○稻葉一徹文學に依りて死を免されし事

稻葉伊豫守一徹、織田信長に從ひけれども、信長心解けず。數奇屋にて茶を賜はり、其席にて刺

岩田小左衛門なり。新太郎様御使番に、誰か可レ然、と御吟味遊され未決定せず。市正に御尋なされ候へば、市正承り、中村忠左衛門可レ然奉レ存候。忠左衛門事私共に對し、毛頭も諂ふ心のなき男にて御座候。如レ彼なる者に仰せ附けられずして、誰か外に御座有るべき、と譽立てければ、新太郎様御機嫌大方ならず。忠左衛門に使番を仰せ附けられけり。日頃市正と忠左衛門とは大に不和なり。御前にての様子を忠左衛門に語り聞せし人ありければ、忠左衛門日頃の不和を少し後悔の氣色あり。又此由を市正に語りける人ありければ、市正、御尋によりて能人を申上候事は、御國の爲なり。毛頭も私の慮なきことなり。不和は本の通りの不和にてこそあれ、忠左衛門は吾心を知らず、と云はれしとなり。此をぞ家老の職分を失はぬ人と申すべし。君君たり臣臣たりといふ事誠なるかな。

○毛利元就大内義隆に諫言の事並熊澤助右衛門格言の事

大内義隆は、周防長門豐前不レ殘領國にて、安藝石見も領地なり。太宰大貳を兼たる故筑前も下知に隨へり。周防の山口に居城して、其比並なき大名なりければ、漸武備に怠り、遊山を樂み、茶の會に日を暮し、家中國中の難義を露も知らず。仕置は家老の陶尾張守晴賢に任せられしか

面々徒黨して美作を打果さん、と荻田主馬など張本たり。美作素知らぬ振して取合はず。偖美作は越後守の妹婿なれば、子の大六は越後守の姪なり。一門の如く家中の士敬ふべし、と云はせけり。之より家中騒動して、終には江戸へ訟へ、數年決定せざりしに、常憲院樣御代始、御自身雙方の公事を御城殿中にて聞召し、御決斷ありて、越後高田二十五萬石召上られ、美作死罪仰附けられ、子の大六は菩源寺樣へ御預、天和元年六月二十二日、御屋敷弓場の東作庭にて是も死罪に仰附けらる。永見大藏、荻田主馬は八丈島へ流罪、其外死罪流罪に仰附けられたる士數多あり。此取扱に附渡邊大隅守八丈島へ流罪、松平大和守閉門仰附けられ、翌年二月閉門御免、帰路十五萬石召上られ、豐後日出にて五萬石下され、松平上野介廣瀨二萬石の内一萬石召上られ、酒井雅樂守、久世大和守、御老中職召放されけり。是皆越後守暗弱にて、威を家老用人に奪はれ欺かれしゆゑなり。常憲院樣の審斷、異國唐の女宗を天子と申しゝに比ぶべしと、其節より諸國畏れ眼したりけると也。

○土倉市正中村忠左衞門を勸めし事

池田の御家の御家老土倉市正は、四郎兵衞が養子にて、實は瀧川左近將監一の先手の士大將

を取りて人に笑はるゝをも恥とは己も知れども、其恥を恥しとも思はぬ者は、旦那を殺しても身の爲のよき事ならば爲べきなり。僞と貪とは品はかはれども、落著は同じ事なり、と云はれしとなり。新太郎樣にも常に、諂者に知行を與へ置くは、盜賊を抱へ置くと同事なり、と仰せられし由、智者の詞割符を合せたるが如し。

○常憲院樣越後家の訴訟御睿斷の事

松平越後守光長子なかりしかば、家督は實の弟永見大藏なるべし、と大藏も思ひ、又家中も大方是ぞと思ひ追從しけり。小栗美作飽迄邪智ある者にて、御家督は大藏殿にてあるべし、と云ふ人あれば、左樣にぞあらん、と返答す。大藏聞傳へて悅べり。偖江戸へ家督の事窺に美作行けば、大藏も賴むとはなけれども、暇乞に事よせて念頃の體なり。美作江戸へ行き才覺を廻らして、三河守を立つべし、との議定なり。一伯配所にての子永見賴母と云ふ、其子を三河守といへり。永見大藏は賴母が弟なり。是も配所にて生れたりとなり。是より大藏大に本意を失ひ、家中日頃大藏へ取入たる面々も呆れたり。然れども上意と披露する上は詮方なし。美作は大藏を欺きたり、と獨笑して、三河守をもり立てて權威を大に振はんと思へり。大藏堪兼て、かねて入魂の

蔵の銀子を貯へ置きしは軍用公用の爲に御座候。御家中貧乏を救ひ人馬を減らさず、知行高の格を勤め申候事軍用の本に御座候。これ公方様への御奉公と奉存候へば、大なる公用に御座候。且又御蔵の銀を取出し候へども、少しも減り申事無御座候。十年賦に申附け候間、十年の間に本の如く返辨仕候。是上に少の損もなく下には大なる益御座候て、御家中忝しと存ずるは上の大益に御座候故、假令私は咎を蒙るとも存申候。外に御用人は更に存ぜず、私一人の所爲に御座候間、いかやうとも罪に仰附けられ候へ、と申しければ、信濃守閉口致されけり。

○武邊は律義者にありといふ事

律義なる者ならでは武邊はせぬよし、昔より云傳へたり。加藤主計頭清正剛の者をほしく思ひ、一生の間目利に心を盡し、人相迄を稽古致されしかども、其術を得られず。唯律義者に武邊者多し、と言はれしとなり。又加藤左馬助嘉明も申されしには、氣さきのけなげなる者は、人の目を驚すほどの働をするといへども、踏つめたる武功は律義なる者にあり。例へば賴みもなく、旦那の威衰へて人々二心を持つ中に、獨義を守りて心がはりなき強みは、律義者ならでは無き事なり。諂者は假令萬一に一旦の武邊ありても合て賴にならず。旦那の出頭を心掛、知行

秋かぜにくさ葉の露をはらはせて君がこゆれば關守もなし

と詠みけるとかや。總て學問して名高き勇士多し。文武は二つならず。詩歌を公家の玩物と思へるは無下に口惜しき事なり。近頃、大猷院樣、文武の聞えある士を陪臣の中より十七人撰み出させ給ひしに、永井信濃守の家臣酒和田喜六歌人にて、

芳野山花さくころの朝な朝なこころにかかる峯のしらくも

とよみける歌を聞し召し、是も又文の一事なり。喜六がすくやかなる事は內々聞し召されし、とて、彼の十七人の中へ酒和田をも入れさせ給ひけり。此酒和田華奢風流のみを心がくる人には非ず。林道春に聖賢の學問をも尋問ひけり。信濃守江戸の留守に家中勝手に迷惑して、喜六に願ひて金銀を借度きよしを言ひけり。喜六則ち信濃守に斯くとも申さで、藏の銀子千貫目貸與へければ、信濃守江戸より歸り大に腹立てて、貸すとも何とて我等には言はざるや。我儘に貸したる事不屆なり、と申されければ、喜六承り、されば其事に候。只今私を御叱りなされ候御志を存候故、申上げ候とても御聞屆御座有るまじと兼て存候。申上候て御聞屆無御座候に、押して貸し申事如何に御座候。又御趣意を守り申候て貸し不申時は、御家中大に迷惑可仕候。上方の商賈町人の銀を借りて過分の利を遣し、町人に利を取らせ候はば、無益の事に御座候。御

けれども、極めて和歌をすき給へり。氏郷の家に佐々木の鐙といへる名高き鐙ありけるを、細川越中守忠興所望ありけるに、家來共、是は名物にて候。別の似よりたる鐙進ぜられよ、と申しければ、氏郷、

なき名ぞと人にはいひてやみなまし心の問はば如何答へん

といへる歌の心の恥かしき、とて彼の鐙を贈られけるとなり。元弘の亂に菊地寂阿入道が、後醍醐天皇の勅命にて敵の城に寄せける時、楠田の宮の前にて馬のすくみたりしに、

もののふの上箭のかぶらひと筋におもふ心は神ぞしるらん

と詠みて神殿の大蛇を射て馬のすくみ直り、既に討死すべき時、故郷へ一首の歌を書附けて遣しけるに、

ふる郷にこよひばかりの命とも知らでや人の我を待つらん

と詠みて忠義の爲に命を棄てし、皆文武の人と申すべし。大將ばかりにも非ず、名高き士は皆書を讀み學問し、和歌をも好き申しけり。梶原が一の谷にて、

物のふのとりつたへたる梓弓ひきては人のかへすものかは

と詠み、奥州を賴朝卿攻めらるゝ時、白河の關を越え給ふに、梶原、

衣のたてはほころびにけり

と云ひかけ給ひしに、貞任鍛を振向けて、

年を經し糸のみだれのくるしさに

と附けたりければ、八幡殿はげたる箭を差外し給ひけるとぞ。かゝる烈しき所にて斯く附けける事、優にやさしき事なるべし。斯くて八幡殿上京の後宇治の關白殿に參りて、軍物語ありけるを、中納言匡房卿聞きて、器量はかしこけれども軍の道は知らず、とつぶやきけるを、八幡殿の郎等聞きて、憎き事を申され候、と八幡殿に申せしかば、八幡殿、子細あるべし、とて匡房の中納言車に乘られける處へ參りて會釋有りて、やがて弟子になりて學問し給ひけり。永保の合戰に八幡殿金澤の城を攻めらるゝ時、一行の雁の苅田の面におりんとしけるが、俄に驚き飛亂れけるを八幡殿御覽じて、馬を控へて、中納言殿に學問しけるに、兵法に鳥起者伏也といふ事あり。定めて伏兵在るべし、とて野の三方を取卷かれしかば、案の如く三百餘の伏兵居たりしを攻破られけり。八幡殿學問に心を寄せ給はずば、などか斯る事を知り給ふべき。右大將賴朝卿和歌に心を寄せ給ひ、近き年信立、謙信兩人とも詩歌を好み給へり、蒲生飛驒守氏鄕は伊勢の松崎十二萬石より、奥州會津百萬石を太閤に拜領あり。奥州を切り靜めたる無雙の猛將なり

七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだに無きぞ悲しき

と言へる古歌の心にて、簑なきと申す事を言はで知らせ申したるなり、と申しければ、持資、駭きて、吾是ほどの事をさへ知らで、百姓の娘に劣れる事口惜し、とて其より書を讀み歌に志を寄せられけり。下總國へ軍を出す時、山涯の洵邊に山上より石弓を張りたり。潮湛へたらば通り難かるべし。如何、と言ひし時、折節夜半なるに持資、いざ見て來らん、とて馬を乘出しけるが、其儘歸り、潮は干たり、とて軍を押通されけり。これは、

とほくなり近くなるみの濱千鳥なく音に潮の滿干をぞ知る

とよめる歌あり。それを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたれば潮の干たるを知りたるとなり。又退口に利根川を渡す時、是も夜半にて暗さは暗し、何處か淺瀨なるべき、と口々に言ひけるに、持資、

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀨にこそあだ波はたて

とよめる歌あり。波の荒き所を渡せ、と下知して難なく淺瀨を渡りけり。されば昔より武將は必ず學問に心を寄せ、歌の道を知り給ひけり。奥州の合戰に、八幡太郎義家、安倍貞任、宗任を衣川の城に追詰め給ひし時、穢くら後を見する哉、物言はん、とて、

○松前伊豆守用意の事

松前伊豆守、元祿年中京都町奉行勤られし時、海保友竹といふ畵師參りて、紅梅のよく開きたるを生置れしを見て、御所司代竝に此方樣ならでは、斯樣の初花見申さず、と申しけるに、伊豆守兎角の返答なく落涙せられけり。友竹、如何なる故にやと案じ居たるに、稍あつて、能こそ言はれたれ、誠に左樣なるべし。我等不肖の身にて、かゝる重き役義を仰蒙り威勢あるを知らず、うか〳〵と心附かざるは大きなる油斷なり。是に附ても大事の役ぞと思へば、氣遣しく落涙したるぞ、といはれしとなり。假初の一言にも斯く心を附けられしは、古の君子の道なるべし。されば此人の仁德、京都にて後まで申し傳へけるとぞ。

○古の名將學問和歌を嗜まれし事竝酒和田喜六器量の事

太田持資と號す後道灌上杉の家老なり。鷹野に出て雨に逢ひ、百姓の家に入りて、簑を貸し候へ、と云はれしに、若き女物は何とも言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、花をくれよといふ事にてはなし、とて腹立てて歸られしに、是を聞きし人の、それは、

物語して、我は大力になり度く思ふなり。重き具足二領打重ね著て軍に出でなば、鐵炮の恐ろしき事有るべからず、と言はれしを、飯田角兵衛は父の時より奉公して、度々武勇の働有りける老功の者なりしが、是を聞き進み出て、先殿様は御具足一領にて、膝が嶽七本鎗の武功より幾度となき軍に御出なされ候へども、終に薄手も負はせ給はず。朝鮮國に攻入りて鬼將軍と異國の人も恐れ奉り候ひき。誠に死生は天命にて御座候。用心の分別にては參る事にて無く候。但し善く戰へば生き惡しく戰へば死すると申す古語の候。國中の百姓を隨分に勞り、家中の士能く心服し奉り懷き從ふ時は、疊の上にても軍の勝負の道理明に分り候故、軍の場に至り候ても千萬の人數手足を使ふが如くになり候。されば御家中の士の著申す具足は、皆大將の御一身に打重ね召され候と同じ事にて御座候。若し御家中の士心々に離れ候ひなば、假令百領千領御具足を召し候とも、何の御用に立ち可申候や。歎かしき御一言に候。と言ひて退出しけるが、先殿には何とてあれ迄には劣らせ候にや、と聲を上げて泣々出でけるとぞ。其後忠廣滅亡せられけり。近頃にも新太郎樣の仰に、取傳へたる大業平何の用にか立つべき。家中の士の刀を殘らず用に立てさせなんには、向ふ敵は有るまじ。大名の身にて刀一腰を根みにせんは口惜しき事の至極なり、と備後守樣に御戒有りしも、飯田と同じ理にこそ。

あるべき事にてはなけれども、申上げたれば、御上の御慈悲にて御聞届ありたるぞ、と申聞けるとなり。それのみならず、度々御前へ御諜を申上げ、爭ひ申す事幾度といふ事なし。後には是を聞傳へて、内藏允御爲を思ふ事、大膳が及ぶべきに非ず、と賞美しけるとかや。されば是を以て案ずるに、大膳が權現樣の御前にて、命を棄てて申開致せしは一旦の事にて、仕能き事なるべし。國の仕置は極めて大事のものなれば、大膳が一旦の骨折とは比ぶべくもなき内藏允が忠なるべし。

○飯田角兵衞其主肥後守を諫めし事

竝新太郎樣備後守樣へ御教訓の事

文祿年中朝鮮より虎を引來る。鐵の鎖を附け兩方より七八人取附きて引きけり。朝鮮先陣の諸大將達名護屋に歸り集られし時、彼虎を大力の男數多引張り、嘯と云ひて駈出並び居られし中を通りけるに、人々皆驚き騷ぎ立ちたる處に、加藤主計頭正清膝立直し、拳を握り臂を張りて屹と睨まれしに、虎も暫し踏留りて清正を睨みて通りけり。加藤左馬助明は初より壁に凭れ懸りて居眠りて在りしが、虎の通りつる後に暫く有りて目を開き、何事に騷がれ候や。虎を牽き通れる故歟、と閑に言はれしとぞ。主計頭の子肥後守忠廣は大に父に劣れる人なり。或夜近習の士と

が如く、人々大に驚き騒ぎ狼狽へしに、内藏允見向もせず、少しも駭く體なかりしかば、國清院様内々感じ思召し、色々御試みなされ候に唯者ならざりしかば、知行二千石下され御寵愛あり。大坂陣の時、天滿橋御攻口なりしに、御先手須加左京竹束を附くるに、御人數少く候、御加勢下され候へ、と申上けしかば、内藏允に、見分仕候へ、と興國院様松平武藏守利隆朝臣仰附けられたり。内藏允茜染の羽織を著て、馬に乘り行きて見分せしに、燒跡の土藏などを楯にして扣へ居たり。橋より上に印の杭の候。見分せられよ、と云ふ。内藏允、心得候、とて行くを、内藏允は近頃取立てられて、出頭の者なり。祐筆だけの武者振見よ、と嗤き合ひて居たり。内藏允馬より下りて隅に川岸を行くを、城中より鐵炮を打懸くる。水に響きて殊に烈しく聞ゆれども、内藏允ちつとも騒がず、足數を數へて歸り、如何にも各達の申され分の通りなり。申上ぐ可し、とて御旗本へ歸りけるとぞ。後番大膳と兩人に御仕置仰附けられしに、大膳は遙に劣りてけり。願ひ申す可き品有りて大膳に言達しければ、事能く濟むやうに答へけれども、興國院様の御前にては十分に事の譯を得申し述べず。又内藏允に言達すれば、内藏允色を變へ、左様なる事旦那へ申さるゝものに非ず。拙者は得取次致さず、と荒らかに申し切つて、御前へ參りては事の子細を申上け、御聞入れなき時は烈しく御競合を申し、是非とも願の如く埒を明けて後其人を呼び寄せ、中々御聞入れ

州には新太郎流と申すものにて候。此上の道理有之まじく候、とて御賞美ありけるとぞ。

○板倉周防守大猷院様へ草鞋を献ぜられし事

板倉周防守重宗、大猷院様にわらづ一足獻上有りて、是は權現様、軍中には斯様なるが能しと上意なされ候を、能覚え候て作り習ひ候わらづにて御座候故、差上げ候。もし御用に御座候はば、いか程も獻上可」仕、とぞ申されける。是は權現様御小身より御成立遊され、賤き下々の情をよく御存じなされ、邪なる人のいひなしに御取合遊されず候故、上下の志相通じて、下々怨むる者なく、終に日本の主にならせられ候。今日本をうけ保ち給へども、下々の情よく知召れでは叶はざるといふ事を、わらづによせて申上げける心とぞ。

○芳賀内蔵允忠功の事

芳賀内蔵允は、小身の比國清院様参議輝政卿の御祐筆なり。國清院様、美濃國岐阜の城を御攻落しなされ、權現様へ御勝軍の御注進狀を内蔵允に仰せ附けられ、御書かせなされ、御牀机に御座なされ候節、城中の鹽硝蔵に火入りて、藥飛び出でける音夥しき事にて、山の崩れかゝる

料簡を改め人柄を嗜む故ならん、と上意有りければ、三彌承り、將軍樣は殊の外御奉公申上げ能御座候。あの如くなる主君にすね申すは、氣違に候、と申上げられければ、權現樣、三彌が持病又おこりたり、と御笑ひなされ候。又或時幸若八九郎高館を舞ひけるを御上覽の節、武藏坊辨慶は世に勝れたる者なり。今の世には少かるべし、と權現樣上意ありけるを、三彌進み出で、判官殿のやうなる主君ありかね申すべく候。辨慶は御座あるべく候、と申されけり。曹源寺松平伊豫守の御時、御大名中御振廻の席にて、辨慶の事御物語に出でしに、辨慶ほしき事と評判のありけるに、木下肥後守末席より、いや其辨慶少もほしく御座なく候。判官殿の料簡になり申し候へば、私の家來は殘らず武藏坊や佐藤兄弟になり可申候。それ故何とぞ判官殿になり申度しと久しく心掛申候へども、まだ得なり申さず、口惜く存候由ひ出されしかば、曹源寺樣聞し召し、唯今の肥州の理窟は、拙者父新太郎が常申したる事にて候。能旦那になり度と心掛け、いろ〳〵種々工夫し候へども、能旦那に成候道合點いたし不申。書物を出し學問仕候へば、能旦那の道知れ可申と一心不亂に存極め、それより思案分別致し、古の聖賢の掟を稽古いたし、寢てもさめても忘れ申さず、少し旦那になり候道を合點いたし候と、拙者へ申聞候。日本國に響き渡り能御存の新太郎事、如斯いましめ申たる段と、今の道理と一つ事にて候へば、肥

山伯耆下知して、黒鹿毛の馬に乗りて鎗をば持たず、采配を腰にさし度々取つて返す。武者振敵の大将ぞ。權現樣御事追つめて討取れ、とて急に追懸けたり。御馬廻殘り少く討たれければ、權現樣にも御討死の覺悟なされ、御馬を引返されし時、夏目長右衞門、是は御討死の場には候はず。早御退きなされよ、と申して、御馬の口を濱松の方へ引向け、鎗おつとり、御馬のさんづをたゝみかけて叩きければ、御馬かけ出て敵と違ざかりぬ。長右衞門踏とゞまり、敵の多勢に取り卷かれ、鎗の柄の折るゝ程戰ひて討死しけり。大猷院樣の御時、御悅事ありしに、諸大名出仕にて、德川の御家御繁昌の事樣々物語ありし時、新太郎樣備前少將光政朝臣稍暫くの間御詞もなく御座なされしが、夏目長右衞門箕形原にて、權現樣の御命に代り申さずば、斯樣に御繁榮は御座あるまじき由仰せられしを、大猷院樣聞し召し、德川家の士の節義の心を今更引起したる詞なり。智者の一言とは斯る事なるべし、と大方ならず御悅にてありけるとぞ。

○本多三彌木下肥後守義經辨慶を批評せられし事

本多佐渡守の弟に三彌と申しゝは、以の外に直言をいひ出す人なり。台德院樣に御奉公申上けるに、或時權現樣、三彌は能拗る者なり、と上意なり。其後一萬石拜領なり。權現樣三彌を召し、

權現樣駿府に御隱居遊され、大御所樣と申奉る。台德院樣江戸より駿府へ御出でなされ、二の丸に二ヶ月餘御滯留なされ候節、權現樣阿茶の局を召して、將軍には年若き人なり。旅住居二ヶ月になりぬ、夜中徒然なるべし。花を使にして菓子を持たせ、裏道より忍びやかにやれ。もし慰にも成ぬべきなり。我云ひたると聞れなば、隔心あるべし。汝が心得に能計らへ、と仰せられければ、阿茶の局、御心の附たる上意なり。と御請して、花其比十八歲、女中第一の美人なりしを、殊に取繕はせ、下女に菓子をもたせ、初夜の比裏道より密に參らせけり。內々阿茶の局より斯くと申しければ、台德院樣御上下をめし待せ給ふ處に、花參りて御庭の戶を訪れければ、台德院樣御自身戶を明られ、花を上座に直し、菓子を御取り、是は大御所樣より下されたるなるべし、とて御戴きなされ、花早々歸られ候へ、と仰せられ先に御立なされ戶口まで御送りなされければ、花傘てたくみしと違ひて、いらへの詞もなく、歸りて、斯樣々々なり、と申しければ、權現樣聞し召し、將軍は律義第一の人なり。我はしごをかけても及難し、とぞ上意ありける。

○新太郎樣夏目氏の忠死を御賞歎の事

三河國箕形原の合戰に、權現樣御負けなされ、濱松をさして御人數崩れ候時、甲州の士大將秋

常山紀談附錄

雨夜燈

秋雨の夜半に寒燈を剪りて、古き物語を書集めぬれば、是なん雨夜の燈といふべき。

○權現樣豐臣太閤に御對面の時の事

權現樣豐臣太閤に御對面の時、太閤、我所持の道具粟田口吉光の銘の物よりはじめて、天下の寶といふものは集りて候、とて指を折り數立申され、さて、御所持の道具祕藏の寶物は何にて候哉、と尋申され候に、しかぐの物無二御座一由權現樣仰せられ候。さて仰せられ候には、我等には左樣の物無之候。但我等を至極大切に思ひ入り、火の中水の中へも飛入、命を塵芥とも存ぜぬ士五百騎所持いたし候。此士五百餘を召連候へば、日本六十餘州恐しき敵は無二御座一候故、此士どもを至極の寶物と存じ、平生祕藏に存候由御答ありければ、太閤赤面にて返答なかりけり。

○權現樣花女を御使にて台德院樣へ菓子を進ぜられし事

叛きて强を快せんとするものなり、と讒言に遇うて、源君利隆を譴責せらるべきの沙汰あり。利隆、番大膳を以つて、毫厘も不忠の志非義のことなし。皆永盛が所爲なることを陳ぜらる。番は厮養の卒より經のぼり、騎士の將と爲りて政を預聞程のものなり。始終少も不蹶、辯舌審に子細をのべたり。源君はじめ簾を隔て、利隆が何をか陳ぜん、と怒らせ給ひける。番が言ふ所理明に證正くして、疑ひ悉く解けければ、簾の外に出でさせ給ひて、段々聞し召し届けられぬ。以後を愼め、との上意なり。番、頭を疊に附けて拜して不立。本多佐渡守正信御前に在りて罷立つて、忝き上意なり。皈りて此旨申聞せよ、とありけれ共、番猶不立。正信、事濟みて不起は故あるか、と被尋。其時少し頭を上げ、正信の方を見て、憚多き申事に候へども、以後を愼めとの上意は、利隆が誤なき段、未だ聞召屆けられざる處有るかと存候。是より先に嘗て過御座なく候へば、以後も亦只今の通に候。別に可愼の事候はず、と申す。源君重ねて、已に利隆の誤なき事を知れり。更に疑を不遣、との仰なれば、そのとき頓首再拜して皈る。正信以下座にある人々、大に番を嘆美せり。

るを見て、敵地の利なき時は必ず怖れて出づべからず。君公合戰を挑まるゝとも得べけんや。敵地の利を賴みて出す處を、身方は大軍なり。長々と出させて後急に討ン之、勝事案の內に候。若し人數を向けられば早きを善とす。利隆公の備續き候はば、敵見をなして未だ戰はざるさきに引返し候はん、と申せば、忠繼、汝等が云ふ所尤なり、とて、造作もなく敵を追拂はる。利隆は見ン之、勇み進むと雖も、目附城和泉守永盛、源君の命なり、と云ひて強て制ン之、利隆憤り仰いで、兵を收めんや否や、と思惟する處に、阿部四郎五郎諸手を巡て是に來る。利隆此由を告げらるゝに、阿部、兄弟の身と云ひ、眼前の敵といふ忠繼若不ン克ば、是兄弟を棄てたるなり。忠繼又克ン之ば是自怯のそしりを取るなり。兩ながら武家の恥辱なれば、只進むに不ン如、と云ふ一言に力を得て、永盛制すれども不ン用。利隆の將、利隆始より貳あらず、何をか疑うて沮止らるゝや。敵を見ながら卻て兵を收るは、師を起して此に來る者、何の爲とかする。源君決して如ン此の非理の命あるべからず、と云ふ。永盛齒をかみ小躍して、汝等吾言を輕蔑にす、其罪重し、必ず言上を遂けて一々腹切せんぞ、と大に怒る。利隆の將、勿論のことなり。士たる者其君の爲に腹切らんことは、本より所ン甘也、とて中津川を涉りて橫すぢかへに蒐る。敵この兵勢を見て、中途より引入りて合戰に不ン及。大坂沒落の後、利隆、懷携貳兩陣の中に居て主客の勝負を料る。是弱を

を殺すこと許多なれども、中村を知らざれば敵恐れず。中村つひに戰沒す。依」之曰く、敵を殺すの多きを以つて勝に非ず。威を輝して氣を奪ひ、勢を撓すの理を曉るべし。

○大坂攻の時平野村失火安藤治右衞門遲參の事

大坂陣の時、平野村に失火あり。旗本の面々馳聚る。安藤治右衞門後れたり。皆問ふ、如何。我等は先手を心元なく存じ、行向うて見て參り候。とく可」參を、旗本は別事あるべからず、若變あらば先手なりと思ひ馳行候故、往還に時うつりて遲參に及び候、といへば、皆その心掛を稱す。

○城和泉守長盛讒言の事

大坂冬陣に、松平武藏守利隆は神崎に軍し、弟左衞門督忠繼は尼崎に軍す。忠繼人衆推出し、矢野兵庫、佐分利九之丞を物見として、蟹江の地形を覘せしむ。二士皈りて、兩方沼にて前狹く末廣く、身方の爲には利鮮く、敵の爲には便あり、と申す。又由井伊豆、丸山豐後、渡瀨淡路を差遣す。二士は、却て味方の利あらん、と云ふ。忠繼、矢野、佐分利が言ふと相齟齬するを以て、その故を問るゝに、三士、君公人數を推出させ給ふは、合戰を望ませらるゝに非ずや。身方大軍な

て落涙し、我子四郎が首なり、と申す。忠利則ち軍監畑忠庵を呼びて、大將の首は髪の結樣替有りと聞く、其通りや。畑答へて、如〻命大體常の如く結ひて髪の折を下へ折候、と申せば、忠利下部の者に令して、首の髪を令〻結、仲間馬檜杓に水を入れ來り、件の如く結終りければ、忠利使者を以て石谷十藏へ、此首大將四郎が首に似候故先進候。尤不〻遣、猶又御吟味可〻有歟、と申し送られければ、十藏則ち使者に對面あり。吟味の趣を聞屆け、此上は訝き事なし。去ながら猶又生捕に可〻尋、とて數人別々に引分けて問〻之に、皆、四郎が首なり、といふ。十藏も上使信綱も相共に忠利の陣に來り、手柄を被〻賀、飛檄を以つて江戸へ注進有り。陣はこの功に依りて新知千石與へられたり。

○松山新介の勇將中村新兵衞が事

攝津半國の主松山新介が勇將中村新兵衞、度々の手柄を顯しければ、時の人是を鎗中村と號して武者の棟梁とす。羽織は猩々緋、鍬は唐冠金纏なり。敵これを見て、すはや例の猩々緋よ唐冠よ、とて、未戰はざる先に敗して、敢て向ひ近づく者なし。或人強ひて所望して中村與之、其後戰場にのぞみ、敵中村が羽織と盛とを不〻見、故に競ひかゝりて切崩す。中村戈を振つて敵

ん。我陣を借りて出陣せし上は我家人なり。臣として主命を背く罪軽からず、彼が言理有りて實なし。然れども武功に對し存分を止るのみ、他家に仕へて、士職に有ることを許さず、とて追出されたり。程經て江戸殿中にて水戸黄門頼房卿、忠之に向ひ、我大望あり叶へらるべきや否や、と仰せらる。黒田、何事にも承り候はん、と諾せらる。頼房卿笑うて、先々令満足候、と謝し、別儀にあらず、伴助右衛門と申す浪人足下構ある由、是を許され候へ、と仰せらる。忠之辭するに術なくして諾す。依之伴は水戸家に仕へ、祿二千石足軽三十人預れり。

○島原落城 足軽陣佐左衛門手柄の事

同落城の砌細川家の足軽陣佐左衛門と言ふ者、一の丸の邊にて鐵炮に中り、死にたる者の首を取りて數首の中へ入れ置きたり。忠利、前髪附たる首は別の所に竝べ置くべし、と令して類を分ち、忠利鞭を以つて陣が得たる首を差示し、若此首賊將四郎が首とも言ふべきものなり。見知りたる者はなきや、と有りしに、須佐美權之丞、見知候、といふ。則ち呼びて見せらる。須佐美能見屆けて、四ケ年以前四郎を半年許召使候。依之能見覺候。第一の印に左の耳の側に瘤あり。是可疑。もなく四郎が首なり、と云ふ。然らば、とて生捕たる四郎が母を呼びて見するに、一目見

怠す。伴は晝夜物具を不レ脱、鑒を枕として臥しける程に、相陣の者目悟しき事にとなへながら、今此大軍に被レ圍、竹束鹿垣の内に込られたる賊徒多く切りたり共、物具を著する隙なき軍やあるべき。餘り心がけすぎて精根つきなば、城中糧盡きて、死狂の軍には何の用にも立つべからず、と云ひ合へり。翌年二月二十一日の夜、賊黒田の手へ夜討す。一揆の勢千百人、蘆塚忠兵衛、布津村代右衛門、大將分にて押寄せたり。何の陣も思ひよらず、周章不レ斜、上を下へ混亂す。伴はもとより甲冑を著し、鎗を放さず有りければ、一番に走り出で竹束を破り押入り、敵を突伏突伏二人討ちとり、此時未だ味方一人も來らず。賊柵越に伴が右の腰事をつく。其鎗を握りて引取りし所に、又一人伴が左の股を突く。是をも奪ひ取り、鎗二本ながら得たりしかども、腰の疵痛手にて立揚ること叶はず。既に討たるべき處に、黒田家の老臣黒田監物が人數進み來りて敵を追はらふ間に、伴が僕肩にかけて小屋にかへる。同二十八日落城には、伴の疵を痛みて手に不レ合。後平癒せしかば忠之伴に祿八百石與へらる。伴辭して、臣は先知乏く、且武功とてもなし。偶此度御恩にて御備の端に被二差置一、少々疵を蒙る迄の操有りて過分の祿を賜る事、身の寺、甚しと雖も、手疵深手故未レ癒、自由の働心元なく候へ共、自然以後御用有らん時役に可レ立や、その段計難く、御免を可レ蒙候、と云ふ。忠之怒つて、彼が心中知高不足と思へるなら

○島原攻並河九兵衛足輕下知の事

寛永十四年、肥州島原の賊起りし時、寺澤兵庫頭の士賊と河内浦に戰ふ。寺澤家の鐵炮の將、足輕を下知し打するに、立ちながら令」打故悉く北走る。偶〻打放せども敵を恐れて面を上げず。俯打つ故鉛子は虛空にとんで賊に不」中。並河九兵衛は足輕を折敷せ、膝架にて打たせし故一人も不」得」退、隊不」亂。俯て放せども、鉛子不」高して他の足輕の打しは異なり。これ定めがたき法にして左のみ奇策といふにあらず。大坂落城元和元年よりこの時迄、年月相去ること二十三年の間すら、武事に疎かりし事如」此。況や泰平已に百有餘年、常に是を論じ是を習ふとも、或は其傳亡せ其理を違へて、末迷ひなき事不」能、必ずしもゆるかせにすべからず。

○伴助右衞門水戸家へ召抱へらるゝ事

同賊有馬の城に據り、諸將圍攻る時、賊強くして寄手利あらず。上使板倉内膳正討死の後、松平伊豆守信綱の下知として攻を止め、竹束を附寄圍む事數重、只彼が變を待つて不」戰。伴助右衞門と號する浪士、黑田右衞門佐忠之の備を借りて居たりしが、永陣の間諸人氣力疲れ、勇氣も脫

働功有りければ御勘氣を許され、淺野但馬守長盛に仕へ祿二千石、光盛の代迄奉仕せり。

○島原一揆の時紀伊賴宣卿明知の事

同陣、二月二十一日の夜、城中より黒田右衞門佐忠之、鍋島信茂、寺澤兵庫頭の三手へ夜討す。寄手數輩討死し、鍋島の手を竹束井樓を燒拂ひ、賊の勢甚だ強し、と注進有りければ、江戸御城へ尾州、紀州、水戸の三家、其外在府の諸將を召されければ、皆これを聞きて驚く色あり。紀伊亞相賴宣卿のみ、近日落城すべし。鍋島家の井樓に火をかけし樣子、城中知略のたけ知れたり。心を勞するに不足、久しからずして吉左右あらん、と仰せられけるが、程なく落城の告有りしかば、人皆賴宣卿の明察を感じけり。

○大坂陣渡邊圖書卽知の事

大坂の役に、源君渡邊圖書に、加州の陣場を見て參れ、とて御使に遣さる。渡邊竹束の竹一本拔きて三尺二寸五分に切り、隙際までの間を打つて委細に言上す。城より矢玉を飛すれども不中、後に源君與力三十騎同心百人を預け給へり。

肥前島原の役に、賊は有馬の古城に據りて守城す。寄手の諸將大手の門に附きて責る時、賊門を開き突出でたり。敵は高陽の地利に依りて、寄手を少し押立てたり。此時寺澤兵庫頭の旗奉行山路將監、祿八百石兼てより旗差に令し、道端に生立たる木に令二取附一て、如何なる事ありとも此木を放すべからず、堅く捉へて居よ、と含置きけるゆゑ、崩かゝる勢に押立てられず。他の備は敗軍に押立てられて、旗色靡亂れたれども、寺澤の手のみ全き事を得たり。

○源君御扈從中根左源太勘氣御免の事

松倉長門守勝家は、島原肥前の國則の賊の事に依りて身上滅亡せり。勝家の士飯村助兵衞と云ふもの、浪々して藝州廣島松平安藝守光盛の城下に來る。廣島の諸士島原の事を尋聞く。或とき天野半之助、飯村に、城中より長州の手へ夜討は無かりしや、と問ふ。飯村答へて、その儀なり。松倉家はその備尤嚴にして雲火を投外聞を出し、夜打などは思ひよらず、と云ふ。天野笑つて、長州の家も末になりて、ことの意を解する人なかりしにや。古老の士あらば左はあるまじ。夜討のかゝる樣にしてこそ大利は有るべけれ、と云へり。天野は始め源君の御扈從なり、中根左源太と號す。傍輩の士と口論して出奔し、後大坂の役道明寺口にて、松倉豐後守重正に屬し、

同冬陣に越前黄門忠直の手の仕寄を附に、夜に入りて長竹を以て附寄るに、城中より鐵炮高く打出して士卒一人も不ㇾ傷、是石川數馬が謀る處なり。人譽む。或老士これを聞きて、城中の鐵炮は書能々ため込み、十俵を以て究之時は、闇夜と雖も外るゝ事不ㇾ多ものなり。城兵これを不ㇾ知して、石川が名をなせるものなり、と云ひき。

○信玄の士小幡豊後物見の事

信玄の士小幡豊後、何の戰にか敵地にて物見に出でたりしが、歸路を敵に取切られたり。豊後猶靜に敵合の様子を見終り歸らんとする時、敵兵追ㇾ之。豊後初通りたる道より遥に脇に在りし池へのり込み、馳歸りて、敵の虚在り、と申せば、信玄則ち兵を前めて利を得られたり。伊達政宗の士茂庭周防或時物見に出でて、伏兵に圍まれて討死す。不ㇾ逃走ㇾは茂庭が勇なり、と譽る者あり。或人聞きて、物見は敵を見て引取る事恐るゝにあらず、斥候は軍の勝敗の掛る重任なり。之を譽むるは其道を不ㇾ解が故なり、と云々。

○島原一揆の時寺澤兵庫頭知計の事

町追崩せり、水野日向守勝成、正宗をすゝめて復戰はしむ。政宗、我軍勞れたり。戰今日に限るべからず、とて不レ從。勝成また忠輝を勇むれども不レ果。勝成は小勢なれば獨たゝかふ事不レ能して止みぬ。幸村未の刻迄合戰を待居たりしが、夫より繰引に引きとれり。其體肅然として追討事不レ能。慕はば却つて爲レ彼に可レ被レ挫。東軍の諸隊見るもの感賞せり。

○同時木村長門守敗北の事

同陣五月六日、木村長門守重成若江に陣す。勇は生附たれども、陣數に不レ錬將なれば、持口を不レ堅して、爰には敵なし。敵有る方に向はん、とて八尾に至り、爰にも敵なし、とて本陣に歸來る。この時、井伊掃部頭直孝の臣磐若内膳物見に出て、重成の備未だ立たざるを見て、敵の虛顯れ候。里程つもり、夜更に不レ出ば八尾に行きて、今爰に可レ來なり。敵は道に疲れ兵粮を遣はん處を討たば利あるべし、と使を立つれば、直孝、心得たり、とて軍を前め、藤堂和泉守高虎と首尾を交せ、討ちて大利を得たり。

○同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事

なる堅陣剛敵なりとも打碎かん、と別に魂を入れたるが如し。此時幸村が先手半過ぎ岡の上に押上りたる處に、政宗の騎馬鐵炮八百挺を、先手より一二町も前で一同に打立てたるに、鉛子の飛ぶは雹の如く、火薬の光電に似たり。煙は忽雲霞となりて丈尺の間も見えわかず。幸村先手の士混々と打斃されて、死傷するもの多かりしかども、一足も退心のなかりしが、冑を著鎗を取りたる氣勢の壯なるが故なり。幸村煙の中より、先手に爰をこらへよ、大事の場ぞ。片足も引かば全く可ㇾ沒、と下知する聲耳に徹し、鎗の柄をにぎり、平伏になりてこたへたり。幸村下知して、炮聲の絕間に十四五間程づつと走行き居敷き、炮聲の絕間に又如ㇾ斯す。此時、幸村が鎗さきより一尺進みたるものあらば、今日第一の功とせん、と言ひしに、一人も此先に出づる者なし。政宗の騎馬鐵炮といふは、伊達家の士の二男三男壯力のものを撰びて、本より仙臺は馬所なり、駿足を勝りのせ、奥州にて所々の戰に馬上より鐵炮一放と定めて打たするに、不ㇾ中玉は希なり。打立てられて備亂るゝ處を、煙の下より直に乘込んで駈散すに、馬蹄に蹂躙せられて、敵敗潰せずと云ふ事なし。此時騎馬鐵炮の士馬を入れんと駈寄せけれども、幸村の先鋒近々と備へて折敷きたりと見て漂ふ所に、煙も稍薄くなれば、幸村此しほ合をや計りけん、大音上げ采配を振つて、蒐れ、と言ふ。言の下より皆起き立つて直に突き懸り、政宗の先手七八

からんものを、とて是に取合ぬ有様なりければ、皆早りたる心も稍靜りぬ。是大敵を不ㇾ令ㇾ恐、味方を騒がしめざるとの事なるべし。夕炊終りて後、此備所は戰に便なし。いざ敵近く寄らん、とて一萬五千餘正奇を不ㇾ亂、前後を不ㇾ混、跡歩次第をとゝのへ押出せば、敵假令十倍なりとも恐るゝに不ㇾ足と思はれける。其夜道明寺表に陣をとり、明れば六日の早旦野村邊に至り、渡邊内藏助糺は幸村に先達て、水野日向守勝成と戰ふ。糺は勝成を切靡くる事五六十歩、勝成又守返して糺を衝退くる。互に刀闘三度に及んで糺は深手を蒙り、脇に備を引取り、そなへを立直し、幸村へ使を以て、只今の迫合に疵を蒙り候故、御人數駈引の妨と存じ脇に引取り候。且横を討たんとする勢を見せ候へば、味方の一助たらんか、と申遣す。幸村、御働目を驚候。是より我等受取候、と答ふ。備を進むれば正宗の多勢蒐り来る。野の地形、前後は岡にて上平なり。中間十町許低くして、道左右田疇に連れり。幸村已に兵を前めんとする時、令を下して冑を著せず、鎗を取せず、馬の傍に引添せて、下知せん時を待せたり。敵合十町許になりければ、幸村使番を以つて、冑を著せよ、と云ふ。爰に於て皆持せ置きたる冑を取つて打著、忍の緒をしめたりければ、勇勢新に加り、兵氣益盛なり。敵合已に一町許にならんと思ふ時、幸村又使番を以つて、鎗を取れ、といふ。諸士手々に鎗を取りて穂先を敵方に差向けたれば、面々いか

○源君長久手御馬揃の事

勝負の理少しの競ひ後あり。長久手の役に、源君討勝ち給へば、秀吉の師恐るゝ色あり。秀吉衆を督て出て戰はん、と勇み立てられければ、衆奮激の氣を生ず。源君の兵秀吉の目に餘る大軍を見て驚きたる體あり。源君明日軍中に令して、馬揃をし給へば、味方敵を呑むの心を起す。良將のする所知んぬべし。

○大坂夏御陣眞田左衞門佐幸村勇戰の事

大坂夏御陣、五月五日のあさ眞田左衞門佐幸村が物見馳歸りて、旗三四十本人衆二三萬許の府越より此方へ越來り候、と告ぐ。是伊達陸奥守政宗の軍勢なり。眞田が士卒、すはや此陣を押出し給ふか、と勇む氣色みゆ。されども障子に靠れ、片膝を立て居たりしが、靜に答へて、左あらん、と許にて外に言葉を出さず。午の刻許又物見馳來り、今朝のとは旗色かはり候が二三本見え、人數二萬許、松蔭故不分明候が、龍田越を押下り候、と告ぐ。是松平上總守忠輝なり。幸村盧眠して居けるが、目を開き、よし〳〵如何程も來させよ。一所に集めて討ちとらば心地よ

○直江山城の守伊達政宗に加勢を乞ふ事

直江長谷堂を攻むる時、義元加勢を伊達政宗に乞ふ。石川彌兵衛に兵衆二千餘騎を差添へて遣す。石川兵を三手に分ちて長谷堂に赴く。戰ふに及んで最上勢石川が兵を上杉勢と見違へて、味方討に遭ふ者多し。石川始我一隊の相印を最上方へ知せざりしが故なり。援兵にさゝれては先相印を示し、制禁を問ふ事定れる軍の法にて、知慮にも及ばざる事なり。然るに石川拙くして、無益の兵衆を亡されたり。

○赤井惡右衞門武勇の事

赤井惡右衞門は、本小身の士たりしが、武略を以つて漸盛になりて、後丹波半國を領す。但馬比賀美に一將有り、二萬石ばかり、驍勇にして、しかも要害の地を前に當て拒みければ、赤井攻むれども利あらず。赤井、古の兵書を讀むに、地を攻めて人を攻めず、と云ふ語あり。是に心を得て、彼勇將を要害の地よりおびき出し、一戰に大勝して、其首を斬りその地を取る。

今はせん方なく、片々の鐙をはづし持かへり、隨分と存じ祕備を盡し候へ共、七八人の力ならでは難ㇾ揚候ゆゑ、鐙を片々取歸候、とて出しければ、長政、能計ひぬ、とて感ぜられたり。如ㇾ此證なきときは、敵に奪ひ取られたるか、と人の疑を得るものなれば、かく計ひて虛說の讒なからんが爲なり。

○清正の士腰兵粮を持たずして不興の事

加藤清正の士或時の城乘に、金の熨斗附の大小をさして塀をこゆるに、後より尻を押し上るものあり。我を押上るよ、と思ひ乘上り、後に見れば熨斗附のさやを切廻して金を取られたり。人みな、油斷なりと沙汰す。清正が曰く、城乘を心として後を顧みざるは勇士なり。但金の熨斗附を指したるは、若輩の故なり。戰場へさやうの美麗なるものをば用ひざる事を不ㇾ知と覺ゆ。末たのもしき若者なり、と言はれたり。又或陣に野陣にて、書辨當を遣ふに、或兒小姓腰兵粮を不ㇾ帶。その伯父燒飯を分ち與ふ。清正これを見て、少年の花車風流も時によれり。陣中にて兵粮を持たざるは武備に忘りたり。過忘に馬を取上ぐべし、とて乘馬を取上ぐ。伯父、若年のものに心を附けて敎ゆべきに、武備不ㇾ令ㇾ勵科甥に同じ、とて是も馬を取上げられたり。

者にて、剃髪して安休と號す。人に語りて、諸に三病有り。聲の能きと、覺の能きと、拍子の能くきゝたると、此の三事備る者、多くは諸に不」成して止む。これ器用を頼む者は、自ら滿てりとす。此を以つて工風不」積、功勞を不」重ば、諸藝の奥意を知らざる、と云へり。

○豊前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事

秀吉、黒田如水をして豊前國に封ぜらる。日隈の城に一揆あり。如水の嗣子甲斐守長政兵を發して攻亡し、その外所々の戰に利を得て、武威廣大なり。然れども紀伊谷の紀伊彌三郎鎭房のみ不」從。その勇智逞き事等倫する人なし。長政是を攻めんと望まるれども、如水不」許之。長政本意なき事に思ひ、如水に忍び、密に紀伊谷へ取懸りて責之。紀伊が兵勢盛んにして、長政の士大に破れて討るゝもの數を不」知。長政馬を深田へ乘落して、鞍爪まで泥に沈みてせんかたなし。長政が馬は大龍寺とて九州一の名馬なり。長政今この馬を捨ば敵に奪はるゝ事を口惜く思ひ、捨兼たる所へ、菅和泉守政利見て、我馬を長政に進めて行歩立に成りて引かんとす。長政、菅が馬にのり、大龍寺を敵に奪はれなば甚だ恥辱なり、と、引上げて來れ、とて退かる。菅は跡にのこりてさま〴〵とすれども、大尺なる馬の深泥に沒しぬれば、如何ともなしがたし。菅

をのり廻し、園の手を合せしむ。攻城の間五十餘日、一日も東風なし。若東風あれば、舟を置く事成りがたき處なり。其後小田原の御上東風なき日は、上樣日和、と云ひならはせり。

○源君久世三四郎坂部三十郎へ物見仰附けらるゝ事

源君或時の戰に、久世三四郎、坂部三十郎を遣し、敵合の樣子を被ㇾ令ㇾ見。兩士御前を立つ時に、坂部は顏色勇み進みたる體にて退出す。久世は顏色快からず、その品惡し。御前に居られたる小姓の中に、久世が體を笑ふ人あり。源君御扈從の方に向はせ給ひ、坂部は生得の剛者なり。此故に敵を何とも不ㇾ思して、心に勞する事なし。久世は生得坂部に及ばず。然れども勤勵みて武勇を働かんと思ふ故、少しも樣子二方ならば生きて有るまじ、と覺悟する故心に勞あり。今見よ、久世は坂部より二三町も深く働き、能く見屆けて歸るべし、とぞ仰せらる。程無く歸り來り、坂部より久世四町許先達て、能く見屆けて敵の樣子を申上ぐる。源君其後右の兩士を評して、久世は心に剛なきを知つて、生得の剛有る者に不ㇾ劣と勵む故、其働一際踰占めたる處有りて奧深し。彼が武功は何時とても成り易きものと覺えたれば、意る意ありて不ㇾ錬處あり、と仰せらる。品替りたれども是に同じきもの有り。觀世左近は謠に名を得たる

山上より見れば、多勢も小勢に見ゆる物に候。之を以つて、打見たる處は五萬餘と存候へども、ひかへて積り候、と答へられぬ。

○細川家鐵炮口藥入の事

細川家は、足輕の鐵炮口藥入革にて、鼻紙袋の如く縫ひ用ふ。事の急なる時に至つて、指を以つて捻り入るに利有り、と云へり。

○秀吉岐阜攻の事

豐臣秀吉は、智練のみにあらず。天運に乘じたる人なり。織田信孝岐阜の城に據りて秀吉を拒む。これ柴田勝家と約して、秀吉岐阜を責ば、我柳瀨より出て秀吉を挾討たん、と謀る處なり。秀吉これを知らず。已に岐阜を圍まんとする前夜、甚雨有りて、呂久合渡の河水激浪滔々たれば渉る事あたはず。川の此方に陣す。勝家柳瀨に出づれば、秀吉岐阜をすてて柳瀨に向ふ。洪水の故に信孝尾擊する事不能。勝家の謀は、却て不意に遇ふ端となり、又甚雨洪水は、秀吉をすくへるにあらずや。後小田原の城を圍むとき、城南の海上は、海賊九鬼大隅守をして、兵船

て可ㇾ寄氣色もなし。一氏は眞鍋が働如何と思ひ、蜂須賀小六家政庵と稱す。に二千餘騎差添へて迎に遣しければ、眞鍋は思ふ儘に勝利を得て、妻子を引連れ蜂須賀と打連て岸和田にかへる。

○朝鮮陣中加藤清正馬の糧下知の事

朝鮮の役に、加藤清正の陣所糧無くして馬を飼ふに苦める事あり。清正聞きて、糧なくば藁を細に切り、大豆に交ぜて飼へ、と云はれしかば、諸士如ㇾ教して、馬も能食して苦む事なし。近世明暦年中江戸大火に依て人馬の食乏し。御旗本の士新庄内藏助、古老の士に聞きける事有り、とて稻の刈禿を堀り泥を洗去つて飼しむるに、馬の力落ちざる事を得たり。

○秀忠公參州田原御狩の事

慶長十五年の春、參州田原にて秀忠公田獵を催され、本多中務大輔、九鬼圖書と仰に依て御旗本にて見物せらる。圖書、忠勝に向つて、勢子凡六萬も有ㇾ可や、と申ければ、忠勝、夫迄はあらじ、四萬二三千も過ぐべからず、と申さる。圖書、某見る處と懸隔なる違なり、と心得ざる顏色なり。忠勝の曰く、されば高山より平原へ押並べたる人數は、小勢も多く見え、谷に集りたる人數を

度合せたる程の覺の者なり。眞鍋に向ひて、斯樣なる時節が肝要なり。大將の心狼狽へる時は、士卒役に不ㇾ立ものなり。能く〳〵合點ありて下知せられよ、と云ふ。眞鍋、其仕方は如何。秋山が曰く、今の仕方三つ有り。第一は妻子を古城へ取籠め、城に據りて戰ふか。第二は妻子を堺の津へ退けて、我々は眞丸になり、圍を突破り岸和田へ駈入るか。第三は妻子を連れて堺の津へ退くか。此三つより外なし、と云ふ。眞鍋盛の緒をしめながら、三つの謀上中下は如何。秋山が曰く、その一は上、其二は中、第三は下なり。眞鍋、しからば妻子諸共古城に據りて戰ふ謀を用ひん。秋山聞きて、左あらば一人も殘らず擊死すべし。不ㇾ苦や。眞鍋が足をふみ刀を拔いて金打し、愛宕八幡此處に討死すべきぞ、と言ひて思切つたる有樣なり。士卒是に勵まされて必死を思ひ定めたる體なり。眞鍋海上を見やれば、敵船已に近附きけり。敵は十倍の勢なり、取卷れては叶ふまじ。迎へ戰うてこそ、とて濱手に出て備を設く。田賀井別齋、秋山又之丞下知して、敵の舟より半ば上る所を、鐵炮を打立てさすれば、敵兵打挫かれて懸り兼ねたる處を、眞鍋白旗を振つて先隊八十餘騎小松原より突懸り、眞鍋が兵田賀井左吉右衞門一番鎗を合せ一撲を追立つる。惣軍亂討ちて、一撲を海へ追浸して討取る數多し。やう〳〵返し來る敵をば、眞鍋が兵波防の芝手に弓鐵炮を伏せて、打立々々防ぎければ、敵船さん〴〵に亂れて遙の沖に引退き、敢

申され候。

○秀吉尾州進發の事

秀吉尾張に發して、信雄、源君を征せんとす。先泉州岸和田の城中村式部少輔一氏を籠め置き、紀州の根來雜賀の一揆を押へしむ。信雄密に根來雜賀の一揆を勸めて、秀吉大坂を發せば、必ず其跡を攻めて秀吉の巢穴を破れ、と言はせられば、一揆等同意して、天正十二年三月十八日、二萬計海陸に分ちて堺の浦へ働出で、大坂の空虛を襲はんとす。一氏下知して、大畧なり。容易に戰はば尾張の御戰に害有るべし、とて一人も不出。泉州の國侍に、眞鍋五郎右衞門貞成此時號六郎俊成號三馬大夫在所大津に家人の妻子を差置き候へば、參りて片附け候はばや、と申しければ、一氏、尤なり、とて許之。眞鍋手勢百三十餘にて大津に歸れば、舟手の一揆大津を差して押來ろ。大津の混亂不斜。留守に殘りたる者共、昔小城の有りし跡も妻子を連行き戸板盤などにて圍ふ所へ、眞鍋出來れば少しは安心すと雖も、一揆は千餘騎味方は百餘、對當すべきにあらざれば、士卒危み恐れて敗走の機有り。眞鍋が與力に秋山又之丞と號する大剛の勇士有り。其已前一日に鎗を七

を見積り、密に了簡を定め候は、家康公白川の城を攻められ候所を、長沼より乗て見置き、山中を人数を引つれ境の明神に到り、家康公陣取の後へ出で旗本へ切つて懸り、手詰の勝負を可決とつもり置き候。上杉家中に誰も知る者なし。近日家康公御著陣、御先手榊原式部太輔康政已に大田原に著く。大田原は白川より一日路なり。景勝之を聞きて八千餘を召しつれ、密に會津を出で、南山脊炙を越え、此山を脊に當てて長沼陣取、家康公白川表へ御著陣御一戰候はば、山中を推著き思ひも寄ぬ後へ廻り、家康公御旗本へ切つて懸り申すべき覺悟にて陣取り候。八千は餘小勢に候、と家老共異見仕り候へども、謙信已來の吉例とて承引無之。直江、齋藤、千坂等申し候は、謙信公御代の古兵共過半死失せ、物慣れざる人數八千は如何に候、と申候。景勝は、勝利を得ば八千に不過候へども、皆々申す所餘義なし、とて許容有り。これにより千坂、齋藤、新津、三室寺等三萬にて長沼へ行きたり候へども、景勝差圖にて三里後に陣取り候。若し家康公白川へ御著陣候はば、御大事に罷なるべく候所に、上方にて治部少輔を始め、五畿内西國一圓に亂れ伏見へ取懸り候由、家康公小山より江戸へ御歸城なされ候故、景勝手立相違仕り候。若し白川城御攻めなされ候時、景勝八千にて御後より不意に仕かけ候はば、殆ど御一代の御大事たるべきに、兎角御運強き御大將、と其已後取沙汰仕り候。右の通り故景勝も會津へ引入り

勝上洛致されず、香椎原に新城を取り立て、諸浪人を集め道橋を修理し、籠城の用意と聞し召し御退治の爲此の如し。景勝大に驚き、香椎が原新城は、直江山城守上意を得て公儀濟みたる上なり。又在國は秀吉公御在世の砌り、五年在國の御暇濟みたる所なり。然れども押附けて御征伐も有り候は、弓矢取る身の習一矢仕るべし、とて百三十萬石の諸士殘らず呼集め、洞菩提所雲洞院と謙信御影堂毘沙門堂に於て一紙の起請文を書かせ、妻子を會津の城へ籠め、口々に燒草を込めおき、景勝は家老物頭を集め、會津は七口あり、殊に脊炙南山口は會津を見下し、中々籠城なる所にてなし。家康公御父子白川口に著陣候はば、逆寄に仕かけ野合の一戰を遂けて、勝ち候はば後を追うて、江戸は扨置き都迄切て登るべし。負候はば士卒も諸共白川を枕にして討死仕るべく候。下野と奥州の境白坂より白川まで二里の間、草籠が原と云ふ所あり。好き戰場なれば竹木を切りかけ地形を切平け、白石城を大手の一の木戸とし、一番合戰は安田上總介一萬三千餘、二番合戰は島津月下齋二萬七千餘白川の城に籠り、家康公御父子御著陣候はば草籠村へ押出し一戰し、若勝たずば白川の城へ引籠り、四方の人數四枕に討死を可遂と定め、士卒上下繼帷子血脈を頭にかけ打つて家康公を待かけ候。景勝只一騎脊炙南山口の嶺に登り、長沼の地形を見て、夫より樵夫を案内者にして山中を通り、白川口境の明神に到り、人數押の道

り。呼寄せ彼が了簡を尋聞かん、とあり。長政の曰く、皆歷々寄りて埒あかざる談合を、何とて又兵衞了簡仕るべきや、と謙退なり。高虎、左樣にて之なく候。又兵衞はこびたる事を申す者にて候、とて扇にて召され候へば、又兵衞黑母衣搖りかけ參り、畏り候。藤堂申され候は、如何に又兵衞、此川を渡して利有るべきか、川を前に當て渡らずして利有るべきか。先程より相談極まらず。汝が了簡を尋ぬる所なり。川を渡し渡さず勝負如何、と有る。又兵衞につこと笑ひ、先程よりあれにて承り候。憚りながら各樣此處は御相談所とは不存候。其子細は、今晝遲く御座候て、岐阜の手は御會ひ不被成、何を以て內府へ仰せ立てられに成され候はんや。爰にて御一戰なされずば、恐ながら各樣男と成り申すまじく候。勝にも負にもかまはず乘越え、一戰遊され、此川を墓所になさるべく候、と眼に角を立て申候へば、諸大將手を打ちて、扨々尤至極なり。兎角云ふに及ばず、とて合渡川を越え、大利を得られたるとなり。大坂表今福合戰にも、又兵衞鐵炮に中り疵を探り見て、大坂の御運もまだ強きぞ。我手淺し、と云ひたりとぞ。

○家康公慶長五年七月會津御發向の事

關ヶ原御陣起り候始め、慶長五年七月、家康公、秀忠公數萬にて會津へ御發向なされ候。是は景

常山紀談拾遺　巻之四

○岐阜攻の時川々洪水によつて後藤又兵衛尋問の事

關ケ原御陣前々、福島正則、池田輝政外大名十二頭にて岐阜の城を攻むる。黒田長政、田中兵部少輔、藤堂高虎、桑山伊賀守、戸川肥後守は、大山押に居る。岐阜を攻むる最中に、大山の城明退き候に附、長政、高虎何も岐阜へ推詰め候内、岐阜落城に、長政、高虎等殘念に思はる所へ、岐阜後詰として、大垣より石田三成、島津義弘、小西行長二萬餘にて合渡川迄押來る。長政、吉政、高虎、桑山、戸川等幸と悦び合渡川へ馳向ひ、大垣勢漫々と川向に備へたるに、八月雨の洪水增して、瀬枕打つて流れ早く、水事々出づる。何れも香が島村の札の辻に集り、五人の大將は床几に腰をかけて居る。家老功者どもを集めて談合する。川を越えて合戰利あるべきか、又越さずして利有るべきか、勝負の所談合に時を移す。されども一決せざる時に、後藤又兵衛政次頭形の甲に孔雀の引廻に、五尺づつ出でたる銀の天衝のつり立物し黒母衣かけたるが、遠々に畏り居る。高虎申され候は、あれに罷在る銀の天衝は、黒田殿御内後藤又兵衛と見えた

の寶を得たることや。其故は、今度大坂御陣は、子供いさかひの礫打合の様なるざれ事なれば、別に恐しき事骨折る事もなきなり。昔關東陣越後などにて、今日死するか、今かと思ふやうなる烈しき合戰に明暮逢ひたる時だにも御感を取らず。今度の様なる花見同前の事に、上様より御感状取りたり、と大に笑ひたる由。

輝虎以來弓矢の暇殘り申候由、御挨拶申し罷り立ち候。諸人感じ申候。上杉二の先安田上總介、今度鳴野にて第一の手柄致し、横鎗にて大坂方突崩し、味方の勝になり候へども、前江山城と中惡き故、書附に入れざる故に上聞に達せず。御感狀不下候。其後景勝が所へ皆々を呼び出し、今度鳴野表にては何れも精を出しくれ候て滿足致し候。去ながら大坂弱敵なり。輝虎已來武邊仕なれたる各なれば、氣遣もなく危氣もなかりし、と申さる。安田上總介進出で、各は仕合よく上聞に達し、御感狀拜領にて目出度存候。我等一人は誰も取次不申、御感狀拜領仕らず候へ共、昔より數度合戰に隨分御奉公申上けて、人をば越ゆれども人に越えられず候。其上今度程の事我等功に立申樣無之候。今に始ず珍しからざる事に候。就中我等に不限、屋形樣へ身命を擲つて稼ぎ候。曾て公方への御奉公立に仕らず候故、御感狀少しも望に存ぜず候。已來とても殿樣へ御奉公に命を捨て可申候。公方へ奉公立仕るべく子細なければ、御感狀無之。と申候。又杉原常陸は、今度御陣に重代の物具古く見苦し、とて猿樂の法服を衣て大坂へ立つ。家康公御覽なされ、上杉家古き風にて錦の甲直垂を著たり。皆々御學に見置き候へ、と上意成り候由、杉原老武者殊におどけ者にて、古き鎧見苦し、とて上に能の法被を著て立ちしとなり。後日に杉原歸陣して皆々に語り候ふは、扨々今度は思ひよらず御感狀拜領して、子孫

の次第申上げ、御次之間にて小栗又市申候は、さて〳〵今日能打所有りしを、打候へと申したれども、日暮れかゝり候とて不打。餘り殘多さに、直江に、足輕を貸せ我進みて討つべし、と云ひたれども、日暮れかゝり候とて足輕を貸さず、殘多さ詮方なかりし、と語る。障子を隔てて家康公御聞なされ、其儘御氣色變り御機嫌損じ、やあ又市、己れが分にて、景勝武邊に誹りだては無用なり。推參なること申す大だはけめ、と散々御叱りなさる。又市赤面して罷り立候。鳴野合戰の翌日、兩御所樣御同道にて鳴野口御巡見なされ、上杉陣場御通り懸りし時、上杉總手より城へ鐵炮をつるべ放す。但し御大將御巡見の時の作法故實の由なり。偖景勝町場道筋砂を盛り、水を洒ぎ、中之掃除きらびやかなる事なり。景勝も直江一人供にて罷り出で、手を地につき御目見、家康公仰せられ候は、今日は當表にて其方人數骨折候由御愁の上意あり。景勝御請、童部いさかひにて御座候故、何の骨折り候事も無二御座一、と御挨拶申上げられ候。後日に上杉家人須田大炊、杉原常陸、島津玄蕃、鐵孫左衞門御感狀下され候。皆々御前へ召出だされ候。如此三人は御感狀を戴きて罷立。杉原常陸許御前にて御感狀開き拜見仕り、元の如く卷納め、戴きて懷中仕り、本多佐渡守に向うて、御吟味御文言、殘る所もなき忝き仕合と申上げ、罷り立ち候。皆人感じ譽め申候。其砌上意には、今度上杉家中手柄仕り候、と仰せられ候。常陸介取敢へず、

の字の大四半只二本に、淺黄の扇の馬印押立て候。其武者立行儀の正しきこと中々言語同斷なり。士卒景勝を恐るゝこと敵よりも甚し。下知の聞くこと武者捗へ比類なきことどもなり。此時丹羽五郎左衞門長重は、上杉後にて陣取り候。先手の戰を見て景勝旗本へ參られ候へども、上杉家作法にて備の中へ不入候に附き、先手へ馳加り申され、大坂方次第に嵩み候時、直江下知にて、大和川堤蘆谷の柵場より、鐵孫左衞門鐵炮を横合より込替々々打たせ候に附、大坂方柵を持つこと不叶、遂に敗軍し其場を取敷き、景勝の勝になり申候。堀尾人數も柵を廻り、大和川洲崎より鐵炮を打ち申候。此日城方鎗の名所渡邊内藏介大逆仕り候。前日野田の藤見の時の喧嘩にて、手柄有之候へども、今日は上杉方に追立てられて人先に逆仕申すに附て、

渡邊が浮名をながす鳴野川敵にあうては目はくらの介

鎗兵法名人にても、武道にては役に立たざること勿論に候。今日景勝下知にて大和川の堤を堀切り柵をふり、鐵孫左衞門をも差置候。合戰場よりは脇にて候故、皆々不審仕り候。柵も堀切も敵附てこそ尤にて候。とてもなきことにて候、とつぶやき候所に、後の合戰に鐵が手より横鐵炮打候に附、遂に大坂方敗軍、景勝の勝になり候故、諸人景勝の勇智淺からざるを感じて、名將なり、と舌を振ひ候ひつる由、其晩鳴野より佐久間河内、小栗又市、住吉御本陣へ罷歸り、合戰

名して出來り候故、諸人ほめ申候。扨柵際にて大坂方と上杉方鐵炮軍時をうつす。此時今福口へも木村長門守重成、後藤又兵衛年房、堀田圖書介勝嘉出て一戰、佐竹義宣先手澁江内膳討死、梅津半右衛門、戸村十太夫鎗を合せ手負ひ引退く。加勢を乞ひ候故、杉原常陸百五十挺の種が島を添へて差遣す。川の中洲より打立て候故、木村長門守、後藤又兵衛引退く。佐竹其場を取返す。夫より杉原も須田、安田に加はり、鐵炮軍數刻に及び候に附、御旗本より五の字御使番追々に參り、堀尾山城守忠晴を御入替へ有るべく間、景勝は元の陣へ引取り申べき旨頻に仰遣され候。堀尾山城守へも早々景勝に可入替旨仰せ附けられ候。忠晴畏りて、堀尾河内、同修理、前田丹後二百餘遣し候へ共、城方より大筒を出し候故、堀尾人數進まず候へども、忠晴より重て伊賀衆手垂八十人遣しける。御使番重々、堀尾に場を渡すべし、と仰せ遣され候。景勝無興して、場を渡し引取るべしとは誰の差圖にて候ぞ。更に承り屆けず候。上の御意にても罷り成らず。軍の習先陣を爭ふ時は、一寸增と承り候。今朝より粉骨して取敷候場を、人に渡し引取る法や有るべき。少も引取ること罷ならず由景勝が申すと、上へ仰せ上げられよ、と云ひて、少しも不退候。朝より景勝は鎧も不著、床几に腰をかけ城に向うて脇目も振らず。馬廻り三百餘鎗立頭を傾け、畏れ居て先手の合戰見物なり。景勝は、側には紺地日の丸大四半と、毗

本前へ崩れ申候。此時上杉方島津女蕃は敵大勢に渡合ひ、沼の中へ突落され、起上り鎗を合せ、大坂方を突散し手柄仕り高名、松本助兵衛、北村茂助もさん〴〵に戰ひ、兩人ともに高名仕り候。市川左衛門、針生市之助、原庄兵衛、駒澤與五郎を始め、上杉家究強の兵枕を並べ討死仕り候。須田大炊備ほぐれかゝりしに、景勝族本前備は、杉原常陸介親憲鐵炮三段に立て、金の鍬の馬印を取りて御意にて候間、須田人數兩方へ分れ退き候へ、と呼び、馬印を振り候へば、須田備兩方へ引取り候。杉原下知して、追來る敵を引受け、鐵炮を打ち立て候所を、二の先にて脇へ控へ候。安田上總介采を執りて横合に鎗を入れ候故、大坂方總敗軍になり申候。安田が手柄中々耳目を驚かし候。大坂方杉森市兵衛、湯川次兵衛、田邊八左衛門、幡枝勘解由、米村加賀右衛門、平山藤藏、茨木五左衛門、安宅源八等返し合せ防ぎ候へども、安田上總急に繰立て候故、大坂方崩れ申候。安田勝に乘つて、小早川左兵衛、岡村椿之助、竹田兵庫、同大助を初め追討に討取り候。其内穴澤主殿介は長刀の名人にて、秀賴公の師匠にて候。高所に返し合せ、穴澤主殿介盛秀、と名乘り候を、上杉方坂田采女組打に仕り、穴澤が首を取り候。穴澤長刀を直江家來折下外記分取に仕り候。さて上杉先手の大將須田大炊見え申さず、行衛不知故、討死と存候所に敵中に交り、大炊手柄なる太刀打直取の高名三つ、手疵一ヶ所蒙り、若黨は五人ながら高

あり。さて二十六日曙に大坂方へ取懸り、山市左兵衛大將にて、鐵炮大將井上五郎右衛門等柵の外へ出て防戰ひ候。須田大炊先手にて景勝勢眞先に懸り候。勝負數度これ有り候。上杉方多く功、豐後守手柄高名なり。北條清右衛門、上泉主水、櫻圓嶽、大股八左衛門、同彦六郎、手柄を振ひ討死す。須田大炊下知して遂に打勝ち、大坂方井上五郎右衛門を討取り、柵二重を取り押込み申候。大坂方山市左兵衛、渡邊內藏介敗軍、其場を取り敷き候。景勝は鳴野の横堤に旗本を立て、直江山城守に申附け、鐵孫左衛門に鐵炮三百挺遣し、物場より遙々南大和川の堤を堀切り、蘆谷に足輕を立て取固め候。上杉衆申し候は、小口とは遙々脇を取固め候こと、不合點なる手配、とつぶやき申候。其日午刻に、大坂七組靑木民部少輔一之、伊東丹後守長實、速水甲斐守守之、中島式部少輔氏種、野々村伊豫守雅春、眞野豐後守賴包、堀田圖書助勝嘉、其時は天滿口普請場にありしが、鳴野、今福兩口破れ候由承り、天滿より鳴野へ駈附け候。城よりは大野修理亮治長、木村主計頭宗重、渡邊內藏助糺、竹田永翁等かけ出候。上杉先手須田大炊介長義は、石坂新左衛門百人鐵炮にて備一の木戸口を固め打立申候。半時ばかり競合候へども、大坂方大軍故眞黑に懸り候。上杉方鐵炮大將石坂新左衛門場を去らず討死、組勢二十餘人討たれ、須田大炊頭立てられ候へば、二の先安田上總介兼て備を脇へ押出し立候故、須田備は景勝旗

佐久間河内守實政物語に、大坂御陣の時、鳴野合戰の時、小栗又市吉忠と我と兩人檢使に仰付けらる。但十一月二十五日に兩人鳴野へ參り、明日今福口の柵を致すべく旨佐竹義宣仰附けられ、屋代越中守、伊東右馬允、安藤治右衞門遣さる。景勝も明日鳴野口の柵を取り申さるべく旨仰せ出さる。直江山城守兼續申候は、一昨日奥州より到著仕候故、人馬の足を休め其上のことに仕度、と申す。佐久間小栗申し候は、謙信以來著陣其儘にも御一戰と承り及び候。山城はいな事を申され候、と斷り候へば、直江、上意重く候間、明日取詰め申すべく旨御請申上候。二十六日早天より景勝人數を出され候。城方の柵は井上五郎右衞門、渡邊内藏介、幷に大野修理亮治長手の者加り、山市左衞門尉吉正、小早川左衞門、岡村椿之助、竹田兵庫、其子大助、二千餘にて柵三重をり持固め候。前の夜景勝は直江山城を呼び、備組を問はる。直江申し候は、老功にて候故安田上總介を先手に申附け、二の先は須田大炊に申附候、と答ふ。景勝、夫は惡き配立なり。二の目功者にてなければ軍勝はなし。須田を先手に安田を二の先に立つべしと行るに附、直江備を繰替へ申候。之により須田備は競べて二の先の安田手より手柄して見せんと勇み候。安田備は先手を二の先に繰替へられ口惜存候。先手崩よかし。二の手にて盛返し一手柄せん、と勵む故、兩備の士卒中々勇氣十倍になる。景勝、勇才凡人の及ぶ所にあらず、と感狀

○上杉彌五郎が事

畠山修理大夫義隆能登を領す。毒害にあひ卒して後、家臣遊佐彈正溫井備中長對馬を始め十一人、其勢二千許七尾の城に籠り、信長に從ふ。上杉彌五郎義春は義隆の伯父なり。越後に有りて此由を聞き、謙信に乞うて七尾を攻落し城兵を誅せり。謙信、義春が先登の功有るを以て、能登は代々畠山の領なり、義春に預けん、との内意あり。能登の兵士之を聞きて、義春出世有らば我々も同じく世に出でん、と追々馳來る事夥し。謙信柴山といふ所に陣し、惣人數の押前を見んとて謙信は床几に腰をかけ、義春は側に畏り居り。能登先鋒の人數美々しき物具にて出來る。謙信人を遣して之を問ふ。彼勢上杉彌五郎が勢なり、と答ふ。次に通るも其次に通るも皆彌五郎が勢なり、と名乘り、夥しき多勢なり。謙信氣色變じ、暫して彌五郎に向ひ、三好宋三は五畿内にて弓矢功者の名將なり。宋三常に人數は難遣ものなり。三百騎より上の勢は遣はれぬものなりと度々云ひしと聞けり、と言ひて、再び詞なし。謙信死去までも彌五郎をにらまへ、勘當同前にて、能登も與へずして止みぬ。彌五郎後畠山入庵と號す。

○佐久間河内守物語竝渡邊内藏助が狂歌の事

甚だ呑よし、とて米倉に與ふ。米倉理に伏し、則ち服して快復することを得たり。信玄聞きて甘利を譽めらるゝこと甚し。或人曰く、米倉終に糞汁を飲ませずして死せば、勇にのみ僻するもの、是れ潔事に思ひ、此類の藥を忌嫌ふ風俗となり、後來幾人か横死せしも計るべからず。且陣中にては專ら如斯手輕き藥を以て珍とすべし。

○佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合戰の事

佐野修理亮宗綱は下總唐澤に在り。足利の長尾但馬守顯長と郡邑を爭ふ。或時宗綱は岡崎山に陣し、顯長は唯木山に屯す。兩山の間に小川あり。之を隔てて日々足輕攻合のみにて未だ勝敗を分たず。時に顯長兵を還す。其體嚴肅なり。宗綱も同じ師を引返さんとす。密に兵を分つて山間の樵路より兵を進め、大沼田といふ所に廻り、顯長が前路に令出。顯長之を知らず。宗綱も陣拂して段々に引行く。今は漸く遠に隔り、又後襲の恐なしと思ひ、用心の備稍怠り、諸勢の足を亂して引行く。宗綱は廻備の出合程を量り、俄に旗を還し、顯長追廻備の勢横合に出で、顯長刀備を突けば、顯長大に敗して追討に逢ふ者甚だ多し。宗綱思ふ儘に利を得て唐澤に歸る。

屍を沐浴せしむるとて、裸體になして見るに、右の方腰に下帯に金子十兩附けてあり。此金子數年附置きたりと見えて、腰に此金子の當りたる處朽ちて居たるとなり。右の藤左衞門至極貧窮なりと雖も、具足一領鎗一本を放さずして所持せりとなり。則ち右の具足の中に件の頬當も具し置きけるとなり。

○米倉丹後が子彦十郎鐵炮疵妙藥の事

氏康公松山を攻むる時、信玄に救を乞ふ。此時甲州の士米倉丹後が子彦十郎、炮玉に中りて死なんとす。甘利左衞門が組なれば、甘利、米倉が陣屋に至りて傷を見る。手負の血胴に落ちて死なんとするに、蘆毛馬の糞を水に立てて用ひば必ず功有り、といふ者あり。米倉が僕之を調じて勸む。米倉不レ飲して曰く、之れを飲んで必ず可レ生か可レ死か未だ知らず。果して死せば不レ飲とも有らん。假令生きたりとも、畜類の糞を飲んで其恥を如何せん、とて服せず。甘利色を正して、御邊の言曾て理なし、命を保ちて忠をなし孝を行ふは、道の重きにあらずや。獸糞を飲みたる恥は輕きにあらずや。小辱を不レ忍して大道捨つるは狂するに似たり。是勇のみ有りて智を不レ盡の失なり。此藥飲惡きこともあらん、我先へ試むべし、とて二口三口呑みて舌打して、

此合戰のこと三所戰記に見えたり。木村勇士なりと雖も、若將故晝食の喰時分期を遲れたる故、晝食を喰懸りたる時敵に見附けられたる故、破子の飯を二三箸程食したると見えて少し喰ひかけたる迄なりしと。討死の後晝食を食したる村屋へ入りて見しに、右の如くなりしとなり。是亦義勇の咄なり。

○松平讃岐守殿具足屋岩井孫四郎物語の事

松平讃岐守殿の具足屋、南都岩井孫四郎の咄に曰く、南都知足院に塙團右衛門の甥植村藤左衛門と云ふ者の所持せし頬當あり。是則ち塙團右衛門所用の頬當なり。其製面頬に遜掛を不二仕附一、惣地を薄赤く人の面の色の如くに塗り、頤に鬚を生したるなり。是甲冑を著し喉輪をかけ、只行軍の行裝に、喉輪の上に此面頬をかけんが爲に、如レ此製したるならんかとなり。右の面頬は塗物に紀州の雜賀孫一の作の由なり。團右衛門と舊友にて造與へしとなり。其頃孫一は武功の士にて、慶長五年伏見の城にて、鳥井彦右衛門殿を打取りたる名士なり。細工の名人にて、殊に頬當の製方無類にて、函人の家にて名作と稱するとなり。右の植村藤左衛門は極貧の浪士にて、南都知足院に緣有りて、知足院の住持二三代にも係り居て、則ち知足院にて病死せしとなり。死後

たるを、井伊家の斥候般若内膳見て歸り、先手の將菴原助右衞門へ告ぐ。菴原鎗を取つて懸ると木村も走出でて鎗を合せ、二間一尺五寸の直鎗、其頃北國流と云ひて流行たるに、木村も免許を得たる功手なる故、此鎗を以て菴原が内胄を二三ケ所も突きたれども、鎗の穗短く切突にてちよつ〳〵と突きたる故、頬の邊にかすり手なる故、突拔いて突倒すこと能はず。菴原は一間半程に身の七八寸程ある鎗をべつたりとはりのけて、木村を鎗附けて突仆したるに、後より井伊家の若士安藤長三郎來つて、此首を揚げんか、といふ。菴原、揚げ候へ、というて、安藤に首を揚げさせ、木村が腰に指したる白熊の旄を引千切りて、菴原が腰に附けて引取りたるとなり。此首誰が首とも其時は知れざれども、白旄故に大將分と見えたる故に、後證の爲に菴原取りて腰に附けたるとなり。後に木村が首と知れたる故、安藤も元來菴原氏鎗附けたれば、首を揚げたるまで、と斷りたれども、菴原は井伊家の老臣年七十有餘にて、常に肱に珠數を掛けて念佛のみ唱へたるに、向ひ來る敵故に止むことを得ず、念佛を唱へながら敵の鎗をはねて鎗附たる故、己が功とせず。若輩の士は斯樣に名高き士の首を取りたるは功名も顯す故に、強て安藤に讓りたり。故に首帳には安藤が姓名を記し出して安藤が武功とし、今に至つて木村をば安藤が討取りたると天下に稱するは、菴原武功にて大人しき仕方故となり。右上泉義鄕の直談なり。詳に

を解きてたれたる故、指物を抜きて鎗に持添へ、櫓を潜りて塀下へ著きたるとなり。これ義鄕指物留をせられたる證據なり。其餘の諸士は指物留をせざるにや、早速に抜きて櫓を潜りたるとなり。右の足輕小頭、右の場所へ出て、義鄕の指物留の解けざるを解きたるは、其場へ著きたる證據として、大坂の役終り治平になりたる時、賀州へ三百石にて身上濟みたるとなり。

○東照宮と越前少將忠直卿御不和の起原の事

上泉義鄕曰く、越前少將忠直卿一伯東照宮と不和の起原は、大坂にて、諸手の持口の圖を銘々に記して見よとの上意の時、越前の持口の敵城の構をさもこと〴〵しく彩色圖して出されたるを、神君一目御覽有つて、役に立たぬ男なりと有つて御見限有つて、其後御不和なりしとなり。惣じて敵城の圖などは、龕相にざつと圖して出すこと古法なりとなり。神君は斯樣の古法よく御覽ありて、武の法くはしく御吟味ありたる名將なりし故に、天下も御手に入りし、と申されしなり。

○大坂の役木村長門守を井伊家へ擊取る事

大坂の役に、木村長門守を井伊家へ擊取る首尾は、木村若江の村屋へ入りて割合の晝飯を食し

我功に非ず、と有の儘に云ひたる故に、兩人とも御感にて、同列に加增ありたるとなり。

○藤堂の士田中權右衞門組討の事

又藤堂氏の家士田中權左衞門、弓を持ち敵と出會ひたるに、ひたと矢聲をかけて矢を放したるに、或敵急に進み來り、十文字の鎗にて突懸り、田中が矢を引張りたる弓を鎌にて突切りたる故に、弓を捨て敵と組合ひ、敵を組伏せて首を取りたるとなり。凡大坂陣の時、諸軍の中にて組打は、井伊家の石川、江坂と、藤堂家の田中、此三士の兩組打迄なりとなり。

○大坂冬陣上泉義鄕指物の事

大坂冬陣の時、井伊家の諸士眞田出丸の塀下に附きたる時、堀際の柵を潛りて堀際へ附きたるに、柵を潛る時、指物邪魔になりたる故、之を抜き鎗に持添へて柵を通りしに、上泉義鄕は指物をがつたりまで紫革にて結び附けたるに、解けかねて餘程躊躇ひたる時、日頃心易出入して目をかけたる足輕の小頭、何某義鄕の後に續いて柵に臨みたるに、義鄕の指物留の括解けかねたるを見て、義鄕の傍により、治部左衞門樣、此場へ差續きたるぞ、と云ひて件の指物留の緒

たると有るは、信玄と義信と床机を替へられたる證據見えたり。法令嚴なる信玄族本の備に於て、御坐所知れざると云ふ程の事あるまじきなり。

○大坂にて石川宗左衞門江坂清次郎組討の事

大坂にて日本の諸士入り交りて戰はれたれども、組打は稀なり。井伊家の士石川宗左衞門、江坂清次郎兩人組打せり。其首尾は、城兵突いて出でたる時、城兵と石川と鎗を合せたるに、相手の敵兵も鎗にて仕合ひたるに、如何したりけん、互に入りくみ鎗を捨てて太刀になり、敵石川が太刀を持ちたる掌を切附け、無名指小指を切落せり。故に太刀を捨てて手と手と取合ひ組合ひたるに、敵は痩弱の男、石川は大兵にて腕先もありける故に、敵組伏せたれども、初に太刀にて右の無名指と小指を切られたる故に、首を取るべきやうなし。我が方を見れば、味方の兵江坂清次郎續きて挫へたる故言かけて、是首取り候へ、といへば、江坂は十七歳の若武者なるが、他人の組伏せたる敵の首を我等は取ること嫌なり、と答へたる時、石川右の手を見せて、如此指を切られたる故、首を揚げ難し、と云ひたるを聞きて、其儘敵の首を揚けたるとなり。井伊氏の本陣へ右の首を持參したるに、江坂は元來石川が組伏せたる首を揚けたる故に、中々

に天下の御主となし奉る、と大久保申されたるとなり。

○信玄嫡子義信と不和の事

信玄嫡子義信と不和の起り、川中島合戰の時、義信は旗本組の右備なり。然るに夜半に謙信犀川を越えて近々と備へ、無二の合戰を持ちて懸られたるを見て、旗本備義信を遣り、信玄は義信の備處旗本組の右備に居られたるに、謙信、信玄の旗本備義信を切崩し、義信も數ヶ所手を負はれ、此處に信玄居られざる故、信玄の居られたる右備へ切つて懸り、信玄の床机に居られたるを太刀にて切られたるを、信玄團にて受けられ、側より中間頭原大隅鎗にて突きたるに突外し、謙信の馬の三頭を招き、馬走り出て退れたる故、討外したるとなり。此合戰以後義信は、强敵の謙信無二の戰を持たれたる故、旗本備居ては其身の危きを以て、常々不和なるを以て義信を旗本備へ、床机を替へ、捨殺にせんとの工なると思はれ、父信玄を怨み、遂に飯富兵部が勸めによつて叛逆有りて、信玄怒り、義信を切腹せしめられたり、と土泉義鄕の咄なりとなり。其證據には甲陽軍鑑に、此合戰に信玄の旗本備崩れ、信玄は何所に御坐なさるやら不知、混亂したる所へ、謙信太刀を抜き持つて信玄の床机に居られたるを切られ、信玄團を以て受けられ

上杉謙信の馬印大根の折掛とは、赤根地折掛旗に大根を白く殘したる物なりとなり。

○大坂夏陣井伊家の士小笠原傳兵衞手柄の事

大坂夏陣、五月七日天王寺口へ秀頼の瓢箪の御馬印出かゝりたる時、關東方に秀頼の御馬出、眞田左衞門佐先手にて切懸るといふ風說あるといなや、關東方の惣軍何の分ちもなく、崩立ち諸手悉く崩れたるが、追ふともなく大敗軍となり、井伊家士小笠原傳兵衞三百石嫡子と若黨と以上三人にて、眞孝の赤根の四半に、金の井の字の馬印を捨てて北けたるを取りて押立てたるを見て、總軍共に、やれ掃部頭殿の人勢が返したるは、と言うて銘々に取りて返し、鑓りて終に御勝利となりたるとなり。小笠原後に加增にて取立てられたるとなり。右の敗軍の時、銘々にやれ返せ〳〵、と云ひながら北けたるとなり。何の分ちもなく北けたるに、何とも爲べきやう無きものなり、と義鄕の咄なり。

右の馬印を立てるを見て惣軍返したるを見て、破軍星の尾返が合ひたる、と云ひたるとなり。此敗軍の時、兩御所樣の御旗本大崩にて、家康公も度々御腹を召されんとありたるを、御近習大久保彦左衞門等止められたるとなり。後々まで家康公御武功の御物語ある時は、此の御敗軍の時已に御腹召されんとあるを度々御諫め申して、御腹召されず、終

○同役池田の諸士頬當無き事

大坂の役に、池田の諸士頬當を掛けたる者一人もなし。上使の城和泉一人頬當掛けたるとなり。然れども歯無き老士などは、頬當を掛けざる時は、忍の緒をしむる時は、口すくみて物言ひ悪き故に、掛くることよしとなり。

○胃の頭心得の事

胃の頭一ぱいにつまりたるは悪し。鉛子中りたる時も響強く、氣も欝して悪く、又大坂冬陣のあつかひの時、井伊家の物頭井樓へ上り遠見せしに、鉛子來りて胃に中り卒に仆れたるに、引起し胃を脫がせたるに脫けず。やう〳〵脫けたりと雖も疵不」見。いろ〳〵尋ねたる處、額の米かみの所に中り、玉半分程だけ胃へ込みたり。これ胃つまりたる故なり。終に其疵にて死したりとなり。

○上杉謙信馬印の事

の方へ折りて押行く。諸卒の右の方へ乗り戻り給ふ時は、地道にて靜に乗戻り給ふと雖も、諸卒は先へ行く故に、後陣まで地道にても間を取らずして、悉く顯見なり易きを以てなり。

○大河を渉る心得の事

大河を渉る時は馬武者を川上を渡させ、川を切らせて川下を歩卒渉る時は、大勢の勢にて馬筏にて渉る故に危き事なし。武藏守利隆公、諸卒天滿川を渉す時、右の如く川上を馬武者を一同に颯と川へ乗込んで渡し、其川下を歩卒渉りしに、何の苦惱もなく悉く渡せりとなり。大勢の中只一騎沈みて、指物上へ浮きてひら〳〵せしかども、急なる場故引上る人なく、水に沒し死たり。右の一騎溺れ死せしより外に、末々まで一人も水に沒したる者なしとなり。

○大坂陣の時利隆武者奉行の事

大坂陣の時利隆公備の武者奉行須賀伊豆、舟戸帶刀兩人なり。武者奉行は我組の士卒ありては成り難し。番頭の隱居などの如く、人の重んじて年老なる武功ある人を用ゆべきとなり。

八歳なりしに、兄久次若き者なる故、下部なれども度々戰場に出て事に逢ひたる者なりとて、右の馬取の吉介を正久の馬取となし附けられたるに、大坂夏陣落城の時、崩口に胄附の首を取られたるに、敵を鎗附け突伏せ、首を取られたるに、吉介云く、早く敵の刀を取り給へ。不」然時は、其敵の分量知れ難し。と云ひて、正久は同心に無」之を、右の敵の刀を取りたるとなり。件の刀高田の刀にて朱鞘なりしとなり。初鎗合の時、正久の鎗の太刀打を、敵刀を以て切拂ひたる時又折れたるや、又は其初より折れたるにや、右の分捕の刀の太刀打の處、大豆粒程又折れたりとなり。兜は小田原盛の金錆にて、終不」見能き盛なりと云へり。然れども池田利隆の手にて兜附の首三つならでは無」之。故に兜を附けて御旗本へ遣せし故、八田家にこれなしとなり。

○輝政公關ヶ原行軍順見の事

行軍の時、大將諸軍を巡り見給ふ事古法なり。關ヶ原合戰の行軍の時、池田輝政公諸卒の左の方をはたゝと乘出し、先手まで乘り行きて、先手の先にて馬を右の方へ折り、諸卒の右の方を地道に乘りて後陣まで順見ありたるとなり。戻りに地道を乘り給ふことは、先手まで乘り行き給ふときは、諸卒前へ行く。故に早道に乘らざる時は乘りぬけ難し。先手の先まで乘りぬけ、右

とて、寶器となりたる物なり。

○朝鮮陣の時兵器を塗り馬糞にて乾せし事

朝鮮陣の時、甲冑兵器損じ諸軍難義なりしに、後々は銘々漆を以て養補せしとなり。漆にて塗りても風呂なき故に、乾すこと成り難く難義せしに、作意なる人ありて、塗物を置きたる廻に馬糞を集め置きたれば、一夜宛に干きたるとなり。

○松永彈正久秀が馬の事

馬は人氣あるやはめとりあしき氣強き馬ならでは、戰場長陣はこたへがたし。如何樣に氣強く惡相ある馬も、長陣にては猫の如くなるとなり。松永彈正久秀の乘りたる馬を、八田豐後求めて大坂陣の頃乘りたるに、人氣ありてはめがたきを、吉介といふ異相の馬取ありて轡を持ちてかかると、前足を上げて喰はんと口を開きて懸る時、轡を食ませて牽出せしとなり。此馬大坂陣以後此馬を駿州の島田へ買、駄馬となりたるに、其以後四五年も小荷駄にて荷を附けて、若馬の如くにありしとなり。これ氣性強き馬なる故、此の如く堪へたるとなり。八田正久大坂陣の時十

○輝政公岐阜攻貝吹右衞門が事

輝政公關原合戰の前岐阜の城攻の時、合渡の川向に岐阜勢出て、此方より渉るを待ちかけたるに、池田の御人數敵を見て、進み懸り切崩さんと勇みけるを、輝政公兵機を逸くせんために押へて懸らせ給はず、見つくろはせ給ふに、御貝吹貝吹右衞門武功ありたる者にて、最早進み貝を吹き吹立然、と申上げ、合渡の川へ三里だけ蹈込み、貝を水にて通し、懸り貝を大貝にて吹立つると、池田の諸軍一同に川を渉りて、其勢にて御勝利なり。貝吹右衞門は武藤伊勢右衞門先祖なり。貝吹右衞門、中村勘齋中村源右衞門先祖なり など高祿の貝役なり。輝政公右御合戰以後毎年元朝に表へ御出ありて、始て御言を掛けらるゝは貝吹右衞門なり。表へ御出、吹右衞門目出度、と吹右衞門へ御言をかけらるゝ時、吹右衞門、五百八十年御目出度ござりまする、と御返答申上ぐる事御吉例なり。右の合渡の合戰の時に吹きたる大貝は、大概長さ一尺五六寸許もありて、息弱き者吹かるゝ貝にあらず。一ぱいを吹きたる福田市太夫若盛の時までなり。右の御合戰御勝利以後、關ヶ原御一戰東照宮御利運にて、輝政公段々數國を封ぜられ、播磨、備前、淡路三ヶ國の太守となり、百萬石の俸祿を得給ふ。故に此大貝を指して、三ヶ國百萬石を吹出したる御貝

銀を以て入齒をしたるとなり。此事を仰出され、彼入齒の者かと有りて御褒美被下しとなり。

○甲州山形同心長坂重左衞門の事

甲州家山形同心の士長坂重左衞門、後に井伊家に仕へたる時、上泉義鄕と武話ありしに、重左衞門が曰く、惣じて戰場にて、互に鋭將先に進みて、利ある戰地を取らんと欲する時、我方に其地利の場を取りたる時は、其場を取るや否や、鋭卒に一放づつきほひをとりて鉄子を放さすべし。不然時は假令能場を取りて勝を得たりと雖も、鋭將の功を先賞する事なし。其場を取りたるまでなり。其場を此方へ取るや否や鉄子を放する時は、鋭將の功著し。此德を可考知一事なり。

○信玄小田原發向の時根來法師一番鎗の事

信玄、小田原發向の時、小田原の蓮池に於て、とび大貳といふ根來法師の第一番鎗にさしつゞき、進んで旗本衆の一番鎗はいやなり、と云ひて捨てて、刀を抜きて敵へ切懸り、首を取りたると云ふこと、是向渡りなり。

○美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鐵炮迫合の事

美濃大垣にて、八月二十四日より九月四日まで鐵炮迫合有りけるに、輝政公と西國方との迫合の間に藪ありて、夫へ便りて敵より鐵炮を放し懸くる故に、此藪の敵を追拂ひ、此方へ取つて竹を切拂ひ、さはりなき樣にすること可なり、とて、山脇源太夫、竹村伊豆、八田豐後、此三人の番頭に仰せ附けられ、三人ともに組鐵炮を連れて出張し、敵を追拂ひ藪を切拂ひて、三備共に引退かんとする時、敵喰留たる時、八田氏殿後にて追駈くる敵を追拂はん、と足輕に鐵炮を打たするに、急なる場故云々打ち難し。此時豐後長臣柏原李右衞門足輕の中に慥なる者三人を招き、鐵炮に玉藥をつがせ追來り、敵中へ李右衞門取返々々十四五程鉛子を放し、馬上の敵三人程に中て、夫にて辟易して敵引退きたるとなり。柏原も引退く時に、右の玉藥を込みたる足輕の居處を見るに、砂の中を堀りて、其中に居て玉藥を込みたるとなり。穴を堀りたる體を柏原は不」見、急なる時によく堀りて、入りて玉藥を込みたること、と笑ひたるとなり。柏原は柏原市右衞門の先祖なり。輝政公より播磨の御普請場にて、御褒美に緞子の羽織を被下となり。其、謂は、天下普請の時黒田殿の衆と口論し、齒を少し折られながら相手を切倒し、利を得て金

○保科彈正信州高遠に籠城の事

信州高遠の城に保科彈正二十七騎にて籠城の時、小笠原一萬の人數を以て攻之。此時彈正鄕民を大勢駈りて見せ勢となし、夫に旗を多く持たせて見せ旗となし、又山上に相圖の旗を置き、敵の押來る時半途にして相圖の旗を振つて、石弓落し敵の人數を仕切りて、終に二十七騎を以て勝利を得たり。

○上杉景勝最上義元と合戰の事

上杉景勝最上義元と合戰、直江兼續長谷堂口を引拂ふ。溝口左馬助勝路直江に向つて曰く、夜に入りて人數引取り候はば大敗軍に成るべく候。今夜は堅固の地に陣取り、明朝引取給へ、と申しければ、直江も尤と同じ、一里許り引取りて小高き所の野山左半道許り行く。先は大山、爰こそ能所なれ、とて陣を取り夜の明くるを待つ。謙信家の軍法懸り引といふ手段にて引取りしかば、上杉の諸軍無恙米澤へぞ引取りける。此時の陣取、直江下知にて山より半道前に陣取りつゝ山へ懸らざることを、家康公後々まで御稱美ありけるとかや。

常山紀談拾遺　卷之三

○相圖の旗といふ事

相圖の族といふ事あり。甲陽家に於ては萩原常陸守と云ふ大剛の武士、伊勢浦の獵をなすに山上に於て相圖をなし、其相圖に依つて魚を捕るを見て、是に依つて工夫をなして、相圖の證據旗と云ふ事を爲せり。則ち信虎の世に駿河今川の家臣福島といふ武功の士、甲州を取りて我國にせんとて、駿遠の人數大軍を以て甲州へ押入り、已に武田滅亡せんとせし時、常陸守件の證據族の相圖を以て軍に勝ち、敵の大將福島をも討取りたりとなり。是小族に依つて大利を得たりとなり。

○武田信玄相圖の旗を用ゆる事

武田信玄新田足利へ燒働し給ふ時、敵城の高み〳〵に族を置きて、敵の出づる出でざる、其族の相圖に依つて知る。其虛實を計つて敵の宿城を燒働し給ひしとなり。

りと申すことは承らず候。重きに害有りて輕きに利有り候へども、之ともに軍行は定法有りて、左のみ遠路を押すことなければ、必ず憂とするに不レ足。笈は山林繁茂の地に利ありと申候へども、具足箱さへ持ち行くに不自由なる地へ、大人數を押入れて何の益有るべきや。たゞ有るに任せて用ひよ、と被レ令二然るべく覺え候となり。

○瀧川左近將監一益極暑に馬上にて川を渉す時水を飼ふ事

瀧川左近將監一益、武藏野合戰に手負ひて退口に、極暑の頃なれば、馬甚疲れて遍身汗に浸れり。川を乘渡す時水を飼者あり、水を不レ飼者あり。水を飼者の馬は十町許にて皆行仆れたれども、不レ飼者の馬は別條なかりしとなり。

て包み、其絹ばかり取りて曲物の蓋を明けて首を出さず。其次に桶に入れたる首六つ七つ置く。其外誰々の手へ討取ると鼻をかき並べたり。然る時に公、扨首實檢あるべきや、と池田、福島兩將へ上意、御受には御時宜く御座なさせられ候旨申上る。其時立上り給ひ、長刀を御杖に御突にて、御張肘にて左の御脇を御眼じりにて上覽、其時前後左右大小名一同に頭を地に附け給ふ。各頭を上げて張肘にて伺公、御足拍子を左より御踏み、さて右を御踏み、又左にて御踏納なさせらる。鯨波を曳々々と長く御上げ、諸軍一同にをゝと聲を上げ奉る。扨御長刀を御脇よりそと受取り奉り、秀忠公へ渡し進上仕る。秀忠公謹んで御頂戴あり。其後御長刀持人に御渡し、扨御蓋ありしとぞ。

○備前少將光政の士上泉治部左衞門具足箱評話の事

備前少將光政の士上泉治部左衞門義鄕は、上泉主水が甥にて、大坂兩度の役にも武功あり。老年の頃池田信濃守政言二子也 光政の 上泉に、具足箱に利方よき制法有りや。聞置きて家中の士にも言聞せん、と尋ねられければ、上泉答へて、笈にも仕り擔にも仕り候が、有り來る鎧筥を用ひんに、如何樣にても害なく候。關ケ原大坂兩度の役、天下諸軍馳集り候に、種々の品有りて、是ぞ利有

○同翌十六日江州佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事

同役、翌十六日江州佐和山へ向はるべし、と五字の衆諸手仰せ渡さる處に、申の下刻より大雨、此時山中村御本陣大雨に附、惣軍小屋々々支度の火を焼く事を得ず。御旗本より惣勢へ、生米喰ふべからず。少しの内水に米を浸して喰ふべし、となり。不破關川の洪水に、敵味方の死骸流ること夥し。

○同牧方表に御旗を立てられ首御實檢の事

同役、家康公牧方表に御旗を立てられ、今度討取り來る敵の首御實檢あり。公甲冑を召し拔身の御長刀を持たせられ、牧方前野御牀几に御腰を掛けられ、御張肘にて大坂の方に向はせられ、御前に御旗七本、金の扇子の御馬印、御鐵炮百挺火繩に火附け、御弓百張矢をはけ、御鎗百本拔身、御右に井伊、本多、大久保、酒井、榊原、御譜代の諸將伺公、少し上りて秀忠公初め奉り御一門方、御左は池田三左衞門、福島左衞門大夫、其外今度忠節の大小名毛氈を敷き張肘にて伺公す。外樣の大名は馬印立てし所に、具足櫃を引附々々伺公す。扨諸の首曲物に入れ上を絹に

西の山を後にして足輕をかけ、鐵炮を打立て矢を發す。此手に當る東方福島左衞門大夫、同刑部少輔、藤堂佐渡守、黑田甲斐守、京極侍從北の山より押下し、靜に懸り合戰、身方弊と取結び、地煙を立て攻戰ふ。さる程に宇喜田秀家無二の西方太閤の御時より五大老の其一人、今日の長將なれば、八千の人數五千先手三千旗本にして、福島先手へ平懸に懸り、面を振らず突立追崩し、二の手より秀家采配を振り正則ともに討取り、天下の面目に備へよ、と息をもつがず突懸る時に、正則下立ち、芝居に折敷き鎗を持ち、返せ者共、敵は前後一つに成りたり。味方勝つべき圖此處なり。正則此處に在り、と下知し給へば、福島勢盛返すと見る內に、惣返と返し勇懸る。宇喜田勢を旗本ともに追崩す。此時秀家千の備なりとも、二の味方に用ひ給はば勝軍なるべし、と云へり。此戰半に、名島秀秋備より大谷刑部備へ突懸る。則ち吉隆馬上に自害す。毛利秀元戰場にて東方へ返る。此色を見て諸手の敵崩色附きしと云へり。

○同御合戰終り御詮議の事

同役に、家康公御合戰終り、御詮議、石田が陣場に池村柵より東にて討取る首は、高名其品輕重あり。柵を西へ乘越えて捕首は追首なり。南宮山の敵は、追手の敗北を聞きて殘らず退散なり。

けれども、三成不」果して止みぬ。能圖を外し、利を見て不」取數度なり。

○同御合戰毛利秀元戰場にて東方へ返る事

同役十五日の未明赤坂の惣勢關ヶ原へ打出で、辰上刻內府公、野上村西海道の南桃栗原と云ふ山に御旗を立てらる。御旗本組段々の御備、關ヶ原町東の端迄十二町程あり。御先は則ち福島左衞門大夫、同刑部少輔、京極侍從、藤堂佐渡守、有馬玄蕃頭、山內對馬守、田中兵部少輔、二番備黑田甲斐守、竹中丹後守、三番備下野守忠吉卿、井伊兵部少輔、本多中務大輔、酒井左衞門公、御馬先は、御小姓組段々の備五の字の御使番、五色の御母衣組、御馬印、金銀の半月切裂金の扇子は、大久保彥左衞門御馬の先に進みたり。今日未明小雨降り霧深く、物色見え難し。漸く巳の刻に初に天明れたり。時に御旗本より武者二騎乘出し、敵味方備の虛實考へ乘戻る。これ則ち曾部江法齋、森勘解由なり。異本澤井左衞門奧平藤兵衞巳上四騎物見出でたり筑前中納言陣松尾山と、內府公御旗本其間三十町に足らず。石田三成陣と公の御旗本と其間三十五町に、敵方東軍の旗先を見かけて則ち藤小川を打越し、小關村の西異に向つて段々に備へしむ。備前中納言大谷刑部少輔、平塚因幡守、戶田武藏守、同內記等は山中峠に人數を立てしが引下し、谷川を打越え關ヶ原の北の方へ押出し、

○同役田中兵部の太輔長胤の中間水練の事

同役長胤合渡を渡らんとする時、中間の中に水練を能する者あり。是をして瀬踏せしむ。大雨の後水増りて淺瀬を知らず、諸人渡り兼ねける所へ、彼の中間川へ飛び入り、或は浮み或は沈みて甚だ深しと見えけるが、歸りて、淺く候、といふ。長胤、先に汝が渉りし體は深かりし體なるが、今淺しと云ふは如何、と被尋ければ、彼の者答へて、淺き體を見候はば他の備より先を爭ひ渡り候はんと、わざと深き體を仕り候、といふ。長胤則ち淺き通を渡りて先登の功あり。彼の中間は、此功によりて合渡三郎左衞門と號し、士の列に入れられけるが、後に細川家に仕へて病死せり。

○同役石田三成浮田秀家が諫を用ひざる事

同役、源君赤坂に御著陣有り。浮田秀家勢州より大垣の城に來り、三成に對し、今日東國より上りたる諸軍の陣營を見るに、營法不嚴、軍令不整、淺間なる體なり。彼が敗形に乘じ、今夜軍を發し營を破らば必ず利あらん。これ彼が銳氣を奪ひ味方の勇を益すの謀ならん、と勸め

所に到り狂刎尻込して不ㇾ進。長尾平右衛門は遙後より馳來りけるが、彼の溝を躍越し彼の武者を討取れり。戰場にては曲馬は專撰むべき事なるを、吉村心を用ふる事疎故、可惜高名を失へり。

○同役岐阜落城の事

同役岐阜落城の時、黒田肥前守長政、藤堂和泉守高虎、田中兵部太輔長嵐、生駒雅樂頭吉正、幸山伊賀守等は、城早く落らし故手に不ㇾ合ことを憤り、さらば大坂の城を攻めん、とて進み行く。此時石田三成、浮田秀家、島津義弘、小西行長、其勢二萬許、岐阜の落城せし事を不ㇾ聞、後援の爲軍を發す。呂久合渡の邊にて行合ふ。田中先登して三成が兵を討つ。三成が先鋒敗したり。義弘此時三成へ軍使を遣して、先陣少し敗したれども後陣猶戰ふに餘あり。敵は勝を貪つて部曲亂れたり。此虛に乘りて横様に突かば大利あらん。疾く兵を進められよ、と言へども、三成不ㇾ聽して、岐阜已に陷り候へば、是を攻めたる勢續き可ㇾ來。今少し利有りとも畢竟の勝にあらず。巢穴を堅くして變を見候はん、とて軍を返す。此時西黨大に敗して、合戸赤坂迄二里の間追討に逢ふ者夥し。義弘の言に從つて横に突かば、東黨の敗走必然たらん。惜き圖を失へり。

小牧山御本陣に御旗御馬印、或は張立て或は隠し給ふ。上方の勢旗に心附かず、味方の人氣を敵に見せずして、長久手表へ悉く敵を釣出し、敵に先手を捨てさせ、旗本を討ち破る御備なり。此合戦は公後々まで御自讃なり。

○福島正則關ヶ原出陣日柄の事

福島正則關ヶ原の役に赴く時、出陣の日往亡日なり。或人諫に曰く、占之趣出て再無二歸事一と候へば、他の日に定められよ、といふ。正則聞きて、實吉日なり。我此度の戰功名第一と被レ言働を遂け、大國に被レ封て行くか、運盡きなば討死と思ひ極めたり。然れば何ぞ再び此地に歸らんや。日を替へる事有るべからず、とて出陣せられしが、果して勳功拔群なるが故に、勢州備兩州五十二萬石に被レ封たり。

○同役吉村亦右衞門高名を失ふ事

同役正則尾越の渡を越えて秀信の兵を追ふ時、城兵一騎後れて引行く所を、正則の士吉村亦右衞門馬を馳せて追レ之、已に追附かんとせしが、幅二尺計の溝に乘懸りたり。吉村が馬曲あり、此

に、敵國に逗留する事能はずして、終には我國へ歸りて我兵となる故、これ二つの寶なり。又目に見ゆる相圖、耳に聞ゆる相圖は、敵の耳目にかゝる事故に、容易く敵國にてなし難し。鷄鳴は誰も其相圖ぞと知らざる故に、卽ち敵國の鷄鳴にて一番鳥にて人衆を起し、二番鳥にて食し、三番鳥にて打立などと相圖を究めて、敵も其相圖を知らざるの德あり。此三つの重寶なり。是を三の重寶と立てし、と宣ふなり。

○家康公尾州小牧合戰御勝利の事

尾州小牧合戰家康公御勝利、已に首實檢、甲州の先方廣瀨鄕左衞門が云く、我古主武田信玄大合戰、勝利を得ては必ず引上げ、よき場或は身方の城へ取入りて、二の目を討たれざるを第一とす、と言上る。同國の士三科傳右衞門が曰く、遠からず、去年六月江北越前の境椿江城にて、佐久間盛政が中川清秀父子を討つて其威を振ふと雖も、引取り遲くして柳が瀨の敗軍今此處なり、と言上、依」之御人數小牧山へ雲の如く上り給ふとなり。

○家康公同合戰御自讚の事

○攝州花熊城攻森寺清右衞門八田八左衞門手柄の事

池田勝入公攝州花熊城を攻めらるゝ時、森寺清右衞門 池田刑部先祖なり 八田八三右衞門豊後守父なり 等城の塀際に附て居たるに、城兵突いて出でて寄手崩れけるに、八田氏跡に殘り伏せて、敵引入んとするを附けんと思ひ居るに、先の方に森寺氏城塀の腕木に取附き、吊下りて鎗を持ち居たり。古老の兵のする事なる故能き事ならんと思ひ、森寺氏より五六間も後の方に、同じく腕木に吊下り居るに、城兵敵を追拂ひ城に入る時、腕木に在るを不」知して引入るを、森寺氏腕木より飛下りて、鎗を取つて敵を追駈け鎗を合せ、一番の功となれり。八田氏も同じく飛下り、鎗取つて敵を追廻し、二番の功となれりとなり。

○輝政公武將の重寶を示さる事

輝政公、武將の重寶とすべきは、領分の百姓と譜代の士と鷄と三品なり。それを如何と云ふに、百姓は田畑を作りて我上下の諸卒を養ふ。これ一つの重寶なり。譜代の士假令氣に不」應して扶持を放すと雖も、敵國にて彼者を實に扶持放れたると不」思して、間にも入るゝかと思うて疑ふ故

郎兵衛墓石塔樫井にあり。甥の淡輪新兵衛立てたりと聞く。其時の一番の吟味は、樫井一戰の時龜田大隅守惣手の殿して後より退く。上田主水は先へ退いて樫井の町中の裏に隱居る。龜田を遣過して後にて家より出でて町中にて堪へ、大坂勢と鎗を合せ一番鎗なり。龜田は河原の敵を追拂ひ、町へ駈入り鎗を合するとて、淺野右近、土井大炊頭へ咄候を聞きたる人物語なり。

○信玄豆州韮山取詰め山縣同心辻彌兵衛働の事

信玄豆州韮山へ取詰め燒働の時、韮山城の押山縣三郎兵衛を差置き給ふに、城中より徧を出し迫合あり。其節山縣同心、辻彌兵衛鎗下の高名して、膝の口を篭深に射られ、其矢を不ㇾ抜して取りたる首を持來り、大將の山縣前に畏り居る。山縣大に喰つて、味方の引取らざる前に戻りたる、とて場を追立てたり。

○三州吉田城迫合信玄廣瀨幸を得る事

三州吉田の城迫合に、山縣内見科孕石はこほれ者を討ち、廣瀨は人は討たざれども身柒へ附けるが故に、信玄別して廣瀨を召し、御喉輪を外して當坐の引出物に給はりけるとなり。

捨てたるをば三枝打取り、儀遠州は病死故館林へ久世三四郎、坂部三十郎を遣され、今度手柄高名の御吟味あり。三枝勘兵衛申候は、我等取り候首は、黒田彦左衛門鎗附けたる首にて候。相討ぞと呼懸け候へども、其儘捨てて通り候故、ひたと相討ぞと呼び候へども聞附ず。先へ参り候故、後にて此首を取り候、といふ。三四郎、三十郎彼の黒田を呼び、是を聞けば、中々不覚と答ふ。三枝は黒田に向うて、其方敵を鎗附け候を見て、相討と言葉を懸くるに、其方は其突伏せたる敵を捨て、先へ通るに附、跡より相討ぞと四五度呼懸け候へども、見返りもせず参り候に附、是非なく彼敵の首を取り候、といふ。彦左衛門は猶、覚え候はず、と坐を立去りぬ。此時両御所様上聞に達し、御感浅からざりき。

○浅野左衛門家人永田治兵衛働の事

浅野左衛門家人永田治兵衛は、病者にて駈走ること自由ならず。若者共内々は、あの病者にては何の役にも立つべからず、と嗤ふ。永田之を傳聞き、人足は達者次第、侍は剛の者のみ役に立ち、無病又病者に因るべからず、といふ。樫井にて大坂方淡輪六郎兵衛を討取り、其首をもぎ附にして持参し、病者に劣りたる息災人、と日來嘲りたる人を笑返したりといふ。淡輪六

丹羽五郎左衛門長重の咄に、鴨野口にて我等も仕寄を附る。景勝出て、我等も仕寄を附申べし。先是なる流に橋を丈夫に懸けてより申附け引込む。直江を始め手緩き人かなと思ふ氣色にて橋も架けず。景勝又出で、何とて橋は架けぬぞ、と被申。西條治部申すは、只今にても橋は架け申すべし、とて即時に架け申候。景勝見て本の仕寄場をば差置き、脇に土俵を置き鐵炮を懸けて、只次第に土俵をば持ち參れ、と下知せられ、大坂方始は用心しけるが此體を見て、上杉は軍の術を知らぬか、はか〳〵敷はあらじ、とて引入る。景勝衆も主の下知を受けぬ顏に、景勝は敵の油斷を見澄し貝を吹立つと、即時に本仕寄場へ土俵をひた〳〵と持寄り、仕寄を即時に附くる。前の土俵置きたるは仕寄道になり。明日大坂方仕寄防出、是を見て肝を消し興を醒しける由。

○榊原の家人黒田彦左衛門の事

榊原の家人黒田彦左衛門と云ふ兵あり。大坂落城の時、五月七日赤母衣懸けたる敵を突伏せ乘懸り、首を取らんと仕り候を、傍輩の三枝勘兵衛乘附て、彦左衛門其首は相討ぞ、と云ふ。彦左衛門は夫を聞きて首をも不取打捨てて、其身は鎗提げ先へ行く。三枝之を見て又言葉を懸け、彦左衛門相討ぞ〳〵、と呼はれども、彌聞かぬふりに先へ通り、又敵を突倒し首取り、初め

候。其段達二上聞一候へば、其忠義信の所にて猶惜き兵なり、と仰せられ候。畠山に逢候事何として漏聞え、景勝愈不興して、我に隠れ畠山方へ行くこと言語同断、とて愈甘糟はをしみ申され候。備後守死去、子供には跡式申附けられず、津軽へ浪人仕なり。右両人の外に大剛の者主大將分の者多し。千坂對馬守、是は上杉四家老の一つなり。見事なる士にて何方へ大事の使に越候ても、一かど埒明べき仁體なり、分別者なり。岩井備中守は、謙信小姓立にて見事なる男、武邊度々あり。分別辯舌兼備り、名高き兵にて殊に茶湯者なり。安田上野介は小男なり。手疵有る故少し足を引き、眼ざし光ありて、何者が見及びても剛の者といはぬ人なし。中々するどく氣高き士なり。杉原常陸は、武邊かさ有りて平人にあらず。分別了簡大にして軍功数度あり。絲くみの指物をさす。直江山城守は大男にて、百人にも優れたるもつたいにて、學問詩歌の達者、才智武道兼たる兵なり。恐くは天下の御仕置にかゝり候共、あだむまじき仁體なり。島津下々齋是は戦功武功肩を並ぶる人なし。其外能士多く有りしかども、今は早殘らず死に果てて、二代三代に及びたり、と門田物語なり。

○丹羽五郎左衞門物語の事

代の者にて候。輝虎公日頃こそ御意に違ひ弓矢に罷成候。上杉御家恨無之候間歸參仕度し、とて景勝へ從ひ上杉三郎方を攻從へ、夫より今に恙なく奉公するなり。最上殿と千安にて本條戰の時に甲を切割る。此刀正宗なり。後秀吉公御代に伏見御普請に附、本條重長在京し勝手詰り、彼の刀を賣る。本阿彌方を次ぎ、家康公へ被召上、本條正宗と云ふ。後は紀伊大納言殿へ進ぜられけるなり。又甘糟備後守は上田住人にて、是も小身より武邊にて成立ち、謙信秘藏の兵にて後は大身に取立てられ、景勝家にて本條重長と牛角の兵なり。景勝會津へ參られ、白石城主として五萬石下され候。福島城は本條重長、築川の城は須田大炊なり。關ヶ原御陣なり。關ヶ原御軍の時、甘糟備後會津に暫く罷有候後にて　甥の登坂式部逆心し、政宗へ白石城を渡し候。式部も政宗へ行き、夫より景勝無興して甘糟備後守を遠退け言もかけず。備後守も日陰者の樣になり罷り有候。家康公聞し召し及びたる大剛名譽の兵なる故に、御望に思召し、畠山下總守義直に仰遣す。景勝目見を惡ふ由、早々立退き御旗本へ參り候へ。二萬石にて召出さるべし。と仰遣はされ、京にて下總守方へ備後守を呼びて上意の趣を申渡す。本多上野介正純書狀まで見せ候へば、備後守頭を地に附け、景勝目見惡ふは拙者の不調法にて、少も恨御坐なく候。假令何樣に致され候とも、譜代の主に候間御免下され候へ。上意は有難く存じ奉り候旨、涙を流し申

○上杉浪人門田造酒之丞物語の事

上杉浪人門田造酒之丞は、淺野采女正弾正次男左京大夫弟正則に奉公。彼の門田が物語に曰く、本條越前守重長は、越後本條城主大剛一の大將、上杉にては一二を論ずる程の武勇なり。永祿十一年本條越前守逆心するにより、輝虎直に出馬なり。飼附川を阻てて本條も出向ひ一戰あり。輝虎先手は上杉彌五郎義春、二の先は直江山城守兼續、三番は景勝十四歲鐵上野介、栗林肥前守介添なり。四番は謙信旗本なり。上杉彌五郎自身川へ乘入れられし故、毛蓑與十郎乘込む。一備一度に乘入候。本條重長人數も川へ打入れ、川中にて鎗を合せ數刻戰ひ候所へ、三の備景勝手脇へ押込み鎗を錫杖持して、勝つた〳〵と聲をかけ、二千許眞黑になりて川上へ打入り、本條が前へ押廻し候に附、本條重長敗軍なり。重長乘下り〳〵殿して退く所へ、上杉彌五郎乘り附け重長に組まんと志し申され候。重長小高き所へ馬を乘上げ扇を開き、彌五郎殿さすがにて見事に候。去ながら最早御引取り候へ。深入召され候は越度を取り給ふべし、と云ふ。彌五郎本條に組むことならずして引返す。此本條は大力にて大男、度々の軍功數を知らず。國境なる故最上義光と取合ひ、庄内を過ぎ半切取り、天正六年謙信逝去候時景勝へ使を立て、上杉御家譜

られ候。此時中村が方究竟の兵士三十六騎討死、殊に一學家老野一色頼母討死仕る。味方へ討取り申候首は、有馬女蕃頭内稲次右近が討取り候。横山監物主従二人の首計なり。此時右近は御本陣へ參り候を、大御所御覽なされ、鳥毛の半月は先刻此陣下を通り、敵に向ひ候き。高名仕候や、誰が者と御尋あり。有馬法印御傍に居られ、同氏女蕃家人、と申上ぐる。則ち首帳に附け申し、稲次申候は、我より先に首一つ持來りて候仁有り候や、と云ふ。筆者申候は、中々。堀尾信州の母衣の者首一つ持來りて帳に附け候、といふ。稲次承り、夫は我家人を味方討に仕候。其御帳を消し候ひて下され、と申す。則ち大御所御聞なされ、何事を申すや、と御尋ね被成候。筆者承り、右近が申候通りを申上候へば、筒様の打交り軍には、味方討にても高名になり候例もあれば、首帳消し申す間敷、と仰せられ候。此時堀尾信州方へ聞え、母衣十走の兵共敵味方見分す、狼狽者母衣仲間には不二罷成一候。其儘御置可二有候はば一、縄を差上候、と訴訟仕り候。堀尾帯刀吉晴聞き、尤に候、とて彼者の縄をば召上げ、仲間をはづれ加增をなし、弓二十人預り候よし。有馬女蕃は、稲次右近高名を感じ、本地五百石の上に六千石加增を遣し、家老に致され候。先年肥前島原にて八十五歳にて討死仕候。

上げ、馬に轡をかけ殿仕候。一旦村の籔の下にて中村勢有馬勢犇と附く處にて、牧野傳藏が兵共、又備前勢少々踏留り候。丹羽道監と石黒藤兵衛立堪へたり、見事に候。斯て日も暮れかゝり、井伊直政幣を取りて、中村有馬が勢を引上けて歸られ候。

一說、中村が軍士等大垣勢に掛留められ、未堤の下に有りけるを、大御所本多中務太輔忠勝を召して、其方急ぎ馳越え中村が手の者を引上ぐべし、と仰せられ、忠勝頓て御前を退き、騎兵と足輕を相俱して株瀨川に到り、中村が兵士を引取らせ、忠勝は後殿して退きけるに、秀家、三成兩家の兵士猶喰留めんと勇みけれども、本多が繰引の列伍亂れざる故に、さすがひら附にもえせず扣へけるが、秀家の軍士稻葉助之丞金切さき枝釣白しなひ指しもの兩人諸兵に先達て進み來り、忠勝が備に近附きて兩人ともに輪を掛くる。大御所之を御覽あつて、武者振見事なり、と仰せられしとかや。右の品實錄なりとて借求め見し故に爰に記す。然る時は、井伊氏此時の殿は相違なるにや、猶又尋ねて可ニ書改一か。

此時、大御所は赤坂岡山の本陣より御見物なり。井伊直政人數の擧樣中々足手を使ふ樣に下知して引取り候。能見物なり、と人々申し候。秀長、三成人數も漫々と柵引大垣城へ引入れ、其勢の內に白しなひ差したる武者一騎乘下り、見事に殿仕候。大御所白しなひ見事に候、と度々仰せ

之進も馬を蹈立て二騎連て掛入ると、明石掃部、蒲生備中が人數崩れ申候。兩人勝に乘つて追打候。赤坂御本陣より大御所御遠見なされ、大事の合戰を明日に抱へ、無益の軍致し人數を損じ申候。早々引揚げ連て戻り候へ、と事々しく御腹立なり。渡邊忠右衞門重綱、金手桶の金を遣され候へども、敵味方喰止め別れかね候。大御所殊の外御怒りなされ、井伊直政兵部少輔程々緋の羽織金の堀取の馬印本多内記忠朝後に出雲守を御差添なされ遣され候。直政、忠朝は中村の陣へ駈入り、早々引上申すべき旨申渡し候とき、矢野助之進、林文太夫敵を追立てく戰ひ申候。直政乘附け、何とてみだるく仕候。早々引上げ候へ、と下知致され候。助之進、文太夫振返り、此所をば此兩人に御任せ候へ。兵部殿、内記殿には有馬玄蕃手へ御下知候へ、と申し捨て切懸り、遂に大垣方を切崩し、夫より敵味方入交り競合候。此時治部少輔が兵水野庄次郎鼈の皮の羽織、銀の大釘の立物の冑にて乘來り、中村母衣の者梅田大藏が手負ひて引兼ね候を、首を取り、大柿へ乘返り、三成隅矢倉に居候下へ參り、水野庄次郎にて御座候。高名仕候間御勘當御免下され候へ、と呼り候。治部少輔、如何にも心得たり。高名も見屆候間先手を賴み候。早々參り引取りくれ候へ、と申候に附、又庄次郎は先手へ參り候。此有馬玄蕃頭も田中兵部も、中村一學を助けて多勢にて懸り候故、秀家内秤葉助之丞金切さき治部が使番林半助乘下りく殿仕候。明石掃部も堤を傳ひ乘

女蕃頭豐氏にて候。此合戰を見て、有馬が兵共數十人柵を越えて進み、稻次右近烏毛半月さしもの、岡本五郎右衞門眞先に進みて川を乘渡し、治部方の勢中村敗軍を追來り候。出合頭に致候。稻次右近馬を岸へ乘上候、と金の制札の頭上立物の兜著て、横山監物と名乘り懸り候。右近と互に馬上にて渡合ひ、其後馬より下立ち組打ちになり、右近下になり申すを、右近郎等岸又左衞門、監物が鎧の綿噛取りて引覆し候へば、右近上になり候。監物若黨駈附、右近が兜の錣に取附き引仰候を、右近振放さんと頭を振る處へ、右近が若黨駈附け監物郎等を切り候へば、右近が兜を放し抜合せ防ぎ申候。然る所へ堀尾信濃守忠氏の母衣の衆一人駈け來り、敵味方をも辨へず右近が若黨を味方討に致し、首を取り引返し候。其内に右近は監物が首取り立上り、監物が若黨も切伏せ、其首を取り二つまで高名し、若黨が首をば鞍の鎧手に附け、監物首を奪附けて手に提け、馬を靜々と歩せ、中村が陣中を通りけるに、見る人譽めぬ者はなし。其場過ぎて備前秀家の家老明石掃部三百餘にて、池尻より福田繩手へ廻懸り來り候。中村一學人數亂れ候を、矢野助之進金の團の只一騎にて取て返し、大勢の敵へ立向ひ候。林文太夫赤母衣金の桔梗笠の梅田大藏が深手負ひて退きかね候を助け退き申候。助之進屹と見附て、梅田を助け退け候はんより、此大勢の敵を防ぎ候へ、と言葉を懸けられ、文太夫は梅田を捨てて馬に聲をかけ乘出し、助

伊前賴母などかれこれ五百餘進み候。備前勢には明石掃部宇喜田家老一萬石領す本田對馬守兩大將に稻葉助之丞不破内匠等、八百餘出候。石田が物頭島左近、蒲生備中、伏兵を木戸一色村の藪に伏置きて引き候により、中村が勢是を知らず、進み申さる處を打立て射立候と兩方堪へ鎗初り候。中村が内成合平左衛門一番やり仕り討死仕り候。首は猪尾甚太夫取り中村勢敗軍仕候。家老野一色賴母鳥毛二の圖子の馬印を取りて、川の東に押立て、一足も引くまじく候。さて〳〵何も敗軍見苦しく候、と罵り候。藪内匠六千石取中村家老其脇を引て通り候。内匠に、何とて返し不申や、と賴母言をかけ候。内匠振顧手負候故返し不申候、と斷り、川を西へ乘渡り候。服部小膳高屋九兵衛、何も弓鐵炮のもの頭どもにて覺の兵にて候へども、押立てられて崩れ申候。野一色賴母は、金の三幣の指物にて馬を引返し數度戰ひ候を、治部少輔が内海北市郎右衛門鐵炮にて打ち申し候。賴母炮に當り馬より落ち則ち討死。其組子松村清助、賴母が死體の綿噛を取りて引ずり退き候へども、治部人數附立候故、賴母表帶を切り、刀脇差ばかり取りて退き申候。後にて賴母首は富村と申す兵取り申候。治部方多勢追重り候故、中村家人、中村新介、河毛新八、同次郎、原田梅津、天野、堀口等二十八人討死仕り候。廿利左兵衛は川中にて立合ひ防戰ひ候。鎗手二ケ所負ひ退きかね候を、石田が兵共追附候。吉田左太夫返合せ追拂ひて廿利を退け候。中村並の陣は有馬

以て漸々抜きたりとなり。或老功の者云ひしは、矢根を當坐に抜かざる時は、肉に食しめ不」抜物、といへり。

○大猷院樣日光山繪圖御覽の事

大猷院樣日光山の樣子圖にて御覽可」被」遊、と畫師參り、委しく圖すると雖も確と埒あかず、北條新藏守氏長を遣され候節一覽仕り、歸りて御庭の砂にて山の圖を仕り、御目にかけ候處、則ち安房守を奉行に仰附けられ、御普請出來の由なり。

○關ヶ原御一戰御勝利稻次右近高名の事

慶長五庚子年關原御一戰、九月十五日其前日晝前に、大御所は赤坂へ御著陣被」遊候。晝時分に石田三成方より島左近、蒲生備中大將にて杭瀨川を越え、刈田誘引を掛け、其口中村一學陣取の際なり。竹田五郎兵衞二千石取二氏姪聟三間計の鳥毛の棒の指物にて陣所の塀を跳越え、治部が勢へ掛合ひ、三人鎗附候を鐵炮にて打倒し候。竹田が討たれ候を見て、中村が兵共柵を蹈破り爭うて駈出し候。野一色賴母金の三幣にて出しもの藪內匠推續き懸り候。治部方には水野庄次郎後號淺香林半介治部が左馬介使番

讃州源英公の家士西尾右兵衛浪人の時、有馬の役に寺澤家の備をかる。猩々緋の羽織に朱熊の頭刺物をさす。此士の喉に鉛子中りたるに、頬當を掛けざる故柔にして弱く中りたる故か、喉の皮に玉留り死脫る。其鉛子後まで留りたる儘にして有りしとなり。其鉛子年々に下へ下りたるとなり。右の故に一生頬當を用ひずとなり。

○高麗陣の時宍耳太郎兵衛南大門一番乘の事

戸川肥後守の父戸川平右衛門家士、高麗陣の砌馬場重助と云ふ者。南天門の棟へ上りて内を見れば、人一人も無し。時に味方を顧み招く。同家士宍耳太郎兵衛續いて上り、大門の一番乘宍耳太郎兵衛、と名乘る。之に依て重助功を空くす。斯樣の時武功有るべき事なり。

○同陣清正家來矢木八右衛門矢疵の事

同役清正家來矢木八右衛門と云ふ者、晉州の城攻の時、具足の綿噛に矢を射附けられ、取りて抜きけれども、矢柄許抜けて根は止りけれども、その場急なる故に其儘城へ乘込み、扨その夜陣屋へ歸り矢の根を抜きけれども、肉に喰しめて抜けざる故、手負を足に踏附けて矢の根を鐵鋏を

藤堂嵩虎の家中は足輕中間まで冑を著、金の桃形の冑に、一枚鍬に鳥毛の引廻を附け、胴は古は金の鈑、近年替り、胴中を三分一金する。中間は中白筋の羽織なり。物頭は不」殘冑の押附に白熊附くる。白き髪を下げたる如く胴より下へ懸り、見事なるよし。

○藤堂家士梅原庄右衞門指物頬當の事

同家士梅原庄右衞門は伊賀の武羅組なり。指物を横に斜にさす。是をおいね刺といふ。右へ斜にさす時は、太刀にさはる故に、左の方へ斜にさすなり。此士の三本靡に鉛子十七中る痕あり。此士刺物の柄を打柄にして請筒待請合足を強く丈夫にする。此意は、或は城乘の時、石垣屏高く登り難かりしを、下人石垣の上へ早く登り、庄右衞門が刺物を取りて引揚け、一番に城を乘りたる故に、以來如」此するとなり。此士元來池田伊豫守秀雄の家士なり。又此士頬當の露おとしの穴を廣くする。此意は、頬當を著し飯を食する時、頬當の透よりおとがひに落充りたるを、指を入れて掃」之に宜しとなり。又氣も散じ方々宜しとなり。梅原は江戸淺草知樂院伯父なり。

○讃州源英公の家士西尾右兵衞が事

長政筑前入國の後、嘉摩郡大隈の城に置いて一萬八千石の采地を給はりける。猶又後の大坂の役、其勇戰を見つべし。

○加藤家足輕具足を著ざる事

加藤の家にては足輕具足は不」著、胄ばかり冠り、胄の脇立に、長二尺に白き絲一幅の小旗を兩に二本立つる。清正の物語に、他家には具足を著せ、胄は不」著、或は張抜の笠を冠ると見えたり。身に皮具足を著ても、頭に胄を冠らざる時は、堪へ難きものなり。胄を著れば具足は不」著しても堪へよき物なり、と被」申となり。

○加藤家騎馬武者馬上鐵炮の事

同家にて大小身ともに騎馬は一尺三寸、或は一尺五寸の鐵炮を馬上に持ち、陣前にて打放し鎗を初むるとなり。清正家中の老人後に咄せしは、馬上に火繩何とも難」持者なり、といへり。

○藤堂高虎家中具足の事

人々の内早川を越え給ふと存ずるなり。夫故敵陣近く參て物見仕るにも及ばず、立ちかへり候。急ぎ打立たせ給ふべし、と進めしかば、長政大に喜び給ひ、後藤基次が武勇の功者なること今に始めざる事ながら、心早き物見の仕様かな、出かしたり。早打立たん、と云ひ給ひけり。基次是より前にも、朝鮮にて長政の先手山の端を廻りけるが、敵と出合せ戰ひしが、其ときのこゝろを揚ぐるを後藤聞きて、先手の戰味方打負けたり、といふ。長政聞き給ひ、山の戰を汝爰に有りながら、味方の負けしとは何を以て知るぞ、と尋ねらる。基次承り、さん候。味方の闕聲次第に近く聞ゆるは、一定負けて引くと覺え候。勝軍ならば向へ進みて關を上ぐる故遠くなるものに候、と申しも敢ず、味方敗軍の兵共朱になりて追々きたれば、又兵衞が察する處神の如し、と感ぜらる。又其後に敵の陣見えざる所なりしに、遙向に馬煙夥多しく見ゆるは如何に。軍の勝負は何とか有るらん、と宣へば、基次かしこまり、敵が打負け引くと見え候。其故は、進む敵の武者塵は此方へ懸りて黑みて見え、北ぐる敵の武者塵は向の方へ懸りて遠き故に白く見ゆるものに候。遠きは色薄き故に白く、近きは色の濃きが故に黑し。是は白みて見ゆるによつて敵の敗北と見え候、と申す。其言少しも違はず、敵の勢敗軍に及びけり。晉州の城攻には別して先登に進み勇を振へり。加藤清正も後藤が武勇を大に感じられけり。夫より戰功を盡しければ、黑田

上方勢の夜守、夜合戦の備もなく、無法の陣取と申候に附、御仕掛候はば御勝利と存奉り候。秀吉を是非打取り候處までは考へ申さず由申上けられ候。權現樣御聞き遊され、各左樣有るべくと兼て存ずる事なり。其節夜軍にかゝらば必ず勝つべしとは思ひ候。然ながら太閤を打漏し候はば、散々のこと候と思ひ、右趣を用ひざるなり。其子細は、秀吉は一度天下一統の大功を立てんと含まれ候。然るに長久手十萬の勢、味方織田合せても僅三萬に不及。これにて戰陣も譽なるに、晝の一戰勝つこと十分の仕合なり。又夜軍に勝つて秀吉を打洩し候はば、至極の負を憤り、天下の望より先德川家を潰すなりとの所存出で候はば、無益の義なりと存ぜらる。其心入故此度も北條を押たふし、夫より出羽奥州まで手に入れ、天下一統の功立つべくとの心掛と相見え候、と仰せられ候。何れも感心奉りしとなり。

○朝鮮攻に後藤又兵衞物見の事

朝鮮の役に黑田長政、後藤又兵衞尉基次を物見に遣さる。基次やがて馳向ふ處に、其道に一つの河あり。其河を打渡り、敵陣の近所まで行かんとせしが、日本の馬の沓川上より流れ來るを見て、早川上の味方の勢の川を渡りしと推量し、川邊より直に引返して長政の陣に歸り、味方の

常山紀談拾遺　巻之二

○家康公駿府御花見の事

天正十八年秀吉卿北條家を退治として、小田原へ發向の前方、家康公も頓て御出陣の前、駿府近邊花盛の候を御覽遊す由、御城中御矢倉の諸方能見え候所へ御上りなされ、御老中御供にて、御菓子御酒等下され、其後御咄の次でに、各へいつぞ尋候はんと存じながら取紛候。先年長久手一戰の時、晝の合戰には我ら勝にて小牧の要害へ取入り居候處、秀吉は二重堀の陣場より一戰の心掛にて馳來られ候へ共、日暮に及び、小牧城攻は明日の義と有りて、其夜龍泉寺川原に野陣を張り居られ候處を、夜軍仕かけ候はば然るべき由、各勸められ候へども、我等不」用して其夜中に小牧の陣所へ引取り候。其夜仕かけ候はば、太閤を必打留め申べきと有る心にて候か。左樣候はば勝利は疑なしと存ぜられ候や、と御尋につき、忠勝申上げられ候は、直政、康政は晝御一戰にも逢ひ候へども、私は小牧の御留主に居申し、一入夜軍望しく存候。太閤を打留め候處までは心附申さず、と申上げらる。井伊、榊原も申され候は、龍泉寺表へ差遣し候伊賀、甲賀の罷歸り、

能登（のと）、飛騨（ひだ）、加賀（かが）迄（まで）手をかけられ候事、凡人（ぼんじん）にては有るべからずと云々。

神の化身かと存候、と申候。景虎は府内城を攻め陥し、六郎に腹切らせ、其後申され候は、主君の跡を嗣ぎたる兄を殺し候上は、國を取る望なし、とて、府内を出で高野山へ赴き申され候。關の山迄出候時、上杉家老その談合して曰く、景虎無くば、越後に重りなく我儘になり、他人の手へ越後を取るべく、とて追駈け引留むる。景虎居給はずば、越後は誰か治むべく候や。上杉代々の骨折水になり候はん事心外なり、と達て異見する。景虎、さらば以來共我ら下知を背くまじくと、起請文を宿老中いたされ候はば歸るべし、と云ふ。其時上杉家臣二十六人、已來ともに御意次第に仕るべく、と起請文を書く。そこにて立歸り、春日山の城に入り、上杉宣實の上條に居給ふと申合せ、越後を治められ、長尾越前守政景を引附け、上州平井の城に、管領上杉憲政へ隨ひ申さるに附。扨年頃不義ある者、野心多き頭を上る者、大身共十六人、林泉寺にて切腹申附くる。然れども前の起請文有る故に、餘人とかく言ふ事ならず。景虎越後を踏靜め、これ皆宇佐美駿河守に相談して如此。謙信は、上杉を繼ぎたる兄を殺し、子孫を立つる事、天道に背く、とて十八歳に出家して、不識庵心光謙信と號す。二十二歳にて上杉憲政の讓を請け、上杉政虎と號す。永祿三年五月上洛して、公方光源院義輝公より一字拜領し、輝虎と改む。菊桐澤瀉瓜の紋の幕、網代の輿、文の裏書御免にて、關東管領になり、越後、佐渡、東上野、越中、

候時、坂織部號鬼小島度々介、吉江織部を始め、散々に戰ひ候處へ、宇佐美駿河守麾を執り横入に懸り、本條美作守は備なりに靜々と懸り候時、六郎打負け敗軍仕り、米山へかゝり府内へ退き申候。景虎靜々眞先に追討に進み申さる。米山東坂本にて景虎申され候は、何と致し候や。殊の外に睡く候間、暫く休み打立つべく、と小家へ入りて睡り申され候。駿河守これを見て、これは如何なる御事にて候や。今敵を追立て候事は、竹を破るが如く、其勢失ふべからず。米山を追越し候はば、頭城郡へ打出で、府内の城を乘取るべく候。早や打立んと催し候へども、景虎は眠りしとて、高鼾かいて臥し申され候。駿河守樣々異見すれども、不聞臥し申され候故、了簡も無し。運の極の、と云ふ。扨景虎は上杉六郎人數米山峠を三分一ほど越えたると思ふ時分、早貝を吹かせ、景虎打立ち、米山へ追上り候。如案六郎は下り坂に赴き候處追附、六郎人數龜破坂より追落され、死する者數を不知。後に宇佐美諸人に向つて、今日景虎米山坂にて逃ぐるを不追して、眠り候を、各合點致され候や、と尋ね、皆々、合點仕らず、と云ふ。宇佐美の曰く、府内勢米山へ逃上る時是を追うて、若し敵に追され候時は、上手に敵を受けて進みせば、返す事必定なり。景虎其の段を積り眠る眞似して、登坂を敵に登せ遣し、下りに赴き候時、追討ち給ふ。我若年より數十度の事に逢ひしかども、其積り無きに、景虎十八歳にてこの智恵は、軍

死。惣敗軍にて士卒散々になり、越後へ引退き候。宇佐美駿河守定行は、十一日踏止まり、敗軍を集め、堅固に板倉を引拂ひ、越後へ歸陣する。越中勢後を附けんと存候へども、宇佐美が武勇に怖れて一人も附けず、爲景討死なれども、其子上杉六郎國を治めて、別條無し。此年猿王は十六歳なり。爲景討死と聞き、忌中の追善懇に沙汰し、三年過ぎて義兵を擧げ、越後を打平らぐべきと工夫を廻らし、宇佐美駿河守を謀らひ候に、駿河守も、猿王の器量只者に無きを見受け、一味仕り候。天文十六年猿王十八歳、元服して長尾平三景虎と名乘り、同四月九日三年忌を弔ひ終つて、義兵を擧げ、椽尾城に楯籠る。宇佐美駿河守、本條美作守馳加はり候。兄上杉六郎これを聞きて、妹聟長尾越前守政宗に七千餘附けて、椽尾の城へ取懸り候。景虎矢倉に上り寄手を遠見して、今宵寄手は引取るべき物色なり。其退口へ突きて出でん、と申され候。宇佐美駿河守申候は、長途を寄せ來り候敵、爭で空く引取るべく候哉。突出で候處如何、と異見する。景虎の白晝より寄手を見るに、軍兵計にて小荷駄無し。長陣の敵にてなしと思ふなり。突いて出よ、とて夜半に切つて出る。景虎の積の如く政景退口へ切つて懸り候間、政景勢總敗軍になり候。景虎勝に乘りて追討にして國中へ討つて出づる。宇佐美本條も押續いて打て出で、柿崎の下濱に陣を取る。是により兄上杉六郎八千にて、米山を越えて出向ひ候。景虎一戰を取組み

の椽に廻り遊び居られし。米山は大山にて、峠の薬師堂よりは頭城府内を目の下に見下す所なり。猿王は故郷府内の方を眺め、涙ぐみて、繼母の讒言にて、浪人する事無念なり。成人して本望を遂げば、此筋にて一戰すべし。殊に此山は府内を目の下に見おろし、能き陣場なり、と宣ふ。本庄美作守、金津新兵衛舌を振ひ、感涙を流し、其言を忘れ給ふな、と悦ぶこと限りなし。是則天文六年五月、猿王八歳の時なり。九年の間猿王淨安寺にて學問せられけれども、出家の心無し。天文十四年四月、長尾爲景、宇佐美駿河守定行兩族にて越中へ取り懸られ候。松倉城主唐人兵庫、山下左馬介籠り候を、宇佐美駿河守三千にて取詰め攻落し、山下左馬介其外二百餘人討果し、松倉城を乘取り、直に其城に罷りあり候。爲景は八千餘にて、放生津の城へ取り懸り候。此城には德大寺大納言實規卿其外公家衆九人籠られ候。其の子細は、其頃京都大亂にて諸公家衆、皆模寄々々に國々に落ちらるゝ。德大寺殿は越中國畠山尾張守尙慶の外孫故、其便にて越中へ御越し候。四月九日爲景は城を攻落し、德大寺實規を始め公家九人、上下七百餘討果し、城を乘取り候處へ、畠山留主居、推名、神保、遊佐、郡須等加州の一揆共を謀らひ後巻に出候加州は一向宗一揆にて候。爲つて降參仕ると申し、道を作り陷穽を構へ引入れ候。爲景加州へ押し候時、推名、神保、遊佐等加州へ揆起り合ひ候。爲景人數陷穽にかゝり大方討たれ、爲景も討

とて、無念に思召落涙なされ候を、佐々成政深く感じ、さすが家康の御子にて候。今日手に御逢なしとて、御せきなされ候て、落涙なされ候。我にも様々謀め申候由、家康公に似申候、と譽め申候時に、秀吉公仰せには、左様にてなし。秀康は我養子なれば、武勇の心入は皆々秀吉に似たる故なり、と仰せられしとなり。

○越後浪人大井田監物の事

越後浪人大井田監物は、後越前黄門秀康公に御使番にて奉公仕る。其仁の筆記に曰く、越後國は代々上杉家領し候處に、永正十年六月二十日、上杉顯定と家老長尾爲景と妻有庄長森原にて一戰候。顯定討死し、爲景則ち上杉庶流上條の上杉定實を婿にとり、我子長尾六郎を定實の養子分にして、顯定の跡に立て上杉を繼がする。爲景八男猿王　長尾景虎　後號謙信　其性尋常に替り、利根聰明にして大膽なる故、爲景氣に違ひ、出家にせん、とて下越後據原淨安寺へ遣す。後見金津新兵衛供して、下越後へ赴く。米山越なり。米山は上り四里下り四里なり。猿王纔に八歳なれば、歩侍の脊に負はれて山を上る。米山の峠に草菴堂あり、米山寺といふ。其の堂の椽に休みて破籠取り出し、猿王にも進らせ、供の侍共中食する。乳母夫の本條美作守も供なり。猿王幼ければ堂

○塙團右衞門持道具の事

塙團右衞門重之、蜂須賀阿波守至鎭の手へ夜討の時、木村喜左衞門、畑角太夫、牧野湖太、田屋右馬介四人鎗を合する。此内田屋右馬介持道具長刀之圖。團右衞門は、長岡監物御宿越前守に向つて、田屋が手前鎗を合するとは申上けられまじく、と云ふ族あり。如何、と問ふ。御宿が曰く、鎗も樫の柄、長刀も樫の柄なれば同じことなり。長刀は鎗より短ければ、猶強き働なり、と衆議して濟むなり。木村喜左衞門、落城の時討死、角太夫は稻葉美濃守正則へ抱へらる。牧野湖太は本多中務忠刻へ奉公、田屋右馬介は五郎左衞門と名を替へ、紀伊大納言賴宣卿へ召出され、五郎左衞門後は田屋半右衞門と云ふ由。

○筑前岩出城攻秀康御年十四歲にて武勇御心入の事

天正十五年四月一日筑前岩出城守居之熊谷備中を秀吉公一呎責に仰せ附けられ候。御先手蒲生氏鄕、前田利家なり。其二番備は、羽柴三河少將秀康、佐々陸奥守、水野忠重なり。山半分御上りの時、落城の間御上り候こと御無用、利家、氏鄕より申し來る。秀康御年十四歲なり。手に御逢ひ無之

りたるならば、其聞えも可レ然と仰せられ、まづ瀧川義太夫を召し、奥の口へ召され、勝頼の首を御見せ、是は汝が取りたる首か、と御尋、義太夫よく見て、是は拙者取り候首にては無之、と申す。則ち庭へ召され四十許の首を御見せ候へば、其内首一つ義太夫取出し、是は私の取り候首、とて撰り出す。則ち土屋惣藏が首なり。義太夫を御戻しなされ、伊藤伊右衞門を召して庭の首共を御見せ、此内に汝が取候首は有るか、と御尋、伊右衞門、則ち殘らず見て申上候は、此内には私取り候首は無之、と申上る。御座の間へ召し、勝頼の首を御見せ候へば、伊右衞門見て、私取り候は此首、と申す。城介殿、汝が取りたる證據は如何に、と御尋。首の切口に、私乘り候馬栗毛粕毛の毛血まじりとり附有レ之候。田野より鹽手に括り附、道にてすれ候に附如レ此、と申上る。御寛候、實も栗毛の馬の毛附きたり。其時城介殿御意には、汝は冥加に叶ひたり。勝頼の首を取りたり、と被レ仰となり。近年の書物どもを見るに、事々しく働きて討死し給ふ樣に書きたるもあれども、我其時は小平治とて瀧川方に居て、伊藤伊右衞門とは傍輩なれば、まのあたり見たるに、左樣にてなし。勝頼は鎧櫃に腰をかけ太刀にて防戰び給へども、倦疲れ給ひ何の働もなく、伊右衞門が討ち奉る、と板倉周防守重宗宅にて津田幸庵物語なり。

衣を見附、日外鎗を合せたる母衣雲にありとて、小屋前に人多く寄りて見たるとなり。

○伊藤伊右衛門武田勝頼を討ちしを津田幸庵物語の事

福島左衛門大夫正則の内伊藤伊右衛門は、武田勝頼を討奉りし士なり。伊右衛門が咄とて津田幸庵語られけるは、甲州滅亡の時勝頼御父子のしれず、瀧川左近一益先手にて國中を尋ぬる。田野の奥天目山の麓に、落人の男女五六十人隠れ有ノ之由にて、押寄せたるに、皆々兵粮に飢ゑ、働く事不自由なり。何の手も無く討取る。然る所へ瀧川旗本より早飛脚有ノ之、勝頼公信州高遠へ取籠め候間、早々その本より罷帰るべし、と告ぐる故、是まで来たる證據に首共を馬に附け帰るべし。府中へ帰りたれば、勝頼高遠へ籠りたるも風説にて沙汰なし。田野にて取りたる首共は、皆溝堀へ捨つる。然る所に地下の夫共、其溝の前にて皆頭巾を取り、頭を地に附け一禮して通る。皆々見て、己らは溝堀へ何とていんぎんにするや、と笑ふ。百姓共申候は、あの堀中に屋形勝頼公御父子の御首御座候。數十代の御主と存禮仕り候、とて泣く。皆々驚きて其首共を取上げ、勝頼公御首と云ふを、城介殿御座の間の床かんなかけに載せ置き、残の首共は庭に置き、城介殿宣ひけるは、勝頼の首を瀧川内にては誰か取りつらん。同くは一益が甥瀧川義太夫が取

勝が孫なり。何れも逸物の末孫故、と沙汰なり。

○大坂落城の時細川玄番頭鎗合 言上の事

大坂落城の時、細川玄番頭興元、鎗を合すると申上ぐる。後に家康公仰には、鎗合すると云ふ事、左様に節々ある物にあらず。此茶臼山の北に見えたる勝曼院の山に、佐久間不干、筒井順慶、荒木攝津守村重籠りて、大坂の門跡建如上人より攻め候時、本の鎗合せたると聞き及びたり。其外上方にての鎗は聞き及ぶに、其時勝曼院の鎗は、昔より言傳ふる杉なりの鎗と聞召したり、と仰せられ候。佐久間備前守罷り出で、上意の通に御座候。同姓不干手にて、其日は兩度鎗御座候。天正六年五月三日の合戰にて御座候。朝は茶臼山の西に見え候、難波の貝殻塚の合戰にて、不干が與力佐久間久右衛門、同葵之助、梶原彌三郎、水野源太郎、水岡小三郎六人鎗を合せ候。其晩勝曼院の山にて、不干が内志水亦市、江原彌介、浮見藤介、長瀬彌五右衛門四本鎗合せ申候。長瀬は只今小右衛門と申し、加賀に罷りあり候、と申上ぐる。家康公聞し召し、扨々利常は能兵を抱持ち候、と御意なり。長瀬小右衛門は黒母衣銀の牛の舌の出しにて、勝曼にて鎗を合する。後門跡降參し、大坂城衆寄手小屋見物に出づる。長瀬が小屋印に銀の牛の舌の黒母

劣りたるは無念なり、と仰せられける。

○津田長門入道道慶物語の事

津田長門入道道慶物語に、日根野織部が唐冠の甲の立物、鐘馗耳二尺五寸脇立なり。但し右の耳の立物は、半分より折掛けたるやうにする太刀打に構ふゆゑなり。

○島原落城の砌平塚勘兵衛比類なき働の事

島原落城の砌、本丸の塀下へ著く者なし。鐵炮稠しかりけるに、紀州浪人平塚勘兵衛重近只一人押して、塀際へ附き、尾藤金左衛門薄紅の大吹貫を挿して掛附け、平塚と共に塀下へ附き、面も振らず塀を乗るところを、内より鎗長刀にて散々に突く。其内尾藤が口に突込む。夫にて弱る所を、又眞中を鎗にて突抜く、終に討死。平塚勘兵衛も尾藤と同じく乗掛候を、鎗にて突落され、已に討死と見えけるを、細川隆印内、乃美庄右衛門掛合ひ、塀の内より平塚を突伏せ居る敵を突き倒し、平塚は助る。平塚又起上り、塀下へ附き其働比類なし。但し平塚勘兵衛重近は、秀吉公御いとこ平塚因幡守吉就が甥なり。乃美庄右衛門は、小早川隆景家老浦兵部大夫宗

十六日辰剋なり。朝鮮は寒國にて寒事不斜。長政は大綿帽子を著し、甲は郎等に持たせられしが、隆景の先手へ出づるとて、綿帽子を脱ぎ甲を取て著られしに、隱なき例の水牛の甲なり。水牛の角本を燻皮にて結び附けられたり。扨甲の緒をしめ先手へ出でられ候へば、隆景旗本數千の士卒共、長政先手へ御越候上は、今日の軍に勝ちたり、と總軍勢勇みたるとなり。長政の年を問へば、其時二十五歳なり。その齢にて如此人に慥に思れ候は、中々凡人にては有るまじきなり。長政常に宣ひしは、立物指物は、海老は子にして差したる許にては、働吃か馬に乘り立行く時に、脱けて落つるものなり。立物に穴をあけ受子にも穴をあけ、革にて結附くべし、となり。自分大水牛の立物も、ふすべ革にて結ひ附けられたるを、其時見たる人語りき。

○越前黄門秀康卿伏見御屋敷へ於國を召さるゝ事

伏見にて越前黄門秀康卿御屋敷へ於國といふ歌舞妓女を召して、歌舞妓踊せて御見物あり。水精の珠數を襟にかけ舞ひたるを御覽なされ、水精は見苦し、とて御具足の上に御かけ成され候珊瑚珠の珠數を下され候。於國が舞を御覽なされ、御落涙有之。御意には、天下に幾萬の女有れ共、一人の女と天下に評せられ候は此女なり。我は天下一人の男に成ること叶はず、あの女にさへ

元康六千は奇兵として、隆景の右の方三町ばかりに引退きて備へたり。其日の合戦火花を散し、粟屋、井上押立てられ候を、立花左近横鎗を入れ、大將李如松が旗本を突崩せしかば、隆景も正面より切懸けられ候に附、大明二十萬惣敗軍になり、首數三萬八千餘、隆景一組へ討取り候。隆景、立花手柄と申すも中々疎なり。此時立花左近は、甲附の首二つ直取の高名にて、鞍の鬪手に附け、太刀鐔本五六寸のつて鞘へ不入を帯び、己も馬も朱になりて、先手より靜々と參られけるに、粟屋四郎兵衛備の前を打過ぐとて、其備の組頭村上彈正、野島掃部を呼かけ、立花申けるは、今日は、立てられまじき所を推立られ候、とありけるを、大將粟屋四郎兵衛聞も敢ず、立てらるる事も立てられ返す事も返したり。我備は今日の合戦の花になりたる、と返答する。聞く者粟屋を譽めざるはなし。扨立花左近は、隆景の旗本へ參られけるに、立花自身の高名二つまで、鞍に附けられたるを見て、隆景取敢ず、立花見ごと候、と譽られ候へば、左近聞給ひ、毎事仕つる、との返答なり。よき自讃の言なり、と其場にて聞く人語られける。此時合戦未始らざる時分、黒田長政只一騎歩侍七八人にて、隆景旗本へ見廻られ候。隆景見て、長政は幸の所へ御越候。粟屋四郎兵衛、井上五郎兵衛を先手に申附候。物馴れぬ者共にて心元なく候。貴殿先手へ越され、毎事御指圖下され候へ、と申され候。長政喜悦の色見え、畏り候、とて先手へ越さる。頃は正月二

れ候。同月二十六日、大明二十萬騎夜の内に河を渡り、都表へ推詰め候。其夜の廻番は隆景、相備立花左近宗茂なり。家老十旺傳右衞門五百餘にて曉打廻口に出づるに、大明李如松が大軍と闇紛にはたと行會ひ、立花が勢駈散らして引取り候を、大明勢追駈けしかば、十衞傳右衞門返し合せ、五百餘散々に相闘ひ殘らず打死する。雜兵四五人走返りて、此旨告ぐる。立花左近宗茂、則ち隆景竝に毛利七郎兵衞元康、久留米秀包、高橋筑紫へ告知す。隆景則ち王城へ注進、備前中納言秀家卿三奉行、何れも追々に南大門口へ馳來る。夜はや明けるに、遙に見わたる大明李如松が爰去ること一里ばかり、備を段々に立てて、只今掛らん氣色なり。その勢淵江の潮の漲來るが如し。先手二里餘に廣がり、勢子並を立跡も先も皆旗にて、夥しき事中々なり。秀家卿三奉行に、大敵と野合の合戰如何なれば、都へ引籠り防ぎ然るべし、とありしを、立花左近眼をいからし、太刀に手を掛け大音上げ、斯樣の大軍に籠城して叶ふべからず。兎も角もあれ野合戰に極め然るべし、と申されける。依之合戰に極まり候。諸大將先陣を望まるゝに、隆景眼に角を立て、我先陣たること最前よりの約束なり。他の望有るべからず、とて隆景備を配られける。先陣粟屋四郎兵衞大將にて、村上彈正、野島掃部等三千なり。二の先は井上五郎兵衞大將にて、佐世石見守、吉見大藏大輔等三千なり。三番は隆景旗本一萬にて備へ、立花左近、久留米秀包、毛利

も、隆景は、我日本より渡海の初より、再び日本歸朝の心なし。本朝大半納り國家無事なれば、疊の上にて病死せんか、と是のみ心に懸りしに、幸に此陣出來、何より以て滿足なり。隆景年五十八、死しても惜からず、大明の三十萬に懸合ひ、切先より火花を散して合戰し、討死を遂けんこと老後の思出これに過ぎず。我假令討たれたりとも、日本の御弱にも成るべからず、大明三十萬を此所にて待受くべし、とて、少も動じ給はざりければ、大谷刑部少輔只一騎開城府へ來り、隆景に對面し、貴殿の御心底、古の名將勇士も此上過ぐべからず。但し貴殿二萬ばかりにて、三十萬の圍を受けて、徒に討死せられんこと本意なきなり。速に王城にかへり、惣軍を立備へ、御身惣軍の先手にて快く合戰し、死を善道に守り給はば、迚も死せん命忠義共に全からん。早く都へ引入り給はるべき旨諫めけるに、隆景心服し、左候はば、何時にても、先手は隆景一組申請け候間、他の望許容有るべからず、と刑部被請合候はば、王城へ引取り申べく候。大谷、其段は我ら請人に立ち候由申され候に附、白川に有りし黒田長政へ此旨申遣し、早々開城府へ引入れ申すべし、と告遣しければ、長政も久留米秀包も小西行長、大友義統同道にて、文祿二年正月十五日に、開城府迄引取り申され候に附、隆景、大谷、黒田、久留米、小西、大友同道にて川を渡りて王城へ引入候。隆景は右の所存故都へ入らず、南大門の外碧蹄館に陣取り居ら

も御座あるべく、と諫め参する。頼宣卿聞し召され、右衛門をはったと御睨み候ひて、我ら十三歳の時が又有るべきか、と御申す。家康公聞し召され、御涙を御浮べ御感悦に堪へず。常陸殿、その言が金言にて候との御稱美なされける、と石川桑入物語なり。

○高麗攻南大門合戦物語の事

高麗都南大門合戦、大明李如松三十萬騎にて來る。小早川隆景一組二萬との合戦なり。初め李如松は、吳惟忠、張世爵等十萬餘り、山海關を出で、鴨綠江を渡り朝鮮に入り、小西攝津守行長大將にて、大村新八、松浦刑部卿、法印宗對島守等二萬八千にて楯籠る。平壤城を攻破り、小西を追うて朝鮮の都指して推來り、朝鮮の人馳加りて三十萬騎なり。大友義統も峒山城に在りしが聞逃して落る。小早川隆景は開城府に在り。都より五里を阻てその間に大河あり。其時黑田長政、久留米秀包も白川と襄陽に在り。小西、大友も此城に止まる。隆景は開城府に蹈止り、大明勢三十萬を引受け、一戦して相果つべく蹈止り給ひけるを、惣大將備前中納言秀家卿、石田治部少輔三成、增田右衛門尉長盛、大谷刑部少輔吉隆より飛脚を以て、早々都へ引取らるべく候。大河間に阻たり難義仕ること候間、此表へ一所につぼみ、然るべく、と申越され候へど

引歸し引取り候處を、義春備を以て蕩ひ追討仕候。此時宇佐美民部勝行は、甲附の首を二つまで高名して、其身も手負ひて旗本へ來り、勘當赦免の爲め景勝へ目見を願ひけれども、父の仇の末と思はれ、目見を許されず。是は民部父駿河守定行景勝實父長尾政景をころせしゆゑなり。民部は、二つの首を持ち涙を流し罷有り候を、上杉家の平林内藏助、井上三郎兵衛、落合清右衛門、其場に有合せ、能く見て後に語り候。此時民部は、義春手に附出陣仕候由。

○紀伊大納言賴宣卿十三歳にて大坂攻御先手を望まるゝ事

紀伊大納言賴宣卿は文武の賢將にて、其行跡も凡人にあらず。大坂冬御陣に、二條の城にて大坂表御手鎗の御備定あり。賴宣卿十三歳になり給ふが進出給ひ、御先手を我等に仰附けられ下され候やうに、と御望みあり。家康公御感にて、城強くして先手攻めあぐみ候はば、其方仰附けらるべし、とて御機嫌なり。五月七日大坂落城の時、御旗本後備にて、尾張大納言義直卿と紀伊大納言も御著陣以前合戰終り、大坂落城なり。茶臼山にて家康公御前に賴宣卿御出有て、今日御先手にて無二之故手に合ひ不申、無念至極に候、と頻に御落涙なされ、松平右衛門大夫正久申候は、今日御手に御合ひなされず候とも、御急きなされまじく候。御一代には斯樣の事幾度

からす。就中武邊等の義は餘計の有り候が能なり。子細は織田信長未だ小身の節、佐々成政と前田利長と兩人にて敵一人を突倒し、成政、利長に向ひ、其方敵を追著き倒されたる義なれば、首上げられ候へ、となり。利長、我等は敵を突倒したるといふ迄にて、鎗合の義は御自分なれば、首を其方揚げられよ、と互に辭退仕り候處へ、柴田權六も馳著き、左樣に兩人辭退の首ならば、中にて我申受くべし、とて首を上げ、我等高名の證據の爲め兩人にも來り被申よ、とて、三人同道にて信長の前へ出て權六申候は、此兩人にて敵を突倒し、首を取れ取るまじきとて、吟味合候所へ參りかゝり、首を某取て參り候、と申候へば、信長公御聞なされ、三人共大に賞美致され候由なり。右三人共に武邊に餘計有る故なり、と仰せられ候なり。

○柴田因幡守退治上杉景勝出馬の事

天正十年十月柴田因幡守退治に、上杉景勝出馬にて候。景勝先手本條越前守、村上出雲守、新津加治等初合戰に出られ、方上橋といふ所迄敗軍仕り候。景勝旗本迄因幡守乘懸り大事に及ぶ所を、上杉義春後入は旗本前備にて罷あり候。景勝の紺地日の丸の旗をとり三十間程先へ押出し、義春手廻の士共下馬致させ、鎗を取りて膝の上に置き、芝居に折敷備を立候に附、因幡守

夜置くに必ず關東方の三つの田螺、内方の三つの田螺を追込みたるとなり。勝負の吉凶を兆ふこと是より善きは無し、となり。武備志にも此兆を出したり。考ふべし。

○老功の士相言葉物語の事

老功の士の曰く、古法に相言葉を夜々に換へると云ふ事、大なる僞なりと心得べし。末々迄の事故中々毎夜換難し。大坂陣の時、城内相詞は山關、東方は旅と唱へたるに、一陣濟むまで、右の相言一つ宛にて濟みたる事なり。是證據なり。大坂落城の時城中より女中大勢落ちたるに、旅とさへ云へば、寄手は助くると心得て、銘々旅々と唱へて出でたるとなり。

○家康公駿府にて相討御吟味の事

家康公駿府に於て御伽衆の中より、大坂御陣以後、去る五月七日若江村に於て、井伊掃部頭家來三人にて敵一人を討取り、三人相討と有之に附、掃部頭委細に吟味相遂げ候へば、相討に極り、今一人の申口相違に附、掃部頭不思議被致仕置候へ、と申附け候由申上げられ候へば、其義には兎角の仰もなく、何も聞えし。惣じて物ごとに餘計と言ふこと無く、切つめたる如くなるは宜し

度勝利有りとて、甲州より金堀を呼び已に堀らせんとす。城内に此由を聞きて、甲州より金堀来つて此城を堀砕く、とて躁きけるなり。其内に和談に成りけり。何か五年や十年の内にて、七十間など有る堀を掘難からん。是にて敵の氣を奪ふ道理なり。遠州高天神の城に小原與八郎と申す人籠城しける故、早速金堀にて矢倉を堀落したる故城を明渡す。敵城へ堀はめの矢倉の下まで掘附くるなり。是にて崩るゝ。又崩れざる時は、鐵炮の藥を百貫目にても横切火縄にて附くるなり。我籠城へ敵掘らば、其時は必ず其堀方には伏かまり番あるなり。また掘り來る方へ、此方よりも或は三筋にても四筋にても堀懸るなり。是にて大方通るなれば、金堀妙に覺るなり。又はやき物をもて候ひ來る方、ちん〳〵と云ふなり。兩方より堀り會ふ時互に分るなり。是時味方歸り、此方より多くこゑを流すなり。

○野間佐馬之進田螺を以て勝負占物語の事

野間左馬之進物語に、田螺を折敷の片隅に三つ、又片隅に三つ寄せて、兩方へ分けて一夜置く時、其合戰勝負の負の方を追込み、勝の方は進み出づる事なり。大坂陣の城中秀賴、木村、大野と稱して盆の一方に三つ、又一方に關東方家康公、井伊、藤堂と稱して三つ田螺を置きて、一

語致し候は、士は討死を遂け、首に成りたる時の義を心に掛けたるが能きなり。去に依つて月代抔の後下なるは、侭言づらになり見苦しき間、若き衆中必ず後高に剃りたまへ。明日は必ず一戰と知れたる前日は、首を奇麗に致す心得第一の由語られし。

○家康公合戰心掛御示の事

家康公或時上意に、今時人の頭をもする者共、軍法立をして床机に腰を懸け、采配を以つて人數を差使ひ、手をも汚さず口の先の下知許にて、軍に勝たるゝものと心得るは、大きなる違なり。一手の大將たる者、味方諸人の盆窪ばかりを見て居て、合戰などに勝たるゝ事にてはなし、と被仰候となり。

○小幡景憲物語の事

小幡景憲の物語に、大坂陣の時堀殊の外深くして攻難き時、本多佐渡守、とかく金堀を入れて堀抜可然、と家康公へ申上げられければ、尤なり、然るべし、とて仰附けられける。土佐或は伯耆佐渡より呼上せよ、と評議の時、佐渡守曰く、右の國の者不功たらん。たゞ甲州の信玄金堀度

常山紀談　拾遺

巻之一

○長篠合戦に武田勝頼人數を出す事

長篠合戦に、武田勝頼五月二十一日に人數を出す。信長見給ひ、敵も多勢なり、三萬可有と宣ふ。家康公仰に、此度の軍味方勝なり。敵丸く打圍むときは六ケ敷、散て人數を多勢に見するは、勢を頼にする間大方勝なり、と御意なり。酒井左衛門尉承つて、尤なる義、と奉感けり。

○家康公甲の心得御示の事

家康公被仰候は、小身の武士著料の具足を盛させ候時、胴籠手具外は麁相に致させ候とも、冑をば念を入るゝ心得がよきぞ。子細は討死を遂げたる時、冑は首と一所に敵の手に渡る物なり。然る時は死後の爲にては無きか、との仰有り候となり。右の上意に附き、上田主水入道宗古物

生之有紀談蓋爲之也。先生學綜古今。抱文武之大略。在治則皐陶伊傅。在亂則管樂張葛。何所不可爲乎哉。雖然時命雖遭。屢起屢蹶。終不能用牛刀於一時。抑又堂々之陣。正々之旗。風雨雲雷。交發而竝至。龍蛇虎豹。變幻而出沒者。人不及見之也。則我獨憾。先生之志大。而不能敢用矣耳。一生精力。半在茲書。先生嘗云。

明和庚寅冬

赤穗　赤松勵謹跋

常山紀談跋

湯常山先生。錄勝國以來事蹟。爲紀談。若干卷。蓋先生之意。謂文武之道一已。出將入相。古之君子皆爾。岐而二之者。後世之爲也。夾谷之會。仲尼奪萊黃之膽於立談之間。魯郊之戰。冉求折齊人之衝於用矛之末。其他禹湯文武之誓。周禮大司馬之所職。可以徵也。夫一治一亂。天之數也。不通文武者。非全材也。白面書生。不知軍旅。拱手讓諸武人。俗士寔可憫也。兵家者流。生長太平之世。目不見兵革。耳不聞金鼓。朔々然徒欲以空言取信於一世。亦可憫也。故當今欲講軍旅以備不虞者。無若熟知戰國事情。熟知戰國事情。而後甲兵可試也。軍旅可明也。先

ものなるに、日本の人々は大事の事に學ぶといふ事なく、傳授稽古といふ事も無く、自己の料簡にて事を濟しぬる事あり。各達は存候にや、と問ふ。皆々、如何、と問ひければ、されば國家の政にて候。萬民の命に懸り、一言にても國の安危に候ふ至極の大事故、聖人の教へ置かれたる萬世の鏡有りと雖も、今の大名君臣共之に心附かず。只自己の思慮にて、思ふ儘に政を爲すは危き事の至極なり、と語りけり。直方が論まことに格言といふべし。予筆を此處にとゞむるは意なきにあらず。後の此書を讀む人之を察せられよとなり。

ば盗む事同じ。斯く盗の世に盛に成りなん時に至りては、如何なる政事をもて之を停め給はんや。是等の盗は貧より起る事にて候。夫よりも又民に許して利を爭はしめ、其利上に歸するやうにし給はんには、天下其風に靡き從ひて、良き人々共に利を爭ひ、各其欲する所を得んと思はん。是等は盗せぬ盗人にて、其禍盗するより增りてこそ候へ。天下を保たせ給へば天下の寶悉く御寶なり。且上の費をだに省かせ候ひなんには、一年の中に積む所の御寶幾千萬兩の事にてか候べき。夫に僅千兩の金を增さんとして盗賊起り、世の風みだりに成り候はん事、身の肉を切りて飢を救ふに、腹に滿つる時身終ると言へるに同じかるべし。大略物の價の貴くなり行く事は、國郡に運上の多きが致す處なり。某既に年老ぬ。頓て死し申すべし。相構へて此後も斯る事申す者ありとも、人々能く心得給へ、と言ひければ、人々感じ合へりけるとなり。

○佐藤直方直言の事

佐藤五郎左衛門直方は、學問にて世に聞えけり。酒井忠清賓客の遇に禮せられて終りけり。井伊掃部頭の許に招かれて、未だ掃部頭の前に出でざる中、長臣と物語せし時、直方が云く、大事は論なく候。聊の業も傳授習し申す事の候て、師に就きて學び稽古し、思慮をも盡して後こそ得る

るゝに、播磨守、日本の唐より優りたる物は紙にて候。中にも鼻帋と申す物は、貴賤一同に一日も無くて叶はぬ物にて候。其價の賤しければこそ世の助とはなり候へ。望み請ふ者、今まで商人の奉りしより千兩の金を增しなん事、此千兩は何處より出すべき。此紙を商ふに價を增して商ふを、又そを買ひて商ふ人幾何も候はんに、是等も同じく利を得て商はんとせんには、此處に加はり、彼處に增して、後には價甚貴くなりなん。凡一帖の紙價一二錢を增したらんには、富める人の憂とするには足らず。貧賤の人一日に得る所の利誠に少し。僅に一二錢を累ねて妻子をも養ふ。斯くあさましき者とても、今日迄は鼻帋やうの物を常に用ひ來れり。價忽に增したればとて、更に何物を以てか此に換ふべき。然らば是等も又己々が商ふ物にてもあれ、其價を增して、其得る處の利を以て鼻帋を買ふより外の事候はじ。凡一物の價增す時は、萬物の價同じく貴くなる事、皆定れる事なり。價貴くなるに至りて、求めんとしても得ざれば、或は飢ゑ或は寒ゆるにも及ぶべし。飢寒迫れば必ず死す。死すれども守る處を失ひ候はぬは、士より上つ方の事にこそ候へ。下樣の人は飢ゑて死し寒えて死す、盜しても死す。死は一定なり。同じく死する命、如何にもして一日も世に在らまほしく思ふは、賤しきが習なり。さてこそ盜賊は起る事にてこそ候へ。これは只農と商との事のやうに候へども、士の召仕ふ奴婢等も、物の價貴くして求得ね

の士にも爭でか劣らん、とて息女に附けられけるとぞ。

此物語、讃州に行く人ありて問聞きしに、更に虛ならず。尼崎が居たりし所は、丸龜の風袋町といひし處とぞ。

○伊丹康勝格言の事

伊丹播磨守康勝は、寛永年中御勘定頭三人を置かれし時、其第一に撰ばれ、農を勤め商を通じ、民と俱に利を同じくしける聲高し。其比商人の運上金を公儀に獻け奉り、甲斐國より出づる鼻帋を一人して商ふ者有りけり。然るに又富める商人有りて内々告けて、今迄の人の奉る處の金に一千兩增して、運上を奉るべし。某一人に帋商ふ事を許し給ふべき由を申す。此事尤然るべしと議定有りしに、播磨守一人、其心を得ず、とて聞入れず。執政の大臣達にも此由を告けてぞ事止ます。三年の後執政の人々、播磨守に云々の事請ふ者あり。同職の人許すべしと言へ共、獨用ひられぬと聞くは誠にや。天下の富を以て見る時は千兩の金は少きなりと言へ共、是を以て國用を足すに資け無しとは言ふべからず。如何に、とありしに、播磨守承り、今より姿賤しく起らぬ道だに候ひなんには、如何にも計し申すべし、と答ふ。人々、如何なる子細ぞ、と問は

有りつる次第を言ひて、幸右衞門に子有りつるが、女なりと覺えたれば懼るゝ事も無し、とて肌を脫げば、驚て母の投附けたりしと聞きし脇差の痕も見えつ。りやは只今妻にて討ちなんと立上らんとせしが、もし討損ひたらば如何すべきと思ひ返して、何となく其坐を立ち、其明の日永井の許に行きて斯々と語りければ、源介大に悅びて、則ちりやを打連れて京極家の村瀨が方に行き告知せたりければ、則ち備中守に申して公に訴へたり。坂部の許に公より糺さるゝに、彌紛るゝ事無かりければ、文内を京極家に渡し給はりぬ。まづ文内をば獄に入置き、鳥越の下屋敷に虎落を結ひ、日を定め文内を獄より出して、勝負の場に出されたり。村瀨、りやを連來りぬ。肌には鎖の著込を著、白縮緬の鉢巻して、一尺餘の小脇指に二尺三寸の刀差し、虎落の內に入る。村瀨、りやに、用意せよ、といふ。其時りや、如何に文內、汝が手に懸けたりし尼崎幸右衞門が女なり。今更出合ひたる事天道の冥加なり、と詞をかくれば、文內、汝に語り落されて、古き事を明したるは無念なれども、此刀にて父も子も手に懸けん、とて三尺許の刀を抽いて切合ひけるが、横に拂ふ刀に肋を切られ、二の太刀面に當りひるむ處を、りや蹈込んで乳の下まで切下げ、押伏せて靜に首を切り、二十餘年の間志したる仇只今討つて、父母に手向候、と檢使に言ひたりしを、感ぜざる者なし。備中守も悅びて、俸米輕き身の娘なれども、孝行なけ、さばかり

ば、京極家の侍村瀬藤馬といへるが、江戸に赴くに頼みて差添へ遣す。りやは江戸に赴き、番町の永井源介と言へる御旗本の許に奉公に出づる。源介は剣術の弟子數多日毎に來る。りやが勤むる有樣、殊外心を附けて奉公するに、誠に珍しく思ひ、如何なる者の子にや、と尋ねらるゝに、りや詳に事の子細を語り、父の仇を報い申さん志に候由涙を流し答へければ、源介つく〴〵と聞きて、女なりともなどか父の仇を討たざるべき。まづ我剣術の弟子となれ、とて教へ試むるに、才氣有りて思ひ入つたる志なれば、剣術も程無く進みけり。夫婦彌勞り愛せり。二年に及びて主人いへるは、爰にのみ居たらんより、主人を數多取換へて仇を尋ねよかし、と樣々に心を附けたりしかば、夫より此處彼處奉公せしに、既に十二年を過ぎて主人七十人に及べり。其後本庄なる坂部安兵衛と言ひし御旗本の家に奉公せしに、小泉文内とて五十餘なる男の有りけるが、平生酒飲にて、壯年の事共何くれと語り出し大言せしが、若氣にて人の女房に心を懸けたりし事により、其夫を切つて棄てたりしが、昨日の樣に思へども早く月日も過行きけるよ、と物語せしを、りや聞きて、如何樣にも似たる事も有るよと思ひ、たしかに閉居けん物をと心の中に思ひて、夫は嘘なるべし、といへば、爭でか僞を言ふべき。今迄人に言ひつる事は無けれども、年月は過ぎつ、國は隔りぬ。委き事いざ語るべし。我は元讃州丸龜にて京極家の者なり、とて

無く辱しめけるが、又或夜来りしに肯はずして有りし處に、幸右衛門外より歸りて此由を見、傳内無禮者、と怒りしかば、叶はじと思ひ刀を抜きて、幸右衛門を一刀切つて逃ぐる。女房は小女を抱き居しが、其處に棄てたる夫の脇差を抜いて、傳内が逃ぐるを追駈けしかども、逃延びしかば脇差を投附けたりしに、傳内が右の肩に少し疵附きぬ。冬の末夜にて雪は降りぬ、終に行方を知らず。女房立歸り見れば、幸右衛門深手にて死したりしかば、嘆き悲しむ事大方ならず。傳内は重罪の者とて尋ねられしかども行方を知らず。幸右衛門妻は、妹の夫なる關根元右衛門といふ者の方に月日を送れり。只朝夕に夫の最後の有樣口惜く思ひつゝ、歎きの餘に病附き、翌年二月に死しけり。三歳になりける女は叔母の養育にて十三歳になりて、名をりやといふ。元右衛門夫婦を實の父母なりと思ひ居けるに、或時細やかに父母の事ども語り聞かせ、汝が母は我爲に姉なるが、せめて此子が男なりせば、仇を討つ事も有るべきに口惜やと、明暮嘆きて空しく成りぬ、と語りけるに、りや大に驚き、今まで夢にも知らざる事どもなり。御勞により斯樣に人と成りぬる事の忝き由言ひて、潜々と泣くより外の事なし。さて十六歳に成りける時兩人に向ひ、江戸に參りて奉公仕らん。父母の爲に諸國の觀音にも參詣せばやと存ずるなり。萬に一つも仇討つべき儀をも神佛に祈らばや、といふ。兩人色々止むれども中々止るべきに有らざれ

て北なる野に懸りて、食物を認めて、行く〳〵小川を渡りしかば、口噤ぎて太神宮に向ひて、幼少より思ひ入つたる仇を撃ちたる事の忝さよ。廣島を出でしより存命ふべしとは努々存も寄らざるに、爰まで遁れ出たるは神の護、と伏拜み、伊賀の上野に出で、夫より山城の笠置の道を問ひ、伏見に赴き京に至り、諸國の一族の許に龜山にて仇打つたる由書記し言送り、岐曾路より江戸に赴き、五月二十六日、町奉行保田越前守の許に行きて仇討ちたる由を申せば、尋問はるゝ事ども有りて越前守自出て、兄弟に始終詳に聞き勞らるゝ事大方ならず。養膳給はりて夫より松前伊豆守の許に至りしに、過ぎにし年逢ひたりし人々出て悦び合へり。青山の藝州の屋敷に行きて石井清大夫が許にあり。青山下野守の嫡子筑後守此由を聞き、卽ち使を以て兄弟を引取られけり。其後下野守の領地其比濱松なりしかば遠州に至り、兄弟共に寵せられ、源藏後重き職を命ぜられけり。

○尼崎幸右衞門が女親の仇を撃ちし事

讃州丸龜、京極備中守高豐の弓足輕尼崎幸右衞門といふ者あり。同じ弓足輕岩淵傳内といへる者、幸右衞門が妻に心をかけ、幸右衞門が在らざる時樣々に言ひたりしに、中々受引く氣色も

かけて切りたりしかば、立も上らず死したりけり。源藏乘懸り刺貫きて止を刺し、從者をば追拂ひつ。兄弟は、初赤堀が父を打ちたりしより仇を報ゆる次第記置きたるを、常に各一通帶の中へ入れたりしを取出し、赤堀が袴に挟みけり。所は長臣板倉杢右衞門が宅の邊なり。我も我もと馳集るべし。年頃日頃思ひ暮せし赤堀をば討止めたり、今は世に心に懸る事なし。刀の目釘の續かん程切合ひて屍の山をなし、年久しく赤堀を警固せられし恨を晴さん　と兄弟言交し、追ひくる人を待てども更に來る人なし。半藏其時、笑にて切死せんより城外に出て追手を待ち死狂せん。さらば京都にも聞え旅人の往來に聞えて、安藝の一族達にも兄弟本意を遂けし事を知るべきなれば、城門を謀りて遁れん、と言ふより早く半藏先に立ち駈出るを、源藏後より詞をかけ、汝が用の事急ぐと主人の言はれしぞ。疾く急がれよ、といひ〳〵打連て城門を出づれば、番人も聞咎めず。黑門を遁れ出でて京口に至り、龜山の西のんこの茶屋に至りけれ共、追來る人無ければ、さては遁れ得ん事も難からじ。されども馬に乘りて追來らんに、兄弟走りて息切れたらんには、思ふ程切合はれじ、と靜に關川を渉り、山に登りて見渡せども追來る人無ければ、龜山の西南一里半許行きて小家に立寄り、草鞋を買求め、津の城に行く者なり、とて道を問ひ、童を案内者にして、十町餘りも過ぎて椋本の松原見えしかば、童を返し、又道を引違へ

右衛門といふ者に奉公しければ、夏目、此人は勝れたる者なり、と詞を添へたり。半藏も下村に仕ふる事並々ならねば、主人勞る事大方ならず。其父に緣壻されしかば、半藏を若黨にして、刀に衣服を添へて與へたり。兄弟今は龜山に在りて時を待つ處に、赤堀が當番の歸路を討つべしと定めて、元祿十四年五月にも成りぬ。八日は赤堀が番なれば、午の刻に代りて歸る處を討たんとせしに、疾く歸りて志を空しくす。さらば其明くる朝の歸路を、とて各用意したり。源藏は殊に下部の爲べき事多く、更に暇無し。宵に少の間暇を乞得て町に出で、夫より龜山の八幡宮は道の邊なれば、立寄りて心靜に著込を著、神前に向ひ、今日必ず父の仇討たせ給へ、と伏拜み、宮を出づれば夜は明けたりしかば二の丸に行き、空眠のみして半藏を待居たり。半藏は出んとせし時主人の用有りて遲く成りたる處に、友達の來りければ、著込著る間も無く、主人より貰ひたる刀は懸け置き、隱し置きたる刀を取り、飛出でて二の丸に行けば、兄は半藏を遲しと待居たるに、來りければ心の内に勇みけり。斯て赤堀其日は唯一人廣間より出でて歸りしかば、兄弟打連れて二の丸の外なる石坂門を打過ぎける時、赤堀が後より駈抜けて前に立塞り、石井宇右衛門が子源藏、半藏なり、と詞をかけ、源藏拔討に赤堀が眉間を切る。赤堀我刀の柄にて受止めたれ共、二の太刀透さず切附けたる處に、半藏駈來り赤堀が頭に深々と切附け、倒るゝ處を疊み

出し候旨を申す。仇討たんと志し候は年久しく成りぬ。如何に今迄は申出でざるや、と問はるゝに、源藏聞きて、兄弟とも幼少にて敵の有家を存ぜず。近頃承り出したる事の候て申出でたるにて候。又承り出さざる前に申出んには、外へ泄聞えて仇の彌匿れ候ひなん事を恐れての事に候、といへば、尤なり、とて帳に記して、さて攝津守聞屆けられぬ。江戸御城の下馬の下にても見附けたらば討止めよ、と許されしかば、辱き由一禮して、又松前伊豆守の許に至りてければ、攝津守より言遣られし故帳に記して、疾く首尾よく仇討たれ候へ、と色代す。其より源藏は龜山に歸り奉公せんと便りを求めけれども、假令金銀を惜まず賄賂すとも、他國より來る人の奉公すべき請に立つべき人は思ひも寄らず。況や一金の貯へなければ、源藏も如何とも爲べきやうなし。元祿十三年源藏又江戸に赴きける處に、周防守の許に夏目八兵衞といふ者あり、元上總の人なり、下部を召置かんとせしかば、半藏便有りて夏目に告げて、駿河の者にて候が、伊勢の大神宮に參りたき志あり。給金は給はらでも奉公せん、と謀りければ、夏目、さらば、とて源藏を下部にしたりけり。半藏此時は下村一學といふ者に奉公し、兄弟共に龜山に赴く。是より兄弟日夜に隱れ忍びて心を合せ仇を伺ひけるが、其後に石黑仁右衞門が下部に、至つて實儀なる者あり。源藏が心眞實なるを見て甚だ心安かりしかば、請人を賴みて事よくなりぬ。斯て鈴木柴

ば廣島に行きぬ。下部の身として、年久しく命を塵芥より輕くして附纏ひたる志を勞りけるが、終に病重くて、元祿十年廣島にて死しけるとぞ。

源藏江戸に赴きて、半藏が手段に心を合せ又上方に歸り、兄弟往還誠に繼るが如し。或時は僅の商人となり、又或は近江の茶賣となり、或は伊賀の山家の者と僞り、詞使身の振舞、夫々に似習はんと心掛けたりけり。斯て元祿九年、半藏板倉の士平井才右衞門が許に下部となりて奉公する便を得て、龜山に平井歸りしかば、半藏も供して龜山に入る事を得たり。源藏は上方に赴き伊勢に行通ひて、人目を忍び半藏に逢ひて、仇の有樣を傳へ聞く。平井病みて死す。平井と赤堀と親み有れば、其弔に來る道にて討たんと計りしに、如何にか有りけん、赤堀來らで其手段も空しく成りぬ。其明の春半藏に暇を遣りしかば、又龜山の辻四郎兵衞が許に奉公す。辻江戸に赴く。半藏、江戸に供せんは志にあらず、と言へ共、龜山に居らんには所の人請人に頼むべき人無ければ、辻が供して又江戸に赴く。源藏目を病みて久しく療養に日を過せしうちに、半藏江戸より又龜山に歸り、忍びて出逢ひて仇を窺へ共便を得ず。半藏又江戸に赴きしかば、源藏も又江戸に行きて、町奉行川口攝津守の許に參りて仇討つべき願の書を出す。是元祿十一年十一月十六日なり。半藏は何とて來らざるや、と問はるゝに、弟は所々志し候所を立巡り候中に、煩ひ

隠岐守の屋敷の下部に奉公せんとすれども、此も屋敷の法厳にて力及ばず。又龜山に行き、又常州、上總、下總までも其便を求めて奔走す。其艱難誠にいふに詞も無かるべし。兎角して廣島を出でて七年過しぬ。始は甚だ行路に行悩みけるが、天の護にや有りけん、程経て後は寒暑をも能堪へ、雨露に立濡れ風氣に冒さるれども、藥をも服せず、其身愈健なり。或は野山に打伏し或は飢渇に及べども、志したる一事は膽を大にして尠ともひるまず。半藏は、今暫し成長して、と一族押止むるをも顧みず。元祿元年廣島を出でて兄と一所になり、龜山に入らん謀をなす。斯て板倉隠岐守辛去有りてければ、江戸の屋敷より取入らん手立せん、とて半藏江戸に赴き、日傭となりて屋敷に時々行きけれども、其便を得ず。

従者孫助は年老病重かりしかば、藝州に行け、と言へ共、何の面目有りてか仇を討得ずして廣島に歸るべき、といふ。源藏、汝辛苦に病附きたり。未だ敵討つべき時の至らぬにや、斯迄心を盡せ共、其甲斐無きこそ口惜けれ。されども親族達の見つぎ給はるも一日の飯料米一升ぞかし。僧にすれば僅に一日四分にや當るべき。日々馳廻り、口に食し肌を蔽はんとするに足らざるは言ふにや及ぶ、草履の價も、其中よりこそ出せ。又手よりを求むるにも費無きにあらず。斯る艱難の有様も細やかに安藝の一族に語り聞かせよ、とかき口説き語りけれ

ちて黄泉の怨を散ぜよ、と日夜に語り聞かせしかば、二人遊び戯るゝに心無く、只管に仇を討つべき志一筋なり。従者孫助は石井家の恩を請けし身なれば、赤堀龜山に在りと聞きて、様々に身を窶し魚を賣り、或は鏡磨となりて龜山に行きけれども、宿とるべきやう無く城内に入り難ければ、時々隙際に佇みけるを人怪み、赤堀が用心彌嚴なり。天和二年源藏龜山の有様を傳へ聞き、我既に十五に及べり。龜山に行きて父の仇を報ゆべし。徒に遠方に有りて月日を過さん事の口惜き、とて一族様々に押止むれども聞入れず。忍びて廣島を出づる時思ふやう、龜山の士如何ばかりか有らん。殿の仰にて赤堀に心を合すべし。天運強く父の仇は討ちたりとも、爭でか遁れ得ん。萬死の中に一生も無き身なれば、幼少より育はれし伯母は母の恩よりも深し。人に知らせずして最後の盃をせばや、とて物語の序に、近比身も壯になり、酒も嗜みて候へども、思ひ立つ志のある身は少しも飲み候事もなし。今日幸に外より來れる酒少し賜はらんや、といへば盃を出す。押戴きて覺えず涙の落ちけるを押ふる袂に祕して、遺書をば婢女に授け置き、舟に乘りて備前岡山に至り、田上某が許に暫居て、天和三年大坂に赴く。半藏は十歳なりしかば廣島にありけり。斯て源藏夫より旅人の體をして龜山に行き、又京に歸りて、或は關坂の下に赴きて、二年が間龜山に入るべき謀をたくみけれども、中々思ひも寄らざりしかば江戸に赴き、

堀飛懸りて一太刀斬つたり。犬飼聞附けて十文字の鎗を取り赤堀に突いて懸る。赤堀側なる塀に寄添ひて刀を提げ、後の塀を破らんとするを、犬飼見て鎗を取直し、後に廻らんとせし透間に飛出でて犬飼が眉間を切る。犬飼年老いたれば重手にて倒れしかば、赤堀を討漏せり。一族相集り松明を燈し、追駈くれども行方を知らず。犬飼は、赤堀が大坂にて宇右衛門を闇打にしける時、十文字の鎗にて突殺せしかば、其鎗にて突殺さんと思ひけれども、所狭くて物に障へられ討漏せり、と悔みけるとぞ。従者孫助其明る日歸りて此を聞き、歯噛して自害せんと言ひしを、様様に言ひ宥めけり。彦七も此由を聞き、彌〻怒り悶えしが、伊豫の親類の方に行くとて、海上にて風に遭ひ溺死しけり。赤堀は夫より尾張に行き、伊勢の龜山、板倉隠岐守の士青木安右衛門は親類なれば、忍びて行きたりしに、頓て板倉に告げて祿百五十石與へて、赤堀を狙ふ者有るべしと其用心甚だ嚴なり。他國より來る者は一夜の宿をも禁制し、見知らざる者をば城門の内に入れず。赤堀名を改めて水之助と稱す。宇右衛門が三男源藏、友時四男半藏吉政とて、兩人皆幼少にて安藝の松平安藝守の士田中左近右衛門、石井九大夫迎へとり、丹羽三大夫が許にて養育す。三大夫が妻は石井家より嫁せし故なり。我男の身ならば赤堀を搜し出し首を刎ね、此鬱胸を晴すべきに、女の身年老て志を遂げざる事言ふべき詞なし。二人恙なく人と成りて、孰く父の仇を討

非が嫡子三之丞は番にて有合はず。次男彦七郎は臥居たるが、出でんとすれども部屋の戸を源五右衛門掛け置きたれば、踏破りて出でけれ共源五右衛門行方知らずなりぬ。三之丞暇を申して彦七と共に青山の家を出で、源五右衛門が行方を尋ぬれども、更に何方に有りとも聞えざりしかば、源五右衛門が父遊閑も同意にてやあらん。此者を討たば源五右衛門隠れ居らじ、とて同年の冬江州大津にて遊閑を切殺し、夫より京五條の橋、伏見の京橋、大津の町に札を建て、重恩の人を殺し逃走りたるは士の法に非ざる故、大津にて父遊閑を殺せり。汝が爲にも仇なれば逃廻らん事を止よ、首を刎ぬべし。赤堀源五右衛門へ、とて石井兄弟が姓名を記しけり。されども源五右衛門出會はねば、所々を尋ね廻れども見出さず。美濃室原村の犬飼瀬兵衛の妻は、三之丞彦七が叔母なり。是を便にして爰に有りしに、彦七は犬飼が一族に睦しからず、遂に我一人仇を討たんとて室原村を出でにけり。延寶八年の冬瀬兵衛が妻死して、其翌年正月三之丞、從者孫助を安藝へ使に遣りて、唯一人犬飼が家に有りて湯浴しける處に、源五右衛門忍び來り、其戸の側に隠れ居て一刀に三之丞に深手を負せけり。頃は天和元年正月二十八日の夜の事にて、暗さは暗し、二の太刀に三之丞が刀持ちたる右の腕を打落す。三之丞伏しながら脇差を抜いて、左の手にて赤堀が股を突き其處にて死しけり。庫敗に犬飼が甥の茂七といふ者來り居たるに、赤

常山紀談　巻之二十五

○石井兄弟報讐の事

青山因幡守宗俊の士に、石井宇右衛門政春といふ者あり。因幡守大坂御城代の時宇右衛門も従へり。赤堀遊閑といふ醫ありて、其従子源五右衛門を養子にしたるが、石井に縁有りて頼みたりしかば、心得たり、とて天満の傍なる寺に置きて、常に宇右衛門が許に来り、親しくしたりしに、年経て赤堀鎗を弟子に教へて彼方此方せしに、源五右衛門が鎗未だ精練ならず。人に教へんこと覺束なし、と石井言ひけるを、赤堀用ひざる止ならず、石井に立合はれよ、といふ。石井、汝が爲にこそいへ。老いたる身の立合はんも無益よ、と言へ共、赤堀怒りて止らざれば、いざ、とて立合ひけるに、手もなく石井勝ちたりしかば、赤堀口惜き事に思ひ、延寶元年十一月十八日の夜宇右衛門が出でたる隙に忍びて来り、匿れ居て掛けたる鎗を盗み出し、宇右衛門が歸るを待ちて戸の内に入らんとせしを突通す。刀を抽いて鎗をたくりけれども、十文字の横手にかゝり深手にて倒れ死す。従者、何者ぞ、といふを、一太刀斬つて源五右衛門は逃げ去りけり。石

も懸けず。足をも動さず。卒爾なり過すな、と言ひて間近くなる時、無分別者かな、といひひ刀を抽くや否や手の下に斬り倒し、皆靜りて能聞け。敵せし故斬りたるぞ。敵せずば何とて切らんや、といふを、又一人斬つて懸れば、愚なる者共哉、死狂ひをするか、とて態と後退りにしざる。蹈込む處を飛違へ一太刀に斬伏せたり。皆氣を寛め一度に斬懸らせじが爲に斯して二人斬倒しつ。殘る三人ばかりは屑かはと思ひて、又一人斬伏せ、一人は手負せ一人は蹴倒し、手負せたる者と蹴倒したる者とは、其帶を以て縛り馬に打乘せ、先に立てて歸りたり。これ程の者なれば筑前一國の士多く林田が劍術の門人なり。馬爪源五右衞門は、鐵炮百發百中の妙を究めたる者にて、武藝を好みしかども、林田が劍術を學ばず。其故を問へども打笑ひて答へず。林田後咎有りて死罪に行はれけり。馬爪親しき友に、林田は姦邪なり。何事を仕出さんも計難しと思ひたりき。劍術を學ばん事は我も好み望む處なりと雖も、已に師弟となりて後難に臨みて、坐ながら見ては有るべからず。其姦邪に黨せば士の道に背くべし。衆てより交を結ばざるに如じと思ひたりしが、愚者も千慮の一得なり、とぞ語りける。

事も無く候、とて騒ぐ色もなし。長門守女中を殘らず並べて、彼中老の下女の事如何思ふにや、と尋ねらるゝに、忠義といひけなげなる事と言ひ、驚き入りたる由口を揃へて言ひければ、さらば如何せん、各存ずる旨を申候へ、となりしかば、いかで存じ寄りたる事の候べき、と申す。さらば此度の次第擧むるに詞も無しと言ふべきなり。年寄の死して事も缺けぬれば、則ち年寄に取立てて然るべからん、とて呼出して賞せられけるとぞ。

○林田左文劍術妙手の事竝馬爪源五右衞門先見の事

松平筑前守忠之の士に林田左文といへるは、戸田流劍術の妙を得たり。足輕の卒二十人預り居たりしに、或時足輕六人人を殺して出奔す。左文は折節馬に乘りて有りしが、告來るを聞き則ち馬にて追附けたり。足輕之を見て、立向ひ追附かれたりとは他國に參りて申すまじ。之より歸られ候て然るべからん、といふ。六人、敵對せば容易く切勝つべし。今日迄頭たる者なれば切るまじいとの心なるべし。林田靜に馬より下り、六人同じく人を殺したれ共、必ず其罪の中輕重有るべし。さらば殘らず罪にすべしとも思はれず。我此處に來るは其是非を糺し明にせんとなり、とて歩み寄る處を、一人、謀られじ、と言うて刀を抽いて懸る。林田刀の柄に手を

○大久保家の婢女主の仇を撃ちし事

大久保長門守一本松平周防守に作る教寛の内所に奉公せし女中老、或時心得過ちし事有りしを、女の年寄大に怒り罵りて打擲に及びぬ。中老、親にも叩かれし事は無きものを、と獨言して部屋に歸り、文書きて下女に持せ、親の許に遣りぬ。二人の女房、一人は殘りなん、といふを、大事の事いひ遣る文なり、とておして二人とも出しぬ。道にて、怪しき事よ。常に二人一度に出されし事も覺えず、顏色も只ならず有りし、とて文を披き見るに、云々の子細にて自害するなり、と書き載せたり。さてこそ有るべけれ、とて、一人のはしたものには、疾く行かれよ。我は歸りて押止むべし、とて急ぎ歸りて見るに、早自害して有りしかば、夜の物打懸け小脇差の血を拭ひ、我懷に差して、さあらぬ體にて年寄の部屋に行き、語り申度事の候。只今部屋に來られよ、と言ひしに、程無く行くべし、と言ひければ、歸りては又行き數度に及びしかば、年寄來りて夜の物を上ぐれば、朱に染みて中老は死してあり。其時女房、是は今日の事にて、斯は自害に及びたるなり。主の仇よ、と言ひも敢ず小脇差を拔いて刺殺しけり。兩人を殺したるならんと捕へて糺し問はるゝに、懷より文を取出し、證據はこれにて候、と始終を詳に言ひ述べて、主の仇をば討留めつ、思ひ置く

り。内藤を始として其場に七人一二町逃げて、倒れ死する者二人、多賀兄弟、三田、間四人が手に掛けて都て九人を切殺しけり。忠大夫疵三ヶ所、三田、間も手負ひぬれども三人とも死なず。孫左衛門が面に編笠をかけて息つぎ居たるに、邊の人出合ひ奉行所へ連れて行き、御法の帳面に記して討たざる趣を尋ねらる。忠大夫、固より承り及びたる事ながら、萬一それ故に事洩れて討漏らさんも計り難し。本望遂げなば何の身命の惜しかるべき。御法に背きたりとて刑罰に逢ふとも、附届に及ぶべからずと、必死に兄弟共思ひ極めて候、と少しも屈せず申述ぶる。又三田は近き親なり。間が助太刀は如何、と問はる。間承り、浪人なりしを、多賀が恩を以て年月を送りぬ。孫兵衛殺されし時両人の弟幼少にて、仇を見知らず候故、手引して討たせ候。多賀が多年の恩を報い候へば、如何に御咎を蒙り候とも厭ひ申さぬ志にて候、と申述ぶる。何れも申す處尤至極せり、とて歸されけり。孫左衛門三十三歳、忠大夫三十一歳、右衛門八十八歳、市大夫□（殿学）孫兵衛死後二十一年の後寛永十八年辛巳、江戸大炊殿橋の敵討と世にいへるは是なり。其比土井大炊頭の邸に近きを以て、一橋を大炊殿橋と言ひけるとなり。多賀忠大夫後に難栖と號す。右衛門八後茂左衛門といひ、老年の後茂入と稱し、正徳二年九十歳餘にて讃州丸龜に病死す。此始終は、忠大夫が物語したるを書記しぬるを傳へて此處に記せり。

永く暇を給はれ、といふに依りて、江戸の供の列に入れられたり。若し仇に討たれなば、とて小笠原家高天神にて走廻りよかりし者の子、其外徒の者六人、内藤に自然の事あらば助けよ、とて附置かれぬ。或時内藤、土井大炊頭の許へ使者に行く。多賀聞きて、歸るさに途中に出迎ひたり。八左衛門人数多く引連れ馬上にて來るを、間、あれこそ内藤よ、と敎ふ。若し打損じたらんに馬上にて馳脫けんも計り難し、とて孫左衛門、市大夫前より、忠大夫、右衛門八後より懸り、其間近くなりて孫左衛門編笠を脫ぎ、覺えは無きか八左衛門、と詞をかけ、頭を額へかけて切る。忠大夫二尺七寸の刀を以て飛懸り切る。切られてそり樣に踏み出したる鐙、忠大夫が拳に當りて、指の骨白く出でたりとなん。さて内藤落つる處を孫左衛門たゝみかけて切り、忠大夫馬の下を潛りて切り止めたり。孫左衛門始め向より太刀附けしかば、内藤が從者薙刀となく切りけれども、さのみ深手ならねば散々に切合ひたるを、内藤が從者薙刀をもて右の肩より腕かけて切りしかば、左の手に刀を取直したる處を、薙刀にて袖口を左右へ刺貫く。孫左衛門が刀間近くなりしかば薙刀を捨てたり。薙刀はかせになりぬ、數ケ所の疵は蒙りつ、遂に倒れて立上らず。忠大夫、右衛門八、市大夫、内藤が從者數多切伏せ追拂ひ、忠大夫駈寄りて孫左衛門が頭を抱き、如何に、と問ひければ、思ふ仇討ち果せぬれば思置く事無し、とて息絶えた

聞かば若し其人に害やせん、と密に八左衛門に告けて、孫兵衛、備後が宅に時々來るこそ幸なれ、とて或夜與四郎が部屋に呼入れ懇に遇し、醉の後八左衛門出逢ひて、孫兵衛を刺殺し、止を刺し足の裏を割きて、屍を城下の鹽津川に捨てたり。夜中知人無し。鹽津川の下に屍の流れ寄りたるを見て、誰が仕業とも知られざれども、自然に箕浦、内藤に指さす人も有りければ、孫左衛門聞きて、證據なしと言へ共、斯る類は天命にて虛說無き物なり、衆議を遂げられよ。沙汰に及ばずば備後、兵庫を相手なり、と訟に及ぶ。忠高目附を以て密に聞けば、果して實なり。多賀、が訟理なれば棄置き難けれども、内藤、箕浦兩人忠ある舊臣なる故、立退け、と密に知らせて、箕浦父子、内藤八左衛門雲州を出奔しけり。孫兵衛に兩人の弟有り。此時十三歲に十一歲なり。兄は後父の名をもて孫左衛門といひ、弟は忠大夫といへり。忠高卒去、刑部少輔忠知に六萬石賜はり、播州立野へ所替あり。多賀其比京極の家を出て兄の仇を討たんとす。されども幼かりし時の事故内藤を見知らず。父孫左衛門が介抱し置きたる浪人間市大夫、恩を報ぜん事此時なり、とて附從ふ。孫兵衛が妹の子三田右衛門八も相加はれり。備後は土井大炊頭に奉公しけるが年老て死す。與四郎は二十にて病死す。八左衛門は小笠原信濃守忠修に奉公し祿五百石與へられ、仇ある故他所へ遣されず、勤勞も無くたゞ在らん事快からず。人並の奉公を許されずば

れしかば、請取の爲に因幡の士横川治大夫父子鐵炮二十挺、渡邊越中鐵炮二十挺、伊吹源太兵衛父子鐵炮三十挺、宮脇半太左衛門弓十張、伊賀の者五人、片十彌二兵衛父子鐵炮二十挺、松尾惣左衛門父子伊賀の者六人、福田權兵衛歩行の士二十人、宮脇德兵衛、田中六郎右衛門其外弓の者二十人出逢ひて因州に赴く。伏見より川舟にて下り、海上の船は備前芳烈公の許より出し給ひ、松平輝澄の方よりも船を出し、大小三十艘播州坂越より陸路を經、地主より馳走の士出迎へて草深き所を苅らせ、道筋山々遠見を出し、夜は篝を燒かせ、鳥取の城まで、三泊にて引取らせられけり。仇討ちける時、數馬二十七、又右衛門三十、河合武右衛門四十、岩本孫右衛門三十八歳とぞ。

○多賀孫左衛門同忠大夫仇撃の事

京極若狭守忠高雲州松江に在りし時、出雲隱岐二州の主なり、具士に箕浦備後、内藤兵庫、多賀孫左衛門といへる者あり。備後が末子與四郎といひしは容貌美麗にて、兵庫が子八左衛門と情交淺からず。孫左衛門が子孫兵衛斯くとも知らで、與四郎に心をかけたりしに、曾て無二に言ひ交したる者あり、と答ふ。夫れまでにては浮の室なり。名を聞きて止みなん、と重ねて言ひしかば、名を

り。此時又右衞門刀を打折りけり。其刀伊賀守金道が作なりけるとぞ。數馬、又五郎と切合ひける處に、又右衞門は從者を追散し駈寄りて、數馬よくせよ、助太刀はすまじきぞ。叶ひ難くば代らん、と詞を懸けければ、

一說に、又五郎が後へ廻るといへり。

數馬飛込んで又五郎を討止めたり。斯る處に、藤堂高次の士彦坂嘉兵衞上野に在りけるが、數馬が親類なりしかば駈來り、其外上野の士數多集り、數馬、又右衞門主從とも嘉兵衞方に引取りぬ。又五郎、甚左衞門は其場に死し、半兵衞は息かゝり居けるを、引取りたれば程無く死す。數馬十三所手負ひ、武右衞門痛手にて其夜半に死す。孫右衞門手十所負ひたり。斯くと藤堂家に聞えて、三人は嘉兵衞方に暫く有りしが、藤堂式部が許に年月を送る。式部死して藤堂出雲に預けらる。寛永十五年六月江戸より仰出さるゝ旨ありて、數馬、又右衞門も藤堂家に下し賜はりけり。斯て江戸の彦坂平六郎、數馬が一族たりしが故藤堂家に申乞ひて松平勝五郎光仲の許に貰ひ賜はりたり。因幡に赴くにより同年八月七日上野を出る。藤堂玄蕃、弓五張組の騎士二十人、玄蕃が騎士五人、藤堂出雲、外に母衣の者組の騎士四十人、彦坂嘉兵衞、鐵炮頭三人、鐵炮九十挺、弓頭二人、弓四十張、田中源兵衞歩行の士二十人引續きて、伏見因幡の屋敷に贈ら

り、最期の酒宴して待ちかけたり。肴は無しや、といへば、是をなりとも、とて鰯を三つ出す。皆頭無し。數馬、目出度し、といひて、主人に酒の儀を、とて金子二十兩許投出し與ふれば驚きたり。是を限なれば何の爲にせん、といふ處に、主人の女房經帷を出す。數馬、心の附きたるよ、とて頂きけり、又右衞門著たる羽織を脫ぎて主人に與へ、庭に飛出でて躍上り〳〵したる有樣、健なる男の、今日を限りと思ふ氣色あらはれて、只鬼なども斯あらんと見えし、と人後に語りけり。七日の朝又五郎島が原を出て上野にかゝる。又五郎は思ふ仇なれば、數馬、討留むべし、甚左衞門は又右衞門立向ふべし。半兵衞は又右衞門が若黨武右衞門、數馬が若黨孫右衞門兩人懸合ふべし、と相定め、間近くなりければ、又右衞門眞先なる甚左衞門に詞をかけ飛懸り、

一說に、又右衞門、如何に甚左衞門日比のどうだぬきを見ん、と言ひも終らず、一刀に切るといへり。

馬より切つて落す。甚左衞門刀半抽きかけしを、二の太刀にて討留めたり。半兵衞は鎗の上手と聞えしかば鎗を取らせず。馬より下りんとする處を、武右衞門一太刀切つたりけれども、淺手にて下り立つたり。從者鎗押取り、半弓をも射かけ、透間無く切つて懸りしかば、二人爰を最後と相働きける所に、又右衞門駈來りて多勢を切りまくり、半兵衞に渡り合ひ終に切伏せた

門、數馬一人しては危し、助太刀せん、とて明くる年の三月迄荒木が許に止め置き、三月又右衞門暇を乞得て郡山を出でにけり。是は甚左衞門が惡口しけるに因れりともいへり。さて數馬、又右衞門は攝州丹生の山田に妻子を預け置き、四月に江戸に赴き、所々搜りけれども行方を知らず。甚左衞門をば時々見かけしかども、誠の仇にあらざれば打過ぎけるを、甚左衞門は嘲りけるとかや。斯て又丹生の山田に歸り、明くる寛永十一年大猷院殿御上京により京都に赴き、方方尋ねけれども行會はず。又丹生の山田に歸り、其後又五郎有馬に行くと聞き、有馬に行けども行會はず。奈良に甚左衞門が妻子在りければ、十月朔日奈良に行きて潛に聞くに、甚左衞門が方に又五郎置れ居て、十一月六日江戸に赴く由なれば、其夜押寄すべきとせしが、奈良は商家の事なり。途中にて討つべし、とて數馬、又右衞門主從四人、甚左衞門が邊に立明しけり。六日の朝、先は甚左衞門、中は又五郎、其跡に櫻井半兵衞、是は又五郎が妹聟なり。弓、鐵炮の上下二十人なり。七八町許も續きて行くに、又五郎其日は伊賀の島が原といふ所に宿す。四人見知られてはと裏の道も無き所を蹈破りて、三町許も行過ぎ宿を借らんとすれば、怪しみて、島が原へ、心得られざる人こそ四人宿を借りつれ、と告遣す。其由を又五郎が旅宿へ知らせたり。數馬も又右衞門も、敵に覺られじ、と夜深く出でて、山籠して伊賀の上野小田町に暫の宿をか

兩人、忠雄の許に年久しく來れる人なれば、治右衞門に斯くと言はれけるに、治右衞門申しけるは、半左衞門を渡されなば其儘又五郎を出すべし、との事にて、此旨を兩人忠雄に告ぐれども、尚も覺束なき儀なれば、兩人、慥に又五郎を請取り出すべき、との起請文を忠雄に出す。さらばとて、半左衞門を江戸に召下して取替ふべし、との事に及びて治右衞門朋輩共申す旨あり。仲間を除くべき故是非に及ばず、と忠雄に申す。忠雄其欺く事を怒りて、忠雄一族の人々心を合せ、押寄せて奪ひ取らんと支度あり。

伊達政宗は、論ずる迄もなし。蹈潰して奪ひ取るより外無し、と言はれしとなり。三家の御方和平の取計ひ有りけれども、未だ事遂けず。半左衞門は池田備中守長幸の許にあり。斯る處に忠雄痘瘡を病みて卒去あり。弟の松平石見守輝澄、同右近大夫輝興、三家の御方に訴へ申す旨ありけるに、長幸も卒去ありて、半左衞門は松平阿波守忠英請取りて、阿州に赴く道にて死す。安藤を始め咎を蒙り、閉門仰せ附けられけり。寛永九年七月、備前因幡國替を仰せ出さる。此時數馬立退きて備前の兒島にあり。又五郎が行方を尋ぬれども知れず。數馬が姉聟荒木又右衞門大和の郡山に在りけるが、又五郎が伯父河合甚左衞門も同じく郡山に在りて、暇を申して奈良に出でける故、又五郎が行方を聞かん爲に、數馬、又右衞門が方に行きしに、又右衞

衛煩ひ居しが、外の騒を聞き出でけるに、路次の内より刀を提げたる者に出會ひ、何者なれば士の家に刀を抜きて入りしや、と詞を懸けたる所に、徒目附の遠山才兵衛も來り合せ、彼者を切止めけり。

一説に、歩行の士三村孫右衛門通りかゝり、内の騒を聞き走り入りて是を聞き、又五郎を追駈けんとする處に、何者とも知らず女關に走り入る者あり、孫右衛門を見て逃けんとするを切伏せたり。之は又五郎が下人に言ひ附けて、源大夫に止を刺させん爲に戻したるなりと後に聞えしとなり。

源大夫は深手負ひて、又五郎相手なる由いひて死しぬ。豊後が方に告げければ、數馬も豊後も又五郎が父半左衛門方に行き、對面すべし、と言へ共、門を固く鎖して入得ざりける。中に長臣荒尾志摩、忠雄の近習加藤主膳駈來りて、半左衛門は二人して受取りぬ。忠雄、半左衛門をば菅權之介に預けられけり。半左衛門初は安藤對馬守重信に奉公せしが、故有りて忠雄懇にせられしに、半左衛門口論して相手を斬り、出奔して渡邊數馬が許に來りしを、潛に匿して祿を與へられし身なれば、又五郎を出して、腹切すべきものと忠雄思はれしに、半左衛門は更に其志に非ずして、又五郎江戸に行きけるを、安藤治右衛門匿し置かれけり。久世三四郎、阿部四郎五郎

壺され、海參白魚昆布をひ沼が浦に撒き、海に蛤を放ち、是より海物多く出づ。山には漆楮多く植ゑさせ給ひけり。元祿十三年西山に逝去あり。義公と謚せしとなり。

國初より已來の諸侯の中に、會津の神公、水戸の義公、備藩の芳烈公、三公の如きは寔に非常の君と稱し奉るべし。神公の事詳なる事を知らず。義公の一世の事跡西山遺事に審に記したれば、只一二の大なる事を記せり。吾藩の芳烈公の學校を作り賢才を招き、禮を以て度となし給へる、異國をいはば衛の康叔武公、燕の昭王の如き君を并せて芳烈公に比倫すべきや。予別に記せる物あれば、此篇には詳にせず。

○渡邊數馬報讐始末の事

渡邊數馬弟源大夫が仇河合又五郎を討ちけるは、寛永十一年十一月七日の事なり。もと數馬は松平宮内少輔忠雄に仕へて、忠雄備前岡山に御座しける比、寛永七年七月二十一日、城の大手にて踊興行ありけり。其夜數馬は妻の父津田豐後が方に行きけるに、河合又五郎數馬が宅に來り、心易かりしかば、源大夫と物語しけるが、如何なる故にや主從四人にて源大夫を切殺し、又五郎は脇差の鞘を落して行方知れず成りぬ。折節踊見んとて群集しけるに、數馬が下部岩佐作兵

命により、鳳足といへる御硯に銘を作られしかば、宸筆を下し給はりて賞美せさせ給ふ。此御詞の中に、備武兼文絶代名士といへる句有りしを、印に彫せられしとなり。元祿三年領國を綱條卿に譲り給ひ、權中納言に任じ給ひしが、程なく辭表を奉りて、歌に、

位山のぼるもくるし老の身はふもとの里ぞ住よかりける

是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り給ひしに、山莊の有樣萱をもて葺き門垣には蔦蔓ひかゝり、只竹垣一重にて池に蓮を植ゑ、西山のほとりに桃數百株あれば、川の流の橋を桃源橋と名附け、鹿を放ち鶴を飼せ給ふに、よく馴きけり。瑞龍山に壽藏を設け衣冠を埋み、碑陰の銘を自ら作り給へり。久慈郡小野平村旗櫻寺に祠堂を建て、賴義、義家の神主を置かせらる。又攝州湊川に楠正成の墓を修し、碑を立てて碑面に、嗚呼忠臣楠子墓、と自筆し、陰には舜水の撰びし讃を彫らせられ、又舜水の碑を瑞龍山に建てられ、其文集を輯して、門人源光圀と稱し給へり。彰考館を作りて和漢の群書を集められしに、遠國他鄉に學士を遣し、半帋一行の反故をも見るに隨ひ拾收め給ひける程に、色々の書ども編集有りけり。中にも禮類聚五百卷は日本古來よりの寶典と稱すべしといへり。寛文五年領國中の淫祠三千八百毀ち捨て、新地の寺院九百九十七除かれ、多珂郡にて廣野有りしに、馬を放ち牧となし給へり。地の利を盡す術に心を

給はん事なるに、斯く定まりつれば、長子の方に家を譲るべき志此よりして起れり。是より又學問を好み給ふの志篤し。明暦三年より大日本史を撰び始めらる。神功皇后を帝紀を黜けて后に列し、大友皇子を天子と定め、南朝を正統と立てらる。皆此君の義烈なり。寛文三年賴房卿卒去あり。葬禮僧家の法を用ひず、瑞龍山に葬り威公と諡し、廟を水戸の城中に立てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。殉死すべき士有りしに、自ら其家に至りて止めらるゝに、其理正しき故に殉死を止りしかば、此事聞えて、殉死天下一統停止の旨仰出されしは此君の故なり。又兄の賴重卿の子松千代綱方を、强ひて養嗣とせられん事を乞ひて、若聞入れられずば世を遯るべき志なりしかば、賴重卿許諾あり。松千代の弟采女綱條をも引取り養ひ給へり。明朝の遺民朱之瑜といひし文學有る者、清朝の粟を食せじとて日本に渡りしを、筑後柳川の文學安東省庵、其俸祿の半を分けて養ひ置きしを、召して師とし給へり。綱方病によりて卒去有りしかども、弟綱條を養ひ置かれし故、卽ち世嗣になし給ひぬ。延寶元年孔子の堂を水戸に立て給はん爲、江戸駒込の屋敷に假の設をなし給ふ。日本古よりの假字の文章を編みて三十巻となしたるを、天聽に達し、後西院の帝名を扶桑拾葉と賜はり、卽ち獻じ奉り給ふ。天和二年朝鮮の使臣江戸に來り、三使進物の目錄禮儀を失せる故、三條の疑問有りしに、答ふる詞無かりしとなり。後西院の帝の勅

と存じ樂む處なり、と答へければ、その子細を問はるゝに、大名は天性賢く御座し候ても、臣下之を馬鹿に取成し候。祿少き身は其師や朋友惡き事を戒め諫め候故に、其身を省みて馬鹿に成らず候へども、大名はさはなく候。臣たる者兎角忤ひては、身の爲善からじと存じて、其主の善き事有れば山の如くに譽め申し、種々の惡き習しを附け候程に、何時となく恣に成りもて行き、夫よりは一言の諫をも申難く候。如何に聰明にても、學問も無く教といふ事を知らず、善事を辨へ給ふべき樣なき故、馬鹿に成果て候は口惜き事に候はずや。臣大名に生れざるを樂と存候は、此子細に候、と申せば、中將熟と聞召して、能くも言ひたるかな。尤も至極せり。今より馬鹿に成らざる思慮すべきよ、とて賞美のあまり、即ち二百石の祿を增與へられけり。夫より山崎嘉右衞門を尊信し學問を嗜まれ、後神公と諡せしは此中將の御事なり。

○水戸義公御事業の概略

水戸中納言光圀卿は、賴房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。寬永十年威公の嗣未だ定らざりしかば、嚴有院殿の仰にて中山備前守信吉水戸に至り、光圀卿三つに成り給ひしを見て、斯と申上けて嗣に定まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀みて深く感ずる處あり。是嗣は兄の賴重立

又山城の鹿背山に引籠り、又播磨の赤石に移り居る。延寶七年六十一歳にして、大和の矢田山に隱れけり。赤石は松平日向守信之の領地たるが、日向守領地を大和の郡山に移す故なり。貞享四年八月、常憲院殿の仰により下總の古河に行く。日向守領地を古河に移す故なり。日向守深く伯繼を尊信せられたり。同年の冬封事を江戸に奉り、政事を更正すべき旨を申すにより、大に旨に忤ふ事ありて、永く閉籠置くべき由仰せ出されけり。此後人の來て物語するに、もし國政の事に及べば、傍なる筆を執り吹きて一事も言ふ事なし。元祿四年八月十七日古河の城頽政廓に病死し、城下の大堤村鮭延寺に葬りぬ。歳七十三なり。伯繼の學朱子王子によらず。別に一種の學を成すと言へ共、文學に短にして、政事の才其長ぜる處自著せし書に見えたれば、爰に詳にせず。

○小櫃與五右衞門會津神公を諷諫せし事

會津中將保科正之は、台德院殿の第九男にて御座せしが、殊に豪氣なり。近習の人に向ひて人々の樂む所を尋ねられしに、小櫃與五右衞門と言へる者、臣が樂む事二つ有り。其一つは、家貧しくて奢といふ事を知らず。天より命ぜられし貧を樂む由を申す。其一つを問はるゝに、是は憚る所の候、とて言はず。強ひて問はれしかば謹んで申しけるやう、大名に生れざるを天の冥加

曆元年飢饉の災あり。次郎八日夜國中を巡り撫育に心を盡す。伯繼日比儉にして、家中婢女寡く營む事少し。唯客を愛して、組の士朝夕となく來りて相語る。伯繼水理を論ずる事妙を得、國中水を通し沼を作り、旱魃の防をなすに、皆馬上より打詠めて其利害を定め論ずるに、數十年の後其言皆中らざるは無しといへり。明曆二年、和氣郡木谷の狩に山より倒れ落ち、此より脚を惱めり。斯くて和氣郡寺口村は其祿地なれば、蕃山と名を更めて世を遯るゝ志あり。

筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり

といふ和歌の心にて名附けしといへり。病により明曆三年祿を辭し京に赴く。其道を慕ひて門人となりし人々は、中院大納言通茂卿、同通躬卿、野々宮中納言家緣卿、野々宮中將定基朝臣、清水谷大納言實業卿、押小路三位公起卿、久世中將定清朝臣、久我右府廣通公、油小路大納言隆貞卿、中御門大納言資照卿、伏原三位宣業卿を始として、數多伯繼を師とし貴び給へり。此時所司代牧野佐渡守親成、人の讒言を信じて伯繼を憎む。又其才を妬む者あるによりて、世に種々言振す事共ありて、寬文七年四十九にて大和の芳野に匿れ、

この春は芳野の山の山もりとなりてこそしれ花のこころを

と詠めるは芳野にての事なり。

出されんが爲なり。此時次郎八未だ元服せざりし故、江戸に留置かれしが、自ら元服して密に岡山に歸りたり。十五年岡山を去りて近江の桐原に隱れ居たり。二十四の歳、高島郡小川村に往きて中江惟命を師とし、道を問ふ。歸りて又高島にゆく。其時父野尻氏仕へを求め江戸に赴く。次郎八に母妹を添へて、東近江の人遠き所に殘し留めたりしに、家甚だ貧しくて、江州の賤しき百姓の食するゆりのこ雜炊を飯とし、糠を食して魚肉酒茶の味を知らず。やう〳〵帋子を著て寒を防ぐ事五年、相識る人、母妹の在りて餓死せん事を憐ぶばかりなり。中江、王陽明の書を讀みて、良智の旨を次郎八に語り示す。芳烈公伯繼が王佐の才有る事を知召し、京極主膳に就きて、復來り仕へなんや、と度々問はせ給ひければ、正保二年再び備前に參りて仕へけり。祿三千石を賜はり政を執りたり。和氣郡八塔寺は、備前、美作、播磨、犬牙の如く入交りたる地にて、次郎八請取口とす。和氣郡の中便宜の地に因りて田を墾き、士數十人を土著とす。此時伯繼を助右衞門と稱しけり。公の參勤に從ひて江戸に往く事度々に及べり。世に名譽高く其道を慕ふ人多し。紀伊大納言賴宣卿、松平伊豆守信綱、板倉周防守重宗、久世大和守廣之、板倉內膳正重矩、松平日向守信之、堀田筑前守正俊、其餘の大名數を知らず。大猷院殿其人となりを深く信じ給ひ、召して尋ね問るべき處に、慶安四年かくれさせ給ひて謁見し奉らず。承應三年備前大に水出で、明

常山紀談　巻之二十四

○熊澤了介の略傳

池田の家にて政を執り、四海に譽高き熊澤次郎八伯繼了介は、本姓野尻なり。加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子にて、外大父熊澤半右衛門守久養うて嗣となす。守久初は喜三郎といふ。喜三郎父を平三郎とて尾張の人なり。東照宮に仕へ奉り、三形原にて討死しけり。守久其後福島正則に仕へ、正則安藝備後を削られ、信州川中島に流罪の時、正則の江戸の屋敷を圍みて、若し仰を背かば忽ち討滅さん、となり。正則の士大方出奔しけるが、士只七人殘り留りし中に、半右衛門も留れり。正則江戸を出て川中島に赴く時、途にて殺さるべし、と云ひ振らす。守久節を守りて附從ひ信州に參りければ、正則日比寵愛の淺かりし事を悔まれぬ。後水戸の威公に仕へけり。一利は後鍋島に仕へて、島原の城攻に武功あり。延寶八年八月二十三日備前岡山に卒し、蕃山に葬りぬ。次郎八、寛永十一年十六歲にて備前に來り、芳烈公に仕ふ。十三年島原一揆の亂起りし時、公江戸に御座しまし、仰を奉りて岡山に歸らせ給ふ。此は一揆猶落城せずば、師を

寛永十三年七月六日病んで死す。

しけり。公自ら書記させ給ふも同じければ、さらば、とて西宮の陣所にて大膳に仰せ附けらる。

大膳、公の御前を退き出でける時、長臣達を始として、いやが上に重りたる所を通らんとするに、伊木長門、大膳に向ひ、今度の使は大事なり。能く心得られしや、と言ひしに、大膳不才の身、粗仰の旨は承り候ひぬ。此を、と言ふ儘に懐より九寸許の匕首の氷の如く見ゆるを抜出し、至つて業物にて候。大御所の御座近く参りて申候より外は存じ候はず、と言ひければ、長門、尤なり。我行くべしと思ひしに、斯の如くなればいふべき事なし、といひけり。二條の城に参りければ、東照宮の御前に召されて子細を糺させ給ふに、一々道理明に申したりしかども、猶聞し召し入れらるべき氣色無かりければ、尼ケ崎の地圖を取出し、武藏守露塵許も二心無き由を申せしかば、其時疑ひ思召さざる由仰せ出されて退出しけり。人々再三押返し諍ひ奉りて、武藏守罪なき由を申せし有樣、類少き者なり、と感じ合へりしに、東照宮も其後大膳が事を、由々しき者なり。誠に豪傑とは大膳なるべし、と仰あり。

大膳は揉髪ありて容儀由々しき人なりしかば、退出しける時、髪よくも言ひたり、と仰せられ、其座に有りし人々も御女關に出でて送り、且知る人になりたりとなり。

番後祿千石を賜はり、其後千石の祿を增賜はり、孝烈公光政朝臣の時に至りて政を執りたり。

てん事目前なり。我を獨夫にしなして、其を忠とも義とも思ひなんには、疾く死して御供申すべし。強ひて我押留むべきや。我は汝が死するに依りて士の主には成る事能はじ。只疾く死ねよ、と仰せられければ、立札涙を流し、存じ寄らぬ仰を承り、誠に進退究り候、と申しければ、興國公、疾く死して我を獨夫にして先代への奉公とせよ、と再三仰せられしかば、立札兎角言はで暫有りけるが、仰の趣承り候ひぬ。士程の者が、刀を腹に突立てながらさて止むべきには候はねども、只今の御詞によりて恥を忍びて、人に後指を指され候とも存命へ罷在るべし、と申しければ、さては我士の主になる事を得たり。汝が忠義比類有るべからず。能く勞りて、と仰せられ、内に入らせ給ひけり。

○番大膳二條城へ使に參る事

池田の家の士大將番大膳景次は、父を藤左衛門景元といふ。尾張智多郡荒尾といふ所の人なり。大坂冬の軍、尼ケ崎の城にて片桐が兵共討たれしを、援はざるにより二心有りと東照宮疑ひ思召す由聞えしかば、其子細を申述べんが爲使を參らすべきに、誰かよく使せん、と各使を擇び、其姓名を書きて出すべき旨興國公の仰により、數百千の士中を過ぎて、大膳が姓名を記して出

日は出仕すべからず。仇の必ず窺ふべき、と言ひしかども、政右衛門、苦しうも候はず、とて出仕す。秀吉の居間の次まで刀を毎日も携へけれども、其日は従者に持たせ置きて、廣間に仇の有りける中を打通りて、事故無く退出しけり。後慶長四年四月に參河にて病死したりけり。

○伴玄札殉死を止る事

國清公池田三左衛門尉參議輝政卿世を下らせ給ふ時、伴玄札は寵臣なりしかば必ず殉死すべき者なり、と人も言ひけるを、興國公武藏守利隆朝臣聞し召し、よく心を附けよ、と侍臣に仰せられけり。御柩に納まらせ給ふ日、其次の間なりし襖を開きそれに入り、又閉ぢけるを怪み行きて見れば、脇差を早や腹に突立てけるを抱起し、人多く重りて押留め置き、斯と申しければ、興國公急ぎ御出有りて、玄札如何に、と仰せられしかば、玄札承り、御恩深く蒙り候へば、御供仕りなん志にて候に、見附けられしは口惜しく候。御許れをもて快く死出の道に赴き申すべし、と申上けるを聞召し、さもあるべき事なり。されども我士の主には成難きを見捨てて先代の供したらんには、人人思ふ樣も、玄札は先殿の志をも知り、寵愛に遇ひたる身の熟々今の嗣は劣り果てたる故、供して死したるならんと言はんには、今迄の士一人も我に心服する者あらじ。我は獨夫と成り果

の上より喚と喚いて突いて懸りしかば、小勢を大軍なりと思ひ、一揆散々に敗北しければ、木全が鎗にて中へんに構ふると世に言はれし人なり。

政右衛門、又藏に心を合せ、同國高木何某を討たんと計りけり。又藏竹が鼻の竹林に隱れ待ちしに、高木夜中に打過ぎける處を、走り出でて唯一鎗に突殺し、從者共を追散してけり。高木が子二人父の仇報いんと聞えしに、政右衛門或年江戸に行く時荒井に宿せしに、敵道に待つと聞きて舞坂に行く。道の程三十間許も隔てて、凡そ八百人許待ちかけたりしに、政右衛門靜々と乘通りしに、敵更に取合はねば、政右衛門從者五六人にて馬を引返し、仇の前に乘行き、是に待ちたるは高木に候や。斯く申す森寺を仇にて討たんとや。唯今何とて討ち候はぬぞや。さらば參り合はん、と大音にいへども物いふ人無し。政右衛門嘲笑ひ、など討候はぬぞや。此後我を討たうとは存じも寄り候はず、と罵りて打過ぎ、江戸に赴きけり。高木は訟へて政右衛門を討たん、と申しければ、何方にてもあれ討候へ、と許されしが、又政右衛門にも嚴しう防ぎをして、仇に討たれざるをもて勝にせよ、との事なりければ、常に鐵炮五挺に火繩に火をつけ、弓十挺に箭を關ひ、鞘外したる鎗五本、士三十人打連れけり。秀吉の時出仕しけるにも斯くの如し。刀をも殿中に携へよ、と許さる。伏見の城を築かれし後、諸大名出仕有りしに、政右衛門に、今

の前に有りし時、稻葉伊豫守一徹の許より、備前の陶と、徳利を贈られけり。政右衛門見て、是は贋物なり。あらぬ物を謀りて豫州さぞ笑ひ候べし。悪き奴にこそ候へ。あはれ伊豫守が目の前にて打碎きたらば快く候べし、といふ。護國公、汝が詞無禮なり。豫州が目の前にて碎くべくば碎いて見よ、との詞を聞くより座を立ちて徳利を懐に入れ、伊豫守の方に行きたり。斯る事とは知らず對面せられしに、政右衛門徳利を取出し、備前にて燒きたる物には候はず。贋物なれば返し申す、と言ひも敢ず、柱に中てて打碎きつと走り出でければ、一徹、それ留めよ、と下知せられしに、駈延びて歸りけり。護國公は、政右衛門が面魂、一定伊豫守の許にて打碎くべし。危き事なり、とて門内に待ち給ひし處に歸り來り、云々せし證は此なり、とて徳利の缺けたる口を取出し、見せ申して後申しけるは、凡そ君となる身は一言も謹あるべき事に候。先に申せし詞は無禮なれど、碎くべくば碎いて見よ、と張合をかけられ、若き男の骨を刻まるゝともさて止むべきや。遁れ得て歸りしは幸なり。已後を謹み給へ、といひけり。政右衛門美濃の竹が鼻に居し比、木全又藏といふ士、緣有りて森寺が許に居たり。

又藏が父は五右衛門とて大剛の者なりしが、或時野伏一揆しけるに、木全山の中に分入りしかば、それは如何に、と問ふ。中へんに構へ候、と答ふ。程なく一揆の打通りける所を、山

る故なり。

○森寺藤左衞門池田家與立の事並森寺政右衞門武勇の事

池田の長臣森寺秀勝は伊勢の赤堀郡萩の城主なりしが、伊勢の國司に攻め落されけり。藤左衞門秀勝其比幼かりしを、母抱きて落行き、尾州織田信秀の許に隱れ居たり。護國公池田信輝朝臣の母君を養德院といひしが、江州より落ぶれて清洲に來りしを、藤左衞門、瀧川一益に賴みて信長の乳母に出せしに、信長、護國公と同年なれば、遊び相手となりて年を送れり。故有りて護國公出奔し給ふ時、森寺も同じく打連て、赤堀に匿れ居る事五年に及べり。斯くて信長星崎の城を攻めらるゝと聞きて、森寺商の體にもてなし、清洲の城の厨に行きて、物具を求むべき支度せばやと存ずれども、金も銀も候はず。あはれ少し許給はり候へ、と護國公の母君に潛に言ひければ、我も金銀の有らばこそ。此なりとも、とて綾の小袖三つ出して森寺に與へらる。森寺急ぎ出て銀錢六十に換へたり。古き物具を買ひたれども、冑無ければ茜にて染めたる布を鉢卷にして、星崎に向ひ給ひしかば、信長悦びて護國公を元の如く使はれけり。藤左衞門子を政右衞門といふ。勝れたる荒者なり。政右衞門忠勝十八歲の時、何れの所にて有りしや知らず。護國公

○優婆塞の馬の事 附信玄馬を擇ばれし事

越前忠直叛志有りと世に聞えし比、加賀の前田利常は隣國なれば軍の支度せられしに、物具著て乘るべき馬を擇ぶに、加賀の領國の中二千疋に餘れる中にて、富田越後が馬を擇出す。鹿毛にて二寸五歩、飽まで駿馬なり。大庭に旗數百本立竝べ、伏せつ立てつして、金鼓を鳴し鐵炮を打つに少しも驚かず。名を優婆塞と附けられけり。今一疋とて擇ばれしに、似たる馬も無かりけり。

凡大將の馬を擇ぶに心得有るべきにや。甲斐の武田の家にて米澤といひし者、奥州に行きて馬を求むる時、信玄一首の和歌を書きて與へらる。

上馭の中のかんこそ大將の乘るべき馬としれやもののふ

信玄五十疋の馬の中に、軍に乘られし馬四足栗毛中段とて只二疋あり。甲斐山梨郡とし野といふ所の百姓此四足を養ひ置きしを、米澤見て、又無き馬なり、と信玄に申して、五十貫の地を與へて此馬を信玄に奉りぬ。今泰平久しくなりて馬を擇ぶの理を知る人なく、益なき觀の美に黄金を費す事には成りぬるなり。是皆上より下に至るまで軍旅に明ならざ

○奥平家の士の妻髪を切りて節を守る事

奥平の長臣奥平源八傳一に父の讐同姓隼人を討ちしに、相與せる士多し。源八幼くして奥平の家を立去りしに、一味の面々も皆立去りて源八が成長を待居ける。其中に一人の士、妻は稻葉丹後守正通の家の士の女にて有りけるが、父の許に預け置きしに、頓て讐討つべきに及びて、妻の許に行きて、存ずる旨のあれば離別するなり。何方にても嫁し候ひて、親の苦勞に成り給はざれ、と言ひければ、彼妻聞きて、年久敷隔てなく過ぎ候ひしに、偖に斯く仰せ候は定めて故有るべし。然らずして暇給はりては、親に向ひて如何にいふべき詞も候はず、といひければ、今は包み難くして、誠は云々の子細にて讐を討つに組したれば、其時は討死するか、又は公の咎に依りて殺さるゝか、二つの間に有るべし。御身は年若き人の我死後に艱難すべければ、いたはしくて斯の如く言ひつるなり、と語りければ、彼妻元結の際より髪をふつと切り、讐打すまし給うて相見ゆるまで、此髪いろひ申さじ、と誓言して別れけるとなり。其後讐討おほせて、彼士も散々に働き助太刀して、彼妻の許に行きて對面しけるに、元結の間より髪の長く出でて、元結は其儘有りしとぞ。

一揆押寄せたる時も功名あり。賤ケ嶽の軍にも良い首取りたり。後遂野家に仕へ、小田原、山中、武藏忍、岩槻の城攻にも度々功名したりければ、秀吉是を賞せらる。文祿年中朝鮮蔚山にて敵六騎と馬上にて太刀打し、一騎斬つて落し其首を取りければ、幸長感狀を與へらる。慶長五年濃州合渡にても功名し、瑞龍寺二の丸に先登し、度々武勇譽れ高かりければ、京都にて台德院殿御前へ召し出され、龜田が働類稀なり、とて御腰物を賜り、上田も同じく賜物有りて賞せられけり。龜田後安藝東條の城主となり、一萬五千石を幸長與へらる。子細有りて淺野家を去り、高野山學侶花王院の許に隱れ、寬永十年八月十三日卒しけるとぞ。

○於萬の方塙團右衞門を扶持せられし事

紀伊大納言賴宣卿の母君をばお萬の方と申す。駿河にて塙團右衞門は名高き大剛の士なりと聞きて、お子達に太刀刀を進するは常の事なり。大將の寶といふは士に過ぎたるは無し、とて鏡臺金とて毎年五百兩賜はりける中を、二百兩分ちて塙が流落せし內は與へられぬ。事有る時は剛の者一人にても愛しき子に參らせん、と言はれしとかや。

龜田聞きて、我と御邊と二人討死するならば屍の山をもなすべし。但州公は琵琶が嶽を越させ給ひ、自害ありしといふは誠なりや。敵進み來るともまた一時は有らん、といふ處に、一騎は赤く鎧ひ、一騎は二三間後れたるが黑く鎧ひたる者駈來る。赤き物具は塙、黑き出立は塙が手の者なり。塙は龜田に向ひ、塙が從者は上田に向ふ。龜田立上り飛出でて鎗組みたり。敵の鎗龜田が胄を二打三打うつ處を、十文字の鎗にて、胸板又左の脇を突いて突伏せ、龜田が士菅野兵右衞門來り首を取る。歟伏しながら菅野が足を切拂ふ。菅野加右衞門助け來り、塙が上に乘りかゝり兵右衞門に首を取らせぬ。上田は鎗を打折り無手と組みたる處に、上田が手の者二人助け來りて敵を討取る。上田は痛手負ひけり。龜田は病進み出で、十文字の鎗を足にて踏直し居たる處に、又敵一騎突きかけ來り鎗を合す。菅野加右衞門鎗にて脇壺を突く。須田作兵衞其首を取る。差物に谷下吉左衞門と書きたり。此時敵一人來りて龜田に向ふを、突拂ひたり。大坂方踈駈して、先陣の大將討たれしかば敗北しけり。東照宮も龜田が此日の軍を殊に譽めさせ給ふといへり。龜田は父を溝口半左衞門とて、柴田勝家に仕ふ。大隅若き時は半之丞といひて、十六の時初陣なりしが、柴田伊賀守に屬して、越前白鬼戸女河原にて、一本に白木戸　馬上の敵を打取り、柴田父子感狀を與へらる。又越前丸岡の城へ

らざる事なり、といふ。旗本の旗色しどろなり、直されよ、といへば、左衛門、心得たり、とて乗戻る。斯る所に上田主水來りて、今日の合戦如何に、といふ。龜田、昨日計りし如く樫井にて軍すべし。兎角旗本の旗色悪しく見ゆるなり。乗帰りて直されよ、といふ。上田乗帰ると旗色靡々と直りたり。龜田其後上田を感じけるは此事なり。龜田は南の町端に、左の池の堤に、鐵炮五十挺伏せ馬より下り立ち、敵を待つ處に敵駈來る。龜田思ふ程に引附け、下知して鐵炮を打するに、生死は知らず。騎馬の兵三十騎許打落す。敵是にためらふ隙に、鐵炮に薬込みて一町許も引取つたり。斯の如く三度繰引にして樫井の町に引取り、馬を立並べて休み居たり。斯る處に敵味方は知らず、東の河原より歩立の弓の者を率ゐたる大將馬にて乗來る。龜田河原へ乗出し、是は大坂にて誰の陣にてか候、と問ふ。岡部大學、と名乗つて馬上にて鎗たけに成りし時、大學馬を引返して北に向きて引退く。龜田、穢し返せ、と呼はり、一町許追捨てて樫井に歸り、此所にて討死までよ、と獨言して石橋に腰かけ、十文字の鎗を取り、鐵炮の者を集むるに、散々になり唯三人殘り止りぬ。三人龜田が前に來りて、腰抜共足纏になり候。落ちたるこそよけれ、とて少しもひるまず。龜田大に賞する處に、上田一騎乗來り、先に鐵炮の音しけるに、早くも引取られたるよ、といふ。

定味方の勝利なり、といふ。淺野聞きて、敵の族をだに見ずして北げん事然るべからず。龜田は引かれよ。我は引くまじき、といふ。龜田、我此所にて功名を遂けずば討死せん、と誓言して出陣したれば、樫井に於て一番鎗を合するか討死か、二つの中を出でず。此所にて一戰せられよ、必ず敗軍なるべし、といふ。淺野怒りて、物前に不吉の一言なり、と罵りけるを、淺野左近取扱ひ、所詮但馬守の下知に任せよ、とて前田越前を以て事の由を申す。長晟、兩人の存ずる所尤なり。龜田は度々武功譽の物師なれば、先陣五千の下知は龜田心の儘にせよ、と下知せらる。前田歸りて斯といへば、龜田涙を流し悦びけり。軍兵を安松に引取る處に、淺野左近、同日向、安井喜内、田子助左衛門、伊藤金左衛門等從ひけり。安松の長瀧村に陣す。市場に殘る淺野左衛門、同大炊、仙石因幡、三木小左衛門、未明に安松まで兵を引取りけれども陣すべき所無く、樫井に入りて半ば河原に陣しけり。大坂の軍は瓜生野にて勢揃し、先陣塙團右衛門、二陣岡部大學なりしが、二人不和にて塙眞先に進み行き、四月二十九日、泉州貝塚にて兵粮遣ふ。大野主馬は酒宴して打立たず。其時塙は三百許の兵にて安松に馳入り火を懸くる。龜田は蟻通の北へ物見に出づる所に、淺野左衛門乘來り、汝が謀りし所甚だ感じ入りたり、といふ。龜田、物前の積り論ずる事は珍しか

透間も無く追懸けたり。大隅は討死までよと思ひ定めて、石橋によりて十文字の鎗を横たへ待ちかけたりしに、淺野左衞門見て、何とて軍したる、くせんといふ事ぞ、とて、引退かれよ、といふ。上田主水は樫井の家の中に隱れ居て左衞門を遣過し、後に殘り居しに、淡輪眞先駈けて馳入る處を、永田治兵衞討取りたり。斯くて大坂方馳寄する處を、上田主水鎗を提げて散々に相戰ひ、山掛三郎左衞門と引組みたり。横井平左衞門、横關新三郎駈寄りて山掛を討取りぬ。龜田を始として殿の者共、面も振らず喚き叫んで相戰ひしかば、大坂勢敗北す。塙は田子助左衞門が射ける箭に痛手を蒙り、十文字の鎗を取延べ、田子が弓の弦を突切る。八木新左衞門透さず走り寄りしかば、塙家の壁に凭れて、思ふ程働きて終に討死す。大野は貝塚にて先陣の戰を聞き駈向へば、樫井の軍散じけり。又一說に、淺野但馬守長晟紀州を打立ち、五千の兵にて泉州市場に著く。大坂より四萬にて向ふと聞き、淺野左衞門、敵何方に向ふとも市場表にて一戰せん、といふ。龜田大隅、後の勝こそ大事なれ。四萬の敵を五千にて支へん事地利に依るべし。一里引退きて、蟻通明神の松原を前に當てて安松に先陣を押出し、敵を引附け八町啜を繰引に、樫井にて戰はん。此松原有りて敵に見透されず。八町啜は雙方深田にて、一騎打なれば多兵懸り難し。然らば一騎合の勝負にて必

首を提げ、幸長の日出の王子の陣に至りて、士卒と幾らも並居たる處にて、茶湯法師に劣られし人々よ、と言ひけるに、兎角いふ人無かりけり。

樫井の軍は大坂夏の事にて、大野主馬大將にて、塙團右衞門先陣して和泉に攻入りけり。岡部大學塙が武功を嫉み、抜駈して阿部野を和泉路に指して進み行き、四月二十八日夜明けて、國府の東の山に烟の立つを、岡部が士共、すはや相圖の火の見ゆる、と勇み、蜂通明神の北より貝塚指して進み行く。淺野長晟は信達に陣せしに、大坂より大軍寄すると聞き、樫井に引返すを、塙、我行きて敵の體見て來らん、とて唯一騎、淡輪六郎兵衞といふ案內者を引具して馳行く處に、岡部を見つけ、塙馬の上より、抜駈したりしよな。今朝よりの軍を聞かん、と罵る。岡部、敵無ければ功名も無し、といふ。互に相罵りけるが、彼なる安松を燒拂ひたらばよかりなん。又蜂通の松原に伏兵有らん。覺束なきに後陣の續くを待たん、とて物見を出す。長晟の士大將淺野左衞門佐安松に來りて、龜田大隅に、疾く兵をあけられよ、といへり。又塙が物見乘歸りて、敵近く候、といふを、岡部聞きて、冑を取りて著、馬に諸鎧を合せて駈出す。塙、如何に後陣を待たれよ、といへども耳にも聞入れず。塙怒りて、汝に先を駈させんや、と言ひて是も馬を乘出す。龜田は殿して引退く處に、

り。先に駈行く人有りて後に續くを待たれば、此老人も續くべし。鎗間は僅六七間に過ぎず。主馬が如き老衰へたる身も、其時心剛ならば後れまじ。五町十町走る事は若き人のなし易き事なれども、六七間の際に至りて箭玉烈しければ、若きとて走られぬものなり、と言ひしに、皆詞無かりけり。

○永田治兵衛功名の事附樫井合戰の事

永田治兵衛は平生多病なりしかば、何の用に立つべき、と人のいふを以て、下部こそは健なるがよけれ。士は義と勇とにあり、といふを、「人々、詮方無くていふ詞なり、と又嘲りけるに、泉州樫井にて淡輪六郎兵衛が首取つて族本に行く。平生多病の男斯る振舞し候に、無病の人達今日功名無く候や、といふに、答ふる人無かりけり。又上田主水は宗古といひしが、石田に與して淺野幸長に預け置かれしが、茶の湯を弄びける故、殿の國こそ大きなれ。一萬石の茶湯法師を召置かれたり、と譏りけるに、幸長聞きて、上田に脇差を與へ、汝を誹る者有りと聞く。必ず大切の時に功名する心得有れかし、と詞を懸けられしかば、上田、事に臨みて刃に血を染め申さん、といひしを、又、鼠の血ならでは附け得じ、と言ひけるが、樫井にて目を驚かす軍して討取りたる

いふ鐵炮を預りし人年老いたるが、此を見物に出て、久しき名物の判官の鞍を見たるよ、と言ひしかば、其故を問ひて驚きけり。惡馬も固より乘得ければ、上田が馭法愈名高く成りにけり。

○根來法師賞功の定並大澤仁右衛門が事

紀伊國根來谷の法師は昔より武勇を好む。定りたる法有りて、第一の功名には、感狀に琍瑁の鎗三本銅錢三十貫、其次感狀に鎗二本銅錢二十貫、其次には感狀に鎗一本銅錢十貫文。根來の內に大澤仁右衛門といふ者一番鎗を合す。感狀に鎗銅錢をも添へて受け得しが、大坂にて秀賴に從ひ、城落ちて後九鬼の家に有りしが、大坂籠城の人禁錮せられしを、土井利勝密に養ひ置かれけり。

○大音主馬助先登を諫ずる事

加賀利常に仕へし大音主馬助に、若き人々數多、如何に大音心は猛く候はん。されども今は走る事叶ふまじ。麒麟も老いぬればといふ事思ひ出され候、といふ。主馬聞きて、五町十町駈走りても、敵の眞中に只一人駈出る事なり易き事にあらず。早く走りたればとてさのみ益なき事な

本多能登守忠義、或時近習の人に、近き頃世にもて囃す書の事を問はれしに、平家物語評判の事を申す者あり。それは誰が著したるにや、と問はる。由井正雪が作り候、と答ふ。忠義、凡書籍は賢人君子の著す處なる故にこそ崇む事にはあれ。正雪は大悪逆の賊なり。よも正しき事は有らじ。其書籍聞くも穢しく覺ゆ。人を以て言を捨てずといふ事のあれども、斯る凶賊の何條善き言の有るべき。汝等よく心得よ、といはれけり。

○義經の鞍の事

蜂須賀阿波守至鎭古戰場の事跡を尋ね、古き物の廢れしを求められしに、八島の軍に義經の士佐藤繼信を葬りける時、最愛の大夫黑といふ馬を贈にせられし、其鞍志渡の寺に有りしを、彼寺の破壞したるを修補して鞍を乞得たり。其後年久しくなりて庫を司る人、詳しく其事の由を知らず、他の鞍の中に雜へ置きたり。程經て上田半平安重とて聞ゆる馭法の上手あり。其比類無き悪馬の有りて人々乘煩ひしに、上田、此馬にはよい鞍置いて乘りたらばよかりなん、と言ひしかば、數多の鞍を出して見するに、上田、いと古き鞍を取出して、是こそ、とて彼馬に置かせけり。上田を嫉む者、何條鞍に故あるべき。いざ見よ、とて集りけるに、三浦次郎右衞門と

程經しか共、庫の事は言ひ出されず。雜掌、庭の樣の異るにや、と言ひしに、實にも廣くなりぬ。庫は如何にしたるや、と問はれしに、云々したり、と申す。內の寶物は如何にしたる、と有りしに、皆配り與へて候、と申す。それは誠によかりけり。汝は何を得たるや、と問はれければ、いや一種も取らず、といへば、無調法の事かな、と打笑ひて取合へもせられざりしとぞ。君臣禪理を好まれし故なりとかや。

○中院通村公江戶にて和歌を詠給ひし事

大猷院殿の御時、中院內府通村公御不審の事有りて、江戶南光坊に閉籠りて三年御座しましけるが、秋月を見て、

ゆくかたに身をばさそはで夜な夜なの袖の露とふ武藏野の月

と詠ぜられしを、僧正感吟に堪へずして大猷院殿に申されしかば、三年の逗留旅情さぞあらん。今は歸京候へ、と仰せ出されて、內府京都に歸られけり。

○本多忠義書籍評論の事

鮭延越前は最上義光の長臣、祿一萬五千石なり。最上の家亡びて後流落しけるに、固より家人に慈愛深かりし人にて、士二十人附從ひ、各乞食して養はん、といふ。土井大炊頭利勝五千石與へければ、二十人の士に五千石皆與へて、各二百五十石なり。其身は二十人の許に一日がはりに養はれて、一生を終れり。越前死すれば、二十人の士大に愁傷して一字を建立す。今下總の古河城下の鮭延寺これなり。

○烏丸光廣卿行狀の事

烏丸光廣卿は、常の居間に書物を繙きならべ、四枚の襖二枚開き、机一脚に硯有りて、三本入の扇子箱に筆あり。其間に年月經ても人の入る事無し。故に座したる跡ありて其外は塵滿ちたり。公宴參內の時も扇子箱に硯石を入れ、手に携げ乘輿に入れられけり。この卿江戸に召されて三年御座しけり。高倉屋敷に有りとかや。斯くて歸京あるべき由きこえけるに、兼ねて座敷の前に庫有りしを、留守に置かれし雜掌言ひけるは、公久しく江戸に御座して、廣き所に慣れ給ひ、歸京の後、此庫目前に有りて惡かりなん、とて壞ちたり。庫には、數十年諸家より贈りし物を積みたるなり。其物は書院に並べ、詳に書記して家人に分ち與へけり。斯くて光廣卿歸京有りて、

手にても仕合にて勝つ事あるべし。それは勝ちたりとも上手とはいふべからず。只先を忘れず機を脱かぬをよしとするなり。一の太刀の位に及ばざる事遙なれば譽めざりき、と答へしとぞ。

○東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事

東照宮御病氣重きに及びて、台徳院殿も側に御座します。鉞帳の際に松倉豐後守重正、市橋下總守正總、堀丹後守直倚、桑山左馬助、別所孫三郎を召され、此五人忠ある者なり。且大坂大和口にて武功あり。能く將軍に仕へ奉れ、と仰せられしかば、皆涙を流して只兎角の詞無かりける時、又、別所は祿少けれども、此後も取わけ忠あるべき者なり。大和口にてやさしき言をいひたり、と仰せければ、別所泣沈みてけり。此は大和口にて、城兵引返すを追討たざりし時、別所諸大將の前に馬を乘廻し、先年筑紫にて、島津が退口を尾藤が墓はざりしを太閤怒られき。只今追駈くべき圖を外す事無念なり。斯く申す孫三郎は馬一匹故齒を嚙むばかりなり。如何に人々、斯くは腰の脱けたるや、と大音に呼ばはる。此事を聞召しての事なりけり。

○鮭延越前組下に慈愛ありし事

直の次男なり。

○塚原卜傳劍術鍛煉の事

塚原卜傳は常州塚原の人なり。父を新左衛門といへり。卜傳劍術を飯篠長意に稽古し、伊勢の國司に仕へ、劍術を以て名を得、光源院殿の師たり。其後上野の上泉伊勢守といふ劍術者あり。上泉は新蔭流の妙手也 卜傳また上泉にも學びたり。卜傳が弟子の中に勝れたる者に、一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに、彼弟子或時、道の傍に繋ぎたる馬の後を通りけるに、彼馬跳ねたりしに、ひらりと飛退きて身に中らず。見し人さすがに、塚原が弟子の中にも勝れたるよと言ひしに違はず、と譽めて卜傳に語りけるに、卜傳大に驚きて、さては一の太刀授くべき器にあらず、と言ひけり。諸人此事を不審して、試よ、とて類無き跳馬を道の傍に繋ぎ、卜傳を招きて側に隠れて見居たりしに、卜傳馬の後を除けて通りし故、馬跳ねんともせず。人々謀りしに違ひければ、後に斯と語り、さて、彼弟子の早業を譽め給はぬは如何、と言ひければ、卜傳聞きて、さればとよ。馬の跳ぬるに飛退きたるは、業は利きたるに似たれども、馬は跳ぬるものといふ事を忘れて、うかと通りしは忘なり。飛退きたるは仕合といふものなり。劍術も時により、下

る所に隠れ居けり。或時、云々の事を数直に謀らすべし、と仰せ出されしかば、皆駭きて、数直は江戸に在り。如何に、と申しければ、聞し召し、尋ねて見よ。居ざる事はあらじ、と仰せられける程に、此處彼處探しけるに、東の京に隠れて有りしを頓て召出して、仰に、汝能くこそ来りたれ。来らずばよかりなんや、とて命ぜられける事どもあり。泰平の時と言へ共千里の行程容易からざる事なりと思ひて、後の咎を顧みず忍びて上京有りしに、必ず斯くあらんと知し召されし、明智の遠慮君臣水魚の遇、季世に有り難き例なり。此数直は甲州武田家の士大将土屋宗蔵昌恒が係なり。勝頼亡びし時宗蔵が子の二歳になりしを、駿河の富士の裾野の寺に、土屋が相知る僧有りて隠して育てけり。東照宮御狩の時彼寺に立寄らせ給ひしに、御茶を献けて出でけるを、此子が面魂唯者にあらず。父は何者ぞ、と御尋あり。住持の僧、氏も無きものにて候。と隠し申しけれども、再三詰り給へば、御敵をなしたる者の末にて候。隠し嶺まれて哀に存じ、密に育てて候、と謹んで申しければ、出家させんよりは我に得させよ、と仰せありければ、今は包みて悪かりなんと思ひて、これは武田勝頼が供して、天目山に死したりし土屋宗蔵が妾腹の子にて候、と申しければ、さる義士の子なりけるよ。眼ざしの並々ならぬと思ひたるに、果して違はざりけり、とて召具せられ、後民部少輔忠直と言ひしは此人なり。数直は忠

しが、後に成瀬彼刀の事を語りて、尾張にて死罪人の有りしを試みたるが、快く切れざりき。能出來たるに殘多し。又鍛ひ直させて給はり候へ、といふ。安藤、安き事なり。紀州にて心よく切れたりき。怪しき事よ、と言ひしに、成瀬打笑ひ、紀州にて心よう切れつるに、尾州にて然らざるは、尾張の人骨堅き故ぞ、と戲れしに、安藤聞きも敢ず、いや〳〵尾張の士の腕の弱き故なり、鉛刀にても紀州にては能く切れ候、と答へたり。

○土屋數直執政の事竝土屋忠直成立の事

土屋但馬守數直執政たりし時、金座の者共相謀りて、金に銀を入れて吹き替へられなば、日本國の金甚だ多くなるべし。金の色の損ずるのみにて莫大の利なれども、但馬守用ひられじ。但馬守だに此事を聞入れられなば事行はるべし、と言ひけるを、數直に申す人あり。兎角の答無くて打過ぎられしかば、又人をして問はせしに、但馬守、是は邪なる業なり。金を以て天下の寶とするは純物なるが故なり。其寶を惡くせんとや。思ひも寄らぬ事なり、と言はれけるとぞ。數直、大猷院殿の近習に仕へ申されし比、故有りて咎を蒙り引籠りて有りしに、大猷院殿上京まし〳〵けり。數直密に上京せられしを、親族家人相止めけれども聞入れず。京に著きて傍な

常山紀談　巻之二十三

○直江山城守閻魔王に書を贈りて訴訟人を斬る事

上杉家に三寶寺何某といふ者、下部の罪有りて誅せしを、其一族大に怒りて、死したる人を歸し給はれ、と直江山城守に訟へけり。其下部の罪死に及ばざる事にや有りけん、直江白銀二十枚與へて、跡をとへ、と宥めけれども急用ひず。是非に歸し給はれ、と直江を催促しけり。直江種々にいへども兎角聞入れず。其時直江、然らば訟の如くせん、とて一族三人捕へさせ、地獄に行きて迎へ來れ、とて書簡一通封じて、使に往け、とて首を刎ねさせたり。其書簡に、云々の子細候て三人迎ひに參らせ候。疾く歸し賜はり候へ。慶長二年二月七日、閻魔王冥官披露、直江山城守兼續、とぞ書きたりける。

○安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事

安藤帶刀の子を飛驒守直治といふ。成瀬隼人正正成、或時直治に紀州にて鍛ひたる刀を乞ひ得

其後比叡山の麓一乗寺に隠遁の地を設け、詩仙堂を作りて詩人三十六人の像を壁に畫き、書籍を友として閑居す。後光明帝御即位の時、松平伊豆守信綱賀使として京都に參られしに、丈山と親戚たるゆゑ、度々閑居を訪はれけり。承應元年七十歳に及びて、三州泉の鄉は其故鄉たる故、歸るべき志あり。板倉重宗に斯くといへども許さざりしかば、今よりは京都へ再び出じ。さらば其許へも參らじ、とて和歌あり。

わたらじなせみの小川は淺くとも老のなみそふかけもはづかし

後光明帝、丈山が隷書に能きと聞召し、高木伊勢守守久、勅命を傳へければ、八卦の字を書きて奉る。上皇も又隷書の大字を書かしめ酒肉を賜はる。寛文十二年壬子五月二十三日、一乗寺の閑居に終りたり。九十歳となり。其詩を覆醬集と名附け、今世に行はる。

一乗寺の閑居、今は尼持ちたる寺になりぬ。されども詩仙堂は殘れり。繪像も廢せず。丈山の物具鎗、又如意几なども有りといへり。

者に行逢ふ。遠藤但馬守が士池田勝兵衛といふ者にて有りしが、丈山の功名を感じければ、我は石川嘉右衛門なり、と名乗つて、池田も首一つ得たり、といへば、丈山其姓名を刀の鞘に刻み附けたり。加賀の大軍押續き來れば、又御使なり、と呼はり、押分けて利常に行逢ひ、討取りたる首を見せ申して打過ぎたり。其夜本多安房守丈山と緣有りければ、筑前守利常を證にせよ、と勸むれども、我利名の爲にするに非ず。先祖を辱めざる志のみなり、といへり。此軍に御近習の士首を得たるは、丈山と間宮權左衛門、豐島主膳と三人ばかりなり。丈山御軍令に背きける故賞に及ばず。是より前丈山駿府に有りし時、清見寺の僧說心に禪理を聞きたりしが、出陣の時暇乞とて寺に至り、此軍に御近習の士首を取りたる人三人ありと聞かれなば、其一人は必ず我なりと知られよ、といひたるが果してしかり。東照宮未だ御族を駿河に返されざる中に妙心寺に隱れたり。是より學文の志厚く、日夜となく書を讀み經史に通じ詩を善せり。丈山三十三の時とかや。其後板倉内膳正重昌丈山の流落を傷み、淺野但馬守長晟に語りしかば、長晟賓客の遇にていと懇にせられしかば、安藝に行く。老母孝養の爲となり。母終りて後寬永十三年、五十四にて藝州を去つて京師に隱れ居しに、板倉重宗京都に有りて丈山を勞る事大方ならず。諸侯貴人の會する時丈山を座上に招きて、此老は文武の道に達せる人なり、と敬禮せらる。

石川嘉右衛門重之字丈山は清和源氏にて、八幡太郎の第五男石川義時の末なり。世々徳川家の臣として、十六の時東照宮の御旗本に召出され奉仕したり。幼少より剛雄の人にて非常なりしかば、七歳の時父、此男は必ず日本第一と世に言はるべきにや。若然らずば日本第一の悍悪の人となるべし、と語られしとぞ。大坂夏の陣に丈山傷寒を煩ひ重かりしに、其母本多氏江戸より文して、汝世々御旗本に仕へ奉り、此軍に武功無くば又對面せじ、とぞ勵されける。丈山人に讀せて是を聞き、涙ぐみて物も言はず。五月五日東照宮既に二條の城を打出させ給ひしを聞き、其日は病殊に重く前後を忘じて有りしが、強ひて助け起され、駕籠に掻乘せられて東寺を打過ぎける時に御覽あり。怪ませ給ひ、田上右京に仰せ有りて問はせ給へば、見て歸り、石川嘉右衛門にて候、と申すを聞召し、彼は病重くて死すべきと聞きしに、と仰せあり。丈山八幡に至りて水を三酌掬ひ飲みて、胸の中の苦を頓に忘れけり。其夜は東照宮河内の星田に御陣あり。丈山を召していと懇の御詞をかけさせ給ふ。六日に大坂に押寄せ給ひ、拔駈を禁じ給ふ處に、七日の曉丈山眞先に拔駈して加賀利常の先陣に至り、御使なり、と稱して大軍の中を押拔け、獨山にて敵を討取つたれども、味方其首を奪はんとせしかば打捨てて黑門に打入り、佐々十左衛門と名乘つたる敵を討取り、又敵一人打取つて從者に首を取らせ門を出づれば、馬に乘りたる武

○古田重勝滅亡大河内元綱先見の事

古田織部重勝は太閤の家人、若き時より茶事を好きて千利休が門人にて、此事好む人は重勝を一世の師匠とす。元和元年夏兩御所京都を打立たせ給ふを待ちて、天子を取り參らせ二條の城を攻取り、京中燒拂ふべし、と大坂に心を合せし事顯れて、父子とも誅戮せられけり。此織部正は古き珍器の全きをば好まず。されば書畫樣の物も彼處を切りこゝを裁ち多く損ひて、さて補ひ綴りて用ひしを、世に興有る事と思ふ人、多くこれに效へり。松平伊豆守信綱の父大河内金兵衛元綱人に語りて、此古田は必ず禍にかゝりて死すべき者なり、と言ひしに、果して違はざりければ、人々、爭で斯くは相しける、と問ふに、元綱、されば古の寶器と聞えし物世の亂に失ひて、今殘れる處の物は皆神の護持にてこそあらめ。それを己が目を悅ばしめんとて一人の好に任せ毀ち破る事、神明必ず惡むべしと思ひし故、其人の身も全うして終る事を得じと言ひたりき、と答へしかば、聞傳へて名言とせしとぞ。

○石川重之功名竝隱遁の事

べし、と答へて出でしを、さばかり長政を恨みて出奔せしに、今長政の武勇を譽揚げつるぞかし、と感ぜられけり。政次、安藝に船を停めし時、正則福島丹波をもて招かれしかば、三萬石の祿にて仕ふべし、といふ。正則、いや〳〵丹波を始として皆二萬石與へしに、政次に三萬石過分なり、とて聞かず。丹波、今政次に三萬石與へられば、政次だに三萬石なり。丹波も他の家に行かば四萬石なりと人申すべきにて候。是臣等が武名を揚ぐるにて候、といへども、正則同心無くて、丹波行きて斯くと傳ふ。此より前關ケ原の軍に、浮田秀家の兵七八十人亂れ足に成りて、正則の軍の前を落行きしに、丹波卑き地に有りて知らず。正則の旗本より告知せければ追駈けたり。此時政次丹波が前に來り、引後れたる敵あり。など追討たざるや、といふ處に、首數多取り來りしかば政次大に譽めて歸りしが、丹波は政次に敎へられしと世に言ひあへり。丹波心に怒りを含み居たりしかば、此時語り出し色を變へて、我に敎へたりと世に言ひ振れられしや、と言ひけるに、政次打笑ひ、器量の小き人よ、我と足下と武功相同じ。我足下の下知を受くべきや。足下又我に敎へられて功名すべきや。人の言へばとて怒られけるこそ可笑しけれ、と答ふ。丹波詞無くて歸り、政次は我に大に優れり。及ぶべきにあらず、と譽めたりけり。

後藤は元黒田長政の士大將なり。長政或時物語の序に、今我に代りて軍兵を下知し、大功を立つべき者我士大將の中に誰ならん、と言はれしに、菅政利、人々各其器量有りと申せども、又兵衞に肩を並ぶべき者は候はず、と答ふ。長政飽まで勇將なりしかば、政次が武略を妬まれし故氣色悪く見えけり。政次豐前の小熊の城に在りて、隣國細川忠興と中悪かりければ、實は小倉の防なり。故有りて政次が子隱岐追出されしを呼び返し給へ、と長政に申せども、聞入れられず怨むる時、政次が二男又市を長政寵せられしが、博多の祇園の宮にて猿樂の有りし時、鼓を打て、といはれしかば、小熊に行きて斯くといふ。政次怒りて、父子共に出奔しけるを、忠興鐵炮二百に士を添へて迎寄せられしかば、長政と既に軍に及ぶべく成りしを、江戸より和平せられ、政次をば何方になりとも送り候へ、となりしかば、忠興政次を餞して酒宴あり。松井佐渡、有吉賴母並び居たりしに、忠興、我黒田の家と不和なれば、之より後の事計り難し。長政の軍だて能く知つたるらん。如何にして討勝ち候べき、と問はれければ、政次、兩方に加勢も無くて軍あらば、國の大小と申し必定甲斐守打勝ちなん。され共容易く勝つべき計の一つ候。甲州は人に越えたる勇將にて、いつも先を駈けられ候。鐵炮に優れたる士五十人許撰みて、鎗の合ひ候時五人討取りなば、其中に必ず甲州有る

○後藤又兵衛が事

後藤又兵衛政次、秀頼に招かれて大坂城中に有りけるが、夏の軍評定に、政次、國府越くらがり嶺に打つて出で、地の利に據りて軍するの外道無し、といへば、則ち大和口の先陣して平野に打出でし處に、東照宮より相國寺の瑤西堂を使にて、關東の御味方に參らば、播磨國を賜はるべき由なり。政次、仰せ誠に忝しと申せども、御味方仕らん事思ひも寄り候はず。今大坂の勢強く關東危く候はば、別に存ずる旨も候べし。今大坂の運傾きて、秀頼亡びん事近きに候。其を見て二心を抱かん事は弓矢取道にあらず候。此由を申されよ。是は物語にて候程によく聞かれよ。今日本國に弓取多しと言へ共、政次に優れる者有りとは覺えず候。其故は、去年より政次を頼み思召候は、高麗まで攻められし豊國明神の嗣にて候。また政次内通せば、天下分目の軍容易く破るべしと仰せられ候は、德川殿にて御座しまし候。天下の勝敗を政次一人が身に懸けたるは思出ならずや。死しても冥途の面目なり。政次生きて候はば、一日に破るべき大坂も十日は支へ候べし。政次死したりと聞えなば、百日守るべき大坂も一日の中に破れ候ひなん。政次疾く討死するを、德川家の恩に報ゆべき志と存ずる也、といひけり。

○大坂御陣中御支度の事

大坂冬の軍に諸軍に兵粮を賜ふ。凡そ三十萬人、一日に千五百石なり。遠國の兵には一倍を增賜りけり。夏の軍に東照宮松下淨慶を召され、大坂の賄支度膳米五升、干鯛一枚、味噌、鰹節、香物、少しばかり用意せよ。其餘に及ばず、とぞ仰せられける。されば厨の入用、只長持一棹にて事足りぬといへり。

○本多落合功を論ずる事

大坂夏の軍に、越前の士大將本多伊豆守富政が一陣に、首百七十三取りたりければ、我に優れる首數は有らじ、といふ處に、落合美作守、我こそ增りたれ、といふ。伊豆、何故ぞ、といへば、落合聞きて、本多には、組に附けられし士の祿凡七萬五千石に及べり。斯く申す美作は一萬石の祿にて、首四十八取りたり。祿の多少にて士卒の多少ある事は言ふにや及ぶ、といへば、東照宮の使番諸星金右衛門、柱に倚りて居眠りしが、目を開き、落合の詞尤理なり、と言ひしかば、本多詞無くて止みぬ。

歌山に縁の人有りけるに告げ遣りて、迎の人来て紀州に匿れ居たりしが、程なく赦を蒙りてけり。

左平太長久手の軍には小牧に殘されしが、朋輩の石黒八十郎に、年幼しとて旗をだに見ざるは口惜し。後の咎は有りともいざ、と言ふより馬に乗り、長久手指して駈行く時、石黒丹羽に向ひ、今日の敵は池田ぞかし。池田の士に叔父の善内といふ母衣の士あり。行會ふならば如何にせん、といふ。丹羽、人々君の爲とは言へ共、叔父を討たんも如何なり、など言ひて後には駈離れしが、軍既に終りて落行く武者有りしに、丹羽追附いて馬より突落せしが、母衣懸けたる敵なれば、名乗れ、といふに、石黒善内、と答ふ。丹羽聞きて、云々の故ありとて、落ちられよ、と言うて馬に搔乗せたる處に、高木筑後守走來り、何とて敵を落すぞ、といふに、丹羽子細を答ふ。高木、幼年の働といひ其志を感じ、後に東照宮に其由を申す。小牧にて信雄の陣所に渡らせ給ひ、勝軍の祝に酒宴の有りけるに、左平太事を問はせ給へば、只今給事せし小姓なり、と答ふ。今日斯る事の候、と仰せられしとかや。其後秀賴に仕へて大坂の軍の前關東に使せしかば、之に乘りて奉公せよ、とて馬を賜はりけるとなり。

何に、と問ふに、澤原言ひけるは、關東の兩御所の運強く御座しまし候を感じ奉りての事に候。士たる程の者骨を刻まるゝとも、主君の行方を申すべきや。此度大坂軍に勝たば、兩御所落行かせ給ふべし。其時御邊達を搦めて、今我を責められ候如くならば、主君の行方をも白狀すべき心なればこそ、斯く我を責めらるゝならめと思ひて、覺えず涙の流るゝと申しければ、人々詞無かりけり。東照宮聞し召し、類無き忠義の士なり。能く勞り候へ、とて御赦有りけるとぞ。今細川の家に其子孫あり。又池田の家にもあり。澤原は備前磐梨郡の村名なり。孫太郎が一族此村より出でたりといふ。掃部が居城の跡、備前和氣郡和氣村の東の山上にあり。

○丹羽左平太才覺城を落つる事附左平太初陣義氣の事

丹羽左平太は織田信雄の小姓なりしが、後秀賴に仕へ、大坂落城の時泉州貝塚まで落行きしに、野伏道を遮り取巻きければ、丹羽、我を殺さんとにや、又甲冑を奪ひ取らんとや。著たるもの剝がれなば恥なり。我既に日本國を皆敵にしたれば世にあらんとも思はず。出家せん。僧一人呼びて給はれ、といへば、野伏僧を連來る。丹羽、さらば、と言ふ儘に立寄る體にて僧を犇と押へ、刀を胸に當て人質にしければ、野伏等も詮方なく、何方迄も送り申さん、といふ。夫より紀州和

大坂落城の日、輿國公の士齋藤織部、黒母衣かけて西國道に落行く敵に追附き、すでに討取らんとせしに、彼敵ふり顧りて、落武者の首取られたりとも、さばかりの武功とも言ふべからず。如何に助けられんや、といふ。齋藤、従者に差せたる相印の腰指を與へて、疾く落ちられよ。見咎むる者有らば、池田が内の齋藤織部といふ士の従者ぞと言はれよ、と教えければ、忝き由謝して落ち行きけり。歸陣の後齋藤が友來りて、大坂にて落武者の中に我縁の者の候が、救け給ひて相印まで與へられし故、遁れ出でて密に參りて斯く申せし、と言ひけり。齋藤後人に語りて、我其時此武者を討たんは易し。されども落武者の降參するを斬りたりとも、母衣懸けたる我に如何許の功名とかすべき。今は却つて奥深く覺ゆ。猥に人數を殺すのみを武と思へるは、大きなる僻事にてこそあれ、と言ひしとぞ。

○澤原孫太郎節義赦免を蒙る事

明石掃部頭全登大坂に籠りしが、落城の後討死しけるや落行きたるや定ならず。明石が士澤原孫太郎一説に孫を生捕りて明石が行方を問はるゝに、知らず、といふ。さらばとて拷問に及びけれ共更に言はず。あまりに嚴しく責められて涙を流しければ、行方を言ふにこそあれ、とて、如

大坂落城の時、渡邊内藏助糺は矢倉にて二男三男を刺殺し、乳母に、嫡男を連來るべし、と言ひけるに、乳母、心得候。白き帷子を著せ參せ申さん、といひて其場を遁れ、濕帋に包み縄をもて塀下にさけ落し、其身も遁れ得て彼子を市中の厠に隱し置き、日數經て逃去らんとせしを、關東の軍兵に捕へられぬ。色々責問ひたれども、渡邊に從へる士水谷清兵衛といふ者の妻にて、我實子に紛れ無し、とて其餘の事を言はず。彼子も僅六歳なりしかども、如何に責められけれども、内藏助が子たる事をいはず。さらば金二兩出さば助くべし、と言ひしかば、乳母則舊鄉渡邊に到り百姓に賴みしに、さすが舊好を思ひ、且は乳母の忠義を感じ金二兩授けしかば、則ち彼小兒を乞ひ得て京都に赴き、南禪寺の喝食となしぬ。十八歳に及ぶ時、細川越中守忠興、一柳土佐守末榮など緣の方より還俗させられしかば、程經て文照院殿甲府に御座しませし時、此事を嘆きて遂に甲府に仕へ、渡邊權兵衛とて五百石賜りける。内藏助は大野に、秀賴公の御命別儀なく御座さん樣を計り見よ。時を待つべし、とて江州に落行きけるが、秀賴自害の由を聞きて、立ながら腹を切つて死したりけるとぞ。

○齋藤織部落武者を助くる事

る人を呼びて、昔より名將も搦め捕らるゝ事例多ければ、露ばかりも恥と思ふ事なし。然るに斯る賤しき食物を据ゆる禮儀やある。疾う〳〵首を刎ねてこそよけれ、と云ひける時、井伊掃部頭側を打過ぎ之を見て、法も無き振舞どもかな、と大に怒り、御厨に下知して潔く料理を調へさせ、縄を解かせ座敷に長曾我部を招き入れ、いと懇に勞れを休め給へ、と言はれしかば、長曾我部、是こそ禮儀を知りたる武將の道よ、と悦びて、始終少しもひるめる氣色は無かりけるとぞ。

○大野道軒生捕らるゝ事

大坂落城の後大野道軒或は作大を生捕り、二條の城の駒寄に括り附けたるを、立寄りて見る者夥し。皆いふ、道軒は聞きしよりも大男なり、といふを聞きて、さすがに士たる者とも覺えぬ詞かな。兼て我を斯く縛めし如く、汝達を一々搦めんと思ひしに、運命盡きぬれば口惜き事なり、と少しもひるめる色無かりしとかや。

○渡邊内藏助が子城を落ちし事

馬を引返す。木俣、さらば、とて赤旗を進めけり。

一説に、盛親を生捕り、伏見に參り御女關に到る。井伊直孝、安藤對馬守、土井大炊頭列座し、軍の事を問はるゝに、盛親申しけるは、六日の晩必死の軍すべしと存じ極めたるに、赤旗の横合に來りて候を見て、疲れたりし軍兵故打負けて候、といふ。格子の内に台徳院殿の御前に侍臣二三人立ちて、其陰より盛親を御覽有りしに、盛親も是を察しけるにや、其方を屹と見て居たりけるとぞ。中内は主君の此期に及ぶまで附從ひたりし忠節を感ぜられ、蜂須賀に賜はり御許されを蒙りけり。一説に、長曾我部を生捕りて繩二筋附けて白洲に引据ゑたり。台徳院殿御側の士を以て、數千の大將たる身自害をすべき事なるに、さは無かりしは如何ぞ、と御尋ねあり。盛親臆れたる色も無く、朝の軍に打勝ちたれども後の軍に赤備の軍兵に打合ひて、味方數多討死し敗北せし事是非なき次第に候、と申す。又討死するか自害するか、二つの志も無かりし事返す〳〵も不審なり、と再び御尋ね出されしに、長曾我部承り、盛親も一方の大將たる身に候へば、葉武者と同じく輕々しく討死すべきに候はず、と申す。再び兵を起して恥を雪ぐべき心言外に顯れたり。さて其後引出して警固し居たりしに、飯をうづ高く盛りて長曾我部に据ゆる。盛親警固の士の中溫順しやかに見ゆ

大坂落城の日、興國公隆朝臣池田利は城の北に陣し給ふ。兼て、下知無き前に軍を進むべからず、と仰せ出されしかば、陣を整へて御下知を待つ所に、寄手門々に押寄せしと聞えしかば、野村越中に、見て來れ、と仰せらる。野村馬を早めて行く所に、城より煙燃上りければ、寄手攻入りたりと思ひ、先陣伊木長門、池田出羽が陣に馬を駈寄せ、疾く川を渡して攻入り候へ。仰ぞ、と言ひければ、先陣卽ち攻め入りて、首六百餘を得しは野村が功なりけり。

○長曾我部盛親生捕らるゝ事

長曾我部盛親は大坂の城落ちしかば、落行きて葭の中に潛まり隱れ居て、其臣中内惣右衞門飯を持ち行きけるを、蜂須賀の士長崎三郎左衞門が足輕、もと土佐の人にて中内を見識り居しかば、斯くと告げて遂に二人共搦められけり。盛親捕れとなりて後藤堂高虎と軍せしに、井伊の赤旗に妨げられ、高虎が首を見で口惜き、とて齒噛しけるとなり。此は高虎使を直孝の許に遣りて援を乞はれしに、直孝も木村を切崩し、追討になりて士卒散々なれば、詮方無く、戰は一手切、と答ふ。高虎の使木俣清右衞門に逢ひてけり。木俣、彼に見ゆるは伊達政宗にや。疾く行きて援を乞はれよ、と言ひしかば、使、道遠き所に狼狽へ行く武士や候。歸りて軍に會はん、とて

物笑ならん、と言ふ儘に、手づから振りかたけて、城中千疊敷に歸り入りけり。

○郡主馬が事

郡主馬良利は秀吉の臣なり。石田權威を恣にせんと計り、人を馴けん爲に公用に金銀を出す事あれば、必ず其半を分けて密に私に與ふ。郡にも斯る事有りしに、爭ふならば禍に逢はんと思ひ、辱き由石田に謝して、其金は大坂の庫に納め置きけり。夫より病と稱して出仕もせず。後に族奉行たりしかば、大坂落城の日千疊敷に歸りて床の上に族を置き、去年の冬藤堂高虎天王寺に押入りし時、速水時之と謀を合せ夜討すべきを、寵臣に妨けられぬ。住吉平野の陣所に忍を入れ、火を懸けて不意に一軍せんと言ひし謀も用ひられず。運盡きぬると思へば口惜し、とて從者に、此小脇差は黒田長政我に贈られし時、用ふる事有りて功を立てんと言ひし詞ある故なり。よく長政に言ひて返し候へ、と遺言し、其子兵藏と共に自害す。行年七十一歳とかや。秀吉の時より黄母衣許されたり。

○野村越中才覺の事

大坂五月七日、毛利豐前守勝永は軍を押出せしが、住吉の松蔭に白旗見ゆれば、此駿河の大御所なるべし。一文字に切つて懸り、討死せんと志して兵を進むる所に、白旗見えざりしかば、長井傳兵衛、水野伊右衛門に見て來れとて遣りけるが、暫く有りて乘歸り、住吉に白旗は見えず、と言ひけり。此は東照宮御旗を俄に巻かせ給ひ、茶臼山の後に控へさせ給ひける故とかや。勝永は小倉の城主壹岐守が子なり。勝永が子を式部といふ。父子共に秀頼に從ひ、蘆田矢倉に籠りて自害せり。

○伊藤武藏守馬驗を拾ふ事

同じ日秀頼は樓門に打出でて、澤金を緋威にしたる物具著て、太閤の時より傳へられし金の切さき二十本、茜染の吹貫十本、琥珀の千本鎗を並べたて、太平樂と名附けたる七寸有りし黑の馬引立てられし所に、先陣皆敗北しけると聞えければ、今は是迄なり、敵の中に駈入り討死せん、と進まれしを、速水時之、今打つて出でたりとも勝利候まじ。疾く本丸に入らせ給へ、とて引返す。斯りければ士卒散々に成りて馬標を棄てたりしに、伊藤武藏守後れて歸り入りしに、是を見て、朝鮮迄聞えし豐臣家の馬標を敵拾ひなば、大坂城中に男子は一人も無きと日本國中の

よ、と言へ共、廣瀬、士の恥は同じ事よ。孕石を捨殺し逃けたりと言はれん事こそ口惜けれ、とて二人共に旗竿に手をかけ討死しけり。廣瀬をば青木が組の稍葉伊織討取りけり。廣瀬は美濃が子、孕石は主水が子にて、共に甲斐の武田の家の士なり。

○廣田圖書が事

廣田圖書は水野勝成の士にて、大坂五月六日の軍に功有りしかば、明日は殿の馬前にて相働かん、といへば、勝成悦ばる。明石掃部が陣を打破る時、廣田鐵炮に玉藥を込み、一放と思ひて打つたるに、立消しければ、鐵炮を投捨てて鎗を取り、築瀬又右衛門といふ敵に渡合せ突伏せられしを、勝成走寄り、築瀬を討取られけり。後に鐵炮を見しに、火蓋を切らで有りしとなり。廣田人に語りて、事の急なるに臨みては、思ひの外に慌つるものなり。我既に先駈數多して自負せしかば、殿の前にて鎗脇を打たんと思設けしに、斯く狼狽へぬ。天晴すべきと工みたる事の斯くの如くなれば、まして不意の事をや。能く思慮すべき事ぞ、と語りけり。

○毛利勝永軍配相違の事

れし鐵の筋金入りたる鼻ねぢを左に持ち右に刀を提げ、敵七八人切伏せ、多兵に取巻かれ散々に戰ひ、痛手二十餘ヶ所負ひて討死せられしかば、大屋は其屍の上に取附きて切死にしたり。藤井、臼杵を始として皆同じく討死す。忠朝の首は雨森取りたり。後家に仕へて六千石與へらる。殿学

○孕石備前廣瀬左馬助討死の事

大坂夏の軍に、東照宮は伏見に御座しまし、井伊直孝は、宇治の北六地藏より軍を出して大坂に打向ふ。

東照宮は伏見船入の矢倉より、行軍の有樣を見物して御座しませしとなり。

宇治より伏見にかゝる道にて旗を張立てず。直孝、般若野宮内を使にして旗奉行孕石備前、廣瀬左馬助に、何故ぞ、と問ふ。二人承り、旗の事は此二人に任せられ候へ、と答へて押通る。直孝怒りて又使を立て、是非張立てよ、と下知すれども聞入れず、伏見を過ぎて旗を張立てたり。此は宇治より伏見に行く道、東照宮の御座します所に向ひ奉るが故に、斯くはしたりしなり。五月七日、直孝御旗本の先陣として、天王寺の東北にて大坂七組の敵に向ひて相戰ひ、軍危かりしかば孕石廣瀬に向ひて、我年七十五、又恥を雪ぐべき時なし。討死せんと思ふなり。疾く引退れ

藤忠左衛門、大屋作左衛門、藤井次左衛門、臼杵七兵衛等起請文を書きたりけり。小野勘解由は、士の軍に出でんに命惜む人やある、とて嘲笑ひて打立ちけり。斯る所に五月七日天王寺口の先陣を忠朝に仰せ出されければ、忠朝大に悦ばるゝ時、小野進出で、明日一の幸にて討死、二には一番鎗、三には高野に入らん、といふ。忠朝打頷きて居られけり。茶臼山の下へ進んで毛利豊前守勝永に向ふ時、小野、斯る足輕の並居様は忽ち破るべし、といふ。忠朝耳にも聞入れず。小野、口際の黄なる殿の何を知り給ふ、と嘲る時、加藤も進み出で、足輕の並居候有様は軍には見ず。只大多喜にて鹿狩にはよからん。彼に見ゆるは忠左衛門が足輕なり。誠に戰に向ふ有様なり、と打笑ふ。忠朝、憎き詞かな、とて眉尖刀を提げて懸られしかば、小野、只今討死して殿に見せ申さん、と言ふ儘に眞蔕に馳行く。加藤は眉尖刀の鐏にて敲かれて是も乘出す。忠朝は百里と名附けたる馬に乘り、一文字に進む所に、小野敵に取巻かれ鎗玉に上りて討たるゝを見て、本多出雲守ぞ。續け者共、と大音あけて呼はりけるを、毛利に附けられし秀穎の物頭雨森傳左衛門以下七八人、透間も無く懸りければ、忠朝持鎗纔かざりしによりて、數鎗を押執り突伏せ突伏せ戰はれしを、紺の羽織著たる足輕二間ばかりに詰寄せ鐵炮にて打つ。忠朝の胸に中りしかども、忠朝ちつともひるまず馬より飛下り、其敵を只一太刀に切殺す。口取に兼て持たせら

菴原助右衛門に向ひて、是非懸れ、と言へども、助右衛門同心せず。待ち受けたる箭先に如何にして懸るべき、といふ。彦四郎、其箭先へ懸りてこそ勇士とはいふべけれ、と言へども同心せず。彦四郎、さらば懸りて見せん、といふを押止むれども少しもためらはず。敵の中に駈入りて討死しけり。帯刀馬上に麾を取り軍兵を下知しける時、従者彦四郎が屍を引退けんとするを見て、犬に喰せよ、というて乗廻る。北ぐる味方を立直せしが、軍終りて後大に愁傷の色現はれしとぞ。

○本多忠朝討死の事

大坂冬の軍に、東照宮、本田出雲守忠朝に、京口に行きて川水を見來れ、と仰せらる。忠朝歸りて、水の勢甚だ強く候、と申す。又井伊直孝に、見て來れ、と仰せられしに、直孝歸りて、水淺く渡り易けに候、と申すを聞召し、出雲は父に劣れり。川水は女童も知る所なり。出雲に見せしむるに及ばず。出雲を遣りしは心有りての事なるを知らざりしよ、と仰せられけり。物見の詞は子細の有るべきに、心附かざりしにや。是に依りて忠朝、口惜しき仰をも受けぬるかなと思ひて、夏の軍に必死を期して、我と同じ枕に死なんと思ふ者は起請文を書け、と言はれしに、加

常山紀談　巻之二十二

○松平助十郎先登戦死の事

大坂五月七日の軍に、水野隼人正が組の松平助十郎秀信、今日の一番は他人に先を駈さすべからず、といふ。水野丹宮、口廣き事な言ひそ。誰か汝に劣らん、と争ふ。助十郎、各よく聞かれよ。今度朋輩に一番の馬は吾馬なり。上田吉之丞が弟子にて、敵は許印可まで極めたれば、誰か先を争ふ者の有るべき、といひしが、果して一番に乗り出し、敵に向ひて討死したりけり。

○安藤彦四郎討死の事

安藤彦四郎重能は帯刀の子なり。成瀬豊後守が組にて台徳院殿の御小姓組なりしに、武士長生して諸方の事に逢ひ武功多く、死なずして世を送るは、さまで勝れたる勇士とは云ひ難し。只潔く討死せんこそ本意なれ、と常に言ひけるが、大坂五月七日に、一番首といはば彦四郎、一番に討死といはば彦四郎と思ふべし、といひて、しなひの指物を巻きて井伊直孝の先陣に行き、

控へ居たるを、本多伊豆守見て、片桐は必ず討死すべし。あはれ赦され候へかし、と申せば、忠直、片桐呼べ、とて使番須田長左衛門先陣に乗行き斯くと言へば、片桐、忠直の前に参り、冑を脱ぎ涙を流し謹んで居たり。忠直其時、汝が日比の罪許し候ぞ、と詞をかけらる。片桐、今の時に至り斯る事こそ心得ねと思ふ色顕れ、忠直の方を屹と見て馬引寄せ打乗り、先陣に向ひて、軍始まると冑首を得たり。越前の一番首なり。

○横田佐久間井伊家の陣へ御使に行く事

大坂の軍五月六日に井伊直孝打勝ちたりしかば、東照宮より横田甚右衛門、台徳院殿よりは佐久間將監を使に命ぜられ、直孝が陣所に行く。佐久間先に歸りて、直孝、今日の軍に打勝候へ共、川手主水を始めとして討死多く、明日の先陣如何候らん、と申す。東照宮聞召し、聞かぬ體にて御座します所に、横田歸りて、直孝大利を得て、明日も勝ちたる勢に乘りて、殘る敵を剩さず討取るべしと勇み申す、と申せば、東照宮、さぞあらん、と悦ばせ給ふ時、横田進み寄り、爰に一つ思慮あるべく候。直孝が軍兵過半手負ひ死人も多し。如何に心早りて候とも、明日の先陣は繰換へられ候へ。直孝畏り候はずとも強ひて仰出され候へ、と申せば、東照宮、我も左思ひつる事よ、とて加賀利常、本多忠朝を先陣に命ぜられけり。陣中の使者は心得有るべき事にこそ。

○片桐丹後守一番首を取る事

片桐丹後守は越前忠直に仕へしが、大坂夏の陣に勘氣を蒙る事の有りしかば、先陣に忍行きて

んで取固めければ、道明寺口より敗北して城中に引入る。敵道を塞がれ詮方無くためらひ居しかば、了大に悦び、高虎の許に使を立て、敗軍の敵數萬の歸路を立切りて候。軍兵をだに賜はらば、疲れ果て氣おくれしたる敵を殘らず打破り、大坂の城をば藤堂一手の武勇にて攻落し申すべし。疾軍勢を寄せ給へ。平野を固く守り、敵を打破らん事掌の中にあり、と云ひけれども、高虎更に用ひず。使を立て、何とて引返さざるや、と怒らるゝのみなりしかば、了も力なく平野に火をかけ軍を返しけり。これも平野の煙にて城中に引入る敵を妨ぐるの術なり。此時高虎兵を進めば、眞田も毛利も城中に歸り入る事を得まじきに、と世に言ひしとぞ。直孝、高虎の陣所に行かれしかば高虎對面し、今日先陣におくれたる者の候て、同姓にて候物主數多討死し口惜く候、と語られければ、直孝、我敵に勝ちて北ぐるを追ひ候時、筵の差物差して軍兵を下知せし士大將の候ひしに、强敵を切靡け軍兵を下知せし有樣、天晴大剛の物主にて候。其人は如何に、と問はれしに、高虎物も言はず。其時了胄を脫ぎて進み出で、筵の指物差し候男は此勘兵衞にて候。天の冥加にて、今日の武功を井伊殿見屆け給はり候、と大音に申せば、高虎愈怒り憎まれし程に、了終に藤堂の家を去つて京都に赴き睡庵と號し、寬永年中まで存命居たりしとなり。

南の方に懸離れ、思ふ程戰ひて晴なる討死をしたりけり。了が兵少ければ少し引退きて、畑の高く卑き地を便に兵を集め、盛親と互に間近く睨み合ひて控へ居たる處に、高虎使をもて、何故に引退かざるや、と七度まで下知せらる。了聞きも入れず。此一陣にて強敵を切崩し候。旗をだに押詰められば、北ぐる敵を追つたて大利なるべし、と答ふ。高虎また使を立て、今朝死すべき所を遁れ、面目無くて退かざるやとて引返せ、と下知せらる。了聞きも敢ず、斯る廣き軍場にては、勝つも負くるも所々にて様々に分れ候。味方の物主軍の道を知らず。下知する業も無く、疎駈して敵に切崩され、多くの味方を捨殺し旗をも棄てて敗れ候を、殿には忠と思召候哉。心得難し。斯く申す渡邊は、今朝より敵に比ぶれば五分一又は三分一の軍兵にて毎度打勝ち、八尾にて味方を扶け横合に敵を破り候。渡邊無くば味方は泥に追入れられ、一人も殘らず皆打たれ候べし。淺間しき味方の物主の有様に候。盛親僅の兵にて控へ居るを討漏さば、殿の弓箭の恥なるべし。疾く旗本を寄せ給へ。盛親を容易う討取り申さん、とて彌退く色は無かりし處に、直孝軍に打勝ち、赤旗押立て勇み進んで押來りしかば、盛親が旗本色めきけるを、了見て、時こそよけれ、と吶と切つて懸り追立てたり。久寶寺より城兵も足を亂して敗北するを、剩さと鐵炮を打懸けて追詰むれば、盛親が旗竿も悉く打折られたり。了は三百餘人の首を取り、平野まで進

計りし慴よ。渡邊に優る武功を立てん、とて了が詞を耳にも聞入れざるなり。長曾我部盛親は矢尾の堤森ある處に進む所に、朝霧の間切より物色は定かならねども、南の方より紺地の白きもちの紋附きたる旗差させて敵懸り來れば、堤の上狹ければ、旗を後の卑き所へ下して立つるを、敵は北ぐる、といひて仁右衞門先駈して馬に鐙を合して、駈行きしかば、桑名乘續きて、一陣の下知せられ候身に一騎駈は僻事なり、といへば、仁右衞門振顧りて、渡邊が已一人武勇に誇るが口惜さに、討死までよ、というて馬を乘放し、鎗を横たへ大音あげて懸りしを、盛親が兵鎗の鉾を揃へ堤に折敷きたるが、盛親、間遠なるに一人も立上るべからず、と下知し、近々となりける時、一同に立上り、えい〳〵と聲をかけ鎗を並べて敵立てければ、仁右衞門其處にて討死し績いて懸りける。藤堂が軍兵颯と崩れ、胄の緒を締めたる士六十三騎歩卒三百餘人討たれて、一支も無く敗北しけり。了は山土にて向ふ敵を追崩し、南を見れば先陣敗れて、旗を捨て我先にと逃ぐる處に横様に駈向ひ、盛親が亂足を追返し、仁右衞門等が討たれし地を踏敷きたり。盛親は矢尾一町ばかりの西に橋を後に當てて控へ居たり。了愈勇み切つて懸らばやとは思へども、先に首取りたる者共皆旗本に行きて、了が左右三十騎許に過ぎず。斯る處に母衣の士山岡兵部已下七八騎馳來りければ、了頓て押寄せて盛親が陣に切つて懸る。山岡兵部、矢倉長藏二人は

右衛門、何故ぞ、と問ふ。了あれを見られよ。手に取る程に近き敵を打捨てて道明寺に行く樣や有る、といへば、仁右衛門も、尤なり、と同心しけり。高虎、何とて進む味方を押止むるや、と母衣の者をもて下知せらる。了頓て高虎の前に參り云々なりと申せば、高虎、如何せばや、と思慮の氣色なり。了、何の手段の候べき。懸り來る敵に辭退する事や候。相懸にして打破るの外道無し、といへば、さらば仁右衛門呼べ、とて下知せらる。了聞きて、此處泥にて足入なり。陣を備ふべき地無し。敵間未だ四十町もや候らん。横堤は是より十町許も有るべし。横堤まで細竪の道四筋見え候。南に向ひたる味方を西向に押直し、横堤まで進んで其處にて陣を整へ一軍せん。北二筋の道をば下知し給へ。南二筋の道を押行く味方は勘兵衛下知して、横堤にて押止め列を正し、南北一つに合せて候はんには、必定味方の勝なるべし、と云ひて、馬印は四五町ばかり後に控へさせ、細道を乘行きて、藤堂仁右衛門、桑名彌次兵衛等に斯くといへば、北より進む藤堂新七、同女蕃等一騎駈に馬を乘出し、我先にと西郡萱根を指して進み行くを、了見て、さらば南の味方を押止めても何の用にか立たん。疾く懸られ候へ、と云ひ捨てて、了は山土阿野村に向ひけり。高虎の士大將、我も〳〵と八尾道を西に地藏堂を見て駈行きしは、了、去年故有りて高虎に暇給はり候へと云ひし事の有りしに、今朝より殿の前に出て、勝敗の理己一人して

の人々に向ひ、前の仕業無禮に似て候へども、武士の義理と申す物に候。若城中の庫の物一つも失ひなん時は、堵田が士共は、盜をして出奔したりと申されん事口惜く候て計ひき、と言ひけれども、答ふる人無ければ、鑰を了投出し返して大門を啓かせ、殿して城を出で大安寺に至り、夫より皆人々分れ去りけり。長盛高野にて了が下知せし始終の有様を聞き、九千の軍兵馬も凡八百匹も有らんに、能く下知したり、とて深く悦び、感狀を了に與へしとなり。了藤堂家に仕へて祿二萬石、子の長兵衞にも三千石與へられしとぞ。

新に奉公しけれども世に譽高き者なれば、高虎寵せらるゝ事大方ならず。舊臣共大に嫉み恨み合へり。大坂五月六日の軍に了は先陣の中の手なり。六日の朝道明寺に軍を進めんや如何に、と評定未だ決せず。了、矢尾平野は兵を下知すべき地利にあらず候。見て來らん、とて猛々緋の羽織を著鹿毛なる馬に乘り、千塚より五六町も打出でけるに、朝の物見堺與右衞門に逢ひ、如何に、と問へば、後藤又兵衞とおぼしくて軍を出し、早水野日向守と鐵炮を打合ひ候、といふ。了聞きて、堺に士一人添へて返し、疾く旗を寄せられよ、と云ひ遣し、頓て片山まで乘行き西の方を見れば、八尾より若江まで大坂の軍押續き、しぐろうで東方の先陣に目をかけ馬の鼻を揃へて進み來る。了さてこそと思ひ馬を引返し、道明寺を指して進む味方を押止むる。藤堂仁

は一人も逃出でず。又城中の士百餘人、金銀を與へずば出奔せん、といふ。了大に怒りて、城中の藏に有る金銀は皆殿の物なり。殿の仰無くて爭か出すべき。且此城を墓所と思ひ定めたる身の、金銀何にかはせん。出奔せんとの用意ならん。錢一文も分つべからず。斯かる者に兵粮米を費さんより疾く出奔せよ、と罵りて、三の廓より妻子を本丸へ入れければ、横卷儀右衞門も續いて然したり。藤堂高虎、本多正純、郡山に押寄せて、此時長盛は高野にて殺されしなど言振らす。大坂より馳來る士卒を合せて九千餘人有りしを、了下知して持口を配り、日夜打巡りて怠を戒む。凡將無くて楯籠るものは、各疑ひて心々に成る事常なるに、了が下知より鎭りて城に將有るが如し。長盛、高田遠江、山川半兵衞に書簡を持たせ、城に庫の物を添へて目錄を記し、藤堂、本多に渡し候へ、と命ぜられしかば、さらば、とて大手搦手の門の鑰を、高田寄手の士に與ふ。かゝれば奉行をもて門を守らせ、本丸までも入らん、と騷がしかりければ、了使をたて、城中より守るべき門々を、寄手より人を附けられ候事は僻事にて候、といはせ、了下知して手暴く門の鑰を奪ひ返してけり。城を渡せし時、外廓の柳町より奈良の方大安寺を指して靜に兵を繰出す。能く了が法令の嚴正なりしに依りて、一人も騷ぎ者無かりけるとぞ。了は跡に殘り、鑰を取返しける時の寄手

了は若き時阿閉淡路守に奉公し、十七歳の時一日に首六つ取りたり。阿閉の家にて剛の者と言はるゝ士、十幅一丈の鶴の丸を給に書きたる母衣を懸くる者六七人有りしに、了に此母衣を許されけり。後中村一氏に奉公せしが、小田原の北條を攻めらるゝ時、山中の城を俄に攻落すべき樣を見て、一氏を進めて頓て打破り、成合平左衞門に一氏の馬印を本丸の隅矢倉に押立てさせ、中村式部少輔一番乘と呼はりけり。秀吉錦の羽織を一氏に與へられしかば、我今日の功名は汝故なり、とて羽織を了に與へられしに、固く辭しければ、羽織の片袖を與へん、と言はれしを、夫をも辭しければ、蓮生院鹿毛といふ馬を了に與へらる。其後增田長盛に奉公せしが、關ヶ原の時は大和の郡山の城に在り。關ヶ原の軍破れて、郡山の城を受取らんと筒井伊賀守打向ふ。城代橋與兵衞、鹽屋德順等了と共に城を守るに、了は三の廓を持口とす。大將なければ、盜賊商家に入りて女童を惱す。了五百許の兵を打連れ打巡りて、盜を切殺し追散す。或夜盜賊城外の町家に火をかけんとせしを、了出て剩さず討取りしかば、これより盜來らず。敵押寄すると聞えしかば、城外の商家を燒拂はん、といふ。了自燒は時あり、早まりて燒かば商賈騷ぎて狼狽へんも不便なり、とて止めけり。城兵雜人を合せて三千餘なりしに、士三十人、下部八百許駈落しけれども、了に從ひたる者

木村が一陣敗北しける中に、青木七左衛門黒母衣かけ、長屋半大夫は白母衣かけて、直孝の兵の中に紛入りしに、井伊家の赤色の物具に違ひたれば搦め取り、東照宮の御前に引參る。長屋は今福にて一番鎗を合せ、青木は今日西郡にて一番首を取りたり、と名乗り申す。其儘天晴剛の者よと見えしかば、二人共救けられ、美濃にて各五百石の祿賜はりけり。

井伊家の赤き物具は、直政の時より始れり。甲斐の武田家の士大將山縣三郎兵衛昌景が一陣の軍兵、皆一色に赤かりしを、東照宮御覽じて好ませ給ひ、直政に仰せられて、甲冑を始め旗指物鞍鐙鞭にいたるまで、皆一色に赤色なり。夫より後も斯くの如くなりし故、井伊の家に新に奉公する士有れば、武具奉行軍令を見せて、物具皆新に赤色にして、百石に二十兩具足櫃に納め、奉行の士受取りて城中の庫に入置き、其價は祿の内より返しけり。此故に井伊家の武備缺くる事なし。若去つて他國に行く士有れば、奉行の士武具を返し與へけるとなり。井伊家の軍令とて、赤色の武具の事錄せる書も、今世に傳りけり。

○藤堂家合戰渡邊勘兵衞功名の事竝渡邊始末の事

藤堂高虎の士大將渡邊勘兵衞了は、

もまた二つ取りたり。後に老功の武名の聞え有り。人々集りたる處にて、三彌何れも老功の人として崇め、其身も泰なる體を振舞はるゝ事ぞかし。大坂の軍に事變りたる事も候はず。老功として崇め候は何の故ぞや、といふを、脇聞きて、此度汝の功名の如くなる事度重りたる者ぞ、といへば、三彌、さては子細もなし。吾功名の如きはいと易き事なり、と言ひけるとぞ。

○增田兵大夫討死の事

增田兵大夫は長盛の子なり。大坂冬の軍に城中弱ると聞けば涙を流し、寄手の攻めあぐみたる、と人言へば大に喜びけるを、東照宮聞し召し、誠に長盛が子なりけり。豐臣家の恩を忘れざる志尤なり、と感じ仰せられ、夏の軍に御赦を蒙り、城中に入り、秀賴より賜りたる赤地の錦の羽織を著、若江の軍敗軍の中に獨踏止り、澤田但馬が從者と引組んで組敷きたる處に、藤堂高虎の士母衣の者磯野平三郎走り寄りて討取り、其首を得たれども名を知らず。刀を分捕したるが、秀吉より長盛に給はりしもの故、兵大夫とは知られしとぞ。

○靑木長屋生捕らるゝ事竝井伊家赤備の來由

と感じ申しけり。一説に、東照宮の御旗本へ藤堂高虎乗來りて、敵の大軍押出し候、と申すを、横田甚右衞門聞きも敢ず、何の御下知を待つことやある。疾く切崩して討取り候へ、と云ふ。東照宮、無禮なり、と怒らせ給ひ、高虎には能く見切つて、味方に手負討死無き樣に計り候へ、と仰せらるゝを、甚右衞門大音あげて、敵を殺すに味方に手負死人無き事やある。疾く切崩され候へ、と罵る。東照宮、横田推參なり、と以ての外に怒らせ給ふ。高虎は我陣に乘歸る。和泉は見えぬか　と仰せの後、横田を御側近く召されければ、人々如何にと手に汗を握る處に、横田が耳に御口を寄せられ囁かせ給ひてけり。其後、如何に仰せけるぞ、と横田に問ふ人有りしに、和泉を汝再三罵りたるは一段然るべけれども、一戰を遂けよとは、遠き御慮有りて仰せられ難きとの事にてありし由、語りけるとかや。

○脇五右衞門某氏三彌武功の事

五月六日非伊家の士脇五右衞門、今日の合戰は後より段々に押詰め來れば、大方の事にては功名遂け難し。若き人々力の限り働かれ候へ、といふ處に、貢孝の近習の士三彌といふ若年の士、首二つ取りて脇に見する。脇もまた二つ取りけり。翌七日三彌又首二つ取りて脇に見すれば、脇

よ。爰にて見物する、と言ひけり。主税是に力を得、脇差を抜いて刺通し、弱る處に徒者走來り、遂に其首を取る。横地修理、西郷伊豫是を見て、東照宮に主税が幼年の武功を稱し申しけり。後に人々、子の敵に組みたるに援けざりしは如何に、と問ひけるに、菴原、誰も子は可愛きものにて候、とのみ答へけり。

直孝、木村と軍する時中に堤あり。又藤堂高虎も同じく敵に向ふ處に、久貝因幡守、高安筑後使をもて、敵と味方の中に堤の候。是を取らば味方勝ち申すべし。疾く御旗本を進め給ふべし、と申す。東照宮怒らせ給ひ、之程の事思慮無くて、我先陣の大將勤まるべきや。敵堤を取らば、捨てて敵に與へてこそ勝つべけれ。高虎とも覺えぬもの哉、と仰せ有りし處に、小栗又市馳來り、直孝只今敵に懸り、堤の候に、此堤を取らば勝たんと勇み候、と申す。東照宮、さぞあらん。必定勝なり、と仰せられけり。又矢尾にて藤堂が先陣敵に向ふ。渡邊勘兵衛敵と競合ひし時、高虎馬を御旗本に乘來り、御旗を寄せられよ、と申しも敢ぬに、横田甚右衛門馬上より大音あげ、御旗を寄せられよと申すは何者ぞ。あれ追散し候へ、と罵りければ、高虎馬を乘歸る。是も激勵の術なるべし。東照宮畠山入庵を召して、關東の武者共軍に慣れて、物いふ詞の面白き、と仰せ有りしかば、入庵、只今の一言横田ならでは、

り。長三郎を賞して五百石與へらる。此軍に千石の賞を與へらるゝ者有りければ、長三郎憤りて立去りけり。將の首を取りたれども、其法を知らざる故賞少し、と眞孝語られしとかや。長三郎は安藤帶刀の從子なり。又後井伊の家に歸り仕へて、千石の祿を與へられけり。川手、滿座、山口は軍の場に死し、遠山は、敵の首を取りて菴原に見する、とて立ちながら死す。鷲坂は小溝の中に倒れしが、口の中に噯り有りて、百姓の家に舁入れたりしが、息出でて助かりぬ。皆敵に逢ふ事早かりしかども、軍奉行の菴原が下知無き以前故に抜駈とし、八田を一番鎗に定められ、東照宮御感狀を賜はりけり。

金十郎は一番鎗を合するのみならず、山口左馬介、山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討取りたりといへり。御感狀に黃金御馬を添へて下さるともいへり。

木村が首を御前に出すに、髮に燻きしめし奇南香の薫せしかば御感あり。木村が胃は四方白にて鍬形の立物打つたり。

安藤を伏見に召し、青江の御脇差を賜はる。又一說に、台德院殿、長三郎に黃金二十枚、時服三つ賜はるといへり。

菴原が子の主稅助、北ぐる敵を追駈けて組討しけるに、助右衛門馳寄りて、如何に主稅心靜にせ

らず叩き合ひたるが、取巻かれ二十一ケ所甲冑を突裂かれ、既に討死すべき所に、戸塚左大夫を始として冑の鍬を傾け、黒煙を蹈みたてて、井伊が軍兵一同に勵と押懸り、木村が陣を切崩す。菴原は十文字の鎗を横たへ、進んで木村を目にかけて立向へり。木村、菴原を二鎗まで突きたりしに、菴原鎗のしほ首を握り、珠數を手に懸けたるが、念佛を唱へて野猪の暴れたるが如く、木村が鎗の下に走り入りて突伏せたり。安藤長三郎駈來りて、其首給はらんや、といふ。菴原聞きて、大坂落城日有らじ。敵の大將の首取る事易からじ。與ゆるぞ、といへば、安藤、木村が首を取り、菴原母衣かけたる武者を討取りて、其首に母衣絹添へて奉る事軍法なり。大御所の實檢に備へんに、母衣絹に包まれ候へ、とて母衣絹を安藤に與へしかば、菴原が從者母衣の出しにしたる白熊金のねぢ竹は、菴原が許に留めけり。

一説に、陣所に馬盜有るべしと兼て警めしに、安藤長三郎、不敵者にて用心もせず馬を盜まれ、翌日の軍に、井伊家の軍兵木村と戰ひける時後れたり。敵敗北に及びて長三郎走り附きたるを、助右衞門見て、あれに腰掛けたるは能敵なり。討取れ、といへば、長三郎、動かずして死人の如くなる者討つて功名にあらず、と答ふ。菴原强ふれば長三郎歩寄り、詞をかくれども、只首取れ、とのみ言ひて立上らず。長三郎則ち突伏せて首を取る。是木村重成な

ひ定めたり。出でたちける日、父子最期の盃したりとかや。金の鷲口の指物にて眞先に駈出づる。山口伊豆守重信、

山口修理亮重政嫡子伊豆守重信、二男長次郎弘澄は御勘氣を蒙り、蟄居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出でたり。

遠山甚次郎、鷲坂彌五郎、滿座七郎右衞門も、劣らじと先駈す。

一說に、内藤新十郎、佐久間藏人、山口左馬介、三百許面も振らず切懸り、井伊が先陣を押崩す。此時井伊家の剛の者、晴なる鎗を合する士有りといへり。山口伊豆守は川崎和泉守を討取りたり。木村重成は田の中なる小高き處に控へて下知しけるを、山口目にかけ呼を傳ひ寄りて、沼の有りけるに蹈入れて、畑の上なる重成と鎗を合せ、山口突にて討死しけるといへり。

木村長門守重成が一陣、鎗の筵を揃へて待ちかけたれば、川手を突伏せたり。菴原は堤の上に折敷きて居たるが、川手が倒るゝ時、腰に差したる金の麾の閃くを見、つと立上り、懸り候へ、と下知する詞の下より、八田金十郎走り出で、眞先駈けたる味方の斬伏せられたる屍を蹈越えて大音あげ、一番鎗と名乘り鎗を入れけるを、敵三十人餘取巻きたるに、えい〳〵と呼はり面も振

松倉豊後守重政、後藤又兵衛が陣を切崩す。松倉が士山本權兵衛義安、十八歳にて鎗を合せ首を取りける隙に、鎗を敵に取られたり。其鎗標敵の中に見えしかば、今は是までなり討死せん、と云捨てて敵の中へ入り鎗を取返し、其鎗にて又敵を突伏せ、首を取りて歸りけり。

○毛利孫左衞門村山越中を詰る事

大坂冬の軍に、池田左衞門督の使番毛利孫左衞門先陣に行きしに、村山越中、毛利に向ひ、我今朝より敵近く居て疲れたり。指物を散々鐵炮に打破られぬ、といふ。毛利、我五百人の士の中より撰んで母衣を許されたり。汝に誰されんや。汝竹把の外に出ずと覺ゆ。指物の先のみ裂けたるは其證なり、といへば、村山答ふる詞無かりけり。

○井伊木村挑戰重成討死井伊家諸士功名の事

並横田甚右衞門藤堂高虎を激す事

奄原助右衞門は、井伊家の士大將にて軍奉行なり。大坂夏の軍に、五月六日に道明寺に向ひて先陣たり。井伊家の士大將川手主水成次は、去年の冬より直孝を怨むる故有りて、討死せんと思

も討死有らん時人々カを失ひ候なん。今度國々の諸浪人馳集る事、偏に眞田殿一人を目當に仕候。夜討をば斯く申す又兵衛罷向ひ候はん、と言へば、眞田、兎角我罷向ふべし、といふ。後藤は有無に、後日の合戰大事なれば、眞田殿殘り止られよ、と爭論して、終に一決せで止みけるとなり。

○堀直寄見切の事

大坂夏の軍に、水野日向守勝成に大和口先陣の大將を命ぜらる。堀丹後守直寄、松倉豐後守重政、大和口に向ふ。五月五日夜更けて、勝成、敵寄せ來ると見えて松明多く見ゆ。僻るべからざる由を諸將にいひ遣す。丹後守聞きて、日向守は物に慣れたると聞きしに、功者とも思はれず。寄來る敵何ぞ松明を多く點さんや。敵にはあらじ、といふ處に、日向守又使を以て、松明皆消えたり。敵にはあらじ、と告知せたれば、丹後守、さては敵なり。何心も無くて火を點しつれたるが、功者有りて消させたるならん、と言はれしが、果して後藤又兵衛なりけり。

○山本權兵衛功名の事

存ぜず。只打出でて軍する程ならば、君御出馬候ひて伏見の城を攻落し、卽ち御上洛候て洛外をば燒拂ひ、宇治勢田の橋を引落し、所々の要害を固く守り、先洛中の政を御沙汰有るべし。其後勢によりて合戰の謀候べし。祝は申納めぬ。若御運盡きさせ御座しまし候とも、御上洛にて一度天下の主と號し奉り、洛中の御政務を執行はれんに於ては、後代の名聞是には過ぎ候まじ、と言ひしに、長曾我部を始として皆然るべしと同心しけるに、修理、秀賴公の御旗を出されん事、輕々しきに似たり、とて肯はぬ色を見て、修理が母を人質に出し置きぬ。如何なる所存にやと人々疑ひて、議決せずして止みけり。斯る所に修理が母の人質に出し置きたるも返し賜はりぬ。既に關東の人數伏見に著くと聞えしかば、秀賴又諸大將を集めて再び軍の評定に及びけるに、長曾我部また最前の如く眞田に讓りければ、眞田、駿河大御所の軍立常に早りたると承り候に、少しも違はず覺え候。其故は、昨今伏見へ著陣して軍兵の疲をも休めず。早や茶臼山に押寄すべきと申す沙汰は、早り過ぎたるに候はずや。伏見より大和路を押さば行程十三里なり。彌疲れ候べし。明夜は軍兵如何に存ずるとも、胄を枕として一睡せぬ事や候べき。一夜討すべき圖に中りたると存候。左衞門佐罷向つて一舉に勝負を決すべし、と申しければ、後藤又兵衞、如何にも此謀然るべう存候。されども眞田殿をもて夜討の大將とせんに、萬に一

○細川三齋夜討評論の事

細川三齋病を養ふとて吉田に寓居せられける時、渡邊睡庵勘兵衞が事訪ひて物語する時、大坂にて塙が夜討せし時、蜂須賀の士に感狀を賜はりたるは如何なる故にや。夜討は盧を見て討つ事古今同じ。盧有りて討たれしに、賞有りしは訝しくこそ、といふ。三齋聞きて、夏又事有るべきに、遠く慮らせ給ひて、諸將の軍兵を勸め勵まされんとの故なるべきにや、と言はれけり。

○大坂城中軍評定の事

大坂和平破れて後、秀賴軍評定の時、第一坐に長曾我部、次に眞田、其次に毛利豐前守列坐せり。秀賴、大野修理を以て、今度の合戰各所存を問はれけり。眞田、先長曾我部に申され候へ、と辭し申しければ、長曾我部聞きて、眞田殿ならで斯る圖を申出さるべき人有りとも思はれず。先づ申され候へ、と答へけり。眞田、さらば申して見ん。去年の軍は城固く兵粮も又多かりき。日數を過ぎば必ず西國の内に心を寄する人も有るべきか。寄手の中に心替も有るべしと何れも存寄りたる處に、思の外に和平に及んで惣堀は埋められぬ。今度は守り遂ぐべき道有るべしとも

を與へられたり。

○木村重成感狀を辭せし說

大野主馬が組の士、此夜討に功名有り。木村長門守を賴みて感狀を賜はらん事を申す。木村聞きて、上にもよく聞し召したれば、感狀に於ては定めて下し賜はるべし。但感狀を拜領して誰に披露せられんや。一本鎗の士ならば、又他國の主君に奉公せん時の眉目にすべし。大野兄弟は大坂の長臣たる身、君と存亡を共にすべき人の何の爲の感狀ぞや、と言ひしに、主馬恥ぢて詞無かりけり。

○稻田九郎兵衞武功を語らざりし事

東照宮後稻田に御感狀を賜ふ。太平の後御旗本の人々稻田に逢ひて、大坂夜討の時の事語られよ、と言ひしに、九郎兵衞聞きて、十五の年の事隔りて皆忘れたり、とて強ひて問へども一言も言はず。公方より賜りたる感狀の詞を問へども、存寄らざる賞を得て深く藏め置き、再び見たる事無ければ、これも忘れたり、とて語らざりしとなり。

とて歸りしが、林に云々と言へば、林、さればよ。我壎と相約せしは、假令大國を領すとも手づから鎗を提げ、思ふ儘に軍せずば男子にあらじ、と言ひつるに、壎夜討せし時、橋の上に將机に腰かけ、馬印押立て麾を取りたりと聞く。年四十八、老たりと言ふべきにもあらず。昔相約せし詞に違ひたれば使をも遣さざりき、といふ。黒川又壎が方に行き斬くと語りければ、壎、林が言ふこそ理なれ。されども我嘉明に、士卒を下知せんこと思も寄らずと罵られし事口惜しく、一度麾を取り軍を下知して、嘉明に知らせばやと思ひて、其夜も手づから鎗を横たへ、突いて懸度思ひしかども、さはせざりき。既に志を遂けたれば、重ねて軍の有らん時には、鎗刀の折る〻程戰はん、と言ひしとかや。

○木村畑田屋牧野の四士武功の事

壎が夜討の時、木村喜左衛門、畑角大夫、田屋右馬助、牧野湖太四人鎗を合せしに、田屋は薙刀なり。田屋をば鎗と言ふべからず、と言ひしに、御宿越前聞きて、鎗も薙刀も柄は樫の木にて、刃も同じ事の形の少し違ひたる故に、名は同じからねども、薙刀は短ければ、敵に近き事鎗より一等近し。鎗と言はんに何の子細の有るべき、と秀頼に申して、四人とも鎗を合せたる感狀

右近眞先に出づる。修理押續き出でたり。右近は胄ばかり著たるに、從者物具を持ち來りて著せたりとも言へり。右近刀を振り廻し敵の鎗を切拂ふ。修理大音あけて、右近と共に働き、右近は鎗七八本にて突伏せたりといふ說もあり。右近が子若狹は阿波の留守に殘し置かれしに、其胄に右近、修理に向ひて、若狹此度戰場に出でざる事を口惜く思ひ、度々來るべき旨言ひおこせしを、軍法を破る罪を恐れ呼び寄せず、と語る。修理、尤にてこそあれ。言ひ遣りて疾く來られよと告ぐべし、といふ。其處にて疾く若狹は陣屋近き邊に來りて匿れ居しかば、呼び入れて其夜手に逢ひたり。右近父は次郎左衞門とて、信長の扈從阿波守に附けられて、祿千石、士七十人添へられけるとぞ。

塙は兼て支度して、夜討の大將塙團右衞門、と書きたる木札を道々に撒せけり。和平の後今福口の南に、長二尺餘の木に塙團右衞門と書きて建てたりしを、人々怪み問ふに、塙、加藤嘉明我を憎み、探出して誅せんと言はれしと聞く故討手を待つ、といへり。塙が好有る面々數多訊ひ來りけるに、水野勝成の士黒川三郎右衞門尋來りしかば、過ぎし昔の交を思ひ出して來られしこそ悅びなれ。林半右衞門は日比親深かりき。如何にして一度の音づれもせぬにや訝しき、と言ひければ、黒川聞きて、林は池田の家に奉公して、今天滿橋の陣所に有り。斯くと尋ねて見ん、

鎗を入れまじへて一人づつ靜に出しけるが、鎗を取るとて從者を呼び騷しければ、塙怒りて、刀にてせよ、何鎗取る事やある。首な取りそ、敵の旗を始として武具を奪ひ取れ、と下知し、吶と押寄せたり。蜂須賀至鎭の士大將中村右近白小袖を著、胄ばかり著て馳合せけるを、木村喜右衞門突伏せしに、稻田修理透間無く走り來り、木村と突合ひ、寄手駈集り防ぎ戰ふ。米田監物は池田左衞門督の陣所を押へ居しが、これも駈來り喚いて攻入りしか共、寄手追々に駈集りしかば引返す。生駒又右衞門首取りて大野主馬が許に持たせ遣り、猶進んで中村が倒れたるを見て、首を取らんとする所を、修理が子九郎兵衞十五歲なりしが、生駒を討取りたり。

此夜討の前、蜂須賀の士大將樋口内藏助、今夜夜討入るべし、といふ。若士共、如何して見定めたるや、と嘯く所に、中村右近、餅を燒きて振舞はん、とて内藏助を傍に呼入れ、何とて夜討有るべきや、と問ふ。内藏助、さればとよ。城の橋殘らず燒落したるに、本町口の橋ばかり燒かざるは夜討すべき爲なり。今日狹間より外を覗き見る體見ゆる故、夜討入るべし、と答ふ。皆、さあらん、といふ。隣の陣小屋稻田修理に餅を振舞はんと云遣す。修理其儘來る。道は廻るなれば七八十間も有るべきに、疾く來られ候、といへば、修理、間の仕切の板ある所に藁を込み置きぬ。夫を外して來りたり、と答ふ。果して其夜半夜討入りたり。

○塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事

大坂冬の陣に、塙團右衛門重之、阿波蜂須賀の陣所に夜討せんと計り、團右衛門は遠江横須賀の人なり。加藤嘉明に奉公して祿千石足輕を預りしに、關ヶ原の時嘉明塙に下知して、誘き來れ、と言はれしに、塙行きて見るに、諸將皆陣々を整へて控へ居たり。君命とは言へ共敵に後を見せん事口惜しく思ひ、種ヶ島の鐵炮を並べ散々に打立てて歸りければ、嘉明、汝は勇のみ有りて進退の理を辨へず。大將と成りて士卒を下知する事は思ひも寄らず。汝を遣したるは我過なり、と言はれければ、塙、敵弱ければ詮方無く、無理なる咎を蒙り候、とて夫より怨を含み、伊豫を出奔しける時、其家の中に、

逐不レ留二江南野水一　高飛天地一閑鷗

といふ二句を大文字に書きたり。嘉明怒りて、塙が行先の奉公をかまはれしかば、塙所々にて落ぶれ、後には京の妙心寺大龍和尚の許に居て僧となり、名を鐵牛といふ。袈裟の上に刀を横たへ鉢を招く。人或は憎み或は誹りけるが、遂に秀賴に招かれたり。年十六歲已上五十已下の士八十人を選り出す。從者各一人と定めたり。塙と御宿越前と門口に

すなり、と名乗りけるとぞ。

○眞田が丸を攻めたる時の事

十二月四日雪深く、眞田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻寄せける事、軍令を背きたれば如何すべき、と台徳院殿仰せ有りしかば、先何ひ奉り然るべからん、とて本多正信東照宮の御陣に參りけり。東照宮、如何に今朝は將軍にも悦びに有るべきよ。掃部頭堀際へ押詰め、敵に威を示して味方を勇め立てたるよ、と仰せ有りしかば、急ぎ返りて斯くと申す。頓て御本陣に御出あり。其道筋掃部頭陣を打過ぎさせ給へば、直孝出向ひたるに、睨みて通らせ給ひぬ。孕石備前に斯くと告ぐれば、孕石聞きも敢へず、其如く物に心得ざる大將は、此方よりも屹と睨み返すが然るべく候、といふ。程無く還らせ給ふ時直孝出向ひければ、今朝の軍賞譽の御詞有りて打過ぎさせ給ふを、孕石聞きて、合點ゆきたらんには其筈の事なり、と言ひけり。

初め陣を移し替ふる時、井伊家鐵炮を打たせし事有りし時、本多正信申せし事と相同じ。一事を二事に云ひ傳へたるなるべし。

東照宮、如何に皆骨折りたるぞ、と御詞を懸けられしに、童部爭にて、骨折候事もなき旨答へ申されけるとぞ。

○小田切所左衞門平野彌次右衞門武者振の事

眞田が丸を攻むる時、小田切所左衞門、

一說に、嘉兵衞といふ。後齋伊豆といひ、又道仁といふ。武者修行して名高し。長久手にて素肌の働あり。松川の軍にも武功あり。加賀利常に仕へて大坂の軍にも從へり。城際に近く寄せたるが鐵炮に當り、其玉を取出し、脇に並びたる平野彌次右衞門に見せて打笑ひ、物語する體平生の如し。又玉一つ額に中るを取出したれば、血流る〻に、胄は大事の物よ。此胄は信玄公の許に有りしなり、と言ひて、少しもひるみたる色無かりしとなり。平野も小田切と相並びたる武者振を、敵味方ともに譽合へり。平野が從者五右衞門といふ者矢面に立ち、鐵炮頻に打懸けしかば、かすり手十八まで負ひたる大剛の振舞を、城中より高聲に稱美して、姓名を承らん、といふ。平野則ち五右衞門に吾氏を讓り與へしかば、五右衞門大音あけて、平野彌次右衞門が下人五右衞門といふ者、是まで附きたる褒美に、只今氏を讓られて平野五右衞門と申

常山紀談　巻之二十一

○大坂にて台徳院殿諸将の攻口御巡見の事

大坂にて台徳院殿、諸将の攻口を御打巡ありて、有馬豊氏が陣所にて井櫓に上らせ給ふ時、御馬印を城中より見て、火矢大銃を打懸くる。井櫓を下りさせ給へ、と申せども聞かぬ體にて座ます所に、水野日向守参りて、物見と巡見とは別に子細の候。陣々悉く御覧有る可ければ、一所にのみ座ます可き様なし。志貴野を御巡り然るべし、と申せば、則ち井櫓を下りさせたまひけり。

○東照宮志貴野御巡見の事

大坂にて、東照宮志貴野を御打巡あり。上杉の攻口にかゝらせ給ふ時、鐵炮を並べ立てたるが、一同に城に向けて打掛けたり。大將巡見の時の故實なりと言へり。景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水を洒ぎ、煌やかに掃除して、景勝、直江只一人打具して、平伏して御目見申したりければ、

しや花房をもて附給ひしか、その謂を知らず。

此時戸川肥後守達安を始として、烟紛に附けん、と言ひしに、花房聞きて、城中に後藤といふ功者あり。必ず兵を伏せ置きたるべし、と止めて附けざりけり。烟消えて見れば、花房が云ひし如く果して敵待ちかけ居たり。其後和平に及んで、肥後守が弟彌左衛門、後藤に對面し、様々の物語する時、千波の事を云ひ出し、備前勢の附けざるは如何に、と問ふに、兩人の計りし事更に違はざりければ、人々聞き傳へて稱しけり。花房助兵衛職之は秀吉の心に忤ふ事有りて、佐竹が許に流され居けるに、東照宮御心を附けられ、花房が子を武州長榮山本門寺の上人に預け置きしを、後に榊原康政養ひて飛驒守といふ。助兵衛老衰、席上にも人に扶けらるゝ程なりしに、東照宮の仰にて大坂の軍にも從ひたり。乘物にて攻口に向ひ、軍急ならば吾乘物を敵に向つて棄てよ。爰を墓と思ひて出でたり、とぞ云ひける。東照宮御打廻の時、道の傍に乘物を置き、其中に蹲居したりしを、戸川肥後守斯くと申せしかば、花房大事の時と思ひ、武を好む事、老いぬれども志は衰へず。誠に大丈夫なり、と仰せられけり。

く陣を寄する時、若し騒ぐならば城より撃つて出づる事有らん。陣を整へ静り候へ、と五の字の御使番乗廻りて仰せを傳へし處に、井伊直孝陣所を替ふると、鐵炮を押並べ城中に打懸け、関の聲を擧げ、只今城に攻入らん體なりしかば、台徳院殿、直孝兄が陣代となり人そばへしけるよ、と怒らせ給ひ、本多正信を東照宮の陣に使を命ぜられけり。御前に參り未詞に出さざる處に、直孝は父の子なり。今日陣所を換ふる時、味方を競はせんとて鐵炮を打たせしよ、と仰せられければ、正信承り、斯くまで思召の同じきと申すも怪しき程に候。直孝が振舞感じ思召し、參りて其由を申せと仰せ候ひき、と申して出でにけり。

○後藤又兵衛花房助兵衛見切喧合の事

大坂にて城兵千波を焼きける時、後藤又兵衛、備前勢必ず突くべし。若き人々待伏して功名有れ、と言ひければ、後藤が詞違はじ、とて待伏しける所に、敵つけ來らず。後藤が功名だて、と嘲りけり。後藤、積も時々は違ふ事有るものなり。備前勢附けざるは、花房助兵衛未だ存命へて居るならん、といふ。

按ずるに、此時備前は池田左衛門督領せさせ給ひたれば、花房が事を司る可きにあらず。若

はいかにも、我思ふ處に他岐なく決斷すべし、と答へられければ、兵庫、臣が年比思慮せし處只是のみにて候。兩端を持して兵の道行はる可からず。外に申すべき言なし、とて其書を焚きけるとぞ。

元和元年の春、直政の領國直孝相嗣がるべき旨仰せ出さる。安藤帶刀をもて再三辭し申せども許されず。十八萬石を分ちて、直勝に三萬石、直孝に十五萬石賜はりぬ。其後五萬石增與へられ、台德院殿、大猷院殿五萬石宛增賜り、中將に任ぜられけり。

○本多伊豆守出陣聯句の事

越前忠直大坂に師を出す時、士大將本多伊豆守僧を集めて聯句しけり。將机に倚りて聞居りしが、勇將麾下無二弱卒一といひしに、側より、高祖帳中有二張良一、と言ふを聞きて、門出の目出度さよ、とて打出でけり。

○東照宮御父子御陣替の事

大坂冬の軍に、東照宮は茶臼山、台德院殿は岡山に陣所を移し替へらるゝ事有り。諸將も城近

直孝は直政の二男にて、母は松平周防守康親の従者の女なり。直孝六つに成りし時、母の方より直政に送りけるを百姓の許に置かれけるが、十三の時民家に盗の入りて騒ぐを聞き駈出て、暗夜の事なるに、盗山へ登りけるを追懸けて、高股を切つて落されけり。斯くて人数多来りて盗をば打殺しぬ。直政に申せば呼び寄せて、冬の事なるに、北に向きたる座敷の雪の入る処に跪かせて置かれけり。雪膝を降埋めどもちつとも動かず。直政悦んで呼び入れられ、犬の子を與へられけり。十四の時直政病重くて死に及ぶ時、その生先やしるかりけん、麾に甲を添へて形見に與へらる。直孝は上州にて一萬石を賜はり、大番頭を命ぜらる。直政の長子父の跡を嗣ぐと雖も、多病にて公事勤労し難しといへり。

直孝暫く仰に任せず。先宿所に歸り、彦根の長臣を集め、仰せは云々なれども、各我下知に從ふべくば陣代を勤むべし。然らずば仰を固辞し申すべし、といへば、皆、爭でか下知に背くべき、と言ふを聞きて後、仰に任せて陣代仕り候べし、とぞ申されける。井伊の家に兵庫と言へる物師の年老たる有りしを、直孝呼出し、汝日比軍術に長ぜりと聞く。相傳ふべき事や有る、と問はるゝに、兵庫、年老候て今日を知らざる體、戰場に打出でざる事遺恨に候、とて懐より一巻の書を取出し、大將たる人志を決斷して、狐疑無く下知有るべきか、と問ふ。直孝聞きて、敎

き、左右に軍兵三百許鎗を横たへ跪きて、紺色に日の丸の旗眦の文字の旗二本に、淺黄の扇の馬印押立て、靜まりかへりて長重を見向もせず。長重も勇將なるが、後に人に語りて景勝を譽められけり。

○上杉家の士大將に御感狀を賜ふ事

東照宮、志貴野にて功名せし景勝の士大將に御感狀を賜はりしに、安田上總介は横鎗を入れて城兵を打破りし功大なりといへ共、直江と不和なりし故に其功上に達せず。御感狀賜らざりしかば、其後人に向ひて、此度御感狀を拜受し給ひて目出度候。上總一人は申し立つる人無くて、さばかりの武功空しく成りて候。然れども劣りし事は候はず。是程の事武功は申達する迄も無し。且殿の御爲に命を捨てて軍仕り候。露塵許も公方の爲にする事に候はず候へば、是より後も殿をこそ大事に思ひ候へ。公方の御感狀何條面目に存ずべきや、と語りしとぞ。

○井伊直孝陣代の事

大坂の事起りし時井伊掃部頭直孝を召して、兄右近大夫直勝の陣代をぞ仰せ出されける。

打勝つて井上五郎左衛門を討取り、柵二重破りたりけるを、城中より大軍我先にと馳向ひ、大野修理治長、木村主計頭宗重、渡邊内藏助糺、竹田永翁等競ひ懸る。隅田は百挺の鐵炮を一の木戸口に立固め打ちたてさせけれ共、城中よりの加勢眞黒に成つて切りて懸るを、半時許支へて戰ひ、鐵炮の物主石坂新左衛門一足も引かず討たれ、終に押立てられぬ。二陣の安田は衆てより側に陣を押出せし故、隅田が士卒、景勝の旗本前へ崩れ懸る。景勝三陣の士大將杉原常陸親憲、金の輪抜の立物打つたる冑を著、金の鎧の馬印を取りて、大將の仰ぞ。隅田人數兩方へ分れ候へ、と呼はりて馬印を打振りて下知しければ、隅田が兵忽ち兩方へ分れて引取りけり。杉原敵を思ふ樣に近々と引受けて、前に立て並べたる鐵炮を雨の降る如く打懸けしかば、安田二町餘脇に控へたるが横間に鎗を入る。隅田も忽ち盛り返し、城兵を追崩す。隅田は初に討負けたるを口惜しく思ひて、從者五人にて敵の中に紛れ入り、首二つ取つて歸る。景勝進んで押詰めんと見えしかば、久世三四郎乘り來り、俄に城を攻めば死傷多からん。後陣の堀尾山城守忠晴と入れ替られよと仰せ候ぞ、といふ。景勝聞きも敢へず。弓取の先を爭ふ時、一寸增と言ふ事あり。今朝より激しく軍して取敷きたる所を、人に讓りて退く事や候、とて少しも動かず。丹羽長重、景勝の陣に行きて見れば、景勝將机に倚りて城中をはたと睨み、物具もせずして青竹を杖につ

譬へば馴れたる雀の子を呼ぶに似たり、と言合へり。東照宮遙に杉原が出立を御覽じ、上杉が家は古風なる故鎧直垂を著たるなるべし、と仰せ有りしは、半臂を遠く御覽有りての事なり。其後上杉家の士大將に御感狀を賜はる。杉原御前にて謹んで上を包みたるを解き、讀み終り始の如く包み、本多正信の方を見遣りて感じ、仰せ候詞殊更に忝く覺え候。景勝武功を賞せさせ給ふ故に、陪臣まで斯る仰を承る事、謙信弓箭の遺風を天下に擧ぐる所に候、と言ひて退出したりけり。

○上杉景勝志貴野口合戰の事

志貴野にて上杉景勝先陣、柵を破り、井上五郎右衞門を始として數百許打取り、大和川まで攻め入る時、景勝直江を呼びて、城兵援來るべし。先陣は如何に、と問ふ。直江、先陣は士卒少く候へども安田上總介、二陣は隅田大炊介長則に定め候、と申す。否々隅田を先陣にして二陣を安田に繰替へよ、と下知せらる。是激の道なるべし。斯くて安田は、先陣を二陣に繰替へられ口惜き事なり、と齒噛をなし、隅田が軍兵は、安田に蹴えて功名せんと勇み、兩陣とも勇氣倍しけり。二十六日曙に隅田押寄せ、多切豐後守眞先駈けて首を得、北條清右衞門等も討死し、遂に

太坂冬陣に、佐竹義宣今福口を攻むる。士大將澁井内膳先陣して柵の木を打破る。佐竹に附けられし軍の目附安藤治右衛門、屋代越中守先駆して、安藤爽に物具せしを、柵の中より鐵炮にて胄の上を打ちかする。安藤折敷きたれば、頻に打懸けて立上り得ず。屋代父子、伊藤右馬允駈來り、如何に安藤、日比は年若しとて自慢せしには違へり、と言ひて柵を打破る。木村長門守重成城より助け來り、柵を隔てて睨み合ひたり。木村は黒き平袖の羽織を著し、柵に取附きて、あはれ鎗にて叩き崩さばや、と云へども、鐵炮の足輕散り亂れて來らざりしに、井上忠兵衛といふ者、鐵炮持たせ馳來りければ、あの鳥毛の羽織著たる敵は物師よ。打落し候へ、と下知して柵の木に鐵炮をもたせて、澁井が胸板を打通す。木村喚いて懸り寄手を追崩す。平塚五郎兵衛、澁井が屍を蹈越えしを、木村が從者首を取らんとすれば、平塚、その冷えたる首何にせん、というて敵を追立つる。義宣使者を上杉景勝に遣はして加勢を乞はれしかば、杉原常陸横合に兵を出す。杉原は大坂に師を出す時、吾物具以ての外古くて、日本國の弓取に笑はるべし、とて猿樂の半臂を用意せしが、其日物具の上に著て麾の緒を腰に結びてさけ、七百許を率るて川の中の洲に進みしかども、水深かりしかば、玉藥を惜まず、込替へ〳〵城兵を打白ます。軍兵を下知するに、進退思ひの儘なり。杉原が士卒を下知する有樣を、諸將の陣鳴を靜めて見物す。

大坂冬の城攻に、興國公の攻口は天滿橋の邊なりしに、先陣の士大將波多野掃部、須加左京竹把を附くるに、兵少くして、夜にならでは如何にも調ひ難く候。日の中とならば兵を增し給はり候へ、と言ひしかば、其樣を見て來れ、とて芳賀內藏允先陣に行く。芳賀は茜染の羽織著たり。先陣の兵共家屋の燒趾土藏の蔭に控へ居て、橋より上に標の杭の候。見られよ、と言へば、芳賀進み行く。芳賀、近頃寵せらるゝ者ぞ。武者振見よ、と言ひ合へり。芳賀馬より下りて徐に川岸を步むを、城中より打出す鐵炮川水に響き渡れり。芳賀些とも騷がず足の數を數へて歸り、如何にも兵少くては叶ひ候まじ、と言うて旗本に歸る。此芳賀はもと祐筆なりしが、岐阜落城の日、國淸公勝軍の書を芳賀に書かせられし時、麓に將机に倚りて御座す。芳賀其前に跪いて在りしに、城中の燒きたつる火鹽硝の庫に入りて、其音山嶽の崩るゝが如く、敵押寄するかと騷ぎしに、芳賀が筆把りて書きし樣少しも駭く體無かりしかば、事に寄せて試みらるゝに器量大なりければ、頻に用ひられて祿二千石賜り、後國政を執りしに、度々直言を申し、諫め爭ひて事よく治りけり。

○佐竹勢今福口を攻むる事竝杉原常陸武功の事

相謀り、難無く式部、藤兵衛を連れて舟に乗りければ、勝永悦んで船を出し、共に打連れて大坂に至れりといへり。

○池田忠継朝臣士を懐けられし事

池田左衛門督忠継は、東照宮の御女北條氏直の北の方にて御座しけるが、北條家亡びて後國清公に再嫁有りて生れ給へりしかば、東照宮の御外孫なり。大坂冬陣には十六才なり。一旦和平に成りて師を返されし後、軍に從ひし士共寄り集りて物語する時、一人の云ふ、若き士の此度の軍は日比と大に違ひて、諸事の下知兎角いはん詞もなし。中にも今まで詞に出さぬ事一つあり。仕寄場にて寒氣烈しきにさぞ苦勞ならん、とて小き手樽に酒を入れて賜り、又綿入の肌著を賜り、此事努々人にな泄しそ、と仰せられし志の忝さ忘れ難けれど、語るなと仰せ有りし故今迄は泄さざりし、と言へば、一座十四人手を打ちて、我々も其通なりき。我一人のあひしらひなりと思ひしに、皆斯くの如きは例少き事なり、と感じ合ひけるとぞ。

○芳賀内藏允武者振の事

命を秀頼公に奉りてんと思へども、我妾を忍び出でなば、憂きが上にも猶憂き事や御身の上に添ふらん、と泪を落しけるに、妻熟と聞きて打笑ひ、弓箭取の妻となりて爭でか斯る事を恐れなんや。早此暁船に乗りて武名を潔くし給へ。君の爲め家の悦び何事か之に如かん。妾が事な思ひ給ひそ。如何にもなり給ひたらば、此島の波に沈み候べし。運命目出度く頓て逢ひ奉らん。急ぎ給へ、と言ひければ、勝永悦んで小舟に取乗り、大坂に至り籠城しけり。其後山内對馬守より豊前が妻を固く縛め置き、斯くと告げられしかば、東照宮聞し召し、勇士たる者の志感賞すべき事なり。豊前が妻罪する事有る可からず、と懇に仰せ有りければ、豊前が妻大坂の城中に入りけるとぞ。

一説に、父壹岐守勝信も土州に流されしが病死しぬ。勝永土州に在て年月を送りけるが、時時其從子宮田甚三郎を大坂に遣りて、其從弟なりし大野修理亮が方まで秀頼の無事を問はせけり。斯る所に大野より秀頼兵を起すの旨告け遣りしかば、勝永、土佐守忠義を欺き關東へ忠を致すべし。先非を改め舊領に復せん志なり、と云ひて土州より船に乗らんとしけるが、甚三郎を呼びて、我大坂に著きたらば嫡子式部、次男藤兵衛ともに山内家より殺害すべし。如何す可き、と言ひしかば、宮田夜に入りて陸に上り、式部が乳母の子小原文右衛門と

と父なりし伊賀守常に戒められしは格言なりと。又語られしに、儉と吝と相似て、その本大に異なり。儉は事の費を厭ひて奢侈ならず、用ふべき事に財を用ふるをいふ。吝は是非の論無く一向に物を惜むなり。又戒められしは、我心に叶ひたる者の言ふ事は何事もよく聞え、行路のよからぬも心附かず。又我事を憚る所無く直言する人は、道理の至極せるをも外になし、其詞の無禮を罪とす。是皆事を過つの元なりと。其前一萬石の中甚だ貧しかりしに、新に儉約の法を定め、先自らの事を第一に守られし時の歌、

もとめなき心もこともおのづから任せて過ぐる身こそ安けれ

○毛利勝永大坂に入る事

關ケ原亂の後、毛利森とも記せるあり豐前守勝永は土佐へ流罪せられしに、大坂に事起ると聞き、或夜妻に言ひけるは、我罪有りて斯る所に居住し、汝にも斯く憂き事を見する事ぞとよ。されども我志有り、詞に表し難し、と語りければ、妻の曰く、世の變は如何なる人も計るべからず。斯く成り果てたりとも更に悲しむべきに非ず。妻は夫に從ふ道とこそ聞きて候へ。其御志を承らばや、といふ。勝永曰く、我武名を傳へて數世に及びぬるに、斯く沈み果てなん事口惜き事なり。

べき事なれど、天顔に咫尺し奉るの名有りて其實無し。御簾を高く巻上げられ候へ、と奏聞有りしに、尤なり、との勅にて御簾を高く巻上げらるゝ事内膳正一人なりしとぞ。其後又一萬石增し賜はり、下野の烏山の城主たり。重矩若きより詩歌に心を寄せ、學問を嗜み、熊澤伯繩が門人にて嘉言善行多かりき。京都にて加茂川洪水の時、白川より加茂川四條の間へ堤を築かせ、又鞍馬の往來市原といふ所に水流れ、往來の困なりしかば、田地を求め川筋を除き、山路を開かれしかば、内膳死後に及びて此地の百姓共仁德を慕ひ、如意谷に内膳正の位牌を設け、跡を葬ひしとなり。

財寶を奪ひ取る者を昔より盜と名附く。我熟思ふに、大名に盜多し。下士民の善有るを擧げずして棄つるは、是人の善を盜むに非ずや。親族朋友にも善有るを稱せずして過ぐるは、是も人の善を盜むなり。中にも君たる人は下の善を擧ぐべき職に有り、是天より命ぜられたる任なり。人の善を盜みて天命の任を缺くは盜の大なる者なり。我若し人の善を盜まんやと是のみ心を盡すよ、と語られける。又伯父周防守が語りしに、人の生質樣々有る中に、見たる處の憎き者有り、愛すべき人有り。此憎き人を見ては善言も惡樣に聞きなすぞかし。況や直言を言へば愈憎む者なり。又愛すべき人の言ふ事は、善からぬ事も善く聞きなすものなり。是心得べき事なり。

○板倉重矩の事

板倉内膳正重矩の曰く、

重矩は伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死有りし内膳正の子周防守重宗の従子なり。階にて長卑く、以ての外見苦しき人なりしかども、有徳賢才の聞え有りて、寛文二年禄二萬石增賜はり、大坂の御城代たり。寛文五年大雨にて、雷天主に落ちて火出でて燒上りしかば、大坂の騒ぎ大方ならず。萬治三年雷火有りし時、鑓硝の藏に火入りて、死人多かりし事を聞きたりし故なり。内膳正、町奉行彦坂壹岐守、石丸石見守兩人に、鑓硝は岩濠中へ入れたる由振れさせられしかば、騒ぎ靜りけるとぞ。内膳正豫警衛の備固く下知し置かれし故、尼ケ崎の青山大膳亮、人數を率る大坂に来り、其備を見て深く感ぜらる。此旨江戸へ聞えしかば、御書を賜はり稱美ありければ、内膳正卽ち家士を集め、是皆汝等が功なり、と譲られしとぞ。同年の冬江戸に召し、一倍の祿を增し賜はり、執政の職を仰せ蒙られけり。同八年京都所司代牧野佐渡守正親の替仰せ出さるゝ内、暫し内膳正を以て京都の事を司らしめ給ふ。上京の後參内の事有り。此禮儀御簱を半卷上げらるゝ例なれども、内膳正恐懼す

りて靜なる時は、手も夫に應じて磨の廻る事平にして、軋られて落つる所の茶如何にも細やかなり。茶の細やかに落つる時に至りて、我心も動かぬと知り、其後漸く訴を別つ。又明障子を隔てて訴を聞く事は、凡そ人の顔形に、打見るより憎さげなると憐ましきと有り。誠しき有り奸しき有り。其品多くして幾らと云ふ数を知らず。見る所の誠しきと思ふ人の言ふ事は眞實と聞かれ、奸しきと見ゆる人の爲す事は何事も皆僞と見ゆ。憐ましき人の訟は枉げられたる所有るかと思はれ、憎さげなる人の爭は僻事ならんと覺ゆ。是等の類は目に見る所に心の移されて、彼詞を出さぬうちに早我心の中に、邪ならん、正しからん、善からん、直ならんと思ひ定むる程に、訴の詞に及びては、我思ふ方に聞きなす事多し。訴のなるに至りては憐ましきに憎むべき有り。憎さげなるに憐なる有り。誠しきに詐有り。此類殊に多し。人の心の測り難き、形を以て定めん事叶ふ可からず。古の訴訟を聞くには色を以てすと言へ共、夫は重宗が及ぶ可きにあらず。又さらぬだに訴の庭に出でんは恐しかる可きに、まして生殺を司れる人を見てはいぶせくて、自言ふべき事をも得言はで、罪にも科にも遭ふ人有らん、と思へば、所詮互に面を見も見られもせぬに如じと思ひて、斯くは座を隔つるにてこそあれ、と答へられしとぞ。

られなん、とて碁を打つてありしとぞ。

○重宗訴訟を聞かれし心得の事

周防守重宗京都の職に有ること凡三十餘年、人敬ふ事神明の如く、愛する事父母に似たり。父子誠に同じ名臣とぞ聞えし。されば重宗は寵恩も殊に厚く従四位上に昇り、官左近衞少將に進まれけり。重宗職に任じて後毎日決斷所に出づる時、西面の廊下にして、遙に伏し拜む事有りて決斷所に出で、此所に茶磨一つ据ゑ置き、明障子引きたてて其内に座し、手づから茶挽きて訟へを聞く。人皆不審し合へりけるに、遙に年經て後問ふ人有りしに、重宗答へて、先決斷所に出づる時、西面の廊下にて遙に拜する事は、愛宕山の神を拜するなり。多くの神の中殊に愛宕は靈驗新なると聞きし程に、所願有りて祈くは拜しぬ。其所願は今日重宗が訴を斷らんに、心の及ぶ程私の事あらじ。若過りて私の事有らば、忽ち命を召され候へ。年頃深く賴み奉る上は、少も私心有らんには世に存命へさせ給ふな、と毎日祈誓するにて候。又訴を別つ事の明ならぬは、我心の事に觸れて動くが故なりと思ひなしぬ。良き人は自ら動かざらん樣にこそあらめど、重宗夫までの事は及び難く、唯心の動くと靜かなるとを試るには、茶を挽きて知る。心定

からざりしとなり。其後、伊賀守老いたり。所司代の職に任すべき才を選び候へ。汝が替にせばや、と仰せ有りしに、勝重、子にて候周防守、所司代の任に叶ひ候由申したりければ、内々其如く思召されしと仰有りけり。周防守は斯くとも知らで御小姓にて有りしに、父伊賀守が替りに仰せ出されけり。周防守上京せられしに、伊賀守衣服を改め、左右の職に居る人を並べ置き、記祿をも悉く取出し、周防守を上座に招き、謹で江戸靜謐の事を窺ひ、今日より所司代なれば萬事引渡し候、といふ。周防守、只今まで御側に仕へ奉り、世の有樣努努存じ候はず。仰にも父を見ならひ候へとの事なり、と申されしに、伊賀守、否々其職に居るべき者なりと擇み出されし故、斯る重任の仰は奉りたりと覺ゆるなり。人の心は面の同じからざるが如し。我に附き添ひ居たればとて、我に離るゝ時は自ら決斷するより外の事無し。汝が不才を隱しなば、五畿内は言ふにや及ぶ、西國までも禍有るべし。些とも飾る事有る可からず。只不才と表すを第一とすべし。不才を知召されなば、其任に當るべき人を擇ばれて仰せ附けらるべし。更に恥辱に非ず。今日より所司代の職に居るべし、と言はれしかば、周防守其詞に隨はれぬ。勝重は町家を借り置きたるが、其處に引移り、碁を打ちて口ずさみに、今度の所司は嚴しいものよ。我をあひしらひたるが如くならば、必ず罪せ

すべき、と言はしければ、さらばとて出づる時袴の腰を捩らして著られしを、夫は如何に、と言はれければ、勝重、さればよ。斯く有るべしと思ひしなり、とて重々に戒めて後、仰を奉りたりと世には言ひ傳へたり。勝重、尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長嚴和尚が弟子にて長祐と言ひしが、還俗して四郎右衞門と言ひけり。勝重嫡男を重宗、次男を重昌といふ。二人共江戸に在り。或時大猷院殿訴訟を一つ巧に構へさせ給ひ、二人を召して、判斷せよ、と仰有りけり。重昌仰を奉り、理非分明に決定して退出す。重宗稍久しく思慮して後、重ねて決斷の旨を申し上げ候はばや、とて退出し、二三日過ぎて後御前に參り、判斷の旨を申したるに、弟の重昌が申したるに相同じ。人々、兄に勝りたる重昌なり、と賞め合へり。其後勝重京より江戸に下りし時、大猷院殿彼の訴の判斷の事詳に示させ給ひ、重昌が才器を御感あり。勝重承り、内膳正は若氣にて思慮無く候。周防守は國家の政事を取り候とも其任に叶ふべし。其故は、訴を判斷する事は政事の一つの條目にて候。政事は至つて重き事にて、一言を以て天下の利害に係り候。苟に極め申すべき事には非ず候。政事は大事と繰り返し思慮致し候へば、重宗は政事を執り候とも仕損ずまじく候。只打見たる所を以て己が智慧を人に見せんと存ずる所は、重昌が若氣と申す物にて思慮無く候。と申しければ、御感淺

○板倉重宗京都所司代の事附板倉勝重器量の事

板倉周防守重宗京の所司代たりしが、江戸に下りける時松平信綱對面し、公方にも政事に御心を盡され候。京都の事も委細に聞し召し度候。是より後は同職に差し越され候書狀、京都の事詳に記され候へ、と言ひしに、周防守、百二十里の行程隔たりたる事、何程に聰明に御座しますとも、及び腰なる事は得知し召されじ。其故に周防守を京に指置かれ候事なれば、申上ぐるに及ばず、と答へたるを、偖は周防守は致身者なり、と感ぜさせ給ひけり。

重宗の父を伊賀守勝重といふ。初は四郎右衞門とて祿五百石なりしに、京都の所司代を仰せ出され、二萬石賜はりけり。是は本多正信が薦め申せし故となり。勝重仰を奉りて佐渡守に向ひ、重職の任を身に受け候事に候程に、歸りて妻なる者に相謀りて、若し同心せずば職を固辭申上ぐべき由申しけるに、正信打頷く。勝重家に歸りて、斯る仰を奉りしなり。重き任なれば内緣を賴み訴へ、する者有るべし。公私に附きて口を添へられずば、仰せを畏り奉らん。若し少しにてもいろはれんとならば、只今其由申して京には赴き候はじ、と言はれければ、こは如何なる事を宣ふぞ。仰を畏らせ給へ。女の身如何で公の御事に携り申

○酒井忠勝直言の事

大猷院殿の御時、晴の猿樂有らんとする前夜に大雨にて、御前に見渡るべき塀の白土壞れしに、一說に、朝鮮來聘使者出づべき夜、櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたるともいへり。如何せんと人々云ひける處に、松平伊豆守信綱、白き奉書の帋を以て貼らせられしかば、皆其捷智の程を感じ合ひける處に、酒井讃岐守忠勝利勝ともいへり伊豆守に向ひて、讃岐守が存ずる處は、貴人には成らざる事は成らざると知らせ奉るぞよき。仰せ出されんに何事も仰の儘ならんと思召されんには、驕奢を導き奉るにてこそあれ。其時は如何し給はん、と言はれしに、信綱深く心服せられけり。

○墨田川に橋を掛けられし事

江戸の墨田河に橋無かりしを、酒井忠勝申して橋を掛けられけり。要害の爲惡かりなん、と云ふ人有り。忠勝、天下を治むるに人を以て要害とすべし。人苦んで何の益か有るべき。人を苦めて要害とせば、江戸は一日も持堪へ難し、と答へられけり。

龍官を得て、長崎の奉行に告けて妻子を迎ふ。公に申して許されを蒙りたり。明滅びし時、大祖忠苗裔を福州に建てて元を隆武と號す。清と度々戰ひに及びて勝ち難き故に、援兵を乞ひたりしなり。明帝朱姓を賜ひければ國姓と稱し、爺は老成を尊むの詞なり。芝龍が事明末の書に詳に錄せり。

○大納言賴宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事

正保元年は明の崇禎十七年なり。明朝亂れ、陝西の李自成などいふ者盜賊の長となり、一揆を起し北京へ攻入り、明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに、福建の鄭芝龍書簡を獻けて加勢を乞ひけるに依りて、紀伊大納言賴宣卿、異國より加勢を賴み申す事、日本の武威四海に輝くとも申すべし。諸浪人を集め候ひなんには數十萬も有るべし。夫に西國、中國の大名小名差し加へられ然る可からん。拙者に總大將仰せ附けられ候はば、何事の悅びか是に過ぎん。異國に攻入り、思ふ儘に日本の武勇を見せ候べし、と願ひ奉り給ひけれ共、御加勢の事止みければ、兼て仕へ申せし武功の物師共、淸兵と一軍して老後の思ひ出にせんと勇みける人々、殘り多き事よ、と言ひ合ひけるとかや。

安堵致すべけれ。嗣君幼稚により廓を增されなば、人々危む心を生ぜん事必然なり。且御上京も候て過分の財用を費し、五三年も儉約ならざれば償ひ難く有るべきに、又費を多くなしたらんには、廓は堅固に成り候とも武備有るまじく候、と申されければ、翌日諸大名を召し、掃部頭申す旨尤なるにより、昨日の仰せ出されは相輟められ〻この由を、仰せ出されたりと言へり。孰か是なる事を知らず。

○明の鄭芝龍援兵を乞ふ事竝稲葉正勝諫言の事

大猷院殿の御時、國姓爺日本に援兵を乞ひければ、諸長臣を御前に召出され、是を捨て置かれなば日本の恥なり。援兵を遣さるべき旨仰せられしに、小事たらざる故に各兎角を申出で黙ねられし處に、稲葉丹後守勝正、援兵の事然るべからざる旨再三申されければ、色を變じ内に入らせ給ひけり。明日又召出され、昨日申せし處思召に叶はざりしが、熟御思慮有りしに、申す處理なり。援兵に及ぶまじき由仰せ出されたり。

明の末鄭芝龍と言ふ者、萬暦年中日本に來り、肥前松浦の平戸に在り。又長崎にも在りて、崇禎年中に明帝より召返されけり。平戸に在りし時妻とりて子を生む。其子を鄭彩といふ。芝

り。又世を譲らせ給ひなば諸大名獻上奉る物に費多く、將軍宣下の饗禮を取行ふべし。愈困窮に及び、下を剝ぎ民を苦むるの外更に詮方無からん。是民の嘆亂の因と存ずるなり、と申されしかば、利勝、尤なり。此旨有の儘に申すべし、とて直孝を御次の間に伴ひ、利勝御前に參りて、云云の由申したりければ、卽ち直孝を御前に召され、汝が申す所尤なり。され共既に仰出されたれば易難し。猶是より後憚る所無く申せ、と仰せられしかば、直孝、臣が申す旨然るべからずと思召し候により、聞し召し入れられず候か。臣が言尤と思召しなば、御用ひなからん事仰とも覺え候はず、と申されけるに、暫く御詞無かりければ、利勝、臣既に年老いぬ。壯年の者直言を申し候事治世長久の因に候。明日諸大名を召し、掃部頭申旨尤なるに依り、相止められるべき由を仰せ有りて然るべう候ものを、と申されければ、台德院殿則ち諫に從はせ給ひけり。其時直孝、臣が申す旨用ひさせ給ひ、辱き旨謝し奉りて退出せられけれり。台德院殿の諫に從はせ給ひし事、直孝の直言美を盡せり、と人申しけり。

又一說に、台德院殿世上太平と雖も、嗣君未だ幼穉に御座します。總廓を築かるべし、と仰せ出されしに、直孝一人兎角の詞無かりしかば、各退出の後、如何なる故ぞ、と問はせ給ふに、仰の旨心得難く候。嗣君幼穉に御座しませ共、治平の時なれば一廓滅せられ候てこそ人々

に顔色少しも衰へず。正則、さては飯を送りたる者有らん、と怒られしに、茶道來り、某こそ送りたれ、と申す。正則はたと睨みて、己何故に斯くしたるや。頭二つに切割りなん、と膝立直されし時、茶道少しも騒がず。我昔罪を得て既に水攻に合ひて殺さるべかりしに、彼人の申し開きたりし故、今日まで思ひかけず命存へ候ひき。其恩を報ぜん爲毎夜忍びて飯を運び候、といふ。正則怒れる眼に涙を流し、汝が志感ずるに餘れり。斯くこそ有るべけれ。彼士をも許すべし、とて其儘矢倉の戸を開きて罪を宥め、茶道をも深く賞せられけり。されば暴惡の人と世に稱しけれど、斯る義に感ずる事の切なる故に、士の思ひ慕ひて力を竭し、正則の爲に身を捨てて奉公しけるも、實に故有る事にこそ。

○井伊直孝直諫の事

台德院殿諸大名を召し、土井大炊頭利勝を以て、來年嗣君に世を讓らせ給ふべき旨仰せ出されしかば、皆祝し奉りたる處に、井伊直孝默然として有りしかば、利勝側に招き、如何なる事ぞ、と問ふに、天下亂の本たりと存ずれば、目出度事とは存じも寄らず、と申す。子細は如何に、と問ふ。されば其事に候。大坂の亂幾程なく江戸石壁の營み、日光の土木、天下の諸大名以の外に困窮せ

れを注進なし、其後殿は如何にもならせられんや、と云ひけるに、新八も、元より同心に候、と答へしに、正則悦んで打頷き、二人が言ふ所尤も至極なり。幾重にも穏に理を盡し、承引せずば志の如くにせよ、と言はれしかば、両人畏り、承り候、とて座を立ちて門内に出向ひけるに、事故無かりしかば、正則信州に赴かれけるとぞ、

○正則茶道坊主が義氣に感せられし事

正則常に物暴く、人を誅する事を好めると世の人も言ひ合へり。或時近習の士少の咎有りて城内廣島の櫓に押籠め、食物を與へず餓死せしめん、と言はれしに、其士の恩を受けたりし茶道坊主、罪無くて斯る有様を悼み、潜に夜燒飯を携へ行きたり。彼士、我は罪有る故に斯く成りたり。汝只今の振舞を殿聞し召されなば、我よりも罪重からん。又飯を喰ひたりとて命助かるべきに非ざれば、疾く歸れ、と言ひしに、茶道云ひけるは、同じ罪に行はるゝとも後悔無し。我先に既に殺さるべき事の有りしに、君の救ひにて一度助り候ひぬ。恩を受けて報ぜざるは人に非ず。此方も又弱げなる心御座して、吾志を空しくし給ふ事こそ口惜しけれ、と言へば、彼士悦んで、さらばとて是を食す。夜毎に斯くの如くしたりけり。程經て、死したるならんとて正則矢倉に行かれし

常山紀談　巻之二十

○福島正則信濃國へ赴かれし時の事

正則配流の時、正則の邸表の門前に蒲生下野守忠郷、裏門へは鳥居左京亮打向ひ、皆士卒物具したりけり。芝の邸へは最上源五郎義俊打向へり。蒲生の士共、正則公命を承りたりと聞きて、急ぎ邸を出でらるべし、と言ひ入れければ、正則仰にも及ばず、とて、信州に赴くべきにて候、とて熊澤半右衞門守久、上月新八兩人を呼び、奥筋の風俗常にがさつなり。蒲生鳥居の者共門内へ込入るに於ては、吾士共無禮を咎めて、事の破れも有るべきなり。汝兩人門内に有つて理を盡すべし。夫とも聞入れずば駈け來りて告知せよ。自害すべし、と言はれしに、半右衞門、これは畏り難き仰をも承りける、と言ひも果てぬに、正則、我今日公儀に背き斯く成果てし故、汝さへ悔るや、と大に怒られしに、半右衞門驚かず新八に向ひて、只今仰の如く、出羽奥州の風俗のがさつなるは勿論なり。立向ひ如何に理を云ひたりとも聞き入るべからず。其時駈け返りなば、追立てられ逃入りたると同じ事にて、末の世迄も恥辱なるべし。さらば込入る奴原腕の力の續かん程切合ひてそ

ち返す變も計り難し。危き事なり、と云ひ傳へたり。唯一刻も早く受取らん、とて大手へ進み行きて繪圖を披き、城内の物主共を呼集め、番所寄口を渡し濟み、城へ入つて飛脚をもて此旨言上有りけるとなり。古き人の詞に、城の受取渡は互に證據を取り、唯今事に臨むが如く心得べし。城主進退窮りたるなれば愼むべきなり、と言へり。

使より遅くば我等は男を捨てなん。是非陸を、と勧めらるれども安藤聞き入れず。船の事を蜂須賀阿波守に相計らる。加藤も船を用意したり。せめて某の船に乗られよ、と勧め、此船に乗りて上使尾道に到り、人数は陸を廻りけり。大崎女蕃使を以て、主君の狀廣島に來る上は三原も相違候まじ。然れども三原へ狀來らずして城は明渡し難し、と竹中の許に云ひ送る。安藤聞きて、後先の思慮にも及ばず無二無三に城へ乗入り、上使討死の時爰に有り。城の門際にて上使討死せば、續く者無きといふ事有るべからず。只今まで笠岡に滞留し、又爰に日數を送るべきに非ず、と云ひ切つたれば、加藤、尤然るべし、とて子息式部少輔の先陣を早押出さんとする處に、三原の城へも早や正則の狀來りければ、女蕃事故無く城を渡したり。城に入りて見れば、士足輕の名を書き附けて狹間毎に配り置き、城の隅々まで掃除して座敷には釜に湯を沸し、茶を礦かせ置きたり。翌日廣島に著きければ、丹波、今日渡すべきに城中掃除未だ終らず。下々の荷物も退け兼ねたり。明日迄待たれなんや、と言ふ。永井聞きて、我兼て聞きつる事有り、城和平になり渡すに及びて、下人の荷物を片附け兼ねたり。一兩日待たれよ、と言ひしを、荷物は札を附けて大手搦手より出さるべし。相當の價に買ひ取らん、とて城を受取りたりし。其翌日寄手の大將頓死しぬ。城中の謂に任せば、城を持

より軍をし、數度の功名を語り、村上も十四竹子の軍より壬生川の先駆等を言ひしに、大崎は、我木村が許に小祿にて有りしが、士大將になり、又福島の家にても士を下知し候へば、左のみ鈍うも候はず、と言へば、帶刀大に感じけるとなり。又一說に、福島正則流罪藝州へ聞えければ、長臣の者共福島丹波が許に相集り、城を渡すべきや否やを論ず。村上彦右衞門通清、殿流罪たり共、御存生に於ては御判形を見て國を引渡すべし。御判形來らずば此城を枕にして討死の外他事無し。但本丸は上月文右衞門預りたれば、上月に談合然るべし、と言ふ。上月聞きて、御判形を見ずして爭か本丸を渡すべき、と言ふ。備後三次に尾關石見、備中境東條に長尾隼人一勝、備後三原に大崎玄蕃長行有りしを、石見隼人をつぼませ、廣島、三原の兩城を守り、各人質を城に入れ天守に燒草を積み、大手搦手の持口を定めたり。安藤對馬守、永井右近大夫中國西國の軍兵を率ゐ、備中の笠岡に著陣あり。丹波吉村又右衞門、大橋茂右衞門を使として、主君の判形を見ずして城を渡すこと迷惑なり、と竹中采女へ言ひ送れり。上使聞きて、狀を取寄すべし、と返答有りて笠岡に滯留の所、正則の狀到來す。丹波已下是を見て、城を渡すべしと相定む。笠岡より尾道へ八里、初は陸路と定められしを、安藤船にて行くべし、となり。加藤嘉明聞きて、上使は船にて早く、惣人數は陸にて遲からん。上

一つも勝つべきや。可惜人々を徒に殺さんも如何なり。我一人大手の門外へ出でて、城代大崎玄蕃と申す者なりとて腹切らん後、城を受取り給へ。城の人々殘らず助けられよ、と云ひて、各達の命に換るべし。何の用意の有るべき、と言ひけり。斯る所に正則の證書來り、事故なく城を渡せしかば、大崎と村上彦右衛門、眞鍋五郎右衛門と同じく紀伊の家に仕へけり。大崎は若き時木村常陸介師春に奉公し、後正則に仕ふ。鬼玄蕃と言はれし者なり。關ヶ原の時尾州清洲の城に大崎を置かれけり。石田三成大垣の城に入りて、使を以て、福島家は太閤の恩篤き人なれば、今度無二の味方に候。清洲を明けられよ。兵を入れなん、とぞ謀りける。津田備中繁元は實にもと思ひて、同心すべきに、長行事は如何にもせよ、殿の仰せ無くて他國の兵を城に入れん事、存じも寄り候はず。強ひて兵を寄せられば一軍せん、と目を見出して使を罵り追返しけり。斯くて大崎門々を固く守り、狹間配して斯くと小山に告げたりしかば、正則悦ばる。東照宮、正則に、清洲の守に誰か有る、と仰せ有り。正則、大崎玄蕃を留め置きて候、と申す處に、斯と告げ來りければ聞し召し、大崎は世に譽れ有る者なり。さぞ有らん、と仰せられしが、其後も、清洲を敵に取られざりしは大崎が功なり、と度々仰せ有りしとなり。紀州にて安藤帶刀、大崎、村上、眞鍋に逢ひて武功を問ひたりしに、眞鍋は十四の時

左衛門大夫罪せらるゝと聞きて、暇を乞ひたる士三十人許有りしかば、狹間潛と言はれけり。妻子を本丸へ入れたるは諸籠と名附け、妻子を城外に出し、其身のみ城を守らんと言ひしは片籠といふ。後に京都耳塚に札を立て、三色に分ちて姓名を書きて世の人に見せしめ、故、狹間潛の面々は餓死に及びぬと言へり。上月は祿五千石、士大將たり。正則、上月が志を感賞し、書簡を與へらる。

今度我等事御預に成り候。是に依りて城を枕と存候由心底察入候。然れども存寄有之候間、早々城相渡し可申候。貴殿志之段不淺過分之至に存候。

とぞ書かれける。大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり。同じ時大崎は備後鞆の城に有り。秋田下總も同じく鞆に有りしが、大崎を廣島に遣りて己一人にて鞆を守り、討死して名を揚げばやとや思ひけん、大崎に向ひ、江戶より城を受取るべき使近き內に著陣有るべし。疾く廣島に籠られ然るべからん、と云ふ。大崎聞きて、殿の下知無くて城を出でん事思も寄らず、といふ。秋田城中を廻り防戰の支度專らなりしに、大崎は柱に倚りて眠る外無し。人々大崎を誹りたるに大崎嘲笑ひ、秋田は斯く由々しく防戰の用意するなるべし。我は思ひ定めたる事有りて萬事暇なり、と言へば、其子細を問ふに、大崎此城を守り日本國を敵になし、萬に

則が書簡來りしかば、城門の大手にて書簡を受取りぬ。さて廣島は船入二所有り。人多く騒しくて、士共の妻子退き去る時、爭有るやの恐れも候、とて一方をば人を止め、一方の口より退散す。城中の士は門の左に附き禮服して並び居、城受取の使安藤對馬守重信は、城門の右に添ひて城に入りけり。

安藤城門に入る時、並び居たりし人々に向ひ、左衛門殿事申すべき樣も無し、と詞を掛けらる。其時皆禮せしに、獨茶筅髪にてしかみの撞木杖をつきて、對馬守の詞を聞き傍を見て禮しけるを、山崎甲斐守見て並々ならぬ人なりと知りて、姓名を問ふに、長尾出羽と答ふ。山崎退散の後家族を養ふべし。又他國に行く中寓居せられよ、とて使をもて云はせられしに、出羽、甲州の御事は承り及びたり、忝き旨を謝す。聽て森美作寺忠政禮を厚うして招かれしかば、森家に仕へけるとなり。

丹波と文右衛門とは密に相計りて、初より楯籠るべきと言ひて同心する人無き時は、別にすべき道無き故に、事を二つにして士の心を試みたるなり、と其比言ひ合へり。さて後城を守るに決せし時、丹波、上月に向ひて、吾と文右衛門腹切つたらば、何事も外にすべき事無し、と言ひしとかや。

六月に福島領國を削らるゝ旨廣島へ聞えければ、福島、丹波諸士を皆呼集め、預け置かれたる城なれば、公方の仰せなりとも渡し難し。又備後守殿爲なれば渡すべきか、と評論す。上月文右衞門進み出でて、人は如何にもあれ、我は本丸を預りぬる上は、命有らん限は人に渡すべからず、と申切つたり。丹波心得ざる氣色なり。村上彦右衞門聞きて、福島、上月兩人の思ふ所に、同心の面々別々に判形せられよ、とて二通書きて指出す。酒井主膳とて丹波が從子なるが、座を立ち鎌田主殿を呼び、如何に思ふぞ。丹波は伯父なれども上月が言ふ所尤なり、と言へば、主殿も上月に同心して判形をしたりければ、皆是に同心しけり。其時上月、人々皆斯くの如くなれば、丹波が妻子を本丸に入れらるべきや、と言へば、丹波卽ち妻子を本丸へ入る。夫より我先にと妻子を籠めけり。城を受取るべき爲に諸將打向はれしかば、丹波、吉村又右衞門、水野治郎右衞門二人を使として、左衞門大夫領國召放たれ候により、仰の旨は謹んで承り候。然れども主君預け置かれし城を、證據とすべき書簡無くて渡さん事は、人々の存ずる處思ひ遣られ候。次に領國に入り給はん事、田舍の若き奴原無禮の恐れ有り。領國を避けられ候へ、と申し送る。さらば左衞門大夫は程遠し。伏見に有る備後守の書簡を證據にせんや、と云はせらるゝに、父子たる事は論無しと雖も、備後守が領國にも城にも非ず。備後守が言は用ふるに足らず、といふ所に正

福島もさすがの者にて剛の者餘多有れば、小路軍になりて如何に有らん、と申す。直孝、和泉守は何方にて小路軍をしたるぞや。直孝が家には武功の老武者多し。古き戰の軍を聞きしに、今川氏眞の許にて、濱松の城主井伊隼人を氏眞の城下へ召し寄せ誅せられし時、小路軍に成りて殊の外難かしかりきと言ふ唯一事を聞きたり、と云へば、和泉守詞無し。台徳院殿、いはれざる小路軍の論ぞ、とて先退出せられしが、井上主計頭を以て再び直孝を召し、仰には、我思ひたる所も汝が言の如し。人々皆口々に言ひて一同せず。掃部が存ずる旨に從ふべし。扨誰をか使にせん、と仰せなりしに、直孝、斯樣の使久世三四郎、坂部三十郎兩人、好かりなんと存ずるなり、と申せば、是も符合せり、との仰にて兩人使たり。斯くて酒井雅樂頭忠世太田善太夫を近附け、福島左衞門大夫籌國を召放たるべき由仰せ出されたり。福島は然る者なり。如何なる事をか仕出すべきと危く思ふなり、と語られければ、太田、否何事か致すべき、と事も無けにいふ。酒井、又例の橫著なる詞かな。危き事と思ふなり、と申されければ、太田、ならざる事をする福島に非ず候。爲べきを知らざる者こそさは候べけれ。福島は非道不仁の男なれ共、勝負の理を能く知りて候男なれば、何事も仕出さじ、と言ひしが、果して一言にも及ばず、仰の旨を奉りたりき。

福島左衛門大夫正則は、關ケ原の軍功に依りて尾張の清洲より安藝備後を賜はりけるが、物荒く政悪きのみならず、多く無罪人を殺し、且東照宮に對し奉り無禮多かりければ、元和五年台德院殿御上京の時、領國を削られけり。

本多上野介正純に就きて、廣島の城池を毀ふべき旨を申す。申上ぐべき由を答へられしが、御上京の事繁きに紛れて其事無かりしに、廣島の城普請の事を聞し召し怒らせ給ひしに、正純其時驚きて、正則の書翰を出されしに、證文の出し後れとて、聞召し入れられずといへり。

一條の城にて土井大炊頭利勝、藤堂和泉守高虎を召して、此事を仰せ出され議決せり。

板倉伊賀守勝重、此事は井伊掃部頭直孝に仰せ聞けられよ、とて直孝を召す。御前に參りて、福島左衛門大夫國を召放たるべき事故召され候や、と申す。其事なり。誰か使にせんと思ふぞ、と仰せあり。直孝、京都よりの御使ならば、江戸に殘れる者、是程の事辨へざるやと申す事も候べし。只今江戸に罷り有る者に仰せ出され然るべし。又正則を京に召され、罪の趣仰せ出され申譯有るか、又は國に引籠り思慮せよと仰せられ候ても然るべく候。事に依り直孝罷り向ひ打破り申すべし、と申す。和泉守、若き掃部頭には似合たり。但

り。江戸より南條を召す。細川家驚きたれども詮方無し。松野、我に任せられよ、とて囚人なれば厚き板にて詰牢を造り、醫者一人に密謀を云ひ含め熊本より出づるに、天氣を待つとて處々に舟を留め、日を經る内に人參の入りたる藥を與へ、朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり。南條は氣の鬱したる上人參數百斤飲みたりしかば、心狂亂したりけり。松野江戸に打具し至りて、南條は數年狂氣の者にて候、とて出しけり。切支丹訟の事を問はるゝに、狂言のみなり。疾く熊本に歸すべし、とて松野に返されぬ。此謀唯醫一人のみ知りたりと云へり。

○藤堂高虎阿濃津にて勢揃せられし事

元和五年藤堂高虎、領國阿濃津にて俄に勢揃をせられけり。人或は怪しみ、或は、高虎何事に謀叛すべきや。萬に一も叛心有らば事を密にすべきに、駭に人の驚くべき樣に爲したるは子細有らん、と言ひしに、福島左衞門大夫領國を削られけり。

○福島正則領國を召放さるゝ始末の事

を斬りしに、忠利前髪有る首を撰り出させ、襄にて彼首を指し、四郎が首とも覺しきに、誰か見知りたる、と問ふ。須佐美權之允、四年以前に四郎を召使ひし事の候。紛ひ無き四郎なり。左の耳の下に瘤の候。是其證なり、とて生捕りたる四郎が母に見すれば、吾子なり、とて泣倒れしかば、忠利使を立てて首を石谷十藏の方に送られけり。後陣に千石の祿を與へらる。

○松野龜右衞門鐵炮修煉の事附松野才覺の事

島原の城攻に、細川家の士大將松野龜右衞門井樓より見るに、本丸と二の廓の間に坂有りて人集る。中に大紋の羽織著たる者在り。松野指さして鐵炮にて打ちたるに、五町許にてたゞ中に中りてけり。夫より空箭無く打ちしかば、彼坂を夫より後たま〳〵通る者、身を屈め走り通りけるとぞ。松野は、鐵炮の妙手留刑部一火に擊びて妙を得たり。

熊本にて一匁の筒を磨き居しに、庭の南天筍の實を鵯鳥の來て喰ひけるを、かなものしはめて藥を込み目的を見す。箸にて火を差して打つに中らざる事なし。島原の前の事なりしにや、細川家の長臣南條大膳、恨を含む故有りて細川家を傾けん事を謀りけるに、其比深く密にする事有りて、泄れなば細川家の禍なる事を知りたりければ、先切支丹の事訴へけ

の奴原命を限りに防ぎ候ひしを、美作守父子押寄せ討破りて、族を一番に入れし事誰か爭ひ申すべき、と答ふ。鈴木も進み出でたれば、永純、また鈴木が申せし言も如何で忘れ候べき。作州父子は一番と思ひて、藏人二番と申せしも分明なり。されども族入れ置かれし所に行きて見しに、夫より遙の後に控へてこそ御座したれ。鈴木も族を證にして利口を申したれ。兎角に一番は藏人に候、と云はれければ、勝重、陣所に在りたればとて族を一番に入れしは、是軍の法に於て誰かは一二を論ずべき。父子が兵共身を棄てて力攻に乘取りし本丸を、他の一番に定めん事思ひも寄り候はず。能思慮し給へ、と答へられしに、永純、族の前後は論ぜず候。將たる者の先駈は藏人が外誰か候。作州は後より使を給はり候へば、一番は藏人なり、と怒られしかば、勝重、只今の爭無益の事に候。軍に慣れたる物師に問ひて一二を定められしかば、永純打解けて小姓を呼び、茶を飲みて出でられしが、鈴木に向ひ、如何にも詞和に云ひて歸られしかば、藏人も並々ならぬ人なり、と褒め合へり。

○陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事

一揆の長、四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取りけり。二の丸にて鐵炮に中り、倒れし者の首

来り一番とは何事ぞや。本丸は水野美作守攻入り、旗馬印入れ置きぬ。二番とならば是へ上らせ候へ、といふ。藏人、聞入れられずば唯一鎗にと思へる氣色なる上に、水野の旗本丸に建てしを見て、さらば美作守に續きては藏人なり、と言はれしかば、其時鈴木半之丞、美作守父子の外大將達は未だ本丸には見えず。紛れ無き二番にて候、とて手を取つて石壁に引き上ぐるに、永純つめの丸喰違の處に進み行き、美作守は何處にや、と問ふ。神谷、美作守は腰廓の上に居て、爰に旗を入れ候、と答ふ。永純聞きて、偖は美作守は我より後にてこそ有れ、と言はれたり。永純本丸に押入りたりと勝重聞きて、使を立て、只今攻入られし由廓有る所に在り。若し夜に入りて一揆討つて出づる事も有るべし。爰に一所に有りて下知せられ候へ、となり。藏人聞きも敢ず、作州は我より後に攻入られしよ。藏人は一寸も敵近き所を好み候程に、後へは引候はじ。一揆打つて出づるとも、藏人爰に在らば危き事候はず、と答へられけり。勝重、よし〳〵、詰の丸より切つて出でば敗北すべし、とて士三十人許鎗を横たへ鐵炮を前に並べたり。藏人は鐵の楯を取寄せ、前に押立てて夜の明る迄待ちかけられしか共、一揆討つて出でず。信綱下知して勝重も鍋島の陣に入りかはられしか共、永純は退かず。使度々に及びて引返されけり。落城の後三月朔日、永純勝重の陣所に行き、本丸の一番は藏人にて候、といふ。勝重、年若くて左宣ふ。本丸

四歳眞先に駈出づるを、祖父の勝成後陣より見て、本丸を討破れ、と下知せらる。本丸に楯籠る者共數千人、今日を限りと思ひ定め防ぎ戰ひければ、討たるゝ者多し。鍋島の軍兵ひるみて見えし處を、水野父子、横様に面も振らず切り懸りて、三の丸より本丸へ逃入る一揆を討取る事數を知らず。本丸の石壁より打出す鐵炮の玉霰の飛散るが如し。石壁は五間七間許も高く登り拳たる處に、水野父子大音上げて、今日本丸を攻取らずば生きて誰にか面を向くべき。死ねや死ねや、と聲々に呼はり、打てども射れどもひるまず。我先にと攻め懸る。族奉行神谷孝之允、族十本の内一本持たせ來りて自竿に手をかけ、本丸に入らんとす。繼奉行進藤七兵衛、小野田正大夫、金の束髪斗の馬印を振りかたげ來りて、松の丸に押立てしかば、神谷も族を入る。水野父子の兵念無く石壁を登り本丸に攻入りたるを、勝成二の丸より見遣りて、我今生の思ひ出なり。美作は大坂にて武功有り。伊織は、今日を始めの軍なるに、本丸を攻取りし事家の面目なり、と悦ばれたり。有馬左衛門佐康純の嫡子藏人永純は、寺澤忠高の後陣なりしが、唯一人從者に鎗を持せ寺澤の先陣を駈脱けて、天草丸の方へ馳入り、本丸に進んで五間許の石壁を登り、今日本丸の一番乘有馬藏人なり。心有る士は能く見候へ、と呼はる處に、勝重の士鈴木半之丞、取つたる首を石壁の上に置きて息を繼居けるが、此聲を聞きて鎗を横たへ藏人に向ひ、只今此處に

忽ち城を攻破りたるは如何なる故ぞ、と問はれしに、總て城攻に四方より押寄せ、先陣犇と攻詰むる時を見計りて、無二無三に進んで手負死人を顧みず乘入り候へば、攻破り候事を得候。四方の味方未だ押寄せず。一方より攻破らんと急ぎ候へば、城中も外の防ぎを捨てて、先嚴しく攻むる方を支へ候もの故、外の持口よりも防ぎ甚だ強く候。其隙に一方より攻入り候時は、容易く擊破り候。早過ぎたる方は却て手後する事常の理に候。臣此處の辨を知りて靜まらせ候へと申せども、殿急がせられ候故、味方に手負討死多かりき、と申しければ、忠之、高政共に大に感ぜられけり。

○水野勝重父子有馬永純本丸一番乘を論ぜられし事

島原を攻落す時、水野美作守勝重は、江戸にて賜りたる白川月毛といふ逞しき馬に乘り、戸田氏鐵の陣所より我陣所に乘切つて歸られしに、勝重の軍兵共、金の束駑斗の馬印を見るより我先にと勇みけるを、勝重馬上にて胄を取つて著、武者奉行河村新八、士大將上田玄蕃に向ひ、我下知無き以前に懸るならば軍神に賭けて斬棄てよ、と大音上げて呼はり、麾を抜出し軍兵を進め塀を破り、喚叫んで攻入りけるに、自分馬より鎗を杖にして本丸を目がけて進まるゝ。嫡子伊織十

加へられよ、と言はれけり。此時一丈にても分けたらば領地を削らるべき由議有りけるに、勝重の遠き慮無かりし故に、其事止みたりし、と人々言ひけるとぞ。

○黒田勢天草丸を攻破る事並黒田睡鴟武畧の事

黒田忠之天草丸を攻むる時、本田但馬嚴しく防ぎ支へて、先陣攻入り得ざりしかば、忠之素肌にて進まれけるを、黒田睡鴟物具持むに足らぬとは申せども、大軍を下知し給ふ身の甲を著ざれば、狼狽へたりと人の嘲り候べし、と言ひければ、忠之物具取つて肩に懸け、胄をば著ず手拭にて鉢巻し走り出で、我士共年比吾家の恩にみちし奴原、今日は如何にして進まざるや。我此處を一足も引くまじ、とて鎗の鞘を地に差込み、折敷きて進め者共、と下知せらる。雨の如く打出す鐵炮に打竦められ躊躇へり。睡鴟は是を傍所に見て控へ居しかば、忠之、何とて一方を下知せざるや。年老いて老耄したるか、と大音あげ齒噛して罵られしかども、少しも驚かず。未だ早く候、と靜に言へば、忠之愈怒り罵られしを、弟市正、彼入道は物師にて候。待たせられ候へ、といふ所に睡鴟つと立上り、麾を取りて懸り候へ、といふ。詞の下より軍兵一同に勵と進みて天草丸に乘入り攻取つたり。後に忠之睡鴟を近附け、軍兵我下知を用ひずして、汝が一言にて

静なれば、窃に塀の内を差覗き見るに一揆一人も無し。士大將鍋島安藝是を聞き、塀裏を差覗く其有様、只今攻入るべき氣色なりしかば、あはや、と云ふ程こそ有れ我先にと駈集る。鍋島の陣に附けられし榊原飛驒守の士共竹把を附習ふとて、毎日代りぐに來りしが、是を見て、いざと言ふ儘に押寄する。榊原の嫡子左衞門佐眞先駈けて乘入りけりれば、戸田左門氏鐵の陣所に諸將集りて軍評定有りし時なるに、井樓より鍋島の軍兵、只今城に攻入り候、と呼はる。さらばとて諸將陣を寄せて攻落されける。其後勝重に、今度軍令を背き、城攻有りし事を問はるゝに、勝重承り、榊原父子先駈して乘入り候上は、目附を討せて叶ふまじと、不意に攻入り候、と申さる。榊原に問はるゝに、嫡子にて候若き奴、軍令を忘れ先駈しける故愚愛に引かれ、子を眼前に討たせ候ては生き甲斐無し。父子は同罪と存じ、續いて攻入り候、と申されければ、鍋島も榊原も門を閉ぢて追ひ込まれ、三十日過ぎて御許され有り。勝重人に會ふ毎に、筑紫にて卒忽の城攻せし罪許し給はり、忝き由言はれしかば、江戸にて、城攻の卒忽人よ、とて勝重の通らるゝを珍しげに觀けるとなり。又榊原申されけるは、若き者共に竹把の附け樣習はせ度く候。攻口四五間分ち給はれ、となり。皆、苦しう候はじ、と云ひけるに勝重聞入れず。我攻口を人に分くる事や有る。一寸も叶ふまじ、と答へらるゝに、榊原强ひられしかば、飛州の士を我士共に差

勇み進みしかども、黒田美作入道睡鴟物師にて、櫓壕きりの守り堅くためらふ中に、黒田市正高政鎗を提け出會ひ、二三人突伏せ小姓に首取らせ、市正此處に有り、一足も引くな。穢き振舞せば、軍神も照覽あれ。斬つて捨つるぞ、と呼はる聲を一揆聞きて、爰は破り難し、とて寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行く。三宅藤右衞門支へ戰ひ痛手負ひたり。一揆又鍋島勝重の陣所の井楼に火を懸けたりしに、松平信綱より夜廻りの士岩上覺之介、尼子八郎兵衞、紀州の使者山中作右衞門と打連れて來りしが、山中は銀の冑にて十文字の鎗を持ち散々に相戰ふ。鍋島の軍兵馳集り入れたてじと防ぎけるに、竹把に火燃え附きて白日の如く、一揆叶はで引返す時、四郎矢倉に有りて勝鬨をつくらせ、夫より城中靜りけり。其後水野日向守勝成島原に著陣し、黒田睡鷗に夜討の有樣語らせ聞きて、昔より四方を固く取り巻かれ、竹把を附け、櫓の木二重三重に結ひたる寄手の陣に討つて出たる事を聞かず。古今無雙の武略をしたる一揆なり。されども一揆を一等超えて働かんは我士辛なり、と云はれたり。

○鍋島榊原島原城先登の事

同じ城攻に、鍋島のしより塀二三間許に竹把を附寄せ、軍兵共と押寄せ居けるに、城中殊の外に

易く破れまじかりしに、川北が謀にて天草の糧早く盡きてけり。

○天草一揆夜討の事

天草の一揆を圍み攻めらるゝに、城中糧米既に乏しくなれば、夜討して米を取らん、と本田但馬が謀にて、先諫早口の塀の外の水を汲ませける時、鐵炮を並べて寄手に見せたり。斯くする事三度に及びて、後には漸々に遲く夜に入つて汲ませけり。是は夜討に出づる時の鐵炮の火を見咎めさせじとの事なり。其後毎夜塀裏にて、切支丹の唱事天帝といふ事を數千人一同に喚く。是も夜討に出づる時の物音を紛らはさんとの謀なり。斯くて寛永十五年二月二十一日の夜、五百人をもて黒田忠之の陣所に押寄せ、一陣の兵二千人を二手に分ち、纏襷して額にはくるすを鉢巻にして、相辭は丸か丸と定め、首な取りそ。食物を取り來るを、第一の功名にせん、と下知し、諫早口より出て、出廓の側なる有江口に退き入るべしと定め、陣屋を燒かん爲に檜の木を削りかけにして腰に差させ、丑の刻ばかり月も朧に暗かりしを便に、黒田の陣所に押寄せ、同時に鬨の聲を上ぐれば、城中にも鬨の聲を合す。士大將黒田監物仕寄際に有りて、父子共に面も振らず支へ戰ひしが、流れ矢に中りて討死しければ、從兵四十三人枕を並べて討たれけり。一揆大に

の身なる故に、内膳正忽ち攻落すべしと思へる色顯れたり。假令此城を攻落すとも、一揆の奴原、さのみ功名とも言ふべからず。只今四方無事の時、一揆頼無き城に籠りて降參するとも、悉く打殺さん事を知つて其心一和すべし。容易く落つべからず。日數を經ば又他の大將を指向られんに、内膳何ぞ生きて歸るべき。吾是を以て討死せん事を知りぬ、と言はれけり。

○川北九大夫肥後國川尻を守る事

細川忠利の士川北九大夫と言ふ者有り。川尻の代官を勤めよ、となりしに、出陣の時供に連られなば代官の職勤むべし、と言ひければ、尤とて、出陣の時供すべし、と定められる。天草は稍もすれば一揆をなす所と西國の人の言ひける事なれば、心に掛けて、川尻は海邊、船の著く處にて細川家の米藏有り。天草へ海上七里と聞ゆ。川北兼ねて地鐵炮の數を調べ置けり。地鐵炮とは獲師の事也天草の一揆起ると聞きて、川尻の海岸に一間に一本宛竹を立てさせ、一本毎に火繩を結ひ附け、五本に一人の地鐵炮を配りけり。後に天草にて生捕られし者の言ひけるは、其夜川尻の米を取らん爲に船を押出して見しに、川尻に幾何とも無く鐵炮を備へて見えたる故、偖は熊本より軍兵の早川尻に來れり、とて船を戻しけるとなり。川北無かりせば川尻の米を取られ、天草の粮容

抑へ止めて具して歸るべき物を、と憚る所なく申しければ、御後悔の色顯れさせ給ひしが、夫も叶ひ難くや思召しけん、夜も更けたり、とて入らせ給ひしかば、宗矩も退出し、密に人に斯くと語りけるとかや。誠に宗矩が計りし事掌を指すが如くなりしかば、尤も深計遠慮有りとぞ申すべき。

○板倉重昌肥前國島原の賊追討の事並周防守重宗先見の事

島原にて寛永十四年切支丹一揆の時、討手に石川主殿頭忠總、板倉内膳正重昌なるべし、と云ひけるを、石川聞きて、我年老いたり。板倉其器に當れり、と言はれしが、重昌仰を奉り、肥前に赴き、城落ちざりしかば、又討手の大將を下さるべし、と言ふを、石川聞きて、我始は其撰に合はん事をさのみ悦ばざりき。今思ふに、泰平の世に徒に死なんも志に非ず。天晴仰を奉りて西國に赴かばや、とぞ言はれける。重昌筑紫に向ふ時、京都にて所司代板倉周防守重宗に對面有りて、今度の仰せを承る事辱き由語られけり。重昌既に京都を立ちて後、重宗、重昌が思ふ所を察するに必ず討死すべし。再會是迄なり、と言はれけり。松平伊豆守信綱肥前に進發せらるゝと聞きて、信昌城を攻めて討死せられたり。人重宗に其謂を問ふ。重宗、城に籠る者は百姓

追討の御使輕くこそ候へ。宗門に附きて起る軍は大事のものにて候。重昌一定討死仕り申すべし。如何にも計つて止めばやと存じ候ひし、と申す。以ての外御氣色損じ御座を立たせ給ふ。宗矩猶夜更くるまでも退出せず。此由聞召し、又御前に召して、重昌討死すべき子細は如何、と御尋有り。宗矩、さればこそ兵の道は勇を先とす。勇士は死を悲まず。三軍皆恐れざる事は今の名將の專一とする事にて候に、凡愚の輩宗門を深く信じ、其法を固く守りて死を以て身の悦とす。百千の人死を恐れざるの勇士となり候事は宗門の故にてこそ候へ。織田家の武威を以て一向門徒に勝つ事能はず。天子の命を假りて和平になり候ひぬ。三河國の一揆も近き御家の事にてこそ候へ。大坂の時、重昌年若く候へども數十萬人に撰ばれ、唯一人大事の御使承りたる者なれば、是等の士民打亡すべきに何事か有るべき。誰かは其下知を背くべきと思召したらんは、事の違ひにて候べし。重昌位高く祿も有りて、年頃重き職を司つて、常に人の敬ひ候はんには然るべく候。今の重昌が身にて城を攻候ひなんに、西國の諸侯如何は下知に從ふべき。思ふにも似ず攻獄みて候ひなんには、又御一門の人々か、さあらずば宿老の内重ねて追討の御使下され候べし。然らば重昌何の面目有りて生きて再び關東に歸るべき。可惜人を土人等に打たせ候ひなん事、誠に口惜くこそ候へ。是は御家の恥辱とも申すべきをや。御許を蒙りて候はば、追附け參りて鬼角

矩年老病重かりし日も、辱くも家に入らせ給ひき。正保三年三月終に空しくなりけるに、其比例無き贈位の事を執し仰せられ、從四位下に上げさせ給ふとかや。宗矩死せし後事に觸れて、生きて世に在らば尋問ふべきものを、と深く慕はせ仰せられしは、誠に有難き事なりし。其中一事相傳ふるは、島原凶徒の亂江戸に聞えし頃は十一月十日なり。宗矩、有馬玄蕃頭豊氏の家に散樂有りて行向ひしに、家隷尋ね來て但馬守を呼出し、肥前國島原に土民相集りて楯籠り候ひぬ。是切支丹宗門の者にて、松倉に叛き候ての事なり◉と早馬來り、板倉内膳正追討の御使を承り、早や御發向候、とぞ申しける。宗矩さらぬ體にて元の所に歸り坐し、用人に向ひ、急ぎて宿所に歸るべき事出來ぬ。良き御馬を貸し給へ、と言へば、心得たりとて馬に鞍置きて牽立つ。宗矩打乘りて品川に馳著き、板倉は如何に、と問へば、遙に過ぎさせたり と答ふ。川崎に馳著きて問へば、今は二三里も隔りたり、と申す。日已に暮に及べば引返して御城に上り、近侍の人々を以つて、申すべき旨有りて伺候し候ひぬ、と申せば、廳て御前に召して、何事にや、と仰有り。宗矩畏り、只今承り候へば、九州に切支丹宗門の逆徒發起し、内膳正重昌追討の御使を承り馳向ふ由、仰せと稱し、押止むべきと存じ追駈け候へども、追附かず候。此由申さん爲なり、と申す。何故に押止めんとは思ふぞ、と御尋あり。さん候。君は只管の土民儕立籠り候と思召して、

故の候。多く敵の倒れ候を起しも立てず打たんとする故に、身を忘れ脚を切られて倒れたる者の勝になり候。倒れ候に虚實の二つ有り。吉岡が倒れ候は虚にて候。吉岡假令實に倒れ候とも容易く斬らるゝ男にあらず。倒れし時は身を防ぐ事虚に似て候へども、近附くならば切らんと存ずるは實にて候。虚にも實にも、倒れ候者の立上らぬと言ふ事は無く候。その立上る時は躬を防ぎ、敵を切り拂はんと存ずる心虚になり候。其處を打つて容易く切り止め候ひき。誠に斯る小き業四夫の事にて、殿の知し召す理にても候まじ。されども陣を分ち軍する道にも相叶ひ候事もやと、憚を省みずして申すにて候、と言へば、勝重大に感ぜらる。

○柳生宗矩劍術御師範の事　並宗矩先見の事

柳生但馬守宗矩は、大和國にて世々柳生の庄の地頭なり。關ケ原の戰の後德川家に仕へ奉りて、父より劍術を受傳へ無雙の妙手と聞えてけり。大猷院殿御年若かりしより此技を好ませ給ひ、宗矩御師範に參りて御心を盡させ給ひけり。只此藝に依りて其人を信じ敬せさせ給ふと人々思ひけるに、實に其技に依つて治平の政事を喩し申しけるにや、常に御側の人々に、天下の治めは但馬守に學びてこそ其大體を得たれ、と仰せられしとぞ聞えける。宗

○吉岡建法狼藉太田忠兵衛手柄竝太田武技を論ずる事

慶長年中禁裡に散樂の有りし時、貴賤群參しけり。吉岡建法と言ふ染物屋、劍術の妙手にて有りしが、無禮の事有りしを雜色咎めければ、建法外に出で、羽織の下に脇差を隱し元の所に入り、先の雜色をたゞ一打に切つて、夫より縱橫に駈廻る。元より飽まで手利なり。手負數を知らず。板倉伊賀守勝重日の御門に有りしが、眉尖刀の鞘を外し向はれしを、太田忠兵衛、何條手下させ給ふ事や有る、とて駈行くを、勝重、此長刀にて、とて與へられしかば、太田吉岡に向ひ、惡逆無禮の男子首を延べよ、と走り懸れば、吉岡は紫宸殿の階に息次居しが、我に太刀打せん者汝ならでは、と言ひて、階を下りて立向ふ。太田、已に眉尖刀は無益なり、と言ふ儘に刀を抜く。吉岡走り懸り樣に倒れけり。太田大音あげ、倒れたるを切るは士の恥なり。立ちて勝負せよ、といふ。吉岡立上る所を飛懸り、一太刀に切殺しけり。勝重悅びて太田に祿を增し、盃を與へて後、吉岡が倒れたるを切らざるは勇餘り有りと雖も、氣に驕の失有るに似たり。吉岡商買賤しき身なれども、劍術は如何なる人も及び難し。倒れしは天の與へなり。然るを切らざるは虛を打つの理に暗しとも言ふべきにや、と云はれしに、太田仰せ誠に辱く候。此處に一つ存ずる

比に及んで長政、我居たらば、若き者共酒思ふ程得飲まじ。後にて打解けて酒宴せよ、とて歸られしに、但馬、今少し居て若き者共に懇に詞をかけ、人の悦ぶ樣にこそ有りたけれ。兎角我儘の直らぬ殿なり。頂に大きなる灸をしてこそ能かりなめ、と大音にて云ひしを、長政聞かぬ體にて歸られけり。

○龜田大隅江戸の石壁を築きし事

江戸の石壁を築かるゝ時、淺野長晟仰を奉りて龜田大隅高綱を奉行とす。石壁成りて後崩るる事三度に及べり。台德院殿打廻り御覽じて、何とて崩れしや、と仰せ有りしに、龜田謹んで、其事に候。大隅守の時鳶の嘴の鎗を提け先駈け候。陣逢に崩るゝ事は無く候。石は無心物にて詮方無く候、と申す。事終りて鹿毛斑の馬を大隅に賜ひけるに、士の二毛の馬に乘る事や候。遁けたる事も無く候に口惜く候、と言ふを、土井利勝申上げられしかば、別の馬を換へて與へよ、と仰せられけり。龜田大剛の者にて、十文字の鎗下坂忠親が造にて、鞘は鳶の嘴に造り、栗色に塗り總螺鈿の柄なり。

一途は得ものにて御座せ共、進退圖に中る一途は缺けて御座しまし候。此是非の論は備後老功の者にて候間、時々問はせ給へ。滿德殿、只一人駈け出でて討死する事は葉武者の業なり。死なぬ樣に軍に勝つを大將の道にはする事に候。此詞よく覺えて疾くより能し給へ、と髮を撫でて長政の怒を物とも思はぬ氣色なり。備後守次の間に酒宴して有りしが聞きつけて、銚子土器取持ちて走り出で、長政の前に跪き、憚も顧みず進め奉り候、とて盃を差置き、若き時如水公の小姓たりしかば御酌は致し習ひし、小笠原の禮儀存じ出し候、とて酒を進めければ、長政打解け盃を傾けられしかば、夫を但馬に賜り候へ、とて、狂人よ。夫へ罷出でよ、と言ひければ、但馬進み寄り其盃を戴きて、三度引受け飲みて後、殿は由無きに怒り給ひ、今日の祝に興醒め候。少し醉ひ給へ、と云ひしかば、長政も又盃に十分引受けられし時、但馬、いざ肴よ、とて田村を諮ひ出し舞澄したり。鬼の如くなる男の稽古せしか、拍子も耳目を驚かせり。皆一同に、兵の交り、と諮ひて酒宴盛になりければ、備後守高聲に、若き人々能く聞かれよ。心掛の深きも殿、又思慮無きも殿なり。大戯者は但馬、又賴母しきは但馬なり。黑田の家の武勇目出度き時ぞよ、と皆々酒を酌交し、事有らん時鎗を合せ、爲すべき事を爲し置く時は何事も許し給ふぞ。人々諮へや舞へや、とて酒宴止みてけり。又長政或年の春歲初の祝に、栗山備後守が許に行かれしに酒宴有り。四つ

○黒田満徳丸袴著の時母里但馬舞をまひし事

黒田長政の嫡子満徳丸とて、四の歳袴著の祝有り。母里但馬はひき目親にて、常に爺と名づけられしが、其時但馬満徳丸の髪を掻撫でて、疾く成長して功名し、父上より克くし給へ、と申しければ、長政、何といふ事ぞや。我武略を貶するか。若き時は汝又備後槊とも相謀りき。朝鮮に渡り、又關ヶ原の合戰も皆汝等が扶に依らず大敵に勝ちたり。其後世太平なれば立つべき武功もなし。満徳如何に思ふとも我を越ゆる事存じも寄らず、とて膝立直し、但馬を睨まれしかば、人々汗を流す處に、但馬側に向ひて、故無き怒かな。人の子に功名し給へと云ふは僻事か、とて物ともせざる體にて、長政の方を見向もせず。長政、否父より優れとは如何に、と怒られしかば、但馬打笑ひ、心を静めて聞き給へ。武功は幾度事に會ひても、仕澄したりと思ふ事は無く、度毎に不足なる者に候。他人は類無しと褒め立つれども默して過ぎ候よ。良き軍兵を引具し地の利よく、幸に勝ち給へるを、自讃は以ての外の僻事にてこそ候へ。今まで勝軍に慣れて、毎度斯くの如くならんとならば必ず敗北有るべし。味方崩れたる時一足も引かず討死は、殿の得ものなり。其は大將の道にあらず候。味方を討たせず軍に勝つを良將と申し候。殿の武略進む

○忠興飯河豐前同肥後父子を誅せられし事

竝肥後が妻節義に死する事

細川忠興豐前に在りし時、同州龍王の城に飯河豐前宗祐祿三千石、岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石、宗祐の子寵せられて長岡の姓を與へられしに、父子とも罪有りて、慶長十一年七月二十一日二人とも誅せらる。宗祐は河北石見、逸見治左衞門を討手とし、宗信は增田藏人を討手とせらる。宗祐散々に戰ひて死傷多し。宗信が妻は米田助右衞門是政が女なり。宗信と睦しからず。對面せざる事三年に及べり。忠興、是政が後室の尼雲仙院と言へるを呼びて、豐前、肥後罪有りて誅すと雖も、汝が女と孫の女に罪無し。密に告知せて命を助けよ、となり。後室の尼聞きて、肥後が妻常に中よからず。然れども、夫を捨てて斬かる時に遁れんとは得こそ存ずまじけれど、仰せの忝きをば告げ申さん、とて文して告げ遣りければ、誠に仰せは忝けれど、今はの際に夫を捨てて遁れん事人道にあらず。女子は東西を辨へざる者なれば、養育して給はれ、とて使に附けて尼の許へ送りけり。宗信是を聞きて大に悔み、我過を謝し、終に共に自害したりけり。

常山紀談　巻之十九

○細川忠興胄の立物の說

細川忠興に、胄の物ずきを如何にせばや、と言ふ方の有りしに、詳に書き記して使に與へられけり。使、立物の下地桐の木と書き給へるは折れ易き物にて、如何候はん、といへば、忠興色を變じ、汝は弓箭取の使とも覺えぬなり。軍に臨む者誰か生きて歸らんと思ふべき。二つ無き命だに然り、何條立物の折るゝを歎ふべき。輕きこそよけれ。立物の折るゝばかりに働きたらば、何の見苦しき事有らん。ひと面目にてこそ有れ、といはれけり。

天正元癸酉年七月、信長淀の城を攻落されしに、岩成主稅助を細川藤高の士下津權内打取りし時、忠興八つの年なりけるが、長岡監物が肩に乘りて、監物が立物鹿の角に取附き、見物して興に入りたりしを、人見て後年の生先を推計りけると也。

の仰なりと申さざる事を深く感じ給ひ、女房達に仰せ有りて、朝飯を召して食べ候へ、とて賜はりて、又口を封じ給ひてけり。書程入らせ給ひて、又御推問有れども遂に其詞屈せず。御臺所御詫言有りしかば、さらば重ねてを愼めよ、と仰せ有りて御赦あり。御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にて生立ちたらんには、竹千代殿の爲には雙無き忠臣にてこそ候はめ、と殊の外に悦ばせ給ひけるとかや。されば諸國の大名の代々奉りし人質を返し、殉死を禁じ大佛を鑄て錢とし、明暦の火災、東都の城廓を始め悉く灰燼となり、諸人焦爛に苦しむ。殊に去年由井正雪の逆徒の騒有りし後なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みて立所に執り行ひし事皆其所を得て、程なく世の人心も靜まり、昔に替らぬ時となりぬる事、古の賢輔にも恥づべからず、と申し傳ふる所なり。

けり。

信綱實は大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。嚴有院殿御誕生有りし時より御家人になされ、御遊相手にぞ候ひける。大殿の御寢殿の軒に雀の巢をくひ子を產みたるを、若君此方より御覽じて、長四郎よ取りて進せよ、と仰せけるに、年十一歲なれば如何にも叶ふまじき由を申す。晝は驚きて飛去りもやせん。能く見置きて、日暮れて此方の軒に梯指して登り、忍び行きて取るべし、と有合ふ人々勸めければ力無く、日暮に忍び登りてやう〳〵傳ひ行きけるが、蹈み損じて御壺の內にどうと落つ。大猷院殿御刀執らせ給ひ障子開かせ給へば、御臺所燈火取つて出でさせ給ひ御覽ずるに、長四郎にて有りけり。大猷院殿、汝は何故爰には來れるぞ、と御尋有りしに、今日の晝御殿の軒に雀の子產みたるを見て、餘りの欲さに取りに參りて候、と申す。否々己が心にはあらじ。誰が教へけるぞ、と樣々に御推問有れども、幾度も爭ひぬ。年比にも似ぬ不敵なれば、疾く大なる袋の中へ押入れて口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給ひ、事の由を有りの儘に申さざらん程は、何時までも斯くて候へ、と仰せけれども、猶詞を換へず。夜既に明けて常の御座を出させ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、彼が幼き心にて身の悲しさを顧みず、竹千代君

青蓮院の宮にや、幼き宮に中院内府通茂公後見たりしに、常に碁、雙六を制せられけり。或時公參られしに、將棋の盤の有りしを見て、家司坊官を招き、兼て申せしに斯る物を何とて置きたるぞ。はしたなき業は素より悪しけれども、假令有りても、年の長じて心附の有りて止む事もあるなり。是等の類はさしも悪事にあらざる故其事に慣れ、空しく月日を過し、學問の志怠るものなれば、第一の悪き物にこそあれ、とて退出せられけり。又或時其宮に參る人尺八の名管を持來れり。重器なりとて人々玩びける時、公參りて、是は誰が業ぞ。斯樣の物を、とて柱に打ちあてて碎かれけり。彼の主の甚だ重器と思へるに、斯く許になして如何にせん、といひけるに、其の主來り事の由を聞きて、誰某が持ちたると内府の聞し召されん事恐ろしく候に、それと知られ申さぬは大なる幸に候、と言ひけるとぞ。

○松平信綱恭敬の事附信綱幼年奉公の事

松平伊豆守信綱出仕の時、裏附の上下著る事無し。屋敷に有りても是を著られず。常に言はれしは、人の心衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存せずしては忠を盡す事を得難し。先衣服より心を附けて恭敬を忘るべからず。我に於ては斯くの如く勉めざれば、忠勤を成し難し、と云はれ

の天井に釣置きて、客來れば、彼見給へ。肴を調味せよ、とて、隼人が贈りたる金なり。是を見れば美味に勝れり、とぞ語りける。大坂冬陣和平の後、隼人が子何某祖父の所に來りければ、此度は事故なけれども驕て事有るべし。其時よき馬を求めよ。江戸廣しと雖も、金二十枚の馬はさのみ多からじ。之を、とて二人の孫に各金二十枚を與へしとなり。昔の士風想ひ見るべきにや。

○永井尚政執政の用意を直孝に問はれし事

永井信濃の守尚政に執政の職を仰出されし時、井伊直孝に對面し、不肖の身斯る任を受け、甚恐懼に及び候。教訓を得て其職に居候はばや、と申されければ、直孝、尤の事に候。我教へ申すべし。身を潔くし明朝來られ候へ、と有りければ、辱き由言ひて沐浴し、禮服して其明の朝行かれしかば、直孝出會ひて、世の諺に油斷大敵と申候事定めて知られたるべし。萬事の危きに及ぶ事、皆是油斷より破るゝ事の候。此事固く忘られな、といはれけり。

○中院通茂公幼宮を教訓の事

の風俗になりて、彦根の士も都近ければ衣服美麗になりけるを、直孝戒めずして儉約にすべき道を謀り、江戸より歸る時、木綿の衣服を供する士の數密に用意して、彦根に著く時俄に配りて著せられけり。彦根の侍衣服を飾りて迎へけるに、供の士皆木綿の衣服なり。彦根の人々身を省みて、美服を裂きたく有りしとぞ。一事の法令をも出さず、彦根の奢止みてけり。

戰國の時衣服質素なる事論ずるを待たず。瀧川左近將監一益關東の管領として厩橋に至る時、諸將對面の爲來りしに、只今一つ有る衣服の垢附きたるを濯ぎて赤螺にて候程に、暫く待ち給はれ、と言ひし事語り傳へて、直孝の衣二つ物見の士に與へて、著替の無かりしも皆符合したり。泰平に及びて稍衣服の美に成れりしか共、寛文の頃まで尚其遺風あり。然れども金銀利倍の物語する事は、士の恥と心得居たりけり。酒井雅樂頭忠清大老たりし時、江戸の殿中にて、春の末にや休所にて、下に著たる服の汗附きたるを欄干に懸けたるが、所々繼ぎたてたるが見苦しき、と歸りて語られしに、其事を司りし老女の、時移りて君の奢り給ふにこそ。我一生は今の如くならん、と言ひし事あり。此事は嚴有院殿の御時なり。古の武士は大やう無用の奢侈を縮めて、用ふべき事には吝ならざりしなり。關ヶ原一戰の後成瀨吉右衞門は伏見に有り。其子隼人正駿府に在りけるが、折節父の許に金を贈りけり。居間

なり。亡父常に我を誡めて、小賢しき利根だてなる事努々すべからず。人の心に入らんとて、かりそめにも諛ふ事有るべからず。唯守るべきは義の一筋なり。汝武勇の身なり。士の義を忘れざれ、と申し置きたりしに違はんかと、日夜是を勤むるの外他事なし。衣食の美を好まず、従者と艱難を同じくせり。日本第一の大家なる加州の士中、我と祿同じき者多し。比べ見られよ。人馬のすくやかなる、武具の揃整ひたる、我に勝る者有りとも覚えず。又利に頼りたる事や爲したる。諂ひたる事や候。僞を申したる事や候。平生日々身に省みて、弓箭の家に生れし職を忽にせず。御身は亡父と親しき人なりし故、斯く諫め給る事も忝く悦び存ずるなり。されども正しき道に教へ給はるべきに、只時を見て世に従へとや。實の本意には非ざるべし。さらば言に従はずして本意に従はんは如何候らん、と答ふれば、諫めし人大に心服したりけり。

○井伊直孝衣服儉約の事附戰國の時質素なりし事

井伊直孝、大坂冬の軍に物見二騎を遣るに、雨に濡れて歸りければ、則著られし小袖二つを脱ぎて與へられけり。扨安藤帶刀の許より小袖を貰ひて、綿の小袖革袴にて兩御所の御前に出られけるとぞ。直孝の領地近江の彦根は、湖上より船を泛べて都に行くに甚だ近し。太平に及びて稍奢靡

忠なり。世の國の長臣となる者其身の饒なるを省みず、尚貪る心より其主君に諛ふ。古より筆に臨みて死するは多く、諫めて席上に死する者は尠し。成し難きを成すを優れたりとす。何ぞ諫めて死せざるべき。大方財用の乏しきに及びて、他所の金銀を借求めて、忽ち困窮に至りては士の祿を剝取り、約束の詞を違へ、非義不道の事を申し行ふにも成りぬるぞかし。常に儉ならで足らざるに及びて俄に患ふる共、其本正しからずば、武備を全うせんと思へども爭で事よく成るべき。君臣とも國郡を盜み祿を竊むの凶賊なるに、其恥づべきを恥とせず、是非無き事ならずや。汝其職に居て斯る心無きは如何に、といへば、定次一言の答も無かりけり。

○不破彦三武備の事

加賀中納言利常の士不破彦三四千石の祿を受けて武名を知られたり。其子も同じく彦三といふ。性質愚鈍に見えて常に怠り勝なる事多し。是を諫むる人有りて、時節といふ事有り、といふ。悦び入り候、と言ひながら聽用ふる驗も見えざれば、又諫めたり。其時不破嘲笑ひ、才覺有る御身五百石、我愚なれども四千石、さのみな誹られ候ひそ、と言へば、色を變じて、人の勝る劣る祿の多少に依るべきや。何とてさ程理の不通なるぞ、といふ。不破夫は我も知りぬ。今の詞は戲

○佐々九郎兵衛經濟格論の事

京極刑部少輔高知播州龍野を領せり。國用甚乏しかりければ公儀の事は堀田若狹守に計り、藤堂大學頭高次、高知の長臣岡七郎兵衛定次相加りて評議し、新參の士に年を限りて、永く暇を出すべしとの事なり。佐々九郎兵衛長光年老いぬれども思慮有る者とて呼ばれければ、江戸へ行き、藤堂、堀田に相會す。評議の始終書記して佐々に見するに、是は存寄らざる事なり。是非新參の面々に暇を出して、賑らざるを足さんとならば、祿多き者然るべし。斯く申す佐々一人が祿數十人より多し。流浪するともさのみ艱難にも及ばじ。小祿の人々は道路に乞食せん。是不仁の至りにて、行ふべき事にあらず。熟論ぜられよ、と諫む。佐々が思慮を問はるゝに、高次五百貫目を取次ぎて貸されんには、五百貫目は臣歸路に京にて借求めん。されども爰に一つの大切の事有り。幾度かくすとも、殿の能、舞妓、鷹狩屋敷の設、衣服、器物、萬事に費をなし、國の長臣其職に有る者、身構して有らば何の益か有らん。此諫言は外成と言ひ大祿なれば、高次の任なるべし、といふにより、一座感じて佐々が言を用ひ、暇を出さるゝ者一人も無し。さて長光、定次に向ひて、此事を一旦評議に及ぶとも、國の長臣として猥に順從して一言も爭はず。不

見喜右衛門といふ者、松野惣太郎といふ者に語りけり。折節頼宣卿馬場に御座しける時なるに、惣太郎聞きて、殿には未だ馬上は練れ給はぬなり、と言ひければ、頼宣卿、子細如何に、と尋ね給ふ。惣太郎、さん候。東照宮は海道一番の馬上の御名人と申奉りたると承り候。小田原陣の時、山道を武者押して過させ給ふ。丹羽長重、長谷川秀一、堀秀政峯筋を押しけるが、東照宮の御旗を見て皆々おし前を観る。爰に一つの谷川の細橋有り。此橋へ行きかゝる人々、橋の下を皆歩み渉りにす。東照宮馬上にて橋際へ著せ給ひしかば、三人の大将、聞ゆる馬上の達人の細橋を渡さるゝ見よ、と云ひ合へりけるに、馬より下り給ひ、御馬は遙の下を口附四五人にて牽渡しけり。人々、是は如何に、と云ひけるを、彼三人の大将大に感じ、馬上の達人とは是をこそ言ふべけれ。馬上の達者は危き事はせぬものなり。殊に大事の軍を前に置きての事なれば、斯く有るべき事よと感じたりと承り傳へ候、と申しければ、頼宣卿熟と聞きて大に悦び、其詞を書きて硯箱に入れられけり。又前田権之介といふ士、或時頼宣卿へ言ひけるは、今朝獨思慮せる事の候ひしに、大将の一言程重き事は候ふまじ。千金にも人の命を替ふる者は有るまじきに、大将の一言により、忽命を露塵許も惜きとは存ずる事なきは、昔よりの事に候、と申しければ、兎角の詞無くて時服を與へ給ひぬ。

公を始め一同に感じ、譽ぬ人も無かりければ、賴宣卿、其浪人共の中壯年の者四五人助け置かれよ。重ねて詮議有るべき爲なり、と宣ひけるとぞ。

○水野重長諫言の事

賴宣卿、紀州にて松江の西の庄といふ所にて鷹狩有りて、港に船を附け陸路を經給ひしに、折節春きたる麥を筵に並べ、僅に路明きたりしかば、皆農民の年中の粮なるぞ。供の者踏むべからず、と再三制して歸り給ひければ、百姓共悦び合へりしを、供なりし横目の長臣の前に參りて、斯る次第に候、と申す。何れも感じ合ひけるに、水野淡路守重長一人、今日殿の御振舞こそ心得ね。斯る事故、下々の奴原殿の内實を見て馬鹿にするぞとよ。殿の通らせ給はんには麥を脇へ引退け、水を打ちてこそ有るべきに、何ぞや麥を乾して通路を障る事奇怪なり。一國の主の仁はさは無きものなり、と言ひしを、賴宣卿聞き給ひければ、君も君たり臣も臣たり、と人々申しけり。

○松野惣太郎前田權之助賞せらるゝ事

賴宣卿馬を乘り給ひ、馳の中にて頭巾の風に落ちけるを、中に取つて又鞍に乘直り給ひしを、吉

徒黨し、御鐵炮の藥藏の奉行川原重郎兵衞も是に與し、埋火にて遠くより火をさし、徒黨の者共船にて海上に出づる時、藥に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに、心替したる者三人有りて訴へ出で顯れしかば、丸橋を始め生捕られ、正雪は駿河宮の町にて自害しけり。右の謀書數通浪人どもの許に有りける故、大臣集りて一大事と案じ煩ひ、兎角賴宣卿を殿中へ召して、此書を出す外有るべからず。其時樣子惡かりなんには直に捕へ申せ、とて屈强の兵を隱し置きて出仕を待居たりしに、尾張中納言光友卿、水戸中納言賴房卿も出仕有り。此事を告げ申しけるに、尾張中納言、何條斯る企有るべきや。是謀書にて有らん、となりしに、水戸中納言も、如何にも左候ひなん、とぞ宣ひける。されども各手に汗を握る處に、賴宣卿出仕有りて座に附き給ひしかば、井伊直孝、酒井忠勝、松平信綱、此度浪人共の巧みの次第を申し述べたる處に、阿部忠秋彼狀を披露しけり。賴宣卿殘らず見給ひて氣色打解けて、返す〳〵も目出度こそ候へ。最早何の恐るゝ事も候はず。其子細は、彼徒黨の面々外樣大名の判を似せ謀書を作りたらんには、三代の御恩を忘れ、若や氣違ひて謀叛を企つるとの疑も有るべきに、我等が判を似せたる故事故無く治りたるなり。幼き公方の御身にて若し御疑ひも有らんには、我等只今國差上げ、如何にも仰に從ひ奉るべし。天下安全にてこそあれ、と悅面に現れて見えしかば、兩

人を害して面白しと思ふは、禽獣の仕業にて人間にては無く、日本にて罪人を切り候は穢多こそ致し候へ、と憚る色無く言ひしに、つと入り給ひぬ。鑓て道圓を呼びて、先に申しつる所こそ至極の道理なれ。これより再び自ら試みる事有るまいぞ。諫言こそ返すく〳〵も淺からね、と賞美ありけり。又或時大高源左衛門といふ士に司る事に附て、我不幸にして良き士持たざる故、何事も意に成りぬ、と叱りて、人の無きなり、と有りしを道圓聞きて、己が目の暗くて人の善惡を見明めざるを咎めずして、人の無きとは何事ぞや。外様古參にも新參にも良き人を撰み出さんには、智者も勇者も如何程も有るべきに、人の無きとは目の明かぬ故なり、と直言しけるを熟と聞き給ひ、道理至極せり、とて再三感ぜられ、深く先の詞を悔み給ひけるとぞ。道圓常に其子に語りて、亂世には臣士君の爲に死する事有り。太平の世諫めて死する事を忘るべからず、と戒めけり。

○由井正雪叛逆の時賴宣卿出仕の事

慶安四年辛卯四月二十九日大猷院殿過ぎさせ給ひて、其七月江戸にて浪人由井正雪叛逆をたくみ、紀伊大納言殿の仰と稱し、判形を似せ謀書を所々に遣し、丸橋忠彌、芝原又左衛門以下數百人

○藤惺窩秀吉公を論せられし事

惺窩藤斂夫東照宮の御前にて、秀吉は大膽なる人なれども大心なりとは申すべからず。朝鮮より明へ攻入らんとは大膽なれども、秀信を信長の跡とは仰がれず。自立して日本を掌握せられしは大心にあらず、と申されけるが、後に此事を四辻亞相公理卿に語る人あり。亞相の曰く、我も其論尤なりと思ふなり。大佛建立は彼猿どころがはなれぬなり、と言はれき。

○紀伊大納言賴宣卿諫言を歡び給ふ事

紀伊大納言賴宣卿は、東照宮の十一男にて御座しませしが、幼き時より東照宮の膝下に御座して文武の御物語を聞し召し、尋常の質に御座しまさず、諫を納れ給ふ事も並々ならず。或時腰帶といふ備前長光の刀にて立袴姿を試み給ひしに、快く切れて其儘立ちたるを突き給ひければ、二つに成りて倒れけり。左右一同に驚き入るばかりなり。大に悅びて那波道圓に、異國にも斯る利劍も有りや。又斯く手の利きたる人や有る、と仰せ有りしに、道圓承り、異國には龍泉、太阿など申す利劍も有之候。人を殺して樂む人は、夏の桀王、殷の紂王と申す惡王御座しまし候。凡

近習の人々に向ひ、是君を愛すると思へるは大なる僻事にてこそあれ。君正しき道を好み給はば、汝達も正しき道にて仕へられよ。斯樣に事を料られなば、必ず阿諛をなして寵愛を好するにも及ぶべし。疾く膳を奉りて鼓の前に終りなんに、何の苦しき事やある。是等は誠に小事なれども、君を欺くとも言ふべし。君子は禍を未然に防ぐものなり、と戒められけり。

○林道春格言の事

直孝或時林道春に物語して、樊噲が勇氣逞しきと聞く。されども弓箭取の珍しき事にもあらず。我とても噲が下に立つべからず、と言はれしに、道春、噲は誠に穢多の子にて筋目も勝り給へり。されども爰に一つの故の候。戰に臨みて矢石の中に先駈するのみを勇氣とは言ふべからず。是は匹夫の事なり。噲が顏を犯して高祖を諫め申せし事有り。足下には如何候べき。廣言を吐き給ふともよく〳〵自ら省られよ。噲に及ばぬ事の有るべき、といへば、直孝恥づる色あり。是は其比大猷院殿御病氣とて、大名に相見なかりし故に斯くいはれしとかや。世に道春一生の格言とせり。

し由正紳聞きて、己が功と思へり。父を死罪にといへる三千の刑、不孝に勝る事や候。此家の亡ぶべき理なり。まして忠を君に致すは誇るべき事にあらず。正純の亡ぶるいと遅かりき、とぞ言はれける。

正信に三萬石の祿地增し賜はりし時、臣は元鷹師にて候を斯樣に取立てられ候へば、只今の祿分に過ぎたり。必ず天の冥加に盡き申すべし、と固辭せしが、其後子の上野介に、我無からん後汝に祿を增し給はりなば、三萬石は我に賜はりたれば辭すべからず。それより增賜はりなば必ず固辭すべし。祿の身に過ぐるは禍なり、と遺言せられしが、正純父の教に背き、遂に國亡びたりといへり。

○台德院殿御行狀の事

台德院殿は殊に禮儀正しく御座しまし、苟にも疾言御座しまさず。事無き時は泥塑人の如くになん、と人申せしが、極めて下民に御心を盡させ給ひ、孝道深く御座しましけり。又信を失ひては天下は保ち難し、と常に仰せられ、御鷹狩に出給ふ時も時を定められ、御膳の半にも辰の鼓を打てば箸を捨てて出給ふ。近習の人奉膳終らざれば辰の太鼓を打たず　井伊直孝是を聞き、

信の曰く、大國を賜ふべきとなりしを、我然るべからざる由を申止めて候ひき。是忠ある子細の候。其子細は、御身は武勇智謀類稀なる人にて、又豊臣家の恩深し。人の疑有るべし。功成り名遂けて身退くと申す事の候。今領國の少きに聊の恨無く御座さんに、恩遇子孫に到らん。若大國を領し給はば、必ず人の後に屈む人にあらずと、世疑ひおそれて禍有るべしと存ずる所なり。されども恨みられんには力なし、と云ひたりしかば、嘉明詞無くて止みけり。

○安藤直次先見竝本多正信遺言の事

安藤帯刀直次物語の時、本多上野介正純は家亡ぶべきなり、と云ひしに、程無く本多に祿を賜はりけり。人々直次に、云々言はれしに如何に、と問ふ。直次聞きて、後を見られよ、と云ふ。又下野の宇都宮二十萬石を賜はる。人々又直次に、我等承り候所は苦しうも候はず。再三斯る事な言はれそ、といふ。直次打笑ひ、正純家亡びん事近きに有り、といふ。猶て正純國を召放たれしかば、人々又直次に、神智有るが如くに候。如何なる故にや、と問ふ。直次、さればとよ。台徳院殿關ヶ原の軍の時、木曾路にて遅留の有りしを、正純、是皆父正信が仕業に候。死罪に行はれなば嗣君の過無き事を人存ずべき由申せしを、台徳院殿、我爲に斯くまで云ひつると仰せられ

に至るまで悲み嘆くべし。汝死して我存命へたらば、誠に大なる逆事なれ共、如水御座しますとて力を落す士有るべからず。是人の懐き従ひて吾に服する事、汝に勝る其一つなり。次に我は無雙の博奕の上手なり。關ヶ原にて石田今暫く支へたらば、筑紫より攻登り、下部のいふ勝相撲に入りて日本を掌の中に握らんと思ひたりき。其時は子なる汝をも捨てて一博奕打たんと思ひしぞかし。又紫の袱に包みたる草履片足に木履片足取出し、軍は萬死に入りて一生に會ふ習なり。十全を思慮しては叶ふまじ。例へば草履木履を穿きたる如く、二つ物がけの軍をする心得せられよ。汝は才智有りて先の事を豫め料る故に、大功は努々叶ふまじ。偖面桶と云ふ物は飯を盛る物よ。上天子より下百姓に至るまで、一日として食物無くては世に存命ふる者は無き事なり。國を富し士卒を強うするの根本一大事、此飯入に有り。必ず忘るべからず。斯る故に此面桶を形見に參らす、と言はれけり。

○本田正信加藤嘉明を諭されし事

加藤嘉明關ヶ原の戰ひに大功有りしかば、五十萬石を賜はるべき處に、本多正信其事を押止めたりと嘉明傳へ聞きて、本多を恨みられけるに、正信行かれしかば、顯ふ處とて對面せらる。正

を賜りき。斯の如く匝度其場を去りては後悔すれ共、主計頭其時を移さず陣羽織或は感狀を與へ、人々も皆義みて褒め立てたりし故、其に引かれて止む事を得ず麾を取り、士大將と言はれしは、主計頭に騙されて本意を失ひたるなり、と忠廣改落の後京に引籠り、再仕を求めずして有りける時、語りけるとかや。

○前田利常戰死の士を弔はれし事

前田利常大坂の軍に功有りて加賀に歸り、討死したる士の爲にとて報恩寺といふ一宇を建立し、戰死の人の追福にせられ、自ら彼寺に詣でし時、討死の士の親族を供に連られける。自ら香を燒き涙に沈みて深く悲れしを、見る人聞く人、此殿の爲に死なん事露塵許も惜からじ、とて一同に哭し泣きけるとぞ。

○黒田如水遺言の事

慶長十九年黒田孝隆入道如水、病重く成りて子の甲斐守を呼び、汝は親に優れる事有り。我も亦汝に優れる事二つ有り。語つて聞かせん。今我死なば我士は言ふにや及ぶ、汝が士大將より士

ひたりと云へり。

○加藤忠廣物語竝飯田覺兵衞が事

加藤肥後守忠廣或夜物語に、吾は大力あれかしと思ふなり。重き甲二領重ねて軍に出づれば、恐るゝ事有らじ、と云はれしを、飯田覺兵衞熟と聞き、先殿物具一領にて、數十度の戰に終に手負はせ候はず。朝鮮に攻入りて鬼將軍と異國の人も惶れ候。死生存亡は天命にて人力の及ぶべきに非ずと言へ共、能く戰へば生き、惡く戰へば死ぬると申す事も候。國中の民を撫育し、諸士よく懷き從ふ時は、席上にて勝敗の理を論じ、軍兵を下知して進退自然に整ひ候へば、三軍の著たる物具は皆大將の一身に重ね著たると同じ事に候。誰か鋒を爭はん。臣は力を好ませ給ふ事然るべしとも存じ候はず、と申して退出しける時、先殿には如何で斯くまで劣り給へる、とて聲を上げて泣きけるとぞ。此覺兵衞は淸正の時武功の大將なり。初は角といふ字なりしに、太閤覺の字に書替へさせられしとぞ。覺兵衞云ひけるは、我一生主計頭に騙されたり。初めて軍に出でて功名しける時、朋輩多く鐵炮に中りて死しけり。危き事よ。早是までにて武士の仕はすまじきと思ひたるに、歸るや否や淸正時をすかさず、今日の働神妙言はん方なし、とて刀

○東照宮御中指の事

東照宮御指の中節胖脹となり、年老いさせ給ひては屈伸し難くおはす。是は若き御時より數度の戰に、初の程は麾にて下知せさせ給へ共、事急なるに及びては、懸れ〳〵とて御拳にて鞍の前輪を叩かせ給ふに、血流れて出る。斯くの如き事幾度ともなき故となり。

○金の七本骨の扇の御馬印の事

東照宮、金の七本骨の扇に日丸附けたる馬印は、參河の設樂郡牛窪の牧野半右衛門が印なりしを、永祿六年に乞ひ得させられて馬印となし給ふ。夫より前の御印は厭離穢土欣求淨土の八字を書きたるにて、大樹寺の登譽が筆なり。其印明曆丁酉の火災にかゝれりと言へり。然れども扇の御印は其前よりの事にや。天文十四年、公矢矧川にて織田家と軍有りし時、利無くて危かりしに、本多吉右衛門忠豐疾く岡崎に入らせ給へ。御馬印を賜はり討死すべし、と申せ共許されず。扇の御馬印を取て清田畷にて討死しける。其隙に危きを遁れ給へり。御印は忠豐が嫡子平八郎忠高が家に相傳へ、忠高も又戰死しける。其子忠勝が時に至りて、永祿二年東照宮乞ひ返させ給

○東照宮禮を正し給ひし事

東照宮大度勇畧に御座しませし事は、誠に申すも愚なり。中にも禮儀を正させ給ひしかば、今川義元討死の桶狹間を、御鷹狩にて過ぎさせ給ふ時、必ず御馬より下りさせ給ふ。これは御幼時義元の好を思召し出されての事なりけり。上杉景勝に途中にて行逢はせ給ふ時、輿より下りさせ給ふ。是も父謙信の好を思召しての御事なり。

○駿府城中へ水を引かんとせられし時の事

駿府の城中の池に、阿部川の水を引入れよ、と仰せ有りしに、水筋に小き寺有りければ、外の處に引移さん、と申しけるを、東照宮、寺を移す事を止め、水を入るゝにも及ばず、と仰せられけり。此程の寺移し候はんに如何許の費の候べき、といへば、夫は大なる僻事なり。田の爲に水を引かんには左あるべし。吾庭の水は慰なり。夫に人を勞する事やある。無益の事に地を捨つるは敵に取られたるに同じ。百姓の苦なり、と仰せられぬ。

妻子を亡し果つる樣に成行くぞかし。失有りて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし。諫言は聊も身の爲を思ふ心有らば、爭で主君の前にて直言すべき。唯人に君たる者の賞すべきは諫臣なり、とぞ仰せ有りける。

○三河國矢矧橋を修造せられし事

矢矧の橋水に壞れしを、造れと仰せられしに、兼ねてより船渡にすべしと言ふ人の有りけるが、幸にて候。船渡よかりなん、と申すを、東照宮、汝等末を知りて本に暗し。費を厭ふは民の爲なり。往來の旅人を苦めんは吾志に非ず。又要害も其本を謀ずれば、唯國民の和と不和とに有り。險を賴みて敵を防ぐは、道を知らざるなり、とて橋をまた架けさせ給ひけり。

○山名禪高敵衣を著られし事

何の時の事にや、山名豐國入道禪高、古き羽織の所々敝れたるを著て、東照宮の御前に參られしに、夫は如何に、と仰せ有りければ、萬松院殿より賜はりたる物にて候、と申すを聞召し、舊を忘れず本に背かぬ者かな、と御感有りけり。

より書を取出し、諫め奉るべしと兼てより存ずる事の候て書き候ものなり、と申せば、大に悦ばせ給ひ、夫讀め、と仰せ有りければ、披きて讀みけるに、一條讀み終る度毎に頷かせ給ひ、尤なり、と仰せられ、讀み終りければ、汝が志感ずるに詞なし、之より後も心置無く告けよ。返す返すも神妙なり、と繰返し仰せければ、忝き由申して退出す。正信居殘りて、只今諫め申せし事川ふべき事に候はず、と申す。東照宮大に氣色變らせ給ひ、否とよ。己が過は知ずして過ぐるものなり。國を領し人を治むる身には、過を告け知らせ諫むる者は鮮くて、唯諂ひて主君の言ふ事道に違ひても、さは候はじと詞を返す人は無きぞかし。諫を防ぎし人の國を失ひ身を亡し、後世の笑ひ草となりし例多し。只今我を諫めし者、日比心を盡し見及ぶ樣に附き、諫めんと思ひて書き記し、時も有らば見せんと思ひ居たりし志、何に譬へん樣なし。其の用ふべきと用ふべからぬとには依らざるなり。唯彼が忠心を愛するなり、とぞ仰せける。又或夜の御物語に、凡そ主君を諫むる者の志、軍に先駈するよりも大に勝れり。其故は、戰に臨みて一番に進み出づるは、素より身を捨ての事なれども、必ずしも討死せず。又討たれたりとても後の世に名を殘し、死後の譽となるぞかし。幸に功名を遂ぐれば、恩賞にて家富み子孫榮ゆるなり。されば得有りて失無き忠なり。諫は然らず。主君不道にて善を憎むに進み出て直言する者、十に九つは刑罰に逢ひ、

賞に中らざるやと汝を以て問はるゝ事、政務に心を盡さるゝならば、泰平の基と謂ふにてこそあれ。汝に物語せん事あり。我三河にて、池の鯉を鈴木久三郎が取りて烹て喰ひ、信長より賜ひし酒をも我に與へたりとて思ふさまに飲みたりき。吾怒つて眉尖刀を提げ鈴木を呼びしに、鈴木肌を脱ぎ大音を上げて、魚に人を替ふる不道にて、天下に族揚げんとは思ひも寄らず、と罵りし時、予鈴木が詞に屈伏して内に入り、熟思ふに、走りの者池にて鳥を取りし罪にて閉ぢめ置きしを諫めん爲ならんと心附きて、走りの者を赦し鈴木を近附け、汝が志返す〳〵悦しき、と言ひしかば、鈴木涙を流し、密に申すべき事を、今戰國の時なれば、手荒なるがよきと存じ候て無禮の詞を申せしに、斯る仰を承りて辱さの身に餘りて候、と言ひしなり。今太田にも三千石の祿を與へられよ、とて井上を留め給ひ、御刀を賜はりしかば、江戸に歸りて斯くと申す。太田にも祿を增賜はりしかば涙を流して喜びけり。台德院殿、井上には、汝が詞によりて孝行を知り、賞罰の道を辨へたり、と仰せ有りて、左文字の刀を賜りけり。

○東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松に御座しませし比、或夜本多正信御前に有りしに、誰人にてかありけん姓名を知らず候

の仕業する者に非ず。子細有らん、と仰せられけるに、本多上野介正純天野に逢ひて、仰を否むは臣たる者の道に非ず。臣として君命を承らざる事やある、と云ひけるに、天野、さては臣たらずば苦しうも候はじ、と言ふ儘に三萬石の祿を辭して、慶長十一年三月二十九日、高國寺を去つて行方知らず成りにけり。程經て大久保忠隣尋ね出し、年頃親しかりしかば小田原の入かといふ所に隱し置かれけり。罪無き人を殺すに忍びず、三萬石の祿を捨てて隱れし志を、人々稱し合へり。

○井上正就駿府へ御使の事

台德院殿太田某に五百石の祿を賜はりし時、太田、折紙を擲げ返し退出しけるを死罪と思召しけるに、井上主計頭正就、駿府に申して後罪を定められ候へ、と申す。さらば、とて井上駿府に參りて東照宮に斯くと申すを聞し召し、泰平久しかるべき基なり。太田は誠に無禮なり。凡そ賞罰中らざれば下の恨むるは常の事にて、太田も無禮とは知りたらん。己が身を捨てて諫むる心なるべし。臣下の直言して諫むる者怒に逢ひて刑罰せられ、家を亡し、大軍の中に駈け入る者は、多くは身を全うして功名を立つる故に、昔より諫臣を忠の第一とす。然るに今太田に與ふる祿

しかば、京都の騒大方ならず。二條の城にて門々を守りけり。忠隣武具を縄にて搦げ勝重に授けしかば、京都の騒鎮りぬ。夫より佐和山に行かれしかば直孝能く勞り申されしが、或時、申開くべき旨候べし。直孝承りて達し申さばや、と語られしに、忠隣、理を正して申さんには、聞召し明らめられん事必定なり。さらば讒言を聞召し、無罪の者を流されし過を人知らば、君の非を擧ぐるなり。此忠隣が志に非ず。我斯く朽果つるとも露塵ばかりも惜からず、と言はれしかば、直孝感服せられけり。忠隣徒然の餘に、忠臣記二巻を作られけるとぞ。

○天野康景廉潔高國寺城を去られし事

天野三郎兵衛康景は、天野遠景が苗裔にて、百貫の地を領し來りしを、東照宮瀧坂に置せ給ひ、遠江榛原郡を切取に仰出されし大剛の人なり。後駿河の高國寺三萬石の地を賜る。駿府の城經營の時竹を苅らせ積置き、足輕に守らせしに、御領地の百姓竹を盜みしを見答めて斬殺す。殘る者共逃げ散りて代官井戸某に訟へしかば、井戸、百姓を殺したる下手人を出せ、と天野にいふ。天野、盜を殺す事罪に非ず。守る者罪有らば、先づ天野罪に行はるべし、と云ひければ、井戸訟へけり。東照宮、足輕を誅せよ、と仰出されしに、天野始の如く申せしを聞召し、天野は不道

は如何に、と仰せ有り。忠隣、此度上田を攻め候て道に遅留の候ひき。上田を攻め候は忠隣と正信が仕業に候。二人の中一人は召出され、罪を糺させ給ふべきにて候。さは無くて不和に及ばせ給ふ事僻事にてこそ候へ。過ぎし年大軍にて攻めたりし時も、眞田が智勇に挫がれ候ひき。上田固くとも遂に攻落すべきを捨てて上らせ候ひしに、關ヶ原にて石田今暫し支へなば、など戰功の無かるべきに、石田脆く敗れて手を空しくなし給ひぬ。君萬歳の後に日本を治め給ふべき御嗣に、人の侮り奉るべき事を爲し給ふは、怒に引かれて忘れさせ給ふにや。疾く嗣君に自害を勸め奉るべし、と申されしに、汝が言無禮なり、とて立たせ給ふ所を押止め、忠隣が申す處理ならば聞し召し入れられよ。正しからずば首を刎ねられ候へ、と憚る氣色なく申せしかば、聞し召し入れられ、汝が言ふ所尤なり、とて驀て御對面御座しましぬ。忠隣は相州小田原の城を賜はりたりしが、慶長十八年切支丹を改むる仰を蒙りて京都に赴きたりしに、謀叛の志有る由訟へ申す者あり。本多正信、忠隣が惡逆の志有る由申しける、と世に申せしが、忠隣をば井伊直孝の領國佐和山に閉籠め置かれけり。板倉勝重仰を承りて忠隣が旅宿に行く。折節忠隣碁を圍み居たるに、側の人、殿を流罪の爲に板倉來れる由云ひけれ共、驚く體も無く勝重に逢ひ、仰を承り更に恨の色も無し。從者大に怒り、讒言により流罪にせられ候事口惜しき事なり。切死せん、と言ひ

ら心掛けられけり。斯かれば下に悋む者なし。奉行の從者と荷を持者と輕重を爭ふを聞きて、其荷物を自ら振りかたげ往來し、我力は彼者より優れり。然れ共一里許負ひたれば勞れたり。持つ事能はじと言ふは尤なり、と決斷せらる。或時武者押に旗さし後れたりけるを尤めけるが、秀政自ら旗を負ひて試み、さては吾乘つたる馬の肝能き故ならん、とて肝弱き馬に乘りたれば旗さし後れざりき。世に名人太郎と言ひけるは、斯く下を仕ふ心を用ひられし故にこそ、と人言ひ合へりけり。小田原陣中に卒せらる。年三十八なりとかや。

○大久保忠隣忠直の事

大久保相模守忠隣は忠貞の人なり。關ヶ原の時台德院殿、木曾路より攻上らせ給ひしに、石田敗北の後御著陣有りしかば、東照宮御對面ましまさず。忠隣近習の士を以て、申し度き事の候、と申す。中々口にも言ひ出されず、と言ふを聞きて、さらば直に申さん、とて座を立ちけるを、さらば先づ申して見ん、とて斯くと申せば、色を變じて內に入らせ給ひしが、稍有りて、相模は歸りたるか、と仰せ有り。猶待ち居て退かん氣色は候はず、と申せば、飽くまで剛直の者なり。よも空しくは歸らじ、とて召されけり。忠隣御前に參りて、先づ何とも言出さで涙を流しければ、夫

も思慮有る人も功名するなり。思慮有る人の功名は士卒を下知し、大きなる功名を遂ぐる物なり。思慮無き人は鎗一本の功名にて、大なる事は無し、と答へられけり。

○井伊家の附人連署して直政を諫めし事

井伊直政壮年鋭気甚しかりしかば、東照宮より附け置かれし［　］諸本脱以下連署して諫書を献げたりし。其中に、人には必ず向ふざすと申す事を思設けたるが然るべく候。臣等が前の主君の事を申すも如何なれ共、信玄は若き時より一つとして心より善事は無き人にて候へ共、常に越後の謙信を以て向ふざすとして、謙信に優るべきと勉め勵まれ候ひき。されば信玄一生の間、手を下したる大事の合戦五度に及び候へども、大なる敗北はせられず候。殿にも本多中務太輔忠勝を以て向ふざすとして、勉めて劣らじと勵み給ひ候へかし。古より進まず退かざる良將と申すは、中書相叶ひて覺えたり、と書きたりけり。

○堀秀政を名人太郎といひし事

堀久太郎秀政後左衛門督といふ。士より下部に至るまでつかふ。上に下の情を盡すを第一に専

常山紀談　巻之十八

○細川幽齋古歌を書きて忠興を諫められし事

細川忠興諸事嚴正に過ぐると父の幽齋に告ぐる者有りければ、忠興の長臣を呼びて、古歌二首書きて與へらる。

あふ坂の關のあらしの寒けれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる

此歌の意を察せよ。

まこも草つのぐみわたる澤邊にはつながぬ駒もはなれざりけり

此歌の意を能く思慮せられよと忠興に言へ、と敎訓せられけり。

關のあらしの歌は、古今集よみ人知らず。まこも草の歌は、詞花集俊惠法師の歌なり。

○本多忠勝功名を論せられし事

或人本多忠勝に、思慮有る人功名を遂け候か、思慮無き人功名を遂け候か、と問ふ。思慮無き人

餘數多鐵炮を持ちたる者七人に、汝一人立向ひて、相手がけの勝負ならば手並の程を知らすべきに、多勢の飛道具に吾一人懸りて犬死すべきに非ずと、大音に詞をかけて引退きたると聞きたり。然るに渡邊めが如く無理を言ふ男には取合はず、捨置くに如かず。必ず此後も聞かぬ體にてあれ、とぞ仰せられける。

太閤より賜ひたる物具に感狀を添へて、浮穴郡久萬山の庄六千石を與へられけり。慶長十八年嘉明溫泉郡勝山に城を築き松山と名附け、松山の北に別に一廓を構へ、五つ矢倉をあけて十成を置かれぬ。元和元年大坂の軍にも、十成、嘉明の嫡男式部少輔明成に從ひて淀川を渡り、城兵を討取りけり。同年十成關東に召され、葵の御紋の時服を下されぬ。寛永四年嘉明奥州會津に移りて十成に一萬石を與へられけり。寛永十一年十成病重く、子供どもを集め、吾若かりしより戰場に出る事度々にて、疵を蒙る事十三ヶ所、就中豫州久米の合戰に鐵炮頭の右に中りて、猶其鉛皮の中にあり。然れども運盡きざれば死せずして、斯く老年に及んで病の爲に死せんと覺ゆるなり。是を以て思ふに、弓箭取身は少しも穢怯たる志有るべからず。形見に是を殘さん、とて刺刀を取りて皮を破り、鉛丸を取り出して前に置き、三月二日八十二歳にて端座して終れりとぞ。

○大久保忠佐に三枚橋城を賜ひし事

關ヶ原の亂治りて後、大久保治右衞門忠佐に二萬石賜ひて三枚橋の城主たりしに、渡邊忠右衞門御近習の人に向ひ、治右衞門を武功の者と思召しけるが、此忠右衞門に逢うては逃げたり、と申しけるを聞召し、治右衞門を召され、先年三河にて一向宗一揆の時、忠右衞門兄弟弓を持ち、其

とて駈け出るを、夜討の大將佃次郎兵衞なり、と名乘つて掃部を突伏せ、敵數多切り拂ひ、貝を吹立てて軍兵を纏ひ、靜々と引取つたり。掃部を始め内匠、兵庫も討たれければ、引退きて久米の鄉如來寺に楯籠る。翌十九日十成又押寄せければ、如來寺にも支へ兼ね道後山に引退く。十成も深手數多負ひて日は暮れぬ。松前に引取りぬ。道後山の安藝の人々近鄉の百姓を相從へ、刈田燒働して松前の城を攻めんとすると聞えければ、九月二十三日、加藤内記道後村へ押寄せて相戰ふ。十成は久米の戰に手負ひて出でざりしかど、重ねて安藝の加勢來らば始終爭か勝つべき。今急に追拂はずば後日の事覺束無し。手疵を痛みて城中に死なんより、敵に向ひ快く討死せん、と城下の町人近鄉の百姓二百人許集め具足を著せ、妻子を質に取りて番族を指させ、十成引具して道後村に駈向へば、味方是に力を得、宍戸、平岡に從ひたる一揆散り〳〵になりければ、終に風早の浦より船に乘り藝州に引退きけり。關ヶ原の後嘉明松前に歸りて戰功を撰ばるゝに、夜討に首取らざりしかば、十成、村上を討取りたるは明なれども、其功を言はず。生捕の者に尋ぬるに、村上が陣へ先達ちて切込んだる人の、白き肩衣の脊に松の字を大きに書きたるが、薙刀にて村上を突伏せしを間近く見たり、と言ひければ、嘉明、十成が功によりて松前を取られず。殊に安藝の物主三人を討取り、大洲の加勢を辭せし事、勇といひ忠といひ優れたり、とて

成聞きて、雙方の勝負を窺いて見合せ居たる黒田、大溝、永田村の百姓小賢しき者四五人呼寄せ、妻子を質に取り金銀を與へ、能く云含め酒肴を持たせ三津浦へ遣し、嘉明近年松前を領し、仕置宜しからず百姓共困めり。河野一族の人々國に入給はん事百姓の安堵なりと悦び祝ひ申すなり。城中に緣の者候て具に承り候は、嘉明關東へ出陣、軍兵を拂つて連れられし故、今殘り留る者共多からず。大方老衰病者にて一人も軍すべき者無し。佃十成も大病なり。鉛藥も乏く落支度の外更に無し。早や逃去りなん、と口々に云はせたれば、安藝の士大將、さも有るべし、とて彌〻怠りけり。彼百姓一人立歸りて其有樣を告け知せければ、さらば今夜風雨の紛れに一夜討すべし、とて嘉明の貯へ置れし白布を、胴肩衣に裁縫ひて配り與へ、十成は背に松の字を墨にて書きて印とし、合詞を定め、首は取るべからず。貝の音を聞かば勝負を止めて引取れ、と約束を定め、慶長五年五月十八日戌の刻に打立ちけり。忍の者歸りて、今夜は村上が陣所に集りて酒盛の半なり。巒山の濱邊に張番の足輕松前の押へに置きたり、と告ぐる。十成、打破りて通らんは安けれ共、途中に滯りて三津浦へ聞えなば、謀、徒に成るべし、とて道を替へ、江戸山を越えて子の刻許に三津浦に押寄せ、所々の民家に火をかけて切つて入りしかば、大に騷ぎて物音も聞き分かず。十成薙刀を提げ眞先に進みけるに、掃部、敵寄せたりとて何程の事か有るべき、

剣にて口中に突入れたれ共少しもひるまず。猶飛込みけるを棒にて胄の上を強く打たれ、海中へ落入りたれ共、水に長じたれば泳ぎ上るを、従者熊谷覺兵衞薙刀を差し出すに取附き、直に敵船に乗入つて、船中の者共を撫切にしたりけり。嘉明船數多乘取られし其一つなり。關ケ原の時、嘉明は伊豫の松前を出て關東に打向はれしに、十成に堅固に守れ、と下知して松前に留守居たり。毛利輝元の兵村上掃部、能島内匠、曾根兵庫、宍戸善右衞門等松前を取らんと支度しけり。能島、村上は河野の一族なる故、招かざるに人々從ひなん。豫州を攻取らん事掌の中に有り、と評議し、豫州の人平岡善兵衞と言へる者を鵜導とし、三千餘を率ゐて豫州に打向ひ、使を以て、疾く城を明渡されよ。遅くば踏潰さん、と松前へ云遣りけり。城代加藤内記佃と相謀り、先づ敵を謀るべし、とて、子細無く城を明け渡すべし。然れども妻子を片附くる間を待たれ候へ、と返答す。左も有りなん、と侮りて三津浦に上り、民家に陣して待居たり。大洲の城に藤堂高虎有りて加勢を差し向けられしかば、松前城中の人々悦び合へり。十成獨同心せず。今敵大軍にて押寄せたりと言へ共、謀を設け一戰して義を守るは弓箭取者の法なり。城を枕にして討死すべし。勝利を得ば生前の面目なり。假令勝ちたりとも、人の救に依りて運を開きたりと言はれん事口惜かるべし、とて禮儀を正しくして辭したりけり。此時國中一揆起り、三津浦に酒肴を贈る由を十

よりは覺えず候。後に承り候へば、眞田が惣軍嘯と押懸り候故、我等が首を取られず候由。彼突伏せたる鎗の相手は、定めて助け遁れたるなるべしと存ずるなり。其後少し人心地附き候に、馬取彌右衞門と申す者、これ程の手にて弱るといふ事やあると云ひて、跡の方へ歸る音徹に耳に入りぬ。見捨てて逃けたるかと思ひしに、又來りて腰の手拭を水に浸し持ち來り、口に絞り入れたりし故彌氣附きたるを、彌右衞門肩に懸けて城中に歸り、翌日も其能故働く事ならず。戰場に出ですして思はざるに存命候、といへば、彼客聞きて驚き、初の鎗を合せ候は、士大將刑部刑部と申す者なり。其間に駈入りたるは刑部が子甚平と言ふ者なり。御物語にて疑も無く候。甚平をば陣屋に連歸りたれども死しぬ。察せられ候通一陣の大將にて候。其日武功の證人には我等立つべきにて候。其證を進せん、とて右の次第を書き、花押を加へて西村に與へ、さて眞田以來の參會珍しき緣なり、とて互に物語して別れけり。西村後に、池田の御家芳烈公光政朝臣に仕へたり。

○佃次郎兵衞伊豫國松前城を守る事

佃次郎兵衞十成は、加藤嘉明の左の先手の士大將なり。からしまの船軍に十成敵船に乘移る時、敵

傷きたれ共、薄手なり。鎗を握りたる左の拳の大指こそばゆくて氣味悪く覺え、殘る指四本にて大指をにぎり込みて堪へたり。全身の危き事は忘れて、大指の先の斯の如きは怪ぢたる故ならんと思ひて、左右を見るに皆然したり。又側に並び折敷きたる者に、玉の中る音甚だ強く響きて、我身に中りたるかと覺えし、と後に人に語りけるとぞ。此時孫之進伊達家の秋部甚平といふ者を討取りけれ共、其姓名を知らず。落城の後孫之進、未だ何れの家にも仕へずして江戸に赴き居たりしが、相知れる者の方へ行きて物語する時客來れり。主人西村が事を語りて、大坂にて事に逢ひたる物師なり、といふ。彼の客は伊達家の士海道林左衛門と言ふ者なるが、誰の陣にか御座せし、と問ふ。西村、眞田左衞門佐が許に有りし、と答ふ。客の曰く、さては五月六日の戰にての事なるべし。具に承り候はばや、と問ふ。西村聞きて、させる事にても候はね共、尋ねに附きて申すべし。伊達家と始の一戰終り、後の軍殊の外激く、伊達家の陣を七八町許も有るらん追立てたる處に、三十人許取つて返し折敷かれたり。某共三人鎗を入れ候ひき。某が鎗の相手の間に押隔りて駈入候人を、初鎗にわたかみの外れを突損じ、二の鎗に草摺の間を突いて跳ね倒し、首を取らんとせしに、歷々の人にてや候ひけん、從者と覺しき者二三十人も取巻き候て、手に〳〵幾刀とも無く切られ候。皆具足の上にて手を負はず候ひしが、鎗にて腰骨を突かれ倒れて絕入り、夫

信尹馬に乘りて打通り、此を見て、其胄は見知りたるぞ。眞田左衞門佐なるべし。口を開いて見よ。向齒二枚缺けて有るべき、と言ひしに、信尹が詞の如し。偖こそ左衞門佐とは知りてけれ。彼胄は原に物語して見せたるなり。弓箭取る身は思ひ出の詞拿て云ひ置き事にこそ、と言合へり。大介は城中に入り、秀賴に從ひて蘆田曲輪の矢倉に籠りて父の事を尋ねけるに、討死せしと聞きて夫より物も言はず。母の形見に賜はりける水晶の珠數を首に懸け、秀賴の自害を待居しかば、速水甲斐守大介に向ひて、組討の武勇逞しき振舞して、痛手負はれしと聞ゆ。和平にて君も城を出させ給ふべし。眞田河内守信吉の方へ人を添へて送るべし、と言へ共些とも動かず。寄手矢倉を取巻きし時、速水戸口に立出でて大介が有樣を語り、武勇の血脈恐しき者なり、と云ひしとなり。終に大介も矢倉の中に死して、父子同じく豐臣家の爲に亡びたり。

○西村孫之進武功の事

大坂夏陣に眞田信仍と伊達家と軍する時、伊達家の騎馬鐵炮を打立てたれば、玉の飛ぶこと霰の降るが如く、信仍が軍兵共折敷きて、鎗を敵の方へ差向け堪へ居たるに、西村孫之進といふ者、討れたる味方の屍二つを重ねて盾として居たるに、玉一つ來て二つの屍を打通し、孫之進が肩に

ども、玉虫對馬、林平之丞は押留めて論決せざりし中に、大坂方靜々と引取りしとも言へり。眞田が陣には手々に扇を擧げて招き、何とて軍し給はぬぞ、と聲々に呼はりけり。猶懸らざりしかば信仍靜に兵を收め、關東武者百萬も有れ、男子は一人も無し、と大音に罵りて引取りければ、東照宮、玉虫に、林道春に吳子が六國の風を說きたる章を讀ましめられ、玉虫を逐出されけり。此玉虫は、甲斐の武田家にて物師なる故軍奉行たりしに、如何なる故ならん後れたりき。明る七日の軍に信仍兵を出せしが、秀賴の出馬を勸めんため子の大介を城に返しけり。大介、今年十六に及ぶまで片時も側を離れ候はず。只今討死の際に逃けたりと人のいはんも口惜しく候。去年母上に別れ奉りし後文の便に、存命へて相見えんは願はしけれ共、合戰の場にて必ず父上と同じ枕に討死せよ。苟にも名こそ惜しけれと誡められし、と言ひければ、信仍、城中へ歸れと言ふも秀賴公の御爲なり。父子ともとても遁るべきや。驅て冥途に逢ふべきを、暫の別れを惜むこそ口惜しけれ。疾城に參れ、とて取附きたる手を引放せば、大介名殘惜けに父を見て、さらば冥途にてこそ、とて引返す。信仍、大介を見送りて落つる涙をおさへ、昨日譽田にて痛手負ひしが、弱る體の見えざるは、よも最後に人に笑はれじ。心安し、と言ひけるとかや。斯くて大坂の軍敗れしかば信仍討死しけるを、首をば越前忠直の士西尾仁左衞門取つたりしに、誰とも知らず。眞田

せんと胄の緒をしめ直し、勇氣殊に嚴しく見えたりけり。水野日向守勝成此を見て、いざ軍せん、とて政宗に勸めらるゝに、同心の色無し。越後少將忠輝此處に陣を進められしが、此も眞田が陣に懸らんと胄を著給ふ。政宗の士大將片倉小十郎忠輝の前に來り、日暮に近く軍危からん、と言へば、早雄の士共、いざ懸りて討捕らん。弱敵を剩すまじ、といふに、片倉、夫は僻事にて候。日本國を敵にして軍する大坂の者共を弱敵と言ふべきや。片倉が組の士三十人の中二十九人は討死したり。是見られよ、とて櫓まで血に染みたる刀の曲りたるを見せてけり。越後の士大將花井主水も、如何すべき、と軍奉行玉虫對馬に問ふ。玉虫、敵は二の身の勝を心掛候。懸りて軍に利候まじ、と言ひてためらひけり。

忠輝、大坂を突くべきやと評定決せず。篠瀨左大夫、足輕をかけあひしらひて食止むべし。軍をさせられよ、と勸む。玉虫、僅なる足輕を以て如何にして敵の大軍を食止むべき、といへば、篠瀨、踏の無き事は申さじ。六尺の大男も、足の裏に踏ぬきすれば行步暇取るものなり。人數少しとてつけられぬ事や有る、といふ。玉虫、地の利知らぬ所にて日も暮れたり。行懸の合戰は危き物なり、と押止む。小野能登守は、判官殿三草山を越えての合戰は、知らぬ國の夜軍ならずや、といふ。皆川老甫、小野能登守、花井主水、篠瀨左大夫は、駈らん、と云へ

なれば、良い馬を撰びて若き士に乗せ、馬上より鐵炮をつるべ立てさせ、敵ひるむ所を馬の首を揃へて忽ち乗破り、駈亂して追崩す軍略なり。未だ其間相去る事遠かりしかば、信仍、いざ疲れたるに、息をつけ冑を脱げ、と下知しければ、皆冑を脱いで休み居たり。敵稍近附きしかば、信仍、さらば冑を著よ、と言ふ程こそあれ、冑の緒をしめ鎗の穂先を揃へて敵に向ふ。政宗の鐵炮箕手なりに成りて懸り來り、雨の降る如く打懸けたり。信仍眞丸に成りて、とても遁れぬ所よ。一足も引くな者共、と下知し、ひた〳〵と跪きて聲々に念佛を唱へ、力を合せて堪へたるに、信仍大音上げ、一寸も引くな奚に死ねや、と下知して鎗を取つて懸れば、士卒一同に立上り喚いて鎗を打入れたれば、政宗の軍兵大に破れ、一支も無く崩れけり。此を世に眞田が天王寺口の軍とて、大軍の騎馬鐵炮に打勝つたる有樣を傳へて稱しけり。信仍士卒を立固め靜々と毛利が陣に來る。大介今年十六歲、組討して取つたる首を鞍の四方手に附け、手負ひたるが、流るゝ血をも拭はず馳來るを毛利見て、天晴父の子なり、と感じけり。信仍毛利が手を取り淚を落し、時刻遲く後藤が討死せし故、謀空しく成りぬるも、豐臣家の運盡きぬる所なり、といへば、毛利、今日大敵に打勝たれし武勇の有樣、古の名將にも優りたり、とぞ云ひける。斯る所に秀賴の黃母衣の使番乘來り、疾く城中に引籠り候へ、と下知せられしに、信仍は猶赤旗押立て、今一軍

し、軍に臨む者誰か生きて歸らんと思ふべき、と答へしに、信仍白河原毛なる馬に六連錢を金もてすりたる鞍置かせ、庭にて乘り廻し原に見せて、城は壞たれたれば、天王寺口に駈出でて馳廻り、下知して思ふ程軍せばやと存すれば、此馬の可愛く候、と語りて、又酌醉ひて別れけり。果して和平敗れしかば、元和元年五月大坂にて軍評定有り。後藤は大和口の先陣にて平野に陣しぬ。五月六日の夜、信仍、毛利豐前守勝永と二人打連れて後藤が陣に行き、明けなば國分の山を踰え、三萬の軍兵を一陣にして關東の旗本に一文字に駈入り、軍神も照覽候へ。兩御所の首を取るか三人の首を實檢に供ふるか。二の中よ、とて最期の盃せり。後藤は六日の夜半に打出で道明寺口にて討死しけり。毛利は藤井寺に陣を進めし處、早後藤が軍破れ、關東の軍兵二三十萬も有らん、洪水の溢れ來るが如し。眞田を待てども未來らず。眞田は兄の伊豆守と同心して裏切するよ、と人々罵りける所に、住吉海道より赤旗押立て馬煙蹈み立てて來るを見れば、金の蠅取の馬印にて眞田なれば、毛利が陣も勇み合へり。信仍、攀田の方に進めば、緒は愈二心よ、と人々怪む所に、信仍堤の上に上り鐵炮を進めて、伊達政宗の先陣片倉小十郎に向ひて討て懸る。信仍眞先に進みて闘ひしが片倉が陣敗北す。逃ぐるを追うて敵數多討取りたり。片倉金の鐘の差物にて麾を取り盛り返す。政宗の旗本の騎馬の鐵炮も進み來る。奥州は聞ゆる馬多き所

るとて肌を脱ぎ小姓に拭はせて、鏃て首を關東の兩御所の前に出すべき、とて打笑ひ居たりとなり。○元禎按ずるに、昌幸德川家に服從し奉りて後、關ケ原の亂に及んで背きたる事二度に及べり。此義と言ふべからざるにや。東照宮寬仁に御座しませし故に再犯の罪を宥めさせ給へり。信仍其寬仁に何を以て報い候や心得られず。豐臣家は眞田數世の君に非ず。若君に不背の義を論ぜば、武田家亡びて後、世を捨てて山中に隱れずば如何にか有るべき。眞田が論ずる處の義道に叶へるとは言ふべからず。世の人眞田を以て賞稱する事甚し。故に愚論を述ぶるに及べり。

大坂冬の陣に出丸に有りて防ぎけるが、大敵の責めし時守固かりけり。和平に及びて、信仍、越前忠直に仕へし原隼人貞胤は、古りし好有りて招きもてなしけり。原はもと武田家の士也酒盃數獻の後、信仍鼓を打ち子の大介に舞はせて興じけるが、信仍云ひけるは、吾必ず討死せん。思ひの外に存命へて再會する事よ。されど遂には軍に及ぶべし。落ぶれて九度山に隱れ居しが、一方の大將となりて候豐臣家の恩譽へん樣無し。彼に見ゆる鹿の角の立物の冑は眞田家に傳へたる物とて、父安房守讓り與へて候。重ねての軍には必ずきんずる物なれば見置きて賜り候へ。又命は惜かりねども大介が思ひ出もなく、空しく戰場の土とならんは不便に候、と語りければ、貞胤も涙を流

かれしと悔めど力及ばず。信仍大坂に至り、只一人大野修理治長が家に行く。信仍其比薙髪して傳心月叟と言ひけり。大野が士信仍とは知らず。何國の修験者ぞ、と問ふ。信仍、大峯より参り候、といへば、折節修理は居合せず、とて番所の側に呼入れ置きぬ。

若き士共刀剣の物語するとて信仍に向ひ、汝が刀見せられよ、と言へば、山伏の犬威に候、とて出すを抽きて見れば、心も詞も及ばれず。さらば脇差を見ん、とて是を見るに、是も同じ事なれば、驚いて中子を見るに、脇差は貞宗刀は正宗なり。人々怪み合へり。其後信仍彼若き士に逢ひて、刀の目利は上りたるや、と戯れしに、皆赤面せしとぞ。

修理歸りて信仍を見て大に悦び、疾くも参られ候よ、と禮儀正しくして書院に招き入れもてなしぬ。秀賴、速水甲斐守時之を使として黄金二百枚賜はり、軍兵の事は總て下知有るべし、となり。既に東西の軍起るに及びて、東照宮、如何にもして信仍を降参させばや、とて、叔父隠岐守信尹を以て此旨仰せられ、信州にて一萬石賜はり候ひなんとなり。信仍同心せざれば、又信州一國賜るべし、と仰せ出されけり。信仍怒つて、義は人の道なり。秀賴に二心有らん事存じも寄らず候。重ねて斯る使をせられなば存ずる旨有り、と罵りて信尹を追返しけり。

或説に、信尹に向つて、天下に天下を添へて賜るとも、秀賴に背きて不義は仕らじ。汗の出づ

り先に、先づ斯く申す伊豆守に切腹を仰せ出され候へかし。御敵の子なれば左有るべきと世の人も存ずべし。必ず父在世の中に伊豆守を誅せられよ、と云ひも終らぬに、康政心得て候。房州御赦免の事は康政が申上げて事能くせん。昔の義朝には大に異る豆州かな、と言ひて其旨を申せしかば、東照宮、台徳院殿も聞召し入れられて、眞田父子許されしといへり。

信之に信濃十二萬石の地を賜り、昌幸、信仍は御赦を蒙り、城を出でて紀州高野の麓九度山に引籠る。信仍常に父と兵法を談じて、天下の時勢を計りけり。昌幸は六十七歳にて九度山に死す。其後大坂の亂起りしに、秀頼、信仍を招かれけり。此比世の中騒がしかりければ、紀州は淺野長晟の領地なれば、橋本山の百姓に、眞田大坂に行く事有らん。押止めよ、と下知せられしかば、用心嚴うしたりけり。信仍橋本山の百姓數百人を九度山に招き、假家數多設けて酒宴してもてなし、上戸下戸を言はず強ひたりし程に、醉伏して前後も知らず。其時百姓の乗り來りし馬に色色の物取附け、百人許打立ちて紀伊川を渉り、橋本山より木のめ路に懸り、大坂にぞ行きたりける。道々にて百姓は皆九度山に行きぬ。殘りし女童共信仍が鎗眉尖刀の鞘を脱し、鐵炮に火繩を挟み、もし押止むる者有らば忽ち討殺すべき體を見て詮方無し。九度山に醉伏したる者共、夜明けて見れば眞田は無し。如何に、と問へば、昨日云々の有樣にて河内路に赴きたり、と言ふ。欺

政を上田の押とし、台徳院殿園を解かせ給ふ。榊原殿せしに、眞田遙に見て、榊原が有樣吾を侮れり。追駈けて食止め一軍せん、と云ひけるに、眞田が許に年老たる法師武者の謀由々しき有りけるが、康政程の者爭で其謀無かるべき。古の兵法に、歸師勿遏といふ事の候、とて止めて追はざりけり。東照宮、榊原は必ず懸り引にすべき者なり、と仰せられしが、後に召して御尋有り。榊原承り、御大將は城に遠き山に懸りて引き給へ、と申して、臣は城下を眞直に殿仕りたり、と申せしかば、東照宮、汝必ず然らんと思ひしに、果して違はざりけり、とぞ仰せられける。石田が軍敗れしかば眞田父子を誅せられん處に、信之、此度父と引分れて參り候は、父を助けん爲に候。假令大國を賜ひ候とも何にか仕らん。あはれ信州を以て二人の命に換へ申し度き旨を申されけり。

信之、井伊直政、榊原康政に就きて、父を助け給はり候へ、と申す。東照宮聞召し、許容有りし、と仰せられければ、台徳院殿に申すに、信之父を助けんと言ふは理なり。されども安房守に遮られて關ヶ原の軍に後れたり。必ず安房守を誅すべし、とて御許されの色無かりしかば、伊豆守是を承り、又兩人に就きて、仰の趣申すべき詞無し。斯く有らんと存じ父を諫めしかども、用ひざれば力に及び候はず。只一つ志す所の候。安房守を誅せられんよ

間二町許も有らんに、眞田父子八十四人の手鼓を打つて高砂の謠をうたふ。榊原、憎き奴かな、といふ儘に眞先に馬を乘出す。其兵二千許後を取切らんとすれば、渡邊半藏も鐵炮を打ち懸けて進みしかば、松澤五右衞門、敵の附入心許なく候。疾く城に入らばや、と諫めて、眞田高砂の謠を終らずして引入りけり。康政、康成押續いて寄せけるを、正信、輕々しう攻めん事然るべからず、と制しければ引返す。戸田、辻等の七人を上田の七本鎗と世に申すなり。戸田は銀の髑髏の指物、辻は白き四半に辻といふ字を墨にて書きたり。信仍箭文を射させ、二人の武勇を稱しけり。此中山は極めたる馭法の上手なりとかや。

後に依田を太刀附けし二二の論あり。辻は、依田朱塗の頬當せし、といふ御子神は、依田朱塗の冑著て頬當は無し、といふ。牧野右馬允從者を馬工郎にして上田に遣し、樣々にして山本に會ひ、其時の事を問ふ。山本が曰く、此論有るべき事なり。誰人にもせよ頬當を掛けずと言ふ人初太刀なり。依田は頬當掛けざりき。急しき場の鎗下なれば、血に染みたるを朱塗の頬當と見たるなるべし、と云ひしを聞きて歸り、牧野に語りしかば、御子神一の太刀にきはまりけり。

斯くて力攻にせられば人死傷せん。早く美濃に赴かせ給ふに如じ、と評定有り。森右近大夫忠

鎗を打折り、痛手負ひながら依田が屍を肩に懸けて引退く。寄手追詰むれば城兵切つて懸るを、中山鎗を合せ、太田弓にて指詰め引詰め射たりしかば、門に追込みたり。

太田後善大夫といふ。或時士一人太田が許に来りて、吾は眞田家の浪人にて候。上田の軍の時相手に成りたる者なり。其時射られし矢を携へ来れり、と云ひしかば、太田、斯る事は必ず側に聞く人の慥なる有りて證にすべし、とて呼入れず。近き邊に笹瀬左大夫とて武功の有りし人を呼寄せて、彼眞田が士に對面す。其人申しけるは、上田にて出合ひたりと。善大夫怪みて、一番に出たるは、髭の多く有りし大男なりき、と言へば、彼の士、能く見届けられし。それは眞田荒右衞門と申す者なり、と答ふ。其次の男は太りたる男、といふ。夫は何の佐仲と申す者なり。さて其次なり、といふ。否々夫は云々の男なりき、と言へば、夫は無極と申す者なり。偖て分明に見定められし、と言ふ。偖て其次我なり、と言へば、太田、如何にも然なりき、と言へば、其時此の矢にて射られき、とて矢を取出す。彼の者は細野權之介といふ者なり。其後善大夫申して、細野を尾張の組附にしたりとかや。

されども鐵炮を打出す事霰の飛ぶが如く、寄手の先陣地に伴と跪きてけり。本多正信下知して城をば責めず。昌幸と信仍は中の手に出づるを、牧野右馬允康成、同新次郎忠成馳せ向ふ。其

衛只一人隙際に進みける處に、打懸くる鐵炮に朱に十二引の差物打裂れ、其身も犇と折敷き伏して味方の續くを待つ。小栗治右衛門大音あげ、淺見功名せうとて深入し不覺なせそ、と呼はるを聞き、淺見立上り、汝に先をさせんや、と言うて門に附く處に、門を開きて討つて出で淺見、小栗、得たりと鎗を合するに、左右の出屏より打出す鐵炮雨の降るが如し。淺見が從者虎若と言ふ童剛の者にて、刀を抽き鎗の穗先を潛入りて敵の足を薙拂ふ。淺見も痛手を負ひ倒れしを、虎若足を取つて引提げ持歸りけるに、淺見、小栗をも助けよ、と云ふ。虎若聞きて、主人の先途の爲にこそ來りたれ。他人を何にかせん、と云うて搔負うて引退く。淺見、差物を叩き落されたりと覺ゆ。取りて來らずば生甲斐無し、といふ。虎若、逃ぐるとて指物を落さば恥なり。鎗を合せて落したるは恥に非ず、と言ひて念なく歸りけり。城兵山本清右衛門、依田兵部堤の上に上るを見て、寄手三十騎許馬を並べて喚いて駈寄せ、犇々と馬より下りて進み行く。齋藤左大夫、山本、依田、前につと出で名乘りけるを見ると均しく、御子神典膳、辻太郎介渡し合ひ入亂れて鬪ふ。御子神は類無き早業にて、鎗を翳し堤の中にひらりと飛入る。朝倉藤十郎、中山助六、戸田半平、鎭田市左衛門、太田甚四郎、齋藤久左衛門競ひ懸りて鎗を合す。依田朱塗の物具にて戰ひけるが、深手負ひて倒れしを、御子神、辻、依田を一刀づつ切つたりけり。山本も

寄らず、とて本丸の門を固めさせ自ら物具取出し、女房共皆刀を側に置きたり。厩に葦毛の馬有るべし。厩の土間に繋け、とぞ下知せられける。昌幸聞きて、吾過なり。人々能く聞き候へ。日本一と世に云へる本多中務が女なりけるよ。弓取の妻は斯くこそ有るべけれ。此婦人有らんには眞田が家危からじ、と言ひけるとぞ。昌幸夫より須河に至り、高間越に懸りて上田に返りけり。台徳院殿木曾より登らせ給ふ時、御使を以て、禍を招かるゝにてこそあれ。降参せよ、と仰せ有りしに、昌幸聞きて、秀頼の爲に城を守り候。攻められば一矢仕らん、と答へしかば、又御使にて、石田、小西等己が威權を恣にせんが爲に斯る企に及べり。豊臣家の恩を蒙りし人々皆背きたるを以て知るべし。猶降参無くば信之に腹切らせ、其後城を攻破るべし、と仰せ送らせられしに、昌幸聞きて、太閤恩深き人々の背き候は、此人々心の同じからざる故なり。既に子にて候信之、父と相違ひたるにて知召さるべし。信之に腹切らせられんとや。親の子を愛するは誰も同じ事に候へども、信之父と共に城に有らば、同じ枕に討死すべし。信之を助くべきに非ず、と答へ申せしかば　さらば攻めよ、とて陣を寄せらる。其日は百姓の家に込入りたりしに、榊原康政、眞田今夜必ず夜討すべし、とて物見を出し、篝火を透間無く焚かせたり。果して信仍夜討せんと支度したりけれども、康政の設によりて夜討はせざりけり。斯くて明れば九月六日押寄せ給ふ。滝見藤兵

士の本意なるべけれ。何條穢く命生きて、家の亡びざる様にせんと云ふ事や候、と爭ひければ、信之怒つて、汝が詞不禮なり、とて既に切つて捨つべく見えしかば、信仍、否々只今爰にて首を刎ねられ候事は許されよ。信仍は豊臣家の爲に身を失ひ申さん志なり、といへば、昌幸聞きて、兄弟の爭、各其理有り。太閤世を過させられし後此事の起れるも、必ず秀賴公の爲にする忠に非ずと信之は思へるならん。信仍が言ふ處吾思ふ所なれば、我と共に引返すべし。信之は是より心任にせよ、とて別れしといへり。又一說、昌幸云ひけるは、會津より宇都宮に至りて七日路なれ共、日の岡の徑より三日の行程なり。景勝と謀を合せ前後より攻めたらんに、伊豆守俄に裏切するならば、德川殿を容易く討取るべし、と言ひけれ共、信之、内府は勇略百萬の人にも超えたり。味方利有らん事存じも寄ず、とて遂に兵を引分けて參りければ、東照宮、信之を召して、安房守が片手を折りつる心地するよ。軍に勝ちたらば必ず信州を賜はるべき後の證ぞ、とて御刀の縁の端を斷ちて賜はりけるといへり。

又眞田兄弟の爭の處は、佐野の天妙といふ。又犬伏といふ所なりとも言へり。

昌幸は、引返して沼田の城にて信之が妻に對面せん、と云ひけるに、信之の北の方聞きも敢ず、既に父子仇となりて引分れ給ひしかば、父にて御座し候とも、城に入奉りてま見え申さん事思ひも

俣は戰はずして城を捨て逃落ちければ、眞田信之後伊豆守城に入る事を得たり。昌幸は去る天正十三年以來秀吉の恩顧を得しかば、大谷吉隆に申して次男信仍を秀吉の許に人質に出しけり。其後石田兵を起すの時、眞田父子三人は奥州に打向ふ途中に、石田が使來りて、秀頼公の爲に族を擧げ候。同心せられなば信州に故主君の地甲斐を添へて參らせん。僞無き證に、とて起請文を送りけり。昌幸素より徳川家に二心有れば、さらば引返すべし、といふ。信之、是は然るべからず。内府智勇勝れたる人なり。爭か容易く討滅さるべき。思ひも寄ざる事なり、と諫むれども、昌幸聞入れず。

又一説に、本多と親しみ厚く候へば、石田に與し難き由を信之申せしかば、弟の信仍女房の好に引かれ、父に弓引く樣や候、と申す。又信之、西國に與せられなんに必ず軍敗れ候べし。其時父と弟との危難に逼らんを助けて、家の亡びざる樣にせん、と言ひければ、信仍、西國の軍敗れなば、父も又信仍も同じく戰場の土とならんに、何として助けさせ給ふべき。徳川家先年兵を出し上田を攻めし時、景勝加勢候ひし其報禮などか無かるべき。其比秀吉公和平を取行ひ給ひ、武名を世に擧げしかば、豊臣家の恩淺しと言ふべからず。畔疾く石田に同心有りて然るべし。凡家の亡ぶべき時、人の死すべき時至らば、潔く身を失ひ候こそ勇

計られしかば、東照宮使を以て、云々なりと仰せ送られしかば、果して昌幸聞受けたりと云ふ。

斯て北條征伐の事起れり。天正十六年八月北條氏政の使として北條氏規聚樂に參り、氏政上京すべしと雖も、上野の沼田は、天正十年德川殿と和平の時相渡さるべきを、眞田恣なる事を申して北條家志を失ひ候。早く安房守に、彼地を北條に渡すべき旨を示されなば、氏政上京せん、とぞ申しける。秀吉聞き給ひ、往年の事審に知らざる事なり。北條家に土地の事能知る者を上京せしめよ、とて氏規に暇給はりぬ。翌年坂部岡越中融成入道江雪大坂に赴きければ、秀吉事の由を聞き給ひ、眞田が上州の內の所領三分二竝に沼田の城を北條に渡し、其換地には德川家より眞田に與へらるべし。同所三分一名胡桃城とも、眞田已前の如く領すべき由江雪に命ぜられけり。斯くて眞田が方より沼田を武州鉢形の北條氏邦に渡し、氏邦其從士猪俣能登範直を沼田の城代とせしに、田舍人にて得失の辨無く、名胡桃の城を眞田が領せし事を怒り謀つて城を奪ひ取りたり。昌幸太閤に訟へしかば、太閤、北條は沼田を得ば上京すべきと約しながら、遲緩を怒られし上に此事を聞きて、氏政を征伐せんと志決して、天正十八年秀吉師を出して小田原に打向はる。東山道の先陣前田利家碓氷嶺に至り、上杉景勝は坂本に至れば、名胡桃を奪ひ取りし猪

切り討取るべし、と言へ共同心せず。眞田引取りたり。味方は八重原に陣し、眞田も城を出でて陣し、足輕軍有り。芝土居を築き柵を結ひ、苅田　勵に日を送る。斯くて濱松より井伊直政、大須賀康高を始として五千餘援兵たり。されども秀吉の下知により、景勝大軍にて眞田の後巻するとの聞え有り。諸將相謀りて陣拂す。昌幸が次男左衞門佐信仍ず何れが是なるを知らず附け纂はんとす。大返に返して軍すべき物色を昌幸見て、信仍を制して追はざりけり。諸將歸陣の後昌幸大息吐いて、徳川殿は誠の英雄なり。加勢を以て城を攻むる色を顯したる故、昌幸其謀に陷り、防ぐにのみ心有りて、夜討朝駈の志夢にも無かりしなり。斯く謀りて不意に引取りたる事、吾計の及ぶべきに非ず、と云ひけり。其後東照宮太閤と和平なりしかば、景勝の加勢の損みも無く、信州甲州の人々を眞田損みて、秀吉に申して徳川家に歸り屬すべき旨を申せば、御許容あり。天正十五年正月七日、昌幸、信州深志の小笠原右近大夫貞慶と共に駿府に參りて、東照宮に謁し奉る。

東照宮も昌幸が武勇侮り難しと思召して、嫡子信之を本多忠勝が婿にせん、と仰せられしに、昌幸、夫は聞き謬ならん。本多が女を信之が妻にせん事更に望みに候はず、と申す。東照宮此事を太閤に御物語有りしに、忠勝が女を養うて、今は我女なりといはせられよ、と

て慕ひ來れば、五六町許の間に討たる〻者數多なり。大久保は鳥居が敗軍を見て忠世唯一騎引返し、弟平介忠孝後彦左衛門黒き物具に銀の揚羽の蝶の指物にて、乘附けて馬より飛下り、鎗を提げて扣へたる處に、敵押懸る中にも眞先なる兵を突伏せたり。忠世が返すを見て、松平七郎右衛門を始め引返し來れり。平介は小高き處に蹈堪へたれば眞田も進み得ず。其間僅十間許に過ぎざれども、忠世少しもひるまず。日置五右衛門忠世が陣の前を通らんとす。平介、其こそ敵よ。三つ巻を附けざるぞ、と云ひけるに、日置如何誤りけん、味方ぞと心得て、日置五右衛門なり、と名乘りて通る處を、足立善一郎政定鎗押取り鞍の前輪を突く。五右衛門が從者鎗を取直し、善一郎を突く。平介が前を馳通らんとすれば、平介又突きけれども、從者鎗を揃へて平介に向ふ。其間に五右衛門乘拔けし處を、氣多甚六郎遁さじと追ひさまに股の端を突く。其時五右衛門振顧り、川中島の加勢と思ひて危ふかりし、と言ひて駈拔けたり。忠世、平岩が陣に往きて、敵は疎に追懸來れり。我跡を詰められなば切つて懸り候べし、と言へ共、親吉、敵小勢なれども必定近所に伏兵有るべし、とて進まず。其間に昌平城に引入りけり。此日酒井與九郎殿して敵の首を取りければ、其日の一の功名なり。翌日忠世、康忠、眞田が枝城丸子を攻めんと千曲川を渡るを、眞田見て海野町へ押出し、八重原を一騎打に相働く。忠世、鳥居、平岩に、後を詰めば敵の中を取

賞甚薄しと思ひて辭し申しけるは、沼田は賜り候地に非ず。吾鋒にて取り得たれば、故無くて人に與へん事叶ひ候まじ、と申しけり。豐臣家に屬すべき由を云ひ送りし其折柄、秀吉、東照宮の上京無き事を怒りて此を悅び、密に上杉景勝に、眞田に力を合せよ、と下知せられしかば、千六百の兵を眞田が許に援とす。東照宮、眞田は奸謀有る者なり、と元より憎ませられける上、無禮の答を怒らせ給ひ、大久保七郎右衞門忠世、鳥居彦右衞門元忠、平岩七之介親吉、柴田七九郎康忠を將として、七千の兵を以て上田を攻めさせらる。昌幸、城より一里許隔てたる加賀川を敵渡る時、半途を打つべしと思ひけるに、甲州の浪人板垣修理、假令敵の半途を討つて利有りとも、三遠の物師共なれば、敵の後陣二の見の勝有らん、と云ひければ、昌幸、尤なり、とて城に近き砥石の城に嫡子信之、矢津の砦に矢津但馬を籠め置き、寄手必ず染屋平より寄るべし。弱弱と引受けて不意に突いて出でん、との謀なり。又城外小野山の蔭に鄕民を伏置きけり。寄手進みて町口に押入り、惣鄕の内横小路に柵を喰ひ違ひに結ひて簾を懸け、其蔭に伏兵を置き、鐵炮を打懸くる。昌幸思ふ處に引受け、城門三方より一同に打つて出でたれば、寄手支へ兼ねて崩れしかば討たるゝ者多し。砥石、矢津よりも切つて懸り、鄕民も揉合ひたれば、大久保十四五騎にて踏止り戰ひて加賀川まで引取つたり。鳥居は高き道を退きけるを、砥石の兵喰留めんと

常山紀談　巻之十七

○眞田昌幸父子三人始末の事

眞田安房守昌幸は、海野小太郎幸氏二十一代の末なり。父海野彈正幸隆信州眞田に居て、眞田氏と稱す。武田家の臣となる。嫡子源太左衞門信綱は長篠にて討死す。二男武藤喜兵衞昌幸と云ふ。長篠の後高坂彈正五ヶ條の諫を申しける。其一條にて、昌幸に兄の家を嗣がせられけり。父の幸隆後一德齋と號す。昌幸信玄の近習にて、十八の歳川中島にて鎗を合せたり。天正十年勝賴諏訪に陣し、四方より敵來りし時、昌幸、吾妻の城に籠られよ、と言ひけれども、長坂長閑其謀を用ひず。勝賴郡内に赴きて死して國亡びぬ。北條氏政兵を出して甲府を攻取らんとする時、昌幸德川家に屬し、依田信蕃と碓氷嶺に陣して北條の粮道を塞ぐ。東照宮北條と和平し給ひ、上野の沼田を以て、甲斐の都留、信州佐久二郡に換へらるべし、と約あり。是より前昌幸沼田の城を攻取りて要害の地とせり。眞田に上田を與へ、沼田をば氏政に渡すべき由仰せ出さる。上田は元より信玄以來眞田が居所なり。昌幸、我德川家に功有りと雖も、僅に上田と沼田を賜はりぬ。

べ、武者押陣取をして戯れ悦びしとぞ。

○世間太兵衛伏兵を知る事

越後の一揆三條の城に寄する時、道に伏兵したり。溝口伯耆守宣勝兵を出して三條に赴くに、世間太兵衛先陣せしが、小川の脇に新しき糞の有るを見て、此邊に兵を伏置きたるならん、とて捜しければ、伏兵駭きて逃けけるを、追駈けて百餘人討取りたり。

禮なり、とてはたと睨まれしかば、利休が形退きて坐す。太閤常の居間に出で、丹後守を呼んで、化物數奇屋に有り。叱り來れ、と言はれけり。直寄今年十五歳なり。卽ち行く時、廊下の窓戸皆閉ぢて、偖數奇屋に入りて見れども何も無し。歸りて斯くといへば羽織を與へらる。利休は茶の湯を好みて世に名あり。天正十八年、秀吉南禪寺より黒谷へ出でらるゝ山際の道にて、女房の下部に破籠持せ、山々の花を眺めて靜に來りしが、秀吉の先拂の者を見て、花の木蔭に立隱れたるが、言ふ許無く美麗なりしを、問はるゝに、利休が女にて鵙屋に嫁し、今は獨住なる由聞きて、宮仕へさせよ、と强ひて呼び出されしに、夫に別れし後悲しみの涙乾かず、とて從はず。利休に强ひられしに、女を商したりとて人に言はれんが口惜し、とて出さず。秀吉利休を憎まれしに、利休木像を作り大德寺の山門に置きたり。太閤、山門は天子を始として通らせ給ふ、頭上に然する事無禮なり。且茶の器の價に就て私有りと聞く、とて天正十九年二月、利休を誅せられけり。利休小座敷に茶の湯をしかけ、弟子の宗巖と常の如く茶の湯終りて、夫々に形見を分ち遣りて後自害しけるとぞ。

直寄幼少の時、紙手兒、土手兒、雛樣の物を玩びて、人の贈るにも他の物は悦ばず。されば人毎に贈りける程に、大なる籠に入れて有りしを、人々怪み思ひけるに、常に人無き所に彼の手兒を並

と云ふ者有り。直寄未だ下倉を救はず。敵此城に攻め来らずば、敵の旗先をだに見ず口惜かるべし、と言ふより早く打出でて下倉に向へば、小倉も門を開きて切つて出づ。直寄後より一文字に突懸り、一揆の長田丸右京を打取りたり。此告を坂戸にて書かする時、勝利を得候、と書かせしかば、如何あらん、といふに直寄嘲笑ひ、打負けば戦場の土とならんに、と云ひて出でられけり。一揆柿崎、齋藤已下五千許猶山に據り、前に平田を當てて陣しければ、直寄、昔太閤の前にて、允長老の孫子を讀みしを聞きたるに、兵以正合以奇勝といへり。吾今日奇を以て軍すべし、とて、山中數馬、速水織部に馬印を渡し、直寄は六百許引分けて林の中に待ち居たり。一揆馬印を見て進み來る時、林の中より鬨と駈出で、直寄眞先に進みて思ひも寄ぬ不意を討つ。一揆二百餘討取つて切崩したり。東照宮御感狀を賜りぬ。此年二十四歳とかや、後に十萬石を賜りけり。

直寄は秀政の長臣堀監物貞政の次男なり。十三歳にて陪臣なれ共太閤の小姓に召出され、左右を離れざる寵臣なり。初三十郎といひけるが後丹後守と稱す。太閤或時茶室に入りて火を點し炭を入るゝ時、千利休が幽靈現れ來て黒き頭巾を冠り、爐の傍に座し居たるが、眼の中より光生じ息に火を吐く。左右に有りける侍女恐れ合へるに、太閤炭を入れ終りて、無

○石田が子の僧助命の事

關ヶ原の亂收りて後、東照宮本多正信を召して、石田が子、妙心寺の内永壽院が弟子にて僧となりしを、寺中一同して、重罪の人の子なれ共、幼き時より出家したる者なれば赦され候へ、といふは如何に、と仰せ有りければ、正信、疾くにも御赦されの有るべき事に候。治部は德川の家に大功をなしたる者なり。治部由無き軍を起し、西國中國の大名を語ひ候ひしに、一戰に打負けたる故にこそ、日本六十餘州皆德川家に歸服致し候へ。治部が存立ちしより斯く日本は從ひぬれば、德川家に大功を成したるには候はずや、と申しければ、東照宮、汝が理屈もさる事なり、と仰せられて、かの僧御赦されを蒙りければ、岡部美濃守宣勝懇にして、和泉の岸和田にて終りけるとかや。

○越後國一揆堀直寄武功の事附千利休が事

關ヶ原の亂の時越後に一揆起り、堀左衞門督秀治が臣小倉主膳が下倉の城を攻むる。堀監物が子丹後守直寄、坂戶の城にて斯と聞き、後卷に駈向ふを、敵引違へて坂戶を攻めば如何あらん、

く心掛たり、と云ひて黄金百兩與へけり。景勝會津に兵を起す時、永樂錢一萬貫文を獻じ、朋輩の親しみ深き人々には數多黄金を分ち送りけり。軍の仕度に人々は犇めきけれ共、岡野は、猿樂に舞踏れ、とて騒がず。人に語りて、日比は武備に怠らず。猿樂ども世の豊なる時は諸方に招かれて暇なし。今人々あわて騒いで、彼者共暇あれば玩に招きたるよ。軍に臨む者生きて歸らんと思はず。されば今生の樂と思ひて慰み候、とぞ云ひける。又政宗福島の城を攻め取らんとて、木幡四郎左衛門、百騎許にて城近く働きけり。岡野井樓より見、大物見なれ共、三陣に分りたるは軍を心懸けたり。兵を出すべからず、と言ひけるに、鈴木彦九郎、寄せ來りし中に政宗有るべし。喰止めて討取らん、といへば、尤なりとて兵を出し、先陣二十騎許次の陣に一にならんと色めく所を、鐵炮を打かけ、煙の下より左内一文字に切つて掛り、遂に木幡を討取りければ、景勝度々の功を賞し、謙信武功の輩に姓名を與へられし例により、左内を越後と更められけり。政宗三萬石にて招かれしか共、舊主の好忘れ難しとて、蒲生秀行に仕へ猪苗代の城に有り。下野守忠鄉の時死しけるが、金子三千兩正宗の刀を遺物に獻じ、忠鄉の弟中務にも金子三千兩、景光の刀貞宗の小脇指を形見に進らせけり。年頃人に貸しける金銀の手形證書の大なる箱に有りしを、皆焚捨てたりしとぞ。

て、白石の城は鉾にて攻取られ候。幕も亦吾士卒の骨折りて取り得候へば、重て幕をも鉾にて取返されよ、と答へられし後、小城一つ攻落されしは恥に非ず。昔より名將も城を敵に攻落されし事無きに非ず。武具を取られし事は弓箭取る身の大なる恥なれば、政宗我を謀りて斯く云ひしなり、と笑はれけり。台徳院殿上杉の館に御出有りし時、彼の九曜の幕法華經の幕を厩に打たれしとぞ。其後政宗、岡野に逢ひたりし時、松川の軍の有樣語り出して、汝を斬りつるは忘れじ物を、といはれしかば、岡野、大將の刀の跡と存候て、金糸にて縫合せ、家の寶とせんと存ずる由言ひて、羽織を政宗に見せければ、政宗悦ばる。其時岡野、胄の鍬を吹返しかけてなぐり切にしたりき、と申しければ、政宗色を變じ、物語を止められしとかや。

岡野は元蒲生家の士なりしが、上杉家に仕へけり。富有なる人にて、儉を好み奢を憎む。一月の間二三度も金銀を山の如く積みて、其中に臥して慰としけるを、聞く人誹合へり。或時岡野例の如く金銀を竝べて見居たりしに、近きあたりの士爭をし出し、方人の者共數多駈寄りて騒ぎしに、岡野聞くと否や正宗の刀を提げて走り行き、一日一夜其家に有りて、事能取扱ひて歸りけり。岡野が馬取の下部、大板金一枚持ちたりと聞き及び呼出して、汝が志こそ由々しけれ。人は貴賤に依らず、貧くしては義理の爲すべき事も心許にて叶ひ難し。能

従者に見すれば、母衣に三刀、鞍にも刀の痕あり。永井、今日は助けられし、とて一禮をぞ述べたりける。小田切も敵に取圍れ、あはや討たれぬと見えしを、青木又駈寄せて敵を追拂ふ。岡野は旗押立て靜に福島の城に入り、甘粕、栗生も引入りければ、政宗鑓押寄せたるに、殿の兵共櫓を踰えて城に入りたりしに、青木は櫓を越え棄ねて只一騎控へ居たる所に、政宗馬を駈寄せたり。青木十文字の鎗にて政宗の冑の立物三日月を突折りしかば、政宗馬に諸鐙を合せて駈通られぬ。青木後に政宗と聞きて、今一鎗にて突殺すべきに、口惜き事よ、とぞ言ひける。斯る處に築川の城より須田大炊助長義討て出で、政宗の兵阿武隈川を前に陣しけるが、此川奥州第一の大河なれども、須田は能く地の利を知り、兵を二陣に分ち、須田は川上に打上りけるを見て、政宗の兵二つに分れて防がんと色めく所を、一文字に渡して斬り懸る。敵敗北しければ物具を始め多く分捕にせし中にも、伊達家に傳へし幕を、須田宇平次、中村仙右衛門奪取りてけり。須田今年二十三、之より武名殊に世に高く聞えけり。政宗は松川にて、後に敵出でたりと聞き引退く處を、本庄越前又駈出でて川を渡し追駈けければ、政宗敗北し、信夫山に掛りて引退く時、景勝後巻に打出でて緋地に日の丸の旗山の上に見えしかば、政宗取る物も取敢ず仙臺に引返されけり。後に政宗使を以て、攻取りたる白石の城と幕と取換へん、と云ひ送られしかば、景勝聞き

り。名護屋に親族有りて立寄りける隙に、倶ひける浪人、己が刀を永井が指替の刀に取替へ駈落しぬ。永井詮方なく京に著きて後、死罪の者有りけるに試みんとて刀を附けさするに、錆びて金色も見えわかず。研師刀を附けて、此刀の如き刀の刃食て心に覚えず、といふ。斬罪の場にてふじ身の者有りて切れざりしに、かの永井が錆刀にて切りたりしに、物に障る事なきに似たり。能研ぎて見れば優れたる物にて、銘は正宗と切りたり。本阿彌に見すれば、正宗の中にも殊に最上の物なり、といへり。是も將軍家に奉りて、永井正宗と號せられしとなり。

始として、大剛の者共馬を返しては追散し、取つて返しては突拂ひ後殿しけり。青木は小丈なる馬に乗り、柄の短き鎗なりし故、殊に乗り退り幾度となく支へ戰ひけり。甘粕備後は上杉家にて勝れし勇將なるが、白石の城を守りしに、會津に行きたりし跡にて、登坂逆心して白石を敵に取られし事を口惜く思ひしかば、今日取分きて引退り、取つて返して追退け、勇氣を顯しけり。福島の城下の川を渡る時、政宗の兵彌追詰めて、我先にと川に打入れたるが、永井を後より三刀切る。永井度々の軍に戰ひ疲れ、大軍打渡す川音に紛れ此を知らず。青木は鳥毛の棒の出しにて黒き母衣懸けたるが、乘寄せて敵を追拂ひ、川岸に打上りて永井に斯くといへば、驚きて

上杉勢は福島を指して引退く。福島に至て行程ゐなか道十八里なりといへり　政宗、何處までも剩すな、と馬煙を立てて追ひかけしかば、物具を道に捨つる事數を知らず。息切れて行倒れたる者も有り。持鎗の長き柄は持堪へ難くて、多くは捨てけるとぞ。青木新兵衛、永井善左衛門を永井善左衛門は世々徳川家に仕へけり。小田原の城を圍まれし後、如何なる故にか有りけん、蒲生氏郷に仕へ、其後上杉家に奉公しけり。優れたる剛の者にて、奥州福島口にても物見に只一騎出でたりしに、伊達政宗の伏兵六人起りて取包みしを、四人討取つたり。長篠にても太刀打して首を取りたるが、右の指に手負ひ刀を取落せしを、取りたる敵を追詰めて、又討取りたる程の物師なり。其後其疵を問へば、馬に喰れたり、と答へしとぞ。斯の如く功に誇らぬ人なり。後御旗本に歸り仕へて御旗を司りき。善左衛門浪人にて上州深谷に閑居して有りける時、人の臭へし瀬戸の茶入を祕藏せしに、下女取落して打破りぬ。下女驚きて、我錢壹貫五倍子を入れたる壺を取出し、是にても代に奉らん、といふ。用にも立たぬ物なれども、是を請取り置きぬ。後に小堀遠江守見て手を打ちて、是は唐物の肩衝なり、と稱美し、後に公に奉りしとなん。板倉勝重愚なりしかば、將軍家に御斷を申さん。御上京の折京へ來られよ、といひ越されしかば、深谷を出でて平安に赴く時、浪人を伴ひけ

て羽織を腰に挟みけり。北川、今は思ひ置く事無し、とて追ひ来る敵の中に駈入りて切死にしたりけり。是を始として帰し合せ、火を散して戦ひけるが、討るゝ者多し。政宗勇み進んで追駈けられしに、岡野猩々緋の羽織著て鹿毛なる馬に乗り、支へ戦ひけるを、政宗、馬を駈寄せ二刀切る。岡野振顧りて、政宗の胄の眞向より鞍の前輪をかけて切附け、反す太刀に胄の錣を半かけて斫り拂ふ。政宗刀を打折りてければ、岡野すかさず右の膝口に切附けたり。政宗の馬飛退きてければ、岡野、政宗の物具以の外見苦しかりし故、大將とは思ひも寄らず。續いて追詰めざりしが、後に政宗なりと聞きて、今一太刀にて討取るべきに、とて大に悔みけるとなり。岡野は川へ乗入れたるに、政宗、又十騎許にて追駈け来り、穢し返せ、と呼はりければ、岡野振顧りて、眼の明きたる剛の者は多勢の中へ返さぬ者ぞ、といひて岸に馬を乗上げたり。宇佐美兵左衛門十六歳、松川の向ひの岸にて危く見えしかば、父の民部馬を川に打入れたり。栗生、如何に先には川を渉る者を止められしが、何事に渡され候や。名將の宇佐美駿河守の子息には如何に、と問ふ。民部、謀も心より出候。あれ見られよ。一子の兵左衛門向の岸にて早討たれぬべく見ゆれば、心の亂れたるぞや、と言ひも終らず川を渉り、打連れて引返す。栗生は陣を整へて待ちかけたれば、片倉が軍兵を追崩し川に追ひたす。されども大軍見る内に重り攻寄せしかば、

原常陸も馳來り、先物見を出せ、とて、猪俣主膳、本庄段右衛門、井筒小隼人、乘り行きて馳歸る。猪俣は、政宗川を渉らじ、といふ。二人は、政宗川を渡さん事半時許もや有らん、といふ。子細を問ふに、猪俣、敵馬の沓を取らず障泥を外さず。羽壺を常の如く附けたり、といふ。井筒、本庄が曰く、我等見し所も同じく候。されども政宗未だ來らず。其間五六町許もや候らん。政宗川際に押寄せて其支度せんに、何の時刻を移すべき。且小荷駄を遠く引退けたれば、戰ひを持ちたる敵なり。政宗二萬の軍兵を卒ゐて寄來り、空しく引返すやうや候、といふ。さらば川端二町許置いて陣を整へて敵を待たん、といふ所に、岡野は切支丹を信ずる人なるが、南蠻人の贈りける角菜螺といふ貝が著、眞先駈けて川を打渉す。栗生、甘粕、川を渡るべからず、と下知すれども、布施次郎左衛門、北川圖書、小田切所左衛門等二十騎許、眞蔓に川に乘入り打渡す。宇佐美民部鎗を横たへ、殘る兵をば押止めてけり。斯れば政宗押來り、先陣片倉小十郎透間も無く切つて懸る。岡野四百許眞丸になりて鎗を打入れ、面も振らず喚き叫んで戰ひけれども、大軍に取圍まれ、左内僅に打ちなされ、切りぬけて引退く。北川馬の首を立直し小田切に向ひて、唯今討死せん。會津に殘し候十四歳なる吾子を頼申すよ。是を形見に送りて賜はり候へ、とて猛々緋の羽織を脱いで小田切に渡しければ、小田切、若萬死に一生を得候ならば慥に送り候べし、と

馬共殷に染みたるが、上泉が組の控へたる前を乗通るとて、各大將主水を捨殺し、男子の交はなるべからず。大高七左衛門のみ士なり、と罵りて打過ぐるに、答ふる人無かりけり。

○伊達上杉陸奥國松川合戰の事附永井善左衛門岡野左内が事

慶長六年四月、伊達政宗奥州景勝の地を斬取らんと、百姓を間者にして意を伺はれたり。松川は阿武隈川の枝川にて、伊達領の境なれば、本條出羽守、甘粕備後、岩井備中、杉原常陸、栗生美濃、岡野左内、五千許にて守りけり。政宗は國見峠を踰え、信夫郡より瀬の上の川を渉り、五千の兵にて梁川の城を押へ、松川を指して押寄する。物聞共斯くと告ぐれば、本條出羽、城を出で、川を渡してや戰ふ、川を前にして半途をや打たん、といふ處に、松木内匠、敵不意の利を謀りて押寄せ候に、味方川を渡りて待ちかけなば、政宗思ひしに違ひて必ず引退くべきなり。川を渉らんこそ能かりなめ、といふに、栗生同心せず。此川中窪にて極めて渡す事容易からず。政宗渉らん處を半途を打つに利有らん。岡野、否々敵大軍なり。爰に待たんは敵を恐るゝに似たり。勇士の志に非ず。疾く川を渡して待設せん、と云ふ。栗生、孫子に、以少合衆是曰北といふこと有り。小勢にて無謀の軍せんは、大敵の擒とならんは必定なり、といふ處に、甘粕備後、杉

り。前田慶次、宇佐美民部、上泉が陣に行き、一陣の大將敵に乘入るを、他處に控へたるは士の本意に非ず。いざ懸られよ、と言へ共進む氣色の見えざれば、前田を始め二十騎許駈向ふ。上泉、大高は馬より下立ち、面も振らず鎗を打入れ突合ひたるが、念なう敵を突退け引取らんとする所に、政宗の兵三百許横合より切つて懸りければ、上泉兼て直江が詞を怒りたりし故に、一足も引くまじと思定めたれば、又合戰を始め、火出づる許に戰ひけるが、敵味方討たるゝ者多し。前田、宇佐美を始め大剛の者共數度切つて懸りしかば、政宗の兵三十餘人討たれたり。斯る處に政宗の士大將石川彌兵衞、崩るゝ味方を盛返し又打つて懸る。前田已下立堰へ、懸りつ返しつ散々に戰ひけり。直江、日も暮かゝり進み難し。疾く引きとれ、と下知しければ、上泉、心得候、と言ひ捨てて敵に向ひ、上泉主水といふ剛の者打取候へ、と名乘かけ、死狂に數十人切伏せ、終に其處にて討死しけるを、首をば金原加兵衞取つたりけり。上泉三十四歲とかや。上泉主水と胄の眞向に琢嵌にぞしたりける。是より上杉勢亂れ立ちて敗北すれば、義光、政宗勝に乘り、剩すな、と追つつむる。芋川縫殿、村上國清四千許、横合より懸らんと陣を整へ控へたるを見て、蹈み止りければ、又取つて返し追立てて、夫より物別す。石坂與五郎、臺沼日向、前田慶次、宇佐美父子、物具に立所の箭各七つ八つ折かけ、鎗は突きゆがめ、刀は刃さゝらの如く斬りなし、人

易く攻め難し。討つて出でての軍は危し、と制しけるに、大風右衞門二百許にて切つて出で、上泉が陣へ向ふ。上泉大勢にて押包み、剩さじと戰ひけるが、大風僅に打ちなされ、切脫けて城に入りぬ。伊達政宗も軍を出し、先陣長谷堂の城下に押來り陣を取りたり。直江は、大風を討得ざる事殘り多し。此城を唯一時に打破れ、と下知し、城際に攻寄せたり。直江高き所に打上り、石火矢を透間も無く打懸けたるに、只千雷の落懸るが如し。志村伊豆、鮭延越前、此處を專途と追出し追込まれ、相戰うて其日も戰ひ暮しけり。直江又三千餘を城の後の山に上らせ、鐵炮を打懸くれば、城よりも切つて出で死傷數を知らず。直江軍兵を分ち四方を燒働す。所々に軍あり。長谷堂の城下に大なる池谷に堰をして、水を堰き湛へたると覺しければ、物見の兵を遣し、又一陣を以て燒働す。城中よりひた冑八百許切つて出でしかば、直江使を以て、引取れ、と下知すれども、睨み合ひて引退かず。使も行止まりて歸らざれば、次第に軍兵行重り鐵炮を打合ひければ、直江、杉原に疾く軍を引上げられよ、と云ふ。上泉我こそ行かめ、と言へば、杉原、進むは年若き人の業、引揚るは老年の我に協ひたり、とて同心せざるに、上泉、存ずる子細の候、と言ひも敢ず馬を乘出しければ、組に附けられし大高七左衞門、馬を乘附け上泉を引止め、士大將の只一騎にて駈出るやうやある。有るべくもなし、と言へ共耳にも聞入れざれば、大高も續いた

唯易きに就かん、とて聞入れず。遽て幡屋を取圍み、一時攻に乘破りけり。

一說に、長谷堂より內通の事を言ひ送りければ、直江大に悅びけるを、杉原、是は赤松圓心が白旗の城にて、新田左中將を欺きたりし謀なり。斯くいうて山形の要害を構へん謀なり。只山形に攻入るに如じ、と言へども、用ひずして長谷堂に押寄せけるに、內通の事は僞なりし故、直江、欺かれたり、といへり。

夫より出城を只一日の中に二十一ヶ所攻落し、さらば山形に押寄せん、といふ。上泉が曰く、山形は勝れて要害能く、西南は沼なり。東北は石壁高く、櫓の木七重有り。矢倉二十餘所に構へ、且義光は先祖より數百年此地に有り。士卒に物慣れたる者多し。力攻には思ひも寄らず。所々の小城數多攻取りたるにて勇氣を示し、軍を返されん事然るべし、と申す。直江嘲笑ひ、軍を出せしは山形を攻めん爲なり。今更山形の要害能ければとて、引退くやうやある。汝は淺黃じなひの差物指して、利根川二本木の先陣せられしによりて、關東にて夫を憚りて、淺黃じなひを指す者なしと聞きたりしにも覺えぬ事をいふ、と罵りければ、上泉、口惜しき事なりと思ひけり。直江は進んで菅澤山に陣したり。此處も長谷堂より十九町なり。義光も二萬餘の兵を率る山形を出で、長谷堂の山の尾崎稻荷山に陣す。長谷堂には山形の加勢も來り要害よければ、容

名あり。慶次、我此度の亂に諸大名表裡の心見限りたり。景勝ならで我主君とすべき人なし。扶持し置きて賜はれ、とて五百石の祿にて民間に引込み、風月を樂み歌學に心を寄せ、源氏物語を講じて世を終れり。

○出羽國長谷堂合戰上泉主水討死の事

上泉主水憲元は甲斐の武田の家にて、劍術の上手上泉伊勢が弟なり。譽有りし者なるが、京の相國寺の內に落ぶれ身を寄せ居しを、秀吉の時直江景勝の供して京に至りしが、傳へ聞きて對面し、樣々上泉をもてなし、會津は遠國なれども景勝三千石の祿進らせんとなり、と言へば、上泉、斯る身に思ひも寄らぬ詞を承る、とて仕へけり。直江出羽に押入る時、上泉も三千五百の將たり。最上方には、上の山より幡屋まで二十四ケ所に出城を設けたるに、直江は眞直に山形に進んで攻め取らんと謀りける所に、幡屋より春日右衞門に親有る者の返忠せん事を言ひ送る。直江悅んで山形に進む兵を押止め、山路にかゝり幡屋に寄せんとす。軍奉行杉原常陸、春日右衞門が一陣を引て幡屋に進め、惣軍は山形に攻入りて然るべからん。敵我に利を與へ嶮岨にそびき入れ、其隙に山形の要害を能せん謀なり、と言へ共、直江元より杉原と中よからざれば、我は

右衛門、字佐美彌五右衛門、藤田森右衛門、年久しく朱柄の鎗持せん事を望み申せども許されず。然るに慶次を制禁無くば、四人共に許され候へ、と訟へて許されけり。直江山形に攻入り引返す時、最上義光大軍にて追駈け、洲川にて軍有りしに、義光旗本を引いて切つて懸り、合戦數刻に及びけるに、上杉勢引取り兼しかば直江怒つて、我大將として此口に向ひ、後を取る事口惜きよ、とて閙え怒りけるに、慶次馬の前に立塞り、爰は我に任せられ候へ、と言ひ捨てて、敵味方睨合ひたる處に馬を乘りかけたり。杉原常陸は先陣に有りて種ケ島の鐵炮を下知しけるが、慶次に下立ちて懸られよ、といへば、馬より飛下りたり。慶次其日の出たちは、黒き物具に猩々緋の羽織を著、金のいら高の珠數の房に金の瓢箪附けたるを襟に懸け、山伏頭巾にて十文字の鎗を持ち、黒の馬に金の山伏頭巾冠らせ唐鍬懸けたり。前田慶次、と名乘りて懸りける處に、水野、韮塚、宇佐美、藤田四人も同じく鎗を引提げ、喚叫んで念無く敵を突退けたるに、杉原種ケ島鐵炮二百挺、小高き所へ押上打たせし故物別せしかば、慶次下知して引取りけり。

慶次指物練に大ふへん者と書きたりしに、人々、あまりの事よ、と言へば、慶次、汝達は武邊とよみたるや。我落ぶれて貧しければ、大不辨者といふ事なり、と戲れしとかや。

上杉家祿知倒られし後、士多く暇を取りて立去りけるに、慶次を七八千石、一萬石を以て招く大

利大は文學を嗜み様々藝にも達せり。滑稽にして世を玩び、人を輕んじける故、利家教訓せらるゝ事度々に及べり。利大大息吐いて、假令萬戸侯たりとも、心に任せぬ事有れば匹夫に同じ。出奔せん、と獨言せしが、或時利家に茶奉るべき由言ひしかば、悦びて慶次が許に來られしに、慶次水風呂に水を十分に湛へて隱し置き、湯風呂の候。入給はんや、と横山山城守長知をもて言へば、利家、よかりなん、とて浴所に至る。慶次自ら湯を試みて、よく候、と言へば、利家何の心も無く風呂にゆかれしに寒水を湛へたり。利家、馬鹿者に欺れしよ。引來れ、と言はれしに、慶次、松風といふ逸物の馬を裏門に引立てさせて置きたりしに打乗り、出奔しけるとぞ。又京にて夏の比馬を川入に遣りけり。馬取の腰に烏帽子を附けさせたり。道にて往來の人立止り、太く逞しき馬なれば、誰の馬にて候、と問ふ。則烏帽子を著足拍子を蹈みて、此鹿毛と申すは赤いちよつかい皮袴、茨がくれ鐵甲鶏のとつさか立烏帽子、前田慶次が馬にて候、と幸若の舞を諳ひて引き通る。見る人の問ひし度毎に斯くしけるとなり。

上杉景勝に仕へけり。

初て目見する時、土大根三本臺に据ゑて出しけり。

朱柄の鎗を持たせしかば、何故ぞ、と答むるに、父祖より持ち來りし、といふ。水野藤兵衛、韮塚理

杉家の軍兵共大に勇み合へりしに、杉原獨眉を顰めて、大敵に恐れて引返したりと思へるは其人を知らざる詞なり。徳川殿諸將を率る先づ上方に攻上り、石田を討たれんに、十に八九石田敗北すべし。其時殿一人にて如何で徳川殿に打勝ち給ふべき。敵國に攻入らずして引返したるは味方の不幸なり、とぞ云ひける。

杉原白石の城を守りしに、何の時の事にや、伊達政宗不意に押寄する事あり。政宗の物見の士馳歸り、敵は靜り返りて、唯町家に火の用心嚴しく呼はり候。物具したる武者杉原かと覺しくて城門を開かせ、將机に懸りて待居たる、と言ひければ、政宗謀有らんと恐れて引返されけり。

○前田慶次が事

前田慶次利大忽々齋と號す。加賀利長と從弟なり。

一說に、利大は瀧川儀大夫が妻懷胎にて離別し、利家の兄蔵人に嫁して、前田家に生るといへり。

前田の家を立去りて、

大軍にて押包み生捕りて磔にかけ、火の車の指物を括り添へけるを、東照宮聞し召し、武家の道を知りたる者を空しく殺しけるよ、と歎かせ給ひけり。

駿府にて東照宮御物語の序に、篤實なる人は世に稀なり。我年老ぬれ共多くは見ず。佐竹義宣其人なり、と仰せられしを、永井右近大夫直勝承りて、如何なる故にや、と申すを聞し召し、石田治部と七人の大名と大坂にて爭論の時、義宣と三成と元より親有りし故、三成を打具し伏見に來り、其後三成佐和山に歸る時、七人の面々道にて討取るべしと言ふ由を聞き、三河守を添へたりしに、義宣、三成を討たせては生甲斐無しとて道々に物聞を出し、其身は物具して、告け來るを待ちて打出でんと用意有りしと聞く。是篤實に非ずや。關ケ原の亂の時も大坂より賴みたる故、吾に其由を告けて何方にも組せざりき。逆亂に與したるには非ざれ共、捨置難くて先祖より已來の國を削りたりき。篤實の善き事いふに及ばずと言へ共、國の存亡に關るべき事には、又一思慮有るべき事にや、とぞ仰せられける。

○杉原常陸智勇の事

上杉家の士大將杉原常陸は、智勇備りたる人なり。東照宮宇都の小山より引返させ給ふ時、上

兄弟の不和候まじ、と言はれしかば、元就悦びて、隆景の詞に從ふべし、と言はれしとぞ。秀吉九州を討平げられて後筑前五十萬石を小早川に與へられしに、隆景之は吾に過ぎたる事なり。此頃まで敵なりし身に大國を與へらるゝは、吾を愛するに非ず。九州を懐けん爲の假の謀よ、と思ひて秀詮に國を讓り、備後の三原に引籠られしとなり。

○佐竹義宣國替の事竝車野丹波が事

佐竹右京大夫義宣の士大將車野丹波は剛の者にて、白練に火の車を書きて指物とす。關ヶ原の亂に、義宣、上杉に心を合せられしかば、

義宣四萬の軍を率ゐ、水戸の城を出で多珂郡に到る。是上杉の加勢の爲なり。然れ共父常陸介義重は元徳川家に心有りしかば、强て諫められし故、義宣も兵を水戸に返されしとぞ。伏見にて義宣の八十萬石を六十萬石削られ、出羽の秋田二十萬石賜りけり。若辭むならば其儘討亡すべき體なれば、義宣北國を經て秋田に赴きけり。水戸の城を奪ひ取れ、とて本多正信等向ひける時、車野組に附きし士六人と倶に物具し、新藏三郎より傳へたる城を人に授けん事こそ口惜けれ。我と思はん人々は城を枕に死ねや、と呼はり、城中に駈入りしを、大手にて本多等、

ければ、さては世は治りけり。亂世ならんには國境の城に士を分ち置き、岡山には士の家多かるまじきに、今の有樣にて治まれる趣を知りたり、と言はれしとかや。

われこそはにひ島もりよおきの海のあらき波かぜ心して吹け

といへる後鳥羽帝の御製を短册に書きて、彼の船人に與へられけるとぞ。

○小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は、關ヶ原の時秀家と共に德川家に弓箭を取られしかども、關ヶ原に自ら赴かざるの故に、安藝、備後等の國を削られ、長門、周防、兩州を賜はりけり。是より前小早川隆景遺訓して輝元を諫められし中に、毛利家五十餘郡を領し、富貴誠に溢れたりと言ふべし。此より後苟にも國を貪る心有らば忽ち滅ぶべきよ、と戒められしに、輝元、隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる露も違はざりけり。隆景は武勇のみに非ず智謀に優れたり。父元就、病重くなりて其子を集め、兄弟の數程箭を取寄せ、多くの箭を一つにして折りたらんには細き物も折難し。一筋づつ分ちて折りたらんには容易く折るゝよ。兄弟心を同じくして相親むべし、と遺言せられしに、隆景その時、爭は欲より起り候。欲をやめて義を守らば

常山紀談　巻之十六

○浮田秀家八丈島へ配流の事

備前中納言浮田秀家は、關ヶ原の時一萬八千を率ゐられしが、軍敗れて近江の伊吹山に懸り落ちられし。美濃の白樫村に暫し隠れて有りしに、遂に忍びて西國に落下り薩州に著かれしに、其事聞えて東照宮死罪一等を宥めさせ給ひ、八丈島にぞ流されける。まことに苫葺く庵、竹編める戸に、雨もたまらず風も防がねば、黒木の柱を削りて書附けらる。

もしほ焼くうきめかる身は浦風のとふばかりにやわぶと答へん

其後芳烈公光政朝臣備前に御座しましける比、兒島一説西大寺村の商船風に放たれて八丈島に到りけるに、秀家九十餘まで存命へて居られしが、故郷の者とて、いと懐しげに様々の物語して、秀家、備前には誰か有る、と問ふ。新太郎少將と答へ申すに、誰が事ならんとて家老の姓名を聞きて後、さては池田の家にて有りけるよ。又所々に城多きや。城の北に伊勢の宮を設け置きたるが如何なるぞ、と問ふ。伊勢の宮は候。されども士の家幷と相並び續きて候、と答へ

として海陸二手に分ち、道すがら浪人共を驅集めんに十萬は有るべし。清正は猛將なり。吾族本に有りて攻め上る程ならば、內府を討滅さん事掌の中に有りと覺えたれ共、我年老いぬ。切從へし國を捨てて京に上りしに、臆病者共の痴にて、色々の事に恐れて言ふ事を誠と心得られたるや、とて扇を抽いて疊を打つて大言せられしかば、禪高兎角の詞無くて歸られけり。

攻落し、筑前、筑後の浪人共相集り大軍に成りし時、嫡子長政の使來り、關ヶ原にて石田を始め敗北し、金吾中納言秀詮は、長政の謀によりて裏切せられし由告げられしかば、如水大に怒り、空果てたる甲斐守かな。天下分目の軍はわざと月日を過して、浪人のすぎはひを與ふるものなり。何事の忠義だてぞ。日本一の空は甲斐守なり、とぞ呟かれける。其後長政に筑前を賜はりければ、如水も京に上られけるに、諸國の大名如水の門に來りて市をなしけり。山名禪高如水と年比の友なりしが、如水の許に來りて、諸將の尊崇大方ならず。殊に夜中に密談も候とて世の疑ふ事も候なり。就中三河守秀康親の如くに敬はれ候。旁、徳川殿怪しみ思召す處なり。徳川殿遠き慮有る人なれば、此方に心安く立入る人の中にも、如何なる目附をか設けられたらん。筑前守の武略徳川殿の賞恩淺からず候に、斯くては筑前守の爲に悪かりなん。徳川殿頻に用心有るも皆如水を恐れての事なりと人も申し候。猶又醍醐、山科、宇治に浪人夥多居候も、如水の隠し置きたると人々疑ひ申すなり。如何に、と申されけるに、如水聞きも敢へず、内府を攻亡し、天下を取らんと思はんには、いと易き事なり。筑紫をば皆打平げたり。島津のみ殘りしかばあつかひを懇けて味方とせん。若し楯つかば攻破らん事尤易き所なり。中國、備前、播磨まで皆空國にて有りしかば、我其頃二萬餘の軍兵を率る、加藤、鍋島は既に我に隨從すれば、兩先陣

けるを聞し召し、汝等年若くとも能く聞け。女は容儀を尊ぶ事よ。よし形は如何にもせよ、斯る軍に功名したるを男とはするぞかし。彼三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等志十に二三を彼者に似せたらんはよかりなん、とぞ仰せられける。

○加藤清正治亂を論ぜられし事

關ヶ原の後、東照宮、石田が亂は雨降りて地固まるといふに同じ。此より靜謐ならん、と仰せ有りしに、諸大名皆祝し奉りたる處に、加藤清正、仰せの如く惡逆の輩誅せられ、泰平たらん事必然に候。然れども天下の治亂は天の陰晴に譬へ候ひなんには、晴渡りたる晴天と見るも俄に雲の出來て、雨うつすが如き事も有るものに候へば、測り難きは人の心にて候、と申されければ、淺からず御感有りしとなり。

但清正の此論、何の所にての事なりしや詳ならず。

○黑田如水豪氣の事

關ヶ原の時黑田如水は豐前中津に有りしが、九千餘の兵を率ゐ、九月九日打出でて諸所の城共

に有り。鎗創ならば左の手に有るべし。殊に横に疵の有るは汝が自ら切つたるにや、と云はれしかば、田中、敵は銀の澤瀉の立物打つたる冑を著、十文字の鎗にて杉本次郎介と名乗りたりき。猶僞と思召し候はんには不幸の至に候、とて退きけり。後城明渡し、杉本も清正に奉公しければ、此夜討の事を問はれしに、杉本、城に入らんとせし時、頭盛の冑を著鎗を提げて走り來り候武者を、一鎗突いて候、と申す。清正、田中が詞證據に符合しければ、五百石の祿を與へらる。田中其夜一通の書を殘し、虛名を蒙り世の誹に合ひ候程に、加祿に本の祿を添へて返し候、とて肥後を立退きけり。田中は其初盜賊にて有りしが、石川五右衛門と言へる强盜の長を、秀吉の時京の三條河原にて刑罪せられしに、道々見物の男女群をなす。田中其中に紛れて、石川を引きて過ぐる時につと飛懸り、石川が繩取を唯一刀に斬倒し、五右衛門殿日比の恩に報じ候、と呼はり、騷ぎ犇めく間に、人の中に走り入り、終に逃げ出でける男なり。此時二十六歳とかや。

○福島家の士大將東照宮を拜する事

關ヶ原の軍に功有りける諸將の家臣を召して、東照宮御盃を下されし時、福島正則の士大將福島丹波は跛、尾關石見は瞎なり、長尾隼人は聾なりしかば、近習の人々、能も片輪の集り候、と囁き

狭も自害し、宇土、八代を清正に授く。清正南條に六千石の祿を與へられけり。三宅と南條と物語するに、元琢、汝を討留めずして殘多し、と戯れしかば、三宅、我もさ存ずるなり、と言ひけるとぞ。

三宅、宇土にて組みたる時忽ち刺殺すべきに、其日指たる小脇差少し長かりし故なり、と語りしと云へり。

○肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事

清正宇土を圍む時、或夜、敵夜討すべし。な怠そ、と下知せられけり。果して杉本次郎介を大將として清正の陣に夜討す。日下部平介、坂川忠兵衛鎗を合せ散々に攻め戰ふ。杉本守固きを見て城中に引返す。田中兵助は酒に醉ひて臥居たりしが、鐵炮の音に驚き起上り、鎗を取りて駈け出でしに、敵引取り皆門内に入りて、杉本一人大手の柵の木戸口に殘り止りたり。田中詞をかけたれば、杉本十文字の鎗にて田中を一鎗突きて、柵の中に入りにけり。清正火を燈し軍せし者共を呼ばれしに、田中、今夜先駈したり、と申す。清正能く見て、一番は日下部、坂川二人の内なり。二人とも箭創有り。弓は鎗を合する時射て、一同に懸れば射難きものなり。田中が創は右の腕

追散したる勇士なるが、秀吉の勘氣にて小西行長が許に隱れて、朝鮮にても武勇の振廻せしなり。此度清正寄ると聞き、只一騎城を乘出す。元琢が從者福西九郎大夫、是も十八の時より朝鮮の軍に會ひて物師なるが、元琢に後れじと城を出でて馳せ行く所に、山の上に清正の馬關の馬印閃きて見えければ、彌進んで三宅に行合ふ。元琢馬より下りて三宅と鎗を合せたる處を、福西透間なく走り寄り三宅を斬る。三宅が突きたる鎗を、元琢握りて遂に引奪ひて、既に危かりしに、三宅が從者元琢が胄の眞向を一刀斬附けたり。元琢目眩きてくる〳〵廻りながら刀を扒いて、三宅が從者を切倒す。清正、茜の三本じなひは三宅喜藏ならん。討すな者共、と下知せらるゝ詞の下より、飯田角兵衛、庄林隼人馬に諸鎧を合せて駈け來りければ、元琢、敵續きなば惡かりなん、と三宅を捨てて引返す。清正三宅を呼びて、其日被られし羽織に千石の祿を添へて與へられけり。

又三宅元琢が胄を突き落せしかば、頻に手負ひたれ共、淺手なれば三宅が鎗に取附きたれども、三宅鎗を捨てて組合ひたりともいへり。

其後關ヶ原の軍破れて行長生捕になりしかば、清正使を城に立て、城を明け候へ、と云はれしかば、城代小西隼人、自害して城中の者共助け給はらんや、と申す。清正許諾して八代の城代小西若

立ち上り、突退け幾度といふ事を知らず。大友が勢終に打負けて殘り少く討たれしかば、僅許になりて立石に引返す。義統力盡きて如水に降參せられけり。

○三宅喜藏武勇の事

義統木附の城に向ふ時、細川忠興の士大將松井有吉、加藤清正に加勢を乞ひたりければ、三宅喜藏を遣られけり。三宅、殿の先陣にて功名せんと思ひしに、他國に往きて城に屈り居らん事は存も寄らざる事なり、といふ。清正、汝が武功有る故に、他國に遣したりとも我名を汚さじと思ひ寄りたるに、己が名を貪るこそ心得ね。永く我家を去つて心任にせよ、と言はれしかば、三宅其處を出て、庄林隼人に斬くと告げ、殿の咎を蒙りたれど、殿ならで奉公せんと存ずる大將も候はず。あはれ隱し置きて給はらんや、と言ひしかば、隼人心得たりと許しけり。清正宇土の城を攻むる時、三宅は茜の三本じなひの差物さし、夜半より鹽田口の堤に行きて明くるを待つ。宇土には南條元琢籠り居たり。此元琢は伯耆羽衣石の城主南條左衞門元次が二男にて、兄の元重に劣らぬ大剛の者なるが、毛利元就と軍する事度々に及びけるに、敵寄ると聞きて只一騎馬上にて上帶しめて駈け出し、半里が程に軍兵共追附いて、速に國境に馳せ行き、押寄する軍兵を

手の股に中る。其間に小栗引組んで吉弘が首を取ると言へり。又一説に、吉弘と井上は、吉弘一年中津に有りて親み深かりしかば、此日井上に向ひて、珍しや一鎗參らん、と言うて突合ひしが、吉弘が胸板を二鎗まで突きけれ共、甲堅くて裏かゝず。井上、吉弘が内冑を突きけるに、十文字の横手にて忍の緒を切り、冑傾きて目を塞ぎければ少し退りける處を、吉弘が左の脇より下著の青く出づるを目に懸て脇腹を突きたりしかば、吉弘遂に討たれしともいへり。又此軍場の後に吉弘が厲鬼現れ、往來の人に祟をなしける故、吉弘が緣の人石垣原の傍別府といふ所に吉弘が屍を葬りてけり。別府、清田、濱田の百姓瘧を惱めば、米を供ふるに忽ち癒落ちけり。吉弘が嫡子は清正に仕へ、二男は細川忠興に仕へしが、父のなき跡を見んとて別府に行きて其印の石を拜せしが、多く米を供ふるによりて鳥の集りて糞に穢れしかば、今より武具を供へたらば治し給へ。さなくば治し給はざれ、といひしが、是より米を供ふるに驗なし。木刀を作り供ふれば驗有りといへり。

宗像も井上も從者大野勘右衛門と引組みたる處に、勘右衛門が弟休也と云ひし法師武者走寄り、掃部が脇腹に刀を突立て、えいや、と跳ねたりければ、遂に其處にて討たれけり。大友の勢突崩されてはさつと引き、又押懸り戰ひけれども、井上、野村追附けず、元の芝居に跪き、又懸れば

の軍に功名し、膝に手負ひ行歩心に任せざれば、片輪者にて候程に馬に乗り候、と言うて下知しけり。石垣原は原の中に高さ一丈餘の石垣土手六七町許も續きてけり。井上、野村は石垣を此方に取らば軍に勝つべし、と進みければ、敵も同じく進んで石垣を踏えんとせしを、突崩したれ共逃ぐるを追はず。井上鎗を横たへ押止め、野村は馬を乗廻し兵を整へたり。大友の士大將吉弘加兵衛、宗像掃部是を見て、斯くては味方負軍なるべし。敵勝に乗りて足を亂さん所を追立てんと思ひしに力無し。とても討死せんと思ひ定めたれば、いざ懸らん、とて二千許靜々と歩み寄る。井上、野村是を見て少しも騒がず、折敷きて相懸にもせず待ち懸けたり。間近く詰寄せて散々に突合ひ切合ひて、大友勢一町許引退きけれども追ひも懸らず。元の芝居に跪きて心靜に息を吐ぐ。大友勢又押懸りて、爰を專途と火を散して戰ひけり。吉弘は尖眉刀を打振り、今日を最後と振舞ひけるを井上見て、いざ參り合はん、と詞をかくれば、吉弘打笑ひ渡し合せしが、草摺の端を十文字の鎗に突かせて、深手なれば少し退りけるを、小栗治右衛門が從者弓を持ちたるが眞中を射貫く。吉弘心猛しと雖も、終に叶はで首をば小栗取りてけり。

又一説に、吉弘は黑革にて威したる甲を著、熊毛にて鍬を飾りたる冑にて、三尺許の刀を以て井上と馬上にて渡し合ひ、馬より突落されしが脇差を抜いて手裏劍に打つ。井上が弓

が討るゝを見て馬を引返して引退きぬ。荒巻は敵競ひ掛るを見て、いざ引かんとて人數を集むるに、敵嚴しう進むを見て、首をば皆捨てさせ、馬に轡を懸けて引きさがり、後殿して引退きけるが、久野が討死を知らざりし故、其日の功名徒に成りにけり。黒田の二陣の士大將井上九郎右衛門元房（後に周防と云）野村市右衛門（後隼人と云ふ）遙に跡にて関の聲を聞き、此山に上りて敵の軍立を見拔くべし、と井上手の者に下知し進み行く。野村、先に軍有るは分明なり。何見分くる事の有るべき、と言へ共、井上が陣押固めて通さざれば、今少し先に押出されよ。廣き所にて陣せん、と言へども聞入れざれば、獨言して怒りける所に、井上主從三騎小山に乘り上げ、指物を抜いて味方を招き陣を進めけり。

井上、唐冠の冑、鳥毛の棒の指物したりと言へり。又佩楯を取つて捨てければ、井上が手の者、すはや激しき軍よ、と勇めるとなり。

井上、野村、敵は皆歩立なり。馬の駈場を頼む共、必死の敵に輕々しく懸り難し、とて皆馬より下立ち、勝に乘つたる敵にて殊に譜代重恩の士共、今日を限りと思ひ定めたるなれば、敵懸るとも相懸すべからず。待軍して突崩したりとも足を亂して追ふべからず、と下知し、靜々と押懸る。大友が兵是を見て、踈駈せば忽ち突崩さん、と思ひしに違ひけり。野村は朝鮮にて漢南

五右衛門が詞尤なり。馬に當て倒し蹴散すと申すは敵によるべし。今日の敵は國替の時能く知りたる者にて皆物師なり。近年落ぶれて此亂を死すべき時節と思ひ定め、鎗を膝の上に置き靜まり居たる所へ、一騎二騎ばら〳〵と駈合はせんに如何で勝つべきや。鎗を突折る程の軍ならでは叶ふべからず、とて馬より飛び下り、久野が馬の口に取附き、若氣ながら餘りの逸り樣にこそ候へ。後陣に先を越さればこそ恥ならめ。後に押詰めん時に懸りて突崩すべし、と云ひけるに、平田彦右衛門といふ者馬に乘りながら、否々後陣を待たんとせば、井上、野村すゝどき男なれば必ず先を爭ふべし。大友が者共木附にて疲れ又爰に來りたり。進め〳〵、と言ひければ荒卷怒つて、平田、汝と共に豐前の者なるが、度々手なみは知つたるよ。今井の濱の軍に汝を追駈けて、具足の押附切つたりし疵は有るべきに、其後四兵衛治右衛門が父汝を呼出すとて問はれし時、汝が健氣さに討止めざりきと言ひつる故に祿を得しかば、我陰と悦びしは忘れたるか、と言ひ捨てて馬に乘り先駈すれば、二十騎許續いたるを押詰めて懸りけり。敵三手に分れたるを一陣を突崩す。久野逸りたる者なれば少もためらはず、一文字に乘込み戰ひけれ共、大友が兵共度々の事に慣れ、今度の亂れに故主の招きに從ひ、今日を限りと芝居にひたと折敷き待ちかけたれば、久野主從五騎一所にて討たれけり。曾我部は久野が討たれたる所に横合に駈入りて討死す。平田は久野

○黒田如水凶相の馬に乗られし事

黒田孝隆入道如水、關ヶ原亂の時九州を打平げられしに、乘られし馬は二寸許の黒き馬なるが、百會に手負といふ旋毛有り。如水此馬を指ざして、我此凶相を知らざるに非ざれ共、人は萬物の靈なりと聞きたり。人に勝つべき萬物無し。吾不道ならば凶相是より大なるはなし。此馬の毛墜に係らず、と云はれしとぞ。

○黒田大友石垣原合戰の事

關ヶ原亂の時、大友義統木附の城を攻むると聞きて、如水後巻せられしかば、大友立石に引退き、石垣原に先陣を押出す。黒田の士大將久野治右衛門歳若しとて曾我部五左衛門を添へられしが、敵四五千許立石の民家を後に當て待ちかけたるを、久野透に見て金の天衝の指物さし、栗毛なる馬に乘り懸れ、と下知しけるを、曾我部、今暫し待たれよ、早くば勝利候まじ。下り立ちて馬に息吐がせ、一同に割籠つかはせ、後に味方の續かん時衝懸り一戰すべし、と言へ共聞入れず。久野が從者荒巻軍兵衛と言ふ者豐前の地士なりしが、若き時宮松と言ひて十五歳より功名せし剛の者、

與ふるに及ばず、と言はれけり。

○山田勘六郎討死の事

利長の兵山田勘六郎は、十四歳にて父の仇を討ちたる人なり。或日利長拏藏の戸を開くとて、山田に鑓を預けられし故、急ぎ來れ、と呼れしに、遲かりければ忿つて、持たる杖にて突れしに、思はざるに額に中りて血流る。跪きて平伏せしに脇差の鞘走りければ、手向もするや、とて疊みかけて杖にて打たんとせられしを、側より山田を引退けたり。山田此より病と稱して引籠り居たりしに、關ヶ原の亂起りて利長大聖寺の城を攻むる時、一段高き所に打上り武者押を見物せらる。山田五六十人許引具し、今日を最後と出立ちて押通り、城に著くと先駈して一番に乘込み、鎗にて乳の下を突き貫され、痛手なれば堞の下に落つる。衆て從者に言ひ含めしかば、息絶えざる內に利長の前に舁き來る。利長見て後悔せらるゝ事甚しく、其過を懇に斷りて涙を流さる。山田軈て死にけり。行年二十歳。世に優れたる美男なりしが、大剛の働して討死しけり。其前日親しき朋友に奇南香を分ち贈りしを、其頃大聖寺奇南香と言ひて持囃したりと言へり。

二人の前後を問はれしに、久兵衛申しけるは、縫殿介は初より蹈止り候へば、一番誰か爭ふべき、と申す。縫殿介は、久兵衛敵に鎗を合せし事早く候へば一番に候、と申す。利長聞きて、武功は猶及ぶ者有らん。斯く譲る志、萬人にも越えたり、とて一番を松平に定められ、共に感狀與へられぬ。松平此時祿五百石、後三萬石を賜りて伯者といひけり。

一説、松平を松原に作る。何れか是なる事を知らず。一説に、此日金澤の士七人鎗を合せける中にも、岩田傳左衛門小松方の手負ひたるを首を取らんとせしに、松平久兵衛、岩田今日晴なる鎗を合せ、其上に拾首何にかせん、と言ひしかば、岩田尤なりとて同時に引取りしとなり。後に岩田が曰く、首を取りて大音上げ、岩田傳左衛門鎗を合せ又首を取つたり。引取口の殿と呼はらば、一芝居にて三度の功名なるべきに、松平が物師故、己が下知につけて引取らせし、とて後に悔みけるとなり。岩田後に内藏介と稱す。又利長、淺井にて鎗合せし士に感狀與へられし由小松に聞えしかば、小松の士共、殿にも御感狀下し給はらんや、と云ひけるを、長重、淺井曝は道細く左右深泥にて、掛引自由ならず。勝敗定かならざるは理なり。され共退く敵を追詰め、橋の彼方にてせり合を始め、橋の此方にて物別せしかば、引取る敵に少しながらも追返されたるに似たれば、人々、武勇の働はさる事なれども、感狀は

金澤の軍、小止み無き終夜の雨に假の陣屋も有らざれば、物具皆霑れとほり、鐵炮の銃口に水入り火縄もふり消され、左右は泥なり、多くは膝甲様の物を投け入れ、足溜とせしと言へり。

金澤の殿長九郎左衞門連龍が陣色めくを見て、江口麾を取り、懸れ、と下知すれば、松村孫三郎馬を乗出し敵の陣の中を乗切つたり。荒田五兵衞續いて馬を入る。

松村は五ヶ所痛手負ひ馬より落ちけるを、小池新兵衞、松村を馬に乗せ引取らせしとなり。長父子蹈み止り、此處を專途と戰ひけるが、討たるゝ者多し。長好連玆年十八歲、手の者數多討たせ、敵の中に駈け入りて討死せんとせしを、横田久右衞門馬の口に取附き引返す。長重の軍勝に乘り剩さじと追詰めたり。太田但馬は殿の陣に軍有りと聞き、兵を返して馳來る。水越縫殿介山城橋に於て、鎗を提け敵に向ふ。松平久兵衞は太田が陣にて足輕を下知して居たりしが、銀にて飾りたる冑を著、黒き物具にて馬を駈け寄せ來り、馬を乘放し水越が前につと進出でて、小松の士拜鄕治大夫と鎗を合せしかば、水越も續いて安孫子作大夫と鎗を合す。

一說、松平は不破杢兵衞と鎗を合すとも言へり。

袈にて雙方手負ひ討たるゝ者多し。互に精力盡きて、相引に引退いて物別せしなり。後に利長

勇に誇りて、利害に暗き身の士の下知する事こそうたてけれ、といへば、山崎聞きて、敵を恐れてしかしたるならん、と罵りしを、側より、詮無き爭よ、と留めけり。久兵衛愈憤りて、強敵に當りて目を驚かさん物を、と思ひ定めて居たりけり。

其夜長重は士大將を集め、江口三郎左衛門を大將として夜駈せんとなりしに、俄に大雨にて風烈しく、夜討を止められしかば、江口、風雨は夜討に好む所なり、と言へば、人々皆尤と申しけるに、長重、否々、御幸塚の左右沼にて、人馬の掛引心に任せじ。明日敵引取る時追詰めて、思ひの儘に討勝つべし、と云はれしとなり。

長重の士大將江口三郎左衛門正良、惣構より見渡せば、敵段々に引退く。時こそよけれ、と兵を出し押行く。敵を喰留めんと鐵炮を打懸くる。長重も續て兵を進めらる。

又一說、長重鐵炮の音を聞き、後れな者共、とて馬に鐙を合せて駈せ附けられしかば、江口振顧みて、今に初めぬ此殿の早業哉、と悦びけり。長重、我淺井山を取りきり敵の頭上より打竦めなば、盾を突かする事有らじ、と言はれしかば、江口、尤も然るべし、とて後より續きたる兵三百人を引具し淺井山に登り、敵を目の下に見下して鐵炮を打懸けければ、坂井與右衛門眞吉も馳來る。長重愈競ひ懸りて、一足も前に進め。一寸も退くべからず。と下知せられけり。

○淺井畷合戰前田丹羽の將士功名の事

附松平久兵衞軍學鍛煉の事

前田利長の士松平久兵衞、若き頃より兵書を讀み一飯の間も懈らず。常に人に語りて云く、此一人に對する業に非ず。萬人を一刀に斬るの道なり、といへり。利長大聖寺の城を攻落し引返す時、利長の士大將山崎長門守、淺井畷よりせん、と云ふ。久兵衞、道細く左右深田なれば、大軍の進退如何有るべき。半退きたらん時長重兵を出さば、進退共に叶ひ難かるべし。敵は案内者なり、必定味方利候はじ、と言へ共山崎聞きも入れず。既に大聖寺を攻落し、大軍なれば敵は攻められざるを能きにして、爭か討つて出づべき。若軍を出さば押包み、一人も剩さず討取るべし、と云へば、久兵衞、長重は勇將なり。大聖寺の後詰に後れ口惜く思ひて打出でんに、其鋒日比に倍せん。吾は忘り、敵其虛を討たば危き事に候。又誰にもあれ、吾城を馬の蹄に蹴散して過ぎ行く敵に、箭の一筋も射懸けずして屈まり居る者や候べき。明日の軍陣を亂され候な。我敵を恐れぬ證は、明日人々に知らせんものを、と云ひけり。其夜物主皆張番を出す。山崎打巡り見て、久兵衞が足輕は何故に味方近くに置きたるや、といふ。久兵衞聞きも敢ず、勝敗の理を知らず、敵を侮り

けられし竹田善兵衛家正、大木土佐恒持謀を廻し、轉法口に居ける清正の舟奉行梶原助兵衛に山梔子の煎汁を飲ませ、四五夜眠らせず。疲れ衰へ大病人の如くなりしを、籠に乘せ、綿帽子冠らせ、前後に衾重ね、門番の前にて戸を開き、斷りて屋敷に往く事度々に及べり。後は見なれて更に咎めず。又川口にて蜈蚣船を晩毎に漕ぎ比をさせてけり。是も番船見慣れて後は、何は早き遲き、など言ひて守怠りぬ。斯る處に清正より、吾は石田に與す可き用無し。如何にもして北の方を敵に渡さずして落せよかし、と云ひ來りければ、大木工みつる事にては有り。北の方に此由を告げて梶原が衾の下に北の方を押匿し、其上に靠れ懸りて毎の如く籠の戸を開き門番の前を通りけり。土佐も跡より供して、若見咎められなば北の方を刺殺し、切死にすべしと思ひたれ共、事故無ければ轉法口に行きて、頓て蜈蚣船に乘せ、漕ぎ出し、番船の前をつと行き過ぎて、二三町にもなりければ、彼は如何に、と騒ぎ犇めく間に、鳥の飛ぶが如く一里餘も漕ぎのびぬ。番船共、謀られたるよ、とて碇を上げ追附かんとせし間に行き過ぎて、遂に肥後に下り著きぬ。大木、竹田は大坂に居殘りて此事洩聞え、打手來らば思ふ程戰はんと待懸けしに、關ヶ原の軍破れしかば、思はざるに難を遁れけり。大木元佐々成政に仕へ後清正に仕へ、才智篤實兼備へし者なれば、清正寵愛厚かりしに、今度の事に依りて、又二千石の碌を增し與へられしとなり。

て殿を嘲りて出奔しける事、後悔今更益なし。十餘年山中に匿れ居しに、云々の事にて殿も危く御座しますと聞きて、夜を日に繼ぎて參りたり、と言へば、青木、誠に義理の志はさる事なれ共、殿の怠甚しければ、斯くと申したりとも許されじ。疾く歸られよ、と言へば、河村、臣たる者の義を知られなば河村はなど來らざるやと言はる可きに、門内にだに入れず、疾く歸れとは口惜の詞よ。此上は町屋に匿れ居て殿の先途を見ん、と云ひしかば、青木、さらば先づ申して見ん、とて内に入り嘉明に告ぐれば、それ呼び入れよ、とて褥寝所に召出されしが、一目見るより涙を流されしに、河村も涙に咽び、君臣暫詞も無かりしが、河村、思も寄らず殿の御前に出づる事よ。今生の思ひ出に候、と申す。嘉明、汝が志言はん樣も無し、と悦ばれけり。夜明けて、河村こそ來れ、とて下部迄言ひ囃し、大軍の援有るが如く勇みけり。嘉明寵愛して八千石與へられけり。程無く病死しければ、奥州四十萬石に成られし時、河村、存命へたらんには國政の輔佐たらんに、と嘆かれしとかや。

○加藤清正の北の方大坂を忍び出でられし事

加藤清正の北の方も大坂に在りしを、石田、人質に取らばや、と云ふを聞きしかば、清正より附

○河村權七郎が事

關ヶ原の亂の時、加藤嘉明の北の方大坂に有りしかば、河村權七郎を伊豫の松前より大坂に遣りけるに、忍びて屋敷に至り北の方に相見え、松前より長臣等が代とて參り候。若奪ひ取らんとせんとも、臣斯くて有らん程は危くな思し召され候ひそ、とて屋敷の隅に井樓をあげ柵の木ゆひ、敵に向へるが如し、叶はぬ時は自害を勸め、臣も御供申すべし、と云ひけるに、細川忠興の北の方自害の後、人質を奪ひ取る事止みたりけり。河村に二百石の祿を增與へられしに、後河村言ひけるは、大坂川口の守り固く、中々通るべき樣無きを、尼ヶ崎の漁夫を談ひ、船に乘り網の中に身を潛め、敵の中に入りて守りしは、必死を思ひ定めたる事なり。關ヶ原の軍に首取つたる者に同じからず。然るに恩賞の薄き事、明ならぬ殿なり、とて出奔しければ、嘉明忿りて、探出して誅せばや、と言はれしかば、或山中に匿れ居たり。大坂の亂起りし時、嘉明江戸に殘し留められ、不慮の事有らば取卷きて攻殺さん、と言合へり。其比夜更て河村、嘉明の屋敷の門を叩き、青木佐右衞門を呼出す。青木怪み、立出でて見るに河村なり。こはそも如何なる事ぞ、といふ。河村、事新しきやうなれ共、君に仕ふる者の忠を致すは常の習なり。然るに過ぎにし大坂の事に誇り

○小幡助六郎忠死の事

小幡助六郎信世は、上野介信繁が三男にて上野の人なり。十五歳にて大坂に赴き諸家の體を見るに、石田は太閤無二の寵臣なれば仕へけり。後祿二千石を與へけり。關ヶ原にて三成敗北の時、押隔てられ三成に從はず。其處を切り脱けて三成が行方を尋ね、江州石山に來りしを、鄉民搦め捕りて大津に參る。百姓をば賞せられて金二十枚を賜はりぬ。さて信世を召出され、石田が行方を問はせ給ふ。信世承り、三成が士小幡助六と申す者にて候。主の在所能く知りて候。然れども年比恩を請けたる身の、今日の難を遁れん爲に主の在所を申す不義や候。假令骨を拉がるるとも固く申すまじきにて候。試に拷問有れ、と申し切つてけり。東照宮聞召し、忠義の士なり。三成が行方努々知りたるに非ず。知らざる故にこそ落行きて搦められたれ。士程の者を拷問に及ぶべからず。將たる人は忠臣義士に不憫をこそ加へめ。疾く縄を解け、と仰せ有りて則ち赦させ給ひけり。信世近き邊の寺に行き、其由細々と語り、思はざる外に赦を蒙りたれども、亦恥に遭はんも計り難し。屍を匿し給はれ、とて自害しけるを大津に申し上げければ、殊の外に惜ませ給ひけり。

則ち詞無く過ぎられぬ。黒田長政通られしに馬より下りて、不幸にて斯くなり給ひぬ。是を、とて著られし羽織を脱いで著せられたりと言へり。

石田を始め小西、安國寺生捕れて、三人の肌に木綿の破れたるものを著たるを東照宮聞召し、石田は日本の政務を取りたる者なり。小西も宇土の城主なり。安國寺亦賤むべき者に非ず。軍敗れて身の置處無き姿となるも、大將の盛衰は古今に珍しからず。命を猥に棄てざるは將の心とする所、和漢其例多し。更に恥辱に非ず。其儘京中を渡しなば、將たる者に恥を與ふる事吾恥なるべし、と仰せ有りて、三人に小袖を賜はりけり。石田に見すれば、之は誰が與へたるぞ、と問ふ。江戸の上樣より、と言へば、それは誰が事ぞ、といふ。徳川殿、と答ふれば、三成、何徳川殿を尊ぶべき、とて一言の禮に及ばず、冷笑ひて居たりけり。

小西は、敵對の吾に是迄の勞心に恥ぢたり、とて涙を落しけり。安國寺は兎角言はで赤面し俯き居たりけるとぞ。三成を誅する時車に載せて六條河原に出すに、石田顔色平生の如くなりしとかや。又石田治部が天下を取つたると云ひけるを聞きて打笑ひ、我大軍を率る天下分目の軍しけることは、天地破れざる間は隱れ有らじ。些とも心に恥づる事無きよ。嚊さずしても有りなん、と言ひけるとぞ。

打負けしは天命なり、と言ふ。正純、智將は人情を計り時勢を知るとこそ申せ。諸將の同心せざるも知らず。輕々しうも軍を起されしかな。軍敗れて自害もせで搦められしは如何に、と言ふに、三成忿つて、汝は武畧は露も知らざりき。腹切つて人手に懸らじとするは葉武者の事よ。賴朝公土肥の杉山にて、朽木の洞に身を潛めし心はよも知らじ。大庭に搦められなば汝に嘲らるべし。大將の道は語るとも汝が耳には入らじ。今は是迄なり、とて物も言はず。

東照宮の御前へ三成を召出して、如何に武將も斬る事昔より有るためしなり。恥に非ず、と仰せられしかば、三成氣色打解けて、唯天運の然らしむる處にて候。疾々首を刎ねられ候へ、と申す。東照宮、三成はさすがに大將の器量なりけるよ。平宗盛には大に異なり、と仰せ有りけるとも言へり。又一說、中納言秀詮、石田が體を見ばやとて座を立たれしに、細川忠興、何でふ益無き事なり、と言へども聞入れず。三成、秀詮を見て、我汝が二心有るを知らざりしは愚なり。されども約に違ひ義を棄て、人を欺きて裏切したるは武將の恥辱、末の世までも語り傳へて笑ふべし、と云ひけるに、秀詮詞無かりけり。又三成大津に到る時、御本陣の門外に疊を敷き其上に坐したりしに、諸將打過ぎけるが、福島正則無益の亂を起して其有樣なり、と言はれしに、石田、おのれを生捕りて縛らざりしは天運なり、と云ひければ、正

三成此時坐上の榻に倚りかゝり、元より田兵と呼びしが如く、此時も田兵と云ひて常に替らざりしとなり。

秀賴公の御爲に害を除き、太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡き斯くなりし事何をか悔むべき。是は太閤より賜はりし切刃正宗の脇差なり。形見に進すよ、とて與へけり。

馳走の士を附けてもてなしたれども、片時も早く死んとて食せず。馳走の士如何で兵部が計ひに及ぶべき。能く勞りて最後の御用意候へかし、と言ひければ、さらば此頃腹中の惡しきに韮雜水を賜へ、と云ひしかば、其設して進めければ、快く食して打伏して鼾かきたり。

田中、石田を引具して大津に參りければ、東照宮、本田正純に石田を守護すべき由仰出されけり。正純、石田に向ひて、秀賴公年若く事の是非を知召さじ。唯太平を致す道こそ有るべきに、由なき軍起して斯く恥辱にも及ばれしぞかし、と云ひしに、三成、吾土民より國を賜ひたる恩豈へんの樣なし。世の樣を見るに、德川殿を打亡さずば遂に豐臣家の爲によからじと思ひて、秀家、景勝を始として同心無かりしを、強ひて勸めて遂に此軍をば起したりき。戰に臨んで二心有る輩裏切せし故、勝つべき軍に打負けぬるこそ口惜しけれ。一心有る人だに無くば、汝達を始め斯の如く搦めなんに、志を失ひたるよ。運盡きぬれば九郎判官も衣川にて空しくなりたりき。吾

らんこそよけれ。軍神も照覧あれ。吾僞無きよ、と言へば、さらば如何にもせよ、と云ふ。才兵衛悦んで引起し、物具に附きたる塵を打拂ひければ、彼士、天晴汝は大剛の人にて、而も辯舌明なり。搦められぬれど恥とは思はず。名は松田大介と云ふ者なり、と言へば、才兵衛、松田を先に立てて始首を取りたる所に行けば、從者喜兵衛殿も追續いて出で給ふが歸られず、と言ふ。才兵衛、如何にし給へるにや。松田は逃ぐべき人にあらね共汝附添ひ居よ、と云ひて城の方に行く所に、喜兵衛歸りたるに逢ひ、生捕をしてこそ候へ、と云ふ。城門は固く閉ぢたり。兄弟打連れ歸りて斯くと申す。通晴由々しき事をもしたるよ、とて一同にどよみ合へり。生捕は如何にせん、と申すを、東照宮、心に任せよ、と仰せあり。才兵衛、松田に申せし詞云々なり。松田に腹切らせられば臣先死罪になり候可し、と言へば、勇有り又情有り、とて松田も許されけり。

○石田三成生捕らるゝ事

田中兵部大輔吉政、石田を生捕にせられしが、いと懇に會釋して數十萬の軍兵を率ゐられし事、智謀の由々しき事と申すべし。軍の勝敗は天の命に候へば力に及び難し、と禮儀正しかりければ、三成打笑ひ、

を取るだに易からず候。まして生捕せん事叶ひ難し、と申しも果てぬに、渡邊が弟才兵衛進み出で、殿の仰に何とてさは宣ひ候ぞ。喜兵衛年老たり、軍令を司るには然るべし。斯る力業は才兵衛に仰附けられよ、と言へば、喜兵衛、思慮なき事な申しそ。無禮なり、と言へば、通晴大志壯力人の及び難き事をも爲し得べき眼ざしよ、と才兵衛を稱せられしかば、才兵衛座を立ちけり。兄の詞は禮儀なり。汝が詞は血氣なり、と人々戒めけれ共、吾思ふ子細有ればこそ、とて夜の更るを待ちて從者一人打連れ、窃に城際に忍び行く。茂りたる桑の木の下に蹲く者あり。近くなりて、それ遁さじ、と二人鎗を執りて懸るを、才兵衛一人は突伏せ一人は追散し、首を從者に持せ城に忍入りて、生て歸る事萬に一つなり。此有樣を兄に語れ、と云ひて堀に添ひて行く所に、夜廻すると覺しくて打過ぐる。其跡に附いて行けば振顧みて、名乘れ、とて弓に箭を交ふ。才兵衛小聲に、敵の忍後より來るぞ。爰に待ちて打たん、と言ひつゝ歩み寄り、一丈許になりける時鎗を取延べて敵の弓弦を突切りて其鎗を取直し、諸膝疼いで打伏せ上に乘懸り、汝能く聞けよ。吾殺さんとには非ず。云々の子細有りて忍び來りしに、行會ひたるは天の祐なり。汝死なんとならば吾汝を刺殺し、自害せん。それは益なし。吾に隨ひ來れよ、と言ふ。彼士怒つて、既に斯く成りし上は命生きんと思はんや、とて、疾刺殺されよ、と云ふ。才兵衛聞きて、二人空しく死なんより生きて功有

として降參を勸めらる。船戸、是は物慣れたる人然るべし、と辭し申しけれ共、汝疾く行向へよ、と仰せられしかば、船戸方三四寸許の小き鐵の板を造らせ、懐に入れて水口に行き長束に逢ひ、降參あらば士卒も別の事候まじ。此旨よく申せと申すなり、と言ふに、長束、阿濃津の城攻して關ケ原にさせる軍もせで口惜く候。さらば此城を枕にせんと手の者共存ずる處なり。然るに降參せんは恥辱にて候、と言へば、船戸、長束が側へ立寄て懐より鐵の板取出し、焼きて給はり候へ。三左衛門尉が詞今斯く申す所僞無き印に、鐵火を執りて見せ申さん、とて思ひ切つたる體實にも僞ならざりしかば、長束感じて、假令誑られて如何にならんも力なし。汝が仕業類無きによりて降參せんずるにて候。是は見苦しき物に候へど進らす、とて貞宗の脇指を與へけり。船戸尚座を立たざりしかば、長束小姓をよんで硯取出し、降參すべき由書きて船戸に與へしかば、船戸歸りぬ。長束城を出でければ警固の兵を入れられけり。

○渡邊才兵衛武功の事

佐和山の城を圍む時、堀尾信濃守通晴、渡邊喜兵衛を呼んで、凡城を攻むるに敵の虚實土地の要害具に知らでは叶ふまじ。如何にもして生捕をせばや。汝事よくせんや、と言はれければ渡邊、首

り。後藤が旗本敗北し、敵に押隔てられ、丸山の北、細畷にて返し合せ、敵一人討取り、胄に刀を添へ分捕しけれども胄をも棄ててけり。敵慕ひ來りければ大坂へ引取り、手叶ふまじ討死せん、とて駈出でしを、伴野次左衛門、佐竹安大夫、本多小右衛門も續きて鎗を合せんとするに、深田にて敵懸り兼ねたり。伴野、いざ是迄よ、とて佐治を捕へて引返し、道明寺と平野の間にて、眞田に行合ひて遁れ得たり。其後流落し仕へを求め、貧しくして江戸柳原の町家の裏少ばかりの所を借りて、妻と二人在りけるが、京都に赴く。妻殊に哀なる體なりしを、近隣の者共心を附けて勞り、日を送りしに、如何なる事にて京には行かれしぞ、と問ふ。池田の御家新太郎少將の祿千石賜らんとの事なれ共、二千石ならば奉公すべし、とて其爲に京へ行きたり、と答ふるを聞きて、千石ばゝと異名して嘲りたりしが、程なく從者十人許引具し、馬に乘りて煌なる士來りて、吾は佐治なり、とて妻を迎へ、近隣の者に夫々に土産し、妻を心附けたる禮を述べて、池田の家に仕ふとて去りけり。

○長束大藏大輔降參の事

關ケ原の軍敗れしかば、長束大藏大輔正家江州水口の城に引籠りしを、國清公、船戸帶刀を使

佐治縫殿は近江甲賀郡伊佐野村の人にて、父を左京といふ。秀吉の爲に城を落され流落して、縫殿九つの歳富田信高に仕へ、十四にて四百石與へられけり。津の城に籠る時十六歳、名を善大夫と云ひけり。八月二十四日京口清嵐寺の三の丸を燒拂ひ、敵攻入りけるを防ぎ戰ひて、信高本丸に引取りたれども、分部左京亮も未來ず。家老物主も來らざれば信高天守に上り、自害せんとて物具を脫ぎ、佐治に、汝介錯せよ、と下知せられしを押留めたる處に、分部、富田五郎右衞門、同主殿、上田吉之允も二の丸に引退く體見えければ、信高上帶しめ直し、佐治を天守より使に遣られけり。大手の門、矢倉、廣間の前屛重門の左にて、毛利秀元の士柴母衣懸けたると其外五六人と、上田吉之允鎗にて渡り合ひ居たる處に行懸り、詞をかけて敵を追立つる。母衣かけたる敵大手の門潛へ引退くを追つつめ、兩人にて討取りたるを、信高天守より見られけり。後城に籠られし時、著られし甲冑と白河原毛なる馬に小鞍といへる作の鞍鐙を添へて佐治に與へらる。其明の年佐治、富田の家を出て筑前中納言秀詮に仕へ、其家滅びて黑田の家に仕へしを富田禁錮せられしが、大坂陣に後藤に招かれて士三十騎の將となり、五月六日道明寺の軍に寄手の物色を見んとて、谷川筋に出づる處に、東より來る物見武者に行逢ひ、卽ち討取りて胄首を得たり。是後藤が手の一番首な

常山紀談　巻之十五

○伊勢國阿濃津城軍の事附佐治縫殿が事

毛利秀元、吉川廣家、富田信高の阿濃津の城を攻むる時、城兵城の乾の隅に有りける伽藍を焼拂ふ所に、俄に風變りて焔を城に吹きかくる。寄手是に乗じて、いざ打破らん、とて宍戸備前守隆家先駈して攻入りけるを、分部左京亮政壽城中に加勢有りしが、切つて出で宍戸と戰ひ、互に痛手負ひたり。信高本丸の大手に進み出で鎗を合せて相戰ふ。斯る處に容顔美しき武者緋威の物具中二段黒革にて威したるを著、鎗を提げ來り、富田が矢面に立塞り支へ戰ひたり。秀元の兵中川清左衛門といふ者を討取りたりといへり斯くて富田門に入る時、彼の武者を見れば殿は恙無く渡らせ給ふか。討死、聞きて彫は女なりとも男に劣るべきやとて出候ひしに、と言ふを聞けば信高の北の方なり。信高の北の方は浮田安心信高驚きて且悦び打連れて城に入り、今日の有樣類稀なり、と云ひ合へり。其後尚野の本の女也食上人和平を取計ひ、信高城を出でけるに、程なく東照宮、伊豫の宇和島にて十萬石下し賜はりけり。

體の無かりければ、助左衛門、阿濃津へ加勢有らん事尤望む所なり。敵阿濃津を攻めて其後爰に攻め來らん。若阿濃津落ちざる前に東方の味方來らば敵敗北せん。其時は古田が士は敵の旗をだに見ず、富田が力にて松坂を持ちたりなど人に笑はれ候べし。又加勢有らば隣國相援ふの義に叶ひ、又阿濃津にて敵を防ぎしは、古田が加勢の故なりと世に申すべし、と勸めて五百人の軍兵を阿濃津に遣りけり。軈て重勝の領地の百姓の中に大家なる者二十人を士として城に籠せ、後に百石の地を與ふべし、と約しけり。是人實の心にて百姓を騒せじとの術なり。關ケ原の亂治りて後、重勝約に背かんとせられしかば、助左衛門、信を失ふは君の道に非ず候。斯る言葉は金石よりも堅くすべき事なり。是より後又欺かんとて百姓共何事も聞き入れ候はじ。信無くば立たずと申す事の候。臣が祿地を分ち與ふべし、と言ひければ、重勝約の如くせられけり。

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝびかへる浦島の波

幽齋田邊の城を守られし時、勅命により三條大納言實條卿へ附し傳へられしに、一首の歌あり。

いにしへも今も變らぬ世の中にこゝろのたねを殘す言の葉

○古田助左衞門思慮の事

古田助左衞門は古田兵部少輔重勝に仕へて祿千石を受く。景勝を征伐の時、重勝伊勢の松坂の城に助左衞門を置かれけり。三成兵を起せし時、大坂の重勝の屋敷を取圍み、松坂の城を渡さずば重勝の北の方を殺害すべし、と言ひ送りしに、助左衞門、此城は殿の仰無くて人に渡さん事存じも寄らず。若さ非ずば北の方害に會ひ給はんとや。誠に悼しき事なれ共如何にせん。妻子の死するが悲しきとて城を敵に渡せしと、殿を人讒り申すべし。運盡きたらば死を潔くする事、弓箭取る身の習なり。人々は大坂の屋敷にて如何にも成り候へ。敵變て城に寄來らば散々に軍して討死し、冥途にて對面せん、と大坂の屋敷に云ひ送りけり。斯る處に重勝も東國より歸り來り、松坂に立籠る。此時富田信濃守信高阿濃津を守られしが、加勢を重勝に乞ふ。兵を分ち遣るべき

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝび返す浦島の波

幽齋返に、

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてだに見ずかへす波哉

一說、藤原公國卿早世ありて、其子實條卿幼かりしかば、和歌の口傳を幽齋に傳へられけり。後に幽齋實條卿を田邊の城に迎へとりて養育し、悉く授けられしに、古今集の說は未傳へられざる中に朝鮮征伐の起りしかば、弓箭取る身は討死の程計り難し、とて古今傳授の事書きたる書の箱を烏丸大納言光廣卿へ贈られ、預け參らする間、朝鮮に渡り若討死せば實條卿へ渡し給はり候へ、とて添へられし歌、

人の國ひくや八島も治りてふたゝびかへせ和歌の浦なみ

もしほ草かき集めたる跡とめてむかしに返せ和歌の浦波

光廣卿の返に、

萬代をちかひし龜の鏡しれいかでかあけんうら島がはこ

其後秀吉遺言して、豐後臼杵を幽齋の男忠興に換へ與へられしかば、光廣卿より筥を返すとて、

と縁者たりしかば田邊に行きて。大敵に圍れしかども、持ち堪へしは偏に孝和が智勇逞しかりける故なり。

○田邊城勅命に依りて和平の事附細川幽齋古今集傳授の事

大坂の軍兵一萬七千を以て田邊の城を攻る。細川忠興は奥州に赴き、父幽齋城に有り。三刀谷孝和大剛の人にて度々切つて出で防ぎ戰ふ。幽齋和歌に長じたる人なり。古今集の秘訣爲家卿の記されしを殊に祕藏せられしが、兵火の爲に焚けん事を桂光院知仁親王慮らせ給ひ、使を以て、彼の古今集、源氏物語を禁裏に參らせよ、となり。又烏丸大納言光宣卿勅命を奉りて城に赴き給ふとも言へり。則其書を奉るとて、

いにしへも今もかはらぬ世の中に心のたねを殘す言の葉

又烏丸光廣卿の許へ封じたる歌書をやるとて、

もしほ草かきあつめたる跡とめて昔にかへせ和歌の浦浪

斯る處に前田德善院を禁裏に召し、田邊の城攻和平の事を勅命有りければ、寄手圍を解きて幽齋城を出でられけり。光廣卿幽齋の許より送られし書未だ封を開き給はざりけるが、返、

の爲ぞ、といふ。源二、殿に問れて間を打たずといはんは快からず、と言ひしかば、村上、旗本の使に先陣の間を打する事は有るまじ、とて村上靜に出でて竹を間竿に切り一間づつ打つ。源二先へ廻り靜に一つ二つとさし終れば十一間半也。大島、村上進退の振舞見物なりし、と云ひ合へりしに、源二は二十二歳、伏見落城の日討死しけるとぞ。

○三刀谷監物田邊城に籠る事

三刀谷監物孝和は其先祖承久の亂に軍功有りて、出雲の三刀谷の鄕を賜はりけるによりて氏としたり。其末雲州尼子の旗下に屬しけり。孝和が父彈正左衞門久扶、毛利家に奉公しけるが、後仕を止めて終りぬ。孝和は吉田兼治に賴りて吉田に居たりしを、關ヶ原の時安國寺、北村五郎右衞門を使にして招きけれども聞入れず。細川幽齋の丹後田邊の城に行きて力を合せんとす。從者共、奥州は大國なり、景勝は勇將なり。如何で容易く破るべき。西國一同に石田に與し候ひぬ。德川家の危き事近きに候に、何とて安國寺が招を辭み給ふぞ、と云ひけるに、孝和聞きて、石田、島津に叛かせ、內府を引附け軍を起させ、後にて京大坂を取り占めん謀こそ然るべけれ。德川家の領國其便よき會津に手始をしたるは無謀なり。三成必定勝つべからず、とて吉田家は幽齋

き、とて甲冑太刀刀悉く返し遣す。夫より年毎に、冬綿厚く入れたる衣五領、使者に持たせて遙々と水戸に贈り遣し音信を通ずる事、忠政が一期の程終に忘らず。水戸公此由聞し召し大に感じ給ひ、鳥居が使者の來るべき前、道梁を修理せさせ、重次に客儲すべき魚鳥樣の物賜ひけるとぞ。

○村上三右衞門大島源二武者振の事

筑前中納言秀詮、先陣の士大將平岡石見、松野主馬各祿一萬石なり。伏見の城攻に、主馬が仕寄の竹把を城中より火箭を射かけ燒きたりしかば、其所を退きて竹把を附けんと言共、村上三右衞門聞入れず。燒跡に竹把を附けずしては有る可からず、とて主馬と相謀りて竹把を附直し、竹把の上に壁土を塗るべき用意しけり。主馬、外に出る事を嫌ふ人々は、士たりとも内にて土を揑ねられよ。又土を塗りたらん者には、中間下人なりとも士とせん、と下知しければ、下部八人出て土を塗りたりしかば、其後竹把を燒かざりしとなり。旗本より大島源二といふ者使に來り、仕寄場より堀端まで間數幾許か有る、と問ふに、村上、間を打ちては見候はず。凡十二間許もや有らん、と答ふ。大島、とてもの事に間を打たん、と言へば、城近く箭玉の飛び來る所に強みを出して何

元忠の首を大坂京橋に梟せしを、京の商人佐野四郎右衛門と云ふ者鳥居に親み有りしが、斯る忠義の人の首を悪逆の罪人と同じく晒す事や有る、とて夜深て盗取り智恩院に葬りて、一字を建て龍見院と名附けしかば、石田聞かば必定刑罰すべし。詮なき事なり、と云ひける者あり。佐野、吾久しく恩を受けし身なれば、白刃を蹈むまでこそなからめ。是程の事は人の義なり。義無きは禽獣なり。人生れて死せざる事なし。刑罰に會はん事些とも惜からず、とぞ言ひける。雑賀孫市後水戸中納言家に仕へたりしが、或時中介を以て鳥居忠政の許に云送りけるは、重次昔伏見の城にて、元忠の御最期に參り合ひ、其時の御物具吾家に取り傳へ候ひぬ。先考の御形見にて候。御覧ぜん爲返し參らせ度くこそ候へ、といふ。忠政悦んで、亡き父が形見是に過ぐべからず。一目見ばや、と答ふ。重次自ら携へて行き向ふ。忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招じ、亡父に再對面の心地す、とて涙を流し、甲冑太刀刀おし板の上にかき据ゑて是を拝し、さて今日重次を甕せし有様誠に美盡せり。其翌日重次の方に使を立て、昨日の見參を謝す。又重次の御志によりて父が最後に帶せし物具再び見候事、返すぐ〳〵も悦び入存候ひぬ。忠政が家に傳へし父が形見に見るべき物も少からず。見苦しうは候へども、此物具重次の家に留めて御武名を子孫に傳へられん事、弓箭の道には良き御遺戒にもや候べ

賜はり候はば忝しとも申すべし。疾く城を出でよとは武將の詞には有る可き事とも存ぜず。疾く寄せられよ。討死せん、と答へしを返りて長盛に告ぐる。側に渡邊勘兵衛有りしが、熟々聞きて感じ入りて頻に涙を流しければ、長盛も我も惜き人を殺さん事の嘆かしき、とて共に涙を流しけるとぞ。斯くて三萬餘の寄手四方より攻めけるに少しもひるまず。十日餘防ぎけるに、甲賀の者内通して七月晦日の夜、松の丸に火を懸けしかば、寄手力を得て攻入りたり。内藤は精兵の手利にて、差詰め引詰め射ける矢に死人數を知らず。終に内藤父子も討死し、主殿頭五左衛門を始として殘なく切死にぞしたりける。元忠本丸に有りて門を開かせ、門際より六七間退りて、士卒三百餘白刃を抜き揃へ、靜り返つて待ちかけたり。寄手しばし攻入り兼ねてためらひけるに、元忠大音あげ、一人にても敵を討ちて死するぞ士の志なれ。吾三方ケ原にて足に手負ひ行歩心に任せざれども、逃げんとせばこそ足をも賴まめ。いざ最後の軍せよ、と下知する聲を聞きて、一同に切つて出で面も振らず戰ひて、一人も殘らず討死しけり。元忠戰ひ疲れて女關に腰をかけ、息つぐ處に雜賀孫市重次死骸を踏越えて進み寄れば、吾は鳥居彦右衛門よ。首取つて高名にせよ、とて物具脱いで腹を切りたりしかば、雜賀其首を取りたりけり。本丸に二つの門有りけるを、大手の外は皆堅く鎖してければ、一人も逃散る者なく討死しけるとぞ。後

事ならずして變の出來ん時は、近國に援ふべき味方も候はず。今の十倍の軍兵を殘し置かれたりとも防ぐべきやうは候はず、と申しけるに、東照宮默して御座せしが、稍有りて、駿州宮ヶ崎にて十一に成りし時、彦右衞門は十三にて初て出でたりしよ。年久しくもなりぬ、とて御物語に夜いたく深けければ、元忠會津の御留守世に變なく候ひなんには、復御目見も仕りなん。若し事有らば今夜ぞ永き御別にて候、と申して座を立兼ねたりしに、東照宮御袖をもて落つる泪をおそひてぞ御座しましける。斯くて石田兵を起せしかば、伏見を攻むべきや、と評定しけるに、增田長盛、城固うして而も内府の内に名高き者共あれば、容易く落つべからず。先謀りて見ん、とて山川半平を使にしけり。元忠對面すれば、增田が申し候には、今度輝元、秀家、景勝德川殿と弓箭をとり、九州中國の諸大名皆同心せられ候。斯れば此城を請取り申すべし。長盛久しく德川殿の御親み深く候へば、此事然る可しとは存候はねども、思慮の及ぶべきに非ず。伏見の城は太閤築かれ候て、今德川殿姑く預りて御座しませば、德川殿の城と申すべきに非ず。疾く城を出でて内府に忠を致さるゝ道有らんと存ずる由言ひ遣りければ、元忠聞きて、過ぎし頃内府會津に向ひし時、固く守り候へと申して候に、敵に渡し候事は存じも寄らず。增田殿は内府に親有る故、斯る事を述べらるゝ旨心得られず候。若おめ〳〵と城を渡さんに、同じくは城を枕にせよとの使

○立花家足輕鐵炮の用意附細川家口藥入吉田大藏猿頭の事

立花宗茂大津の城攻に足輕に繩襷かけさせ、其繩目に玉藥の早合を挾ませて、箭を交ふよりも早く鐵炮を搏たせられけり。

又細川家の鐵炮は、口藥入を革にて今世の鼻紙帶の如く造りて用ふ。事の急なる時指にてひねり入れて利あり。又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手練の射手あり。常に矢を取りて俄に出づる時、十筋も持ちたき事の有るに、腰に差せば走るに落つるとて、革にて角袋造りて緒を附け腰に下げ、それに入れて腰に差しけり。其名を猿頭と名附けたり。

○伏見落城の事附鳥居忠政雜賀孫市を饗されし事

會津に向はせ給ふ時、伏見の城には、本丸に鳥居彦右衛門元忠、二の丸には松平主殿頭家忠、松平五左衛門、松の丸には内藤彌次右衛門家長を置かせ給ひ、六月十六日東照宮打立ち給ひ、十七日伏見の城にて鳥居を召し、今度士卒少くして殘り止る事を仰せ有りしに、元忠、臣が存ずる所會津は强敵なり。一人なり共召具せられて然るべし。伏見には臣一人にて事足り候。世上無

めける敵兵大垣に到る程ならば、關ヶ原の軍危かるべきに、九州の大軍を數日隔てられし故、我軍の援となりし事、大津城中の軍兵殘りなく關ヶ原に來りしよりも遙に優れり。敵より乞ひたる和平なれば恥に非ず、と仰せらる。大津にての事なれば近江にて四十萬石賜ふべし、となりしに、高次聞きて、斯く賞せさせ給はば、關ヶ原にて大功の人には百萬石を賜はるべきか、思も寄らず、と固辭申されけり。

一說、關ヶ原の軍敗れて、東照宮大津の城に入らせ給ふ。山岡道阿彌奉しけるが、京極宰相よく持堪へ候に、今少の事にて本意を遂げず、と申しければ、御答なく奧平が長篠にて武田を防ぎしに、戸障子に鐵炮の玉の痕鹿の子をゆひたるが如く、土も落ち板も脫けたるを、筵を張り疊を立て持堪へたり、とぞ仰せける。又高次の使者多賀孫左衞門大坂に參りけるに、御前に召して京口の族を早く絞りし故、敵攻入りたる、と聞召す由仰せ有りしかば、口惜く存候由いひて淚を流しけり。さて井伊、本多に向ひ、下部の申す木履に雪の附きたる如くなる御出馬に、破行燈の如き城に高次なればこそ數日敵をば支へ候へ、と言ひければ、戲れながら理なり、とぞ答へられしといへり。

○十時傳右衞門山田三右衞門死骸返の事

立花宗茂使を城中に立てて、今日味方討死の中に十時傳右衞門と申す者あり。取り別きて不便に存ずるなり。骸を返し給はり候へ、とて物具の色を書きて云ひ送られしかば、悦て返しぬ。又城中よりも、山田三右衞門が首を返し給はれ、と望まれしかば、胄を添へて送られけり。此を大津の死骸返とて、勇士死後の譽としたり。

○高次大津の城を出でられし事

高次大津の城を守りて固かりければ、高野の木食上人を以て和平を執行ふ。高次更に同心無かりしに、さしもの長臣黒田伊豫、寄手に心を通じければ、力なく和平して城を出で、京都大佛の養源院に立寄り、それより高野に赴く。（闕ヶ原記に三井寺に立寄るといへるは謬なり）三成亡びて後、東照宮高次を召しけるに、今度諸將皆大功有りし人々なるに、吾城一つ守り遂げざりし身の立ちまじらん事口惜し、とて出でられず。又使を以て御物語有りたき事あり。尚出られずば我行かん。年老たる身を勞せられんよりは若侯に、と仰出されしかば、高次辭し難くて出られけり。東照宮、此度城を攻

倉に與して吾を敵となす。なれる果を見よ、と罵らるゝに、淺井居直り、事新しき事を承り候もの哉。義景を別事なく立置かんとの誓文、其血も未だ乾かざるに越前に軍を出し、是により長政義の當る處にて義景に與したり。今日城を出でよ。疎意有らじ、と僞りたる詞を押しはかり、只自害と一筋に決したりしに、若天運により家を立つるならば、信長を斯の如く搦めんと思ひしに斯く成りたり。義を知らず恥を知らざるは信長こそ人面獸心なれ、といへば、信長彌怒りて、汝詞にも似ず、生捕れたるは如何に、と罵らるゝに、年老ぬれば力に及ばず。昔より士の生捕となる事恥に非ず。武勇を以て敵を討ち得ず。僞りたばかりて人の國を亡すこそ恥なれ。見られよ、必ず下人に首を切らるべし、と罵り返せば、信長杖を以て打たれしに、石見打笑ひ、搦めたる者に斯るはからひ、天晴良き大將の禮儀かな。如何程も打てや犬坊、と罵りけるが、石見も美作も終に殺されけり。

伊豆幼かりしが僧と成りて多賀に匿れ居しに、十二歳の時多賀明神の鳥居の邊にて遊びける處を、いづれの家の士にや十二人打連れて通りしに行當る。士怒つて、小僧め無禮なり、とて拳にて頭を打つ。伊豆飛び懸り、其士の刀を抽いて只一打に切りはなし、つと走りぬけて赤尾に匿れ居たりしが、後京極に仕へけり。

て押寄する處を、八十餘人の兵ども麥を限りと面も振らず突きかゝる。赤尾靜に緒を締終りてつと立上り、赤尾伊豆とは知らずや、と名乘りて、亂れ入る敵を念なく突退け追出す。少齋矢倉より鐵炮を嚴しく打出させければ、立花の勢も餘に手いたう防がれて引退く。斯くて少齋跪いて鎗の穗先を門の潛戸に當てて、一人づつ靜に入れてけり。斯くするは無禮に候へども門を守る法なり、といふ。皆入終りて伊豆と平野と二人門外に殿して殘りけるが、平野は赤尾に、先づ入れよ、といふ。赤尾は平野に、汝先入れよ、とて終に赤尾後れて入りけると云へり。

赤尾伊豆は美作が子なり。信長に滅されて、

信長江州小谷の城を攻む。淺井長政勢盡きて既に自害せんとする時、不破河内を以て、緣者の好降參あらば疎意あらじ、と云はせらるゝに、長政降參すべき志に非ざるを、近習の士共、よも別の子細も候まじ。城を出て運を開かれ候へ、といふ。さらば父下野守も共に疎意無くば降參せん、とて城を出づるを、信長見て、長政何の面目有りて今更の降參ぞ、と高聲に呼はらせられしかば、長政忿りて赤尾美作が宅に入りて自殺せり。淺井石見、赤尾美作、いざ切死せん、とて駈入りけるを、多兵押隔て生捕りて信長の前に出す。信長、汝等長政を勸め朝

弓箭取る身の詞なり。爰を逃けんとは口惜しき事よ。大剛の伊豆が弟に汝が如き人の有りけるこそ怪しけれ、と罵りけり。内田は銀の馬櫛を冑の立物にしけるに、銀の馬櫛よと褒めける程の物師なり。敵今村掃部が持口を破りて亂れ入りしかば、伊豆ふり返り見て、三の丸は取られし、とて引返す。人々、敵既に攻入りて入るべき方なし。京洲の丸より入らばや、といへども伊豆少もひるまず。初出でたる所より入りなんこそ由々しかるべけれ、とて鎗を提げて敵に向ふ。伊豆に從ふ者四十五人、下部は皆逃散りて、伊豆が若黨一人、平野藤兵衛と云ふ足輕一人殘り留まれり。伊豆群立つたる敵を物ともせず、蜘手十文字に追立て、散々に戰ひけるに、敵尚烈しく進み來りしかば、尾關甚右衛門、銚子五郎兵衛二人土橋の上にて返し合せ、大音あげて、存ずる子細ありて討死するよ。寄つて首を取れ、とて面もふらず切死にぞしたりける。其隙に赤尾そこをつと行過ぎて城際に至る。門の外の柵に簀戸有り。赤尾簀戸を締めよ、といへば、平野靜に簀戸を締めたり。門を開けよ、といひしかば、少齋法師武者にて門を固めて有りしが矢倉に上り、味方とは知りたれど敵附入りにすべし。人は輕く城は重し。爰こそ死すべき處なれ。華かに討死せられよ。是より見物せん、といふ。赤尾石に倚りかゝりて息を吐き、九尺許なる鎗を下に置きて脚胖の紲を結び直す。敵簀戸を破り

白熊の雪の如くなるを冑の上に亂しかけ、十文字の鎗を横たへ、尾關甚右衞門と共に亂れ入る。敵五六人突伏せて冑の鍬を傾け、一足も引くまじいぞ、と呼はり討死したりけり。事ふる君は異れども、賜ひたる白熊にて、敵味方の目を驚す討死をぞ遂けたりける。尾關は元柴田勝家に仕へしが、後高次北國より歸られし時、尾關を近づけ夜酒を酌みて密に囁かれけるは、吾石田に與するに非ず。歸りて大津の城を守らんと思ふなり。敵の眞中に小勢を以て軍せん事尤難き事なり。汝が智勇を賴む、と語られしに、尾關淚を流し、人々いくらも候中に、何と思召されて斯仰せ候ぞや。此上は二つなし、と答へければ、高次、汝討死すべきや。我爲に命を捨てんと思ふ者多けれど、謀を同じくする者稀にこそあれ。汝偏に討死とのみ思へるは吾志に非ず。といはれしかば、尾關、斯く身に餘り候御詞を承りては、骨を刻まれ候ほどの堪へ難き事ありとも、此恩に報じ奉らん、といひしが、此時銚子と倶に戰死せり。後高次城を出でられける時、赤尾と山田と高次の輿の左右に供しけるを見て、寄手の軍兵指をさし、彼の大膽者よ、と云ひ合へり。

一說に、伊豆茨川口の敵を追拂はんとて出でける時、跡をば弟の久助、内田太郎左衞門、多賀孫左衞門等守りけるを、寄手きびしく攻むる。久助手負ひて、吾は本丸に引退かん、といふ。内田聞きも敢ず、昔熊谷が子の直家薄手ならば討死せよ。痛手ならば自害せよといひし事、

せたり。此を山田大炊が茨川口の鎗と世に稱しけり。赤尾は猩々緋の羽織を著て長身の鎗にて數人突伏せ、山田三右衞門も散々に戰ひけるが討死せり。二の丸に引取る時、山田と赤尾と代る代る六度まで返し突拂ひたる殿の振舞、目を驚しけり。二の丸の門際にて、赤尾、山田已下蹈止りける時、唯少齋門をたて關貫をさす。赤尾ちつともひるまず、長身の鎗を傍に置き、敵の方へ足を投出し草鞋の紐を結び直す。其武者振を敵見て少したぢろふ時、少齋門を開けば中に入る事を得たり。赤尾、棄殺さんとしたるよ、といひしに、少齋、敵追縋りて二の丸に攻入らんとする故にこそ門をさしてけれ。各を助けん爲に城の危きを忘るべきや、といひければ、さばかりの伊豆も答ふるに詞なかりけり。黑田次郎兵衞、尼子宮內、安養寺長門、三田村安右衞門、今村掃部、赤尾久助、中井民部、小豆掃部、油井周防等は京口を防ぎけるが、三の丸へ攻入り、敵と戰うて討死少からず。銚子五郎兵衞は始め關白秀次に奉公せしに、飽まで酒を好きけり。或時朋輩に語りけるは、殿下の側に立置かれし白熊、色白く丈長し。あはれ胄の上に亂しかけて軍の先駈せん物を、といひしを秀次聞きて銚子を呼びて、是を着に酒を呑め、とて彼白熊を與へられしかば、銚子、誠に有難く存候。戲れに申せし詞知召されて候やらん。若し此の後軍の有らん時先に申せし詞を如何にせん、といひけるが、今日栗色のしほ革に金の筋附けたる羽織を著、彼の

ども江戸大納言殿にも縁有れば、人の疑を散ぜん爲に幼息熊若丸を人質に出され候へとなり。高次、輕々しく敵の色をも立て難し、とて止事を得ず熊若丸を出して北國に軍を出されけるが、岐阜の城落ちたる由を聞きて、北國に向ひたる人々大垣を指して引返されしかば、高次北の庄より直に海津にかゝり、九月二日の夜半に大津に歸り、立花宗茂、筑紫廣門、粟津に陣せしを夜討にせんと謀られしに、黒田伊豫同心せずして止みぬ。さらばとて關寺の門を閉ぢ城下の兵粮を取入れ、專ら防禦の支度せられけり。宗茂、廣門、石部より引返して勢多に陣取り、鍋元の陣代毛利元康等は三井寺に陣し、久留米秀包、南條中務を始として三萬七千餘四方より押寄せたり。中にも宗茂の軍兵は激しう攻めつめて、死人をふみ越えて乘入らんとす　防禦ねて京口の族を絞りければ、多賀出雲守眞先駈けて塀を打破り、三の丸に關を作りかけてひた〳〵と押入りけり。山田大炊、赤尾伊豆、足輕頭には井口左京、大橋肥後、安養寺門齋、使番山田三右衞門、横山久内、田中茂兵衞、茨川口を固めたるに、京口より敵亂入りしかば、二の丸指して引退く。高次使を以て、何とて三の丸を捨てて早く二の丸へ引取るや。仕寄を附けられなば、防ぎ難かるべし。早く敵を追出せ、と下知せられしかば、門を開いて切つて出る。山田大炊十文字の鎗の鞘を片手に取つて胄の上にて振廻し、參る〳〵と呼はり懸けて、一番に鎗を合せ敵二人突伏

に乗りて美濃に攻入り候へかし、と云ふ。長政聞きて、一度約して變ぜん事本意に非ず、とて聞かざれば、直繼再び柏原に赴き、信長を饗し、信長無事に岐阜に歸られたり。直繼常に是を悔みける故、姉川にて獨進んで信長を討たんとしけり。

其次に出せる首を見て、是は安養寺が弟にて彦六甚八と申す者にて候。死なば一所と契りしに、先立ちつる事こそ口惜しけれ、とて、首を刎ねられよ、とて其後は物も言はず。斯る所に秀吉其比は藤吉郎と云ひしが、栗毛の馬の汗かきたるに諸鐙を合せ、白沫噛せて馳來り、いざ小谷へ押寄せ攻破る可き、と言ひしに、信長、否とよ。輕々しき軍は危し、とて許されず。秀吉、後悔有らんものを、急ぎ寄せ給へ、と强ふれ共、信長聞入れずしてさて止みけり。安養寺は、只首を刎ねられ候へ、と言ひけれども、吾に奉公せよ、とて樣々宥め申されけれども降參せず。遂に許されて小谷に歸りけり。安養寺に謀られて信長軍を返されしかば、淺井三年經て小谷の城落ちたり。其後安養寺、淺井と京極と一族なりし故高次に仕へけり。若き時三郎左衞門とぞ申しける。

○大津城合戰京極家の士戰功の事附赤尾伊豆が事

高次は關東に素より心を寄せられしを、大坂より朽木河内守元綱を使にて、秀賴公の外戚たれ

たん者は吾なり、と言ひしが、言ひつる詞に違はず首を刀の鉾に貫き、大將の實檢に供へん、と云ひて、信長の旅本に來りけるを久作討取つたり。久作兼て、必ず遠藤を吾討取ん可し、と人指したりけり。如何なる故ぞ、と問ふに、其子細二つ有り。我江州にて遠藤と相知り、能く見知りたり、是一つ。彼は聞ゆる剛の者にて、力あくまで優れたり。常に進むに先だちて退くに後る、是二つ、と言ひしが、果して直纖が首を得たり。

竹中聞いて、首一つ提げ、殿は何處に座ますぞ、と云ひて近き進み來りしまゝ、敵の紛れ入りて、殿を切り奉るならんと思ひ、引組んで討取りし、と語りければ、夕部大依山にて若し軍破れ候ならば、必ず生きて歸らじ。信長を一太刀恨み申さん、と遠藤が言ひつるが、果して其詞の如くなりきといふ。

遠藤は淺井家に名有る剛の者なり。信長江州佐和山にて始めて長政に對面あり。公方昭義の歸京の次に、佐々木承禎を攻打つべき事を議し、長政も力を合す可き由の約を定め、岐阜に歸らるゝとて江州柏原に宿せらる。淺井縫殿、中島助九郎、遠藤喜右衛門、三人馳走の爲柏原に行きしが、遠藤早馬にて小谷に歸り、信長を見るに武勇猛にして謀遲しき人なり。淺井家を覆すべき事疑ひなし。今日決斷せられ候へ。臣信長を刺殺し申すべし。其勢

處なり。搦め取りて關東に奉らん、と云ふ。黒田聞きて、三成を生捕るとも、西國の諸將大軍にて攻圍むべし。爭か防ぐ術の有る可き、とて聞入れず。門齋冷笑ひ、三成は譬へば亂の首なり。其餘は手足の如し。首を碎く程ならば、手足何の恐の候べき。假令押寄せ候とも固く守りて戰ふべし。軍せずして三成を生捕るならば、天下に名を揚げ勳功誰か並ぶべき。吾年老ぬれど三成を搦めん事は容易からん、とて今村掃部をも勸めしかども、爭論に時移りて、三成城を出でにけり。門齋は元淺井長政に仕へ、姉川の軍に生捕れ、龍ヶ鼻の陣にて信長の前に引出す。信長の曰く、今日勝に乘りて小谷を打破らんと思ふは如何に。汝が命を助けなん。此勝敗如何なる可き、と問はるゝに、安養寺承り、長政が父下野守小谷に有りて、其兵三千許もや候ひなん。然るに疲れたる兵を以て輕々しく攻められ候はん事然る可からず、と申す。信長打頷いて、今日取りたる首共出して、安養寺に見せて其姓名を問はるゝ中にも、竹中久作が取りたる首を見て、遠藤喜右衞門直纘と申す者にて候。如何なる有樣に候ひし、と問ふ。

久作は元齋藤家の士信長に奉公しけり。姉川にて淺井の士遠藤喜右衞門直纘云ひけるは、信長晝は固く守り、夜々横山の城を攻む。信長の本陣龍ヶ鼻を一夜討せば勝利疑なし、といふ。長政是を用ひず。然らば斯る圖を外して淺井の家危き事朝夕にあり。軍敗れん時信長を討

物も中らざりしとぞ。

忠興の北の方形見とや思はれけん、手ずさみのやうに書き捨てて硯の中に入れられし歌に、

先だつはおなじ限りの命にもまさりて惜しき契とぞしれ

落出でたる女房の取傳へて世に殘りけるとなん。北の方は豪て斯く有らんと思はれしかば、幽齋の妹年老て宮川殿と申せしと、忠隆の北の方長の妹とに、吾は人質に取られんと世の物いひの候程に、落失せばやと存ずるなり。同じく伴ひ參らすべけれど、人多くては中々憂き目や見る事の候はん。疾く此隣の築地一重踰えて落ちさせ給へや、とて宮川殿は建仁寺忠隆の北の方と浮田秀家の北の方に忍び行きて、此禍を遁れたりとかや。誠に義烈のみに非ず、謀も由々しき人なり、と語り傳へて袖を濡さぬ人もなし。

○安養寺門齋三成を生捕らんとせし事

附姉川合戰の時門齋生捕られし事竝遠藤喜右衞門討死の事

三成兵を起す時、大津の城に入りて京極高次に對面し、彌秀賴公の味方有る可し、とぞ申しける。高次の士に安養寺門齋と云ひし者、黑田伊豫に向ひ、今三成城中に入る事誠の天の與ふる

齋、殿東國に向はせ給ひし時、思ひかけざる事の有らんには、正齋計ひて武將の恥な晒しそと仰せ置かれ候ひき。敵奪ひ取らんとするならば、其時思召切らせ給へ、と申しけり。斯る處に、城中に入れよ、と使を以て言はせしかば、再三斷の旨を述べけれども聞入れず。七月十七日の未の刻ばかりに、大坂の軍兵五百餘り玉造口の屋敷を取巻きて、疾く城中に入り申されよ。さらずば亂入りて奪取らん、と呼はりけり。女房儕狼狽て泣悲めども、北の方は騷ぐ色も無く、斯く有らんとは兼て思ひ設けつる事ぞとよ。正齋介錯せよ。我生る世に見えざりし人々に、死しての後も見られんはよからじ、とて面に覆面打かけ括袴著て、刀を拔き胸に突き立てられしかば、正齋眉尖刀にて介錯し、其儘其處にて腹を切らんとせし處に、正齋が小姓走り來り、殿の北の方と同じ所に自害有らば、後の誹の候べき、と云ひければ、正齋、餘の悼しさに忘れたるよ、とて障子の外に走り出で、家に火を懸け、石見と共に腹切つて炎の中に死したりけり。伊賀は光秀より附けられし身なれば、遁るべき道も無きに、人に紛れて落ち失せけり。

忠興後に探し出して誅せんとせられけるを、松平忠吉、伊賀は無雙の鐵炮の妙手なれば、助け置きて若者に教へさせん、と强ひて乞はれしかば、忠興力なくて止みけり。伊賀は世の交も無く髮を剃り一夢と言ひけり。百發百中の手練なりしかども、人多き中にては大きなる

常山紀談　卷之十四

○細川忠興の北の方義死の事

細川忠興の北の方は明智光秀が女なり。父謀叛の時忠興に向ひて申されけるは、父ながら斯る企事能く成るべしとも思はれず。瀧川、柴田など申す人々多ければ必ず軍敗れ候べし。女の淺き智慧にも口惜くこそ存候へ。男の身ならんには鎧の袖に縋りても諫め申すべきを力なし。君もし與せさせ給ひなば、世の譏爭でか免れさせ給はん、と涙に沈まれしかば、忠興、光秀に同心無かりけり。其後程經て秀吉伏見に有りて、諸大名の北の方を呼入れて饗されし事の有りしに、忠興の北の方斯と聞き、女の人なくて一間に入りて他人に見ゆる事やある。我も召されんとならば、とて懷に匕首を用意せられけり。此より秀吉の惡行は止みてけり。石田西國の諸將を談ひて兵を起す時、諸大名の北の方を大坂城中に取入れんとするを、北の方聞きて、傅に附けられし河喜多石見、稻留伊賀、小笠原正齋を呼びて、吾此所を出でん事思ひも寄らず、城中に取籠められんは恥辱なり。よく斷を申候へ。猶聞入れられずば是を限と思ひ定むべし、と語られしかば、正

故なく歸し與へざらん間は我心を安んぜず。勝鬨を爭で行ふべき、と仰せられしを、聞く人愈感服しけるとぞ。

れば、商家涙を流し、年比厚恩を蒙りし事なれば、關ヶ原破れぬと聞くより、必ず爰に渡らせられんと相計りて、船を設けて待ち居たる甲斐も無く、口惜き事なり。せめて御供に參らんとて水中に飛入らんとせしを押留め、今の時なれば人心の計り難くて斯くは言ひしなり。實は一方打破りて爰に御座せしなり、と言へば、斯疑はれしは恨なれども、夫を云はんには時移るべしとて、船に乘らせられん樣をこそ、と言ひも終らぬに、義弘來られしかば、酒樽を積み其間に隱し乘せ、其身も附添ひて直に薩摩に赴きし。其者の子の中、一人薩摩に仕へし其子孫なりといへり。

彼老翁薩摩に行かばやと思へども、道遠ければ空しく過ぎしに、程經て人に誘はれ、鹿兒島に行きて笄を出しければ、など疾く來らざりしぞ、とて種々褒し、黃金五百枚與へ、誘ひし人にも黃金數多與へて、人を添へて送り歸されけり。

○東照宮勝閧の儀を延べ給ひし事

關ヶ原の軍敗れしかば、金森法印、とく勝閧の儀式行はれ候はばや、と申しけるを、東照宮、諸將の武功により斯く敵をば打破りたれども、諸將の妻子大坂に人質となりて敵の中に有り。此を事

しに眉尖刀に中り、其玉腰骨にかすりて馬より落ちられけり。さて亂鎭りて後薩摩の許に直政を饗せられしに、直政松田を呼出し盃を指し、關ヶ原にて既に死すべかりし身の幸に存命へて、今日對面する事を得たり、といひて後、我片足をなやみぬ。斯る武功の人に少祿こそ不足に候へ。今日の遇饗に祿を增給はり候へ、と言はれけり。彼の物頭後に、直政の呼出されて對面に及びし時の迷惑なる、一生に覺えず、といひけり。

義弘、近江の甲賀にかゝり、老翁一人案内者にして道しるべさせ、伊賀の山路を經て上野まで行き著かれたり。爰は筒井伊賀守定次の城なり。使を以て、島津義弘唯今打過ぎ候、と云ひ送りて行く處に、野武士四五百人が程山の中に待ちかけたり。義弘物の數ともせず打破り、二人生捕りて上野に立歸り、大手の柵の木に搦め附け、偖て夫より奈良に出で、彼の老翁には刀に差添へられし赤銅の笄を與へ、此を證に必ず薩摩に來れ。今度の勞に報ぜん、とて大坂に至り船に乘り、鹿兒島に歸られけり。

一說に、左近丞と云ふ姓薩摩に有り。是は慶長の頃大坂の商にて、年久しく薩摩の米を商ひける者なり。關ヶ原破れて後、義弘大坂に著かれしに、士一人先達つて彼の商家に行きしかば、彼商待ち佗びたる體にて、君は如何に御座まし候、と問ふ。いやとよ。討死有りしよ、と答へけ

押通る。正武十六才、駈合せんとする處を、梶田又右衛門、死狂する敵に事はせぬよ、とて追留めたり。東國勢押駈けしかば、義弘の從子中務大輔豐久、義弘の馬の側に乘寄せて囁く體なりしが、驚て大敵に駈合せ討死す。義弘今は是迄なりとて取て返されけるに、阿多長壽入道成淳、義弘の馬の前に打塞がり、大將は千騎が一騎に成候ても猶死せずして、謀をめぐらし候を道とこそすれ。疾く打破りて引退き給へ、といふ儘に馬の首を引直し、島津兵庫頭最後の合戰をするぞ、と呼はりて、散々に戰ひて討死しけり。成淳が義に勵まされ、踏止り支へ戰ひ討死する者多かりける。其暇に義弘又士卒を集め、列を整へ引退く時、松平忠吉、井伊直政剩すな、とて追駈けたり。義弘が兵ども種ヶ島の鐵炮を腰に挿したるを抜出し、ひた〳〵と折敷きて打懸けたるに、忠吉、直政共に手負ひて、夫より物別したりけり。

一說に、本多忠勝追駈けたるが、馬を鐵炮にて搏たせ、馬より落つれば梶金平馳來りて、己が馬に忠勝を乘せし其間に、島津が軍隊たるといへり。又河上左京が從者柏田源藏が搏ちける鐵炮に、直政中るともいへり。又松田某といふ朝鮮陣の時連て歸りし小兒の成長したるを組にして有りけるが、鹿の角の立物の胴こそ兵部よ。打留めよ、と下知しければ、鐵炮を差向けたるに、直政眉尖刀を横たへて馬を乘り懸けられしに、彼兵松田某と名乘りて打ち

は石田賓客の如く遇し置きけり。關ケ原の軍敗れし時、中黒唯一騎落行く兵の中に踏止り、散々に戰ひけるを辻見て、いざ討ち取らばや、と言へば、可兒、情無き事をも言ふもの哉。助ばや、と云ふ。辻、さては生捕とや。可兒に好まれて辭し難し、と言捨て馳行く處に、中黒馬を深田に打入れて、諸鎧を合せて更に動かず。辻詞をかけ、日頃の好に助けんずるよ。早く取附け、とて鎗の鞘をさし出す。中黒、斯る際に命助かりても何にかせん、とて已に自害すべく見えしかば、辻、何と謀可きや。神明にかけて偽らじ、といへば、取著きたるを辻主從引上けて陣所に歸る。可兒見て大に悦びけり。さて辻は物具脫ぎて躾になり、仰に打臥して、只今まで敵なりし中黒を物とも思はぬ有樣にて物語す。中黒餘に侮りたるよ、と心中に怒りけれども、命を助けたりし恩を思ひてさて止ぬ、と後に中黒此事を語りて笑ひしとなり。中黒後井伊直孝招きて、祿二千石與へられけり。

或說に、丹羽山城、谷出羽、篠野才藏、稻葉內匠、中黒道陀、渡邊勘兵衞、辻小作、兄弟の約束して武勇を勵み、天下七兄弟と云ひしといふ。

○島津義弘關ケ原退口の事附大坂の商賈義氣の事

關ケ原の軍敗れし時、島津義弘眞丸に成りて、福島刑部少輔正武の陣の前を切抜けんと一文字に

東照宮御感有つて、十五日と指したるは尤なり。巳の刻とは如何に。左馬助承り、敵は大軍なり。巳の刻を過ぎたらば御敗軍と存じたりき、と申しけり。

左馬助は上田善四郎が四男にて、祿四百石、後千石賜はりて御使番なり。

○田邊甚兵衞幼年功名の事

田中兵部大輔の士田邊甚兵衞、十四歳にて關ヶ原に出で、從者敵を突伏せ、田邊を馬より抱下して首を取せしとなり。幼少にて武功世に名高かりければ、黒田長政、田邊に逢ひて大に感賞し、田邊をとりかひたる從者を呼出し、其事を問はるゝに、馬より抱下したるに、刀を抽いて振ひければ恥しめて首を取りたり、と云ふ。長政、さては勇士なり。振はずに懸りたらば途方なき故と言ふべし。恥しめられて首を取りたるは、勉め勵ますによりて勇氣を致す所なり、とて彌褒められけり。

○辻小作中黒道隨が事

辻小作は福島正則に仕へしが、可兒才藏と親しみ深く、共に世に聞えたりし物なり。中黒道隨

に有り。何の軍にや、諸浪人皆働有りしに、三彌手に合はざりしかば、一盃、さしも褒高き人の今日の事は如何に、と云ふ。此答は明日こそ、とて其明の日首二つ取て、昨日の答是なり、といへり。甚だ風流を好み、物數奇賤氣なる事無く、常に身に薫物をとめたり。前田家にも誓有り。慶長元年伏見にて東照宮に仕へ奉りけるが、以の外に直言する人なり。或時幸若八九郎を召され、高館の舞終りて後、武藏坊辨慶は世に優れたる者なり。今の世に無かるべし、と仰せ有りしに、三彌承りて、今の時辨慶は有るべけれども、判官に似たる主君の候まじ、と申せしとなり。大坂冬の陣の時台徳院殿に仕へ奉りけるに、東照宮、三彌は能く拗る者なり、と仰せられけるが、其後一萬石賜りけり。東照宮御前に召出され、如何に思慮したるや。人柄をたしなみて拗ざる由聞きたり、と仰せ有りければ、三彌、將軍樣は仕へ奉りよく候。彼の如き主君に拗申すは狂者にこそ候へ、と申しけるを聞し召し、又持病起りたり、と笑はせ給ひけるとぞ。七十二歳、元和二年病死せられけり。

○梶左馬助御書を認むる事

同じ時祐筆梶左馬助、兼て御書を九月十五日の日附にて、今日巳の刻御勝利、と認め置きけり。

岸より下に敵を突落したれば、山田喜内其首を取る。敵猶競ひ懸りけるを、笹地兵庫と倶に散散に戰ひて首を取りたり。後池田の家に仕へて祿三千石、士大將たり。此軍の時二十四五許の年にや。

辰政其始織田上野介信包に仕へて、十六歳の時小田原の軍に、信包、織田常眞に對面せんとて從者を遠ざけ、辰政只一騎を具して赴かれけるに、江川の丸より横筋かひに鐵炮を打かくる。辰政、信包の矢面に乘り塞りし故、母衣に鐵炮の玉三つ中る。信包大に感賞して脇差を與へらる。辰政此時七郎といひけり。池田家に仕へて丹波と稱し、又出雲と改む。

○本多正重の事

關ヶ原の戰九月十五日辰の刻過ぐる迄は、東照宮桃配に御旗を立てられつる所に、本多三彌正重來りて、今少し先へ御旗を進め給ひ然るべし。是は敵合遠し。と申すを聞し召し、口脇の黄なる男にていはれざる事を、と仰せければ、三彌御後の方に廻り、口脇は黄なるにもせよ、遠きは遠し、と獨語申しけり。

三彌は佐渡守正信の弟にて、若き頃武者修行して度々功名あり。長篠の後は瀧川一益の許

一説に、秀詮の士横田半介を討取り、其首を吉隆に送るともいへり。吉隆使に向ひて、武勇といひ和歌といひ感ずるに餘有り。早や自害して追附け再會すべし、と答へて、甥の祐玄といふ僧に返を書せて使に渡しけり。

契りあらば六の巻にしばし待ておくれ先だつ事はありとも

斯くて平塚は戰ひ勞れて、畔に腰かけ息吐く處に、小川土佐守祐忠が兵樫井太兵衛鎗を提げ歩み寄る。平塚立上り、我は平塚因幡守なり、とて散々に戰ひけるが、終に倒れながら十文字の鎗を投出し、汝が重寶にせよ、とて討たれけり。戸田重政も思ふ程切つて廻り討死したりければ、大谷が軍敗れて吉隆自害しけり。行年四十二歳とかや。岩佐五介首を羽織に包み、其邊の田の中に埋み、先手に向ひ討死しけるを、藤堂の士大將藤堂仁右衞門其首を取りて御旗本に奉りけるに、東照宮、五介は聞ゆる者なり。缺唇なるべし、と仰せ有りけるに、然有りしとぞ。

○瀧川内記功名の事

瀧川内記辰政は左近將監一益が末子なり。秀詮に仕へて、松尾山にて秀詮の軍敗北の時、勇み懸る敵を支へて從者に首五つ取らせ、秀詮の許へ持たせ遣り、其所を去らで吉隆が兵に鎗を合せ、

き、三成志大なりと雖も大軍を率うべき將器なし。然るに斯く奥せられしは禍を招くと言ふべし。然れども既に許諾せられたれば如何とも爲べからず、とて三成が送り來りし使者には、心得候、とぞ答へける。吉隆敦賀に歸りしに、關東勢岐阜を攻落しけると聞きて、敦賀を打出でて關ケ原に到りしが、秀詮の裏切を元より悟りければ、僅に六百餘の陣を一手になし、關ケ原に押し出し、鎗衾を作りて秀詮に向ふ。吉隆は目を病みて士卒は皆平塚に下知せさせ、綵絹の小袖の上に村蝶を墨にて書きたる鎧直垂を著、四方取はなしたる竹輿に乘りたるが、秀詮裏切して討つて懸られしかば、大谷齒を嚙み、秀詮の不義骨髓に徹せり。敵の旗本を目にかけて切つて入るべし、と下知しければ、木下山城守、大谷大學、戸田武藏守重政、平塚因幡守爲廣今日を最後と思ひ定め、面も振らず切つて懸りしかば、秀詮の先陣立足も無く敗北す。され共藤堂高虎を始め、東國の軍押駈け進み來れば、秀詮の先陣盛返して討つてかゝる。されども死狂ひする鋒先に、秀詮の先陣又追立てられけり。爲廣敵數多討取り、其首を吉隆に送り、此首自ら討取候。冥途の苞に參らせ候。日比の約束只今討死し候ひなん、とて自害候て、人手にかゝらざれ、と言遺し、外に歌一首書添へたり。

名のために捨つる命は惜しからじつひにとまらぬ浮世と思へば

座しましき。今徳川家を打亡さん事思ひも寄らず、と言ひければ、三成、我上杉景勝と計りて景勝旗を揚げられたり。其約を變じて景勝一人を攻殺させん事本意に非ず。運を天命に任するの外道なし。豊臣家の恩を厚く蒙りたる身なれば、秀頼公の御爲に斯く一大事を思ひ立ちたるぞかし。など豊臣家の恩を忘れられしや、と言へば、大谷、さらば力なし。命を秀頼公に奉りて、今度の軍に討死すべし。但し斯る一大事を思ひ立たれんには思慮すべき事二つ有り。申出して見ん、用ひらるゝや、と言へば、三成、如何で所存を防ぐべき、と悦びしかば、大谷が曰く、世の人石田殿を無禮なりとて、末々に至りても快からず言合へり。江戸の内府は只今日本一の貴人なれども、卑賤の者に至るまで禮法あつて仁愛深し。人の懐き從ふ事大方ならず、是一つ。次に大事は智勇の二つならでは遂げ得難し。石田殿は智有りて勇足ざるかと存じ候。今度毛利、浮田も皆假に同意したる人々なり。必ずしも賴みとす可きに非ず。水口の長束と計り、内府關東に歸路の時、石部邊にて旅宿の時夜討して火を掛け、十死一生の軍せば勝利疑無きに、可惜圖を外されぬ。内府關東に歸られけるは虎を千里の野に放つが如し。十全の勝を計られなば又圖を外して悔むとも益あらじ。此上は命を秀頼公に奉るの外他の道なし。士卒は皆平塚に下知せさせて候へば、其志許し難しと雖も、よも別の事は候はじ、とて伊益の畷に至り平塚に告ぐれば、平塚大に驚

て引組んだるに、文藏が弟文吉刀を取り直し、眞令を刺して遂に打取りけり。眞令が子の大膳は戰ひ半に首一つ提げて父に見すれば、功名も何にせん、と言ふを聞き、又東に向ひて、押懸る敵に駈合せんとせしが、父討たれたりと聞き、

まてしばし我ぞ渉りて三瀬川あさみ深みも君にしらせん

といふ歌を高らかに唱へ自害したり。大膳幼より戯を好まず。關ケ原に出陣の時、母、我汝が富貴を願はぬには非ざれ共、弓箭の家に生るゝ身は昔より名を重んずる習なり。凡物二つは兼難し。身を全うして名を忘れよとは言ふ可からず、と言ひしかば、父と共に死して母の戒に違はざりけり。

○大谷吉隆平塚爲廣最後合戰和歌贈答の事

越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は、會津征伐に從はんとて兵を出さんとせしに、石田三成より樫原彦右衛門を使にて、強て佐和山の城に來られよ。密に評議すべき事有り、と云はせけるに、此は心得ずと思へども是非を論ぜず強ひければ、止事を得ずして佐和山に至る。三成悦んで、今度關東を討亡すべき謀をぞ語りける。大谷驚きて、故太閤常に德川殿の智勇の備りたるを崇敬御

成合は和泉小木川の一番鎗を合せ、秀吉の感狀賜りけれども、一氏僅に三百石與へられし故、木村が許に行きて三萬石、佐沼の城代たりしが、木村が家亡びて後復中村が家に歸りて仕へ、株瀨川にて討死したりけり。

○蒲生備中父子戰死の事

蒲生備中眞令は石田が內にて聞ゆる勇將なり。關ヶ原の前軍評定の時、眞令、明日は偏に必死と思ひ定めらるべし、と云ふ。島左近、明日先陣に進んで忠義を胄として打勝つべき物を、と言へば、眞令又、昔より利を得るは天の祐に依ると雖も、軍の正しきと法令の嚴しきとの二つにあり。能く內に省み給へ。偏に必死と思ひ定められなば勝の半なるべし。左非すば復御目見致さじ、とて座を立ちけり。眞令元より敗軍を覺りて、三成に必死を究めし詞を出したり。斯て關ヶ原にて只一騎三成が陣に乘行きて何事にかいひけるに、三成打頷く。眞令駈歸り、競ひ懸る敵に向ひて散々に戰ひけるが、織田長益に合ひて、昔は蒲生の家にて橫山喜內、今は石田が內にて蒲生備中とて人に知れたる者なり、といへば、長益、神妙に候。我に降參せよ、と言ひも終らぬに、こは何事ぞや、とて拜み打に斬つて打落す。長益の從者千賀文藏鎗を以て突通すを、其柄を握り

○飯尾甚大夫一騎先駈の事附成合平左衛門が事

關ヶ原にて飯尾甚大夫安信只一騎、黒田長政の陣の前に馬を乗寄せ、大音上げて名乗りけるを、いざ討取らんと早雄の若者共進みけるを、野口左介、益田與介見て、只一騎先駈したる志、昔をいはば一の谷の木戸口にて、熊谷、平山が終夜名乗りつる體なり。平家の士出合はざりしも、志の者を助けんとなるべし。容易う討つべけれども夫は情なし、後を見よ、と鎗を横たへて制しければ、飯尾度々名乗つて馬を引返しけり。飯尾は豊後國富來の垣見和泉守が兄利右衛門が子にて、五千石の祿にて秀家に奉公し居たり。

株瀬川の軍に、中村の士成合平左衛門利忠、牛の舌の指物にて眞先駈けたるを、飯尾討取りけり。其後黒田家に仕へ千石の祿鐵炮預りしに、長政成合が首取つたりと聞き、彼成合は世に隠なき勇士なり。其首を取りたれば、とて三千石增與へられしとぞ。成合元中村家の士なり。天正年中秀吉、蒲生氏郷、木村伊勢守秀俊に奥州數十萬石賜ひし頃、兩家とも士卒の少きに困りしかば、秀吉下知して、日本國中の士主人に不足ある者共、或は主人構有る面面皆兩家に行きて祿を得べし。主人咎めなば秀吉相手たらん、と札に書きて立てられしかば、

されけり。左近は肩に掛けて其處を退きぬ。菅後に六千石の祿賜はり和泉と稱す。長政筑前の國領せられて後、關ヶ原にて撰に合ひ、長政の側に有りて軍しける人々集りて閑話しけるが、石田が士大將、鬼神をも欺くと言ひける島左近が其日の有樣、今も猶目の前に在るが如し、と云ひけるに、其物具の事を言ひ出して更に定かならず。人々口々に言ひしかば、其軍の頃石田が方に有りける士の筑前に仕へけるを、三人呼寄せて問ひければ、左近、胄の立物、朱の天衝、溜塗桶、革胴の甲に、木綿淺黃の羽織を著たりし、と語る。人々驚きて、近々と詰寄せたるに見覺えざる事、能狼狽たるよ。口惜き事なり、と云ひしに、其中に取わき剛の者の云ひけるは、見違へたるは我ながらも理哉。左近が引具したるは皆優りたる物師にて、七十許は柵際に殘し三十許左右に立てて、麾を取り下知したる有樣、熟々と案ずるに、三十人許の兵共鎗の合ふべき際にさつと引取り、味方ばら〳〵と追駈けんを近く引寄せ、七十餘人の者共えい〳〵聲を揚げて突きかゝり、手の下に追崩して殘りなく討ち捕らんとの手段なりき。今思ひ出れば誠に身の毛も立ちて汗の出づるなり。斯迫汲交して、心安き朋友と物語するとは大に異らずや。人々大方目の魂は失ひたるにぞ。若其時橫合より鐵炮にて打ちすくめずば、我等が首は左近が鎗に指し貫れなん。見違へたりとて必ずしも恥に非ず、とぞ言ひける。

されしとかや。主水後千五百石の祿なり。此時は旗奉行たりしが、合渡の軍に如何にしたりけん、長政の旗しどろに成りし時、主水馬より飛下り、鎗の鞘を以て旗竿を俯け、汝等もし旗を仰けなば、忽ち切つて捨てん、と下知して、岩巻と言へる旗さしの強力の者に取分て固く戒め、主水もえい〳〵と聲をかけて押立てたり。又關ヶ原にて長政の旗卑き所に立てたりければ、長政、あとの高き所に立てよ、と下知せらる。主水、進んだる旗を退くる程ならば、敵に勢を附け候ひなん、とて遂に旗を立直さず。長政後に此二事を賞せられけり。

○關ヶ原合戰島左近討死の事

黒田長政はもとより石田と不和なりしかば、關ヶ原合戰の前選り立てたる士十五騎、明日の軍に拔懸す可からず。吾が馬の廻に引添ひて軍せよ。石田と手を取組みて討取らんと用意せられけり。石田が陣の前に柵あり。島左近昌仲左の手に鎗を取り、右の手に麾を執り、百人許引具し、柵より出て過半柵際に殘し、靜に進み懸りけり。長政馬より下り立ち、鎗を提げて睨み合ひたる處に、菅六之介政利少し高き處に上り、五十挺の鐵炮を透間なく横合に打たせけるに、眞先に進んだる敵手負ひて、左近も死生は知らず倒れしかば、ひるむ所を、長政吶と押懸り切り崩

飯を取出し、川水に浸し洗ひて打喰ひ、陣所に歸りけるとなり。

○毛屋主水物見の事

關ヶ原にて諸將物見を出されしに、馳歸りて、敵或は八九萬又は十萬許も候らん、といふ所に、黑田長政の物見毛屋主水、敵は一萬によも過ぎ候はじ、といふ。聽て東照宮の御陣所に參りて申せば、敵は大軍なる處汝が詞こそ怪しけれ、と仰せられしかば、主水承り、凡敵は七八萬もや候らん。されども兩軍の勝負を計りて、己が身に懸けて軍に志し候兵は幾程も候はず。石田、小西等が賴切つたる者共、彼是合せて一萬許に過ぎ候まじ。一陣敗北せば餘は戰はずして敗れ候可し、と申しけるに、東照宮、主水は敵の內通を知りたるにや。軍の情に能く通じけるよ、と感じさせ給ひ、御手づから饅頭を賜はりけるを、踏壇に有りて此を食して出でける後、彼は本姓は何と言ふにや、と仰せ有りければ、側より、毛屋と申す、と申せば、否とよ。北國の毛屋といふ所にて功名せし故、毛屋と姓を更へつると聞きたり、と仰せ有りけり。主水元山崎源太左衞門に仕へ、後黑田家に奉公し、朝鮮にて平安道の小川を渡せし時、（味方は遙に渡せるにや、と云ひけるに、主水、味方は川上を渡し候。子細は馬の沓草鞋の流れ候故に察し候、といへば、長政、尤なり、とて渡

○伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事

關ヶ原の軍の前日、伊藤長門守至孝が大藪の陣所に、石田使を以て、疾く大垣に入りて一所になられよ、と言ひ送りしかば、至孝大垣に行く所を、徳永左馬助壽昌、市橋下總守正舒慕ひけるに、伊藤金左衛門紫母衣に蛇の目の紋附きたるを懸け、三宅平大夫と唯二騎殿しけるが、十四五騎許追駈けたり。伊藤大音上げ、大事の殿よ勝負なせそ、と言ひて引退く。三宅は馬より下立ちしが、関の聲に駭きて、馬は口に附きたる下人を踏倒して駈け出しぬ。歩立に成りて靜に退くに日は暮れたり。斯る處に正舒の兵、市橋勘左衛門追ついて詞をかけ、鎗を合せんとせしに、三宅とは昔より親深かりければ、互に其聲を聞き知りて、夜中誰も知らざる處に行會ひぬるこそ幸なれ。爰にて戰ふとも何の功名か有るべき。いざ、とて立別れけり。至孝大垣に入りて、三宅は討たれしならん、と惜む處に、歸り來りて云々なりといへば、至孝悦んで、鹿毛なる馬によき鞍置きて與へ、三成は黄金三十兩引出物にぞしたりける。伊藤は十六七の頃より功名ありて、赤き手拭を鉢巻としければ、敵、例の赤手拭又出でたり、と世に言はれし者なり。或時軍破れて川岸を只一人引退く時、餓疲れけるに、敵一人腰なる兵粮を遣ふを見、走り寄つて斬伏せ、腹を裂いて

が首を取り、大垣に馳せ歸り、三成隅矢倉に居たる下に行いて、勘氣を許され候へ、と呼はる。三成聞きて、能こそ軍したれ、と言ひければ、又馳行きて三成が軍兵を引揚けたり。後に加賀利常に招かれて奉公しけり。

C林半介殿の事

林半介は美濃安八郡靑柳村の百姓なりしが、石田に仕へて祿七百石使番たり。石田兵を起すの時、佐和山の城中に軍兵を集め、書院にて饗禮を行ひ、吾今斯る一大事を思ひ立ち、運を天命に任すと雖も、汝達が武勇を偏に賴む處なり。其旨を存して軍忠有らば、賞は功に依るべし。其約束の印とて酒盃を座の中央に出しける時、林遙の末席より進み出でて、軍に臨みて一番は知らず、二番は斯く申す半介と知し召されよ、とて其盃を取りて飲みたりければ、皆、憎き振舞よ、と言ひしが、株瀨川にて一番首を取りぬ。斯て兩軍物別する時、稻葉助之丞は金の切裂の指物にて秀家の軍士の殿し、林は白じなひの指物指して乘り退り殿しけるが、猶も本多忠勝が兵に向つて只一騎輪をかくる有樣、敵有りとも思はざる體なりしを、東照宮御覽じて、天晴不敵者哉。武功に志す者は彼の武者の草摺を戴け、と仰せ有りけり。

太刀斬る。斯る處に堀尾忠氏の母衣の者馳せ寄つて誤つて、稻次が手の者を切伏せて首を取る。稻次は終に横山が首を取り又敵をも打取り、馬を靜に歩せて東照宮の御陣所に參りけるを御覽じて、先に此陣の傍より敵に向ひたる武者功名したるは誰が者ぞ、と仰せ有りしに、有馬法印側に有りて、豐氏が手の者にて候、と申す。稻次首帳を記す處に行きて、從者を味方討に打たせて候。其首帳をば消して給はり候へ、と云ふ聲を聞し召し、何事ぞ、と問はせ給へば子細を申す。斯る大軍の亂合ひたる戰ひには、味方討も有る物よ、とぞ仰せられける。

其後稻次には六千石祿增與へられ、八十五歲島原の城攻に討死せしとかや。堀尾の母衣の士共味方を討ちたる者と同じく、母衣預り居らん事口惜し、と申せしかば、忠氏の父吉晴是を聞き、彼士をば母衣を取返して、別に弓の足輕二十人預けられけり。

○淺香庄次郎働の事

淺香庄次郎後左馬介は奥州葛西大崎の木村に仕へ、其頃關白秀次の不破萬作、蒲生氏鄕の名越山三郎と共に天下に聞えたる美少年なり。木村家滅びて石田に仕へたりしが、咎を蒙る事の有りしに、株瀨川にて鼬の皮の羽織を著、銀の大釘の立物打つたる冑にて、中村が母衣の士梅田大藏

が首を取る。

其前の日野一色、藪二人、國清公、福島正則等の諸將の前へ出で、岐阜攻落され功名致す可き樣も無く候。扨此よりは中村が者共軍始仕らん、と言ひけるに、軍始は我々共が業なり。いはれざる事を言ふ、とて不興なりし。其中に正則目を見出し怒られける故、左樣にも仰せられざるがよく候。大夫殿の押附羽織の後紋を見申したる事も有りき。式部事太閤より以來先陣を勤め、何れの軍にも功名遂げ候。兎角仕りて御目に掛けん、と言ひしとぞ。

浮田、石田等が軍兵競ひ懸れば、矢野助之丞金の團扇の指物、林文大夫は赤母衣懸けて、一騎面も振らず駈け向ひ、進む敵を追崩したる有樣目を驚かせり。赤坂の御本陣より御覽ぜられ、井伊直政、本多忠勝に御下知有りて人數を纏められる。此を株瀨川の競合といへり。

○稻次右近功名の事

株瀨川にて三成が兵勝に乘りて進む處に、有馬の士稻次右近、鳥毛の半月の指物にて殿しけるを、横山監物といふ三成が士馳寄つて引組んだり。稻次が從者助け來り、横山を引伏せたる處に、敵走り寄つて稻次が胄を取り引仰ぐ。稻次振り放さんとする時、從者又助け來りて敵を一

谷々見て歸れとて遣りつる、と仰有りけり。

○秀家夜討せんといはれし事

關ヶ原の時、東照宮岡山に御著陣を秀家見て、敵の陣所あさまに見ゆ。夜討せん、と言はれしに、三成、斯る大軍にて夜軍は利無きものなり、とて止みけるを、秀家後まで悔まれけるとかや。

○株瀨川合戰の事

關ヶ原の軍の前、九月十四日浮田、石田軍を出し、一色村に兵を伏せ株瀨川を渡り、中村式部少輔の軍兵の陣所に押寄せて鐵炮を打懸くる。中村が士竹田五郎兵衞先駈して打て出づる。有馬豐氏も陣所相並びたれば兵を出す。竹田は討死し、伏兵に射しらまされ敗北しけるに、中村が士大將野一色賴母白母衣かけ栗毛なる馬に乘り、崩るゝ味方を勵し返合せたるに、藪内匠引て通りけるを詞をかけ、何とて返し合せざるや、といへば、藪振返り、手負ひたり、とて川を渉す。賴母は鐵炮に中り馬より落ちたりしを、其組の士松村清介賴母がわたかみを取りて引ずり退けれども、敵追來れば賴母が上帶を切り、刀脇差ばかり取りて退きけり。其後富村といふ者賴母

親大音あげ、鎗を横に持ち引附けて突崩し候へ。一人も猥に懸る可からず、と下知し、十分に敵を引受け一同に鬨と起立ちて、切崩し追討にしける所に、渡邊勘兵衛押來る。六左衛門散々に戰ひ鎗も歪みけるが、後には敵の鎗を奪ひて働きけり。斯る所に元親先陣敗北し、掃部も討たれ、大坂の諸陣皆破れしかば、三里許が間援くべき味方も無く、元親も久寶寺を指して引退きけるに、勘兵衛慕ひ來り、鐵炮を搏懸くる。三里が間にて旗竿過半打折りけれども、旗帛は一つも捨てず、皆絞らせて城に持たせ歸りけり。落城の日元親僅に士十二人打具し、八幡の方に落ちたりしを、六左衛門も從ひしに、元親、汝等疾く是より思ひ思ひに落ちよ、と言へ共、何地までも附添ひ申さん、と言ひけるを、元親、志はさる事なれども、遂に我爲によからざる間落ちよ、と言ひしかば、中內一人留りて其餘は落行きけり。六左衛門、其子孫今池田の家に仕へてあり。

○小栗又市谷々見廻の事

東照宮岡山に御著陣の夜、小栗又市露に濡れて御前に參り、谷々心元なく存じ打廻り見て候に、上方者何の手段も無く候、と申すを聞召し、井伊兵部に下知して、宵より菅澤次郎右衛門を山陰

渉り、敵少し出でたるを追立て、大垣の矢倉の下に馬を立てて聲々に名乘りければ、弓鐵炮を揃へ懸けたり。三九郎左の肩先に手負ひぬ。續く味方も無ければ、十騎の者共、靜々と馬を引返したるを、東照宮も聞し召しけるとなり。

賞功薄かりしかば土方、岡本彌一右衛門、渡邊佐左衛門、上田丹波、言合せ出奔しけり。土方が養母を百姓の許に隱し置きたるを、豐氏番人を附けて守らしめられしかば、三九郎歸りて、養母を人質に召捕られし上は、兎角の事を申すに及ばず腹を切らん、といふ。豐氏、尤なり、とて許されて元の如く仕へ居しかども、同じく立去りしものの思ふ所も有り、とて養母を打具して又出奔し、加藤清正に五百石にて仕ふ。豐氏かまはれしかば落ぶれて年月を經る所に、外舅中内惣左衛門といふ者、豐後に有りて招き寄せたり。中内は長曾我部が長臣なり。大坂の事起るに及びて、長曾我部と共に大坂に籠りしかば、三九郎も打具したり。元親族を二つに分け、國澤掃部と土方に預く。三九郎此時六左衛門と言ひけり。五月六日に矢尾の堤森有る所に東に向きて押しける時、朝霧深く物色定かならず。森の南より紺地に白もち附けたる旗を押立て敵寄來る。堤狹ければ旗を引下して立つる處に、敵は藤堂の先陣にて旗を堤の下に押下すを見て、敵は逃ぐる、と言ひて馬より飛び下り突いて懸るを、元

宮の婿なる故に、強ひて乞ひ招き寄せ、祿千石に過ぐべからず、との仰によりて京極家に仕へけり。後岡飛驒といふ。岡越中は飛驒が子なり。

○村上彦右衞門先見の事

關ヶ原の時、大坂の舟手村上彦右衞門、菅平右衞門、九月十二日の夜桑名に著き、十三日諸將に對面し、安國寺に向ひて、味方陣所の體見及びたる所心得られず、といふ。安國寺、吾もさこそ思ひ候へ。され共關東者一人に上方勢十人の積りなれば、四五日持ち堪へなんには必ず勝つべし、と答ふ。村上、味方山どりの有樣高くとりあがり疎なり。戰ふべき色に非ずとて下り會ふ事も叶ひ難からん。東勢は物師故陣所厚く見ゆ。一兩日を過ぎずして合戰有らん。覺束無し、と言ひて歸りしが、果して計りし如し。村上は、敗軍の時阿濃津より九鬼大隅守嘉隆の許に行き、夫より上方に上りけり。

○土方三九郎武功の事

關ヶ原の軍の前、有馬豐氏、大垣と川を隔てて陣せしに、豐氏の兵土方三九郎を始め十騎川を

○寺澤廣高加藤嘉明度量の事

關ヶ原にて東照宮未だ岡山に御著陣無き已前、諸大將地の利に據りて面々陣取りたりしに、或夜諸陣俄に騷ぎけり。寺澤志摩守廣高臥ながら徐に、我既に聞きたり、と言ひて靜かいて寢られけり。廣高士六人歩の者六人を物聞とす。三番に互に代りて途を異にして、少の事も必ず告け來る。今夜告け來らざれば夜討に非ざる事を元より知られたる故なり。其明くる夜忍びて加藤嘉明の陣所を通る者あり。抔へて、忍びか火附か切つて捨てよ、といふに、嘉明、其士は主君の爲に死を顧みず。吾陣所の備怠らず。彼如何にして吾を窺ふべき。殺すと殺さざると勝敗に關らず、とて追放たれけり。

○春日九兵衞見積の事

丸毛兵庫が弟春日九兵衞、大坂より大垣に到り、諸將の内に二心有る人の候。陣所の有樣必定味方敗北すべし。陣替せられよ、と三成に勸むれども是を用ひず。果して敗れたり。

後に前田利長春日を招かれしか共、江戸駿府を憚り仕ふる事能はず。京極若狹守高次は東照

合渡の軍に長政の内神谷小介先駈して川を渉り、待ちかけたる敵の中に喚いて駈入りければ、鎗玉に揚げられ既に危かりし時、長政の軍兵進み懸りて敵を追つ立てければ、小介流るゝ血に朱に染みたるを戸板に載せて、長政の前に来る。小介、今日我と先を爭はん者長政ならでは有る可からずと思ひ、長政を屹と見て、小介より先立ちて鎗を合せ候者一人も候はず、と申しければ、長政、汝ならで誰か先駈すべき。手負ひ候者の氣を張りて物言ふは悪しき、と言はれけり。小介後に有馬の温泉に浴して創癒えけり。

○藤堂玄蕃赤坂町を鎭むる事

合渡にて東國方の軍北ぐるを追ひて赤坂まで進み行く時、高虎の士大將藤堂玄蕃、赤坂の町口に駈入り大音あげ、百姓商人を惱ますに非ず。悪逆の輩を討ち平げ、靜謐を致さん爲なり。皆ちつとも騒ぐ可からず、と觸れ通り、其後小家一つ二つ引壞ち、東の方の町端にて相圖の煙を立てけり。高虎大に悦んで、傳へ聞きし古の王者の軍を學べる玄蕃哉、とて其日著られし唐冠の冑を脱ぎて與へられぬ。

り跪く。高虎、如何に此川を渡るべきか。待ちて利有る可きかと、先の程よりいへども決せず、と言はれしかば、後藤打笑ひ、評定も時により候。今日岐阜の城攻に後れまた爰にて一戰無くば、内府に御面目は候まじ。川を討死の場と極められん事然るべし。然らずば男子にては候まじ、と大言すれば、諸將尤なりとて川を渡されけり。

○合渡川合戰黒田三左衞門毛附の功名の事

合渡を渡す時、長政の士大將黒田三左衞門可成、川の東より遙に敵を見渡して、長政の側に馬を乘り寄せ、朱の枝鈎の指物指して、黒き馬の逞けなるに乘りたるは能き敵なり。必ず討取るべし、といふ。長政、勝敗は運命による事なり。など容易う敵を討つべき。さな言ひそ、と言はれしに、可成耳にも聞入れず、川に馬を打入れ向うの岸に跳せ上り、遂に彼の武者を切つて落し、首に指物を添へて得たりけり。石田が物ぬし村山利介といへる剛の者なり。可成が此功を、昔より毛附の功名とて類少き譽なり。

○神谷小介先登の事

常山紀談　巻之十三

○米田助右衛門見積の事

岐阜の城攻に、細川忠興七曲口へ向はれしに、米田助右衛門、あれ見給へ。彼の門矢倉は容易く打破るべし、と申す。忠興、子細は如何に。米田、今朝より矢倉より搏出す箭玉次第に少くなり候は、本丸に引入りたる故に候、と申せば、聽て軍を進めて七曲口を攻破られけり。

○後藤又兵衛決斷の事

岐阜を攻破る時、黒田、田中、藤堂等の諸將は犬山を押へたりしに、犬山の城明退きける故、岐阜を指して打向ふ所に、大垣より石田、島津二萬餘打出でて押來る。頃しも八月雨の後、合渡川水嵩増りたり。諸將香が島の札の辻に控へて、各將机に據りて、川をや渡す。待ちてや戰ふ、と評定して決せず。高虎銀の天衝の立物打つたる冑を著、黒母衣掛けたる武者は黒田家の士大將後藤又兵衛なるべし。存ずる旨を聞かばや、とて扇を揚げて招かれしかば、後藤母衣を搖り駈けて來

つ山田多門兵衛、と錄したるを讀みも終らず、近き頃まで竹馬に乘りたる童の早功名しけるよ。父存命へ居たらんには加何ばかり悦ばんに、とて涙を流されけり。又梯權八が功名の無きは如何に。討死せんは知らず、功名は二三人の中を外るゝ者に非ず、と怪まれしに、驚て飛脚來りて、權八一番に續いて首を取りけれども、手負ひて帳に記す事遲かりし、と告げたりければ、吉晴、吾見る所よも違はじと思ひつるよ、と云はれたり。

しに怠りて、信長はや打立たれける故、草鞋履く間も無く跣にて駈附け、首取つたれば信長見て、太刀の鞘に附けられたる足半を賜り候。別にさせる事も無し、と申し上ぐる。利勝猪子と年は如何に、と問はるゝに、それは御見違なり。内匠は我より二つ若し、と答ふ。利勝御覚を御自慢の事なれば、若しと申されなばよかりなん、といふ。兼松、否々詐は申されず、と答へたる儘に利勝申されしかば、大に御感有つて時服に黄金を添へて賜はりけるとぞ。

○山田多門兵衛幼年功名の事

河田の渡を越して岐阜に向ふ前、堀尾信濃守忠氏川岸に陣せらる。池田家先陣の士大將伊木清兵衛忠次使を以て、池田が者共川に打入りて後渡され候へ。今度の先陣は池田が承りたるにて候、とぞ申しける。忠氏聞きて、暫く馬より下立ちて吾下知を待ち候へ、と言はれければ、山田多門兵衛十五歳、軍は今日を始なり。馬より下りんとするを、従者馬より下る事や候。鞍の前輪に取附き俯に成りて待たせられよ、と教へしかば、山田しかしたりけるに、稍有りて忠氏の族本に寶螺の聲せしかば、我先にと馬に乗りしに、山田眞先に川に打入りて渡しけるが、遂に一番首を取つたるは従者の物慣れたる故なりけり。後に吉晴此日の勝軍の告を聞き首帳を見られしに、首一

りて鎗を横たへ、敵出ば一鎗せん、と正儀の方を見やられしに、正儀、否敵は出で候はじ、と云ひしに果して軍は無かりけり。亂鎭りて後直盛正儀を褒し、今度の軍毎事仰の中りて候。中にも安井が討死を察せられしは如何なる子細に候、と問はれしに、正儀聞きて、死生有命と申し候ひて如何で人力の及ぶべき。然りながら川を渉りて先陣する時に、馬の上け場二三十間も置きて敵の前を横様に乘り、後に味方續く時大音に名乘るべき事に候。左も無くて唯一騎岸に打上り、敵の眞中に駈け入りて討死すれば、敵に利を得さするにて候。時に依り地に依り進退の仕業變り候物なりと、能老兵に承り置きて候程に、六十に及びて猶存命へ武功をも遂け候、とぞ語られける。

台德院殿御上京の時、熱田にて國士御目見に出づる時、彖松も同じく出でらる。土井大炊頭利勝を以て今川義元合戰の時功名、利根山にて信長より足半を賜りし事、猪子内匠、彖松と年はいづれ增たるや、と御尋あり。御覺には猪子を年增と思召すとの事なり。彖松承り、信長、義元合戰の時朋輩七八人一所に打立ち候が、馬を乘り損ひ、いな事と見候へば鎧を逆に掛けたり。心中に不吉と思ひ、其日勇み無く進み兼候へば、功名したる者手をふさがず見苦しとて、朋輩共取つたる首の血を甲に塗り、草摺に泥を塗り、朋輩の中に交り信長の前に出づれば、義元の首を信長見て悦はるゝ時に參り合ひたりき。利根山にて前夜觸有り

て今年二十二三にや成り候はん、と答ふ。正儀、我ならば功名を遂ぐべきに、若武者なれば惜き事よ、と言ひも終らぬに、安井向の岸に待ちかけたる敵の中に駈け入りて討死しけり。直盛馬を蹴立てて進む氣色に見えしを、正儀押止め、早く候、とて稍有りて、こゝぞと云ふ儘に馬を川に打入れられしかば、直盛も劣らじと渡されけり。敵敗北しけるに、正儀閻魔堂の此方にて追駈くる味方を押止むる。直盛、など追討たざるや、と問はるゝに、敵はや陣を整へたり。引返へさば一定味方崩るべし。百々木造は岐阜の古兵なれば、踏止らんと思へども、地の理無くて退くならん。今見られよ返す可し、と言ひも終らぬに、竹林に據りて鐵炮を打懸る。正儀少しも騒がず、相向ふ事暫く有りて、城兵遂に引退く。

一説に、津田藤三郎光房は秀信の士なり。敗軍の中に引返し、朱の物具し赤母衣かけ、鹿の角の立物打つたる冑を著、月毛の馬に乗りて引色に成りたる味方を勵し、散々に戰ひけるを衆松見て、よき敵なり、と目をかけて追駈けたるに、其間十間許になりける時、津田光房引返して城に引取りけり。黄母衣懸けたる武者取つて返し、正儀とわたり合ひ戰ひしが、相引に引くといへり。此時にや、又前に川を渡したる時の事なりや詳かならず。

正儀、敵是にて一面目有るに似たり。此より返さじ、と言はれけり。直盛岐阜の町口にて將机に倚

控へ給ふ處に、參りて斬くと申す。又國清公の御前に參りて、飯沼を組んで討つて候、と申しけり。飯沼が胄は小田原鉢、刀は行光の作、脇差は菊一文字なり。森寺が從者分捕して今森寺が許に有りと云へり。森寺が飯沼を討ち取りし事、關ヶ原記、其の餘の書にも、池田備中守として錄せるは謬なり。

○南部越後母衣串をぬかざりし事

岐阜の城攻に、池田家の士南部越後門際に押詰めたるに、門の潜戸狹く、懸けたる母衣に支へて入り得ず。側より、母衣串を拔いて入るべし、と言へ共、否々假令入り得ずとも此母衣は脫くまじ、と呼はる。其中に門開きて馳入りたり。其武者振甚だ見事なりし、と其時の人言ひしとなん。

○兼松又四郎一柳の陣見切の事附兼松武功言上の事

岐阜の城に諸將押寄する時、一柳監物直盛の兵一騎先駈して、川に馬をさつと打入れけり。直盛に附けられける目附兼松又四郎正儀、九尺許の十文字の鎗を提げ、鹿毛なる馬に乘りて堤の上に控へて是を見、天晴剛の者よ。老武者か若武者か、と問はるゝに、直盛聞きて、安井新九郎と

は、却て池田家の幸なり、と後に人いへり。東照宮御書を賜り、敵軍川を隔てて相支ふる所に輙く打破り、岐阜を攻落されし功名賞するに詞なし、とぞ書せ給ひける。

○森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事

岐阜中納言の士飯沼小勘平と云ひつるは、四天王と世に言はれし剛の者なり。新加納の軍破れし時、小き堤を前にして居たりしに、池田家の士大將森寺政右衛門忠勝が弟四郎兵衛長勝、飯沼を目がけ、一間餘ありし溝を馬に聲かけてひらりと飛ばせたり。飯沼が左右より鐵炮を打懸けけれども、甲冑に中つて其身は手も負はず競ひかゝりしが、敵は多勢つゞくとや思ひけん、飯沼が者共散り〴〵になりぬ。森寺馬を乘り寄すれば、飯沼、名乘れ、と詞をかくる。池田が内の森寺四郎兵衛、と名乘る。飯沼、池田が内の森寺ならばいざ、と言ふより刀を抽いて森寺が馬より下りんとする處を、右の膝口を切つたりしかば、森寺左の方に飛下り、馬を隔てて切り合ひけるが、又左の腕に疵を蒙り、今は叶はじと思ひて白刃を握り、掌をくられながら無手と組み、飯沼を抑へ透さず刺通せしが、疲れ果て、首を取りたれども既に人に奪はるべかりしに、從者久兵衛といふ者走り來り、近づくものを追つ拂ひ、馬に掻き乘せて興國公此時新藏と稱し申す十四五騎にて

前田を討取りたりしに、従者柏原李右衛門、尾關彌五左衛門駈け来りて、八田を馬に乗せて歸る。八田後に人に語りて曰く、我年若し、血氣弱きに非ず。敵一人討取りてさのみ疲るべきに非ざりしに、其時援け來る敵有らば、小兒にも生捕とせらるべし。死生の間に立ちて敵を討ち得て、却て勇氣の衰へたる故なるべし、とぞ語りける。慶長六年祿二千石を增與へられ、同八年公參議に任じ、參內の時久次太刀の役たり。從五位下に敍し丹後守と稱す。後豐後守と改む。前田利長、久次が武名を聞き、一萬石にて招かれしかども行かざりしとなり。

福島正則は大手の惣大將にて、素より他人に超えられじと思はれしに、公既に新加納にて敵を擊破りたりと聞き、怒り悶へて二十三日の朝先陣して攻寄せたり。池田家の軍兵朝日口より攻入りけるを、惣構の土手の上より見て人の功名を嫉み、道全と言へる法師武者に下知して町口に火を懸けさせたれば、搦手の軍兵烟に咽びて進み得ず。公是を御覽じて、こは心得ぬ仕業なり、火の消ゆるを待つべきにや、とて桑木畑を廻り、長良川より後の水の手に押寄せ給ふ。池田吉左衛門は、公此城に御座せし時水門に居て、案內は能く知りつ、水抜の有りけるより入りて水門を打破り族を差上げ、池田三左衛門尉本城の一番乘と呼はりけり。正則の道を妨げられし

はよも過ぎ候はじ。軍は味方の勝と申す。子細は如何に、と問ひ給へば、須賀、敵の後陣續かず、後に兵を伏すべき地十町許が程に有る可しとも存ぜず。遙に駈け來りなば人馬の息切れて能き虜なるべし、と申しも果てぬに、伊木清兵衞忠次、味方の旗は前に傾き陣の色黑みたり。敵は後に仰ぎて人の面白く候。必定味方の勝なり、と勇みけり。

公、味方の陣を整へよ。濫に進むな、と下知有りけれ共、などためらふべき、吾劣らじと進み行く事三町許。公、今は時こそよけれ、と腰に挿したる麾を取りて一振振らせ給へば、一同に鬨と打つて懸り、忽ち敵を擊破られけり。八田太郎兵衞久次、北ぐる敵を追駈けたる所に、朱色の物具著て紫の母衣懸けたる武者一人、息吐ぎ居たるを見て馳寄りたり。彼の武者は歩立なるがひたと折り敷く。八田馬より飛下り鎗を合せ、遂に討取つたり。是前田半左衞門なり。

半左衞門は德善院の從子にて、岐阜中納言秀信の近習の臣なり。打見たる處は勝れて溫柔にして、常によく論にたへたる人なりしかば、人々、男子に非ず、と笑ひしに、此日の軍に、敗軍の中に武市忠左衞門と二人踏止り、引立てたる味方を勵まし、續けや續け、と呼はりて、目を驚す働して武市も討死す。日比前田を侮りたる者共、今日前田に及ぶべき樣も無し、と言へり。八田は父を彌三右衞門正久といふ士大將なり。太郎兵衞今年十八歲、父の陣代たり。

譲られ候へ、と有りければ、正則は尾越より西美濃に入りて大手に向ひ、公は河田の渡より寄せさせ給ふに定りけり。稍有りて正則、搦手へ吾こそ向ひ候はめ。尾越は城に遠く、河田は遠淺なれば馬にて渉り易かるべし。大手に向ふも城を早く攻破らん爲なれば、只搦手より寄せんものを、と申されけるを、井伊、本多、正則の領地なれば大手より船筏を以て渡されん事安かるべし。三左衛門尉は搦手より向はれ候へ。既に定めつる上は今更變へんも然る可からず、と申されしかば、正則、扨は吾敵地に入りて相圖の煙を上げて後、池田殿川を渡されよ、と言ひて大手に向はれけり。頃は慶長五年八月二十一日の未だ宵暗きに、公は清洲を打出で、河田の邊に陣して、明くれば二十二日の曉に川涯に押寄せ給へば、伊藤五郎右衞門と云ふもの瀨ぶみしけるといへり岐阜より津田藤三郎を始として新加納村に押出して陣したり。味方の軍兵勇み進んで早川に打入らん氣色なり。公馬を乘廻し、今暫ぞ、と下知せさせ給ふ。此時貝福右衞門、時は能かりぬ、と申せば、公、然るべし、と宣ひける。詞の下より逆巻く波に馬をさつと打入れ、二三間歩ませ、鞍坪に落り下り、貝に川水を汲うて打うつし、如何にも高く吹き出す寶螺の聲諸陣に響き渡る。是より一同に打入りて一騎も殘らず向の岸に打上る。

須賀平四郎物見たりしが乘歸り、敵の多少は蔦嶽に隔たりて見え分かず候へ共、二三千に

含め、其身は山の峡に出でて待つ所に長胤來れり。竹村、池田三左衞門尉密に申せと申す事の候て是に出候、と言へば、長胤馬廻の人を遠ざけられしかば、竹村靜に歩み寄り、別の子細も候はず。押留め申せと三左衞門下知したるよ、と云ひも敢ず、左の手にて長胤を犇と捕へ、一尺許の脇差を抽いて長胤に押當てたり。從者共、こは口惜や、と怒れ共詮方なし。竹村詞をかけ、近く寄られなば吾は殺さるゝとも民部殿をば刺貫き申さん。唯押留め申すのみにて別の事は候はず、と呼はりける處に、百姓の家に伏せ置きたる鐵炮の者共馳集り、鐵炮を長胤に差し當て、竹村を討たんとならば忽ち民部殿を打落し申さん、と聲々に呼はりけり。長胤力無く竹村に從ひて百姓の家に入れば、押止めて四方を堅く守りけり。斯くて東照宮聞し召し、父既に味方に成れる上は許し候へ、と仰せられしかば、長胤則ち出でられけり。後に公に遭ひて、手荒き有樣にも會はせ給ひけるよ、と言はれしとかや。

○岐阜城攻の事

岐阜の城を攻むる軍評定の時、國清公、大手に向はん、と仰せられけるに、福島左衞門大夫正則聞いて、吾こそ今度の先陣なれ、とぞ爭はれける。井伊、本多、公に向ひて、內府の御緣者なり。

いふ。是に候、とて行向へば、物音高く候。政宗が下人原狼藉候はんには、能く鎮めて給はり候へ、とて又内にぞ入りたりける。夜明くれ共立ちもやらず。巳の時ばかりに成りて、義胤の許に使して一禮し、扨靜めて馬を打つて行く。密に人を附けて窺はしむるに、彼の國の境駒が峯の彼方に、伊達家の軍兵雲霞の如く充ち滿ちて出迎へぬ。斯くて關が原の事終りて、相馬既に上杉に心合せたれば亡ぶべきに極る。政宗訴へ申されしは、相馬は年比政宗が仇なり。石田、上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼が爲に討たるべし。然るに君の仰奉りて馳下る由を聞きて、深き恨を忘れ新恩を施しき。彼が逆謀に非ざるの證に候はずや。又累代の弓箭の家永く斷えん事不便の至なり、と度々歎き申されしかば、後には本領を相馬に賜はりけるとぞ聞えし。

○竹村半兵衞田中長胤を押止むる事

關ケ原の時、三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長胤は、父大坂方に同心したりと言ふを聞きて、宇都の小山を忍び出で、居城岡崎に歸りけるを國清公聞し召し、竹村半兵衞を召され、吾吉田に歸る頃まで民部を牛窪に押へ留め置け、と仰せらる。竹村、是は安き事には候はね共、いかさま計ひて見候はん、とて道に出迎へ、鐵炮の者を百姓の家に隱し置き、具に支度を言

明日國に歸り入らんと存ず、と言はせたり。相馬長門守義胤之を聞き、天晴運の盡きたる事ぞかし。さらぬだに伊達は相馬が年比の仇なり。ましてや味方討たん一方の大將承りたると言ふ者を。いで〳〵今宵一夜討して、案内知らぬ奴原を一人も殘らず討取つて年比の仇に報い、又今度の賞にも預らばや、とて頓て民家をしつらひて迎へ入れ、人々集めて夜討の評定したりけり。爰に水谷三郎兵衞といふ者遙の末座に候ひけるが進み出で、末座の異見恐入つて候へども、既に衆議の座に連りて候へば所存を殘すべきに非ず。抑窮鳥懷に入る時は獵者もこれを殺さずとこそ申候へ。政宗程の大將年來の恨を捨てて君を賴みて來りしを、謀りて闇々と討たれん事勇者の本意に非ず。長き弓箭の瑕瑾ならずや。又彼が國境駒が峯に至らんに行程僅に二里、今日日未だ未の時に下らず。政宗が國に入らんとだに思はば日夕ならざるには至るべし。それに僅の勢にて止る事深き慮なからざらんや。只此度はよきに警固して國に返し、重ねて戰に臨まん日、勝敗を天運に任せらる可きにや、と申しければ、一座の人々此議に同じ、兵粮秣藁鹽魚に至るまで積み置き、篝を燒きて夜廻す。義胤が士共、政宗餘に靜り返りたる體こそ心憎けれ。いざ試みん、とて夜更て後馬二匹取り放ち、人々走り散りて以の外に騷ぎ罵る。政宗小童一人に燭持たせ、白き小袖を上に打掛け、左の手に刀を提げて立出で、相馬殿の御人や候、と

出させ給ひ、鞍の前輪に押當てて切裂きて括り附け、二つ三つ打振り給ひ、景勝などを打破らんには是にて事足りぬ、と宣へり。實に麾を忘れ給ふには非ず。上杉家は父より已來武勇の家にて、景勝驍將なれば人々危む心有る故、景勝を侮らせ給ふの機を示させ給ひしにや。然る處に西國、中國一同に御敵なり、と言ひ振らし、小山より引返させ給ふ時、又彼竹林を過ぎさせ給ふに、上方を攻破るには此麾も無用の物なり、とて棄て給ひけり。前後に大敵有れば人々愈疑ひ懼るゝ故に、猶々恐るゝに足ざるの機を示し給ふなるべし。

○伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事

同じ時、伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸り、搦手より攻入るべき由仰を奉り、大坂を打立ち夜を日につぎて馳下る。白川より白石まで皆仇の中なれば道塞りぬ。常陸國を廻りて岩城相馬に差懸つて國に歸らんとするに、相馬また累代の仇なり。然るに政宗僅に五十騎ばかり引具して常州を經、岩城と相馬の境に到り、先相馬が許に使をたて、此度德川殿上杉を征伐し給ふにより、政宗搦手より向ふべき由の仰を承りぬ。路既に塞り候ひし程に、やう〳〵此地に馳著きぬ。あまりに早めて道を打ちし故疲れ候。願はくは城下に旅館を賜はらばや。馬の足休めて

○上杉景勝會津表手配の事

東照宮會津を伐せ給ふ時、景勝は謙信の影堂の前にて、諸將士卒に二心有るまじきとの起請文を書かせ、妻子をば會津に籠め燒草を積置けり。敵寄せ來らば逆寄にせん、とて所々に地形を均し、白川に安田上總介を先陣として島津下々齋を二陣とし、景勝は只一騎背炙の嶺に登り、樵夫を案内者にして山中を通り、白川の境の明神に出で兵を分ち、不意に討て懸るべき道を計られしに、上杉方にも此を知らず、況て寄手は露も知らず。東照宮の先陣大田原に陣して白川より一日の行程なり。景勝大に悦びて、其勢八千を率る長沼に陣し、寄手白川に攻入らん時、山中の間路より思ひも寄らぬ後に廻り、東照宮の御旗本に切つて入り、萬死一生の軍せんと謀られしに、石田兵を起すの由聞えて、東照宮宇都の小山より引返させ給ひけり。

○東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事

會津征伐の御時、東照宮下野小山の途中にて、左右の近習の人々に向はせ給ひ、我塵を忘れたり。彼なる小竹林に串になるべき細竹を切れ、と仰せられしかば、則切つて奉るをたたう帋を取り

さばや、といふ所に、番の座上に有りける老人、物な言はせそ。是非を論ずるに及ばず斬つて捨てよ、と下知しけり。末座より、眞の參宮の者と見え候を斬つて棄てなば、神の祟も恐あり、と再三言ひしかば、二人危き所を遁れて大坂に行き著きたり。東國方の諸將の屋敷には虎落結ひ廻し、大坂の兵士門々を警固して内外の出入も絶えたれば、兼て知りたる材木の商家に行きて大根を買ひ、若や聲を聞知る、と打廻りて大根を賣る眞似しけり。久保田市大夫窓より見て、如何に渡邊に似たる人もある哉、と言ひて大根と一聲呼べば、渡邊、久保田が窓の下に行き、笠を取りて大根を差し出すうちに、宿を問へば云々なりと答へて、材木屋が許にぞ歸りける。野中に斯くと告けて悦び合へり。若原勘解由北の方に屬きて有りけるに、久保田斯くといへば、門を守る大坂の士に斷りて薪を荷ふ人夫三十五人を出し、其中一人を殘して渡邊を其代とし、薪を荷ひて門を通る時、警固の士、此男は今朝出でたる者に非ず、と押留めたり。久しく煩ひて打臥居たるが、快くて今日出たる人夫なり、と言へ共更に聞入れず。勘解由立出でて樣々にいひ斷り、通り得て北の方の前に參り、公の仰を細々と述べて笠の緒を解きて奉る。北の方は簾を隔てて對面あり。其後渡邊に祿增し與へ給ひ、賞せらるゝ事大方ならず。誠に危き所を遁れ得たる事共なり。

三の印をし、笠の緒として一の關所に行き掛る。固めたる士共、斯る大亂に伊勢に詣づる者やあるそれ打殺せ、と犇きけり。二人は騷がず、疾くより伊勢に詣でて此騷に及び、一夜の宿をも貸す可からずとの法令により、何方に泊るべき樣も無く、進退谷りて候、大坂の妻子も心元なく、天照大神を賴に任せて歸り候ぞ、と謀りけり。然ばとて荷俵御祓箱脇差の鞘を打碎き、髮を解かせ帶袴草鞋までも改め見て、怪き事も無きよ、とて通しければ、夫より次の關所をも事故無く打過ぎて、大和の奈良に出て寺に入り、酒を求めて飮みたりけるに、住持の僧、肴參らせよ、とて別に良き酒を出し、又薄茶をも出しければ、悅んで二人腰に著けたる錢を與ふるに、小僧多しとて請取らず。其時住持の僧の曰く、能くも謀りて爰迄御座したれ。たま〳〵爰まで忍び來る人も候へど、皆關所にて殺され候。能く謀の給へ。故有る人と覺えたり、と語れば、二人心の中に打驚きたれども、伊勢に參りける物語して、天照大神に助られて無事に下向すらにてこそ候へ。此より後も斯く有らんと氣支しくも候はず。と答ふ。僧熟々と聞きて是を信ぜず。然あらんには別の事も候まじ。關所を事故無く通られたらんには、朋友達に奈良の出家は見附けたるもの哉と語られよ、といふ。二人見知られじと打笑ひ出て行く。奈良と大坂との間に關所有り。何者ぞ、と咎めれば、又前の如く、伊勢に參りたる歸路に候、と言へば、然らば、とて改めたり。怪き事も無きに通

行くべき、と二人打談ひて、先伊勢の大神宮の祝上部左近が許に行きて宿を借らん、と立寄りければ、今何方より參り詣づる人の有るべき、とて取合はず。左近立出て、一宿の事はさて置きぬ。疾く出でよ。棒にて叩き出せ、と罵りけり。二人、憎き奴かな。正しく池田家の恩を請けたる身なるに、と怒れども詮方なく、空しく立ち出づる時、左近追ついて、何國の人ぞ、と問ふ。池田三左衛門尉が士なり、と答ふ。左近、然らば其處の川堤の下に乞食の棄てたる筵を冠りて待たれよ、と小聲にいへば、二人、さる樣も有らん、とて言ひつる詞の如くしたり。夜に入りて左近來り、書の乞食に何處に在る、と言ふを聞きて、爰に在り、といふ。扨密に相約して、左近が家の裏の戸口より内に入り、奥の一間に暫疲を休めたり。左近、今の時家に有る下人も打解く可きにあらねば、書の穀母し氣無き事を申したるよ、とて急ぎ飯を認め出し、夫婦給仕をしたりけり。扨道の事を問ふに、淺間越は人の往來稀なれば、此頃は女、乞食をも殺し候。中々通り難かるべし。只一命を賭物にして伊賀越を通られ候へ、と言へば、然らばとて荷俵を負ひ敝れたる綴に身を俏し、御祓箱を笠に著け、刀をも左近が許に置き、いと見苦しき小脇差を求め出して指したりけり。斯くて曉に宮川を打渡り、關所近くなりて見れば通るべき樣ぞ無き。扨て一封の書をば深田の中に深く祕し埋み、其日は行暮れて山に伏し、明る朝一通の書を紙捻にして、青草を取りて一二

に、渡邊惣左衛門とぞ記したる。公も左の袖より出させ給ふに、同じく渡邊を記させ給へり。如何なる患難をも堪へて事能使すべき人なり、と人々思へる故なり。然らばとて渡邊を召て此旨を仰せられしに、此は大事の御使にて候、と辭し申す。衆議一決したる上は兎角の論に及ばざる、との仰を蒙り、さては今一人添へられ候へ、人は病と申す事も候へば、と申ければ、野中市左衛門を相副へらる。書二通を渡させ給ひて仰を承りけるが、程無く東西の戰有るべきに、大坂に赴く事快からぬ色の見えければ、公容易く關所を通り得じ。若し殺されたらば吾馬の前にて討死したりと思ふべし。謀りおほせて大坂の屋敷に到らば、今度の一番首取りたるにも勝るべし、との詞により、二人下人も召具せず、七月二十五日小山を出て、其比三河の吉田は公の領地なりしに、己が宿所へも立寄らず、笠を傾けて忍びて打過ぎ、尾州熱田に到れば、船著に大竹の虎落を結ひて守りたり。神臧の大原左衛門大夫は渡邊が知れる好有りて、潛に立寄りたり。爰にて大夫が下人竹を傾け藁一把を括り附けて、七八町許先達て此を標に案内者として、伊勢の堺に行きて、夫より野も山も皆敵の中を忍び通れば、飯を乞ふべき樣もなく、あら米を咬み關の地藏に行き著きぬ。行會ふ人毎に怪み、あはれ關所にて殺されなん。能く心得られよ、と口々に云ふ。關の有樣傳へ聞くに、中々通るべき樣は思ひも寄らず。伊賀越にや掛るべき、淺間越にや

義春は能登の畠山義則の弟なるを、五歳の時より謙信貰ひ置かれて、上杉定實の養子とせられしなり。

謙信の先陣の大將にて武名世に高し。景勝新發田因幡守治長が謀叛を討ちて、新發田の城下に押つめらるゝ時、治長切つて出で、景勝の先陣を放生橋まで追崩し、景勝の旗本へ押懸る。此時義春、景勝の旗本の先に有りしが、日の丸の旗を取りて三十間許先へ押出し、手廻の士共折り敷かせ、鎗衾を作りて待ちかけたる故、治長引退くを追討にしたる勇將なり。大坂冬陣に二條の御城御書院に諸大名出仕の時、東照宮入菴を召し、上杉家の武者押の事ども御尋ねあり。入菴詳に答へ奉るを聞し召し、上杉家の軍法素より聞及びたる事ども深く感じ入りぬ、と仰有り。諸大名列坐の眞中に、入菴小男なるが言語分明に、其次第誠に懸河の如くなれば、諸將何れも武功智謀の人々なれど、詞を出す者無く、深く感じ入りたる色なりけるとかや。

○渡邊惣左衞門野中市左衞門忍びて大坂に使する事

同じ時國清公參議輝政を小山に御座しまし、大坂の北の方に誰か使すべき、とて、慶長五年七月二十四日長臣を召して、其姓名を書きて出せ、と仰せらる。各、承りぬ、とて其明る朝書附けて出す

の諸大名諸將を召され、東條法印、津田小平太、本多中務大輔、井伊兵部少輔を以て、今度三成兵を擧ぐる間、定めて妻子達を悉く押籠むべし。心中の難義察せられぬ。且豐臣家の爲めに企つる旨申し振らせば、秀吉の恩を請けたる人々多ければ、疾く大坂に赴き妻子の形附け、又は三成に心を寄せられんも少も遺恨に非ず、と仰出されけり。皆疑惑や有りけん兎角の詞無かりけるに、上杉義春入道入菴、末席に有りしが進み出で、福島正則、加藤嘉明、黒田長政に向ひ、各思慮にも及ぶ可からず。人質を三成に出し置き、只今御味方申して其質を棄てば、妻子の恨世の誹も遁る可からず。秀頼公へ出し置きたる人質を三成横取にしたるなれば、三成と一戰に及ぶとも妻子の恨世の誹も有る可からず。人は兎もあれ我は先御手を引き討死を遂ぐべし。斯く申されれば、皆一同に御味方仕るべしと決定しぬ。其座に是程の事辨へざる人は無きに非ざるも素よりなれども、時に當りて義春の片言拔群に聞えけるとなり。

又一説に、一座未だ兎角を申さゞる處に、福島正則、何とて石田に從ひて弓箭を取らんや。秀頼公に疎遠たに御座しまさずば、神明に誓ひて正則御味方たらん事勿論なり、と言はれし故、皆一決したりともいへり。

入菴は上杉彌五郎とて、越後上條の城主、後民部少輔といひて景勝の姉婿なり。

東照宮景勝征伐の御時小山にて、石田兵を西國に起せる告を聞し召し、前には景勝が勇將なるあり。西國は皆敵なり、と人々驚きたりしに、花房助兵衛職之を召して、汝は近年佐竹が許に有りて義宣が心は能く知りたらん。斯る亂に二心有りて軍をいだし、我が歸る道をや塞ぐべき。又義宣謀叛の志有るまじとならば、起請文を書きてわれに見せよ、と仰せられしに、花房承り、義宣は極めて信の厚き人に候へば、別の子細候ふまじ。只人心の反覆は、父子の間も計り難き事に候。起請文は御許されを蒙るべし、と申す。東照宮、助兵衛は浮田が家の長臣と聞きたりしに、器量の小き男よ、とて大息吐かせ給ふ。花房斯くと後に傳へ聞き、我起請文を書くならば、佐竹二心あらじと軍兵の疑を散ぜん爲の仰なりしに、察せずして起請文を書かざりけるこそ口惜しけれ。假令義宣軍を出したりとも、我何の罪の有るべき、と深く悔みけるとぞ。

○下野國小山にて上杉入庵議論の事

景勝を征伐せさせ給ふ時、七月二十四日、東照宮下野國小山に御著陣ありける處に、其日伏見より石田三成佐和山を出でて大坂に至り、諸大名と相謀り、亂を起すの旨告げ奉る。則ち先陣

けられ、暫く彼を立て置かれ候こそ然る可からめ、と申しけるを聞し召し入れられて、三成が旅程心許なし、とて結城秀康卿をもて送らせ給ひけり。

○東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立たせ給へる事

東照宮景勝を征伐に關東へ向はせ給ふ時、江州水口に御泊あり。その明の朝長束大藏大輔、御膳を奉るべき、と申して御約束有りしに、夜四つ頃俄に水口を打出でさせ給ふ。御輿を舁く者出合はざりけるに、渡邊忠右衞門守綱草鞋脚絆掛にて御輿の片々を舁きけるを、誰ぞ、と仰せられしかば、渡邊忠右衞門にて候、と申すを聞し召し、何とて斯く不意に打出づるを知りたるぞ、と御尋有りければ、若年の時より御傍に仕へ奉り候身の、これ程の事を仕るまじく候や。情なき御詞なり、とぞ申しける。忠右衞門宵より斯く有らんと推計りて、御輿の梯を枕にして臥居たりけるとかや。其夜土山に著かせ給ひて、翌日水口へは、昨夜時を取違へて早く立ち候ひける、と仰せ遣されけり。

○東照宮花房助兵衞に起請文を書けと仰せられし事

と某各二千の兵を率ゐて風上より火を掛け、所々を焙となして攻め懸かる程ならば、内府拒ぎ兼ねて引退かれん處を、追詰め〳〵軍せば爭か打洩すべき。萬に一つも志を遂げざるならば潔く御腹召れ候へ。空しく佐和山に退きなば後悔するとも叶あらじ。居ながら可惜圖を外さん事口惜しく候、と言ひけれども、三成は景勝と相策りしゆゑ、昌仲が謀畧を納れずして止みぬ。三成既に佐和山に赴くに及んで、七人の大將猶慎深かりしかば、道に俟ちて討取可し、と言ひ振らす。東照宮聞し召し、今は打ち捨て置ばや、如何すべき、と本多正信を召して仰せあり。正信熟々思慮して、今日本を取つて德川家に獻ずる者は石田にてこそ候へ。其の故は、三成奸曲ある故人々惡みて候へども、又三成に與する者も多く、容易く打亡し難し。故に言を禮儀に託し、手を德川家に借りて亡さばやと存ずる人々候へば、三成今ほろびて後、悉く平均に歸せんや。諸將外には殿を敬すと雖も、内には隙を伺ふ人も候はん。故太閤の恩を得たる豪雄秀賴に背くに忍びず。三成を憎むの心を移して殿に懐き申すべし。三成有らば殿を敬し重んぜん事愈厚かるべし。三成久しく人の下に屈むべき者に候はねば、頓て弓箭を取るべき事掌の中に有り。三成敵とするに足らんや。其時三成に打勝ち給ひなば、殿自然に勢を得させ給ひて、誰か靡き從はで候べき。日本三分の二は殿に歸服すべく候。只三成に御心を附

しに、早伏見に著きたらん、と聞えしかば、歯を噛みてさて止みけり。東照宮聞し召し、太閤在世の時は、寵を頼みて權威に誇り無禮にも有りぬべし。今に當りて諸將の申さるゝ處其の理無きに非ざれども、罪の疑しきは輕くすとかや聞きぬ、とて強ひて宥め給ひけれども、尚止むべからざれば、さらば今世治りたるに弓箭を起さんとや。力無き事共なり。我石田と心を合せ諸將と軍すべし、と仰せられしにより、止む事を得ずして怒を押へて、さて止りぬ。其後今世の亂となる可きも又穩かならん事も、一己の所存に有るべし。暫く佐和山に退きて、公の萬事に相たづさはる事無くて然るべからん。子息隼人正の事は、我能く家を全うせん事を計るべし、と三成に仰せられしかば、忝なき由謝して、佐和山に歸るべきや否や景勝に相計りしかば、景勝、我會津に歸りて上らずば、內府催促有らん。其時侮りたる體を顯はして罵る程ならば、必ず軍を出さるべし。行がかりに容易く打破られんや。固く支へて戰はん其の間に、大坂に討つて出でて、素より心を合する諸將を集め旗を揚げられよ。是に過ぎたる謀有るべしとも覺えず、と討られしかば、三成佐和山に赴くにぞさだめける。三成が士大將、島左近昌仲三成に勸めけるは、秀家、秀詮も兩端を持するにや、覺束無く候。佐和山の軍兵を討るに、一戰を決するに不足候まじ。一千餘をとゞめて佐和山を守らせ、蒲生備中、舞兵庫、高野越中

らず。是より又素の如く踈々しくこそ候べけれ、とて御暇申して出でぬ。されば年頃忠興、東照宮と親しからずして、利長を諫め爭はれし故に、利家も一向我家の事思ふなりと心得て、忠興の申す旨に從はれしとなり。

○七人の大將石田を討たんとせられし事

慶長四年大坂に在りたる諸將の中、福島正則、淺野幸長、黒田長政、已下七人石田と不和なりし人々、使ひを以つて、朝鮮に有りし時、各力を盡し軍せしに、目附に定められし福原右馬助直高、垣見和泉守家純、熊谷内藏允直陳、大田飛驒守政信等私曲を構へ、太閤に達せざりし事どもを憤りて、罪科に處すべき由申し遣られしより事起りて爭論甚しく、使度々に及べり。七人の諸將、此事只に止むべきや。石田を討亡しても必ず所存を遂ぐべし、との趣を石田聞きて、上杉景勝に、如何すべき、と問ふ。上杉も案じ煩ひしに、佐竹義宣、日頃三成に親しかりけるが、是を聞きて伏見より大坂に赴き、三成が許に到りて、別に存ずる旨も無し。たゞ徳川殿に告けて、和平の事を賴むべき外謀有るべからず、とて三千許の兵を以つて三成を伴ひ伏見に赴きければ、諸將、事を延したるゆゑ石田を逃しつるよ、とて既に追駈けんとせられ

し、其儘松井を召され、人を退けて尋ね問はせ給ひ、正信して唐櫃二つひらかせらる。一つに黄金百枚づつを入れられたり。其の黄金の箱に題せし年月を見よ、と仰有り。正信是を考ふるに、二十一年の前未三河に御座有りし時に候、と申す。徳川殿松井に向はせ給ひ、凡そ金銀は出納の司有る事にて、若し人知れず用ひんとする時に吾心に任せ難し。さればこの黄金を貯ふる事、斯る事を待つに年久し。今其の家の爲に吾年比の志達しけるこそ嬉しけれ、とて自ら是を松井に賜ふ。松井大に悦び、斯る有難き御事こそ候はね。既に亡びんとする家の、斯再び繼ぐべく候事偏に君の御恩なり。細川が家の候はん限は、爭で此情を忘れ奉るべき。速に本國に申し下して黄金召し上せ、償ひ奉る可きにて候。と申す。東照宮聞し召し、否々此事世に泄聞えなんには兩家の禍にこそあれ。夫故に斯く人知れず用ふべき料の物取出したれ。努々償はん事然る可からず、と仰せられしかば、松井殊更に悦び、急ぎ歸りて此由を申し候はん、とて御前を立ちて出でにけり。遙經て忠興其の事となく御館に參り、御對面の序に正信を呼出し、東照宮に向ひて申しけるは、年頃忠興が家人に仰せ下されし事謹んで承り候。何事の御座します可きには候はねども、若し御家に事有らん時は、必ず君の御爲國をも身をも捨て、此度の御情に報じ奉らんずるにて候。さりながら、忠興常に伺公仕りて候はんには本意遂げん事叶ふ可か

常山紀談　巻之十二

○東照宮細川家の難を救ひ給ひし事

關白秀次生害の後、細川忠興の家に罪蒙るべき事起れり。其子細は、秀次當時の大名財用乏しきには、潜に金銀を貸し給ふ事あり。是は人の心を攬らんが爲、且は財を利せんが爲なりけり。忠興も黄金二百枚を借りてければ、彼家金銀出納の事を司れる人、急ぎ彼の金かへし給ふべし。券契を破り捨て候べし。左なからんには太閤の奉行に券契を出すべし、とぞ申しける。忠興、如何にも叶ふ可からず。此事太閤に洩聞えなば、罪科に處せられん事疑なし。如何爲べき、と案じ煩ひ、長臣相集りて議しけるに、松井佐渡守申しけるは、某年頃徳川殿の御内なる本多佐渡守正信と親しく相語らひ候。彼に附きて徳川殿を賴み參らせん。徳川殿はさる賴母しき人にて御座しませば、いかで是程の事にて、人の家亡びんとするを見捨て給ふ事は候まじ、と申す。忠興、我日比内府と親しくも無し、斯る事賴むに便なし。されども汝正信と親しからんには、試に計り見よ、といふ。松井、本多に云々のこと有りといふ。徳川殿聞し召

書きて奉りぬ。若し敵寄せば幸長は宇治川を固め候ひなん。忠興は敵の中に打交り、不意に一軍仕り候可し、とぞ相計られける。然れども是も始終勝を全うすべき道にも非ず。利家と和平有るに踰ゆる事候まじ。只両人に任させ給ひ候へ、とて其翌日、忠興夙に利長の許に行き向ひて、昨日の密謀一々内府に告げたり、とぞ語られける。利長色を変じて、こはそも戯に候や實に候や、と驚かれけり。忠興、されば愚者も千慮の一得候。此事を思慮するに、石田謀つて両雄を闘はしめ、其弊に乗らんと料るものに候。両雄相闘ひて亡びなば、安藝の輝元、備前の秀家などを大将として、吾等が如き者は手も無く攻平けなん所存見顯し候。寛仁の内府に與してこそ家をも起すべけれ。三成と心を合せて名を汚し身を失はんは必定にて候。斯く申す詞を許容候ひなば、疾く内府と令親利と和睦有りて、世穏かならん事こそ然るべう候へ。是全く前田家を佑くる所にて候、と詞を盡して規誨せられしかば、利長も深く思慮して、道理に當れる事共にて候。然らば父に申さばや、とて利家に斯くと告けて利害を詳に語られけるに、利家も諾せられけり。

又一説に、五老五奉行の内爭論不和の事あらば、牛駒雅樂頭親正、中村式部少輔一氏、堀尾帶刀吉晴三人和平を取計ふべし、と兼て太閤の遺言に因りて、井伊直政に就きて和平の事を謀れりとも言へり。

らせ候ぞ、と語られしかば、忠興熟々と聞きて、日比の親み、斯る大事を告知らせ候事淺からぬ事なり。心得候ひぬ。明日參りて申合せ候はん、とて歸られけるが、

是は之れより前、東照宮は藤森に御座しけるに、井伊直政が士木俣土佐、若し風に乘じて御館の隣なる宅に火を懸けなんは危き事なり、と申しければ、東照宮、御寢所へ土佐を召して具に聞し召され、其翌日向島に移らせ給ひけり。

直に向島へ參りて、東照宮御對面有りしかば、忠興、近習の人を屏けて、只今參る事別の子細も候はず。石田等黨を結び利家を依賴として、君を亡し申すべきと企て候。利長と年頃の親しみに依りて具に洩れ承りぬ。彼等が謀に落ちざる御設こそ然るべく候へ、と申されけるを聞し召し、過ぎにし年信長播州出陣の比、弱年にて武勇の譽有りし故申し通ぜしなり。斯る深志有らんとも知らざりける悔しさよ、と悅ばせ給ひて、榊原康政を召して、如何有る可き、と仰有り。事急に候。後れては人に制せらる可し、と申す處に、忠興、國の輔は人の與する事最一に候へば、淺野幸長を召され候へ。彼は必ず德川家に心を寄すべし、と申されければ、頓て使を走らせらるゝに、取敢ず參られたり。忠興出で向ひて事の子細を語らるゝに、人多き中に斯る事を知せらるゝ事交の甲斐有り。斯る時は疑の生じ易き習に候、とて忠興、幸長先誓紙を

を待つべきも一つの計策にてこそ、と言ひければ、三成、されば縦令一時に能く志を遂ぐるとも、後の安かるべき様を計るなり、と言ひけるに、左近、否々事能く一時に勝を得るならば、後に何の危き事か候べき。内府に親しき人々を積るに、其兵二萬に過ぐべからず。味方素より心を合する大國の人々、又近國の兵を集むるとも、忽馳寄つて五六萬には及ぶべし。景勝卿采配を取つて下知し、關東を攻破らんに何程の事か候可き、とて又存する旨を言ひ出しけるに、客の來て三成坐を立ちければ、樫原彦右衞門居殘りて左近に向ひ、如何にも仰せ然る事なり。松永彈正、明智光秀は無雙の悪逆の者なれど、事を決斷するに誰か相並ぶべき。此詮議の破り相手に賴む可きものを、と言ひけるとかや。其に依りて斯く柳生には答へけるとなり。

○細川忠興忠告の事

石田三成を始め相組する人々、加賀利家を推尊みて、東照宮を傾け奉らんと日夜相謀れり。利家の長子利長、細川越中守忠興を招きて、累年親みたる間薄からず。さぞな危ふからんを扶け給はんや、と問はるゝに、一代の知音にて候へば、聊爾略候まじ、と答へらる。利長、尤斯こそ有るべけれ。頃日石田三成、小西等相計つて、内府の向島の館を攻圍まんと議決しぬ。潛に知

ひ振らす。康政小具足著て鉢巻し、馬印押立てて参りければ、御前に召して御手づから御髭斗を下されけり。康政下知して、御蔵より料足数千貫出させ、人々に分渡し、内府の軍兵六萬にて駈け著きたれば、館にて兵粮の用意俄に設け兼ねたり、と言はせて店屋物を買ひ來らしむ。數千人、京、伏見、淀に馳廻りて、赤飯菓子酒様の物一つも殘らず買ひ來れば、關東より十萬の軍兵集りたり、と人々思はぬ者も無し。是に依りて石田が謀空しくなると言へり。東照宮、柳生又右衛門は、石田が士大將島左近と同國の好にて懇なりと聞召され、左近方へ行きて物語して、彼は如何にか言ふらん。聞きて來れ、と仰有りしかば、柳生左近に逢ひて世間の物語し、如何に成るべき事ならん、と言ひければ、左近聞きて、今松永、明智二人の智謀決断有る人無ければ何事か有るべき、と打笑ひけり。此子細は、或時石田密謀に及びけるに、左近、豊臣家の爲を存ぜんに斯くあらで止むべきや。然れども爰に存ずる旨あり。大事を企つるには、我志す處を無二無三に決断して、少しも猶豫有るべからず。然るに去年より度々仕課すべき圖を空しく外し給ふ事多し。既に時を失ひぬ。能々世の有様を見るに、石田の家を惡む人々、大かた徳川殿に心を寄せたり。當家の存亡計るべからず。一日の過ぐるも殘り多し。只理を非に曲げて、唯今まで疎遠の諸大將達へも遜りて、遺恨無く計ひて交り親しみ、暫く時

り。只押晴れて軍の支度をせよ、と仰せ有りけるとぞ。京極高次參りて、大津の城へ引移らせられんや、と進め申されけるを聞召し、敵寄せば上の臺へ押し上げ、金札の宮の邊にて眞丸に成りて一合戰すべし。吾兵二千許や有らん。敵何萬もあれ打破る事難からず、と仰せられけり。正月十九日、安國寺瓊長老、生駒雅樂頭、中村式部少輔、堀尾帶刀四人四老五奉行の使として、東照宮に參りて、伊達政宗、福島正則、蜂須賀至鎭緣組の事によりて、德川家獨擅なる事共、豐臣家の爲然る可からざる由申す旨あり。依りて世の中愈樣々なる風說あり。其頃榊原式部大輔康政伏見に上るとて、二月二十五日尾州宮に著きけるが、伏見の騷がしき由を聞き、日夜道を急ぎて、道すがらにて聞けば、伏見にて、既に東照宮の御館へ敵押し寄せたりなどと言ひ振らす。二十六日の晩膳所にて伏見よりの飛脚に行逢ひ、未だ弓箭は始まり申さぬ、と言ふを聞き、康政悅んで則ち膳所に陣し、秀賴の下知と稱し、伏見の騷に附き東海、東山兩道の人留すると振れさせ、勢田、矢橋を三日押留めたり。其比の騷しきに諸國より聞傳へ、京伏見に集る人殊の外多かりしに、押留められ、草津、野洲を始めとして、何萬といふ數計るべからず。扨康政三日の後未刻に、構へたる關所を開かせたれば、旅人一同に京伏見に入る。康政膳所を立ちて、七千許の人を率ゐて伏見へ入りければ、京にて關東より數萬の軍兵馳著きたり、と

大の神慮なるべし。四老奉行内々相計り、徳川殿伏見に有りて權威日々に增長すべし。秀賴公を早く大坂へ移し、諸方一同に參り集りて尊敬すべき事然るべし、と東照宮に强て申して、同四年正月十日大坂に移居あり。東照宮も送らせ給ひて、大坂へ御出あり。片桐東市正且元が宅に御止宿有りけるが、十二日の曙に俄に打立ち給ひて、淀川を御船にて上らせ給ふ處に、枚方近く川岸に人多く群りけり。若や謀り奉る叛反の輩に有るべきか、と驚く處に、井伊直政が足輕と見ゆる、と申す者あり。程無く御船近く成りければ、脇五右衞門などいへる物頭跪きて待ち奉りて、頓て伏見に入らせ給ひぬ。

又此時御乘物には村越與三右衞門を乘せさせ給ひ、東照宮には陪者の騎馬の中に御雜り有りたりとも言へり。又井伊直政は馬上にて御迎に出で、物具して其上に常の衣服著たり。直政が手の者皆下に具足を著、弓鐵炮の者彼是二千許にて參り、殊に御愛ありける彌八鹿毛を引き來りければ、其儘打乘らせ給ひて歸らせ給ふとも言へり。

此頃既に世間さま〴〵に言振し、如何なる事か出來らん、と人々危みおもへり。東照宮も御屋敷に大竹にて菱垣を結はせられ、御門を押し開き、敵寄せ來らば堅固に防ぎ守らせ給ふべき設あり。御門を開く事然る可からず、と申す者有りければ、門を閉ぢて守らば敵に悔らるゝな

時西國の諸將達を談ひ押寄せて、關東を討亡す可きよ、と細々と相謀り、終に氏鄉を毒害し。後秀行八十萬石の地を倒りて、會津を景勝に秀吉賜りたるは、此謀より事起ると言へり。

○兼續惺窩先生に逢ひし事

直江兼續、惺窩藤斂夫に對面せんと言へ共聞入れられず。兼續押して行きたれば不在なり。度々招けども行かざるに、今日來りたるにも逢はず。僞りて他に出でたるとや思はん、とて直江が許に行かれしに、直江其日關東に赴きしかば、跡を追ひて大津に至りて對面あり。直江、廢れたる家を急に取立つる時、人臣の心得は如何に、と問ふ。惺窩、事を速にせんとせば却りて敗る基なり、とぞ答へける。後に直江景勝に勸めて旗を揚けさせ、必ず家を滅すべし、と惺窩言はれしが、果して景勝に事を起させたるが、其功成らざりき。

○石田が黨東照宮を謀り奉らんとせし事

慶長三年八月十八日太閤逝去。其比台德院殿伏見に御座しまして、太閤の病重かりしかば、關東に赴かせ給はん事延引なりしが、俄に十九日伏見を發して關東に歸らせ給ふ。是れ東照宮遠

などいふ句も世に聞えけり。伏見の城にて諸大名幾等も並居たる中に、伊達政宗懐中より金銭取り出して人々に見せられしに、其頃金銭の始りし比にて、珍しとて持囃さる。直江が末座にありしを、これ見られよ、と有りし時、直江扇の上に金銭を置きて打返し、女童の羽根つく様にして覩しかば、政宗、否苦うも候はず、手に取られよ、と言ひも終らぬに、直江、謙信の時より先陣の下知して麾取り候手に、斯る賤しき物取れば汚れ候故、扇に載せて候、とて政宗の方に投戻しけり。兼続父も山城守といふ。元僧なりしが、還俗して武勇を事としけり。

○石田三成直江兼続密謀の事

石田三成或雨夜の徒然成りしに、直江を近附け私語きけるは、卑賤より出でて天下を治むるは大丈夫の志なり。我豊臣家の恩深し。太閤斯く世に御座しまさん中は思ひ立つべからず。然れども終には旗を揚げ、天下を取らばやと存ずるなり。其の時徳川家父子をば如何して討亡すべき。武略を廻らし給はらんや、と語りしに、直江此を幸とや思ひけん。是こそ志す所に候へ。然れ共徳川父子關八州を領して、且蒲生氏郷といふ勇將に親み有り。輙く勝つべからず。先氏郷を滅し、景勝に會津を賜りなんや。然らば吾景勝に謀りて旗を揚げ、我先陣して師を出すべし。其

○秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事

越前の秀康卿伏見にて、國といふ妓女を召して舞はせられし時、襟に掛けたる水晶の珠數見苦しき、とて物具の上に掛け給ふ珊瑚の珠數を賜はりけるが、暫舞ひける時、頻に涙を流し給ふ。人々怪みければ、秀康卿、今天下に幾千萬の女有れども、天下一の女と世に譽められ、名高きは此女なり。吾天下第一の男と世に言はれず。彼の女にさへ劣り果てたるかと思へば泣かれけり、と仰せ有りけり。

○直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳子、樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて景勝に至る。景勝、奥州にて百萬石を賜りし時、米澤三十萬石を直江に與へられ、陪臣の中第一の大祿なり。長高く容儀骨柄雙無く、辯舌明に殊更大膽なる人なり。且文藝にも暗からず、五臣注の文選は此人板行させたるとなり。詩をも作りて、

春雁似レ吾吾似レ雁　洛陽城裏背レ花歸

○戸川肥後守秀吉公を負ふ事

浮田秀家伏見にて秀吉を饗しける時、廊下より行く處の白砂の上に、戸川花房を始として並び居て拝謁す。秀吉戸川達安に、吾を負へと言はれしかば、戸川、秀吉を掻負うて書院に行きけり。秀吉斯る振舞多かりければ、其よりして古き家々の禮儀も多く失ひたりとぞ。

○黒田如水先見の事

秀吉病重かりしかば、朝鮮渡海の軍兵を引取らんと計られける時、朝鮮へは必ず徳川殿赴かせ給ふべし。さらば日本は自ら徳川殿に歸服すべし、と人々言ひし處に、思の外に秀吉石田三成に命ぜられて朝鮮に赴きけり。偖ては日本の權威は三成に歸すべし、と言ひ振らす。黒田如水獨是を然りとせず。朝鮮の事三成是を承るにより、日本は徳川殿の掌の中に有りと覺ゆ。三成是より伐りて人是を嫉みなん。然らば徳川殿の仁徳に靡き從ひて、日本は自然と徳川殿に歸服せん、と言はれしが、果して然りき。

石を打出せども大膳少しもひるまず。士五十騎歩卒二百許、一の城戸口を押破りたれば、手負死人數を知らず。寄手押續けば大膳念なく乘破りたるが、數ヶ所手を負ひて踞き居たる所に、法師武者猩々緋の羽織著たるが、引返して大膳に向ふ。大膳、吾疲れたり。近寄りて首を取つて高名にせよ、と言ふを聞き、走懸りて一太刀打つ。大膳敵の草摺を取つて引寄せ、脇差を抽きて刺貫く處に、別所が士大將由井小兵衞、と名乘りて引返して馳來り、大膳を一太刀斬りたり。斯る處へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄つて、疊みかけて由井を打つて芝居に打据ゑ、押へて首を取り父に向へば、大膳は息絶えたり。出羽は父の死骸を陣屋に入れ、取りたる首を秀吉の實檢に備ふ。秀吉大膳が討死せし由を聞きて、せめて死骸になりとも對面せん、とて陣屋に行き、惜き人を討たせけるよ、とて涙に咽ばれけり。

秀吉家譜に載せたるとは大に異れり。然れども此一條は、谷の家に傳へたる說なる由なれば、家譜は誤なるべし。

大膳は江州犬上郡の人、信長に仕へて、川尻肥後守、稻葉伊豫守と同じく軍の評定の人に加へらる。十四歳より四十七歳まで鎗を合する事九度、首を取る事十七度なり。

取りたり。天文十六年七月二十三日、三好政勝入道宗三と舍利寺の軍に討死しけり。後此歌の事を秀吉に物語する人有りければ、秀吉、歌の趣意宜からず。吾ならば、

人はたゞさし出づるこそよかりけれ軍の時も先がけをして

と詠むべき物を、と言はれけり。

○谷大膳武勇討死の事

天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時、谷大膳は濱手の大將たり。兼て大膳は寄騎にと秀吉望まれしか共、信長許されずして加勢たらしめらる。大膳、敵三騎と馬上にて鎗を合せ皆討取りたり、秀吉、疾かさの丸出丸の名なり攻められよ、といへば、大膳、城堅固にして容易に攻取り難し、と答ふ。秀吉、日頃勇名高き大膳、小城一つ破り兼たるや、と詞を戀けられければ、大膳も怒り、秀吉も既に刀の柄に手を懸くべき色なりしかば、竹中半兵衛立塞がり、戰場の勝負こそ力を盡すべきに如何なる事ぞ、といふ處に、蜂須賀彦右衛門も來りて秀吉の轡を取て押返す。夜に入りて秀吉酒肴を持たせて大膳が陣屋に至り、今日の武功拔群なり。先の問答は我過にて、後悔大方ならず、とて懇情甚し。其後大膳手勢を率てかさの丸へ攻めかゝる。城中も此處を大事と防ぎ、矢

しかとも見えぬ燈火のかげ

脇紹巴の句なり。紹巴、螢は鳴く蟲に候はず、と申す、秀吉聞きて、螢に聲無くとも、吾鳴かせんとせば鳴かずしてや有るべき、と言はれし時、細川幽齋側より、

武藏野やしのをつかねて降る雨に螢よりほか鳴く蟲もなし

と詠める歌の候、と言はれければ、秀吉悦ばれけり。

此歌は螢の聲有りといふ心には非ず。雨降る夜は皆蟲の鳴止むなれば、光の見ゆる螢より外蟲無しといふ事なり。

○三木牛之介鍬形の詩歌の事

三木牛之介は畠山高政に仕へて剛の者なり。五尺許の鍬形打ちたる冑を著て、

運在」天　見」敵無」退

又、

人は只さし出でぬこそよかりけれ軍にだにも先がけをせば

と詠める歌を鍬形に書きたりしが、天文十一年正月河内の合戰に一番鎗を合せ、敵の大將を打

○成田助九郎誅せらるゝ事

秀吉北國に赴きし時、丹羽長重の小松の城に立寄りたるに、長重の士成田助九郎といふ者あり。秀吉先殿を北陸道の管領にせん、と賤が嶽にて約束有りつるが、加賀二郡越前若狹を賜はりぬ。先殿過ぎさせ給ひて後小松十二萬石に減じ、既に滅亡に近しとも申すべし。秀吉の不義憎むに餘り有り。臣に討手仰附けられよ。竊く刺殺すべし、と言ひけれども、長重聞入れずして止みたるを、秀吉如何にして洩聞かれけん、大に怒りて成田を憎む事甚しかりければ、成田小松を退きて伊勢の朝熊に隱れ居たりしを、終に搜出して殺されけり。成田が子半左衞門、長重に仕へて小松の軍に戰功あり。

○秀吉公連歌の事

秀吉或時紹巴に向ひ、吾發句せん。汝脇句せよ、とて、

奥山にもみぢふみわけなく蟲

とせられしに、

村重、指替の無くて、と言へば、秀吉、吾刀一つを賴みて信長に奉公する者に非ず、と言はれけり。後秀吉世を平げて治冬を深く惡み、探し出して殺されけるに、治冬君の爲に其仇を除くは武士の常の事なり。秀吉舊き怨を忘れず無道なり、と言ひて死したりけり。

秀吉河原林に與へられし脇指は三條吉廣が作なり。河原林が舊友山脇源大夫重信に傳へたり。山脇は攝州の人、幼かりしより勇名の聞えあり。甲州に往きて內藤修理が許に在り。其後攝州に歸り、荒木攝津守村重に仕へ、頻に用ひられて長臣たり。村重神田伊賀守と軍の時、神田が軍奉行郡兵大夫は勝れし剛の者なるを、毛附して討取つたり。凡首數九十八取りて首供養三度せしとなり。荒木亡びて重信中川清秀の許に隱れ居たり。清秀の妻は重信が叔母なり。前田利家、柴田勝家、丹羽長秀一萬石をもて招かれしかども引籠り居たりしを、護國公池田信輝公懇に招かせ給ひしかば來り仕へ、山崎合戰に明智が士大將、丹波國にてしら山と言ひける城を預り居たる村上源之丞と馬上にて鎗を合す。山脇が鎗は十文字にて村上が馬の額に疵附き、馬飛出でければ源之丞馬より落ちけるを、從者駈け來り助くるを、源大夫詞をかけ村上と引組みける所を、味方數多落ち合ひて村上が首を得たり。其後も功名有りて士三十騎の將たり。

しける中に、木村常陸介師春檢使の松田勝右衛門に向ひ、今度關白聚樂を出て伏見に赴かせ給はんと定められし時、師春申しぬるには、太閤御對面だに御座しまさんには、讒者の程明め給はん。然れども、夫までも無く中途より遠國へ放流せられ給ふか、甲斐無く御身を自及に伏し給はん。必ず此二つの間なるべし。天晴太閤の使者を斬つて捨て、諸將の妻子聚樂に有るを人質に取り、罪無き事を申し開かせ給ふべし。さもあらんには和睦も堅く定り、又戰にも勇名を遺すべし。空しく聚樂を出でさせ給ふ樣や有るべき、と再三諫め申しけれども、吾太閤に敵する心無しとて承引候はざりき。然れば關白に於て異心座しまさざる事明なり。此旨を達して給はりなば、其恩黃泉の下にも忘るべからず、と云ひ置きけるを、松田折を得て秀吉に申しければ、太閤木村が志を感みて、妻子に米百石を與へて、京都誓願寺の近所に住居せしとぞ。

○秀吉有岡城へ使者に行かれし事附河原林越後山脇源大夫が事

秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に來る。村重が士河原林越後守治冬、猿めが面魂遂に仇をなすべし。今刺殺さん事易からん、と村重に囁きけれども村重聞入れず。此事を秀吉に語りければ、秀吉治冬を呼出して懇に詞をかけ、差したる脇指を抜きて引出物にぞしたりける。

越前秀康卿に仕へ、大坂陣に忠直の供して先陣たり。五月五日天王寺口の御先手加賀利常に命ぜられしかば、忠直甚忿られし時、本多伊豆守然らば明日眞先駈けて加賀の軍兵を踏越え、思ふ儘なる軍せん。斯る事は吉田修理能く決斷する者にて候、とて呼出す。修理聞きも敢ず夜も短く候。早支度して打立つべし。人々續かれよ、と言捨てて、己が陣所に歸るや否やひたゝと物具し、先駈して加賀の軍兵の押行く所に修理馬を乘寄せ、今度の命には岡山表は加賀、天王寺表は越前の三河守先陣を承りたり。各は知らざるや、と云ひも敢ず、眞一文字に押破り駈抜けたれば、越前の軍兵押續く。修理は今日必死と思ひ定めれば、本多忠朝の陣より鐵炮を打懸ると等しく、死ねやく、と聲々に呼はり、眞田が陣を切崩し、北ぐる敵を追つかけ、天滿川の深みに馬を乘入れ溺死しけるとぞ。

青巖寺にて自害あり。彼の三人も所々にて自害せり。是三成太閤の歿後世を覆す可き爲に先關白を失ひける、と後にぞ人申しける。

○木村常陸介最後の事

關白秀次高野の青巖寺にて自害ありければ、事を司り寵愛せられし人々、所々に誅せられ自害

秀吉秀次を養ひて關白を譲り、夫より太閤と申す。文祿二年秀賴誕生あり。秀次善からぬ事ども種々有りければ、文祿四年七月八日三成太閤の前に出でて、關白の謀叛既に顯れし、とて證を正したる書を見せ申せば、太閤怒りて、宮部善祥坊、堀尾吉晴等に下知して、疾く伏見に來らるるか、一先高野に退き申開き有るか。二つの中よ、と云送られしかば、秀次畏り、承り候、とて其後粟野木工頭秀用、白江備後守成定、熊谷大膳亮直澄三人に、此事如何有るべき、と問はるゝに、白江聞きも敢ず、殿下只今粟楽を出給はん事然るべからず候。此三人の中一人伏見へ參りて犯さぬ罪を申開くべし。叶はで討手來らば防矢射て思召し定められん外他有らんや、と申す。熊谷、此謀尤さる事なれども、帝都の騒ぎとならん事其恐なきに非ず。又謀叛人と言はれんも口惜かるべし。父子の禮儀なれば都を出でて東坂本に赴き、讒者を糺されん事を申すべし。御許されなくば唐崎濱に打出て勝負を決するの外道なし、とぞ申ける。粟野、只今危きに逼りて宥を請ふとも聞入れられじ。迚も遁れぬ所なれば、今夜伏見に押寄せて屍を城に晒すべし。婦人の縋れて死するが加くならんは口惜しき事なり、と申しけれども、秀次皆用ひずして高野山に赴きけるが、

一説に、吉田修理此時申しけるは、謀叛眞實に御座しまさば人數一萬我に附けられ候へ。今夜伏見に夜討して只一時に城を乗破るべし、と言ひけれども、聞入れざりしとなり。修理後に

○石田三成が事

石田治部少輔三成は、近江國石田村の百姓佐五右衞門といふ者の子にして、幼かりし時佐吉と言しが、家貧しく近き邊の寺に遣りて在りけり。或時秀吉彼寺に行き、佐吉が明敏なる故呼出して側に仕へしめしが、頻に祿を增し、水口四萬石與へられける。後三成に、人數多招きたらん、と問はれしに、島左近一人呼出し候、と申す。秀吉、其は世に聞ゆる者なり。汝が許に小祿にて如何で奉公すべき、と言はれしかば、三成、祿の半分を分ち二萬石與へ候、と答ふ。秀吉聞きて、君臣の祿相同じといふ事昔より聞きも傳へず。いかさまにも其志ならではよも汝には仕へじ。由々敷も計ひたるかな、と深く感ぜられ、島を呼出して手づから羽織を與へて、是より三成に能く心を合せよ、と言はれけり。三成佐和山を賜りたる時、島に祿增與ふべき由言ひけれども、祿更に不足にも候はず。他の人々に賜はり候へ、と辭しけり。左近が父元室町將軍家に仕へ、江州高宮の傍に甲斐無き樣にて隱れ居たりしを、三成招き出しけり。

○關白秀次公生害の事附吉田修理が事

む事に非ず。敵を打立てたき時か、或は城へ射込みたき事の有らんに、足輕は進み難き故に、人を指して命の有らん時、射當てされば面目なし。危き場は敵も堅く守る故に、多くは犬死する事有り、といへり。

○可兒才藏が事

可兒才藏吉長は、尾州可兒山の人にて大剛の者なり。篠を指物にす。首を取りて篠の葉を口中に押込み、投棄てて後の證としける故、世の人篠の才藏といひ傳ふ。關白秀次に仕へ、長久手の軍に秀次引退かれしに、岡本嘉介、村善右衞門等踏留りて支へしに、才藏が來るを見て山に倚りかゝる心地せしとなり。扨才藏、殿は何方にぞ、と問ひて其退かれたる方に行きけり。目前の敵を見捨てて引退きしは、聞きしにも似ぬ才藏かな、と論じけるが、或日聚樂にて語り出して、才藏に、如何なる所存有りしや、と問ふ。才藏聞きて、何心なく殿の跡を慕ひたるばかりなりき。今人々の論を聞くに尤なり。然らば暇申す、とて宿へも歸らず直に立去りけり。後に福島正則招きて七百五十石の祿を與へらる。才藏が下人に久右衞門といふ剛の者あり。才藏其祿の半分を與へ、竹内久右衞門といふ。才藏が墓藝州廣島に在りといへり。

化といふ四字を書きて與へられしかば、世の人無雙道化といへり。平野與兵衛は齋藤家の士なるが、是も武功譽れ高く、信長是を招かれし時、人々往きて平野に對面するに、道化も打連れて物語せしが、道化曰く、御身は懸るに先立ち引くに殿ると聞く。其趣を委しく語りて教へられよ、といへば、平野、更に心懸故にも候はず。齋藤家に冥加に叶ふ士は皆々討死しつ。我生殘りて重ての軍には必死と思ひつれ共、其武勇の不足故に死を遁れ、今日の問に會ひ恥の上の恥に會ひ候、と答へければ、只今の答至極の道理にて候。先駈後殿は必死を不志しては成難し、と大に譽めて感じけり。

○谷太郎右衞門物前心得の事

谷太郎右衞門は武功の士にて、黒田家に客の會釋にて招き置かれけり。谷が曰く、軍の場にて先敵より味方に氣を附くべし。一人先に進み出で踏み堪ゆる處に、跡より二人三人行重らば、始出でたる者を強と知るべし。其處へ行く可からず。吾は又別の所に獨踏出して堪へ居るべき志せよ。暫くすれば又其處へ味方續くぞかし。又日比心安き人の我が主君に寵愛せらるゝとも、軍場にて其人の側に寄るべからず。必ず獨立の心得すべし。又士は弓鐵炮の上手と言はるゝ事好

然れども捨置くべき事ならねば斯くと申すに、台徳院殿默して御座します。十蔵は既に我事聞えつる上は、今夜か明朝は首を刎られなん、とて待ち居たりしに、十蔵呼べ、とて召されけり。思ひ極めて進み出づれば、如何して法を破りたるや。憎き奴哉。切つて棄てばやと思へども、若き者なれば許すよ、と仰せ出されて黄金二枚賜りけり。扨て、江戸へは重ねて、誰人にもあれ一人も忍びて御供に参りたらば重罪たるべし、と固く仰せ出されたるとなり。

○坪内玄蕃心得の事

石谷十蔵定清、坪内玄蕃に向ひて、度々の功名世に高し。天晴心掛にて功名を遂ぐべき道も有らば教へられよ、といふ。坪内聞きて、能くこそ問はれたれ。人々事に臨みて神の力を頼み、八幡八幡といふ。我も又頼みては相頼になりて成就せじと思ふにより、我は毎も八幡といふ神を刺通さんと、一筋に思ひて後を取らざりし、と言ひけるとぞ。

○道化清十郎平野與兵衛に對面の事

道化清十郎は美濃の人にて、信長に仕へて度々武功勝れたる故に、信長清十郎が指物に無雙道

ぬものなり、能心得られよ、といふ。彦助させる事とも思はず。其後何れの戰にや、川際に野々口打出でたる處に、朝霧棚引きて物色見え分かず。時に山中が教へし事を思ひ出し、手綱を控へ、爰にて目が見えぬと言ひしは吾後れたるならん、と目を塞ぎ心を靜めて目を開きたるに、川の半に物具したる武者大差物を指して只一騎渡り來るを見附けて、心も爽に目も明に成りたれば、押並べて引組んで落ち首を取りたり。後に彦助、是も我眞實の功名には非じ。彼敵大差物に身の疲れて輒く我に組敷かれたるならん。彼敵も物前に目が見えざりつらん、と語りき。

○石谷定清御供に參る事

石谷十藏定清は、先祖は遠江石谷村の人なり。大坂御出陣の時江戸に殘させ給ひしに、御跡より從者一人に具足箱を脊に負せ、自ら鎗を荷ひて潛に江戸を出で、駿府にて追附き奉りけり。兼て心易かりし近習の人に賴り、江戸に殘り申す事口惜く存じ重き御法を破りて參りぬ。首を刎ねられん事は素より覺悟したる事なれば、如何に御咎蒙らんとも露ばかりも悔む事は候はずと申上げて給はり候へ、と言ひしかば、將軍には殊に法制を嚴に思召し給ふなれば爭か御許されの有るべき。若し御宥有らんには御跡より引續きて追々に來るべければ、必ず烈しき刑に行はれなん。

て候。疾う〳〵首を刎ねらるべし、と言ひて平伏しければ、謙信打笑ひ、吾に智仁とは相應せざる虚名なり。疾馳歸りて椎名に能く仕へよ、と言はれしかども、彼の士越後に歸りて、農夫と成りて一生を終りたりとかや。

○久世三四郎坂部三十郎物見の事

東照宮何れの時の軍にや、久世三四郎宣廣、坂部三十郎廣勝二人を物見に出し給ふ。坂部は勇める色あり。久世は氣色甚だ悪う見えしかば、側より笑ふ人の有りしに、東照宮、坂部は天性の剛の者なり。久世が及ぶべきに非ず。然れども久世は人に劣りて生甲斐無しと思ひ定めたる者なり。其故に務めて勵む故、心を勞して其氣色顯れて見ゆ。今見よ、久世は坂部よりも敵近く進み行きて見て歸らん物を、と仰せける處に、二人歸り參りたるが、果して御詞の如くなりけり。東照宮、坂部は生得の勇を賴にして懈あり。久世は勵むをもて味深し、と感ぜさせ給ひけり。

○野々口彦助物語の事

明智光秀が士野々口彦助、山中鹿之介に逢ひて功名せん事を問ふ。鹿之介、物前には必ず目の明か

方助け來れば勝田打伏せられ頭半切られたり。敵引取りたるに勝田助らじと思ふ。勝田手にて頭を持上げ、未だ死せざるに人々は捨てて歸るや、と言ふを聞て助けて歸りけり。勝田も度々の功名あり。後松平右衞門大夫に仕へけり。竹中が論尤士たる者の知るべき處なり。弓箭取る身は朝夕に軍旅の事を論ぜん事有らま欲しき事なり。然らずば必ず天の冥加に盡くべきなり。戰國に生れし人は、其事に臨みて功有りて祿を得たるにてこそあれ。今泰平の時に生れ、父祖の蔭にて祿を世々にするは、天より士の職を命ぜられたるなり。天より命ぜられたる其任を忘れなんには、天の冥加に盡ん事必定なり。又天下の四民の上に在りて下を鎭むる職疎にせんは、口惜かるべき事にこそ。

○峯澤某謙信を擊たんとせし事

謙信の許に峯澤何某といふ士、罪有りて放斥せられしに、越中の椎名に奉公し、謙信越中へ師を出されし時、彼士叢に隱れ、鐵炮を持ちて伺ひ居たりしが、俄に鐵炮を傍に投捨てて泣居たり。謙信見出して、如何に峯澤珍し、と言はれしに、さばかりの仁君智將を討ち奉らんと存ぜし事悔しく成りて候。今遙に見奉りて、先に屋形の心に背き、又斯る設を工み申す事此上も無き大罪に

常山紀談　巻之十一

○竹中重治心掛の事

竹中重治曰、分に過ぎたる價を以て馬を購ふ可らず。其馬に乗りたる時能き敵と見かけ追詰めて飛下りんと思ふ歟、或は又鎗を合せんと下立つ時、馬副の人の續かざれば此馬人の物に成るべし。又斯る馬は得難しと思ふ心出て期を延す事有り。此能馬故に却つて名を失ふ事も有るべし。かせ士は金十兩にて馬を購はんとするに五兩にて求むべし。惜氣もなく飛下り乗放ちて能き時は捨てもすべし。扨て五兩の金にて又馬を求むべし。馬に限らず此心得有るべきなり。身をも義によりて捨つるぞかし。まして財寶をや。塵芥とも思はゞ、掛常に有るべきこそ士の本意なれ、とぞ。

北條家の既を預りし諏訪部といふ者度々功名あり。何れの時の軍にや、勝田八左衛門といふ者と二人物見に出る。敵不意に出でて附慕ふ。二騎引取る時、諏訪部は馬を預る故勝れたる馬に乗りたる故、乗切つて歸る。勝田は後れたり。敵追詰めたれば下立ちて相戰ふ。味

送り參らせしなり、とて受取らずして止ぬ。栗山も如水の風に習ひたるにや、君臣共に賴母しき事ぞかし。栗山の戒をもて惣て世の有樣を見るに、士と言はるゝ人の體こそ無下に口惜しけれ。多くは美衣を著飾り明暮酒宴して、馬具武具樣の物如何に有るやらんも知らず。多くは商家に典當し、或は茶の湯よとて古び缺けたる器の何の用も無き物に數金を費し、博奕とてあらぬ戲に夜を明し、斯ばかり無一に言ひ交しけん人の黃金を奪ひて、其人の赤螺になるも顧みず。是はそも盜賊の心にも劣り果てたる事なるべし。扨物語するを聞けば、多くは女色の戲れごとのみにて、禮義廉恥は露ばかりも知らず。又或は儉約にことよせて利倍の事には錐刀の末をも爭ひ、人を欺きて己が得有らん事を願ひ、或は奢侈に耽りて用度に苦み、商人に向つて首を垂れ、其人の恩を得て金銀を借り、是を恥ともせず。門を出づれば從者數多召具し、我は門地の云々なりとて、途中にて人を嚴しく追拂はしめ、家人を飢ゑしめて購ひたる價を遣らず。大國の君も亦大かた斯の如し。不仁不義の行を爲して、世の人の誹笑も知らず。世界は皆斯くなるよと思へば、風俗の衰へ無下に口惜き事なり。

は、後日に黒田が者共主君の援ひを待ち兼ね、皆打殺されたりと人に笑はるべし。是日本の武名を穢すに候はずや。弓箭取身は假にも名こそ惜く候。且は今生に暇乞と存じて、告け奉る書簡殊更に改め申しき、と申しければ、長政大に悦ばれけり。

○栗山利安儉約の事附日根野備中守黒田家に銀を返す事

利安若き時は善介といひ、中頃は四郎兵衛といふ。長政に筑前を賜りし時、名島の城に長政居て、左右良の城に利安を置かれけり。祿一萬五千石、極めて儉なる人なり。人の衣服の美麗なるを見ては衰晴といふ事の有りといひ教へ、又價高く馬を購ふ者有れば、然ばかりの馬も二疋の用をば爲さじ。何とて無益の費するぞ、と戒めけり。然れども事に臨みて金銀を惜むの心なし。從者を勞り憐み、貧乏を助くる事、尋常の人に大に踰え勝れり。

日根野備中守朝鮮に使として往く時、黒田如水に銀を借り、歸りて後如水の許に行きしに、如水近習の士に、先に人の贈りし鯛を三つにして、その骨を烹て饗し候へ、と言ひしかば、客畜の甚しき事よ、と思ひ居たり。頓て肴を出し酒宴有りし後、彼借りたる銀百枚取出し返せしに、如水、始より返し給はらんとの心にて貸し候はず。異國に渡らるゝにより餞まれしかば

○和寧館合戰栗山利安武功用意の事

慶長二年日本の軍復渡海し、黑田長政の先陣栗山備後利安、後藤又兵衞基次、衣笠因幡、母里但馬、黑田宗右衞門以下三千許和寧館（豐臣家譜に全義館）に陣せし處に、明の援兵押寄する。其由長政に告けよ、とて書簡を書きけるを利安見て、敵懸り候間早々に救はせ給へと言ふ詞や有る。書き改めよ。敵押寄せ候。先陣は少も心を勞せらるゝ事有る可からずとこそ申すべけれ、とて直させてぞ告けたりける。斯くて敵寄來れば利安先陣して打破りたり。長政聞くと等しく打出て揉みに揉んで駈け來られしに、敵早護龍臺を指して敗北しけり。先利安が陣所に入りて、何とて軍を仕たるや、と言ひも終らぬに、利安目を見出し、押寄する敵に辭退する事や候、と申す。長政汝等討死せば我生甲斐無しと思ひて斯くは言ひしなり。何とて疾告來らざるや、と言はれしかば、傍より、告け申す書簡の詞を書改むるとて遲かりき、と申す。利安、夫は臣が改めさせて候。仔細は云々なり。假令疾く救はせ候へと申すとも、行程隔りたれば無益なり。敵は四萬許も候はん。味方必死を思ひ定めて軍すべきにて候。假令屍を異國の野原に晒すとも、名は後の世に傳はるべし。黑田が先陣の剛の者共、大敵に取卷れ潔く討死したりと言れなん。又疾く救はせ候へと申さんに

つれば、森本、さても快き事かな、と言ひも敢ず馬にひらりと打乗り、一鞭打ててつと駈け出し、庄林に續かれよと云ひ捨てて敵に逢ひ首を得たり。二人とも清正の士大將大剛の者なり。森本が鎗は白鳥毛を鞘とし、庄林は黒鳥毛を以て鞘とす。世の人黒鳥毛白鳥毛と言ひ合へり。

○清正の花押筆畫多かりし事

朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時、清正の花押殊に筆畫重り、稍煩雑りしかば、福島正則冷笑ひて、病重くなりて遺言の時の狀惡からん、と言はれしに、清正、我はさは存ぜず。戰場に屍を晒すとも、汚く逃げて褥の上に死んとは思ひ設けず候。然れば遺言狀何かは候べき、と答へられしかば、正則詞無かりけり。

○後藤基次龜甲の車を造る事

晋州の城を攻めらるゝ時、黒田長政の士大將後藤又兵衛基次、龜の甲といふ車を作出せり。厚板の箱を拵へ内に強き切梁を設け、石を落し掛けても箱の摧けざる手當をし、箱の内へ後藤入りて、棒の棹を指し車を箱に仕かけ、進退自由に廻る樣にして城際へ押詰め、石垣を崩して乘入けり。

○清正の士卒土穴に住みし事

慶長二年二月、清正再び朝鮮に渡られしに、船の著きたる處は北地にして寒風烈し。土民ども土穴を穿ちて其中に住居りしに、日本の軍兵押渡ると聞き逃走りしかば、清正の兵共土穴に入りて臥す。清正漫に民を殺さず、非道を嚴に戒めしかば、後には商人も物を馬に附けて來り賣りしに、寒氣以ての外に甚しくて、馬の毛に氷柱の下りてからめきて鳴る聲、土穴の中に聞えけるとかや。王元美が詩に、

風劈面疑裂　凍粘髭有聲

と言へるを懐ひ合されぬ。軍兵晝は終日風砂の中に立ち、夜は土穴に臥しける故、皆雀目に成りしを、土民教へて蔦を食して癒えけるとぞ。

○森本庄林黒白鳥毛の鎗鞘の事

朝鮮にて何れの處の戰にや、清正の士大將森本義太夫流矢に臂を射させたり。斯る處に庄林隼人馳來るを見て、如何に手負ひたり。此矢抜いて給はれ、といふ。庄林馬より下りて抜いて捨

のは大事と心得たるぞよき。油斷大敵といふ事有り。我物具せず身を安じ度くは思へども、左有らんには皆懈るべし。夫故に身は苦しけれども懈無き爲に斯くはせしなり。萬一の事有らん時懈りて事を仕誤るならば、今迄の武名虛名にならん事を慮ればなり。凡上を學ぶ下とて、大將寬げば下は大に怠るものなれば、常々陣法を嚴にする事に候。上一人の心下萬民に通ずるとかいふ事の有るよ、と答へられけるとぞ。

○朝鮮より虎と象とを渡す事

朝鮮より虎と象とを引き來る。象は柔順のものなれば細き綱にて引きけり。虎には鐵の鎖を附け左右より七八人取附て引來る。朝鮮渡海の諸將一旦名護屋に歸り集られし時、彼虎に大力の男數多左右に鎖を控へ、吼と言うて駈け出し、幾らも並居たる中を通りければ人皆驚きたるに、清正膝立直し拳を握り、臂を張りて虎を屹と睨まれしに、虎も暫し立止まりて清正を睨みて打過ぎぬ。嘉明は壁に倚り掛りて居眠して在りしが、虎通り過ぎたる後も初に異らず。稍有りて目を開き、何事に騒がれ候ぞ。虎を引通れる故にや、といと靜に言はれけり。

朝鮮にて清正全州に在る時、釜山海より十里餘の程、日本の軍兵城々を守りて、七八里或は十里許にて伴の城を設けたり。清正を太閤呼れしかば、日本に歸るとて打立たれけり。戸田民部少輔高政密隅に有りて清正と舊友なれば、饗すべき用意して待たれしが、士大將眞鍋五郎左衞門、神谷平右衞門を途中まで迎とす。四里許出づれば清正の先陣見ゆ。其頃は四方に敵無く無事なり。二人とも革羽織袴にて出でたるに、清正の軍兵皆物具して箪食附け旗を張り立て、磨管の鐵炮五百挺眞先に押て、鐵炮には火繩を挟み火を附けたり。清正は溜塗の物具銀の長烏帽子の冑の緒をしめ、頬當脚當して草鞋をはき、銀の九本馬簡の馬印を自ら背に指し、月毛の馬に白泡噛ませて來れり。二人馬より下て迎へけるを、清正見て、民部よりの迎の使者骨折なり。早くそれへ著陣せん。殊外に人々垢附きぬ。風呂をたて下々まで湯を賜はりなば大慶ならん。此由疾く歸りて申されよ、と詞を懸らる。二人、承り候、とて馬に乘り、急ぎ歸りて斯くといふ。程無く清正著陣せられ、屏重門より入る。椽にて民部近習の士二人寄りて、清正の指されし馬簡を取つて旗離に立つる。清正椽に上らんと草鞋の紐を解き脚當の緒を解く時、清正腰に附けたる緋羅子の袋を座敷へ投入れたるに、どうと落つる。米三升許に味噌銀錢三百文入れられたり。馬印を指すに腰の釣合是にて能し、となり。民部驚きて、十里近きに敵も無くて如何なる事ぞ、と言へば、清正も

とし給ふを、人々押隔てたり。長政はさあらぬ體にて、人々に色代して靜に座を立ちて陣所に歸る。斯る所に肥後國に逆徒一揆を企つと聞えければ、太閤大に驚き、長政を召出し、汝が嫡子左京大夫幸長罷向ひて切靜むべし、と下知せられ、本多中務大輔忠勝を添へて肥後國へぞ向けられける。

○井口與市主從功名の事

朝鮮にて、何れの所の事にや、廣き野に道有りて向うは山の麓なるに、大穴を構へ射手を伏置きて、行きかゝる日本人餘多射殺しけり。黒田家の兵井口與市が從者山崎喜藏、いで參つて見申さん、と言ひも敢ず走り行き、井口も馬より下り走入りければ、山崎射手三人斬伏せる。井口續て攻入り追散す。井口、恩賞に望候はず。天晴朱柄の鎗免され候へ、といふ。物師共寄合ひて、武功度重るか、或は一日の中に首七つ取る時は朱柄の鎗持すると申す事の候、輕々しく許し難き事にや、といふ。井口是を聞き、其後一日に首七つ取りて朱柄の鎗持せけり。

○清正の武備嚴重なりし事

べし。三十萬の軍勢を三手にして利家氏鄕に先陣させ、三道より打破り、眞直に明朝に攻入るべし。日本の事は德川殿御座せば心に懸る事なし。如何に思ふ、と有りければ、東照宮聞し召し、利家氏鄕に向はせ給ひ、人多き中より撰び出されて、一方の大將たらん事面目にてこそ候へ。抑我等弓箭を取りて年寄候。斯る時に人の跡に屈み殘りたらんは口惜き事なり。必一方の先駈を承るべし、と仰せられけるに、淺野彈正少弼長政進み出て、暫く待ち候へ。殿下此年月の御振舞昔に替りて候。古狐の入替りたると存ずるなり、と申しも果てぬに太閤大に怒り、やあ秀吉が心に狐の入替りたる所謂屹と申せ、申損じなば首打落さんものを、と睨まれたるに、長政ちつとも騒がず。長政が如き何十人が首刎ねられんも何條事の候べき。抑由無き軍を起して朝鮮八道は申すにや及ぶ、日本六十餘州に父を討たせ兄弟を失ひ、夫に離れ子に先立ち歎き悲しむ者滿々たり。夫に兵粮の運送相加はり、六十餘州の內悉く荒野となる。今發向候ひなんには五畿七道盜賊發起せん事必然なり。德川殿如何に思召し候とも爭か是を防ぎ給ふべき。爰を思し召して先陣とは仰せ候やらん。殿下昔の御心ならんには、是程の事など御心附の無るべき。是唯事に非ず、一定古狐の入替りたるに候。鄙き人の詞に、人取らんとする鼈は必ず人に捕らるゝとは此事に候、と憚る所なく申し放てば、太閤何れにもせよ己が主に斯雜言するこそ奇怪なれ、とて飛蒐らん

衛門、かぎ懸の三介五人打乗りて番船の中に押入たり。三介、船は何れ、と問ふ。正中の本船に著けよ、と下知し、簸て乗移る。敵其勢に恐れ、船底に入りて劒を抜き鎌を揃へて待ちかけたるに、嘉明少もためらはず飛込みたれば、従者なにかは殘るべき、續いて飛入りて撫切にして本船を乗取りたれば、諸將も追續き船を押出し來る。既に鐵炮の業に火移り、燒船を乗取る者多し。河合庄次郎は十六歳なるが飛入るとて海に飛込溺死す。佃次郎兵衛、加藤權七郎勝れたる功名せり。嘉明一人の武勇にて七月十六日白晝に押寄せ、番船百二十艘、一艘に五百人三百人乗組たるを、僅の士卒にて悉く海に切沈めたるは古今に稀なる事共なり。秀吉感狀を與へ、六萬二千石に增祿して十萬石を與へらる。池田家の長臣池田河内が妻は嘉明の女にて、河内が男伊賀は外孫なり。伊賀若き時外祖父に武功の事を尋ねければ、今は年老て過ぎつる事皆忘れたり、とのみ言ひて止ぬ。から島の船軍の事を問ふに、十五六歳なる小姓の船に乗移る時、矢に中り海に落ちて死したりき。不便の至りなり、と只此事を語りて他の事に及ばざりしとぞ。

○淺野長政諫言の事

太閤名護屋に御座して朝鮮の軍はかゞ〳〵しからぬを怒り、諸大將を集め、今は秀吉自ら押渡る

菅の家に持傳ふ。備前吉次が作なりき。大德寺春庵和尚其刀に鼈秦と名を附けたり。秦は虎狼の國と言ひし故にこそ羅山林子も銘を作られたりと言ふ一說あり。

○泗川の城に狹間を切る時の事

文祿五年朝鮮にて、泗川といふ處に城を構へたる時、門脇の狹間を垣見和泉守家純上て切れ、と下知しけるを、長曾我部元親見て、人の胸邊より腰邊を當てて切りたるこそよけれ、といふ。和泉守、下げたらば敵城內を覗ふ可き、と言ふ。元親、此門へ押寄せ、心よく內を見る程の城兵にて有りたらば、一支もすべきや。上げて切らば敵の首の上を射べきか、と笑ひけるとぞ。

○加藤嘉明拔懸高名の事

慶長二年朝鮮の番兵船數百艘をから島に置きて日本の軍船を防ぐ。諸將番船を乘取るべき評定有り。加藤左馬助嘉明、目に餘る大軍を小勢をもて爭か打勝つべき、と言はれしが、密に手の者に下知し、五人十人船に乘り番船の方に漕向ふ。嘉明、法を背く者共を押留めよ、とて追々船を出されしが、稍有りて、我押止ずば止らじ、と言捨て船に乘り漕出す。河合庄大夫、同庄次郎、荻野作右

○菅政利後藤基次虎を斬る事附羅山先生南山銘の事

黒田長政朝鮮の全義館に陣せられしに、或曉俄に騒ぎければ、敵夜討にや寄せたると、と井樓に上られしに、虎馬屋に入りたるにてぞ有りける。恐れて出づる者も無かりしに、菅政利刀を提げて走り向ふ。虎咆み掛る處を飛違へて腰骨を深く斬附けたり。虎前足にて立上り、愈猛りて危かりし處に、後藤基次駈け来り、肩先を乳の下かけて切り附くれば、菅得たりやと虎の眉間を切割つて殺しぬ。長政、汝等は先陣の士大將として下知する身なるに、獣と勇を爭ふ事大人氣無しとぞ言はれける。政利が刀に林羅山銘を作りて南山と名附く。周處白額虎の故事なり。銘に曰く、

節彼南山　山惟劍鋩　菅政除去　醜吏逃藏　截邪斬佞　惟刀在箱　惟其言虎　若有眞僞　傳之萬世　爲子孫常

朝鮮機張にて長政虎狩せられしに、虎一匹人の群たる中に駈け来る。菅六之助が足輕の肩を咥みて後に擲け、又一人をも腕を咥みて投倒しけるが、六之助其日朱具足を著たるをや目に懸けけん、忽ち飛懸りて、菅一尺三寸有りける刀を抜いて忽に切伏せたり。其刀今に

に雑へて飼へ、と言はれしに、馬の力落ちざりけり。

○太閤名護屋にて大言の事

明の援兵大軍にて朝鮮に來り、日本の軍危しと太閤聞かれ、軍評定有りし時蒲生氏郷進み出で、何程の事か候べき。氏郷に朝鮮を賜り候へば、切取にして打破る可きものを、と言はれしかば、太閤是より氏郷の大志有るを忌み憎み給ふ。又同時隆景使を以て、隆景が存ずる所は、十萬の軍兵渡海せば城々を守らせ、隆景先陣して明朝に押入り北京を攻落すべし。此旨申せと申して候、といふ。秀吉、小早川の智謀さぞあらん。人々能く聞かれよ。秀吉功を遂げずして死するとも、秀次を大將として明朝に攻入らん時、我魂魄雲に乘じて鐵の盾をつき、唐土の奴原を一々に蹴殺して捨てなんものを。昔も柘榴を嚙みて火となせし者の有りしと聞く。其小男の名を忘れたり、と言はれしかば、施藥院秀成、夫は北野の天神の御事にて候、と申す。秀吉、夫ぞかし。雷になりて天に上りしと言ひ傳ふれど、吾陰嚢の垢程もあらぬ物を、と大音に言はれしを、聞く人毎に驚きけり。

○清正虎を狩られし事

朝鮮にて何れの所にてか有りけん、清正の陣大山の麓なりけるに、虎夜來りて馬を中に引提げ、虎落の上を飛び出でけり。清正口惜き事なりと怒られけるに、小姓上月左膳をも虎來て咥殺せり。清正夜明くると山を取巻いて虎を狩りたるに、一疋の虎生茂りたる萱原を掻分け、清正を目がけて來る。清正大なる岩の上に在りて鐵炮を持ち狙はるゝに、其間三十間許、虎清正を睨みて立止る。人々鐵炮を揃へて搏たんとするを、清正下知して打たせられず。自打殺さんとの志なり。斯て虎間近く猛り來り、口を開きて飛掛る處を搏たれしに、咽に打込みたれば、其處に倒れ起上らんとせしかども、痛手なれば終に死しぬ。

○清正船を取らせられし事

清正朝鮮にて大川に打臨み、向の岸に船を繋ぎ、陸に陣屋有りて族を立てたるを見て、彼を見よ。鷁岸に添ひて泛みたるは敵は無きぞかし。誰かある水練の者彼の船取來れ、と下知せられしに、果して清正の言の如し。又清正の陣所に糠無くて馬秣に困めり。清正、藁を細に切りて豆

則を屹つと見て、如何に市松何時の間に大きに成りたるぞや、とて又秀家に向ひて、今までは中納言殿と敬ひ申したりき。今日よりは中納言めと申すべし。清正を捨殺し、恥を異國に晒す人々なり、と言ひ捨てて座を立つ處に、清正粮盡きて都城に引退き、三里許の近所に陣したり、と告げ來れり。遠江守は清正と生死を同じくせんと思へるに免れけり。

○吉田又助川幅を積る事

朝鮮の平安川は深さ八九尋、四五百石積の船の往來有りて、日本にては見ざる大川なれば、川の廣さを諸家の士或は七八町十町、或は十二三町有らんと言へ共審ならず。黒田長政の士吉田六郎大夫稚名六之介、後壹岐、此時六郎大夫といへり又助父子に見積り候へ、と下知せらる。斯樣の事に慣れず候故覺束なし、と辭すれば、父子が組に巧者も有るべし、と言はれて、翌朝又助組の士を引具し、川岸に出で、川の向に朝鮮人三人見えたり。又助、小柳權七は長高き者なり。彼向の人退かざる間に急ぎ堤の上を行くべし。指物を振る時踏み停れ、と言含め、權七走り行き、其丈向の人と等しく見ゆる時、指物を振りたれば立停りぬ。卽其間を打ちて見れば八町五段なり。長政聞きて、又助二十一歲老功の者にも劣らじ、と稱美せられけり。

○國富源右衞門組討の事

南大門の軍に明の兵を追かけ、秀家の士國富源右衞門とて剛の者大力なりしが、爽に鎧うたる敵に追附きて、三尺餘ある刀を取延べ、三刀まで斬りたれども甲堅くて手も負はず。國富刀を捨て飛掛り引組んだるに、彼敵國富を取て押へたり。跳返さんとするに大磐石を横たへたるが如し。國富脇差を抽いて二刀刺せども、如何なる甲にや少も通らず。已に危かりし時、味方數十人落合ひて敵をば討取りたり。

○加藤光泰大言の事

朝鮮にて秀家を始め都城に在りしに、加藤清正進んで行程數日を隔つ。諸將糧盡きんとする時、加藤遠江守光泰獨云く、清正都城を放れて敵に向ふ。人々都城を去つて食に就かんとせば清正を捨殺すべし。今爰を去る者は復男子の交は非じ。清正を捨てん事日木の恥なり、といふ。人々糧既に盡きたり。如何せん、と言はれしかば、遠江守怒つて、砂を喰はんものを、といふ。砂は喰れまじ、といへば、遠江守居丈高に成りて、汝等砂を喰はん樣よも知らじ。我教ふべき、とて福島正

先陣に向はれけり。殊に寒風烈しう吹きたりければ、長政大綿帽子を被られしが、先陣に行きて帽子を脱いで、世に聞えける水牛の冑の緒を締られけり。隆景の軍兵ども是を見て、今日の軍に勝ちたり、と勇みけるとかや。長政今年二十五才、武勇を斯く人に信ぜらるゝ事並々には非ざりけり。

或説に、漢南にて明の援兵大軍なりと聞えしかば、諸將評定して吉川元春を先陣とす。元春勇猛の名高き故なり。元春軍兵を後面にして敵を見せず。敵近くなりける時、士大將某燒飯を十許持ち來りて、時宜しく候。きこしめされ候へ、と言ふ。元春是を五つ食し、士大將二つ食して、殘りを近習の者に與へたれども得食ずとかや。敵合二町許に成りける時、元春下知して一同に向き直り、透さず突き掛り敵を追崩して、頓て引取られけりと言へり。目に餘る大軍に逢ひて士卒氣を奪れ見崩れず可きか、と元春思ひて斯くせられたりとなり。是誠に味方の氣を挫かしめざる將略にして、元春は關西無雙の勇將たる事誰か非問すべき。然れども元春は朝鮮陣より前に死去有りしかば、隆景斯くせられたりしを傳へ誤りたらんも知るべからず。

して、誠に雙なき志、古の名將も是には過ぎじ。然ればとて二萬許の兵にて大軍に取巻かれ、空しく討死有らん事口惜く候。只疾く都城に入りて日本の軍の先陣せられ候へ、と有りしかば、隆景、さらば日本の先陣は隆景仕らうずるにて候。人に先陣をば駈けさせじ、とて黒田長政、久留米秀包打連て都城に歸られしが、南大門の外碧蹄館に陣せられけり。二十六日の曙に李如松が軍押來る。旌旗を立て連ね何十萬とも測るべからず。秀家を始として大軍に野合の合戰危からん。都城に楯籠らん、と言はれし時、立花宗茂目を見出し刀の柄に手を懸け、敵怖ければとて逃籠る樣や候。只馳合せ蹴散して候はん物を、と勇まれしかば、然らば誰か先陣せん、と言ふに、隆景吾先陣せんと兼て言ひつる事よ。誰人にても有れ思ひも寄ず、とて、頓て陣を進めらる。士大將粟屋四郎兵衞、村上彈正、野島掃部三千許喚き叫んで相戰ふ。立花宗茂、久留米秀包、毛利元康六千餘り奇兵となり、右の方三町餘に陣せしが、横樣に懸る。隆景旗本一萬餘を率して一文字に切つて掛り、忽ち敵を討破り、首數多得られけり。宗茂取つたる首二つ鞍の四方手に附け、隆景の方に來られしを見て、取敢ず、見事に候、と言はれしかば、宗茂毎も仕るにて候、と答へられけり。此軍未だ始らざりし時、黒田長政唯一騎歩の士六七人召具し、隆景の旗本に來る。隆景、よくこそ來られ候へ。先陣の粟屋に力を添へ給へ、と言はれしに、長政悦びの色面に顯れて、承り候、とて

の皮、又は孔雀の尾熊の皮いろ〳〵の馬甲かけ、金の鬚斗附の刀脇差邊も輝く許なる。中にも遠藤文七郎、原田左馬介は佩添に木太刀を一丈許に作り帶たりしが、鞘尻の下りければ、金具を眞中に設けて糸を結び肩に懸けて馬に乘りたりけり。見物の群衆政宗の軍兵押通る時目を驚かす出立なれば、一同に喚き動きけるとぞ。

明の援兵朝鮮に來り、平壤に有りて練光亭より日本の兵を望みしに、江上に往來する者大劍を荷ふ。日光下り射て電の如し。是は眞の劍に非ず。白蠟を沃ぎたる物なりと言ふ事、懲毖錄に錄せしは、伊達家の二士の木劍の事にや。

○朝鮮南大門合戰附後向の備の事

朝鮮南大門の軍は文祿二年正月二十六日の事なり。明の援兵鴨綠江を涉り押來る。小西行長叶はず引退く時に、小早川隆景は開城府に止り一軍せんと待ちかけたり。浮田秀家使を以て、疾く都城に引返して一所に軍有るべし、と申されしか共、隆景、吾日本を打立ちしより異國に討死せんと思ひ設けたり。年老い候ひぬ。今生の思ひ出に異國の大軍に駈け合せ、大國の耳目を驚かす軍して屍を戰場に晒さんと存ずる所なり、とて引取らん氣色無かりければ、又大谷吉隆を遣

○朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事

東照宮江戸に御座しませしに、秀吉の使来りて朝鮮を伐たるゝ由を申す。斯て一人書院に御座しまして深く思案の體に見えさせ給ひける時、本田正信御前近く出でたれども御詞も無し。稍有りて正信、殿は朝鮮に渡海有る可きや、と申せども、猶默然とせさせ給ふを、斯いふ事三度に及びて後、何事ぞ。喧しきに人や聞くべき。箱根をば誰に守らす可き、と仰有りしかば、正信、さては疾く御思慮定りける、と言ひて退出しけり。

○伊達家の士卒異風出陣の事

朝鮮を伐たるゝ時、關東の諸將も兵を出さる。伊達政宗は遠國たる故に、騎兵三十騎鐵炮百挺鎗百本と軍配を定められけるに、千許の士卒を引具し、天正十九年正月九日岩出山を打立ち、二月十三日京に著く。小西加藤は先陣たり。岐阜中納言秀信を始として關東の諸將を出さる。其道は粟巢より戻橋を大宮に押通る。政宗の旗三十本紺地に金の丸附けたる具足著て、弓鐵炮の者も同じ出立に銀の髭斗附の刀脇差、金の尖笠を冠り、馬上三十人黒袍に金の半月の出でし豹

は如何に、と問ふ。敵東の山に陣し地の利を得たり、と言ひも果ぬに、先陣敗北して一揆幕地に懸り来る。清正高き處より横合に突いて懸り、天草民部敗軍せしを三里許追討にしたり。清正十文字の鎗を突折り、七度鎗を合せ、其勢に乗じて志岐の城を攻落されけり。清正の鎗は十文字にて三日月の形なり。志津の作なりしが突折りて片鎌と成りし刃を拾取りて、佛木坂の神宮に納めしとぞ。鎗の鞘熊毛なりしに、癪煩ふ人有れば、其毛一筋抜きて戴かするに、忽落ちけると言傳ふ。朝鮮人は今に至るまで、小兒の啼く時鬼將軍來ると云ひて啼止みけるとかや。かばかりの猛將類稀なる事なり。

○森本義大夫組討功者の事

清正一揆を攻むる時、或夜森本義大夫清正の前にて軍評定せしに、凡そ組討は力によらず候。心剛にて手利きたれば易き物なり、と申すを、清正、組討は危きものなり。勇に誇る時は必ず仕損ずべし、と戒められぬ。其翌日清正の眞先に森本馬を進むる處に、歩行武者一人寄合ひたり。森本聞ゆる馬の上手なれば、敵を横様に當てひらりと飛下り、立上らんとする敵を引組で頓て首を取る。清正に向ひ、夕申せしに違ひ候哉、と言へば、清正大に賞せられけり。

中守が士澤村大學、と答ふ。此の由を申しければ、東照宮、其大學は若き時才八といひつるが、小牧にての事なりし、秀吉二重澄の軍兵を引き取る時、秀吉六萬許青塚に陣せしを、吾小牧より押寄せて、引き退く敵を打破る。其時細川忠興秀吉の先陣に有りて、才八眞先に進みて鎗を合せし有樣、今も猶目の前に見るが如く覺えたり。斯かる大剛の者に持たす可し、とて、其餘の者を禁ずる事よ、と仰せられしかば、澤村傳へ聞き、今更我功名を世に擧げたる忝さ、と悦びけり。

○加藤清正天草の一揆退治の事

加藤主計頭清正、小西攝津守行長、各肥後半州を賜はりしに一揆起る。天草領は島にて一揆の勢甚盛なり。小西志岐城を攻めけるに、天草木戸の一揆の長天草民部後卷に押寄せ、志岐の東の山に陣す。清正の先陣山岡道阿彌、岡田將監、南部無右衞門、小野木織部、瀧野三位、莊林隼人、森本義大夫段々に進む。清正鴈平次をして先陣を見せしむるに歸らず。又飯田覺兵衞を遣られしに飯田見切つて歸る。平次、只今軍始らん先に進みて戰に逢ん、と云ふ。飯田、知らぬ事は言ふまじきよ。先陣只今追立てられん。戰に逢ふ場に非ず、とて連れて返る。清正、如何に、と問るゝに、飯田、先陣は今打負けて敵追駈け來らん。一の勝は旗本に候、といふ。清正、證

種村肖稚寺はもと柴田家にて譽あり。後招かるゝ人々多かりけれども仕へず。前田利家懇に迎へられしかども出ず。利家、種村が琵琶を彈ずることを好むと聞きて、白雲といふ名物の琵琶を贈られしかば、其志にや引かれけん、利家に仕へて佐々成政と越中朝日山の合戰に、目を驚かす功名を遂けたり。其後淺野長晟に奉公して、彼の白雲の琵琶は今淺野家にありとかや。

○秦桐若甫威の事

黒田家の士に秦桐若といふ剛の者あり。唐團扇長さ一丈許もあるを指物にしける故、敵見知りて近附かず。或時指物を隱して、近々と成て不意に出せば、敵大に驚きて引き退きたる程の者なりけり。

○澤村大學朱柄の鎗を持する事

駿河を攻めらるゝ時、東照宮横目の人を召して、昔より皆朱の鎗の柄、瑇瑁の柄は、武功勝れたる者ならでは持せざるに、近比は持たする者の數多有りと聞く。心得難き事なり。改めよ、と仰出されけるに、皆朱の柄の鎗持せ、菖蒲革の裁附を著て通る者有り。誰ぞ、と問ふに、細川越

寺尾孫四郎、今日は重介を見ず、といふ。重介先にて見ざるか、後にて見ざるか。一番に進みたる敵の馬の毛色、物具は如何に、と問ふに、孫四郎赤面して詞なし。重介、吾鎗脇に弓をもて、後の證に立たれよと云ひて敵一人射倒したる人有り、といへば、鷹見傳兵衛進み出て、某にて候ひき、と言ふ。中納言秀家大坂より備前へ下らるゝ時、雨中の徒然に、浮田修理、同太郎左衛門、花房又七三人を呼んで、軍物語の時、前代の鎗柱功の勝れたるは誰ぞ、と問はるゝに、馬場重介、幸和織部、寺尾孫四郎三人、と答ふ。秀家聞きて、幸和寺尾は武功ありつれど輕薄なりと聞けり。何時とても重介が人に越されたる事なしと聞きつれば、重介こそ勝れ候はんなれ、といはれしかば、三人、重介が武功は申すに言葉も候はず、と云ふ。重介貞實にて詐はず。城下の近き邊に引き込みて、此頃は耕作して有りける由を秀家聞きて、三百石加祿の折紙を、戸川肥後をもて重介に與へらる。如何にしたりけん事達せず。重介是を聞き愈出る心なく、遂に秀家にも仕へず、七十七にて病死す。士は假初にも汚なき心有る可からざるなり。吾數度の戰場に臨み、百死の中に一生を得て、斯く全く終りぬる、と遺言しけり。其子孫池田家に仕へけり。

○利家白雲の琵琶を種村に與へらるゝ事

段にして待ちかけたる處に行きかゝり、三段追崩す。四段より搏つたる鐵炮に、右の膝より臀にかけて打通され、敵聲をかくれば、重介、中らず、という四段をも追立てる。崩れたる土手あるに、胄の鍬を傾け、寄添ひて待ちたるに、柴折り掛けたる谷の向より打つ鐵炮、脊割具足、右の肩かひがら骨の内より臂まで打貫かれ目暗みたり。氣を靜めて見れば、田中藤介間近く來れり。重介田中を呼びかけ、大事の手負ひぬ。此處を退かんとせば追討に遭はん。爰を死所とせん、といふ。藤介、我一支も爲べし、といふ。重介五間ばかり歩みて、郎等の肩に手をかけ靜に退くを、敵慕ひ來れば、藤介鎗を合せ追退けて歸れり。鐵炮に中りし時、大木を以て袋を突き通すが如く覺え、物の色目分かれず。只朝顏の花の色に見えたり、と後に語りけるとなり。備前兒島八濱にて軍有り。浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將にて、戸川平右衛門、岡平内已下渡海し、麥飯山の敵城近き邊にて草を苅る時、敵出て追つ立つる。與太郎馬に輪をかけて味方の兵を求むる處に、鐵炮四胄に中りて馬より落つ。中村宗介同じく討死す。重介馬を射られ、乘り放し歩立になりぬ。月毛馬、葦毛馬、黒馬に乘りたる敵三騎、重介を目にかけて馬を乘り寄する。重介敵に馬を乘りかけられじと、鎗の鉾を後になして脇に挾み、靜々と退く。疲れはしつ、討死よ、と思ひたるに、敵引きて助かりぬ。戸川見て、今日の働ゆゑ我一命を繼ぎたり、と重介を譽めたる處に、

は刀、敵は鎗にて相戰ひ、溝を飛び越えて敵の手の下に潜り入らんとせしに、躓きて俯伏に伏したり。敵勇みかゝりて思ふ所を突き外し行き餘るを、つと立ち上り切り伏せて首を取る。同郡土田の軍にも長六尺に餘れる梶井と言ふ兵を討ち取りたるを、角南恕菴見て、白き浴衣を著、右の肩を肌脱き、太刀打したる兵の有樣昔の辨慶などや斯くもあらん、と驚きたりと言ふ。則重介なり。永祿十年五月十日土田の上蟹口の軍に、敵五人鎗を横たへ山の上より來るを、重介坂の下に有りて一人射倒したれども、味方は續かず。引き返す時、山の腰を引き退く味方、敵追ひ詰めて既に討たれぬ可く見ゆれば、取て返し合せ敵を切り靡け、味方を助けて引き取れり。備前岡山の城主金光與次郎を、直家謀を以て殺し、城を取り得たれども、近き邊に敵多ければ、戸川平右衛門を城番とするに、與力六十人皆行き兼ねたり。重介、我代らん、といふに何の子細か有べき、といふを、直家に告げて許しければ、重介が與力六十人一人も辭退する者無きに、戸川が與力も勵まされて、重介、加勢ならば行かん、と言ふより、戸川馬場三年岡山に在り。美作三の宮の城を直家一時に攻めらるゝ時、城主村上勘兵衛士卒六十人許にて突いて出る。重介眞先に進み、鎗武者四人薙刀武者四人と戰ひて城門の際まで追討す。敵鎗を投突にしたるを奪ひ取つて歸る。高城にての軍に、直家重介を谷の受手とす。敵來らざれば谷より上る處に、山の半に鐵炮を五

敵を追ひ拂ひて歸れり。天文十七年赤坂郡烏取の砦を、大和守攻めて軍あり。二郎四郎膝の口を篦深に射させ、二町許引き退きたる所に、味方に泉養坊といふ伏來て、其矢を抜けば、足萎へて歩む事能はず。大和守の馬に乘りて二三町引き退きたりしかども、馬を返してければ、味方も隔りぬ。敵追つ駈け來らば討死せんと思ふ時、妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟來て馬に抱き乘せたるに、血鎧を越えて流れ朱に成りたるを、敵見て深手負ひたりと見なしたれば、十文字の鎗を取延べ、頻に掛落さんとする事幾度といふ事を知らず。漸に遁れ得て歸れり。首を取つて見とられて見るといふ諺有るは此時なる可し、と二郎四郎常に言ひけるとなり。是十七歳の事なり。後二郎四郎直家に奉公し與力六十人附けられたり。美作三星の城は、浦上宗景番手の兵を遣りて守らせたるを、安藝の毛利家より附城を構へ、三村家親大將として度々合戰あり。直家より馬場を加勢として三星に籠めたり。馬場愛宕精進するとて、五月二十四日細き流に行きて身を清むる處に、敵出でたりと聞き、直に行き向へば、三星よりも鎗提げたる士一人來て馬場に並び進む。敵を追詰めたれば附城より出て是を助けて城に入る。門内を見れば、混雑の兵十四五人折敷きて鎗の先を並べ待ちかけたれば、靜々と引き返す。宗景感狀を與へられ、直家夫より重介と名を改めさせ、家の字をやられけり。備前上道郡妙禪寺の砦の合戰に、重介

常山紀談　巻之十

○馬場重介武功の事

馬場重介職家は陸奥栗尾川貞任が裔孫にて、備前邑久郡北地村に来り居しが、其後も安部といひけるに、京都より来りし馬場氏の人豊原に居て、其の女を妻として遂に馬場と稱しぬ。重介稚名を岩法師と言ひて、十三歳にて邑久郡戸石の城主浮田大和守に奉公し、天文十四年浮田直家は乙子の城に在りて大和と軍あり。直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の畠にて鎗を合せ、疵を蒙りて、戸石の城に歸る。今年十四歳なり。大和守膝に抱き上げて、疵の口を自ら吸はれけり。無雙の剛の者なりとて、名を二郎四郎と改めさせられぬ。程なく直家、花房又七、近藤五郎左衛門、一説に六郎左衛門　星野十郎を大將にして戸石を攻む。二郎四郎白圍の腰差指いて一の城戸口に出る。近藤見て、如何に引くか進むか、と詞を掛くるに、二郎四郎軍場に臨んで引くと云ふ事やある、と言ひも終らぬに、花房、星野共手利の射手にて、弓取り直し是を射る。花房が矢は中指に中り、星野が矢は二郎四郎が持ちたる楯を本はぎまで射貫く。二郎四郎物とも爲ず、

ては五個や十個にては其興薄かるべし。悉皆持ち行く可し。と殘れる蟹を皆新左衞門に與へけるとなん。其頓才實に驚くべく感ずべし。

○上杉景勝大人氣なる事

東西分目の役、德川家康將帥百餘人を統べて小山に至りけるにぞ、上杉景勝長沼に軍し、兵を分け嶮を守りて今や遲しと待ちかけたるに、豫て上杉の臣直江兼續の約せし事にしあれば、上方に於て石田三成豐臣秀賴の命を矯り、毛利、浮田、島津、小西諸將と俱に兵を擧けて美濃路に差懸りける。家康此由を聞きて大に驚き、家康子秀康をして萬人を以て宇都宮を守らしめて、其身は自ら兵を引きて西上しける程に、兼續兵を悉して之を蹤らんと請ひけるに景勝聽さず。時に秀康來りて戰はんと請ふに會しければ、景勝答へて云ふやう、先人謙信軍を用ふる未だ嘗て人の危に乘らず。吾れ亦敢て違はず。且公年少し、我が敵に非ず。吾れ公の父內府の還るを待ちて決戰なさんのみ。糧仗如し缺乏る事有らば當に相給すべし、と乃ち兵を收めて會津に歸りける。此事謙信が勝賴に勇を成さしめたる事と同うして、共に大人の所爲と謂ふべし。

で謝して云へるやう、殿下一日の御耳を拝借し御馥郁き匂を臭ぎたる功能によりて、金銀財寶山嶺の如く集ひ來りて、殆ど座するの餘席之れ無く候、是れ全く殿下の御耳の功能なり、と有りければ、太閤も亦呆然として驚愕きけるとなん。又或日の事なりしが、新左衞門太閤の機嫌を取り、頗る其功ありける程に、太閤の申しけるに、何なりと汝の望める物を賜はせん、と有りけるに、新左衞門の云へるやう、臣敢て大なる望みも之れ無く、唯紙袋二個程米を賜はりたし。太閤、汗は甚々易き事なり。餘り寡欲の至りならずや、と仰せ有りけるに、新左衞門、是にて澤山なり、と申して退出なせしが、籠て二個の紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で、前日御約定の米此に賜はり度し、と米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、流石の太閤も是れには呆れて、暫し言句も無かりける。又或日の事なりしが、曾て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、之を庭の泉水或は其近邊に放ちて娯樂となしけるが、程経て、見厭きたり、とて近習の者に、何ぞ一用を云ひ出づる者には之を與へん、と申されけるにぞ、皆々大に喜悦び、臣は之を紙押になさん、と云ひ、或は、臣は金の茶釜の蓋も無ければ、せめては是を以て其蓋の取手になさん、と云ひ、或は何と云ひ斯と云ひて各々一個づつ賜はりしうち、新左衞門のぞふやう、臣は人類の角力も既に見厭きし事なれば、此の蟹を集へて角力を致さんと存ずるなり、と云ひければ、太閤角力とあり

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤、汝の姓名は何と申するぞ、と問ひけるに、其者の對ふるやう、臣が姓名は卽ち曾呂利新左衞門と申候。太閤、ハヽア奇な姓も有るものなる哉。して其曾呂利と申す姓には何ぞ所以にても有りつるものなるか、と問はせけるに、又對ふるやう、聊か所以之れ有り候。別に非ず、臣の拵へたる鞘は堅くして曾呂利と入り敢て間へず。是を以て曾呂利と申候。太閤、這は奇なり、又折節來らるべしと。他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、汝の姓名は何とか申せしな。對へて曰く、曾呂利々々々新左衞門々々々々。太閤怪みて其重言を尋ねけるに、新左衞門の對ふるやう、殿下先きに臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て對へ候なりと。新左衞門或時太閤に對ひ、願くは一日御耳の匂を臭がせられ度し、と有りければ、太閤は不審しく思ひ、頓智夫又何をか爲すらんと疑ひしが、何は兎もあれ宜し、汝がよきに臭がれよ、と許されしかば、大名の御機嫌伺ひに出づる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふの體なれば、皆々心中密に驚き、頓智夫何を云ふらんか。若しや我れを讒言する者には非ざるか。頓智夫は頗る殿下の寵愛する所なれば、頓智夫が云ふ事御用ゐ有らんも亦測られずと憂ひ、各自邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて密に曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山嶽の如く集ひければ、太閤の御前に出

朝鮮蔚山の役、寄手鎬貴夜密に伏勢を設けて曉に及び、陣營を焚きて退き走る事數里にして、城兵を誘ひ以て大に之を擊たんと爲しけるに、城兵之を追はんとするを加藤清正許さずして曰く、彼火を擧けて退く、疑ふ可きの一なり。又退くに殿を設けざる、疑ふ可きの二なり。又夜を以て退かずして曉を以てする、疑ふ可きの三なり。是れ將に我を誘うて、之を殲にするの巧なるや鏡に懸けて觀るが如し、と暫く見物し居し程に、明の伏勢は巧みし事空しく成りしかば、欠伸しつゝ現れ出でて、終に復城を圍みければ、皆々清正の明智を感ぜられける。

○黒田長政慢言の事

黒田長政常に人に謂つて云へるには、我れ年齢十四より今に至るまで拔群の功績を樹つる事多しと雖も、大功ある如水の子なるを以て、之と比較來りて目に立たざれば人之を稱せず。然るに淺野幸長は軍功なき彈正の子なるを以て、之と比較來りて目に立てば、寸功ある毎に人之を稱すと。是れ少しく慢言なるに似たりと雖も、情實或は斯くの如きもの有らんか。

○曾呂利新左衞門屢 頓智の事

りける。斯くて夜に入り、人々眠に就かんとする時、頻に焔硝の匂なしければ、這は不審と東西尋ね廻りしに、這はそも如何に、取歸りし稻束より炎燃出して陣々に移りければ、偖は又眞田が謀略に當りしか、と急に狼狽騷ぎ出しける所に、城中より三方の城門を押開きて攻寄せければ、關東勢戰はんとする者無く、皆々小諸を指して敗走りける。是れ豫て幸村が計ひにて、稻束の中に密に焔硝を入れ置きたるなり。嗚呼妙智の所爲なる哉。

○太閤勇氣大言の事

豐臣秀吉朝鮮を征せんとて京師を發したる時、或人秀吉に請ひて、彼の國に渡るに漢文を善する者無くては、日本の恥辱とも成りぬる事なれば、宜しく漢文を善する者を從へられて然るべし、と云ひけるに、秀吉笑うて云へるやう、吾れ此の行は、彼が難澁なる鳥跡の愚文を學ばんとするに非ず。將に彼れをして我が輕便なる假名文を用るしめんとするにありと。其勇氣最も稱すべし。

○朝鮮尉山の役加藤清正敵情を察する事

て既に城中へ乗り入らんとなしける所に、城兵共塀の上に立現れ、豫て用意の竹の皮を纔許となく投出しけるに、固より片々然たる物にしあれば、寄手も更に事ともせず、拂ひ除け〳〵て進みける所を、長き柄杓にて煮膽りし白粥を注ぎ掛けし程に、其粥寄手の鎧武具の隙間より肌に浸透み、軍兵共は熱に堪へ兼ね、あな苦しや、と逃出せば、先きに何の意なるを知らざりし付の皮に辷りつ起きつ又辷りつ、人馬共に燒爛れ、本陣まで一捲に敗走しける。

○眞田幸村稻苅陣の事

同役眞田父子の敵の疲勞たる時を計り、部卒を數多城外に出して早稻田に赴かしめ、稻穗を苅り取らせしに、寄手の面々之を見て、偖は城中には糧食盡きぬると覺えたり。いで追駈けて擊取れ、と云ふ儘に、大久保、本多一萬餘騎にて吶と喚きて押寄せけるに、此時城兵は稻を苅取り束にになして脊負はんとする所なれば、追駈け來りし者道を塞ぎて聲々に呼はりけるは、不敵なる哉城兵共、此大軍を引受けて稻を苅らんとは不覺なり、と云ふ儘に切つて掛れば、部卒何かは以て堪るべき、苅りたる稻を打捨てて、我れ先きにと城中へ逃入りける。寄手は大に笑ひ、偖々汗漫なる城方の擧動かな。拙くも此の有樣、と口々に罵りながら、打捨てたる稻束を本陣に持歸

酒宴を催し尋ねけるは、如何に孝高、今天下に英雄豪傑多く在りと雖も、天下を保つべき程の者は誰と思ふや。孝高打笑ひ、某の如き者に爭でか之を知る事を得べけんや。秀吉、我れ試に論はんと思ふなり。先づ言うて見られよ。孝高已を得ず、某考ふるに、當時天下に威名高く、天下をも掌握すべき者は中國の毛利輝元なるべし。秀吉莞爾と笑ひ、誠に輝元は今十餘ケ國を切り隨へ、其威破竹の如くなりと雖も、是れ皆父祖の餘德にして輝元が器量の爲めに非ず。然れば何んぞ天下を保つこと叶はんや。其外に一人在り知らずや。孝高驚きて問ふ。秀吉、眼前にありと。孝高、眼前とは何れに居り候や。秀吉、卽ち其方なり、と聞きて孝高大に驚き、額に汗を流して、何條愚昧の某斯る大器に當らんや、と對へしが、孝高は我が胸中を秀吉に見拔かれ、釰の莚に座する心地して、其日の酒宴を退出し、我館に歸り、所詮秀吉に見拔かれし上は、我が身の命も危し、と夫れより世を悟り直樣入道し、是れまでの望を水の泡になさんと云ふ心にて如水と號し、家督を子息甲斐守長政に讓りて隱居をなしにける。

○眞田幸村謀計を以て大里を退く事

第二回上田籠城の役、關東の大軍上田の城を十重二十重に取圍み、空堀に飛入り〳〵塀に登り

に落つ。七藏少しもひるまず乘込んで、櫂の木取つて敵三人叩き伏せ功名しけり。七藏父を若狹といふ。相州の人にて武者修行し、尾州前田村に居ける頃、信長呼び出されけり。七藏尾州三本木の軍に、事急にして編笠を冠りながら一番鎗を合せける故、信長大に賞美して編笠と呼ばれけり。後秀吉に仕へて度々功名有りしかば、紫紬井筒の紋廣袖の小袖を與へられければ、甲の上に著たり。秀吉の旗奉行と成りたり。

○井伊直孝用意の事

井伊直孝の曰く、人毎に具足櫃を持たせて早く取出す志を用意する者あり。取出す間も遲き程の事有らば、何時も素肌にて駈附けてこそよけれ。具足を著たると著ざるとの差別無き事なり、と申されけり。

〔補　遺〕（以下八章異本に據りて補ふ）

○黑田孝高法體の事

黑田孝高は智謀衆に超えし良將にて、常に天下の望み有りけるが、或時豐臣秀吉孝高を召され

○冑の名様々有りし事

加藤嘉明の冑は形を富士山に造り爲して、名をも則富士山といふ。具足の胸に天人の雲に乘りたるを蒔繪にしたり。竹中重治が冑は一の谷、明智秀俊が冑は二の谷といふ。攝州一の谷二の谷相並べり。又柴田伊賀守勝豊が冑は鐵蓋が峯といふ。是は一の谷より高く峙ちたる山なれば斯く名附けしとかや。此餘浦野若狹守が小水牛、黒田長政の大水牛、日根野が唐冠の冑、原隱岐守が十王頭、福島正則の四また鹿の角、本多忠勝の佐藤四郎が冑、蒲生氏郷の銀の鯰尾、伏木久内がわり蛤、武田信玄の諏訪法性、秀吉の八日の月、加藤清正の長烏帽子、矢田作十郎が鯉の冑、藤堂新七が帽子等言へる多し。細川忠興の山鳥の尾の冑と言へるも名高し。關ヶ原の軍に忠興彼の山鳥の尾の冑を著、銀の天衝の指物なりしに、遙に見て唯舞鶴のやうに有りけるを、東照宮、冑と指物と映合ひて面白し、とて乞得させ給ひ、台德院殿に參らせらる。

○伊藤七藏高名の事

信長江州小谷の城攻に伊藤七藏先駈したるに、從者取附きたる故、上帶切れて刀も脇差も塀下

けて、贋物したる者十三人日の岡にて死刑せられけり。竹俣越後に持歸りて、彼の穴に馬の毛を通して景勝に見せけり。其後此刀太閤に奉る。秀頼亡びて落武者取て和泉河内の方へ行きたりと聞えしかば、此刀を獻ずる者には、黄金三百枚賜るべき由仰せ出されしか共、其行方終に知る人無しとぞ。

○本庄　正宗の刀の事

本庄越前守繁長は越後の勇將なり。後景勝上杉十郎憲景が祿を本庄に與へらる。本庄出羽の庄内大寶寺義興と戰ひ勝ちて、二男千勝丸に庄内を與へけり。本庄最上義光と出羽の千安が表にて軍しける時、最上の軍敗北せしに、義光の士大將東漸寺右馬頭口惜き事に思ひ取つて返し、首一つ提げて越後の兵に紛れ、繁長を目に懸けて、只今敵の大將を討つて候。實檢に入れ奉らん、と言ひて馬に鎧を合せ、駈け寄りて正宗の刀を以て胄を打つ。明珍の胄なりしかば筋四つ切削りたり。繁長右馬頭を切つて落し、首に添へて景勝に出したり。刀をば本庄に返し與へられしが、後故有りて東照宮の御刀となり、本庄正宗と言へるは此刀なり。

○竹俣兼光の刀の事

謙信の許に赤小豆粥、竹俣兼光、谷切とて三の刀有り。竹俣兼光は元越後の百姓持ちたりしに、或時山中を通りしに雷烈しく鳴りたりしかば、あはや落掛るかと思ひて、刀を抽き頭に指當目を塞ぎ居たり。稍有りて空晴れしに、刀の鋒より血流れ骸に染みたり。又或時大豆を袋に入れて歸るさに、袋の綻より一粒づつ零れけるが、鞘に當りて二つに成りしかば怪み見しに、鞘の破れて刃は纔に出たりしに當りし故なり。奠なき刀とて竹俣三河守乞得しが、謙信後に差れけり。弘治年中川中島合戦に、信玄の兵輪形月平大夫といふ者鐵炮をもて狙ひしを、謙信馬を乗寄せ、一刀に切伏せて駈け通られけり。後に甲斐の兵共是を見るに、輪形月は物具かけて切られ、持ちたる一両筒は二の見通の上より切り放したり。如何なる刀にて斯くは切られし、と言ひ合へるに、則彼の兼光の刀なりけり。景勝の時京にて研がせしを越後にて人々に見せて、京の水にて研ぎたれば刃の光殊更勝れし、と悦ばれしに、三河守熟々と見て、此は贋物にて候。子細は此刀鋩より上一寸背に馬の毛の通るべき計の穴の候。是を知る人外には無し、と申す。然らばとて竹俣を京に遣りて探し求むるに、眞の兼光の刀を清水の南坂より取出す。斯くと石田三成に告

北條家亡びて後、東照宮甲斐相摸の堺三增嶺を御打廻りの時、過し永祿年中の戰場を御覽あり。兀山なりし故信玄兵を押通し、容易く軍に勝ちしなり。北條家武略に拙くて山林を伐り荒したる故ぞかし。生茂りたらんに如何で信玄陣を敷くべき。山を林にせよ、と仰出されけり。

○豐臣關白五腰の刀の主を察せられし事

秀吉伏見にて或日廣間に出でられしに、五腰の刀を見て、試に其名を言はん、とて指されしに違はざりければ、前田玄以、誠に神智の御座し候よ、と驚きたりければ、秀吉笑ひて、何の子細も無きぞとよ。秀家は美麗を好むが故に黃金を鏤めたる刀是なるべし。景勝は父の時より長劍を好めり。寸の延たる刀を是に當てたりき。利家は又左衛門と云ひし時より先陣後殿の武功により、今大國を領すれども昔を忘れず。革卷たる柄の刀是他の主に非ずと思へり。輝元は異風を好む。異る體に飾なせる刀是ならん。江戸大納言は大勇にして一劍を賞むの心なし。取繕ひたる事も無く又美麗もなき刀其志に叶ひたり。此を以て察しけるに違はざりけり、と言はれけり。江戸大納言とは東照宮の御事なり。

しければ、本を忘れざるの士なり。吾子孫にも如斯なるべし、と大に御感あり。

○成瀬正成忠信の事

秀吉大坂にて馬揃の時、千貫矢倉に上り観られしに、黒き馬の太く逞しきに乗りて、紅の沓を後輪に附けたる者有り。何者ぞ、と問はるゝに、徳川家の士成瀬小吉なり、と申す。祿は如何に、と問るゝに、東照宮、二千石與へ置きたり、と仰せられしに、秀吉、天晴吾に奉公せば五萬石與ふ可き、と言はれしに、其後東照宮成瀬を召して、云々の事有りき。秀吉に仕へなんや、と仰有りければ、成瀬承り、こは御情なき事に候、と申す。否とよ汝秀吉に奉公せば我爲にもよかりなん、と仰せられしに、成瀬涙を流し、不肖の身祿を貪り、主君を捨て奉らん者と思召しけるを知ざりけるも愚に候。只疾く自害して心を證さん物を、と申ければ、其由を秀吉に御物語有りけり。後に東照宮長臣數多召され、古に聞きし三尺の孤を託すべきと言ひし人は成瀬にてこそ有れ、と仰せられけり。小吉正成後隼人正と言ひしなり。

○東照宮相摸國御打廻の事

嫌ひしに、後藤庄三郎、我行かん、とて關東に至り、寵せられしかば、後天下を知し召さば願の一つ叶へ給へ、と申す。何事ぞ易き事よ、と仰有り。然らば黄金を四つに切りて通用せばや、と望みけり。果して海内東照宮に歸しければ、庄三郎が志の如く仰せ出されけるより、今の壹歩金といふは始まれり。但し甲州には信玄の時碁石金といふ物あり。然れば夫より前には碁石金の外には無かりしにや、壹歩金は碁石金に倣ひたるにやあるべき。又信長の時今の辨當といふものは安土より始まれり。其始は小芋程の中に、如何で色々の物入れられんとて人信ぜざりきと言へり。挾箱も同じ頃造り始めたりといふ。又大坂の津田長門守始めて造り出すとも言へり。

○酒井金三郎本を忘れざる事

原吉丸、酒井金三郎共に東照宮の近習に仕へ申しけり。伏見にて御庭に出させ給ふ時、原御太刀を持ちて庭に下り、草履はくに遑なく、跣にて蒔石の上に有りけるに、酒井草履を奥へければ、人々譏るを聞し召し、子細を御尋あり。酒井承り、原は元下總の笛井の城主原一郎が子にて候。臣が先祖原に仕へしと承りぬ。昔の主君の緣、跣にて炎天に居たるを見るに堪かね候、と申

○東照宮物具の御物語附小野木笠の事

東照宮仰に、物具の美麗なるは無益の事なり、又重くするも益なし。井伊兵部は力も有りて重き物具しつれども度々手負ひしなり。本多中務はさもなくて薄手負ひたる事も無し。只戰ひ易からんやうを心懸くべきなり。下部は薄き鐵の笠を著せたるぞよき。急なる時は飯をも炊ぐべし、とぞ。

鐵の笠は甲州にても下部は著たりしとかや。畿内の方には無かりしに、丹州龜山の小野木縫殿助、足輕已下の者に鐵の笠を著せける故、其頃は小野木笠と言ひけるとなり。

○秤御定の事附壹步金辨當挾箱始の事

東照宮關東御打入の後、甲州に在りける秤を造る守隨兵三郎といふ者、井伊直政に申して、關東黃金白銀等を商賣するに、定りたる秤を用ひられん事を願ひければ、夫より今の制は定めさせ給ひけり。

京に後藤德乘といふ彫刻師在り。東照宮關東御打入の後德乘が弟子を召しけるに、遠國を

○東照宮武田北條の跡御制度の事

勝賴亡びて後、東照宮甲斐を治め給ふに、法度は信玄より用ふる處を改め易ふる事勿れ。年貢は少く納めん、と仰出されしかば、百姓大に悦び合へり。小田原亡して後、地を治め給ふも又同じ。諸民大に悦び、數百年の恩義相結べるに同じかりき。

○東照宮武田の舊臣を召して御物語の事

同じ頃、東照宮武田家の士横田甚右衛門等を召して、信玄の事共物語させて聞召さるゝ時、御坊の時火繩は如何したる、と御尋あり。柿の澁に石灰を入れて火繩を染め候へば、年經ても用られ候、と申す。横田又は城意庵などに、信玄の事をば御坊と仰せ有りけるとぞ。又武田家にて鎌を寬く詰め候は敵の肉の中に鎌の殘らん爲なり、と申すを聞召し、士の軍に臨むは皆其君の爲ぞかし。射伏せたれば吾軍の利となるべし。後迄人を苦しむるは不仁の業にこそあれ。今日より我家の士は鎌を堅く詰めよ、と仰せ出されけり。

みちのくの安立が原の黒塚におにこもれりといふはまことか

と詠める事有り。如何に、と申されしに、聞く人、黒塚は安立が原に屬したる事分明なり、とて政宗爭を止めてけり。

○本多忠勝萬喜が舊臣を呼び出されし事

本多中務大輔忠勝に、上總の小瀧十萬石を賜はりしかば、小瀧に赴き、土岐彈正少弼賴定人道慶岸の士共を呼び出して祿與へたり。彈正は同國萬喜の城に居し故、世には萬喜少弼と稱して武勇の譽有りし人なれば、此を聞ふに、舊臣申すは、萬喜常に房州の里見義高と弓箭を取候が、敵を忘らせん爲に舞臺を設け、踊を爲せ、城門を明けかふるとて果さず、船著の險しきを平し候。里見が將正木大膳時綱寄せ來り船より上る時、慶岸城に飾りたる紙旗を絹の旗に立て換ふると等しく、古き門より不意に討て出で、忽ち切り崩したり。是より土岐が地に攻め入る事候はず、と語りければ、忠勝聞きて、土岐は甲越の兩雄將にも劣らぬ人なり、と稱し、其後舊臣に其の家の事を問ふ時は、必ず萬喜殿とぞ言はれける。

士を獄に入れ辱を與へたるよ。其君の爲に命を捨てて忠を致す」賞するに餘り有り。疾く〳〵伊達家に歸るべし、と禮義正しく遇して歸されけり。

記せし書に清十郎が姓を漏しぬ。惜しき事なり。

○氏鄕佐々木が鐙を細川忠興に贈らるゝ事附黒塚の歌の事

氏鄕の許に佐々木が鐙と言へる名高き器有り。細川忠興いと懇に、我に賜はれと乞はれしかば、亘理某、是は世久しく傳はる物にて候。似たる鐙を贈り給へ、と言ひければ、氏鄕、

なき名ぞと人にはいひてやみなまし心のとはばいかゞ答へん

と言ふ歌の恥かしきよ、とて彼の鐙を贈られけり。

蒲生は元江州の士にて、佐々木の臣なり。氏鄕伊勢松坂十二萬石なりしが、後會津を賜りける時は四十歳の頃なり。佐々木承禎が子四郎、太閤の時僅二百石與へ、太閤の咄の席に呼出されしが、伏見にて太閤の前より退出する時、氏鄕昔の故に四郎が刀を以て從はれしとなり。又安立郡に川あり、向うに黒塚あり。安立は氏鄕の領地なりしに、黒塚は伊達政宗の領地なりとて爭の有りしに、氏鄕、平道盛の歌に、

出し駈引の馴し、五度に及びけれども尚調はず。六人そこにて、明日の軍は殊に大事なる故、斯様に馴しに及びぬるよ。人々の進退以の外調はず、如何にも能く心得候へ、と再三詳に申し聞せ、さて采配を取り下知するに、進退節に當りしかば、去ば明日の軍は思ふ儘なるべし、と悦び勇みて、果して敵を切靡け大勝を得たり。浅野長政秀吉の命にて陸奥國に有りしかば、其軍の有様駈引の圖に當りたる、終に見聞に及ばざる所なり、と褒められたりとなり。氏郷も大方ならず悦びて、六人に感狀を與へて、種々の物添へて賞美有りけり。

○氏郷伊達家の刺客を免されし事

伊達政宗、蒲生氏郷の威に壓るゝ事を心中に深く慣りて、氏郷を殺すべき事を思案して、數代家に仕へし者の子に、清十郎と言へる十六歳に成りける者、容貌勝れて艶なりしに、密に工める事を語り聞せ、田丸中務少輔が兒小姓に出して奉公させられけり。田丸は氏郷と姻家の親み有れば、來られん時便を伺ひて刺殺せ、との事なり。清十郎が父の方へ遣しける書を關所にて改め見しより事起りて、其謀の泄れたりしかば、清十郎を獄に押入れ、此事を秀吉に告ぐると雖も、秀吉遠く慮りて強ひて伊達家と和平せさせられぬ。氏郷、清十郎を呼び出し、吾過ちて罪なき義

空しく成りたるに依りて覺えず涙の流るゝよ、とぞ語られける。

○奥州葛西大崎一揆の事

天正十八年、奥州葛西大崎一揆の時氏鄕名生の城に在り。會津に飛脚をもて、鐵炮の玉藥を人に見咎められざる樣を計りて運び來れ、と下知せられしかば、山伏を談ひ笈の中に玉藥を入れて、頭巾螺貝杖を携へて湯殿山に詣づる有樣して送りけり。是蒲生左文が謀なり。

○蒲生家の士大將軍兵調練の事

蒲生氏鄕笠井大崎にての軍に、佐久間備前、同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知せる事氏鄕の心に叶はず。此兄弟は元秀吉に屬せしが、秀吉より氏鄕に賜りたる侍大將なり。氏鄕、明日の軍は神田修理、外池信濃、岡野左内、蒲生源右衞門等先陣せよ。佐久間兄弟は見物せよ、とぞ下知せられける。先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立惡きとて斯く仰承りぬ。各討死したりとも、己が躬を捨てて只汚名を出さざるまでの事にて、斯仰を承りたる甲斐も無くては御大將の恥辱なり。然らば進退の節内証しせずば叶ふまじ、とて先陣の軍兵を打具し、平野に押

秀吉陸奥に赴く時、宇都宮にて佐野天徳寺を呼び、野州佐野辛澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱、天正十三年討死して子無し。家臣連判の起請文を小田原に送り　氏政の弟氏忠をもて家を繼ぐ。宗綱が伯父天徳寺了伯は佐竹の一族の中を乞ひて、佐野の家を嗣んとすれども是を用ひず。了伯は夫より京都に赴き、黒谷に閑居せしを、秀吉北條を伐たるゝ時、鞭導とせられしなり。

物語させて聞れしに、武田上杉の弓箭盛なりし事を申しければ、秀吉冷笑ひ、如何に天徳寺謙信信玄といふ坊主も疾く死たるこそ幸なれ。今に存命へ居ば一人には薙刀を擔げさせ、一人には吾輿の先なる朱傘を持たせて、馬の前に召具すべきに、此世に無ければ力無し。何條事がかり、坐備、皆戯言なり、とぞ言はれける。

○蒲生氏郷大志の事

秀吉陸奥に赴き、蒲生氏郷に八十萬石の地を賜はりけり。氏郷退出し柱に倚掛りて涙ぐみけるを、山崎の某居寄りて、辱く思はれん事尤なり、と言ひしに、氏郷私語て、吾都近き所にて小き國一つ賜はらば終に天下に族を揚げなんに、邊鄙に棄てられたれば何事か仕出すべき。志の

君の國を滅せし事汝に於て快きや、と譴めらるゝに、江雪色も變ぜず。氏直更に約に背くの心無く候。邊鄙の士愚にて名胡桃を取り、終に弓箭に及びて北條の家亡びぬる事、江雪が思慮如何とも爲べき樣の候はず。誠に家の亡ぶべき運命にや候らん。然れども日本國の兵を引受くる事北條家の面目なり。此外申すべき事無し。疾く首を刎ねられ候へ、と言ふ。秀吉顏色打解けて、汝は京に引上せ磔に懸けんと思ひしに、大言を吐きて主君を辱めず。大丈夫と言ふべし。命を助けん吾に仕へよ、とて許されけり。坂部岡を改めて岡と稱しけるは此時よりの事なり。

○關白鶴ヶ岡參詣の事

秀吉鎌倉の鶴ヶ岡に詣でて、八幡宮の戸を開かせ賴朝の像を見られしが、脊中を打叩き、微賤より出て、日本を掌に握る事我と御邊と二人なり。然れども賴義父子鎭守府將軍として東國の者共久しく親み多かりき。蛭が小島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも謂れ無きに非ず。我は土民の中より斯く日本を思ひの儘にすれば、功尙高し、と言はれけり。

○關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事

を名乗りしかば、諸人一番乗と言ふ事を知つてけり。

○信雄卿那須に謫せらるゝ事

北條亡びて後、秀吉石垣山の本陣に諸將を集めて酒宴に及ぶ時、信雄は舞の上手と聞き、天晴一曲觀申し度し、と秀吉言はれしに、信雄吾を侮ると口惜くや有りけん、不吉の詞を舞れたれば、秀吉、斯る悦の中に忌々しき事共心得ず、とて那須に追遣られけり。此時までも千餘騎の士を具せられしが、僅に打連れて那須に赴かれぬ。時を計らず勢を知らず、無益の空言に國を失はれし事のうたてさよ、と人皆言ひ合へり。

○坂部岡江雪免さるゝ事

北條滅亡の後、秀吉坂部岡江雪齋に、汝先年北條の使として上京し、約せし所忽背きて名胡桃の城を取る事、氏直の姦計にや、又汝が詐なるか、と責問はるゝに、直に申さん、と答へしかば、秀吉大に怒り、手枷足枷を並べ江雪を呼び出し、刀を奪ひ取り、左右の手を引張り庭上に引据ゑて後、秀吉罵りて曰く、汝が約せし處に背く事誠に憎むに餘り有り。且日本國の兵を動かし主

せらるゝ人なり。大敵に少しもひるまず、二百許にて突いて出で、爰を最期と切つて廻るに、寄手新手を入替へ攻めければ、僅十五六人に討爲されけり。利家、誰か中山緣有る、と問はるゝに、松山の降人根岸主計定直が妻は中山が妻と兄弟なり。小岩井雅樂助は中山が駈法の弟子なる由を申す。利家、疾く中山に味方に屬せよと言ふべし、とて兩人を城中へ入れられしに、中山既に自害して其妻も自害したるが、未だ息かゝりて有りければ、詞を交して馳歸り、斯と言へば利家大に惜まれけり。監物は切り脫けて逃け出でけり。北條家關東の城々多しと雖も、豆州韮山の城の外は多く降參しけるに、八王寺の兵城を枕に戰死せし事を東照宮聞し召し、其義を感じ思召され、中山が嫡子助六郎昭守二男左介信吉に祿賜はり、昭守が子信守大坂の軍に功有り。信吉は後水戸中納言に仕へて備前守と稱す。狩野一庚が子主膳も仕へ奉りけり。

○大音藤藏雨森彦三郎功名の事

八王寺の城攻に城兵切つて出で死狂ひする時、利家の小姓大音藤藏一番首を取りたる處に、雨森彦三郎續きて首取つて、利家の前に至りて實檢に備ふ。一番は大音なり、と申して二番首の帳に記させたるを利家大に感ぜらる。其頃大音は利家の勘氣を蒙り居たる故、數度高聲に姓名

かば、氏郷廣澤をば討漏されけり。寄手餘り激しく戰ひければ廣澤も叶はじとや思ひけん、城を指して引退く。氏郷何處迄もと云ふ儘に先に進んで追はれしかども、門を閉ぢて鐵炮を打出せば、引返されしに、胄に矢二筋折掛け、物具に鎗の疵透間無く、十文字の鎗簳の如くなりしかば、秀吉感狀に彼の馬印免されけり。

○武藏國八王寺城落つる事

武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭は、小田原に有りて家臣留守したりしに、前田利家、上杉景勝攻めんとて、先に降參しける北條氏邦に使を城に遣らせ、小田原既に破れぬ。疾城を渡し候へ、と言ひ送る。中山、近藤、狩野等從はず。氏昭降參せば證書を賜はりて城を出づべき旨下知すべし。然らずして降參せば士の瑕瑾なり。氏邦が如き臆病者は一人も城中に候はず、と答へけり。利家景勝も其義に感ずと雖も、扨止むべからざれば、一萬五千の兵をもて圍まれけり。甘糟清長攻入つて火を掛くる。狩野一庵、近藤出羽助實、金子三郎右衞門家重死狂ひに切つて出で討死す。横地監物は氏昭の第一の長臣なり。火燃え上れば今日を限りに散々に戰ひけるに、寄手討るゝ者多し。中山勘解由家範は武勇の將、殊に八條修理滿朝が馭法を傳へ、關東無雙と世に稱

度の軍に人の目を驚すか。去らずば討死と思ひ定め、繪像を描せて日野の菩提寺に籠め打ち立たれける。斯て五月三日の夜搔曇りけるに紛れ、城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけり。氏鄉も、今夜は夜討入る可きよ懈るな、と下知せられしに、果して廣澤兵庫秀信一隼大將にて押寄せたり。氏鄉の物見の兵町野萬右衞門に行逢ひぬ。弓取直し指詰め引詰め射けれども、叶はずして引返せば、敵進み來て柵の木を打破る。蒲生源左衞門鄉成、田丸中務直政、町野右近幸知切つて出で、爰を專途と戰ひけり。氏鄉銀の鎗の尾の胄の緒をしめ、

氏鄉の許に新に仕ふる士に、吾家にて銀の胄を著たる兵、度毎に眞先に進み出て働くなり。此男に劣らず振舞ふべし、と言はれけり。氏鄉彼胄著て毎も眞先に駈けられしとぞ。

棄て一丈餘の鎗を設け置かれしを提げ、追立て〳〵進まれけるに、廣澤棄て鐵炮を後陣に並べ置きたれば、追來る寄手を打立てけり。廣澤は聞ゆる剛の者なるが、鎗を横たへ片足を堀の中へ踏入れ、大音上げ、一鎗參らん、と呼るを、氏鄉聞きて飛びかゝり突合ひければ、蒲生左衞門鄉可、同五郎兵衞鄉治、佃又右衞門等駈け來り喚き叫んで攻戰ふ。廣澤は、今宵夜討の大將廣澤兵庫一番鎗、と高らかに呼りけるを、氏鄉目にかけて、堀の中に飛入りて擊取らん、と面も振らず胄の錣を傾け、鎗を取延べ叩き立てられしに、敵兵二人氏鄉の鎗、取らんとする事七八度に及びし

まれし間五十餘日風靜に波穩かなり。是よりして小田原海邊風無き日を上樣日和と言慣しけり。

○伊奈熊藏兵粮を司る事

同時東照宮伊奈熊藏を召して仰出さるゝ事共有り。其時伊奈、去年より兵粮の用意して沼津に運びたりき。然るに此箱根山中に穀物の價江尻沼津と相同じ。遙に運漕せんより爰にて求むる事然るべし。心得難き事なり、と申しけるを、東照宮聞し召し、夫は長束大藏大輔が謀なり。長束は武功勝れたるにも非ざれども、斯る謀は長じたる者なれば、秀吉城主として寵せらるゝぞかし。汝が職にては兵粮運漕の事能く心得べきに、心得難しと言ふは吾も心得難し、と仰せ有りければ、伊奈汗を流して退出しけり。

○蒲生氏郷の陣夜討の事

附氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事

同時蒲生氏郷金の三階菅笠の馬印許され候へ、と申されしに、秀吉、夫は聞る佐々成政が馬印にて容易くは免し難し。今度小田原の武功によりて望む所に任せん物を、と言はれしかば、氏郷今

と進む故、思ふ儘なる獨功名もならず、物の譯も知らず、名乘るまじき處にて名乘るなり、と笑ひければ、鳥井聞きて、平三郎は志の士と聞きしに、眞の士志をば知らざるよ。人の果れたる時は尚高聲に名乘りて人に心を附け力を添へて、多くの人を用に立つるこそ武士の義なれ。獨高名をせんとするは小事なり。言ふに足らず、と答へしかば、平三郎言ふ事無かりけり。

○南部越後攻口の事

小田原を圍む時、國清公の攻口は搦手の山の上なり。目の下に見下し鐵炮を打入れけるに、城中より上げ矢に打つ鐵炮烈しく、士卒進み兼たる時、南部越後銃口を空に向けて打たせたり。其玉雨の降るが如くなりしかば、城中ひるむ所を見濟し、鐵炮を山ばなに並べ、透間無く打たせて攻破りけり。

○上樣日和といふ事

同時九鬼大隅守嘉隆日本丸と言ふ大船を乘廻し、南の海上を取巻きけり。此所は荒海にて、東風吹く時は波浪山嶽を倒しかくるが如し。船をかけ並ぶる事思ひも寄らぬ所なるに、秀吉城を圍

て候ひけるよ。斯ら事申す人多く有るべきや、と賞し合へり。作左衛門物荒き人なりけるに、三奉行の中に命ぜられ政を執りしに、甚だ仁愛の事のみにて獄訟を斷るに理正しく、四民呢き服しけり。東照宮の神慮淺からぬ御事なり。

○井伊直政關白を討たんと言はれし事

東照宮小田原に向はせ給ふ時、先陣は榊原康政と命ぜられ、井伊直政御旗本と定め給ふ。直政毎も先陣を好まれしに、此時は少も辭退の氣色無かりしに、小田原にて秀吉側の人僅に引具せられしを見て、唯今取圍みて討取るべき時に候、と進め申せしを、東照宮聞し召し入れられざりしかば、然らば先陣たらん、と言はれしとぞ。

○鳥井源八郎先登士志を論ずる事

山中の城を攻むる時、木村常陸介師春が士鳥井源八郎先駈して城に附名乘りけり。羽柴藤五郎秀一が士磯野平三郎續き來り、汝は首取源八と世に言はれたる譽の士なれども、田舍育なる故武功を辨へず。斯る場にては人は呆れ氣後する物なる故、爰にて名乘れば是に心附きて我先に

く聽入れたり、とぞ感じける。

○豐臣關白北條征伐出陣の事附本多重次放言の事

秀吉北條を討たるゝ時、諸將浮島が原に並居て秀吉を待つ。秀吉糸縅威の物具著て、唐冠の冑黄金を鏤めたる太刀佩きて、土俵の大なる羽壺に征矢一筋指し、仙石權兵衛が參らせし朱の滋藤の弓持ちて、七寸有りける馬に金の瓔珞の馬甲かけ、靜に歩ませて打通られけるが、東照宮信雄と共に出迎ひ給ふを見て馬より下り、如何に貳心有りと聞きたり。いざ一太刀參らん、と太刀の柄に手を懸けらる。東照宮左右の人に向はせ給ひ、軍始に太刀に手を懸けられ門出の目出度候、と高らかに仰有りければ、秀吉何とも言はずして又馬に打乘り通られけり。

秀吉此出陣の時、濱松の城に宿せらる。本多作左衛門折節御使に參りて歸りけるが、旅裝の儘にて諸將の中に進み出で、東照宮を見かけ奉りて、如何に殿は何時より斯く愚になり給へるや。國を持つ人の城を人に貸す事や候。然らば女房をも人に貸し給はんか、と罵りける。東照宮、彼は本多作左衛門と申す剛の者にて候が、家久しく睨くて只今の樣なる事を申すにて候。無禮の詞を申し候、と仰せ有りければ、人々承り、偖は承り及びたる本多殿に

を取出して見せ、吾をば常に麁忽者と戒め候が此度も又然なり、と言へば、傳法寺、是は既に聞届けられたるなり、と悦び、斯と友房に告げて、是より心置なく中津川へ出づべきにぞ定りける。三宅又迎に往けば友房三百人許にて山中を打立ちけり。三の丸の大手にて人を留め次第に減じてけり。本丸の書院にて對面あり。吸物を出して酌は小川傳右衞門なり。野村太郎兵衞肴を挾むを相圖に、傳右衞門一の太刀、太郎兵衞二の太刀と定めたり。長政盃を指しける時野村肴を持ちて出けるが、持ちたる臺を友房に投附飛びかゝり眉間を切る。小川後れたり、と脇指を抽いて切附くれば、さばかり遅しき友房卽討たれけり。供の者をば所々に手當して物具したる者共鎗竦にして殺しぬ。岐井谷へ軍兵を指向けて打滅されけり。小川野村一二の定有りしに違ひたりしかば、小川怒つて其夜野村に言ひけるは、岐井を吾初太刀たるべきに先を越れ面目を失へり。如何に、と問ふ。野村打笑ひ、左思はるゝは理なり。能く聞かれ候へ。年を言へば吾は弟なり。汝功名は四度に及び我は唯二度なり。是程劣りたる者、そなたに先をさせて、我後れなば是こそ面目を失ふと言ふべけれ。栗山か又我兄の多兵衞とならば前後を爭はれん事似合たるべし。斯く劣りたる我に爭はれんは大人氣無し。只免され候へ、と言ひければ、小川、素より心易き事なり。但心安くも切られたり。尤。とて愈親みければ、人々、野村が理も聞事なり。小川も能

き事に候、と云へば、長政涙を流し、汝を先立つる事の残多さよ、と咽ばるれば、善七眼を見開き、先の頃諫め申せしは必死を思ひ定めたる故に候。今度の高名こそ目出たけれ。今生の御目見只今を限りなり。人は一代名は末代と申す事の候、と言ひも終らず空しくなりけるとぞ。比類無き者なり、と云合へり。翌日孝隆火隈に来りて対面し、若き者は懲る事無くては思慮の練れぬものぞかし。終の勝を計れ。只勝つべきとのみ思へば敗を取るなり。良将は時により緩に見ゆれども、辛爾の軍は爲ざる故に終の勝を全うするよ、と教へられぬ。長政又押寄せんと云はれしを、孝隆制して要害を設け、兵粮の道を塞ぎ馬の岳に歸られけり。斯て一揆勢盡きければ、毛利輝元を賴み和平しけれども、友房は病とて出ず。中津川より三宅三大夫、岐井谷より傳法寺兵部、使者往来して互に物語しけるに、或時三宅言ひけるは、友房内室なしと聞く。勘解由に妹あり、婚禮あらば如何に、と云ふ。傳法寺、夫は悦ばしき事なり。能計はれんや、と言ふに三宅、我年若ければ老人と相計りてこそ、と言ひけり。傳法寺は敵の妹を人質に取らんは然るべしとや思ひけん、わりなく三宅を賴みけり。三宅、我主君の心をも知らで容易にも申出でたる哉。事調ずば面目も候はず、など言ひて、長政に斯と告けて孝隆にも告遣りしかば密謀をなし、三宅に孝隆書を與へ、緣を結ぶは末賴母しき事なれども、例の麁忽ならん、とぞ書れける。三宅傳法寺に語りて潜に其書

馬の傍に在るならば鎗を合せ、一揆の奴原追立て引取るべきに、後藤奴穢き振舞に候はずや。重ねて一揆と軍有らんに必死と思召し定められよ、とて坐を立ちければ、長政も髻を拂ひ思ひ切つたる體なり。翌日善七郎又申けるは、あながち口惜しとな思召され候ひそ。一揆押寄せ候はば眞先駈けて切崩し恥を雪ぎ給へ。善七郎は御馬の先にて討死せん。逃けたる奴原も勵まされて軍する程ならば、鬼神なりとも恐るゝに足ず、と云ひ慰めければ、長政起き上り物語せられけり。長政は面目無しとて父の前に出ず。孝隆、扨は必死を期したるなりと察し、老功の者數多長政に差添て早りたる下知を禁ぜられけり。一揆又上毛郡へ押寄せければ、長政火隈の海近き所の山に上り、待ちかけて思ふ圖に引受け、一同に乘出し馬の駈け場よかりければ、縱横に乘り割り、一揆敗北する處を追立てたり。鬼木鹽田など言ふ者討たれ散々になりけるを、長政鹽田内記を手づから討取り、尚も追ひ駈けんとせられしを、老臣共馬より飛下り押へて陣を整へけり。鹽屋善七郎は敵の中に乘入り鬼木掃部が首を取り、右の方を見れば長政敵の首を取りたりしかば、又馬引寄せて打乘り、追詰めて首二つ取りしが、痛手負ひて精神も亂れたるが、尚も若殿の功名を問ひ聞きて、嬉しや先日の恥辱を雪がせ給ひぬ。此上は思ひ置く事無し、と云ひけり。長政善七郎が枕元に居寄られしかば、長政の手を取り、此後能く心得候へ。殿に討死し給へと申す者は無

石に鐵炮の者二十人司れり。さのみ賞美無かりしかば、人々、木屋に殿を岐井谷にて罵りたる事を、嫉く殿は思召して斯は有るならん、と言へば、木屋、我も左思ふ事よ。此憤ならば首をも刎ねられなんと思へどもさも非ず。是より後も軍有らば度毎に大言を吐きちらし、只今寵愛に誇る奴原の中に武者振の悪き者有らば、恥を與へん事我思ひ出なり、と言ひければ、聞者、汝は下部の所謂口に倒されなるべし、と諫めければ、今の祿を倒らるゝとも口はきゝたき事よ、とて笑ひけるとぞ。

孝隆は馬の岳の矢倉に上り、長政の敗事を見て笑ひ居られしかば、側より、危く候、疾加勢をせさせ給へ、と口々に言ひけれども、否々引き後れたる味方の眞丸になり、靜々と道を引退くは吉兵衛なるべし。危ふけもなし、と言はれしが、果して長政事故無く引返されたり。長政敗事を口惜しとて引籠り、夜の物打被きて臥し居たり。孝隆物主を呼びて、弱敵をば恐れよ、初の勝を勝にするものなり。勝すぐれば必ず敗の本なり、と戒められけり。鹽屋善七郎といふ侍長政の近習に仕へしが、京に使に行き、此日の暮頃に歸りて長政の寢所に行き、今日の敗軍是非も無き事に候。然ばかりの者共小辨を捨殺し、殿をも捨てて逃けたりと承り候。殿もよき討死の所にて候ひき。何とて敵に後を見せ給ふや。父祖の高名に瑕附け申すこそ口惜しけれ。善七郎が御

りけり。長政馬より下り立ち討死すべき色なりしを、近習の者共馬に掻乗せ退きければ、一揆頻に追駈けり。長政の馬矢に中りしかば爰にて自害せん、と言はれしを嘗六之介政利、己が馬に召され候へ、と言へ共聞入れず。早上帯を解かんとせられけるを三宅三大夫若狭に走り寄り、大將の自害の所にては候はず、とて掻抱き馬に打乗せ、片手に馬を牽き片手に長政を把へて、我等生残りたるに殿を追討つとや、念もなく候。地の利を見て引返し、一揆の奴原追崩し申さん、とて引退く。嘗は長政の鞦の組違に手を掛けて少も離れず。木屋兵右衛門は長政の鎗を持ちて歩立にて續きたり。一揆長政と見知り餘さじと附慕ふ。三宅嘗、木屋を始として岡本彌兵衛、小河久大夫、坂本七左衛門已下五十人許丸く成りて、思ひ切つたる色を見て靜に詰寄せて、一里許追駈て其後は慕ざりけり。後藤は如何したりけん、猩々緋の羽織を脱捨たりしを長政取らせ歸られけり。

後藤度々の武功有りて一萬四千石與へ小隈の城に在りしが、後に岐井谷の軍物語に及べば俄に病み出でしとぞ。木屋兵右衛門は長政に向ひ、後藤、小河が有様大隠病の男にて候を、親子共に取分て懇に爲させ給ひ候。此兵右衛門は誠にあるにもあらぬ體に候へども、敵追詰め來りなば一番に討死して御目にかけ候べし。偖も〳〵歎かはしき御眼力や、と飽くまで罵りて退きけり。其後長政筑前を賜はりしに、小祿の士皆祿を增したりしに、兵右衛門は六百

常山紀談　巻之九

○黒田家岐井谷合戦の事
並小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房を斬る事

秀吉黒田勘解由孝隆に豊前國を與へられしに、一揆處々に起る。中にも岐井谷友房は元下野國宇都宮彌三郎友綱が次男、鎌倉の比より地を領したる子孫なり。毛利豊岐守勝信に誘れ、地士を駈催し民屋に放火す。黒田父子は馬の岳と云ふ城に有りけるを、城下に押寄する。長政其時十六歳。岐井を討つ可きと勇まれけれども孝隆同心せられず。長政其頃は吉兵衛と言ひけるが、若士共引具し切つて出づれば、一揆共一支もせず敗北するを追掛けたり。岐井は山中の嶮路にそびき入れ、多くの大石の蔭に逃け隠れたり。大野小辨と言ふ若武者眞先に進みたるを、一揆起り合せ七八人取巻きて馬より突き落しけり。後藤又兵衛、小河傳右衛門、久野四郎兵衛馬の首を引返し敗北しけれども、長政の馬廻は眞丸に成りて、一揆勝に乗り押詰めけれども鎗を合す。一揆は木蔭谷蔭より五人十人駈け出で、狩場の鹿を射る如く竹の鏃の矢にて雨の降る様に射た

は必定なり。其時一戰仕らば、關白の御馬を向けさせられたる城なりと末代迄も申し傳へなんには、子孫の面目是に過ぎたる事や候べき。討つて出で火花を散し、一足も引かず討死、たりとも、是又武名とや申すべき。敵に箭一筋も射かけずして城を破り捨て候事口惜く候ひき。新納は日向口に在りて、宮部善祥坊を始として先陣の人々に迫合ひたりしに、島津降參の由告げ來り引返し候ひぬ。島津が兵を以て日本國の大軍を引受け、合戰始終の勝利を計る可きには候はねども、新納肥後口を防ぎたらんには、地は嶮なり。關白殿下如何に智謀遲しく御座しまし候とも、輒く攻入り給はん事は思ひも寄らざる事なり。嶺々谷々より種ケ島の鐵炮を打掛け、思ひの儘に先陣を打惱し申す可きに、今に至りて殘念なる事共なり、と恐るゝ所なく申しけるを、秀吉聞きて、新納は聞き及びたる勇將なり、とて大言の咎は更に無かりけり。

せずして降參せんは弓箭の無禮なり。疾陣を寄せさせ給へ。一軍して討死仕らん、とぞ申し送りける。秀吉頓て師を城下に進めらるゝに、彼の城の路三四里が程は、馬の鞍を下し甲の紐を解くばかりの嶮難にて輙く打入り難し。武藏の守暫く支へて後、一說に義久斯くと聞きて大に驚き疾く降參せよと下知せられしといへり今は是までなり。主君既に降參せし上は家臣の身として爭で其の心に背かんや。弓箭の禮儀を以て斯く申したるにてこそ候へ。日本の軍を城に引受くる事、士の一面目にて候、とて城を出でにけり。

一說に、島津降參の後、鹿兒島の外の城々は壞つ可き由秀吉下知せられしに、新納は城に籠り專ら防戰の手段を爲し、其身も病と稱して引籠り居たりしに、秀吉聞かぬ體にして歸京ありけり。其後島津上京し武藏の守も供したりしに、程經て秀吉、何とて新納が城をば壞捨てず、合戰の設したるや怪しき事なり、と問はれしに、武藏守人々の答を待たず進み出て、仰せ出されし旨義久下知せしか共、承り入れずして軍を志し居たりしに、踏過ぎて通らせ給ひしこそ恐多く候へども恨しく存候へ。其子細は、城を開く事も古より其例無き事に非ず。只今日本の主と世に稱し申し候關白樣、遙に筑紫の果迄引出し奉り、鹿兒島に申請け候事は島津が家の譽とや申さん。新納の城を破り棄てずば、惡き奴め踏潰せとて軍兵を向けられん

參の禮を受けて後更に心置く事無し。家に傳はりたる楢柴の茶入とて名高き物有るとこそ聞け。あはれ一目見ばや、と問はれしに、種長、速に取り來り候べし、と云ふ。秀吉、然ば使を以て取寄せよ、とて秋月の從者を返して彼の茶入を取來る。秀吉見て、聞きしに優れる物なり。家の寶たれども我に得させてんや、と懇に言はれしかば、種長、既に兜を脱いで參り候上は、何條惜む可き樣の候べき、と申す。秀吉殊に悦ばれ、久しく我陣所に在りて軍兵共怪しみ危む可きよ。疾く歸れ。我を防ぎしは弓箭取る身の習なり。降參の上は吾恨露も不殘、領地本の如くなる可し、と言はれしかば、種長悦びて馳歸る。種長が士卒、若秀吉種長を害せらるゝならば、秀吉の陣に駈け入り、切死にせんと思ひ定めて居たりけるに、歸りて委しく秀吉の詞茶入を乞はれし有樣を語りければ、皆、思ひも寄らぬ事よ、と言ひ合へり。斯くと聞傳へて九州の敵多く戰はずして降參せり。

○新納武藏守豪氣事の

新納武藏守忠元は島津家の士大將なり。勇名を以て指を折る時第一なり、とて大指武藏と稱しけり。義久秀吉に降參の時、新納は肥後の堺泉の城に在り。一說に大口と有り日本國の軍を引受け一戰を

は半左衛門と言ひけるが、是は黒き吹貫押し立て坂に續きたり。利長の士松原久兵衛を始として先を爭ひ攻入り、終に城を攻落して首四百餘打取りたり。秀吉氏鄕に感狀を與へられ、小坂に金錢十匹羽織を賜りぬ。

一說に、小坂を一番と記せり。秀吉坂を賞して刀を與へられけるに、坂申しけるは、一番の賞にて候へば栗田其一人なり。栗田は黒き吹貫にて候ひき。坂が吹貫白くて目に立ち申したるなるべし、と譲りければ、秀吉愈大に感じ、刀を栗田に與へらるとも言へり。

○野矢甚右衛門功名の事

野矢甚右衛門は敵五人討取り、首五つ提げて氏鄕の前に來る。氏鄕、容易くも首多く取りたるかな。如何して、と問はるゝに、敵の太刀先左の腕に當ると存候時射出せば、中らぬ矢は無き物なり、とぞ申しける。

○秋月種長降參の事

秀吉島津を伐たるゝ時、秋月種長小熊の城を出て、秀吉の陣に至り降參しければ、秀吉對面降

親踏み止りて討死しけり。黒田小早川使を秀長の陣へ遣して、味方は八萬に餘れり。鐵炮三千許左右の嶺を取り切り打立つる程ならば、義弘を打取らん事掌の中に有り、と申されけれ共、知宣堅く留めて追はざりしかば、義弘敗軍の士卒を集め、所々に火をかけ引取りたり。後れたる士卒五十餘人戰ひ疲れたるを生捕りて引來る。助けて歸さん如何に、と言へば、是見られよ。生きて又歸らじと紙に書きて髻に結附けて候ぞ。疾首を刎ねられ候へ、とて皆殺されけり。薩摩の人の勇氣こそ由々しけれ。秀吉宮部には日本無雙と言ふ感狀を與へ、尾藤は領國讃州を召放されけるとかや。

○巖石城合戰坂小坂先登の事

秀吉島津を伐たるゝ時、蒲生氏鄕、前田利長巖石の城を攻めらるゝに、氏鄕の先陣蒲生源左衛門此頃は坂小坂と言ひけるが、眞先に進んで、假名にていちばんと墨黒に書きたる白き吹貫を門の眞中に押立て、喚き叫んで相戰ふ。雨の降る如く鐵炮を打出せば、吹貫は芭蕉の秋風に破れたるが如し。大音上げて、一足も引くな者共、と下知し、面も振らず攻入りけるを、後陣より、是ぞ聞ゆる蒲生が內の士大將小坂と言へる大剛の者よ、と口々にぞ譽めたりける。寺島美濃守此頃

たり。宮部を始め愈死地に入りたれば、爰を限と防ぎ戰ふ。斯りしかば秀長三萬許にて耳川に打向ひ、根白の方を見渡せば、薩摩の軍兵雲の如く取巻きて、鐵炮の音關の聲矢叫相交り、天地も動く許なり。川を渡らんと進まれけるに、尾藤左衛門尉知宣、秀長の馬の轡を取つて義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり。關白吉も叶はせ給ふ可からず、と强て留ければ、既に川へ打入りたる馬を控へて進み得ず。藤堂高虎は手勢を率る川を渡し、搦手より根白に駈け入り自ら鎗押取り、敵數多突き伏せて宮部に力を合せけり。黒田孝隆同長政も手の者を引分け進み行く道より、村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣して、唯今秀長六萬の兵にて後巻せられ候、と呼はらせければ、宮部を始め大に勇み悦べり。長政の士栗山後藤川を涉り、義弘の陣に切つて懸る。秀長の士大將羽根田長門守と千許の兵にて、黒田父子に劣らじと鎗を打入れ攻戰ふ。小早川隆景も三千許にて耳川に來る。秀長、今敵陣に懸る可きと存ずれども人々同心せられず。如何すべき、と問はるれども、隆景冷笑、物を言はず。斯る所に井上伯耆就遠、浦兵部宗勝、古き背破の物具著て進み出で、島津は今日の客人なり。訪ひ來るに出迎はずば弓箭の禮儀に違ふべし。軍評定と申す事や候、と秀長を嘲りけれども、進む氣色の無りければ、隆景馬を打入れて川を渡り、敵の後陣を取切らんと進まれければ、是より薩摩の軍亂れて敗北しければ、義弘の從子三郎忠

内より薩摩へ引退く後を追うて亂れ入り、高城戝部の城を取圍み、附城五十一ヶ所築きたり。中にも耳川を越えて、根白の砦には宮部善祥坊繼潤、木下平大夫貞基、龜井新十郎廣政、鹽屋隱岐守光成、福原右馬助直高一萬餘にて守りけり。是は島津が後卷を防がん爲なり。頃は四月十七日の朝、島津使を根白にたて、高城の城を渡すべし。士卒を助け給はり候へ、と言遣りければ、宮部、五十丁隔てたる秀次へ此旨申して後、兎角の返答を申さん、とて使を返して後、斯欺きて怠らせ、思ひも寄らぬ所へ寄すべき謀なり。其用意せよ、とて人夫千人俄に山々の竹木を伐らせ、陣の前に深さ二間廣さ三間許の空堀を構へ、柵木を結ひて我もくと物具して待つ所に、物聞に出したる者共走り歸り、敵押寄せ候、と言ひも果ぬに、義弘一萬六千餘の兵を率ゐ、鬨を揚げて攻め寄せたり。宮部木戸口に進み出で、一番鎗と名乘りて相戰ふ。田中九介其子彦六、國友半右衛門、三村三郎右衛門を始め、大剛の兵共先を爭ひて切つて出で相戰ふ。義弘も義久の子にて素より聞ゆる勇將なり。薙刀を提げ眞先駈けて、只今此城蹈み破れ者共、と呼はり、多勢堀を越え胄の鍬を傾け、蟻の如く柵の木に附きて引破らんとする時、兼て巧みたれば控の綱を斷ちて柵を堀の中へ倒せしかば、薩摩武者討るゝ者八百餘人に及べり。義弘愈怒り進んで、屍を蹈み越えて内の柵に攻め寄り、透間も無く戰ひけるが、内の柵をも打破り、十八日の朝三の丸を攻め取つ

精神草臥疲れたるならん。我敵に逢ふ時、我首を敵に取らするか、敵の首を我取るか、此二つの中天命に有りと思ひて、初は緩きに似たれ共、打合ふ時一決して一鎗の中に勝負分るゝ故に、疲るゝ事無く候なり。不ㇾ入處にて氣を苦しめざる故、幾度事に逢ひても胸中安閑なり、と答へけるとぞ。

○森迫親正討死辭世の事

同じ城攻に佐伯に屬したる森迫一本闕に作る三十郎親正、首を取り、又戰ひて討死す。時に十七歳なり。常陸介が從兵山本十郎と言ふ者、其の首を取る。小鍋形三本菖蒲の冑なり、短册を附けたり。

命より名こそをしけれ武士の道にかふべきみちしなければ

常陸の介感じて其首死屍を高畑が許に送り歸しけり。親正は豐後大野郡三重鄉の人なり。

○薩摩勢根白の砦を攻むる事

天正十五年二月秀吉島津を討たるゝ時、大和大納言秀長、近江中納言秀次八萬餘、島津が豐後府

て秀吉大軍にて九州に渡らるゝと聞きて、薩州に引退く。親次大に悦び、嶮岨の地に兵を伏せて打破る可し、とて鐵炮の手利二十人撰み出し、山海が嶺の林に待たせけり。然る處に首藤五郎大夫、堀八郎と言ふ者、此度の撰に殘りけるを口惜き事に思ひ、密に道に隱れて薩摩武者二騎打落してけり。扨は伏兵有るぞ、と言ふ程こそあれ、大軍林に入り草を分けて探しければ、二十人の者共力無く、藥を惜まず散々に打懸け、追ひ來る者共打殺して引退く。親次大息吐いで、義久をば山海が嶺は越すまじき物を、天の祐に逢ひたる義久なり、と云はれけり。

○高畑三河功名の事

豊後國合志常陸介を大友義鎭攻むる時、佐伯紀伊守一説に彈正少弼惟教大將たり。佐伯が士大將高畑三河、一日に十三度の功名あり。其後人問ひて、僅に鎗刀一兩度迫り合ひても大に疲れ、息切れて小兒にも負く可きに、一日十三度の功名は、假令志は飽まで剛なりとも、力も息も續きぬるこそ訝しけれ、と言ふ。高畑聞きて打笑ひ、別の子細も無き事なり。我戰場に打臨みて勿論の事とは言ひながら、死生存亡の間に於て少しの思案を費す可き事無し。然る故に人は騷しくても我は靜なり。大方は鎗を合せ、太刀を打違へざる已前に力を出し氣を張るならん。是に依て

○紹運齋藤鎭實の妹を娶られし事

紹運若き時彌七郎と言ひし比、兄の鑑理、齋藤鎭實の妹を彌七郎に妻せられよ、と約束せられけり。其砌豊前中國と軍有りて殊に騒くて、迎へ取らずして打過ぎぬ。其後彌七郎鎭實に對面の折から、兄が申し交せし如く迎へ取る可きに、軍の最中にて斯は遅はり候。頓て迎へ申さん、と語られしに、鎭實實に〳〵申し交せしは可忘も候はねど、其後妹は痘瘡を煩ひて以ての外に醜く成りぬ。中々彼が有樣にて見屈けらる可きに非ず。今にては參らせん事叶ひ難し、と言ひし時、彌七郎色を變へ、夫は存も寄らざる仰を承りぬるなり。齋藤家は先祖大友家にて武勇遲しき弓取にて御座すれば、兄にて候者の迎へ申さんと約束しつる事に候。夫に辭退も候まじ。我は少も色を好む心に候はず、とて頓て婚禮あり。其腹に二人の男子出來にけり。此迎へ取し頃紹運二十歳に及びたりしとかや。

○志賀親次山海が嶺に兵を伏する事

島津義久大友を攻め、所々に亂れ入り、志賀太郎親次獨義久に降らず。義久松の尾の城に在り

加の法華寺に置きて、警護の兵に嚴しく守らせたれば、附添ひたる者共種々に謀を廻らせども、本國とは遠ざかりぬ。謀も爲可き術なく日を送りけるに、尚心元無くや有りけん、薩州に移し下堂院と云ふ所に置きけり。秀吉九州へ渡海し、先陣薩州千臺まで進まれしかば、統虎使を以て、統增を渡し給はらんや、と義久の陣へ云ひ送られければ、義久子細に及ばずして返し參らすべき由答に及びしかば、十時攝津守を迎として下堂院に遣し、附添ひたる面々も殘りなく引取り、千臺へ行く道海邊を過ぎけるに、秀吉の軍兵船を掛並べ居たるが、落人と見て剩すな、とて小船に乘り、ひた〳〵と陸に上り取圍まんとす。十時勝れて賢き者にて、邊に有りける小船を借り本船に漕ぎ寄せ、統增なる事を斷りければ、大將と覺しき者船屋形に上り、采配を取つて諸卒に下知し靜めければ、虎口を遁れて千臺に著き、兄統虎の陣に入りて對面せられけり。此統虎は後に左近將監宗茂とて曉勇無雙の大將なり。過にし天正十年十月六日、秋月と道雪、紹運、宇龍野にて軍有りし時、紹運自殘刀を把り烈しく戰はれしに、統虎十六歲にて初陣なりし。其器量を見て、道雪養子にして家を嗣す可き事を紹運に乞ひて、吾子にせられしとぞ。

に送り届け給はりなんには和平すべし。然らずば城を枕に切死すべき、と答へければ、兩將より、子細あらじ、と許諾し、神文を書きて送りしが、俄に約を變じ謀りて立花に送り返さず。其後肥後の吉松と言ふ所に移し番兵を附け置きたり。紹運の内室は筑後の北の關と言ふ所に移し置き、儲立花へ使を以て、降參せられんやと言ひ送る。統虎實父にて候紹運は、關白の爲に自害を遂げ候ひき。我又紹運の爲に自害を遂ぐべし、とて、軍兵を寄せられよ。此城の切岸にて箭一つ仕らん、と答へられけり。斯る處に八代に陣せられし義久より兩將に下知し、秀吉師を出して打向はゞ由云ひふらせり。疾く兵を返す可し、と有りければ、八月二十四日兩將太宰府を引き拂ひぬ。統虎陣を押出し、高取の城を攻落し、城主星野中務大輔兄弟を始め悉く討取り、夫より岩屋に向はゞ所に、立花の内小野理右衛門と言へる者忍び入りて火を懸けたりしかば、狼狽て騷ぎ一支もなく逃け落ちけり。秀吉感狀を賜はり、大に稱せらる。統虎又密に龍造寺に、北の關に押込められし母を奪取り給はらんや、と頼れしに、龍造寺も薩州と弓箭を取るべき志有りしかば、心得候、とて堀江覺仙と言へる者に軍兵數多指添へて、北の關に押寄せ、薩州一番の者を追散し、紹運の後室を奪ひ取り頓て立花へ送り届けたり。後室此比は法名を宗雲と言ひしとぞ。斯くて薩州には統增を八代へ移し、高津

負討死言ふべからず。去ども死骸を蹈み越え息をも繼せず攻戰ふ。今日を限りと思ひ切つたる城兵、各持口を一足も引かず切死にしたりければ城陷りぬ。紹運の左右には名を得たる剛の者共五十人許に討ちなされたるが、後度の勝負をも思はばこそ、今を最期の軍なれば、當るを幸に向ふ敵に切先を揃へて討つて懸り、一陣二陣を遙の谷底へ捲り落しければ、半時許は攻め入り得ざりけり。紹運手負討死の士卒を見廻りて、死たる者には無二の忠節謝するに詞なし、と一禮し、息の通へる者には自ら氣附の藥を口に入れらる。斯る際に及んで軍兵に愛を盡されける有樣、數年城をまもり度々の軍に功を顯し、今度は萬に一つも運を開く可きに非ざる大敵の圍に、士卒一人も落散らざりし類無き事よ、と言ひ合へり。其後紹運薙刀を提げ、思ふ程戰ひて辭世の和歌を扉に書き附け、三十九歲にて腹を切られしかば、寄手攻入りて、敵ながら斯る大將も又有るべきや。士卒一人も降參せず、逃け散る事無かりしを惜まぬ人ぞ無かりける。內室を始め刺殺すに暇なくて虜となりけれ共、深く寄手も勞り養育しけるとぞ。統增此時寶滿が嶽に有り。薩摩の兩將使を以て、城を渡されよと云ひ送る。統增今年十五歲なり。城中以ての外軍兵少く、防ぎ戰ふ可き事思ひも寄らず。秀吉の出師を待ち受く可き間、暫く生き延びて時を窺ふに如ず、と相謀り、統增を立花

るべからず。主の盛なる時は忠を致し、衰へたる時も操を替へざるを以て、弓箭取る身の道とす。各達島津家滅亡の時に臨んで、躬を隠す謀を廻らされ候へ。只今夥しく目に餘る十萬の士卒も、百年の齢を保つ可きか。斯る心も候ひなんには士の義たる道をこそ存ぜらる可けれ、と答へて、降る可き事は思も寄らず。兩將重ねて韮鼈寺の僧を使として、八ヶ國の大軍を引受け、堅固に城を守らるゝ事廿日に及べり。紹運公の武勇九州に無雙たるべし。寶滿立花岩屋とも子細候まじ。和談を取結び軍を返し、圍を卷ほぐし申すべし。然れ共十萬の軍兵の覺にて候間人質を一人賜りなんや。然らば此後大友島津和談は、紹運公の心に有るべし。事成りたらんには其時人質を返し、九州一統島津に屬しなん。其後中國に押渡り、島津家天下に旗を立て候べし、と云ひ送りしかば紹運許容せず。人質を關白か大友家に出さん事はさも有りなん。秋月種實龍造寺に組し、夫より一同に九州の亂に及べる根本の人なれば秋月に腹切らせ、薩州の兩將より、今度の弓箭は京都又豐州への遺恨に非ず。筑紫廣門が反心を糺明せん爲なり、と神文を書きて賜はり候ひなば、紹運、事能く計り候べし。然らずば此城を以て墓所とす、と答へられしかば、和平も事遂げず。遂に七月二十七日に諸軍一同に押寄て、卯の刻より軍始りて午の刻の終まで、寄手大軍入替へて攻めたりけるに、手

度太宰府に攻め寄せ候は、紹運に對し弓箭取る可きに非ず候。筑紫廣門二心有るに依り是を討つ可き爲にて、既に廣門を生捕りぬ。寶滿が嶽に紹運の實子を置かれ候て、堅く守らせられ候事謂れ無きに似たり。疾く〳〵寶滿を渡され候へ、とぞ云ひ送りける。紹運、承り候ひぬ。素より一言の仰無く、押て大軍を以て某が守り候城下を馬蹄に蹴散され候事、弓箭の禮に非ずと申すべし。扨統虎も道雪の家を續て立花と稱す紹運も今に有りては關白秀吉に屬し候へば、寶滿も岩屋も關白の城にて候を、渡し參らする事存じも寄らず候、との答を使僧歸りて云ければ、とても弱々と城を渡す可き紹運に非ず。去ば圍む可し、とて諸手口々の攻手を定め、七月十四日より柵をふり、矢合を始めたり。然れ共城中堅く守りてひるめる體も無く、未申の方尾山中務が持口より、鐵炮弩弓を以て城へ攻め寄せたる寄手に打懸け數百人打殺し、手負は數を知らず。或時嶺の手の寄手より矢留を乞ひて、新納藏人と申す者にて候。紹運公に申す可き事候、と言へば、紹運麻布外記と名乘りて詞戰ひに及べり。藏人詞を盡し利害を說き、大友殿には切支丹の宗門を尊信有りて、神明佛法を蔑にし、天道に背かれし故人心散々に成り、滅亡近きに候とて、島津に屬せられ候やうに申し給はらんや、と言へ共、紹運節義を說きて屈服の色無く、來春は關白九州へ兵を出さる可く候。然らば島津家の存亡も計

過すして野原の白骨となるべし。人生は朝露の日影を待つが如し。義名を萬世に殘しなん事武士の本意なり、と言はれしかば、城兵勇氣十倍せし勢を逐さず。一陣に成りて薩兵を切崩し、一人も殘らず討死すとも言へり。又寄手の大將を島津家久なりとも言へり。紹運の物具の引合に一封の書有り。島津中務殿と書きたれば、家久是を讀むに、今度降參を勸めらるゝの謀に從はず、是義の故なり。別に一封の書を大友に送り届け給はり候へ、となり。中務、類稀なる勇將を殺しけるよ。此人を友とせば如何ばかり嬉しからんに惜き事よ。弓箭取る身ほど恨めしきものは無し、とて僧を供養し葬禮を執り行ひ、墳を築きて家久香を燒き再拜しければ、義を感ずる國風にて薩摩武者皆燒香して涙を流し、紹運を稱美しけると言へり。又一說に、天正十四年六月、島津圖書頭、伊集院右衞門大夫、兩先陣にて筑後國高良山に押入り、島津義久、同兵庫頭義弘は肥後八代に旗本を陣し、所々を燒働す。筑紫廣門の方には拿て懈りて有りしかば、俄に騷ぎ立ちて防戰の備へ可き樣も無し。七月七日薩州の軍筑後川を涉り、其明の日廣門の館を取圍み廣門を虜りたり。同月十三日先陣の兩將太宰府觀世音寺に著陣す。其外龍造寺政家、秋月種實を始として相加り十萬餘に及べり。岩屋の麓筑山横岳二日市太宰府の邊尺寸も透間無く陣し、兩將より莊嚴寺の僧を使として、此

六歳なるが、父と一所に死なんとて出でけるを、母袖を控へけるに、振切つて敵の中へ駈け入り討死しけり。其片袖母の手に残りけるとなり。寄手も討たれし屍に四方の谷を埋みぬ。既に城兵残り少くなりしかば、何しに猶豫す可き、とて討つて出で、喚き叫んで戦ひけるが、最期の軍よも人に笑はれじ。いざ、とて或は腹を切り或は敵と引組んで刺違へ、枕を並べて討死す。紹運は江淵右衛門大夫、三浦式部、黒岩隼人に、女童共皆刺殺して敵の手にな懸けそ、と下知し、薙刀打振薙いで廻られしが、今は是迄なり、と和歌を門の扉に留められけり。

かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ雲ゐの空に名をとゞむべき

（一説、ながれての末の世遠く埋れぬ名をやいは屋の苔の下水）

斯くて行年三十九歳にて自害して失せられけり。士卒を憐み深く義厚かりしかば、救も無き城を守りて千八百人の士卒一人も逃散る者の無かりしは、例少き事なり。紹運始は鎮種と申しけり。

一説に、城中の婦人は悉く園るゝに先だちて寶満が嶽に入れられし故、害に會はずと言へり。又紹運薩摩の軍を見渡したるに、馬煙黒く押来る。紹運人々に向ひ、今押来る敵六十已下二十歳已上の者共なるべし。今軍に打勝て吾者共悉く討死すとも、彼敵兵も又三四十年を

の軍に敗れしより貳心有る者多く出で來て、今斯く衰へたり。然れ共今にも秀吉公大軍にて九州に渡らせ給ひ、薩摩に攻め入られんに、鹿兒島の破れん事も遠からじ。勢盡き運衰へぬるを見て志を換ふるは、弓箭取る身の恥辱にて、人に爪彈せらるべし。松壽千年終に朽つる事ぞかし。人生は朝露の日影を待つが如し。只永く世に殘らんものは義名に有りと覺え候程に、降參は仕らじ、と高聲に呼はりければ、新納も又言ふ事も無かりけり。外記とは名乘りけれども、紹運ならで斯る詞、戰せん人や有る、と云ひ合へり。斯くて猶降參を勸めて莊嚴寺の僧を使にしけれども聞き入れず。然らば攻めよ、とて天正十四年七月二十七日四方より押寄せ、鬨の聲を作りかけ、えい〳〵聲を出して攻めたりけり。城中には思ひ設けたる事なれば、雫を限りに防ぎけれども、終に打破られけり。三原紹心は、

うつ太刀のかねのひゞきは久かたの天津空にも聞えあぐべき

と一首の歌を塀の柱に書き殘して討死す。弓削平内は强弓の手利なり。矢倉に上り差詰め引つめ箭種を惜まず射伏せけるが、左の手に痛手を負ひ、敵の中に駈け入つて討れたり。高橋越前守、伊部九藏も聞ゆる弓の手練にて、物具の爽なる敵を目に掛けて數多射倒し、矢種盡きければ太刀の切先を揃へて討つて出で、散々に戰ひ一足も引かず討死しけり。尾山中務が子太郎次郎十

○高橋紹運討死の事附立花統增薩摩に囚るゝ事

島津義久、島津圖書忠長、伊集院右衞門大夫忠棟を大將として、兵五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運を攻む。岩屋は要害の地に非ず、寶滿が嶽に楯籠て防ぐべし、と言ふ者有り。紹運、爰を去て寶滿が嶽に入りたればとて勝つ可きに非ず。敵に恐れて逃たりと誹られんも口惜し。此城を墓に定めたり、とて尠とも動かず。四方を圍みて嚴しく攻めたりけれ共驚く色も無し。義久の士大將新納武藏守忠元矢留を乞ひて、城中に申す可き事の候、と呼はりければ、紹運聞て、何事にか候、と問ふに、新納申しけるは、紹運の武勇世に名高しと雖も、大友家に組せられ、亡び衰へられん事近きに有り。大友家は切支丹を崇め、無道にして復家の興る可きに候はず。古き詞に一張一弛と申す事の候。疾義久と和平せられ候へ、と言ひければ、紹運聞きて、斯申すは高橋家にて麻布外記と申す者にて候。只今承り候旨紹運に申す程の事にも候はず。聊義の當れる所を申すべし。人々能聞れ候へ。凡盛衰消長は時の運にて、古の細川、畠山、赤松、山名を始として今川、武田、近國にて尼子、大內等、一度は盛にて一度は衰へずと言ふこと候はず。紹運今の限に成りてよも胄を脫ぎて降參せうと存ず可きや。大友の家も右大將賴朝卿の時より子孫國を受傳へぬれど、日向

らはん事然るべし。崇のあらんには、雪加が一族罰を蒙るべし、とて九月二十四日陣拂して、道雪の棺の供して立花へ引き取りけり。

○稲葉一徹罪人を免さるゝ事

稲葉伊豫守一徹下人罪有りて死罪に行ふ時、聲を上げて泣く。命惜きや、と云へば、彼罪人、否々命を惜みて泣くに非ず。命あらば一太刀恨む可きに、斯成り果つる事の口惜くて泣くなり、と言ふを人々、憎き奴哉、疾う〳〵斬棄てよ、と犇めくを、伊豫守聞きて、夫助けよ、とて縄を解かせ、如何にもして我に一太刀打てよ、とて追放ちければ、忝なき由再三言ひて立ち去りけり。其後年經て一徹病重くなりし時、彼下人來りて、力を盡せしに本意を遂げず、とて又泣く。頓て一徹死て葬の後、彼下人一徹の墓に詣でて、吾今日迄存命へたるは、君を一太刀恨み申すべしと申せしが故なり。君隱れさせ給ひしに生きて居たらんには、刑死に及びて泣きしは、命惜きに泣きたるなりと人の申さん事恥しく候、とて腹掻き切つて死しけり。是を以て見るに、戰國の時上の人下の人、其情の太平無爲の化に浴したる時の人に異るを思ひ知る可きなり。

豊後の兵競ひ合へり。宗麟も、兩將の擧動鬼神の業なる可し、とて崇敬し、諸卒に及ぶ迄遇し爲られけり。然れども宗麟には人々思ひ放れたりし故、田原親家も俄に心替して、兵を引具して豊後に歸りければ、思ひ〳〵にて事ゆかず。宗麟も引き返されしかば、兩將も高良山に陣して其の年も暮れぬ。明る天正十三年の夏に及びければ、陣替爲可しとて、紹運は赤司に屯を換へ、道雪は北野村天神の壇に移られしに、病み附て次第に重くなりしかば、吾死したらば屍に甲冑を著せ、高良山の好巳の岳に、柳川の方へ向けて埋む可し。此事背きなば、我魂魄必ず祟を爲すべし、と遺言して、九月十一日七十一歳にて終られけり。斯くて此の由、十時攝津守を使として、立花の城に遣り、統虎に斯くと申す。屍骸を只一人棄置かん事、人の誹も免れ難し。立花へ歸し入る可き旨答へらる。十時陣所に歸り此由を言へば、由井雪加、然れば仰の趣は不可なるに非れ共、遺言の重ければ背き難し。雪加先づ髪にて腹を切り御供に參る可し、と言ひければ、由井大炊、某も腹を切り、右脇の御供に我立つべし、と言へば、誰も爭か殘る可き、と殉死すべき人餘多に及べり。その時原尻宮内少輔熟々と聞きて、各達、唯名聞を好みなんには然るべけれども、統虎公の御爲に善かりなんや。夫程に存ずるならば、嗣君にも御腹召させたらんこそ良からめ、と荒らかに言ひければ、雲加聞きて、尤に候。然る上は我思ひ止るべし。棺をば立花へ歸し參らせ候

陣を待ち揃へ、耳納山を越えんとする處に、秋月種實、筑紫廣門の兵共、所々方々より兵を出し、雲のつまり、彼處の切所に待ち受け、鐵炮を打ちかくる事數を知らず。中にも大木を小楯にして、其蔭より顔計出して鐵炮を搏つ者あり。殊に手練にて手負數多に及べり。道雪の乘物昇きたる人にも中りて倒れしかば、乘物をはたと落しぬ。道雪怒りて、彼を討て、と下知して傍より頻に鐵炮を搏ちかけたれども、面計さし覗きて鐵炮を打出せば、狙ふべき透間無くて、中々當らざりしかば、道雪、如何に紹連の士に手練は御座さぬか。彼討たせ給へ、と詞をかくれば、紹連市川平兵衛といふ士に命ぜられけり。平兵衛承り候、と言うて、鐵炮を構へ待つ所に、又彼の木蔭より面を差し出しければ、市川手利き早に搏ちたりしに、眉間に中り轉び出て、俯伏に倒れ死す。敵前後より取挾みければ、後陣の由井雪加より道雪へ使を以て、唯今討死を遂ぐべし、と申し送るを聞きて、紹連大返に返さずば味方の後陣危くて、此の切所を越え難かるべし、とて取つて返し、敵を拂ひて耳納山の嶺に押上けたりしかば、早や夕日に及べり。諸卒遙々と押來りしかば、疲を休めよ。今宵は雲に陣す可し、とて曠原に折敷かせたり。俄に雨降り來れども、兩將打廻りて士卒に詞をかけ勞はらるゝに、本より兩將の恩惠に懐き服したる者共なれば、些とも疲を覺えざりしとぞ。斯くて一夜は其處に陣し、明けの夜黒木に押附けられしかば、

○立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手に加はる事附道雪死去の事

天正十二年、大友宗麟猫尾の城を圍みて數十日攻むれども落ちず。大友の兵、長陣に氣疲れたりと立花道雪、高橋紹運聞きて、宗麟に馳せ加はり然るべし、と相謀り、俄に兵を出し、二夜の腰兵粮を附けよ、と陣觸して、八月十八日打立ちたり。士卒是は何方へ向はるゝやと怪みながら、下知に從ひて、三笠郡内山江原へ打上る。是より黒木の猫尾へ押行くべし、と下知し、紹運先陣たり。今宵はや夜半過ぎたり、月傾きぬ。筑後川の邊にて夜は明けなん。然らば敵の中數十里押通る事は如何あらん、と紹運の從士言ひければ、道雪へ斯くと言ひ送らるゝに、道雪色を變へ、あはれ早く夜の明けよかし。見晴して敵出でば、撫切にして通るべし、とて乘物を叩かれしかば、使者に行きけり。秋尾大學、由なき使をして恥辱に逢ひたるぞ、とて馳せ歸る。紹運の從卒の謀し如く、筑後川へ押著くれば夜明けたり。渡る處はかたの瀬と言へり。瀬踏にも及ばず、混々と打入れ渡る。秋月種實の士、芥川兵庫といふ者、五十騎許にて星野城より番代して歸りけるが、何方より、誰の軍を押させられ候哉、と問ふ。紹運、餘すな、と下知し取卷きて、一人も殘らず討ち取り、首を小高き處に並べ軍陣の血祭したり、とて夫より石垣原へ押出し、後

此人々こそ能くすれ、とて鎗追つ取りたる眞似して譽められしかば、人々感じ涙を流し、此人の爲に命を捨てん、と勇みけり。

○道雪仁愛深かりし事

道雪の側に仕ふる女に心を通はす者有りけるを、知らぬ體にてぞ有りける。是を知る者有りて、或夜物語の時申しけるは、東國の大將に誰とは知らず候。寵愛の女に密に情を通はす者の候ひしを誅せられき、と有らぬ事を態と言ひて道雪の答を試みけり。道雪打笑ひ、若き者の色に迷ひたるは、必しも誅せずとも有りなん。人の上に居て君と仰がれんには、假初の事に人を殺せば人背く因よ。國の大法を犯したるに異なり、とぞ語られける。彼者傳へ聞きて心に慙ぢ、又道雪の仁愛に感ず。其後薩摩の軍鎧が嶽の城を攻むる時、道雪城を出て戰ひしに、大軍押懸り危かりしに、彼者大音上げ、亂れける味方を恥しめて散々に戰ひける。其間に道雪城近く引取りたるに、敵猛嚴しく進み來て城門を閉て敢ぬ計なりければ、彼の者又取つて返し、武士の討死すべき所は爰にあり。各是にて討死せば城をば敵に奪はれじ。返せや人々、と言ふ儘に鎗を横たへ折敷きければ、返合する者三人あり。面も振らず戰ひて討死しける間に城門を閉ぢたりける。

り返して勝ざる事無し。斯れば道雪の士は一日に幾度鎗を合せたりと言ふ者多し。又道雪常に、士に弱き者は無きものなり。若弱き者有らば其人の惡きにはあらで、其大將の鬪さざるの罪なり。吾士は言ふにや及ぶ、下部に至りても度々功名無きは非ず。他の家にて後れたる士有らば吾方に來り仕へよ。取り換へて逸物にせん。吾士の四月朔日左三兵衞は、若き時初て後れし事の有りしに、何時の頃よりか血臭き事に會ひて次第に物に慣れ、今は五六人の鬪の者と世に言はるゝぞかしとて、偶武功無き士の有れば、明き塞ぎの有るは武功の事よ。弱からざるは我見定めたり。明日にも軍に出でんに、人にそゞろかされ必ず抜懸して討死し給ふな。夫は不忠なり、身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各を打連たればこそ斯年老いたる身の敵の眞中に有りて、ひるみたる色を見せざるぞ、といと懇に睦しく言ひて酒酌交し、其比流行ける武具取り出して與へられければ、是に勵まされて、重ねて軍の有らん時必ず人に後れじ、と勇みて、聊も武者振の能見ゆれば呼び出して、彼人々見候へ。此道雪が見し所に違ふ可きに非ず、とて勝れたる鬪の者の名を呼びて賴み候程に、能引き廻してよ、と言ひ、又人々の心を合せらるゝ事、此道雪は天の冥加に叶ひたる事よ、と勇め立て、若し若き士の席上にて心得違ひたる事の有る時は、客の前などに呼び出し打笑ひ、道雪が士不束にこそあれ。去れ共軍に臨みて火花を散し候鎗は、

○立花道雪行狀の事

立花道雪は、始戸次と言ふ。立花の跡を嗣ぎし故立花と稱す。始の名は鑑連、男子無く高橋紹運の子を養ひて嗣とす。

若かりし時雷に震たれ、足痿へ歩行心に任せず、常に手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大友家衰へけれども道雪心を變ぜず。武勇逞しき人にて、士卒を見る事子を愛するが如し。戰に臨む時は二尺七寸有りける刀と、種ヶ島の鐵炮を手輿に入れ、三尺許の棒に腕貫をして手に提げ乘られ、長き刀挿したる若き士百餘人手輿の左右に引具し、軍始れば手輿を此士に舁かせ、棒を取りて手輿を敲き、えいとう聲を上げ、此輿を敵の眞中に舁き入れよ、とて拍子取り遲き時は輿の前後を敲かれけるに、敵に北けたるよりも恥として面も振らず舁き入れければ、手輿の左右の士三尺餘りの刀を抽連て一文字に切つて懸りけるに、先陣の者共、すはや例の音頭よ、と言ひも敢へず、我先にと競ひ懸り、如何なる堅陣をも切崩さずと言ふ事無し。若先陣追立らるゝ時は道雪大音上けて、我を敵の中へ舁入れよ。命惜くば其後逃けよ、と眼を見出し下知せられし程に、守

家に生れたる者の思ひ切つたりと敵も知り、我も黄泉に悦ばん物を、と言ひも敢へず貝吹き立てさせ、眞先に隆信の旗本へ切つて懸る。島津家の弓箭は先駈の兵は矢一筋持たせ、射放ちて弓を捨て長き刀を拙いて切つて懸る。今日も又而したりけり。隆信の旗本亂れ立ちて敗北すれば、隆信、蓬し返せ、と下知し、遂に蹈み止り討死せられけり。家久勝ちて誇らず、人數を纏め陣を整へける所に、龍造寺の臣恵藤某首一つ血に染みたる刀に持添へ、大將は何國に御座まし候ぞ。功名の印の候、と云ひて家久に近附寄り、首を投捨て馬の上なる家久を一太刀斬りたりしに、家久心疾く馬より飛下りたれば、左の草摺を切つて餘る刀膝に當りけり。恵藤を中に取り込めて討たんとすれば、家久、可惜者を討つな、と下知しければ、生捕らんとすれども素より今日を最後と思ひ定め、切つて廻りし程に終に討たれけり。恵藤とのみ言ひて名をば名乗らず。家久恵藤が首を膝の上に置き、並び無き剛の者、義勇の士とは是をこそ言ふべけれ。生捕りて對面し龍造寺に送り返さんと思ひしに、思ひ切つたる戰死せられしかば力及ばず、とて近所の僧を請じ、恵藤が弔の事念比に沙汰し、其有樣詳に記して、其僧に賴み故郷に遣られけり。依豐久を呼びて、今朝の約の如く上帶を解きたりしとかや。家久は島津家の士大將なり。豐久後又中務と稱したり。關ケ原に於いて義弘の身に代り討死有りしは此人なり。

常山紀談　巻之八

○仙石權兵衛九州に間者の事

秀吉島津を討たんと思ふ事年久し。天正十三年仙石權兵衛を商人の體にして九州に間者とし、山々浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見、兵を分ち攻め入るべき道々を計られけり。

○島津家久島原合戦の事附惠藤某が事

島津中務大輔家久肥前に攻入り、島原の城を攻落したる所に、龍造寺隆信大軍にて押寄せたり。家久僅に三千許なりしを幾重とも無く取り圍む。家久是を物ともせず。明日の合戦吾先陣すべし。貝を相圖に切り懸るべし、と定めて夜の明くるを待つ。朝霧深く物の色も分たず。家久將机に倚りて晴間を待ち、稍朝日出て晴渡りしに、子の又七郎尹久十五歳になりけるを近附け、天晴武者振よ。只上帶の結び斯くするものぞ、とて結び直し、脇差を抽いて其端を切りて後、よく聞け、若し軍に打勝つて打死せずば此上帶我解くべし。今日の軍に屍を戰場に曝さんに、島津が

せ給ひぬ。さらば信玄は、海内無雙とも云ふ可きに、謙信と軍する度毎に打負けられたり。是を以て思ふに、戰の巧拙は遙に其科有るにや。然れども天下に旗を揚げ、世を治め、國を平にするの道は別に有りて、戰の巧拙にはよる可からず、と語りしとぞ。是又奇論とすべし。

管領朝定と北條氏綱と、武州河越にて夜軍あり。朝定討死なり。此の合戰を、兩上杉と氏康夜軍となして記せるにや。同十五年丙午四月二十日、持氏五代の後、古河の晴氏と管領上杉憲政と共に河越にて氏康と合戰有りて、晴氏憲政敗北なり。是を甲陽軍鑑に兩上杉と氏康軍とせり。されば五代已前の持氏をば公方と記し、五代已後の管領を兩上杉となせるなり。持氏の四男成氏、成氏の長兄公方政氏なり。同人の長子高基、高基の長男晴氏なり、と言へり。又甲陽軍鑑に載する高名の事ども虛妄多し。中に就きて采配を手に懸けて在りし敵を討取りて、首を得し事を記せし事、幾ばくといふ事を知らず。總じて甲州に敵せし士は、采配を手に懸けしと見ゆ。誠に笑ふ可き書の記し樣なり。其餘虛妄勝て計ふ可からず。然れども其時に居て、戰國の勢を能く知り、且士の情に達せし者の書きたる書なる故、弓箭取る者の翫ぶ可き書にて、虛妄を以て棄つ可きには非ず。

吾友の松崎惟時が語りけるは、其の師なりし寶山流の劒術の達人武藤十右衛門の論ぜしに、「戰には巧拙有りと覺ゆ。太閤秀吉は戰に拙きなり。小牧にて十萬に及ぶ兵を卒ゐて東照宮に對陣し、誠に一及も合はする事能はず。東照宮の御弓箭世に勝れさせ給へるは論にや及ぶ。然れども三方ヶ原にて甲州の兵と御一戰有りしに、衆寡敵し難き故にや、利を失は

謙信に屬し、義清を信州へ入れられし事、記せるもの有り。甲陽軍鑑に、長坂長閑、跡部大炊助二人を奸曲の臣として、勝賴寵せられし事を深く憤れるは然る事なれども、一人權を執るは、勝賴に始まれるに非ず。信玄の時より寵せられし故、勝賴に至りて愈權威有りき。信玄の時、北條の兵に跡部敗れ走りしを、皆寵愛を憎みし由を、甲陽軍鑑に載せたるを以て知る可きなり。又言ひ傳へし說に、甲陽軍鑑を著せし本意は彈正にて、筆取は猿樂彦十郎といふ者なり。彦十郎は甲州滅びて後、大久保忠隣の所にて、東照宮の御事を書き加へて一書となしたるなり。又或人の云ひしは、川中島合戰の事を前夜に論じて、謙信強敵たるの故、對々の人數にてさへ危きに、まして信玄八千謙信一萬三千なり。勝つといふとも、討死數多有るべしと武田の各存ずるは理なり、と言ひし事を甲陽軍鑑に載せたれば、勝は謙信に有る事分明なり、と論ぜし人もありき。又同書に載せたる、持氏生害、兩上杉おごり恣にて、武州河越にて北條に負けたるは天の罰なり、といへり。持氏と兩上杉と時變れり。持氏の滅亡は永享十一年にて、氏康とは遙に百八年を隔てたるを、同時に記せり。北條早雲は延德二年に相摸に打入りたり。其頃上杉顯定は越後に在り。顯定は越後信濃の境長森原にて高梨に討れぬ。早雲さへ兩上杉と如斯を、氏康未生れざる已前の事どもを、甲陽軍鑑に記せしこと誤なり。天文六年丁酉七月十五日、

て、主從二人高梨山に懸りて走る可きや。謙信旣に其前後軍評定ありしに、計りし如くなる旨、甲陽軍鑑に記せし處明かなり。初の合戰に打勝つて、巳の刻まで徒に敵の歸り來るを待ちて敗走す可きや。謙信の弓箭を取れる越中の戰は、父の弔合戰なり。信濃に師を出すは、村上義清に賴まれて其の求めに應じて是を救ふなり。相摸の軍は上杉憲政の來るを容れて、已む事を得ざるなり。故に其詞にも强て勝敗を見るに非ず、當る處の爲さで叶はざるの戰を爲すと言へり。信義を守るを、大將の可〻愼事にせり。爰を以て深く賴みたるは始終約を變へず、又其兵を用ゆる、信玄の可〻及にあらず。山の根の城を攻め落せしに、信玄氏康兩旗にて後援する事能はず。遙々と敵の中を旅行して京都に赴きたるも、勝れたる事ならずや。信玄は、謙信小田原へ攻め入る跡に附きて爲したるは、爲し易きにあらずや。甲陽軍鑑に、長沼に城を築かれし時、制兵庫に信州水內郡にて百貫の地を與へ、信州戶隱にて密供を修す。爰に北越の輝虎讒臣を企て、此次切れて見えずと記せり。永祿十一年謙信戶隱山にて、謙信を信玄咒詛貞筆の書を見て打笑ひ、弓箭取る身の恥なり。末代の寶物にせよ、と神職に言はれし由語り傳ふ。今其の書紀州高野山に有りといふ事、詳に書き記せる物あり。實に謙信を恐るゝ事虎の如しとも言ふ可きにや。村上義清再び信州に歸り入りし事、甲陽軍鑑に載せずと雖も、永祿年中、信州の中四郡

芝居を蹈へたる方を以て勝とする事、甲陽軍鑑に論明白なり。然れども其日の戰信玄芝居を蹈へられしとは言ふ可からず。既に山本勘介が其の軍を豫め言ひたりしにも、二萬の兵を一萬二千、謙信の陣西條山へ指向け、合戰を始めなば越後の軍勝つとも負くるとも、川を越え退かん處を、旗本組二陣を以て首尾を打たんと謀りしなり。然れば謙信容戰なるが故に、思ふ程利を得たりとも、越後に引返すは極りたる事なり。是主戰の敵に勝ちたればとて、空しく其地に有る可きに非ざるを以てなり。是を以て言へば、信玄芝居を蹈みたればとて勝と言ふ可からず、是一つ。又信玄芝居を蹈へたりとも言ひ難きにや。甘糟近江守、犀川を渡りて三日留りたるを、甲州より押寄せて軍する事能はざりき。是越後の軍芝居を蹈へたるに非ずや、是二つ。昔老人の物語に言ひ傳へし事有り。信玄嫡子義信を殺されしは繼母の讒言有りしと雖も、其實は川中島にて信玄、義信將机換をして、信玄は廣瀨の方へ引き退く。敗軍と言ひ乍ら義信を捨殺すべき勢なりし故、義信深く恨を含むを以て、遂に不和に及んで殺されしに至れりとなり。信玄其場を蹈む事能はずして逃げたるを以て、芝居を蹈みたりと言ふ可きや、是三つ。謙信素より甘糟を以て、川を渡るの後殿と定められしが、三日留りたるを以て見れば、甲陽軍鑑に、甘糟が兵散亂せりと記せるも、虛妄なる事論を待たず。甘糟三日芝居を蹈みたるに、謙信何事に狼狽し

又甲陽軍鑑に記せし處附會詐僞、しひて拵へ設けて信玄の惡を隱し他を蔑にせし事、是又數へ盡すべからず。一事を擧げて論ずるに、北條家と戰ふ毎に利有りと見えたれども、北條五代記に記せるは、信玄川中島に陣せしに、氏康夜討して甲州の兵敗北し、八幡と書きたる旗を捨てて甲州へ逃入りたりと聞えたり。甲陽軍鑑に是を忌みて津浪に旗を取られしと記したり。假令北條五代記の說誤りたりと言ふとも、津浪に旗を取られしは陣所の地理に暗きに非ずや。

○甲陽軍鑑虛妄多き事

甲陽軍鑑を、高坂彈正書きたりと世に傳ふる事久し。勝頼に仕へし友野大膳武功の人にて、甲州の滅びて後、引籠り隱れ居しが、書きたる物には香坂と記せり。姓も違へり。僞妄多き書なりと雖も、軍國の事情をよく書き取りたる故に、其虛妄を人疑はず。控弦の家專ら讀む可きものと古人も言ひしなり。然れども其の事實を案じ、其の眞僞を考へずば、大に惑はされん事必然なり。川中島九月十日の合戰の事、其の記せしによりて是を論ずるに、信玄の敗北たる事疑ふ可からず。卯の刻に始りたるは越後方の勝、巳の刻に始りたるは甲州の勝なりと記せり。軍は

遺憾なり。甫菴馬鹿者なり、と長知言ひしとなり。長知は初浪人にて叡山に寄宿し、諸國を武者修行して後前田家に仕へ、大膳と云ふ。加州大聖寺、小松、越中、末森などの軍に武功有りて一萬五千石領し、其後同州太田但馬守を放討にせよとの命を受け、太田の祿一萬五千石を合せて三萬石を與へらる。長知大功の人にて人の勇武をさのみ目に掲けず、大方の事は稱美もせず。只武士の有る可き事と心得たりし故、甫菴に語りたる事遺漏多くて悔みけるとぞ。

○謙信信玄二將の批評

信玄死れし事を深く隱したるに、北條氏政聞きて謙信の許に告げ遣られけり。謙信は春日山にて湯漬飯を食せられしが、是を聞き打驚きて箸を捨て飯を吐出し、英雄とは此人なり。關東の弓箭柱を失ひたり、とて惜まれけり。信玄は將略の謙信に及ばざる故に、高野の成慶院にて大威德明王の法を修し謙信を呪詛せられし。其文今に高野山に傳はりけるといふ。

信玄勇才は人に超えたりと稱すべし。父を逐ひ子を殺し、降將を殺して其子を妾とし、其餘不仁怨毒算へ盡すべからず。姑く此二事を併見ても二將の賢否、論を待たずして明なり。

が志無下に口惜き事なり、と言はれけり。

小瀬甫菴後に此事を傳へ聞きて、信長記を編まざる已前ならば必ず其中に書入るべき事を。遅く聞きて殘多し、と言けるとなり。中務大輔政秀は備後守より信長の傅に附けられたり。信長甚だ善からぬ事多かりしかば、度々諫爭ひて後國の亡びん事を料りつゝ、一封の書を留置きて自害して失たる事、世に普く知りたれば具に記さず。中務始は清秀と云ひける故、諸書には皆清秀と記したれども、後に政秀と改めける故、諫死の後信長尾州名古屋に一寺を建られ政秀寺と稱し、寺領二百石寄附せられ、臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて、中務の墓も其寺に有り。寺の緣起に、政秀葬送の時信長柩に手を懸けられたる由記せり。小瀬甫菴は町醫にて加州金澤に居り、利家の臣横山山城守長知の許に心安く常に來て毎夜伽しけり。長知は尾州の人にて織田家の事能く覺えたりし故、信長の事を甫菴毎夜尋ね問ひ、月秀吉の事をも問ひける故、長知或は委しく或はおろ〳〵語り聞かせけるを、甫菴退きて書記し、信長記、太閤記二部の書を著し、世上へ出しけるを長知聞きて、信長太閤の事を書き記さん爲めに尋問ひたらんには答へんやうの有るべきに、遺漏も多く殘多き事なり。其事を聊も知らせざるに依りて、只一座の物語に云ひ聞せたるを其儘に書き著したるは、今に於て甚

て相引にしたりき。其時信玄二十七歳、謙信十八歳の時なり。夫より和平して京を指して上らんには、信長も吾も爭か支へ得べき。其故に兩方に使を以て道理至極せりと言はせしかば、兩將二十四年の間和平せざりき。其中に信長は近江和泉を打從へ、吾も援を出して信長を後にして根を深くするの謀をせしが、信玄死して勝頼父に優るべきと威を振ひ、暴逆して滅亡したり。信長又勝頼に勝りて驕長じ、様々善らぬ事のみ有りて終に弑せられぬ。斯の如き大將は滅びて終を善くせざる事理なり。夫を見て戒とせず、位爭をするは惡き事なり。氏政吾と二心無く言ひ交さんに、兩旗にて東國を打平げなん。其時に及んで州數多領する者上座に在ん。位爭ひ更に益無き事なり、とて伊豆の三島にて氏政、氏直に御對面あり。

○信長公平手政秀を惜み給ひし事

附 小瀬甫菴信長記太閤記を著せし事

信長弓箭盛にして畿内を打從へられし比、近習の者共諂ひて、斯強大に及ばせ給ふ事を知らで、平手中務が自害しけるは短慮にて候、と申しけるを、信長怒つて色を變じ、吾斯弓箭を取る事皆中務が諫めて死けるに恥ぢ、悔ゐて過を改めし故なり。古今に例無き中務を短慮なりと言ふ汝等

く姉川の合戦信長援兵を乞はれしに、小笠原を先陣に命ぜられし故、心中に挟む所有りと雖も、辞すべきやう無くて姉川にて御勝軍なりき。小笠原が二心無き體に見えしに、御乗りながら御心に乗せられぬ所有りし故、姉川の先陣小笠原と御定め有りて彼が支度相違せり。人の乗する所を乗らじとするも一物有て候。乗する處を乗りながら乗らぬ心有るを善しとす。豊臣家の乗する所の謀にてあへしらはせなん事然る可し、と申しければ、東照宮、尤なり、と深く信じ給はせけり。

○東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事

東照宮の御女を北條氏直迎へて、兩國和平なれ共御對面無かりしかば、天正十四年三月使をもて拝謁して、要害國境の城々守りの兵を輟め候べし。黄瀬川を渡り伊豆に至る可きか、と仰遣されしに、酒井忠次、黄瀬川を越え氏政父子に御對面候ひなば、北條家の旗下に屬し候と同じ事にて候。今徳川家は五州の御主なり、如何でか北條家の旗下に屬すべき。徳川家の瑕なり、と諫め申す。東照宮、去れば其位爭無益の事なり。過し比武田上杉和平して犀川を隔てて對面の時、馬より早く下りたる方旗下に似たりとて忽ち事破れ、其場より鐵炮を打合ひ、諸卒血に染み

とぞ語られける。東照宮歸らせ給ひて後、長臣達に聚樂の事ども御物語り有りける時、吾に羽織を贈りて後、秀吉吾に物具させまじきとの志なりと諸大名に向ひて云はれしは、斯る後は爭か秀吉の鉾先に向ふべきと中國西國に語り次ぎ言ひ次いで、普く世人の口に有るべし。筑紫の末までも聞えなん。是天下の大名に威を示すの謀畧なり。其遠大の謀輒く測る可きに非ず。力を以て是を推さんとするとも及び難き秀吉なり。去れども吾志す所は別に有り、とぞ仰せありける。

○本多正信遠謀言上の事

太閤東照宮を饗禮有りしに、かけ盤を始め器不殘葵の御紋を蒔繪にし、誠に美を盡したる次第なりしを、東照宮本多正信に語らせ給ひ、如何なる思慮や有らん。吾も亦遠き慮有る可きなり、と仰せられしかば、正信承り、されば候。小笠原與八郎氏次は勇將の譽世上に聞え候て、誰々も旗下に附けばやと志し有りしに、氏次同心仕らで御家の旗下仰に從ひ候ひき。彼が内々の志は信長と朝倉と一戰有らん時、必ず三河より御加勢に御出馬有るべし。其隙を窺ひ御家の領國は己が掌の内に握らんと存じ候て、僞りて二心無き有樣に候ひし。彼が計りし如

東寺と清水と兩方より挾みて打破らんに恐るゝに足らず。秀吉詐妄の謀を爲さば、吾天下を掌に握るべき兆なり、と仰せられ御出馬有り。秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけり。然れば危しとは知し召されけるが故に、萬民の命に替らんとの御詞、天地神明も感應して遂に國運を永世に開かせ給ひけるにこそ。

○東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事

東照宮聚樂にて秀吉に御對面饗禮有りける日、秀吉白き紙子の羽織に繡したるを著られけり。蒲生氏鄕其頃三十二歲にて、狐紙子と名附け呼れしとなり。

淺野彈正長政、彼羽織を御所望候へかし、と私語きければ、東照宮、漫に人の物を貰ひたる事無し、と仰せあり。長政又、御所望候ひなば秀吉大に悅ばれ候べし。素此羽織は物具の上に著んとの設なれば、一旦は辭し申されんを、强ひて乞得させられなば、秀吉何事の悅か是に增るべき、と强ひ申せば、東照宮止事を得ずして許容ましくけり。偖聚樂の城門にて毛利、浮田を始め居並びて拜謁し、さて茶を奉りて後、東照宮彼羽織の事を仰せ出されしかば、秀吉悅びて手づから著せ奉り、扨大名に向ひ、我に物具させまじとの事ならずや。誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なり、

し、謀むる旨尤 理なり。然ども秀吉に畏れて行くには非ず。日本久しく兵亂にて四民安堵せず。此頃稍治りたるに復秀吉と弓箭を執らば、何時の世にかは靜謐せん。只疾く秀吉に對面して日本大平の基とせん。若し危難に及びなんには、萬民の命に替らんに何か惜かる可き、とて九月二十日濱松を御首途有りけるに定りければ、人々、二十日は四ヶの惡日とて千人出て一人も不歸、と申し傳へ候。一日御延引然る可からん、と申す。東照宮、千人行きてこそ大事も有らめ。我今度一萬二千の軍兵を引具し上京す。此軍兵一人も生きて歸らずば吾爲の大吉事なり、とぞ仰せられける。井伊直政を御留守居とし、此度秀吉詐を構へ變に及ぶとも危からじ。尾張大納言信雄は必ず吾に告げ知せて味方たるべし。丹羽五郎左衞門は秀吉に恨有れば心を合せなん。其外吾に志を寄する人多し。去ども我も亦其備無からんや。秀吉不意に謀をなすならば、京都に火をかけ東寺に楯籠るべし。其時素より立て置きたる汝が組一萬を五百づつ二十に分ち、外に酒井榊原が今度京に上る供の外留置きたる兵一萬、是も二十に分ち、佐屋の渡を越え千種を押上るべし。若し大津にて支ふるならば、武田四郎が長篠にて懸りし如く切つて懸らば、上方武者一支も爲べからず。又瀨田の橋を焚きたらば宇治より攻め入るべし。新七、籠之介と云ふ角力取二人は宇治の案內者なれば召具すべし。斯の如くならば秀吉衆樂を退きて大坂に引取らん所を、

吉清洲にて勢揃せんこそ望む所なれ。鳴海表にて一軍參るべし。然らずば東美濃に打出て土岐、遠山、恵奈三郡を切り取べし、とて鞭を指上けられ、此鷹一もとにて手配すべし、とて打笑はせ給へば、三人歸りて秀吉に斯くと申す。秀吉聞きて、さても大勇將かな。今夜思惟すべし、と言はれし時、丹羽長重進み出で、必ず軍は思召止り給へ。長重が士共刀の鞘袋を設けし故、子細を問ふに、鞘に三卷を捲へ、合戰の時は鞘袋を捨てて三河武者に紛れ、命を助るべき支度なり、と申しも果てぬに、蒲生氏鄕、堀秀政も、皆々士卒其心得に候。萬に一つも利候まじ、と言へば、秀吉、よし徳川家を打破りて各に見せん物を、とて止みければ三人退出し、道にて、彼猿は死所無くて物に狂ふや、と私語きたり。翌日諸將を集め、三河を打滅さんは安けれども、智勇の大將なれば、吾日本を治むべき事を相談せん爲に緣を組み、妹を嫁して和平せん、とて又三人を遣れしかば、東照宮三ヶ條の誓文を御所望有り。秀吉許諾して和平に及ばせ給ひけり。四月秀吉の妹濱松に御座まして、後に京に登らせ給ふ可き旨を秀吉請ひて、秀吉の母の大政所を質とせられしかば、都に登らせ給ふ可きに定りけり。長臣共、是は危き事なり。然る可からざる由諫め申せども聞し召入れ給はず。其時申しけるは、和平又破れ秀吉攻來り候とも、素より鉾先の強きは言にや及び候べき。何十萬の大敵なりとも打負候まじ。強て思召止り給へ、と申しければ、東照宮聞し召

しとぞ。

○秀吉東照宮に和を乞はれし事

天正十四年正月、秀吉織田源五郎長益、羽柴下總の守勝雅、天野作左衞門三人を使として、東照宮に和平を乞はれけり。三人歸りて、和平思も寄らず。重て來らば首を切らん、と德川殿申されし由申し入る。又重ねて三人を三河へ遣し、强ひて和平を請はせらる。東照宮三河の吉良にて、左の手に鷹を据ゑさせ給ひて三人に御對面あり。三人申しけるは、信雄卿の厚恩を忘れての事には候はねども、秀吉計略し、瀧川三郎兵衞に羽柴の姓を與へ下總守になし、神戸の城主として三萬石の加祿し、其外數多都に妻子を置き、自ら人質と成り候ひぬ。種々の謀候へば、此度和睦候はずば秀吉軍を出し、淸洲にて勢揃へして打向ふべきことなり。四國中國の兵も相加はり、去々年小牧の時より兵十萬も多かるべし。由々しき事に候、と申しければ、東照宮聞し召し、去年十一月伊勢の奈合にて信雄卿と和平の時、我方にも已來別の事あらじ、など云ひたるも、我を謀るの謀にて、吾家の石川伯耆守に十萬石與へて我に背かせたり。吾弓箭を取つて發向せんと思ひしかども、織田殿の國を打過ぎて軍せん事如何にと怒を押へて止みぬるに、無禮の事共なり。秀

より痛み甚しく、已に事切れさせ給ふ、と城下には申しける程の事なりけり。今はかうとや思召けん、御遺言を仰せ出されしに、本多作左衛門重次參りて、先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑が藥を附させられよ、と申しけれ共、聞し召し入れさせ給はざりしかば、作左衛門大に怒り、殿は徒に死し給はんよ。此作左衛門は年老いぬれば、只今自害して待ち奉る可し、とて座を立ちけるを御覽じて、如何に作左衛門氣狂ひたるか、未だ存命へたるに自害とは何事ぞ。吾亡からん後こそ大事なれ、と申されし時、作左衛門、夫は人に依りての事に候。若き時より幾度と無き軍場に數ケ所の手を負ひ、世の中の崎といふ崎は身一人に掲け候ひぬ。今日まで殿の御情にて人がましくも候なり。只今殿過ぎさせ候ひなば、北條を始として敵國攻め來らんに、殿に後れ奉り、はか〳〵しく軍する者や候べき。國は忽ち滅亡すべし。其時作左衛門は路の邊に餓死せん。彼れこそ徳川家に奉公せし本多作左衛門よ。何を頼みに存命へたるなど、人に嘲り笑はるべし。近きは武田の内にて甘利殿とて人の敬ひたる人も、武田の運盡きぬれば、今は本多平八郎が組となり、屈まり居るを見るも哀なり。是は人の上ならず、勝賴の不道にて滅亡したるも、殿の藥を嫌ひ給ふも同じ理に候、と申せば、東照宮尤なりとて長閑を召し頓て藥を奉り、灸を大にして作左衛門据る奉りければ、夫より痛み稍輕くならせ給ひければ、作左衛門聲を上げ泣いて悦び

て進み出でたる者の候、と言へば、利家、山崎出でたるよ。早味方勝ちたるぞ、と言はれけり。旗本の早り男の者共、駈け出でんとするを、敵の勢競ひ懸りて足も踏止難き時なり。今少し待ち候へ、と下知せらる。德山五兵衞、只今鎗を合せたると見えたり。地煙立ち候、と言ひけり。然るに近邊の赵中の兵城々より助來て敵の陣は黑けれども、山崎が與力鷲津九藏と名乘り鎗を打入れたり。早懸られ候へ。左なくば九藏危しと言へ共、山崎靜れ、と云ふ詞の中に九藏倒れたるを見て、山崎進み出で鎗を打入れ、押崩して城際まで追ひ打ちにしたりけり。城兵門を指固めければ、利家強て攻めすして引返されぬ。此軍の前利家の近習の士九里少藏勘氣を蒙り居たるが、成政馬廻の將杉江彦四郎と組打して谷へ落ち組敷かれ、杉江刀に手を掛けたる處を、下より少藏小脇指にて具足の鎖のはづれを刺通し刎ね返しけれ共、氣疲れて首を取ることを得ざりしに、片山内膳が從卒來りて少藏を押退け、相討と云ひて首を取りたり。利家細やかに事を糺明して少藏が功名に定り、勘氣を許し鞍置馬を與へられけり。

○本多重次强諫の事

天正十二年三月、東照宮濱松の城にて疔を病せ給ひ、近習の若き人に膿を强く押させ給ひしに

を攻め落さず空しく引返す事を怒り、引退く體にして津幡の城へ寄せんも計り難し、とて奥村を城に止め兵を數多指置きて末森を打出でられしに、追々に兵加はり一萬許に成りにけり。又不破村井を先陣として濱邊に指掛り、津幡に馬を入れられしかども、成政は津幡に押寄せずして引取りけり。佐々が軍兵金の戮斗の指物したれば、坪井山は輝き渡りて見えけるを利家打詠め、天晴見事なる備立よ。頓て成政を攻亡し、我士卒に指さすべきよ、と言はれけるとぞ。秀吉此勝利を聞き、日本に比類少き武功と賞せられぬるとかや。利家奥村に其日持たせられし馬印、金の切裂の采配著けられし甲冑を賜りて賞せられしといへり。

○利家烏越城を攻めらるゝ事

天正十三年四月八日、前田利家金澤を打出でて烏越の城へ押寄せらる。烏越の城は金澤より元兵を入れ置きたるが、去年末森の時城を明退きて、成政の軍兵入り替り守りければ、利家是を憤りて攻め落さんとの志なり。城兵も久瀬但馬守、其外撰みたる者共五百許、門を開いて突いて出で、利家の先陣を追つ立つる。利家は傍なる山の尾崎に陣して馬を立てられしに、味方敗北するを見て、山崎少兵衛は如何したるや。早や返すべき鹽合なるに、と言ひも終らぬに、白き羽織に

時野村傳兵衛、山崎彦右衛門一度に鎗を合せたり、とて一二の爭論せり。利家、半田が眞先駈したるに冥加無く深手負、志を遂けざれども勇士の志は顯れたり。二士一同に鎗を合せたれども傳兵衛名乘たれば、一番をば野村に極めたるぞ、と下知せられ、二人に千石の加祿を與へられけるとぞ。半兵衛は疵癒えて二千石與へ、士十五人與力に附けられけり。成政の旗本へも後巻の由聞えしかば、然らば一軍せん、とて八千許押出す。利家是を見て、此勇める勢には百萬もあれ恐るゝに足ず。先陣は又兵衛せよ。二陣は城主なれば奥村、三番は不破彦三と定められけり。能州の國士長九郎左衛門四五百許にて馳來る。敵味方分明ならねば物見を遣るに長が兵なり。遲く馳附きつる事口惜き事なり。弓箭の冥利に盡きたり、と憤りけるを、物見の脇田善左衛門、野村七兵衛聞きて馳歸りて具に申せば、利家長を感ぜらるゝ事大方ならず。皆とりぐ〳〵に長が志を褒立つれば、努々後れたるに非ず。淺からざる譽なり、と誓紙を添へたる書を長に與へられたり。成政如何に思ひけん、打出したる兵を引き纏ひ、山に添うて引退く。折しも武者修行して來り居たりし本多三彌は、無二無三に掛りて成政を討ち取るべきに、と云ひけれども、猛將の成政なればこそ手輕く引拂ひたれ、と人々言ひしかば附慕はずして止みにけり。討取りし首七百五十三とぞ聞えし。利家は成政城

門少も氣を屈せず、支戰ひける處に、砂山に當て朝霧の晴間に利家の馬印見えしかば、力を得勇み悦ぶ事大方ならず。今少し後卷遲かりせば城陷るべきに、運を開きしは偏に利家迅速の兵機を得られし故なりけり。村井又兵衛、田野村三郎四郎を始として、鎗を打入れ散々に戰ひけるが、成政先陣の大將佐々與左衞門を村井突伏せければ、士三十餘人枕を並べて討死す。利家の先陣佐々を討ち取り、鬨を作りかけ切崩せしかば、寄手敗北しけるを、利家見て搦手へ廻られけり。寄手にも究竟の兵餘多有りて待ちかけたれば、利家族本五十騎許靜に懸りける所に、半田半兵衞眞先に進み、一番鎗と名乘りける所を、櫻井助鐵炮にて撃ちたりしかば左の手に當り、鎗を抱きて倒れたり。半兵衞と甚介は從弟なりしが、指物にて見知りける故、甚介も、半兵衞存命へずば不便なる事を爲たるよ、と涙を流しけると後には聞えけるとかや。利家、敵の鐵炮烈し、延々にせば叶ふまじ。たゞ懸りて追崩し候へ、と金の切裂の采配を取つて下知せられしかば、會釋も無く競ひかゝりて押崩す。寄手餘多討たれて敗北せしかば、金澤の士勝鬨を噪とぞ上けたりける。利家城中に乘入りて奥村を首詞を掛け、今度籠城の働言語の及ぶべきに非ず。利家如何に思ふとも、汝が言ひ甲斐無くて城を明くるか。又攻落されなば口惜かる可きに、斯る功名やある、と勇め立てらる。其

にせん、と問はるゝに、越後、されば候、武者ならば並びの揃ひ候事有るまじと存ず。猶も慥に見ん爲に、川中迄馬を打入れて心靜に見て候。是を見損じ候程ならば再び弓箭は取るまじ、と申す。利家、汝が見る所こそ正しけれ。士の手本にせよ、と悦ばれけり。偖兵を進めて押通るに、神保是をば夢にも知らず。後れて聞附けたれ共、利家は今濱と言へる右の上なる山に兵を押附け陣せられしに、夜明けにければ利家馬を乘廻し、兵粮を遣ひ候へ。今日の軍勝つべき事心易かるべし、と下知して、皆馬より下りたり。爰にて見れば利長七八百許、兩先陣千三百許、旗本千五百には過ぎざりけり。利家、今日の軍に功名せん輩は取分て賞すべし。若討死せば必ず子孫を見放すまじ、と高らかに下知せられ、夫より山を下りて兵を進むるに、道二筋有り。一筋は末森の道、一筋は成政旗本への道なり。村井、坪井山へ押寄せ、成政を虜にせん、と申す。利家聞きて、尤なれども、成政必ず險を前に當てや陣すらん。只末森へ馳附け敵を追崩し、城中の者共に力を附けんは如何に。村井承り、可然候。城中の士共只今の仰を承り、さぞ辱からん、と言へり。程無く末森近く押詰めたれば、村井が者共餘多首を取來る。末森には二の丸に籠りたる千秋主殿助、瀧津金右衞門已下寄手攻め入るを追出し、力の限り戰ひけるが、討死餘多に及べり。本丸も既に危く見ゆれ共、奥村助右衞

利家、汝功者なり。頓て打勝ち賞美すべし、と快けに打出で、勇み進んで押行きけり。村井、不破先陣、原隠岐、前田又次郎、片山内膳二陣、田野村三郎四郎、青山與惣兵衛、近藤善左衛門、前田慶次郎押續く。宮川但馬武者奉行たりと言へり。川尻の此方一里許高松と言ふ所にて、利家胃を取つて著、忍びの緒の餘りたるを切つて捨てられしかば、儕は今日限の軍よ、と人人生きて歸るべしと思ひも寄らず。篠原勘六とて利家の近習の士二十三に成りしが、横根を煩ひ起臥も心に任せず。然れども是非打立つべき、とせしを、汝は殘り留りて、吾討たれなば堅く城を守りて秀吉の後巻を待ち候へ。叶はずば其時腹を切れ、と下知せられしかば殘りけるが、乘物に乘り與力の士二十騎打具し、川尻近く成りて馳附き、篠原勘六參り候ひぬ、と大音に呼りければ、是を聞く人々、天晴剛の者なり、と云ひ合へり。川尻よりは津幡に人を附けて窺はするに、馳歸りて、前田父子津幡まで出でたれども、後巻有べしとは見えず、と言ふを聞きて、神保は大に備を寛めけり。利家先陣に乘行きて、村井不破に濱際を一騎打に馬の舌を巻かせ、如何にも靜に押通れ、と下知せらる。神保は兵を押出し待ちかけたり、と物見の言ひしかば、又富田越後此時六左衛門といへりを物見とせらる。馳歸りて、敵は一人も候はず。川の杭の多く候を人と見誤りたるならん。疾う〳〵押せられ候へ、と申す。利家、川杭とは何を證

へ急ぎ押附けられしかば、弟の右近秀繼廓外に出向ひ、利長を待る可きや、と言はれしかば城に入られしに、利長戌の刻ばかりに津幡に馳せ著かれけり。利家悦んで、吾成政と若き頃より數度の軍に逢ひつれども、利家を越したる事一度もあらず。然れども成政侮るべきには非れども、無二無三に一合戰して勝利を得ん事掌の中に有り、と大音揚けて呼はり勇み進まれけるに、寺西治兵衞入道右近と相議し、早や末森は落ちたるならん。殊更川尻に神保多勢にて道を切り塞ぐと聞え候へば、後巻は如何候はん、と申す。利家大に怒り、汚き諫は必ず口にも出すまじき事ぞとよ。人は一代名は末代とこそ聞け。奥村や土井を捨殺して已來、假令日本の主となる共此恥辱雪ぐ可からず。成政大軍にも有らばあれ、吾馬廻り計にても快く軍して勝負を決せん事不足なし。如何に村井、汝は如何に思ふぞ。是非一戰と思ひ定めたるぞ、と詞を掛けられしかば、又兵衞聞きも敢ず、有無の一戰の外何の是非か候べき、と云ふ。利家悦んで、村井が心も吾に同じ、とて早打立たれしに、右近茶漬飯を進め、且上手の占師の山伏の候。召して軍を占はせられんや、と問ふ。利家氣色良からねど、夫々とて呼出されけり。五十許の山伏なり。懐より書物を取出す。利家ともあれ後巻に決定したるよ。能見よ、と言はれしに、山伏書物を懐に入れ、今日吉日なり、時も吉時なり、と言へば、

を疑ひ、加州に又左衞門を置きつるは吾謀りしに違はざりけり。利家兵少しと雖も必ず成政に切り勝つべし。頓て師を出し、成政を討亡すべきよ、とて使者に黄金三十兩與へられぬ。九月十一日成政末盛へ押寄せ、二里許傍の坪井山に切所を前に當てて陣し、佐々平左衞門、山下甚八、前野小兵衞を始として八千餘攻寄せ、外構の町家に火を懸けんとす。土井伊豫、敵に町家を燒かれては生甲斐無し、とて二百許にて突いて出で、散々に戰ひけれ共、大敵に掛け合はせ終に討死す。城兵も爰を專途と防ぎけり間、速に落つ可しとも見えざりしかば、成政後卷心元無し、とて神保安藝守氏春に四千餘を差添へて、川尻と言ふ所に陣して、加州の道を塞ぎたり。利家末盛より告け來ると等しく金澤を打立ち、不破彦三、村井又兵衞を先陣とす。

一說に、成政嚴く攻めて、二三の丸水の手を乘取り、本丸に攻詰めたり。末森の飛脚息切るばかりに金澤に馳來り、文箱を投けけるとぞ。

十一日未の刻の事なり。末森は水に乏し、廣岡の水を汲みて粟蝶に入れ、急ぎ追附よ。後卷の土產にせん、とぞ下知せられける。偖同國松任と言ふ所、金澤より三里許隔りて利長居城なれば、疾く〳〵末森へ向はれよ、と言ひ送られけり。金澤より四里許なりける津幡の城

在りとも斯る事を聞かば馳せ來る可きに、參合せたるこそ幸なれ。然るに空しく歸れと言ふ事や有る、と怒りければ、村井聞きて、誠に賴母しき事悦ぶに餘り有り。但し路次に一揆起りなんは必定なり。各歸りに恐あらば爰に止られよ、と云ひしかば、兩人此詞を聞きて、扨は路の一揆を恐れて歸るまじとや。然らば駈け歸つて申さん、とて馬に打乘り、金澤へ四里半許なる道を只一時に馳歸り斯と申せば、利家然らば後卷せよ、とて不破彦三、田野村三郎四郎、片山内膳、岡島喜三郎、原隱岐、武部助十郎などを打具し、貝を吹せ揉に揉んでぞ急がれける。折しも大雨降りしかば、成政の兵も一時に攻破り難しとや思ひけん、城を攻めずして引歸しぬ。是より和談破れければ、能州七尾には利家の弟五郎兵衛安勝、同孫右衛門良繼、高畠織部、中川清六、長九郎左衛門等三千餘にて籠め置き、能登加賀越中の堺末盛に奥村助右衛門に千秋主殿助、土井伊豫を添て、千五百許籠められたり。加州津幡の城には前田右近、越中の堺鳥越には目加田又右衛門、丹羽源十郎を籠めたり。成政も俱利加羅の嶺に城を構へ、佐々平右衛門二千餘、利波の城には前野小兵衛に二千、青山の城には國士菊地伊豆守、荒山に城を築き、神保安藝守氏春の家老袋井隼人に守らせて七尾の押とす。神保は成政の聟なり。四千の兵をもて森山を守りけり。利家斯と秀吉に告けられければ、秀吉聞きて佐々

で、秀吉と織田家の弓箭、大敵に手易く勝ち難からん。成政、北國より攻登りて前後より挟み打ちて秀吉を亡しなんには、加賀、能登、越前三州を賜はり候へ、と信雄に相約し、又さら〳〵越より富山に歸り、佐々平左衛門、神保安藝守と相計り、成政の二人の女有りし中、一人は秀吉へ人質に出し置きたりしかば、其妹を利家の二男利政に妻す可き由を平左衛門して言せしかば、兩家緣を結び目出度し、と言ひ合へり。天正十二年七月二十三日、成政の使佐々平左衛門金澤に赴き、祝ひの物取揃へ相贈りけり。利家篤實の人なれば、成政の奸謀有りとも知らず、引き出物して悦びの上、村井又兵衛を謝禮の使とせらる。成政、八月は忌み候、とて延蔓き、夜々北の櫓にて軍評定せられけるに、心附きて密に利家に知らす者あり。利家虛實辨へ難しと雖も、怠りて不意の變に打負けなば弓箭取る身の恥辱なり、とて加越の堺朝日山に城を構へ、村井又兵衛を大將として、千五百餘りにて守らしめん爲め柵を附け廻る處に、八月二十八日成政より佐々平左衛門、前野小兵衛に五千の兵を指添へて押寄せたり。加賀の者共居住の支度せんとて金澤に歸りたるも有りて、折節七八百には過ぎざりけり。然れども村井大剛の者にて、味方を勇め立つる處に、利家馬廻りの士阿波賀藤八、江見茂十郎見廻ひに參り合せしが、急ぎ歸りて注進を緩まばや、と云ひければ、兩人色を變じ、金澤に

も寄らざる所に切つて懸り打勝つべし。奥村討たせなば生き甲斐無し、と言ひつゝ、津幡の町を北へ打過ぎられたる時、富田乗り來る。津幡は金澤より四里餘の行程なり。利家、汝何處くに寢て有りけるぞ、と罵らるゝを、富田聞きて、津幡に馳附き不破が門を叩き申し渡し、不破物具著て候を見て打出で候へば、はや門外に旗を指出し候ひぬ。何國にか寢申す可き、と言ふ。利家尚聞き入れざりしかば、富田怒つて其日の一番鎗を合せけり。是利家士を激するの術なるべし。利家の士卒追々馳せ附ければ三千餘りに成りけるを、二陣に分け、一陣は敵の後に打懸り、一陣は敵の旗本に突いて懸る。成政軍兵疲れし上思ひ寄らざる所に、奥村も門を開きて打つて出でしかば、成政大に敗北せり。是天正十二年九月十一日の軍なり。後に聞くに、成政山の尾崎を越え、敗軍を集め陣を立直し、見よ〳〵今前田と言ふ男が、勝ちに乗り陣を亂して懸り來るべし。大返にして利家を打取るべし、とて物見二騎を出せしが、乗り歸りて、敵は城を後に當て、靜り返りて懸り來るべき物色候はず、といふ。成政謀違ひけり。

末盛後巻の事、加越合戰記に見えし處、大同小異にて詳なる故併せて爰に記す。利家は加州の内石川川北能登全州を治め、金澤の城に有り。成政は越中の守護にて、新川郡富山の城に有りしが、越中立山さら〳〵越の難所を、僅に從者百許にて忍びて打通り、東美濃へ出

知して、既に二三の丸を攻取りて夜の明くるを待ち居たり。末森より金澤へ行程九里許、其日酉の刻に斯と告げて、夜の明くる迄は堅く守るべし、と申し送る。利家聞きも敢へず金澤の城の廣間へ出で、利長を呼んで、汝は城の留守せよ、と下知せらる。利長、否々眞先駈けて佐々を打破るべし。殘止らん事思ひも寄らず、と申されければ、利家、然らば父子打向ひ、敵の不意を討に利有らん。軍兵を整ふるに及ぶ可からず。馬に鞍だに置くならば一騎駈に打出でよ。一足も疾出づるを今宵の功と爲可し、とて富田與五郎後越後守に、汝津幡に行きて不破彦三に末森の後巻の先手せよと言へ、と下知せらる。富田己が宿所に馳せ歸り、馬引き出し打乘り、諸鎧を合せて駈け行きけり。利家、士卒皆汁を掛けて飯を喰へ、とて物具せらる。庭には黒の馬を引き立てたり。利家の北の方春院三方に兜斗を入れ父子に參らせられ、扨人々聞き給へ、我は利長の母なり。今日の後巻は誠に大事の軍なるべし。各心を合せ功名し給へ。末森を敵に取られなば各達も討死し給へ。我も人手にかゝり候まじ、とて利家の側近く進み寄り、末森を敵攻め落しなば討死せさせ給へ。利長も母が此詞を能く聞かれよ。生死の別れなり、と言はれしかば、利家、あら心よや。成政を打破らん事必定なり、と言ひも敢ず、物具の上帶を締め、結べる端を切つて捨て馬に打乘り、父子の兵五百許に過ぎざりけり。利家馬上にて、味方の小勢は吉事なり。佐々が思ひ

常山紀談　巻之七

○前田利家末森城後　巻合戦の事

瀧川一益、佐々成政等信孝を推崇て秀吉と弓箭を取りしに、天正十二年九月成政八千の兵を率ゐて、加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永福後に伊豫が守る所の能登の末森の城を圍む。成政旗本を以て後巻を押へ嚴しく攻むる。此城だに打破らば、能登は一日に討ち從ふべし。後巻無き中に乘取れ、と下知しけり。奥村僅に三百許の士卒にて爰を詮度と防ぎけるに、餘りに強く攻められて、今は是までなり自害せん、と云ひけるに、助右衛門が妻小袖を掻い取り鉢巻をし刀を横たへ、女房に粥を手桶に入れさせ、塀裡の人々に自ら飲ませ、普楠とやらん云ひし大將の、日本國を敵にして城に籠りたりと聞く。明日は金澤より後詰の候べきに　只一夜防ぎ給へ、と云ひて打廻るを、奥村見て、今日の振舞男子に優れり。此城を女の力にて持得んは口惜し、と自負の色あり。此城手易く落つ可からざるを見て、火攻にせんと云ふ者あり。成政、否々大手の城門を取りて富山の城門とすべし。又石動山の衆徒も吾に心を合す。火攻には爲可からず、と下

進みたれども稻葉が母衣の手をしむる隙に先に乘込だり。實は一番稻葉なり、といふ。人皆是を賞しけり。有吉武藏が足輕鐵炮に鎗を持ち添へて鐵炮を搏ち、其上に壹番鎗を合せたるが、吾一番に非ず、園部儀大夫が母衣の手を絞むるを見て駈け出でぬ。園部が一番なりと譲りしと同じ事にて、戰國に斯る士は稀なる事にこそ。

○羽柴勝雅敵を免す事

羽柴下總守勝雅の許に二藏三藏といふ有り。何れの城にての事にや有りし、下總守城より出でて働き、引取りたるを敵附來る。二藏三藏門を固めて揚簀戸を下して敵を立籠めたり。勝雅下知して門を明け、敵二人を出して討ち取らず。近藤石見守加勢たりしが、其子細を問ふ。立籠められたるは死地に入りたる敵なり。是を討たば城兵餘多死傷すべし。打止めたればとて軍の勝敗に與らず、と答ふ。石見守武功の人なりし故大に感じたり。

藤嘉明も羨み慕ひて、吾子の明成を式部少輔になしけるとぞ。

○竹中重治の事

竹中半兵衛重治は美濃の菩提の城主なり。後に秀吉の軍奉行たり。謀略有る人なれども打見たる處は婦人の如し。軍に臨む時も猛威なる事なし。馬の皮にて包める甲を著、木綿の羽織一の谷と名附けたる胄の緒をしめ、靜り返りて居けり。重治向ふ度毎に士卒戰はずして既に勝ちたり、と勇み合へり。重治或時軍物語せしに、子の左京未だ幼かりしが、座を立ちければ、重治、軍は國の大事なり。何方に行く、と問ふ。則にゆく、と答ふ。重治、爰に溺をたるゝとも、軍物語の大事の席を立つ事やある、と怒られけり。

○戰國の士功を讓る事

稻葉治左衛門は美濃齋藤家の士、戰場にて必ず眞先に獨進み出、芒の如くなる所に居ける故、世の人是を芒の治左衛門と言ひけり。澤喜藏は美濃飛驒に隱れ無く、若き頃より功名有り。芋がら畠の鎗澤一番なり、と言ふを、吾には非ず稻葉なり、と云ひて、互に讓りて決せず。澤は早く

追ふ。一氏は三百許にて、堂の池といふ所に控へて先陣の歸るを待つ處に、堺海道に馬煙暗う見ゆ。是は堺に向ひたる敵の返し來れるなり。荒手の大軍に駈け合つて戰はん事思ひも寄らず。疾く城に楯籠らん、と口々にいへば、一氏、否々退くならば味方氣挫けて打負けなん。一寸も退く時は、先陣を捨殺し、城をも攻め落さるべし。一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切崩すならば、二陣は忽敗北すべし。我に任せよ、とて敵の一同に掛り難き地の理を料り、堂の池を前にして大敵を待たれけり。一氏、馬をば悉く城へ返し候へ。馬を引附け置く時は引退きたき心の起るぞ、とて將兒に腰かけ、旗本三百許の勢、鎗を膝の上に置きて折敷たり。新藤勘左衞門、強弓矢繼早の手利なるが散々に射る。射白まされて手負死人倒れ重りて疇踏ふ時、一氏弓の者の羽壺を勘左衞門に渡せ、と下知せられしかば、愈指詰引詰射ける矢に空矢無かりけり。一氏、麾を取り掛け、と言うて立ち上る。黑田如水は大坂に在りしが、岸和田に敵押寄すると聞き、子の長政十四歳になりしが岸和田に在れば、いざ救はん、とて七百許にて敵の後に駈け來るを一氏見て、愈進み喚き叫んで切つてかゝり、追つ立て八百餘の首を取りたり。如水は長政如何にと思ふ處に、黃羅紗の羽織著て鹿毛なる馬に乘り、今朝討ち取りし首を、鞍の四方手に附けて馳巡るを見て悅ばるゝ事大方ならず。秀吉一氏に感狀賜ひてけり。一氏は豐臣家諸將の中にも勝れし勇將なれば、加

は追懸くる。九鬼が者共多く討たれ、水主楫取驚き騒ぎて船を出し得ず。斯る處に九鬼が士村田七兵衛鐵炮に藥を込め、間宮造酒亮が舳先にて下知しけるに、大音上げて靜に相だめにするを、兩軍鳴を靜めて見物す。其中に九鬼が者共ひた〳〵と船に乘組たるは、村田が躬を捨てて沈めん爲の謀故なり。斯て村田思ふ矢坪に中りて間宮倒れしかば、九鬼が者共力を得鐵炮を打かけ、船を乘り浮めて港を出でにけり。

○中村一氏紀州の一揆を追拂はれし事

秀吉小牧に陣を出す時、紀州の根來雜賀の一揆を押へんため、中村式部少輔一氏を岸和田の城に置かれけり。紀州の一揆秀吉大阪を打立つと聞きて、二萬三千許二手に分れ、一手は東の山際より堺に向ひ、一手は岸和田に押寄る。早り雄の若者共二騎三騎城を出でて、寄手に向ひしかば、士大將早川助右衞門、川毛惣左衞門引歸れ、と使を遣るを、一氏聞きて、斯る時進んで行重りたる武者を引かんとすれば敗北するものよ。いざ打出でん、とて鐵蓋が峯と名附けし冑の緒を締め城を乘出す。先に進んだる者共菅笠の馬印を振返り見て、すはや殿こそ出で給へ。軍ば勝ちたるよ、と言ふ程こそあれ、一萬餘の紀州勢に面も振ず切掛り打破りて、七筋に分れて逃るを

出馬するとは其時を脱さぬなり、と仰せられけり。

○東照宮の御軍畧に依つて蟹江城降參の事

東照宮長久手の軍に勝たせ給ひ、勢州蟹江の城前田與十郎を御攻めあらん、とて打向はせ給ふ所に、加勢多く馳入りけるを御覽じて、敵如何程も城中へ入れよ、と仰せられしを、酒井左衞門尉忠次承りて、何とて押留給はぬぞや、と申す。東照宮、如何思ふぞ、と御尋ね有りしかば、忠次、城は堅固なり。多勢籠りなば爭か攻め落すべき。如何なる御心か候、と申すを聞し召し、大將謀を言ふやうや有る、と仰せられけるが、其後援兵の乘來りける船を追ひ拂はせ、粮道を絕せ給へば、粮忽乏しく成りて城を渡し降參しけり。東照宮四十二歲の御時なりとかや。

○九鬼嘉隆蟹江の港出船の事

蟹江にて井伊直政兵を進む。秀吉の舟手大將九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船に乘り、蟹江の港に漕ぎ入れて打上り、堤を隔てて戰はんとせしが、引退きて船に乘るところに、入江の港に東照宮の兵船角新造と言へるを横樣にして、左右に亂杭を打ち、眞中に取圍まんとす。直政

る。稍有りて小牧の陣より月毛の馬に乗り、紅の母衣掛けたる武者書翰を取りて歸る。暫時有りて金の枇杷篦の指物さし、鹿毛なる馬に乗りたる武者、書翰を竹に挟み、元の所に立ててけり。彼れ取來れ、と言はれしかば、忠興又馬に乗り馳せ行きて取り歸るを、秀吉披きて讀るゝに、東照宮の返書にはなく、渡邊半藏重綱、水野太郎作正重が書簡にて、其詞に、後に柵結ひて一足も引くまじきと思ひ定めて、軍有らん事兎も角もの事に候。三河者下部に至るまで、一足も逡ぐると申す事露計も不存候、とぞ書きたりけり。秀吉讀みも終らず怒られければ、高山、されば斯く候はんとて申したる事よ、と居丈高に成りて申す。秀吉冷笑ひ馬率出させひたと乗り、僅四五騎許にて松原の小塚に上り、臀を打ち叩き、敵の大將是喰へ、と大音に呼はるを、小牧より唐冠の冑に孔雀の尾の羽織著たるは秀吉よ。剩すな、とて鐵炮を打ちかくる。秀吉、天下の大將軍には矢の中る物かは、と言ひて、靜々と歸られけり。

○東照宮蟹江御出陣の事

尾州蟹江に瀧川一益中入す、と告來る時、祐筆曾通といふ者、御出馬可被成者也、と書きけるを、東照宮、此可の字を倒れ。今日に於ては一字も大切なり。大敵を前に置き可出馬一とは後れたり。

放さる。翌年長久手にて傳右衛門密に御旗本に來り、眞先駈け三宅彌次兵衛と爭ひて首を取る。傳右衛門は内藤四郎左衛門が傍に參て、申し給はらんや、と云ふを、其間十間許にて御覽ぜられ、傳右衛門連來れ、と仰せられしかば、御前に跪く。如何に汝が無禮なれども今日軍の先駈したれば許すぞ、と御詞に傳右衛門涙を流しける時、三宅、先に臣を一番高名と御詞をかけさせ給へど、傳右衛門は猶進みて首を取り候、と申しければ、三宅が實なる志を感じさせ給ひけり。

○秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事

東照宮の小牧の陣を、秀吉二重濠の城の櫓に上り見遣りて、高山右近大夫幸任を呼で、小牧に書翰を送り一戰せんと思ふなり。十三萬の軍兵陣を整へて押出し、後に柵の木結ひて引退かざる手立せんは如何に、と云はれしかば、高山、是は思召し止らせ給へ。小牧よりの返書必ず怒らせ給はん事を申し來るべし、と云へ共、秀吉增田長盛に書翰を書かせ、長岡忠興に、敵陣の木戸なき道に立てよ、と下知せらる。高山色を變じ、仰なりとも行くな、とぞ制しける。秀吉、忠興は弓箭の激しき所へは思ひも寄らじ。剛の者を使にせん、と言はれしかば、忠興高山を睨みてつと立つて馬に乘り、竹に書翰を挾み乘行きて、村立つたる松原の小塚の上に押立て歸るを見て、秀吉悦ば

ん、とぞ觸れられける。其後東照宮と和平して婚姻の約有りける。始の使に康政を賜はるべし、と秀吉申されて京に上りしに、秀吉對面し、小牧にて札を立てたる時、汝が悪き首を一日見ん事をのみ思ひしに、今斯和睦に及べば其志を悦び思ふなり。此事を直に言はんが爲に迎へたり。小平太と呼ばんは如何なり。敍爵然るべし、とて式部大輔とは此時よりぞ申しける。儲養禮有りて厚く馳走有りけるとぞ。

○初鹿傳右衞門の事

勝賴亡びて後、武田家の士多く東照宮に仕へ奉る。前に領したる祿知を書きて奉れと仰せ出されけるに、初鹿傳右衞門は加藤駿河守が二男にて、兄の源五郎は川中島にて討死しけり。傳右衞門其祿を受繼ぎたりし故、祿地を書きて出しけるが、駿河守が二百五十貫の地をも合せて書記せり。駿河守が嫡子丹波、三男を彌平次と云ふ。兄弟共に、傳右衞門は源五郎が祿をこそ申すべけれ。駿河守が祿を合する事の有るべきや、と言ふ事聞えて本領四百貫のみ下し賜りぬ。傳右衞門、人は皆親兄弟の祿地を記し出して其儘賜りたるに、吾獨不然、とて御朱印に墨を塗り、詔はざる故に斯る有樣なり、と言ふを、岩間大藏左衞門訴へ申して、無禮なり、と仰せ有りて祿を召し

に勝れる者は平八なり。子細は云々なり、と長久手の軍物語り、忠勝の有様詳に言はれて、即胄を忠勝に賜はりければ、忠勝面目身に餘る心地して出でられけるに、其晩又忠勝を招き、傍の人を遠ざけ、自茶を與へ、今日いくらも諸大將並居たる中にて、汝が武勇を褒め擧げたるは秀吉が恩ならずや。主君の恩と何れぞ、と問はるゝに、首を低れて物言はず。頻に問はれければ、忠勝承り、誠に忝しとは申せども、累世の主君の恩と比ぶべきに非ず、と申されしかば、秀吉愈感ぜられけり。

一說に、忠信の胄を賜はりけれども悅ぶ色なし。如何にといへば、否とよ。忠信武勇然のみ羨しくもなし。主君と仰ぎし九郎判官も吾官位も同じ。唯世々家に傳へたる鹿角の胄こそよけれ、と言はれしとぞ。後忠信の胄は二男忠朝に讓り、鹿角の胄は嫡子忠政に讓られたりき。忠朝も思ふ所や有りけん、其の胄に鍬も附けずして置かれしとぞ。

○榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事

小牧陣の時榊原康政、秀吉の事を誹りて札に書き、織田家に向ひて弓を引く事、不義惡逆の至りなり、と書きて所々に立たるを、秀吉齒噛して怒り、康政が首を取らん者には十萬石の地を與へ

相並び、長久手指て馳せ向ふ。路にて足輕を進め、鐵炮打かけ一軍せんとすれども、秀吉見ざる體にて取合はず。龍泉寺の前にて忠勝馬を川に打入れ口を洗ふ。秀吉、彼の鹿の角の立物の冑を著たるは大將よ。誰か見知りたる、と問はるゝに、稻葉伊豫守道朝、過し年姉川の軍に武者出立見知て候。本多平八郎にて候、と申しも敢へぬに、秀吉涙をはら〳〵と流し、五百に足らぬ士卒をもて吾八萬の軍に駈け合はさんとする、千死に一生も無きぞかし。然るに道を隙取らせ、己が主君の軍に勝利有らせんとの志、勇と云ひ忠と云ひ、誠に類無き本多かな。秀吉運強くば軍に勝たん。可惜者を討つべからず、とて弓鐵炮を制せられけり。斯て忠勝長久手に馳附きたれば、軍終りて敵味方ともに見えず。こは如何に、といふ所に、味方打勝ち小畑に入らせ給へり、と聞き、揉みに揉んで追附き奉り、御馬の傍に乘り寄せ、云甲斐無くも小牧に捨てさせ給ひ、斯る軍に合ひ不申、と申しければ、聞し召し取り敢へず、汝が躬は我身なりと思ひて小牧に止め、後に危き事無くてこそ軍には勝ちたり、と仰ありけり。其後天正十八年秀吉北條を打亡し、七月二十六日野州宇都宮にて平八を呼ばれけり。忠勝は下總の廳南に有りけるが急ぎ參る。秀吉諸大將並居たる中に呼出し、熊野より佐藤四郎忠信が冑を得させたる者あり。四郎が忠義後世まで語り傳ふ。四郎に劣らぬ人に著せなんと思ふに誰か有る、と言はれしに、答ふる人なし。其時秀吉、四郎

は思へるにや。斯くいふ勝成は若き時、心得過ちて武蔵の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携へて虚無僧となりて日本國を廻り、或時は堂塔に夜を明し、或時は野にも山にも日を暮し、様様に艱難に遭ひ人にも誹られしが、一言虚妄を言ふ事なく、不仁の振舞せざりし故にや、今福山十萬石を賜りぬ。然れども下の情を知る事はこれ虚無僧たりし故なり。返すく〳〵も惜むべき士を失ひぬるよ。美作は下の事は知られぬぞかし。總て良き士は、主君又は頭の下知をも無理なる事は心服せず。假令少しの過有りとも、能き士は二度も三度も知らぬ體して、猶已難くば傍輩に諫めさせんものを。美作の政事歎かしきぞ、と泣かれけるとかや。

○本多忠勝忠勇の事附忠信の胄の事

東照宮小牧山に陣して御座しませしが、秀吉兵を分ち中入すと聞し召し、敵の迹に從うて向はせ給ふ。小牧には石川伯耆守數正、酒井左衛門尉忠次、本多平八郎忠勝を殘させ給へり。然るに秀吉大軍を出して長久手に向はれけるを見て、忠次は、秀吉の本陣樂田へ押寄せ、火をかけて攻撃つべし、と云ひけれども、石川、秀吉後に變有りと聞きて、彌怒られなん、と強て押へて止りけり。忠勝は秀吉の馬印を見るより、僅に五百許引具し小牧に駈け出で、小川一筋隔てて秀吉に

陣に突いて懸り、胄首を取りて馳せ歸る。此日の一番首なり。勝成荒者にて人を物ともせず。忠重の心に忤ひ、虚無僧となりて國々を廻りて武者修行す。後に忠重死して東照宮勝成に三州苅屋を賜はり、日向守と稱して大坂の時、大和口の先陣として大功有りし人なり。勝成十萬石を賜ひて後愈士に下り身を賤くして、總て士に貴賤は無きものなり。主君となり徒者となり、互に粗み合ひてこそ世は立つ習ひなれ。然れば、大事の時は身を捨てて忠義を爲す事ぞかし。汝等我をば親と思はれよ。我汝達を子と思はん、と常に士に言はれけり。年老て鷹野に出づる時、行歩叶はず、蒲團に乘りて士に舁れ、士一番所にては蒲團と共に下に居て、年寄ての鷹狩可笑かるべし。鳥捕らん爲に非ず。心有りての事なり、と度々言ひて打過ぎられけり。或時鷹狩の野にて昔勝成に仕へし士を見かけ、如何に懐しや。我方にて祿三百石なりしに、立ち去りて越前にて千石の祿と聞く。今爰に來られしは如何に、と問ふに彼士仰の通祿は越前にて增し候へども、殿の下を勞り懇に遇し給ふ泥み、祿には換へ難く暇乞うて歸り候ひぬ、と申せば、勝成大に悦び、折にふれ思ひ出せしなり、とて即日に祿を增し與へられけり。其の後勝成隱居して又鷹狩の時、彼士の家の門閉ぢたるを見て如何にと問はるゝに、美作守の心に背く事有りて暇を乞走りぬ、と答へしかば、彼者は越前の祿千石を捨てて、小祿の我家を慕ひて歸りし者なるに、如何に作州

今は早思ひ殘す事なし。誰にても出でられよ、撫切にすべし。昔の金次郎とな思はれそ。殊の外暴者に成りたり、と大言しけるに、一人も答ふる者なし。平松が勇名高く聞えて、先年天王寺勝曼の鎗、貝殼塚の鎗、備前八濱の鎗をこそ言ひ傳へたれ。平松が鎗は近き頃稀なり、と世の人賞しけり。秀次一萬石にて招かれしかば、平松立ち退きたるを聞し召し、小栗又市、渡邊半藏、河村善七郎、坂部治兵衞を追手に出させ給ひ、岡崎へ早飛脚にて、本多作左衞門にも御下知有り。平松遂に袋井の北なる可睡齋にて自害すともいへり。

○水野勝成高名附行狀の事

長久手の軍に水野忠重の嫡子勝成は、目を病みて胄を著ず。鉢卷したりけるを、父見て、汝が胄は溜り壺にしたるか、と罵られしかば、父ながら餘りの詞かな、眞先駈けて首を取るか、吾首を敵に取るゝか、二つの中よ、と言ふ儘に、馬引き寄せて打乘り、諸鎧を當てて駈け出す。忠重、あれは如何に、とて太田重助といふ士をして呼び歸されけれども耳にも聞き入れず。又水野喜右衞門寄せ來り引き止めんとするを、勝成はたと睨んで、疊の上の諫は聞きも入るべし。只今大軍の中に駈け入り、功名せん時止れとて引き返す樣や有る、と言ひ捨てて、秀次の將白井備後守が

打連れたり。道の別れ際にて、久しく逢はじ、と馬より下り暇乞する時、坂部平松を一太刀斬りたるに、如何したりけん、切り外しければ、平松坂部が眉間を切る。坂部眩みけれども、さしもの者にて、落人あり打留めよ、と呼はるを聞き、近所の郷民群り出づるにより、平松可睡齋に入りたるを取り圍み、横須賀よりも馳せ集り、寺を取巻きけれども、平松は爰に居らず、といふを、小僧を捕へて責め問ふにより、平松、何方へも逃ぐる者に非ず。爰にて腹切らん、とて立ち出、坂部三十郎に向ひ、治兵衛は殊に親しく語りけれども、不便ながら身に掛る火を拂ひて、是非なく切りたり、と云ふ。三十郎聞きて、治兵衛疵淺し、と答ふ。平松、吾斬る程にて助かるべきや。日比の交故止は刺ざりき、というて腹切る時、三十郎、介錯せんとすれば、平松、治兵衛を吾が手にかけ、今汝に首を討たれんは心よからず、とて同心せざりしとなり。

又一説に、平松は度々口論の時後れ有り。殊に遠州新井の渡り舟にて、柏原新五郎、平松が從者を討ちたるに、おめ〳〵として有ければ、人々嘲笑ふ。東照宮聞し召し、人は何ともいへ、平松が眼ざし剛の者なり、と仰せられしが、果して長久手にて懸り兼ねたる處に、平松茜の羽織を著、十文字の鎗を提げ、進み出、池田家の軍兵の眞中に鎗を入れたりける。其後出仕の中にて、諸士に向ひ、吾胎内より厚恩を請け、猥りに一命を捨てじと思ひしが、

○平松金次郎始末の事

平松金次郎重之、甲州の溫井と同じく天龍川を渡る。平松先達つて陸に上り、船に殘れる從者、溫井に無禮の事有りて忽ち切り殺しけり。扨て平松に斯くといふ間もなくて、と云ひければ、無禮する者は我よ、捨て置かじ、とて色も變ぜず。人皆平松を誹りける處に、幾程もなく長久手の軍に、平松と鳥居金次郎と先を爭うて鎗を合はす。平松が相手は森武藏守長可の士山田八右衞門とて、始め播州三木の城主別所長治に仕へて、名高き勇士なり。平松肥え太りて小男なりしかば、東照宮、さぞ走り廻り不自由ならん、とて常に笑はせ給ひしに、其日御前に進み出で、不行歩者、今日鎗を合せて候、と立ちながら申して傍若無人の有樣なり。賞せられしかども、猶不足に思ひけるに、前田利家の士山田出羽、其の時平一郎とて秀次に仕へしが、秀次に申して一萬石の祿にて招かれけり。平松是に約し京に赴く時、心易き朋友に暇乞して立ち去りけるを聞こし召し、追々討手を出させ給ふ。大剛の平松なればとて、第一番に渡邊半藏、續いて河村善七郎、大久保與一郎、坂部治兵衞、段々に追つかけける。坂部袋井にて逢ふ。平松は久能へ行く本坂越に遠州可睡齋にの曹洞宗の寺立ち寄ると物語す。坂部は兄三十郎に用の事有つて橫須賀へ行くとて

に語りて、殿は人の申す事輕々しく信ぜられて、日比我を踈まるゝよ、と度々云ひけるを、土方、夫は戯か又は汝の心の違ひたるならん、と言へば、長門、否々此長門をば必ず誅せらるべし。其時汝討手なる可きよ。手易く討たるべき身に非ず、といへば、土方聞きて、討手の仰を承らんに、此勘兵衛ならで又誰か有る可き、と語りたるに、長門仰に因りて、此七つ胴切落したる脇差にて、汝が頭を斬り破らん、と云ひける詞に依て斯は申せしなり。天正十二年三月三日の禮に、岡田、信雄の前に出でけるを合圖とせられけり。岡田其日は脇差を横たへて進み出る。信雄、新に造らせたる鐵炮を見よ、とて指出し、此臺尻の穴は何の爲ぞ、と問はるゝに、岡田少し差し俯く時、土方つと寄り引組だり。岡田、己をや、と言ふ儘に脇差を七八寸抽けれども、大力に強く抱かれて抽きも放たず振合ひける處を、信雄、土方放せ、我自ら切らん、と詞を懸られしに、臣と共に斬せ給へ、とて放さず。信雄、放たざれば何時までも斬るまじ、と言はれしかば、土方岡田を突き放しざまに小脇差を抽いて指通せば、信雄透さず切つて殺されたり。津川は此騒ぎを聞きて走り來りけるが、信雄に行逢ひ刀を取延べて切りたりしに、廊下の長押に切つ附けたるを、飯田傍より刺殺しけり。淺井をば森討ち留めたり。是よりして秀吉と弓箭を取られけり。

○信雄長臣を誅せられし事

秀吉信雄を打亡さんと謀りて、先信雄の長臣岡田長門守、津川玄蕃、淺井田宮丸、瀧川三郎兵衛を招き、懇に遇して後、信雄に自害を勸めよ。然らば恩賞厚く行ふべし、と語られけり。聞き入れず首を刎ねん氣色なる上、神文を書けよ、と責められる。四人力無く、承りぬ、と言ひて起請文を書きにけり。秀吉も、約を背かじ、と神文を出されけり。是は一人宛語ふべきを、一同に招きたるは、信雄に告知する者有りて、殘る者を誅せさせんとの謀なり。又皆秀吉に實に心服せずとも、既に神文を書きたれば、疑ひて一和すべからず、と思慮せられたるなるべし。瀧川素憎なりしを信長呼出し、四萬石の地を賜りし身なれば長島に歸られ、信雄に斯くと告け申せば、頓て三人を誅せよ、とて長門は飯田半兵衛、玄蕃は土方勘兵衛、田宮丸は森源三郎と討手を定められけり。土方承りて、長門をば臣に仰せ附けられ候へ。打留申さん、と言ふ。飯田、既に定りたる上は何の申條の有る可きぞ、と言へば、信雄、然らば長門をば土方討候へ。飯田は、既に下知したれば討ちたるに同じ、とて長門を土方に譲りけり。土方が斯く言ひけるに故あり。土方は始彦三郎と云ひけるが、太く逞しく、胸より手足に至るまで毛生ひ熊の如くにて勇猛の士なり。長門常に土方

小袖白帷子に空炷して吳れられよ。一生の終りに風流を盡したし。是一つの望なり、と云ひしかば、秀吉其望に任せられしかば、大に悅んで是を著たりけり。女蕃其時二十七歲。衆人惜み合へり。

柴田亡びて後、其從士佐久間久右衞門安次、源六郎雪政兄弟紀州に遁れ、粉川法師三池を謀らひ、河内霧坂に城を構へ、後亦南河内天野山の國見を要害にして度々軍しけるが、遂に秀吉に攻め落さる。後に小田原に入り、北條亡びて兄弟金澤の稱名寺に在りと秀吉傳へ聞き、伯父勝家の爲に吾を仇とする志、誠に大丈夫と言ふべし。今日本平均しぬれば心を改めよ、とて安次に一萬五千石、實政に一萬石與へて蒲生氏鄕に附けらる。兄弟氏鄕に一禮しける時顚きけるを、人皆笑しかば、氏鄕、物の思慮無く、汝等が奉公ぶりに彼を競ぶる事よ。兄弟とも疊障の士に非ざる物を、と言はれけり。

○尼子家の十勇士

尼子家十勇士と世に唱へけるは、山中鹿之介、藪原茨之介、五月早苗之介、上田稻葉之介、尤道理之介、早川鮎之介、川岸柳之介、井筒女之介、阿波鳴戶之介、破骨障子之介なり。

にて口も得明かざる市松、何とて剛き鎗先に向ふべき。明日我後影を見よかし、と言ひ捨てて出でけるが、直に柳瀬に赴きて只一人眞先に進みて討死しけり。人々其勇氣は嚴しけれども、其怒は戒とすべし、と言合へり。秀吉石川が弟長松に感狀を與へられけり。其文に曰く、

今度三七殿、依二違貳一事、美濃大垣之處、柴田修理亮勝家出二張柳瀬一、欲レ遂二一戰一之時、兄兵助先赴、合レ鎗令二擊死一、拔群之撰動發於二眼前一見レ之。爾雖レ爲二若輩一、念二兵助之壯志一、與二秩千石一。向後愈可レ抽二忠節一者也。

天正十一年七月五日　　秀吉

石川長松殿

と書かれたり。

○佐久間盛政生捕るゝ事附久右衞門安次源六郎實政が事

澁が嶽の軍破れて佐久間を生捕來る。秀吉見て、汝は武勇逞しき者なり、助けて國を與ふべし。二心無からんや、と問ふに、盛政冷笑ひ、我に國を與へなば、汝を生捕り搦めん事、今日我身の上の如くせん。新に恩を受くるとも柴田を忘れんや、と言ふ。死す可きに及びて、大紋紅裡廣袖の

○濺が嶽七本鎗の事

濺が嶽にて佐久間が人數亂るべきを秀吉見て、近習の人々に向つて、爰ぞ鎗を合せよ、と詞を懸けらるれば、各競ひ進む。福島市松、加藤虎之介、加藤孫六郎、片桐助作、平野權平、脇坂甚内、糟谷助右衛門七人なり。其夜秀吉、今日の七本鎗の者とて呼ばれけれども、誰といふ事を知らず。其時指を折りて數へられしかば、前に進み寄りたり。是より濺が嶽の七本鎗と世に唱へけり。中にも福島壹番に進んで鎗を合せたる上、首を取りたりしかば、五千石與へられけり。其餘は皆三千石與へられぬ。福島は紙の切裂じなひの指物、加藤嘉明は紫縅、清正は紙のしで馬簾、片桐は銀の切裂えづる、平野は紙子の羽織、糟谷は金の角取紙のえづるの指物指されたりとぞ。

○石川兵助戰死の事

濺が嶽の前夜、石川兵助と福島市松と口論し、既に刺違ふべき體なりしを、座に有りし面々、明日の軍に身を捨てて高名を遂けらるべきに、こは如何なる事ぞ、と押留めければ、石川面々の前

て候ほどに、夜明けなば矢合仕るべし、とぞ言送りける。秀吉聞きて、是より申さんに由々しくも承り候。明日潔く軍を遂げ候べし、とて使を返して後、吾に怠らせ夜討せんとの事ならん。遠き異國の張良は知らず、我を識るべき者日本に有りとは覺えず、とて野にも山にも簑を透間なく焚きて白日の如し。佐久間は敵人馬の行程を急ぎて疲れたる處へ、するりと押寄せ打破らんと思ひけるに、秀吉の謀に夜討の支度空しく成りにけり。

○堀七郎兵衞見切の事

滝川が嶽の合戰に堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時、其臣堀七郎兵衞押留て曰く、勝家の陣より佐久間が陣に類に使來ると見ゆ。疾く引き取れとの事ならん。若し引取らば女蕃本の道をば歸るべからず。然らば間近き所にて戰有るべし。女蕃引取らずば勝家必ず來りて軍有るべし。此二つを出づ可からず。兵を分たずして待つ可し、といふに、女蕃も退かず。柴田も進まざりしかば、勝家運盡きたり、と云ひしが、果して敗北しけり。又滝川が嶽の事を老功の人に問ひしに、勝家の詞の如く女蕃引取らば勝利を全うすべし。女蕃が言の如く勝家押詰め來らば必ず敗軍すまじきなり。兩將互に猜豫して勝を失ひたり、とぞ語りける。

○幸田彦右衛門が母義死の事

織田信孝秀吉と弓箭を執る時、信孝の乳の人を人質に秀吉の許に出し置かれしを、磔にして誅せらる。彼の乳の人の子は幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり。是より前秀吉信孝の長臣等を謀はるゝに、岡本下野守は同心して信孝に背きけれども、幸田は背かず。幸田が母誅せらるゝに及びて子の彦右衛門に書を送りて、我今空しく成る事努々歎く可からず。親は必ず子に先だつ習なり。唯忠義を守りて君にな背き參らせそ、と言ひ遣はしければ、聞く人感じ合へり。天正十一年四月十八日秀吉の先陣信孝の地に攻入る時、幸田兄弟潔く討死したりけり。幸田が母は實に漢の王陵が母の志とも云ひつべし。但し王陵が母は天下を知し召す可き高祖の事を識りたれども、只今危難に迫れる織田家に忠を盡せと言へる、眞に稀有き事なるべし。

○濺が嶽合戰秀吉智謀の事

佐久間玄蕃盛政、柳瀨にて中川清秀を討取りける時、秀吉長濱より一騎駈にて來られけり。濺が嶽に到れば日暮れぬ。陣の相去る事二里許なり。盛政使を以て、早くも事を寄せられ候。相待ち

關東にて一盞厩橋を引拂ひたる振舞殊に賞美しけるとぞ。

○光秀愛宕山にて連歌の事

天正十年五月二十八日、光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌しける。

ときは今あめが下しる五月かな　光秀

水上まさる庭のなつ山　西坊

花おつる流れの末をせきとめて　紹巴

明智本姓土岐氏なれば、時と土岐と韻を通はして、天下を取るの意を含めり。秀吉既に光秀を討ちて後、連歌を聞き大に怒りて紹巴を呼び、天が下知るといふ時は天下を奪ふの心現はれたり。汝知らざるや、と責めらるゝ。紹巴其發句は天が下なるにて候、と申す。然らば懐紙を見せよ、とて、愛宕山より取り來て見るに、天が下しると出たり。紹巴涙を流して、是を見給へ。懐紙を削りて天が下しると書換へたる迹分明なり、と申す。殊勝にも書き換ぬ、とて秀吉罪を許されけり。江村鶴松筆把りにて天が下しると書きたれども、光秀討たれて後紹巴密に西坊に心を合せ、削りて又始の如く天が下しると書きたりけり。

せりともいへり。

北條氏直果して小田原より兵を出し、武州兒玉郡本庄に著きて、先陣北條安房守氏邦神奈川に押寄す。一益は川を後にして相戰ふ。大敵支へ難く討たるゝ者多し。一益厩橋に歸り、其日討死せし人々の姓名を過去帳に書きて、黄金を添へて寺に送りて供養し、諸將を集め暇乞として酒宴し、一益鼓を打ち、兵の交り賴有る中の、と謡ひければ、倉賀野淡路守、名殘今はと鳴鳥と囃し、終夜酌み醉ひて太刀刀取出し、上州の諸將に引出物にし、懇に暇を乞ひて六月二十日厩橋を打出で、各人質を歸しけれども、皆請取らずして驛馬等の事沙汰し、是を送りて笛吹嶺に至る時、國人の人質悉く歸し、木曾路より歸京す。瀧川彦次郎は一益が長男三九郎、二男八丸を伴ひ木曾路にかゝる時、一揆起り八丸を奪ひ取られしを、一益が士古市九兵衛一揆を追ひ拂ひ、八丸を奪ひ取りて一益と同じく長島に歸る。

一說、神奈川の合戰に八丸生捕れしを、古市追討ちて其敵を切り伏せ、八丸を奪ひ取つて連歸ると言へり。又笹岡平右衞門、津田治右衞門踏留りて討死しける。其間に一益兵を納めて厩橋に歸るといへり。笹岡平右衞門は一益の馬取より取立てられ、氏は笹岡、彦次郎是を與ふ。武功度々に及びて士大將となり武者奉行たり。又酒宴は倉賀野にての事ともいへり。

事千里といふ諺あり。祕すること能はじ、とて上州嶺の城主小幡上總介信眞、鷹巢の城主鷹巢三河守信尚、金山の城主由良信濃守國繁、館林の城主長尾但馬守顯長、小股の城主澁川相摸守兼勝、倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景、白倉の城主白倉左衞門佐藤、岡の城主内藤大和守秋宣、安中の城主安中越前守、高山の城主高山遠江守重光、五閑の城主五閑刑部、小泉の城主富岡六郎四郎、石倉の城主長根縫殿介、大戸の城主大戸民部直光、木部の城主木部宮内貞利、和田の城主和田右兵衞大夫信業、那波の城主那波對馬守宗元、武州忍の城主成田下總守、深谷の城主深谷左兵衞憲盛、松山の城主上田乂次郎政朝等の諸將を招き、信長の變を告げ、おのく各の人質を歸し、急ぎ上京して弔軍すべき旨を語る。諸將大に感じ、此一大事を告けて人質を歸されんと候に、如何でか二心候べき。人質を其儘置きて仰に從ふべし、と言へば、一益諸將の義心謝するに詞も候はず。北條の表裡定めて一益を討取りて上野を押取るべきならん。此方より打向ひ一軍せんものを、とて城には同姓の彦次郎忠往を守に置き、一萬許の兵を率ゐて神奈川に押出す。

一說に、北條家より人質を渡し、早く城を出でよ。然らずば一戰すべし、と云送る。一益、吾信長の命を受け、關東の管領たり。今危きに臨んで何ぞ北條が下知に附くべきや、とて兵を出

の軍、森寺が一人の武名を上けし、とて桐の紋附きたる羽織を與へられけり。

○則武三大夫功名の事

山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士則武三大夫首を取りて吉晴の前に來る。吉晴、思ひしよりも出かしたり、と詞を掛けられしかば、則武怒つて首を提げて進み寄り、斯る時は大將も目の暗くなる物に候。則武三大夫が取つたる首よく御覽候へ、と罵る。吉晴も、憎き奴哉、と言ふ儘に、刀を抛て斬られしに冑の星を削りたり。則武眞一文字に敵の中に駈け入りて首を取りて歸る。吉晴は、必ず則武は討死せん、と悔み思はれし處に、則武來りければ大に悦んで、汝を先に褒めたる詞、賞する餘りに思ひしよりもと言へるは、剛の者に言ふべき詞に非ず。我過にてこそあれ。汝が二度の先駈大きに勝れしよ、と感ぜられけり。

○瀧川一益厩橋を退く事

天正十年瀧川左近將監一益は信長の命により、關東の管領として諸將の質を取り、上野の厩橋に在りける處に、六月七日信長弑せらるゝの變を聞き、老臣共事を祕さんといへども、一益惡

常山紀談　巻之六

○山崎合戦の時堀秀政寶寺の山をとる事

山崎合戦の時、堀久太郎秀政の士の子何某といへる者、明智が許に奉公して有りしが、光秀夜の未だ明けざる内に、寶寺の山に兵を押上ぐべしと謀りしを、父の許に告げ遣りて、思ひも寄らず敵味方となり、明日は一戦に及ばん事を歎きける。其書狀を則秀政に見せたりければ、秀政夜半に寶寺の山に押上り陣し、待ちかけたりけるを如何で知るべき。夜明け方に明智が先手押寄せたる處を、秀政山上より鐵炮を打懸け不意に切つて懸り、追ひ崩して一戦に利を得たり。

○森寺政右衛門武名の事

山崎の合戦に明智が先陣と護國公の先陣と戦を挑む。時に侍大將森寺政右衛門忠勝、眞先駆けて敵を追つ立つる。森寺が馬印槍木笠なりしを、明智が者共見て、今日槍木笠の馬印持たせたる大剛の者、下知せし有様目を驚かし候。姓名を承らばや、と度々呼はりけるを、秀吉聞きて、今日

る故とぞ。是より前三人物語せし時、四郎左衛門言ひけるは、此度の軍必ず味方打負くべし。松田は固より當國の者なり、後巻を味方より申せども播州の加勢も來らず。政則眞弓峠の軍に打負け、姫路に引退きしと聞ゆれば、味方は力を失ひぬ。然らばとても討死すべき身にて、人の後に存命へて在らんも本意に非ず。重ねて軍有らば必ず討死せん、と語りければ、兩人聞きて、我我も同じく存ずる事ぞ、と互に同じ處に討死せんと約束しけるが、今日四郎左衛門打出るとて、唯今敵の手に渡べき首なり。最後の對面すべし、とて鏡に向つて莞爾と笑ひて出しとぞ。額田は岡本筑後守に向ひて、子にて候又三郎は一子なれば、取別けて不便に存ずるなり。我と一所に在らば必死を免るべからず。宜しく計ひ給はれ、と言ひければ、心得たり、とて引き分ちしかば、今日討死をせざりしとなり。片岡は我家來に向ひて、我首必ず敵に取らるべし。之を印に死骸を尋ねよ、とて小捻をもて左の二の腕を二重に結ばせたりしが、果して是を印に死骸を求め得たりとかや。

手深手二十六所被りければ終に死にたり。父城に歸りて小次郎が手箱を開きて見るに、數多書き置きたる其中に、母の方へ幼少より別れ參らせて、此儘に討死せば御歎有らんこそ心に懸り候へ。暫時此世に殘り給ふとも終には逢ひ奉るべきにて候へば、思し召し分けて慰ませ候へ、と細々と書きて、奥に、

生れにし親子の契りいかなれば同じ世にだに隔てはつらん

と書きたりしに依りて、思ひ定めたる討死なり、と人皆惜みけるとぞ。

○再福岡合戰藥師寺組田片岡三士討死の事

文明十六年正月六日又福岡にて軍あり。城兵敗北する處に藥師寺四郎左衛門薙刀を把り返し合せ、突にて討死するよ、とて支へ戰ふ。同彌四郎等四郎左衛門を討たせじと取つて返し、津坂の山の麓より城際まで僅の兵にて多勢を防ぐ。拂ひ退きにしけり。寄手の中に福屋九郎右衛門とて剛の者、鐵形打ちたる冑を著、透間も無く四郎左衛門に切つて懸りしに、四郎左衛門が家の士返し合せて、福屋は討たれぬ。然れども寄手彌追ひ詰めしかば、藥師寺四郎左衛門、額田十郎左衛門、片岡孫左衛門三人引き返し枕を並べて切死にしたりけり。是は三人必死を約束した

返しければ、文明十五年九月、山名も備後の尾道を出て同國分寺に著き、三千餘を驅催し、十一月七日備前の國に打入りしかば、松田が一族相集り、邑久郡福岡の城の西北の山に陣取りたり。福岡の城は東西に大川流れ、中に島山有るを城に據りて政則の守護代浦上喜三郎則國を始として二千餘人立籠り、川上の瀨は長船右京亮等に野伏を添へて陣取りたり。十一月二十一日押寄せて合戰あり。浦上が家人に楢村與三兵衞、同又四郎とて兄弟あり。是より前に元成に奉公しける因有りしかば、密に語らひて十一月二十三日夜半風烈しき便に陣屋に火をかけたり。寄手内通に力を得て驅て攻め寄せたりしに、城中嚴しう支へ戰ひて追返す。其後事顯れて楢村兄弟を搦め捕り、之を誅しぬ。寄手其後相謀りて、十二月十三日に又富岡といふ小山に兵を出す。城よりも打つて出で散々に相戰ふ。寄手も城兵も討るゝ者多し。

福井小次郎は元京都の人なりしが、四歲の比、父源左衞門當國の在番の時連れ下り、城中に在りしが、弦年二十一歲なるが、其日の軍に父子の間を敵味方に押隔てられ、父は城中に入りたると思ひ、走り入りて尋ぬるに見得ざれば、又城外に打出で、寄手に向ひて福井小次郎と名乘り、縱さま横さまに切つて廻りしが、餘りに戰ひ疲れしを、家人肩に掛けて城中に引入れしに、淺

文明十五年十二月十三日備前福岡の戰に、

備前は元赤松氏世々領せしに、嘉吉元年赤松滿祐滅亡の後、備前をば赤松相摸の守教之に賜はり、教之が代官小鴨大和守備前に有り。應仁の亂の後、備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成を細川勝元相語らひしかば、元成兵を集め小鴨を攻めんとするにより、赤松が家人散り〳〵になりし者共元成に與し、小鴨を攻め落しぬ。赤松兵部少輔政則元服を賞して伊福の鄕に置きぬ。山名宗全細川勝元共に病死の後、京都は少靜かなれども、諸國は彌大に亂れ、松田が一族共備前西郡の中數多押領す。政則は將軍家より功を賞せられ、播磨、備前、美作を返し賜りぬ。山名右衞門督政豐之を怒り、文明十一年九月京都を出て但馬の國に馳せ下る。斯れば政則も播磨に馳せ著けて、此次手に備前の松田が恣に攻め取りたる所を治め正さんとせり。元成此由を聞き兵粮用意の爲にしたる所は返すべけれ共、伊福の鄕に於ては、軍功に依りて賜はりたる處なれば返すべからず。是は事に托して我を打亡さんの謀ならん、とて金川に城を構ふ。此城は麓には大川流れ峯高く、四方嶮にて要害よき地なり。然れども後卷の手段を謀り、備後國山名俊豐に告けて備前を切取り進らす可し、と言ひければ、俊豐是を悅べり。政則備前に赴き、松田が押て己が地にしたる所々を取り

隆、小氣なる男かな、今年三十一歳なり。此後首取るまじとや。先供養して後に其數を合せよ、とて米百石與へ、供養して播州青山の南に塚を築きたり。後所々の合戰、朝鮮の軍までに取りたる首五十に及べり。後壹岐といふ。

○生田木屋之介武功の事

天正五年黒田孝隆播州佐川の城を攻むる時、生田木屋之介夜中に忍びて城際に近づき寄り、懐中の小鋸をもて塀柱の根を切り目標をして、翌日城攻に彼の柱に鈎繩を附けて引倒し、先駈して城に入りけり。木屋之介もと隅田小介といふ。日向國隅田刑部少輔が嫡子なり。十六歳の時傍輩を討つて出奔し、播州に行きて孝隆の士井上九郎右衛門を頼みけるに留め置き、未だ對面せざる處に、其夜隣家に人を殺し取籠りたる者あり。夫を搦め出すに附即時に孝隆に申して、それより奉公しけり。攝州生田の城にて高名あり。之によりて生田木屋之介と姓名を賜はる。是その高名を永く顯さん爲とかや。

○備前國福岡城合戰福井小次郎歌を遺して討死の事

る。種々にすかし名を言へどゝ歸らざれば、殿の仰にて威の爲に來りたり。著せさせ給ふ帷子の片袖を證據に取りて許されよ、と言ふによりて歸りぬ。朝鮮にて竹も木も無き廣野に、一筋の道窪くて切通しに似て、其向ふ處大山の麓にて曲尺の如し。大穴を穿ち射手を籠め置きて行きかかる。日本人數多射殺され屍相重れり。山蔭の敵多少を知らざれば進む者無し。井口が從者山崎喜兵衞、見て參らん。馬を扣へて待たれ候へ、と言ひ捨て走り込む。井口も馬より下りて走り入り、山崎先射手三人を討取り、其首を持つて大音上げて名乘りたり。井口攻め入り追つ散らす。井口其時は兵助と言ひけり。此賞美に朱柄の鎗を許され候へ、と申す。辛爾には許し難し。一日に首七つ取りてこそ朱柄は許さるゝと申し傳へて候、と人々申しける故事延にけるが、其後井口一日に首七つ、山崎も六つ取りしかば、朱柄を兵助に許されたり。晩年に村田出羽吉次と稱しけり。

○吉田六之助首供養の事

別所家にて首供養したる人有りと孝降聞きて、秦桐若首三十一取りたるに惜むべきは死したりき。吉田六之助正利供養すべし、と言はれしに、正利首數二十七取りて候、とて辭したりけり。孝

或時孝隆の士罪有りて討手を向けらるゝに、却りて討手を切つて兄弟三人町に出で、大なる屋に取籠りたり。甚十郎見て參らんと言へども孝隆許されざりしに、再三に及びければ、然らばとて許されたり。甚十郎其處に行くと忽ち門の潜戸を引き放し、楯に執りて飛び込み、戸を以て二人を打伏せ、一人を切殺し、打倒したる二人も切つて、首三つ取りて馬に乘り、二町許歸る處に、罪科人の從者主人の首を見て、鎗にて甚十郎が馬上を目掛け飛び乘りて突く。突かれながら其者を切つて棄てたれども、痛手にて馬より落ち、少時ありて蘇生したるを戸板に乘せ來る。孝隆膝を枕にさせ、手は如何、と問はるゝに、如此に候、と一言いひて終れり。兄弟三人皆我爲に死たる事報ゆるに詞無し、とて孝隆其父與二右衞門が宅に自往きて弔はれ、與一之助七八歳なるを呼び出さる。既に九つに成りける比、三人の兄は勇氣由々しき者なりけれども、人の性質は計難ければ試みんと思ひて、礫を見つるや、と問はるゝに、見ずと答ふ。今夜は月明なり。其の所の礫木の下に行き印を立て歸らんや、と言はるゝに、承り候、とて自御幣を切り竹に附けて與へらるゝを、與一持ち行きて立てんとするに、礫木動くを見て、死きぬか、留を指してとらせん、とて木に擊るに、驚きて礫木より飛び下り逃ぐるを、與一、偖は憎き次第なり。逃すまじ、と追ひかくる。詮方なく宮の有りし内へ入り戸を閉れば、何時迄待ちても出づるを切らん物を、と呼

にて鎖を破り、引立てけれ共三年居屈み、其上に濕瘡を病て起つ事能はず。傍なる牢中の人を賴み抱負はせて城を出で、寄手の陣に行き、偖て姫路に歸る事を得たり。秀吉播州に攻め入るに及びて小寺は但馬に落ち行き、黒田父子危難を脱るゝ事を得て、孝隆に宍粟郡を賜り、姫路を秀吉の城とす。後に如水と稱して智謀逞しく、秀吉の功臣第一と聞えしは此の孝隆なり。

○井口兄弟武勇の事

黒田孝隆播州にて秀吉の命を請け、長の坪といふ城を攻め落し、井口猪之介三宅藤十郎に其城を預け、孝隆は秀吉の先陣たる處に、其城より逃落ちたる者共一族を催し、其夜攻め寄せたり。井口三宅、人も少く、攻め破りて普請も未せざれば守り難し。殿未だ遠くは行かせまじ。切り脱けて參り後巻の事申すべし、と云ひ合せ、三宅は百二十人許にて搦手に有りしが人數を殘し、二十人許を連れ園を出づる。敵利を得て攻め入りたり。井口は大手にて防ぎ戰ひしが、翌朝辰の刻後巻の旗先見ゆる比、薙刀にて片股を薙ぎ落され、石垣に倚り居たれ共敵恐れて近附かず。最後に大音上げ、此城の大將井口猪之介ぞ、首取れ、とて自害しけり。藤十郎は後三宅若狹と て武名あり。猪之介に三人の弟あり、六大夫、甚十郎、與一之助といふ。六大夫は播州北條の構を守りて討死しけり。

一味の心を易へて毛利に與し、官兵衛を引取る謀や有るべき、と言はせしかば、宗圓怒りて、官兵衛生虜に成りしかば是非の論なし。年老たる身の子を失ひし事は誠に力なき次第なり。然るに官兵衛を救はん事謂無きに非ざれ共、先松千代を信長に出せし事は、君も又臣父子と相計れる處にて候に、今度官兵衛を有岡にて捕へたるは、荒木が横様の振舞なり。相計れる處の人質を棄てて、押止めたる者を救くべきは逆ならずや。只順道に隨ひて天の冥見を待つに如かず。我若き時より度々の軍に臨み、小寺の家の危難を救ひしに、今齢傾き、賴み切つたる長子を棄て候事は口惜く候へ共、首を碎かるゝ共、毛利に一味せよとの仰をば得承らじ、とて刀を抽き誓つてければ、使も言なくて歸りけり。宗圓が士共五著を攻め破らんと言へども用ひず。村重心有らば勞るべし。若し五著を攻めなば村重も官兵衛を殺害すべし。知らぬ樣にて在れよ。斯く有らんと思ひて官兵衛が女房をば潛に此比引取り置きたり、とて驚かず。村重は小寺に賴まれて孝隆を生虜たれ共、己が仇にも非ざれば勞り置けり。斯くて信長有岡を攻むるに及びて毛利家の後卷もせざれば、城落ちたりけり。孝隆は牢の中に呆れて有りける處に、栗山備後善助時々有岡に行きて忍びて商家を語ひ、牢の後の沼より姫路の事ども語りし事度々にて、案内をしたりければ、牢に走り行きて見れば番人も落ち失せたり。此れはと驚き且悦びて、善助棄て置きたる斧

は別の事も有らじ、と言へり。此時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し、信長と戰ひ利あらずして有岡の城に引籠る。此由小寺聞きて孝隆を呼びて、我毛利に與すべきとは内々荒木と言ひ交したる故なり。今毛利家に賴らん事は我過なりと覺ゆるぞ。然れども此儘にて手切をせんに表裏者と言はれんも口惜ければ、疾く有岡に行いて荒木を諫めて、若し聞き入れば秀吉に謀りて信長と荒木和平を取行ふべし。攝州信長に從はば、我も眞に心を飜して信長に從ふべし、と言へば、孝隆聞きて、信長と荒木と和平は思ひ寄りも候はず。荒木度々信長に背きたれば如何で其言を信ぜらるべき。參りたり共、徒事ならん。然ども辭し申せば勇無きに似たり、とて有岡に赴く路、姫路に立寄りて父子對面し、有岡に至らば必ず首を刎ぬべきか、押へて囚とするか、二つの中に過ぎ候まじ。五著に死んより有岡にて死候へば、信長も聞き父世の譽ともなり候べし、と思ひ切つたる色を宗圓見て涙に咽び、暫時物をも言はざりしが、稍有りて、誠に困厄の至極なれ共、名に換へて身を捨つるは義を思ふ故なり、とて見送りしかば、孝隆有岡に赴きたり。小寺棄て村重に密に毛利に一味すべきに、黒田父子人質の松千代を信長に出し置きたれば、彼の父子は繰田に内通の志有りと告げ知らせつれば、有岡の本丸に呼び入れ生擒りて牢に押込みけり。五著に此由聞えしかば、小寺憮て齒噛をなし、荒木が狼藉の次第遺恨深し。然れ共此上は信長に

に取られずば、天下の安危歳月を経ずして定るべし、とて止まる色の見えざれば、宗圓家の恥を思ひて身を捨てんと思ひ定むる事士の志なり。疾く五著に往きて事叶はずば自殺せよ。/後の事は心安く思ひ候へ。君の志遠ふとも我叛く可からず、と言ひしかば、孝隆打笑ひ、然らばとて座を立てば、人々、只今思召し切られての仰は遺言に非ずや。若し五著にて難を遁れ給はずば、其時人々五著の城を枕にせん、と誓ひけり。宗圓官兵衛は官兵衛の志をせよ。人々は人々の志をせよ、と下知せられしかば、孝隆五著に赴きけり。宗圓見送り、子ながらも恥しき事なり。先だつべき親の留りて子に死ねと言ふこそ口惜けれ。然れ共君恩淺からざるは人の存ずる處なり。今讒言を信ぜらるゝこそ悲しけれ。孝隆を遣らずして引籠り謀叛して、命は惜き物ぞと教ふるは父の道に非ず。仇となりて身を殺すは恥を知る道なりけり、とて潜々と泣きたりけるが、さぞ五著にて謀りて見んに、今姫路に弓を引く設なしそ。酒宴して時々舞踊ひて日を送れ、と言ひしとぞ。孝隆は五著に行きて、心置くべき人の許に使して求め來れる肴有りとて饗し、しめやかに語りて打解けたる體なれば、如何に繕ふとも心の外に現れぬ事はあらじ、など言合へり。又此を疑ひて、黒田父子は謀遲き者にて良き士數多有り。城に籠る用意せん間に、官兵衛を以て欺く可きも計り難し、とて姫路の様を聞くに、宗圓金剛に舞舞はせて打解けたる體なれば、偖て

孝隆と稱す共に功名有て用ひられけり。播州は其比所々に人々地に據りて守り軍せしが、小寺は五著に有りて姫路に小城を構へ、黒田父子此處に有りて、秀吉に賴みて信長の旗下に屬す。孝隆の子長政、其比は松千代と言ひしを、人質にして秀吉の居城近江の長濱に置きたり。此比毛利家の兵勢強かりしかば小寺約を變ぜんとす。孝隆此は然る可からず。信長物荒き人なれ共、一旦天下に旗を擧けられん。行末は知らず先時の宜しきに隨ふべし。松千代を棄つるを悲み、斯く申すに非ず、と諫めけり。小寺聞き入れず。孝隆父宗圓に父子共誅せられぬべき密謀を告ぐ。宗圓物慣れたる士五六人呼び集め所存を問ふに、官兵衛、五著に到られなば危かる可し、と言ふ。孝隆、然れば誅は尤なれ共、事も見ずして姫路に立籠らんは、君に弓を引くに非ずや。五著に赴きて力を盡し、奉公し叶はずば自害せん。其後人々心を合せ、父の御事賴み任する由決斷せられしかば、人々父子押隔てられんは如何候べき。只病とて五著の奴原に使をもて、媚び諂ひ欺くに如くべからず。討手來らば力無し。其後一戰を遂けて五著を打破るべし。罪無くて討んとする惡逆の人天の咎無からんや、と口々に言へども、孝隆、各存ずる旨は誠に理なれども、今病と言はんに實とは聞き入れじ。必ず主君に叛くと人に誹られん事士の志に非じ。君に深く思ひ入りたる忠の空しくならんは運の極なれば力なし。我一人誅せられたりとも如何にせん。此姫路をだ

申せば、皆尤なり、とて立寄らせ給ふに、御饗應を設け人々勞を忘れたり。

又忠勝此時、多羅尾二心有りと見れば、捕へて刺殺すべし、と言ひける故、立寄らせ給ふとも言へり。

五日には高見嶺を打越え給ふ。御供に候ひける服部半藏正成は、元伊州生れの人なれば、忠勝下知して伊賀の案内したりけり。國士數多參りて警衞し奉りて、上柘植より三里半許鹿伏兎越といふ深山を越え給ひて、六日に白子の浦に著かせ給ひて、長谷川竹丸秀一五郎後藤を始として和州山州伊州の士に御暇給はり、時を得て濱松に參るべき由懇に仰せを蒙りけり。夫より三河に事無く歸らせ給ひぬ。伊賀は去年九月信雄攻め入りて打從へられし比、逃け隱るゝ者を求め出し、殺害を專とせられしかば、國士共三河に參りて、御恩を蒙りたる人々多かりしかば、其從類皆警固し奉りけるとなり。聽て明智を追討の爲御軍を出されしに、伊賀の國士共集りつどひて參りけるを、多くは大番に入れさせ給ひ、恩賞に預りけり。

○小寺黒田始末の事

黒田美濃守職隆と稱す後宗圓は備前國福岡の人なりしが、播磨の小寺藤兵衞政職に仕へて、子官兵衞

勝蜻蛉斬と名附けし鎗を提げ、其の邊の百姓を打具し、此殿の案内申せ、と言ひて、夫より道道の村々にて斯くしたりければ、津田よりも案内者來りぬ。其日は山城相樂郡山田村に宿らせ給ひ、所々より心を寄せし人々共數多警衞し奉る。穴山梅雪は之迄從ひ奉りしが引き別れけり。

宇治より木幡越を江州高島に至り、濃州に赴き甲州に歸るべき旨を申して引き別れしが、一揆の爲に山城の綴喜郡にて殺されけるとぞ。

其翌日木津川に至らせ給ふ。柴船二艘あり。忠勝借らんと言ふに肯はざれば、憎い奴かな切つて棄てん、と言ふに恐れて乘せ奉る。漕て渉り終らせ給ひて、二艘の船皆打割りて棄てたり。其の明けの日、一揆石原村に集りて待ちかけたり。大和より從ひ奉りし吉川善兵衞、其子主馬助柏の木を馬標にして、先駈して追ひ拂ふ。柏を家の紋にせよ、と仰せけるとぞ。夫より宇治田原の地士山口玄蕃御膳を獻じて、宇治川に至らせ給へば船無し。榊原が士原田左衞門馬を乘り入れ瀬踏して打渉す。酒井忠次船一艘を探し出して渡し奉り、雜卒に至るまで皆渡る事を得たり。江州信樂迄は險路なれども、警衞に附き從へる人々多く、一揆手さす事もなし。多羅尾四郎兵衞光敏は、世々信樂を領しけるが、其子長兵衞御迎ひに參りたり。人の心計り難しと人々恐るゝ處に、忠勝、否々光敏御敵するならば、彼が家に入らせ給はずとも逃し奉らじ。一向入らせ給へ、と

の谷の曽に羽織と黄金百兩添へて、坂本の西教寺に送りけり。後に山中山城守長俊が孫作右衞門友俊、曽を望み乞ひて得たりしが、程經て紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許に傳はりぬ。羽織は行方を知らず。馬は無雙の駿足にて、秀吉濃嶽の軍に此馬に乘られしなり。

○東照宮和泉國堺より御歸國の事

信長弑せらるゝ時、東照宮は泉州堺に御座しましけるに、小勢にて斯る亂れに遙々三河へ如何でか引き取らせ給ふべき、と人々色を失へり。東照宮素より地理を知召され、河州飯森の宮は要害の地なれば、其地を守りて軍有らん、と仰せありて、森口に著かせ給ひし時、本多忠勝京都に御使に參りけるが、道にて變を聞き引返して來り、敵大勢にて候らはん。疾く御歸國然るべからん、と申すを聞召し、案內者は如何すべき。敵道を要らんは必定なり。闇々と討たれんは口惜からずや、と仰せ有りける處に、信長より馳走に附けられし長谷川竹丸、當國の交野郡津田の邊は、信長の恩を蒙りたる者の數多候へば、道しるべさせ候べし、と申す。宇津越を經て山城の相樂郡を過ぎ木津川を涉り、夫より宇治橋の上一里許東の瀨を涉り、江州信樂に出でられたり。伊賀の上野鹿伏兎越を、伊勢の白子に至りて船に召され然るべからん、と定められけり。忠

○明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事

光秀信長を弑して安土の城を攻め落し、左馬助秀俊に守らせて山崎に打向ひ、秀吉と戰ひて敗北せり。秀俊安土を出て、光秀を救はんと京を指して進む處に、早や光秀討れたりと聞えしかば、坂本の城に入らんと、粟津を北へ大津を指して行く所に、秀吉の先陣堀久太郎秀政に行き會ひけり。秀俊小勢なれば打ち破られぬ。本道は敵に塞がれつ、湖水に馬を打入れ游がせければ、秀吉の軍兵共、汀に並居て、瀧れん有樣を見よ、と笑合へり。秀俊は白練に雲龍を狩野永德に描せたる羽織を著、二の谷と言ふ冑を著、大鹿毛と名附けたる馬に乘り、年久しく坂本に有りて、大津より唐崎までの遠淺は能く知りたり。手易く唐崎濱に乘り上け、一つ松の下にて馬には息あひの藥を飼ひ、追ひくる敵を見て居たりしが、又馬に乘り坂本に入る時、十王堂の前にて馬より下り、手綱をもて堂に繫ぎ、矢立の硯取り出し、明智左馬助湖水を渡せし馬なり、と札に書きて手取鬢に結附け、坂本の城に入り、光秀の妻子は天守に入れ、安土より光秀が奪ひ取り來れる不動國行二字國俊の刀、藥研藤四郎の小脇差、楢柴の肩衝、乙御前の釜など言へる名物の器を唐織の肩衣に包み、天守より投げ落し、其の後女童を刺し殺し、火を懸けて自害せり。二

山崎表へ押附けられけり。太閤記に、姫路に二日滞留と言へるは誤なり。

○池田家の使者筒井順慶を試むる事

光秀信長を弑せし時、筒井順慶は光秀と親ければ、必ず與せしならんと人々思へり。池田紀伊守其臣日置猪右衞門、土倉四郎兵衞、丹羽山城三人を使として順慶の許に遣らせらる。三人承りて、順慶もし明智に黨せば刺し殺すべし、と申す。紀州公、否とよ、汝等死せば我片手を折れたるに同じ、と制せられしかば、三人重ねて、順慶と軍せんに幾何の手負討死か候可き。然らば三人も討死す可きにて候。三人をもて多くの味方に代へ給へ。順慶を討取らば光秀必ず敗北すべし、と申して順慶が許に往く。順慶出會ひて、如何でか光秀が不義に黨すべき。疾く信長の弔軍せん、と言ふに、實にも僞ならぬ體なれば、三人悦びて歸る道にて、山城、今日順慶否と言はんに刺し殺さんと思ひて坐中を屹と見たりしに、側に十六七歳許なる男の順慶が刀持ちて居たりしつら魂只者ならず。順慶に飛び懸るならば、頭二つに切り割つべく見えし、と語りければ、日置も土倉も、然れば我等も然思ひつる事よ、と言ひけり。彼の小姓は牧野兵太とて、武者修行して世に聞ゆる剛の者なりけり。

し、午の刻計に宮内に著きて、驚て岡山に赴くべし、と言ひ振らしけるが、俄に霍亂したりとて打臥しければ、秀家の使來りたるに、近習の者共出で逢ひて、只今霍亂にて吐瀉せしが、腹の痛み少し止みて寢入り候、と遁ひて時を移す。其間に秀吉は奥州驪といふ名馬に乘り雜卒に雜はり、吉井川を渡り片上を過ぎ、宇根に馳著けたれば馬疲れたり。偖て使を岡山に遣りて、急ぐ事の候て脇道を通りて過ぎ候ひぬ、と言はせられしかば、浮田の人々皆呆れけるとぞ。

○黒田孝隆思慮の事

秀吉信長の弔合戰せんとて備中より引き返されし時、姫路に立ち寄らるべし、と人々も思ひけるに、黒田孝隆、姫路に馬を駐めらるゝ可き事、少の間も然る可からず候。假初の旅にも家出は遲々するが人情なり。今度は主君の仇を討つべき爲の軍にて候。大和の筒井、細川を初め、明智が親み有る者共馳せ加りなば由々しき大事なり。如何にやせん、と思慮の未だ決せざる中に、急ぎて押著けられよ、と謀りたりければ、よくこそ言ひたれとて、一人も姫路へ寄りたらん者をば忽ち誅す可し、と振れさせられけり。孝隆先達つて人を走らかし、姫路の町人共河原へ出で、弊を仕度して軍兵に遇すべし、と下知したるより、食肴を河原へ持ち出でたりければ、立寄らずして

て明智が髪を捽み引き伏せて責めらるゝ。光秀、國を賜り候へ共、身の爲に致す事無く、士を養ふを第一とする由答へければ、信長怒り乍ら偖て止みけり。東照宮御上京の時、光秀に馳走の事を命ぜらる。種々饗禮の設しけるに、信長麾野の時立寄り見て、肉の臭かりけるを、草鞋にて踏み散らされけり。光秀又新に用意しける處に、備中へ出陣せよ、と下知せられしかば、光秀忍び兼ねて叛きしと言へり。然れば信長の暴なる固より論を待たず。光秀土地を略せん爲に老母を質にして殺しぬる不孝を信長の賞せられたる。君臣共に惡逆の相合へる、終を令せざること理なり。

○秀吉浮田を欺きて上洛の事

光秀信長を弑する時、秀吉備中より引返さる。此時備前の浮田八郎秀家幼少なれ共、長臣老將の面々如何なる謀あるや料り難ければ、先使を岡山の城に遣りて、一刻も疾く馳せ上り、弔軍を志候。岡山にて相謀べし、と云はせられける。浮田は固より光秀に心を通じければ、秀吉の歸路を塞ぐべきや如何せん、といふ處に、斯く告げ來れば、然らば城中にて討ち取るべし。願ふ處の幸なり、と窃に悦び合うて、其謀をぞ相議しける。秀吉六月七日の明がたに高松より引き返

細はよも候はじ。恨み奉る事云々なれば大事を企むならん。刺し殺すべし、と言ひけるを、信長、否とよ。佐和山をば終に汝に與ふべし、と言はれけり。此れは森之より先に、父が討死の跡にて候へば坂本を賜れ、と申しけるを、明智に與へられしかば、讒言すると思ひ信ぜられず。果して弑せられき。

○光秀反状の事

光秀天正七年六月修驗者を遣して、丹波の守護波多野右衞門大夫秀治が許に、光秀が母を質に出し謀りければ、秀治其弟遠江守秀尚共に本目の城に來りけるを、酒宴して遇なし、兵を伏せ置て兄弟を始從者十一人を生虜安土に遣しけり。秀治は伏兵と散々に戰ひし時、傷を蒙り途中にて死す。信長秀尚以下を安土にて磔にせられたり。丹波に殘り居たる者共明智が母を磔にしたり。明智遂に赤井等を攻め從へ、丹波を信長より賜はりけり。又信長或時酒宴して、七盃入りの盃をもて光秀に強ひらるゝ。光秀思ひも寄らずと辭し申せば、信長脇指を抽き、此白刃を呑むべきか、酒を飲むべきか、と怒られしかば、酒飲みてけり。其後稻葉伊豫守家人を明智多くの祿を與へ呼び出せしを、稻葉求むれ共戻さず。信長戻せと下知せられしをも肯はず。信長怒つ

光秀植ゑつぎて、今の松なり。光秀咏める歌、

われならで誰かはうゑんひとつ松こゝろしてふけ志賀の浦かぜ

一說、青蓮院宮尊朝法親王の辛崎の松の記にて見れば、大津の城主新庄駿河守直頼舍弟松庵東雞齋直玉雞齋壽　此雞齋天正十九年卯の秋植ゑられし由、其時の和歌に、

おのづから千代も經ぬべし辛崎のまつにひかるゝみそぎなりせば

然れば今の松は此新庄の植ゑられしか。

○森蘭丸才敏の事

森蘭丸は三左衞門可成が子にて、信長寵愛厚し。十六歳にて五萬石の地を與へらる。或時刀を持たせ置れしに刻鞘の數を數へ居たり。後に信長側の人を集め、刻鞘の數言ひ當てなん者に、此の刀を與ふべき由言はれければ、皆推し料りて言ひけるに、森は先に數へて覺えたり、とて言はず。信長其の刀を森に與へられける。信長森が明敏を試みらるゝ事多かりけれども、一度も過無く、其才老年の人も及ぶべきに非ず。明智が恨有る事を察し、潛に信長の前に出でて、光秀飯を食ひ乍ら、深く思慮する體にて、箸を把り落し稍有りて驚きたり。是程思ひ入たる事別の子

しての故なりと言へり。

○秀吉西國の米を買はれし事

秀吉備中に陣して、毛利と和平せん事を計り、密に手段を運し、西國の米を價を貴く買はれしかば、城米を出して賣る者多し。小早川隆景一人固く制して賣せず。信長弑せられて秀吉と毛利家手切なる可かりしに、兵粮の豐ならざる故、終に和平に及べり。

○光秀居城を築く事附辛崎の松の事

明智江州坂本に城を築く時、三甫と言ふ者、

波間よりかさねあけきや雲の峯

光秀わきに、

磯山づたひしげる松村

又光秀丹波龜山より愛宕に續ける山に廓を構へ、此の山を周山と名く。自ら武王に比し、信長を殷の紂王に例ふる心後に現れたり、と人言ひけり。又志賀唐崎の松、何時の比にか枯たりしを、

き帷子の上に、淺黄鹿子の小袖を羽折り立ち出で見るに、壁の外に水色の旗見ゆる。信長、敵は誰、と問はるゝに、蘭丸、明智にて候、と申しも果てぬに、箕浦大藏、古川九兵衞、天野源右衞門等大庭に亂れ入り、信長白き一重物を著、弓持ちて射られしに弦切れたり。地膽脂の帷子著たる二十七八歳許の女房、十文字の鎗を持ち來りけるを、信長押取り、暫時防がれしが內につと入りて、障子を引き立てたれ共、燭臺の未殘りし火に、信長の影映りたるを見て、天野鎗を取り伸べ刺し通す。蘭丸弟の坊丸十七歳、力丸十六歳なりしが、切つて出で討死しける隙に、內より火をかけ灰燼となりたり。

○秀吉備中にて光秀が書を取られし事

明智信長を弑する時、秀吉は備中にて毛利家に向つて陣せしが、秀吉所々に忍の者を置れしに、備中庭瀨にて怪しけなる飛脚の者を生虜りたり。秀吉其書を披き見るに、信長を討ち取らば、秀吉必ず敗北すべし。秀吉を追ひ擊れよ、と毛利家へ言ひ送る書なり。若し此書毛利家に到らば、如何なる謀有るべきも知る可からず。秀吉の慮淺からず、と人言へり。又高松の城は手易く攻め落す可きに、水攻めにして日を經たるは、信長常に大功の速に成を忌み嫉むの心有るを察

しが、勝頼亡びて後、徳川家に仕へ奉る。甲陽軍鑑に、勝頼天目山に落ち行く時、辻一揆の長となりて攻めたる由を錄されたるは非なり。

○明智光秀信長公を弑する事

明智日向守光秀信長を弑せばやと思ふ事久し。天正十年六月朔日の夜、明智左馬助秀俊を寢所に呼び入れ、側の人を退け、一大事の有るなり。蚊屋の中に入れ、と言ふ。秀俊頭を蚊屋の中に指し入れて、何事にて候、といふ。光秀、汝が首を得させよ、と言へば、秀俊聞て、一人のみにて候か、と問ふ。光秀、三人の命を貰ひ、猶足ざる故なり、と言ふ。秀俊、いと易き事にて候。大事ことよく成るべし、と言へば、光秀、如何に知たるや、と問ふに、事新しき仰と日比の恨み思ひ合せて候、と言へば、光秀、今信長を討たんと思ふなり。汝を偏に頼み思ふぞよ。先汝に語らんと思ひしに、中中諫め爭ふべし、汝力を合せずば志遂け難からん。從はずば汝を斬らんと思ひし、とて盃を出す。秀俊、先臣一人に語り給ふならば諫め申すべし。早や外にも語りたまはんには腸も不及と申す事の候。泄れ聞えて臍を噛むとも益なし。疾打立ち給へ、とて夜半計に俄に軍兵を押出し、明れば二日の曙に、信長の宿せられし本能寺を取圍む。森蘭丸長定、何事ぞ物騒がしき、とて白

刺殺せ、との事なり。三大夫善光寺に赴き、甲冑を贈り進らする由言ひければ、小山田出て一禮すれ共、則武討つべき景色なし。稍有りて則武靜に武田の家士大將として、數世重恩の身、今度主君に叛き不義の至りに候故、討手に參り候。立ち向はれよ、と言ふ。小山田聞きて、口惜くも計られけるよ。疾く首を刎ねられよ、と云へ共則武猶動かず。小山田刀に手をかけ、是までに候、と言へば、其時則武立ち上りて首を斬りたりけり。

○馬場美濃が女召出さるゝ事

勝賴亡びて後、馬場美濃氏房が女召出さるべし、とて甲州の郡代鳥井彦右衞門元忠に仰せ出されしに、尋ね探し候へど、行方知れざる由を申しけり、程經て其の在所知れたる由申す人の有りければ、東照宮、何方に隱れ居たるぞ、と御尋ねあり。卽鳥井が許に潛に匿し置きたる、と申しければ、總て彦右衞門はぬからぬ者哉、と仰せ有りけるとぞ。

○辻彌兵衞が事

辻彌兵衞盛昌は天正三年の勘氣にて、七月甲州を出でて、信州小諸の與良遠江が許に忍び居たり

に當つて通り得ず。尻居に倒るゝ其の間に、信忠の小姓山口小辨、佐々木清藏踏み越えて駈け入りたり。戸田後に人に語りて、我等が如き武功にては、袍指物の門木戸に閊ゆべきと心附く事は無き物なり。敵を見て斯る時、外の志は無きものなり。若し勝れたる武勇の人は別の事よ、と言ひけり。半右衞門後武藏守と稱し、關ヶ原にて討死せり。信長後に感狀を與へらるゝ時、先小辨に手づから國久の刀を與へ、次に佐々に長光の脇指を與へ、汝が武功は誠に大功の内藏助が從子なれば、と詞を掛けらる。二條にて明智信忠を攻むる時、清藏、小辨に向ひ、素肌にて死なんは、屍の上のはぢなるべし、とて打つて出で、一人づつ敵を斬り伏せ、其の屍を引き入れて物の具取りて打著、又切つて出で討死せしとなり。共に十六歳、容貌世に超えて美しかりけるが、面に血を濺ぎ髮の亂れしを、見る人殊に惜み合へり。小辨は伏見の賤き者の子なれ共、美少年にて呼び出されけり。

○小山田信茂誅戮の事

小山田兵衞尉信茂は、武田累世の長臣なりしに、勝頼に叛き降參して善光寺に有りしを、信忠堀尾茂助に下知して殺せとなり。則武三大夫を討手とす。士一人添へて甲冑を送り、一禮せん時

○武田信綱誅戮の事

天正十年三月、武田逍遙軒信綱降參しけるを、信忠森武藏守長可に下知して殺されたり。長可各務兵庫元正を使として武前采女を添へたり。信綱刀を膝下に置きて離たず。各務武前行き向ひて、武藏守が愛する馬の候。慰に見給はんや、と言へば、庭に出づる處を、元正二尺六寸有りける雲次の刀にて一太刀斬りたりしに、信綱小脇差を抽く處を、采女續いて切り伏せたり。小姓河野と言ふ者信綱の刀を持ち居たりしが、卽ち抽いて采女を切る。兩士遂に河野をも討ち止めたり。元正鎗を合せ首を取る事二十一。茲年高遠の城攻めにも、狹間より覗ひ見て群りたる眞中へ飛び入り倒れたるが、起上りて散々に切り合ひ首を取りけるが、鷄尾の棒の指物指して傍を拂ふ有樣を信忠見て、誰と問ふ。長可、我家の士各務兵庫と申す者なり、と言へば、誠に今日の見物なり、と言はれしとぞ。

○戸田半右衞門山口小辨佐々清藏功名の事

高遠の城にて戸田半右衞門重政一番に駈け入りし時、赤袍に金の戻竹の出し戸張隱のす戸、衝木

○東照宮依田信蕃を助け給ふ事

天正十年三月、東照宮江尻に御軍を出され、成瀬吉右衛門正一を以て田中城を守りける。依田右衛門佐信蕃に降參を勸められ、武田の舊臣悉く背きて滅亡近きに有り。疾く城を出で候へ、と仰せ遣られけるに、依田從ひ奉らず。武田の長臣其の書簡を得て、虛實を定むべき旨を申す。其後先年遠州二股の城にて緣も候へば、大久保忠世に城を渡すべし、と申せしかば、東照宮尤なりとて、穴山梅雪が書簡を送らせらる。信蕃案に於いて城を忠世に渡しければ、降參せば信州の本領を當て行はるべき由仰せ出されしに、依田承り、勝賴の存亡を審に承らざる間は、仰を承り難し、と申して、信州佐久郡芦田に赴かれけり。勝賴既に亡びて、信長、今度勝賴に二心無き輩と言ふとも、武名有る者は諸將召抱ふべからず、と下知し、窮隱れ居る者を搜し出して死罪に行はんとなり。東照宮此の事を悼ませ給ひ、信蕃を市川の御陣に召され、密旨を蒙り、主從六人遠州飼東郡二股の奥小川といふ所に隱させ給ひけり。其の餘仁德に依りて人數多救させ給ひけり。

及べども出さず。信忠怒つて、累世の旦越勝頼をば少の間も境内に留めず、其の遺骨をだに取り斂めずして詮なき者を匿したる、とて津田次郎信治、長谷川與次郎等をして寺を取り巻いて探さるゝに、三人は疾く逃け去りぬ。僧徒皆山門の樓に上りて籠りたるを、其の下に燒草を積みて火を掛けたれば、快川を始めとして、坐して合掌して焚死す。其の餘喚き叫んで燒死にけるは、寶泉寺の雪峯、東光寺の藍田、長禪寺の高山等兒童に至りて八十四人なり。

又禪僧の語り傳へしには、快川濃州に在りし時、信長招待すれ共肯はず。今川の家に行きて今川家を輔佐したりければ、信長憎まれしに、甲州に往きて慧林寺の住持たり。信玄の死を深く祕しければ、信長愈怒りて、種々に探り聞かせられしに、快川の方より泄さざれば、信長怒りに堪へ兼ねられしが、武田の亡びし故遂に焚殺されしとなり。又其の時樓下に鎗先を揃へて剩さじと爲たりしに、快川弟子の南華に、法の絕えなん事口惜。とても逃る可きにあらね共、樓より飛びて死候へ、と云ひしかば、南華飛びたりしに、群りたる士卒の鎗ぶすまを作りたる者共鎗を伏せたりしかば、南華助かる事を得て、後豐後月溪寺に在りと言へり。續いて飛びたる者十六人有りと雖も、其の名傳はらずとかや。

に介錯せさせて終られしとぞ。相從へる人々皆互に疊違へて勝頼の供しけり。總藏と僧の麟岳と殘り止れるが、皆事よく終りしを見屆けて後、總藏自害しければ、麟岳刀を口に銜へ貫かれて死しけるとなり。されば後甲陽軍鑑、天目山の事は元より彈正の筆記に非ず、後の人誤り傳へて書きたるなるべし。

○禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬むる事

勝頼父子の屍田野にあれども、信長を恐れて慧林寺の僧を始として斂むる人無し。田野の西北四里許に、中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴院來りて、勝頼夫婦信勝已下の屍を斂め葬る。其後東照宮甲州を御治め、一寺を建立有りて景德院と號し、田地を寄附あり。小宮山内膳友信が弟の僧なりしを、住持の僧となし給へり。

○信忠慧林寺を燒かるゝ事

勝頼亡びて後、武田家尊崇しける慧林寺に、前將軍義昭公の使大和淡路守、三井寺の上福院、佐々木承禎三人を置し置きたる聞え有りければ、早く出すべき。と信忠下知せらるゝ事三度に

○信玄の館の跡を信長公見給ひし事

勝頼亡びて後、信長信玄の館を見んとて、馬を乗り入れんとせられしに、馬進まざりしかば引き返されけり。東照宮は程經て甲州を治めさせ給ふ時、信玄の館の跡御覽の時、館の門外にて御馬より下させ給ひしとぞ。

○勝頼天目山にて最後の事

勝頼滅亡天目山にての事共、甲陽軍鑑には切死に沒せられし由載せたり。甲州の士民の言ひ傳ふるとは異なり。鶴瀬も勝頼に背きしかば、天目山を指して落行かれしに、一揆所々より起りてければ、百姓の家に從ひし婦人共を入れ、傍の人家に茅の有りけるを撒ばせて、出で入る口を塞がせ火を掛けられけり。小高き所に上りて、武田の家代々持ち傳へられし楯無といへる物具を信勝に著せしめらる。土屋總藏肩入の役をしけり。偖て勝頼薙刀を横たへ、寄せ來る一揆に向はれしを、總藏、屋形は新羅三郎より二十八代弓箭の家を嗣がせ給ひ、今はの際に及ばせ給ふとも、一揆傍に御首を渡し申さん事口惜く候ふ、と諫めければ、尤なりとて物の具脫ぎ、總藏

と聞し召し、將机を下りさせ給ひ、偏に若き故思慮無く斯くならせ候、と禮義正しく仰せあり。是を傳へ聞く甲斐信濃の士ども、徳川家に心を寄せ奉る因となれり。

又一說に、勝賴の首を瀧川が士瀧川莊左衞門と言ふ使番に持せて信長に見せ申せば、種々に罵りて、杖にて二つ突きて後足にて蹴られけり。莊左衞門是を見て、斯る事こそ無けれ。織田家の運命はや盡き果てなん、と言ひけるを、蜂須賀阿波守至鎭の長臣、稻田修理が弟丹波、瀧川が方に信長より置れたるが聞きけるが、果して程なく信長弑せられしかば、莊左衞門、心有る者よ、とて蜂須賀の家より搜し求めけるに、瀧川の家滅びて後、隱れ居たるを召し出して仕へけるとなり。

○秀吉勝賴の滅亡を惜まれし事

信長甲州に攻め入られし比、秀吉は筑前守とて、西國毛利家に向ひて、甲州の軍に從はず。勝賴死して甲州平均なりと言ふを聞き、秀吉大息吐いて、可惜人を殺したる事の殘り多さよ。我が軍中に有りしならば、强ひて諫め申して、勝賴に甲信二州を與へて關東の先陣としたらんに、東國は平押にすべきに、と繰り返し悔まれけり。

常山紀談　巻之五

○勝頼の首穿鑿の事

勝頼天目山に落ち行く時、瀧川一益攻め入りて落人共討取り、勝頼の首を取りたれども、誰といふ事を知らず。小溝の中に棄けるに、百姓儕溝の前にて必ず平伏し禮をして打ち通る。如何なる故ぞ、と問へば、彼溝の中に屋形の御首の御座しまし候、といふ。然らばとて首共取り出す。信忠勝頼の首を分ち置き、先瀧川義太夫を呼びて、汝が取りたる首は何ぞ、と問はるゝに、是なり、とて出す。此は土屋總藏昌恒が首なり。伊東伊右衛門といふ者進み出で、勝頼の首を見て、此こそ伊右衛門が取りたる、と申す。誰は如何に、と問はるゝに、斬口に乗つたる馬の栗毛かすの血に混りて附きて候。天目山の麓田野より鞍の四方出に附けし故なり、と申す。果して詞に違はず、依て伊東が取りたるに定りぬ。信長勝頼の首を見て、如何に汝が父非義不道なりし故、天の譴遁れ難く今斯くなりぬ。信玄一度京に赴かんと志しけると聞く。汝が首を京に送り、女童に見知られよ、と罵り、首を東照宮の御許に送られけり。東照宮御膝机に御座しませしが勝頼の首

何條以て堪るべき、山は皆火炎となりて燃上る。是に依て織田徳川北條の軍勢燒死する者數知れざりける。

籠城は心元なしと患ひけるを、悴幸村は冷笑ひ、今宵某敵兵を欺き必ず一汗流させ申すべし。又君には本丸に在て篤と幸村が計らひを御覧あれ、と申しければ、昌幸、然らば汝宜しく計らへ、と申しける。昌幸が大膽幸村が不敵何れも類ひ稀れなる英智なり。幸村は夫れより松浦七郎、荒川勝藏、畔柳九藏、海野六郎兵衞、望月太郎左衞門等に命じて城の後の山續きへ炎々と松明を點させ、上田の城より越後路へ落ち行く體を示しければ、三方の寄手之を見て、偖は眞田昌幸籠城叶ひ難きを察し、越後路へ落行く者ならん。いざや追駈け武具を剝ぎ取るべし、と一犬虛を吠ゆれば萬犬實を傳ふるの習ひに、一人斯くと言ひ出せば聞く者之れに附會し、是れ眞田は上杉が方へ落行くと覺えたり。如何樣追駈け高名せん、と思慮淺き面々、我れも〳〵と三方より松明を目的に進み近きて見れば、呆然々々唯此處彼處に松明の結ひ附けしのみにして更に人なければ、這は不審と眉を顰めしが、斯くては長居も無益なり、とて諸勢は陣に立歸らんと今來りし道へ差掛りしに、這は那に、道は一面火炎となりて歸るべき樣も無かりければ、諸勢は大に仰天し、如何はせんと狼狽へ騷ぎ、峯を傳ひ谷に彷徨ひ、人馬上を下へと騷動して猛火の中に苦しむ樣は、地獄の責も斯くや有らんと、恐ろしなんど云ふばかり無し。斯くと見る內に、杭木に結ひ附けし松明燃盡して地に落ちければ、豫て設けし地雷火一度にどつと發したるにぞ、

り攻め掛れば、盲人に均しき寄手の面々働くこと能はずして、我れもくと敗走り、同士撃するもあり、蹈れて死するも有りて、二十有餘萬の大軍雪頽懸りて落されしは、甚見苦かりける有様なり。斯れば信長は如何にせましと思慮を凝せしが、未だ能き工夫もつかざる所へ、家康来りて、鶏卵煎砂の目潰を防禦んには、竹束を以て楯とし、鎧の袖を額に翳すより術なし、と夥多しく竹束の用意して又もや押寄せたるに、幸村は煎砂に懲り果てたる敵兵、此度は之を防禦がんとて、竹束の楯を用意せんこと必定なりと推察する所から、多く擲松明を貯へたるに、果して先手には竹束を荷ひ、跡には棒の太きを提げ、目潰の鶏卵今や降り来るかと待つ所に、城中は鑓り返りて音もせず。寄手十分城に近づきし頃、一聲の鐵炮響くと齊しく三方の櫓より松明を投げ出せば、油を注ぎし如き竹束は、見るうちに炎々と燃上り、寄手の者共驚き騒ぎ、消さんとすれ共消ればこそ、散々になりて我れ先きにと敗れ走りける。

○眞田幸村智謀の事

織田徳川北條の三將上田城を攻落さんとて押寄せけるに、何分にも眞田が智謀に當り難ければ、是非なく遠攻に致しければ、是れには昌幸困じ果て、斯くては所詮糧食に事を缺かん程に、

く事を得べきの妙策なり。兵家宜しく知り置かるべし。

○眞田幸村前後奇計の事

初冦上田籠城の役、織田徳川北條の三將二十有餘萬の大軍を以て百重千重に取圍み、水も漏さぬ計に犇々と取詰めたれば、憐れ上田城は細粉に蹈崩されんず樣なりける。去れば流石の眞田昌幸も城兵僅に二千有餘、今は防禦の術も盡きたりける程に、如何にせましと思慮に心を苦しむる折から、悴幸村當年十四歲なりけるが、鷄卵煎砂の謀計を巧みける。卽ち鷄卵を二つに割り、中の黃白を去りて此中へ煎砂を入れて合せ、紙を水に浸し割口を卷きたるもの數萬作り出し、櫓々に十籠二十籠づつ取り備へ置き、寄手遲しと待ちかけたり。頃は天正十年三月二十五日の朝まだきより、織田徳川北條三方の寄手は鬨と関を作りて押寄せ、鍵繩打懸勇みに勇んで攻立つるに、城中よりは時分は好と、件の鷄卵を相圖と均しく擲げ出せば、何條以て堪るべき、冑面頬の嫌無く當り次第に碎けしかば、煎砂は兵士の眼に入り、さしもの勇夫も暗夜を辿るに異ならず。城中よりは之を見濟し、時分は能きぞ、と松本口織田勢へは眞田源次郎、輕井澤口徳川勢へは隱岐の守信尹、笠ケ城北條勢へは與三郎幸村、何れも三百餘人を率ゐて関を作

く喚きて曹操が勢に撃つて蒐りければ、戰はんとする者獨りも無く、馬物具を打ち棄て亂れ騒ぎて逃げ走る。張繍長追は却つて敗を引出すの基なりとて引回しける。劉表之を見て大に驚き、賈羽に問うて申しけるは、囂に我れ精兵を引きて追ひ蒐くる時、御邊之を止めて、追へば必ず破れんと云ふ。又敗軍を引いて再び追はば必ず勝たんと云ふ。果して御邊の言に外れざるは如何なる故ぞ。何とて此の如く先見の明かなるぞ、と申しけるに、賈羽答ふるやう、是れ知り易き事なり。將軍能く兵を用る給へ共曹操には及ばず。勢眞に敗軍の後なれ共、追手蒐らん事を知りて、自後陣に備へて精兵を殿とす。是の故に追手の勢壯なりと云へ共打負くべきを知る。曹操既に打勝ちて後は、再び敵の追はんとは思ひ寄らず。都に事ありて心急ぐ故に、屈強なる騎馬の勢は皆前に進み、其の身も路を急ぎて一手の勢を後陣とし、大將に命じて守らしむ。是れに由つて重ねて追ふ時は敵の不意に出るなり。曹操が大將能く戰へ共亦將軍には及ばず。是れ必ず勝つべきの理なり、と申しければ、劉表も張繍も其高論にぞ服しける。賈羽の事と昌幸の事とは追撃と夜撃の差こそ有れ、其趣は一にして、賈羽は早く昌幸は晩ければ、卽ち昌幸は同じ謀を二度したるものにして、敢て奇なりとするに足らずと謂ふべきか。本計の利益たるや再三再四用ふるも、尙ほ且つ敵を欺

掛れば、上杉勢陣間に大敗し、春日山を指して引退きける。

初度を止めて再度を勸むる謀計は、漢土後漢の世に於て賈羽既に之を行ふ。曹操和を發して襄城を攻めけるに、河北の袁紹都の空虛に乘り攻入んとする由聞えければ、曹操以ての外に驚愕き、今都の内空虛なるに、袁紹若し攻上らば、忽ち瓦の碎くる如くに破れん、とて取るものをも取り敢へず、兵を引きて馳せ上りけるに、張繡之を聞きつけ、急に追蒐て擊たんとするを、賈羽諫めて申しけるは、必ず追ふべからず。若し追ふときは却て敗れん。劉表傍に在りて申しけるは、曹操都に事ありて敗軍を引きて惘惇かへる。我れ之を追はんに何をか待ん、とて張繡と一手になり、一萬餘騎にて追蒐くる。曹操は自ら後陣に居けるが、追手の蒐かるを見て豫て期したる事なれば、一軍を引いて取つて回し散々に打敗る。劉表張繡したゝかに擊れて引退き、賈羽に逢うて、御邊の諫めを用ゐず、今大に敗れたり、と云ふに、賈羽申しけるは、兵を調へて今一度追ひ給へ。張繡が曰く、既に一戰に負けて敵は勇み御方は弱る。爭でか又追ふ事を得ん。賈羽申しけるは、兵勢は變あり、急に又追蒐け給はば、必ず打勝ち給はん。萬一勝たずして回り給はば某が首を獻ぜん。張繡、然らば再び追うて見ん、とて打立ちけれ共、劉表は疑うて從はず。張繡一手の兵を驅りて、飛ぶが如

ては敵合戦は明朝と油斷せしものならん。いざ打掛らん、と三千五百の精兵鬨と関を作り攻懸りしに、陣中には人影だに無く眞闇なりければ、土屋、初鹿野不審し居たる所、一聲の鐵炮耳根に響くと齊しく、此方よりは柿崎隼人五百餘人撃つて出で、彼方よりは安田下總守同じく五百餘人、後よりは甘粕近江守、前よりは直江山城守、須田大炊之介、杉原常陸之介、惣勢三千餘騎、各潮の涌くが如く撃つて出でければ、何かは以て堪るべき、土屋、初鹿野が勢大に討れ、辛うじて飯山の陣に逃げ歸りける。直江が勢は之を見て、謀有らん事を氣づかひ、長追もせず元の陣に引返しける。偖ても土屋、初鹿野は敗軍の士辛を引き、面色土の如く恥かきの體にて本陣に歸りければ、勝頼は初めて眞田が申せし事を感じける。斯くて又昌幸申しけるは、奈何に土屋初鹿野殿、今一度直江が陣に夜撃を蒐けられよ。初鹿野申けるは、我々初め大に破れたれば、今一度參らば今度は生きて歸ること叶ふまじ。土屋申しけるは、然に非ず、何はともあれ今一度夜撃を蒐けて見申さん、と勸められ、初鹿野心ならずも又三千五百人の新手を率ゐて押寄せける。此方は直江が陣には夜撃を破りて手始よしと喜悦び、陣中にて酒宴を催し、明朝は早く押出さん、と其の用意をなしければ、再度夜撃來らんとは思ひも寄らぬ所へ、関の聲聞えしかば、すはや又夜撃來りしぞ、と上を下へと騒動し、太刀よ鎗よと犇めく所に、土屋、初鹿野勇を奮うて攻

〔補　遺〕（以下三章異本に據りて補ふ）

○眞田昌幸卽謀の事

勝頼景勝の代に至り、甲越飯山に對しけるに、武田方は勝頼自ら二萬五千の兵を率ゐて出張なせるが、上杉方は直江山城守兼續を大將として、三萬餘騎を引具したりける。武田方の先鋒土屋惣藏、初鹿野傳右衞門急ぎ勝頼の御前に出で申しけるは、上杉勢直江山城守三萬餘騎、飯山より三里隔てて陣を出し候なり。何卒我々今宵夜擊致し度存ずる間、御許し下されなば、敵を一時に攻破り候はん、とぞ願ひけるに、勝頼道理に聞かれ、敵の備へ無きを擊つは軍法の奥義なり。早く其用意を致すべし、と命じければ、土屋、初鹿野の兩人大に喜悅びて退出せし後へ、眞田昌幸來りて謁しければ、勝頼今宵夜擊の事を物語るに、眞田大に笑ひ、直江兼續は尋常の敵に非ず。夜擊をなさば極めて其の用意有るべし。勝頼聞きて、汝が慮り甚だ過ぎたり。直江何ぞ今宵用意すべきや、と云ひしに、眞田は答へもあらず、冷笑うて出でにけり。去程に土屋初鹿野の兩人は、手勢三千五百餘人を以て、其夜初更の頃及より用意をなし、飯山より直江が陣に押寄せたりしに、篝火少々燒き捨てたるばかりにて用意の體も見えざれば、土屋、初鹿野大に悅び、偖

○高天神落城仁科信盛戰死の事

天正十年勝頼の弟仁科五郎信盛高遠の城を守る。織田信忠僧を使として、勝頼の滅びん事近きに有り、とて城を出らる可し、と言ひ送りたりければ、信盛怒つて返答もせで、僧の耳鼻を剝いで追ひ出す。信忠、然ば攻めよ、とて押寄せて嚴う攻むるに、城兵殘り少く討れ、信盛、小山田備中、渡邊金大夫照、春日河内守、原隼人、今福安左衞門、諏訪莊右衞門已下十八人、十二間に七間の廣間に籠り、火を散して戰ふ。信忠淺黃金襴の袍かけて屛に上り、梧桐の枝に取り附き下知せらるゝを、目にかけ七八度打つて懸る。此の時三十五六歲許の女房の緋威の物の具著眉尖刀を提げ、諏訪莊右衞門が妻なりと名乘り、七八人薙ぎ伏せて自害しけり。信盛を始として死狂に切つて廻れば、攻めあぐみたる時、森武藏守長可屋根の板引破らせ、鐵炮を打込みたりければ、信盛床の上に上り、腹切つて腸を摑んで唐紙に擲ち倒れ死す。其の血痕後まで有りと言へり。小山田已下も自害したり。信盛此の時十九歲なり。信忠の取り著かれし梧桐に鎗刀の痕數と附きて、大廣間の天井も柱も鎗太刀の痕ありて血に染らぬ所なし。庭に殘れる雪に血かゝりて紫となれりとぞ。

の場を見棄てて歸らんは口惜けれ共、使の仰重ければ、とて駈け歸り斯くと申せば、護國公、無二無三に乘り破れ、と下知せらる。勘兵衞は城兵の必ず突いて出づべき門脇に詰寄せたり。搦手よりも伊木、森寺先を爭ひ門を破りて攻め入りたり。森寺は今年の春案内は好く見たりし故、門を破る透間に傍の屏を踏え、敵鎗にて突きけれ共、飛び込みて其儘討取りたり。梶浦が察せし如く搦手は防ぐ兵少かりければ、攻め入りて火を懸けたり。城兵も大手の門を押開き切つて出る。勘兵衞待ち請けて鎗を合す。城兵妻を切り脫けんと死狂に成りて戰ひけるに、寄手搦手より攻め入りたるが、敵の後へ切つて懸りしかば、城兵濱邊を指して敗北せり。兵庫の築島に雜賀孫一郎花隈の加勢として有りけるを、伊木、森寺先陣にて押寄せ攻め落す。此の時湊川にて勝九郎五輪作右衞門といふ剛の者と鎗を合す。森寺政右衞門も馳せ著きたれば、作右衞門引つ返して退きけるが、五輪の指物を、是は隱れ無き指物なり、兩人へ進するよ、と言ひて川へ飛込みて逃れ得たり。黑き四半に白き五輪の形を染めたるなりしとなり。信長より勝九郎國清公に馬を進せらる。護國公、今度の軍我目前にて各功名したるなれば明に見屆けぬ。中に就きて梶浦が決斷、鎗を合せたるよりも忙しき場に好くこそ察したり、とて返す〳〵賞美有りけるとぞ。

聞し、且軍法を破りたる、と怒り給ふ。其時森寺、只今忝き仰を承り候ひき。さして賞美の望み候はず。勘兵衛が咎を許させ給ひ候へかし、と申せば、護國公、偖止みなん、とぞ仰せける。斯くて七月二日に及んで、生田の森の南へ馬の草苅に雑人出でけるを、城中より兵を伏せ置きて追つ散しけるを、生田の森の附城より是れを見て、藤九郎、馬上に鎗を横たへ、續け者共、とて馳せ向ふ。梶浦兵七、河崎忠三郎、大陽寺左平次、臼田喜平次、日置清十郎など追ひ續き聲を擧げて切り懸る。竹村喜左衛門、乾平右衛門、長谷川新次郎鎗脇を射る。淵本彌兵衛は四寸角の柱の一丈餘なるを打振りて、敵を叩き伏せ相戰ふ。金剛寺山の伊木森寺も大手の軍烈しきを見て、搦手より乗つ取らんと押寄する。城より野口與一兵衛と言へる者、半町許打つて出で防ぎけるが、野口も討死すれば城際へ押詰むる。大手の戰に寄手多く討れ危かりければ、引き返さんと護國公、梶浦に詞を掛けらるれば、勘兵衛、唯今上んとせば、彌亂足に成るべし。先程は鐵炮の數少く覺えつるに、俄に增たるは、搦手より大手へ救來りぬらん。政右衛門早搦手へ押詰め乗り込み申すべし。然るに只今大手の味方を引取らば、敵搦手へ廻りて政右衛門討死すべし、と申す。護國公尤なりとて、往きて見來れ、と仰せられしかば、勘兵衛馳著けて云々の事なりといふ。政右衛門、好くこそ言ひたれ。早乗り入るべし。大手を攻められ候へと言へ、といふ。勘兵衛此

攝州花隈の城は荒木攝津の守村重が一族荒木志摩守元清籠れり。天正八年信長の命にて附城を構へ、花隈の北諏訪が嶺には護國公、西の方金剛寺山には士大將伊木清兵衛忠次、森寺清右衛門忠勝、南の方生田の森には護國公の嫡子勝九郎之助守り給ひぬ。何も花隈より六七町許を隔てたり。三月二日城より兵を出す。勝九郎廿二歳にて組討の功名あり。國清公後に三左衛門尉輝政公十六歳にて御座せしが、是も組討にて首を取り給ふ。護國公敵五六人自ら討取り、伊木清兵衛、秋田嘉兵衛、堀與左衛門、芳賀五郎右衛門、石黒武左衛門、佐橋武右衛門、後藤市兵衛、波多野彌藏等激く戰ひて追つ崩す。一夜護國公森寺政右衛門を呼んで城中へ忍び入り、能く見來れ、と命ぜらる。森寺行く時梶浦勘兵衛も打連んとす。森寺、今夜の物見は大事なり、相伴はん事叶ふべからず、といふ。梶浦聞きて、思ひ立たる事空しく歸るべきや。自害するより外無し、と中歸るべき體に非ざれば打連たり。陣と城との間に小き坂あり。城中より武者二人鎗を提げ來るに出會ひ、二人とも討取り首をば草の中に置し、搦手の水道より忍び入り、又水道より出で、置きたる首を持歸り實檢に入れ、城中の有樣を申せば、護國公、はや城は攻め取りたる心地するよ。如何にしてかは此功を賞すべき。但梶浦は何て行きたるや、と問はるゝに、梶浦承はりて政右衛門に仰せられしを、物陰にて聞き候、と申す。護國公、近習の人を退けて言ひつる事を立

平岩七之助親吉は三郎君の傅なりしかば、臣が諫め申さざる罪を以て死刑に行れ、首を信長に贈り、三郎君をば獄に押籠め置いて、時を御待ちあれ、と申しけるを、東照宮、汝が忠心は誠に言ふべき詞も非ざれ共、よく察せよ。武勇我に勝れりと思ふ子を殺すは忍びざるの至なり。汝が首を信長に贈るとも、既に吾が家の長臣酒井が信長に飽くまで悪く言ひつると覚えたれば、なかなか聞き入れられじ。汝を殺さば恥の上の恥損の上の損とは是なるべし、と仰せられけるとぞ。其後年経て忠次目を煩ひて久しく引籠りたりしが、御前に出で、年老候ひぬ子を不便にせさせ給へ、と申しけるを聞召し、信康生きて有るならば斯許心を労すまじきに、汝も子の不便なる事を知りたるが怪しき、と仰せられしかば、言無くて退出したるとなり。又或時幸若大夫が満仲を舞ひたりしを御聞き有りて、満仲の舞は大久保は得見まじ、と仰せられしかば、忠世も引籠りけり。之は三郎君を忠世に御預け有りしに、定めて引き具し参らせて片陰の山林に身をひそめなんと思召けるに、然は無かりける故、三郎君の御事を悔ませ給ふ折々御詞には出ざれ共、事に触れ数年の後も愁傷の色現れさせ給ひけるとぞ。

○摂津國花隈城落つる事

○岡崎三郎君の御事

岡崎三郎君天正七年二股の城にて自殺御座しましける事は、信長より叛逆の志有りて勝頼に内通し、二股の城へ甲斐の兵を引き入るべきとの三郎謀あり。此の事は酒井左衞門尉よく存知たりと告げ申されしより事起りて、遂に死を賜りぬ。

忠次を信長召し寄せて、三郎君の北の方より告げ申されし十二條の悪事を擧げて忠次に問はれしに、忠次是れより前三郎君の侍女、おふうと言ひし美人を密に己が妾とせし事によりて、三郎君憤深かりければ、陳謝の事に及はずと言へり。又一説に、佐久間右衞門尉信盛三河に參りけるに、東照宮御馳走有りけるが、三郎君を召され御對面有りしに、佐久間黄なる綿帽子を冠り居たるを、三郎君引奪ひて投げ棄て、無禮なり、と怒らせ給ふ。東照宮驚き思召しけるに、三郎君、我は信長の婿にてこそあれ、と仰せられしかば、佐久間無禮を謝し申せしが、是れも信長に讒言せし故とも言へり。三郎君は勇氣逞しく極て物暴く御座まして、軍に臨みて氣色變り髮毛も逆に立つべく見えしを、東照宮御覽じて、摩利支天の像に似たり、と仰せ有りしとぞ。

勢たりき。今多からぬ士卒打ち散りたれば、早く城を出て運を開くの道こそ然るべからん、と雖も、定盈兵を出して敵の樣を見せしむ。山縣が軍競ひ來る由告けるに、定盈則に往きて謠曲を唄ひて出でず。足輕の頭山口五郎作强ひて諫めければ、則より出で手を洗ひけるが、又湯をもて口すゝぎたる體常の如し。强ひて諫むれば南の廓より退きけるが、途中にて我等が伏所に火を掛けざる事後に敵に嘲らるべし。誰かは歸りて城に火を掛け、又日比愛したる鷹を携へ來るべき、と言ひも敢ぬに、中山與六十八歲なるが引返し城に戻り、火を掛け鷹を臂にして出でたりけり。定盈は宇利を經て西鄕へ赴きける。後を慕ひて與六海倉淵まで退きけるに、與六が一族後藤金助追つかけ來て、穢くも敵に後を見するよ、と詞を掛たりしかば、與六馬引返しむずと組みて、既に金助が首を取らんとせしに、多嶺の士數多落ち重なりて終に討たれけり。山口は定盈が後殿して、主從三騎素綿瀨を涉る處に敵追ひ來る。山口引き返して敵數多射伏せたれ共、馬疲れければ敵は近く。蘆田村にかゝり吉祥山に赴く。敵猶追つかけ來れば、散々に射自らましけるが、馬動かざりける故、乘放ちて步立になり山にかゝる。箭二筋のみ殘れり。菅沼刑部盛津傳助追つめければ射たれ共中らず、指添を抽いて手裏劍に打つ。刑部が頭上を打ちかすりたり。山口も終に其處にて討死し、其の墓今に在りといへり。

しが進み出で、討ち取るべし、と言ふ。菅沼聞いて、汝寝言を言ふや、と言ひしに、必定討ち取り申さん、と言へば、去計の古兵も軍し兼つる西郷なり。手易く討たん事思ひも寄らず。其處立去れ、と罵りければ、側より、否とよ、千介がつら魂並々ならず。末頼母しき若者なり、と言宥めけり。千介、明日を待たれよ。西郷が首提げて参らん物を、と獨言して退きけり。斯て夜更けて菅沼が愛せし鐵炮を取り出し、曉陣屋を窃に出で、岡部と藤枝の間なる竹林に隠れて居たり。夜明けて西郷馬に乗り足輕引具して来る。東照宮は岡部の傍の小山に陣して御座せしが、敵又出たると仰せ有りける處に、千介鐵炮をため据ゑ、西郷を馬より打ち落し走り出で首を取り、駈歸りて斯くと申す。東照宮、天晴剛の者よ、と褒めさせ給へば、是より千介が名高く聞えけり。

○菅沼定盈膽氣附山口五郎作後藤金助討死の事

天正二年勝頼兵を出して、菅沼新八郎定盈が新に構へたる城を攻めんとす。定盈が一族を嚮導として不意に押寄する。謀を知りたる者有りて告げ知らせけり。□月廿九日の曙に定盈が士共、大敵和田嶺本宮坂二筋に分れて攻め来り候間疾く退かれよ、と言ふを聞きて、一軍もせず逃げ落ちん事弓箭取る身の恥なり、といふ。人々永祿年中今川家より攻めし時は、西郷孫九郎元正加

女ならば白眼なるべし、と仰せ有りければ、開いて見るに黒眼あり。又幸若忠四郎も高館を舞ひける時見知りたりければ、時田が首に定りけり。

○岡田竹右衛門見切の事

天正八年七月、東照宮田中の城を攻めさせ給ひ、八幡山に御陣有りて苅田働きあり。勝頼後巻せんとて甲州を打出づる。松平康親が士岡田竹右衛門元次、此比夕立洪水有るべき時なり。大井川は一夜に水出て渉り難し。勝頼血氣の勇將にて候へば、若し俄に押し寄せ候事有らん。苅田終らば疾く川を渉りて、兵を遣されて然る可し、と申す。東照宮尤なりとて、川を渉り兵を收め給ふ。果して其の夜大雨激烈しく大井川水出でたり。

○朝日千介西郷伊豫を討つ事

田中の城を攻めらるゝ時、西郷伊豫といふ剛の者足輕を引き具し、度々打つて出で寄手を破りければ、東照宮、誰かある、西郷を討つべき者は、と仰せ有りけれ共、答へ奉る人なし。其夜菅沼大膳が陣に人々集まりて、此事を言ひ出したるに、菅沼が小姓朝日千介後には丹十八歳なり

向ひ富士川を打渡す。東照宮客戰は危しとや御思慮有りけん、兵を還して大井川の伊呂を渉らせ給ふべきに定めさせ給ひしに、俄に惣軍騒ぎ立ちて鎭らず。牧野半右衞門制し止むれ共、彌騒ぎしに、七郎右衞門忠世御旗本に大提燈を高く差上げさせ、士を附け置きて、我が歸るまで動く可からず、と言ひ含め、先陣に行きて御旗本は二の身を討ん、とて鎭りたり。其の證は彼の火の動かぬを見よ、と言ひければ、是れによりて鎭りければ驕て乘り歸り、先陣はよく鎭りて敵を待つ體なり。以後先陣の人々に嗤はるべし、と言ひければ、之もまた鎭りけるといへり。

○栗田刑部幸若が舞所望の事附時田が首實檢の事

東照宮高天神の城を圍ませ給ひ、柵を附けて固く守らせらる。城中後詰を乞へども勝頼出でず、粮盡きけり。栗田刑部使をもて幸若が舞を一曲所望し、是を今生の思ひ出にせん、と申しけるを、東照宮聞し召し、優くも言ひけるよ、とて幸若に高館を舞はせらる。栗田が最愛の小姓時田鶴千世と言ひし者に、絹紬様の物を持たせ出して幸若に贈り與ふ。其の後落城の時、時田討死しけるを首を取りたれ共、女の首なるべしと人々疑へり。東照宮聞し召され、眼を開き見よ。

甲越和親堅約辰　黄金媒妁訟前恨　倍臣屠蓄革安國　可レ惜家名換二万鈞一

薄恥をかくはものかはなべて世の寂滅するも金の諸行よ

兩龍臣彌邪義を行ひて武田家滅亡せり。

○東照宮勝頼と大井川にて御對陣の事

天正七年九月、東照宮勝頼と大井川のいろうにて川を隔てて對陣し御座します。時に大木川上にて川に轉び落ちける。其の音波に響きて事々しく聞えしかば、すはや勝頼夜討に寄すると騒ぎ立ちて止らず。牧野半右衛門に、先陣を鎭めよ、と仰せられしかば、牧野馳行きて、何事に騒ぎ候や。御旗本も騒ぎ候ぞ。疾く靜まり候へ、と呼はりければ、愈亂れ立ちけり。斯る處に、大久保七郎右衛門忠世馳せ來り、勝頼押し寄すべし、とて御旗本は物具固め敵を待ちかけたるに、何とて先陣の人々斯くまで驚き狼狽へ候哉。後日に嘲り笑はるべし。疾く靜り候へ、と罵りければ、是れに恥ぢしめられて、程無く騒も鎭りけり。

一說、持船の城を攻落させ給ひ、保ち難し、とて焼き棄てらる。此の時頼勝沼津の城實諦築地の上にて此の烟を見られしが、北條家の軍を後にして、九月二十日東照宮の御陣に打

きて一方を駈破り落ちんとせしに、山口風雨の夜鐵炮を蒐め、東の門の寄手へ向けて散々に打たせければ、すはや打つて出ると騷ぎける。其の隙に西の門を開き、一同に駈け出で撃破りて落ち行きたり。

○長坂釣閑跡部大炊邪佞の事

謙信卒して天正六年三月九日養子上杉三郎景虎改政虎實は北條氏康の子也猶子喜平治景勝遺跡を爭ふ。景虎緣ある故武田勝頼に援兵を頼む。勝頼兵を出す。此時景勝謀りて、勝頼の寵臣長坂釣閑跡部大炊助に使者を送り、勝頼に黃金一萬、兩寵臣に二千兩宛を與へて加勢を乞ふ。兩寵臣勝頼を勸めて政虎を放されたり。是れより諸士勝頼を怨みけるが、終に勝頼の妹聟木曾左馬頭儀昌信長に從ひて勝頼に叛く。勝頼之を討たん、とて軍を信州諏訪原に陣す。小山田左兵衞信茂も之に從ひて、御宿監物友綱に送る。

汗馬怱々兵革辰　東西戰鞁轟邊恨　世上亂逆依何起　只是黃金五百鈞

砂金を一朱もとらぬわれらさへ薄恥をかく數に入るかな

友綱和韻、

○信長公松永彈正を恥しめ給ひし事

東照宮信長に御對面の時、松永彈正久秀側に在り。信長、此の老翁に世人の爲し難き事三つ成したる者なり。將軍を弑し奉り、又己が主君の三好を殺し、南都の大佛殿を焚きたる松永と申す者なり、と申されしに、松永汗を流して赤面せり。

東照宮後長臣等を召して、御物語有りける時、此の事を仰せ出され、先年信長金崎を引き退きし時、所々に一揆起り危かりしに、朽木が淺井と一味を疑ひ進退極りしに、松永信長に告けて朽木が方へ參りて、味方に引き附け候べし。朽木同心せば人質を取りて打具し御迎に參るべし。若し又歸り參らずば、事成らずして朽木と刺違て死したりと知し召されよ、と言ひて、朽木が館に赴き事無く人質を出させ、夫より信長朽木谷にかゝりて引き返されしなり、と仰せられしとぞ。

○山口六郎四郎奥田三河守高屋城を落つる事

松永が士大將山口六郎四郎、奥田三河守高屋の城を守りけるを、信長攻めらるゝに、城中力盡

石黒、今七尾に往かば必ず害に逢はん。船中にて鈴木を殺して退くべし、と勸む。長聞きて、汝が志悦ぶべし。然れ共陸より囘る家人皆殺されなん。吾獨生くべき義無し、とて七尾に往き、法道寺に入りて、遂に有坂に對面す。殺害に極めたれども有坂事故なく長を歸しけり。松川兵部、今日長を討漏し殘多く候。押寄せて討たん、と言へ共有坂聞き入れず。長は石動山にかゝり越中に赴く。石黒、敵寄せ來らんに殘る者無くば口惜きなり。姓名を賜はり候へ。敵を支へて討死せん、と言へ共、長、汝を捨殺し、吾獨生きて何の面目有らん、といふ。石黒、言ひ甲斐無きを承るものかな。本意を遂げられなば、吾子孫を取り立て給はれ、といふ處に、七尾の商來りて、敵押寄する、といふ。長は石動山にかゝり、石黒は物具して待て共敵來らざれば、後より乘り附けて共に越中に赴き、神保安藝守氏春の許に居たり。後長は前田の家に仕へて、淺井畷に武功有りしは此の人なり。長後又恕庵と稱しけり。

○越中にて謙信月を賞せられし事

謙信越中にて秋夜諸將を集め、月を賞して詩あり。

霜滿二軍營一秋氣清　數行過雁月三更　越山并得能州景　任他家鄉念二遠征一

ちて、謙信之迄打向はれたり。爰にて合戰無益なりとて、引き退くべし、と信長の陣々色めき立つ。恩光寺人に首を見するに、名のみにて面貌異なり。上方の軍の押來るを聞き、謀を以て長一族の首を偽り設けたるならん。能州を棄て松任に在るは、後詰を防がん爲なる可し、といふを聞きて騒も鎭りけり。卽夜戌の刻に及んで恩光寺、柴田、木下が陣に行き、先には味方一同に敗北す可き色有るを見て、謀りて申せしなり。七つの首は吾父兄弟にて候ふ、と告知せしかば、爰にて合戰す可からず、とて信長引返さる。恩光寺是非一軍と乞へ共聞き入れず。恩光寺は後信長の命にて還俗し、長九郎左衞門連龍と言ひしは此の人なり。連龍父兄の弔合戰を志し、信長の下知を請け、越前に至りて柴田に賴みけり。勝家越前の大橋に札を立て、長九郎左衞門能州に發向す。立身を志す輩は我被官たりとも參るべし、と書きたりければ、相集る士八十餘人、天正七年三月二日能州穴水の城に入り、舊好の者共馳せ集り百人に及べり。上杉より有坂備中を七尾に置きけるが、長曾檢見與十郎を大將として押寄せ戰ふに、長敗北して危かりしを、谷大學討死し、長漸く引き取りたり。紀州士鈴木因幡、初長に親有り。北越に居て今能州に來り、長有坂を和平し、從者は陸長は船にて有坂が方に來るべし、との使に鈴木來りしに、長を殺害すべき色あり、長に從へる石黑大膳、井久留了意、合田民部、木鳥小介、如何す可き、といふ。

送り返して、強弓精兵無雙なり、とぞ褒めたりける。康重其矢に進士が姓名の彫り附けたりしを見て賞する處に、是は山内が射申したるにて候ふ、と申す。復山内を呼び出して、云々なりやと聞かるゝに、清三郎が射たるにて候、と讓りけり。康重兩人に感狀を與へたり。世の人兩人を今の孟子反と言ひ合へり。

○長九郎左衞門能登國發向の事

天正五年畠山修理大夫義隆毒殺せられ、家臣七尾の城に據りて信長に屬し、能登大に亂れければ、義隆の伯父上杉彌五郎義春越後に在りて是を聞き、謙信に斯くと告ぐ。謙信卽ち師を出して、義春先陣して七尾の城を攻め落す。此の時長九郎左衞門、重連七尾にて畠山が長臣温井三宅に殺さる。重連が弟恩光寺使僧となりて、信長に此の由を申せば、柴田勝家、丹羽長秀、前田利家、羽柴秀吉、瀧川一益、氏家卜全等四萬許にて打立ち、八月五日加州手取川を涉り永島に陣取りたり。謙信は能登一州悉く旗下に附け、八月朔日兵を返して、加州にて長が一族の首七つ、倉部柏野の間なる濱に竿結ひ渡し掛け並べ、札を書きて立てられたり。松任の城主蕪木右衞門大夫と和平し、信長著陣を聞き、松任にて軍評定し、一戰すべし、と手配あり。七尾旣に落

天正三年八月東照宮諏訪原の城を攻めさせ給ふ。此の城は甲州馬場美濃の守氏勝が、城制の法にて築きたりし名高き城なりと雖も、城兵力窮りて、二十四日の夜城を棄てて小山の城に逃け落ちたり。東照宮、此の地は高天神に往來の要路、駿州田中持船の敵と、大井川一筋を隔てたり。勝賴必ず隙を伺ふべし。誰か此に在りて城を守り、敵を防ぐべき、と仰せ有りけるに、松平左近忠次進み出で、身不肖に候へども、此の城を守り申すべし、と申しける。御感有りて松平の姓を賜はり、御諱の字を下され、松平周防守康親と申せしは此の時よりの事なり。勝賴が暴惡殷の紂王に似たり。之より攻め入りて打ち滅すべき、とて諏訪の原の城を牧野の城と改められしとなり。

○山内治大夫進士清三郎功を譲る事

諏訪原の城を甲州より攻め來りて合戰あり。松平康重の子の士山内治大夫、進士清三郎、山崎惣左衛門三人殿しけるに、山内は精兵の手引にて、射拂ひて引き退く時矢種盡きたり。山縣源四郎猶追つ懸くる時、進士清三郎矢一筋を山内に抛け遣りしかば、山内踏み止りて射けるに、志村金右衛門が胸板を射通し、後の松の木に射著けたり。夫より物別れす。山縣此の矢を康重に

○信長公秋山伯耆を刑し給ふ事

天正三年信長美濃岩村の城を攻めて秋山伯耆晴近を生虜り、生乍逆磔といふ物にせられけり。此れは信長の姑遠山内藏助が妻にて、遠山は其の前岩村に在りけるを、秋山遠山の七家と稱せし人々と和平して謀り、元龜二年信長の加勢の士三十五騎を殺害し、城を奪ひ取りて内藏助が後室を己が妻としけり。遠山は是より前に病死し、其の嗣信長の男御坊丸を甲州へ送り遣り、岩村を居城とせしかば、信長怒り憎まゝ事深くて斯くはせられしなり。秋山口惜くも謀られけるかな。我は信長と緣類の親あり。斯くせらゝ事無念なり、とて齒を嚙み、信長の末を見よ、と罵りて、七八日許有りて死しけり。信長信州法華寺にて兵粮をつかはれける時、色々の小袖を著たる女房一人來り、懷より錦の袋に入れたる茶入を取り出し、是を信長に見せ賜はり候へ。見しりて御座しまさん、といふ。信長走り出て茶入をば石に當てて打ち碎き、刀を抽いて彼の女房を切り殺されけり。此れ秋山が妻にて信長の姑なり。

○松平忠次諏訪原城を守らゝ事

懸り止りしを知らずして、五六間許引き取る時、従者斯くと言へば、又取つて返し指物を取り得て鳥羽山に歸り首を奉る。東照宮唯今の勇氣嚴さ、誠に無雙と覺ゆるなり。然れ共是より後は努々今日の如く深働す可からず、とて遠州にて祿を增し賜りけり。彼の従者も度々働有りて後、士となし内田彦右衞門と言ひけり。

○芦田信蕃二股城を退く事

勝賴長篠敗北の後、芦田常陸介信蕃二股の城を守る。三河の軍三月下旬より此を攻る。南方の山に東照宮御陣を据られ、巽の方鳥羽山東は、安倉口の山北は、三十原口の山西は、和田島に向城を構へらる。信蕃固く守りて十一月に至る。城を渡し甲州に引き入るべし、と勝賴より再三下知せらるれども聞入れず。勝賴自筆の書をもて下知せられしかば、十二月下旬に人質を出し、二十三日に城を渡さんと約せしが、雨降りければ簑笠にて見苦く候、とて翌二十六日天晴れて後城を渡し、二股の川の邊にて人質を取換へ引きとれり。信蕃小勢にて久しく守り、目城を渡す作法正しかりけるを御感ありて、後終に徳川家に仕へけり。

○二股城攻内藤櫻井功名の事

天正三年六月東照宮二股の城を攻め給ふ。城主は依田下野守幸成なり。其の子右衛門大夫幸致城を出て、鳥羽山の下なる小川を隔てて防ぎ戰ふ。内藤彌次右衛門家長、强弓の手利にて散々に射白ます。松平彌右衛門忠長が子彦九郎、敵に朱の提灯の指物有るを見て、味方にも此指物有りければ、過りて敵の中へ紛れ入りしを、朝比奈彌兵衛一箭にて射伏せたり。内藤は彦九郎と緣者の親有れば引き返して彌兵衛を射る。其の箭彌兵衛が乘りたる馬の鞍の前輪より後輪をかけて射貫く。彌兵衛が弟彌藏馳來りて、兄が屍を引き退けんとするを、二の矢にて是も射倒したり。城兵二人の屍を引き退けんとするを、本多忠勝等進み懸りて追つ立てたり。城兵引き退く中に、一人手負ひて引兼ねたる者有りけるを、一人取つて返し、是を救け城内に引き入れけるを、櫻井莊之介勝次、敵の首を一つ取りたりしが、又進んで追駈け行く。東照宮御覽ぜられ、茜の四半の指物は櫻井なるべし。深入するよ、と仰せられけり。其時敵の手負を助くる者漸々一の木戸揚鉦門の中に入り、手負ひたる者は未だ半見ゆる處に、勝次走り著き、手負ひたる者の足を執りて三間許り引き出し、遂に其首を取る。其時門内より勝次が指物を打折りけるが、屍に

一説、赤地の唐織の錦の下帯したる士を生虜り來る。唯者に非じ名乘れ、と言へ共名乘らず。然ば雜人の手に掛けて殺さん。士ならば腹切らせん、と言ひしかば、多田淡路が子なりといふ。信長聞きて、淡路に久藏新藏とて二人の子有りと聞く、何ぞ、と問はるゝに、新藏なり、と申す。勇士なり救けてこそ、と有りければ、生虜と成りたる恥辱疾く首を刎ねらるべし、と乞ひたり。信長の前にて縄を解きしに、門外に立て掛けたる鎗を執り、邊の者を突き殺すによりて、遂に新藏を切殺しけり。

○佐久間信盛僞りて勝賴に降る事

長篠合戰の前信長謀を廻らし、佐久間信盛より潛に長坂釣閑が許に使を遣はし、日比信長に恨むる子細あり。願はくは勝賴軍を進め戰あらんには、其の時信盛裏切して信長の旗木へ俄に切り懸るべき旨を言ひ送りしかば、釣閑悦んで之を諜るとは知らず、勝賴に一戰を勸めける故、馬場美濃守信勝を始として、侍大將の軍評定して言ひける事共を勝賴悉く用ひずして、楯なしを誓つて進んで軍すべき、と決斷せられしかば、其後は諸大將諫むる事を得ざりけるとなり。

○内藤四郎左衛門返答の事

同じ時徳川家の先陣を下知せよとて信長の使来る。内藤四郎左衛門、我等が主君は、先陣の下知を他人に受くる者には候はず。内藤承りて返答仕りたりと申されよ、と荒らかに言ひて追つ返す。信長聞いて、徳川家良き士數を知らず、と言はれけり。

内藤を鳥井に作れるあり。然れども鳥井は三方ヶ原にて討死したれば、内藤の事なるべし。

○多田久藏が事

同じ軍に、甲斐の士一人生虜て信長の前に引き来る。蝶に緋曇子の下帯をしたり。信長名を問はるゝに、美濃の者多田久藏と名乗る。信長手を拍ちて、汝は伯父の葬禮の時火車を斬りたり、と聞けり。美濃尾張は我に親有る國なり、我に奉公せうとや思ふ。縛りたる縄を許せ、悪源太も搦られたり。弓箭取る躬の恥ならず、と言はれしかば、長谷川藤五郎傍に引き退け縄を解けば、多田脇なる鎗を奪ひ取り四五人突き伏する。長谷川其處にて首を切りて信長に出し云々なりと言へば、信長深く惜まれけり。

田の軍兵顧みて、大に勇氣抽けて終に敗北の因となりけるとなり。此夜討に天野惣次郎は指物を指さず、戸田半平は、道遠し夜明くる事も有らん、とて指物を持たせけるが、城を燒きたる火の光白日の如く、天野戸田先を爭ひけるに、戸田が銀の鍬形の指物輝き渡りて、人の目を驚しけり。信長後に酒井が功を賞して、汝は前に眼有るのみにも非ず、後にも眼有り、と言はれしかば、忠次忝き由申して、偖終に後を見たる事は無く候、と申しければ、信長笑ひて、前後の計遖はざる事を賞せんとて言ひ遣はしたりけり。

○長篠合戰の事

長篠にて信長の先陣と旗本との間に、堀切を構へ柵の木結ひて敵きて敗北すれば、武田の猛兵、敵は逃ぐると言うて追ひ來り、柵の木に行き惱みたる處を、數千の鐵炮雨の降るが如く打ち懸くれば、空彈無く中りて討たるゝ者數を知らず。引き退かんとすれば柵より出て附け慕ふ。戰を挑めば柵の中に入りて打ち臼ます。勝賴の士大將勇氣餘り有りと雖も、打ち破るべき樣なく、皆的になりて討死しけり。

の者共大に驚き、鳥居を引き連て勝頼に斬くと巾せば、大に怒りて城に向て磔にして殺されけり。長篠にて勝頼敗北して後、信長を始め鳥居が無雙の忠なる事を感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。

○酒井忠次鴟巣城を乗り取られし事

勝頼長篠の城を圍み攻むる事甚だ烈しかりしに、信長東照宮と共に後巻あり。軍評定の時酒井忠次進み出で、今夜傍道より長篠の附城鴟巣へ押寄せ攻め破らば、勝頼必ず敗北すべし、と申しも敢ぬに信長嘲笑ひ、汝は三河遠江の小競合には慣れつれど、大軍の計策は知らざりけり、と嘲られしかば、忠次言ふ可き詞無くて出でける所に、信長東照宮に囁き申されけるは、左衛門尉が申す處尤然るべし。又呼び出されよ、とて酒井が側近く居寄り、誠に山々しくも計りたる哉。然れども外に洩れ聞えんかと思ひて、わざと偽りて誹りたりき。疾く馳せ向うて鴟巣を攻め破り候へ、と言はれしかば、忠次承りて出でんとする時又引止め、同じくは信長が向ひ度き所なり。可惜武功を汝に譲りき、と申されける。忠次大に勇みて夜半計に思ひも寄らぬ所に押寄せて、武田兵庫頭信實、三枝勘解由、和田兵部を始として數多討ち取り、火を懸けたる煙を武

岩根を傳ひ川に入る。寄手素より大野川、瀧川の水底に縄を張て鳴子を懸たれば通る可きやうもなし。二人水練の達者にて川の淺瀬は能く知りつ。小脇指を抽きて川底を潜り、縄を切つて通りしかば、からくと鳴りけるを、番の兵共怪みけるに、其の中に一人、五月雨には斯る川をば鰹の通るならん、と言ひければさて止みぬ。二人は早瀧の下廣瀬と言ふ處に上り、かんほうが嶺にて烟を擧げ、十五日に岡崎に參りて、云々の由を申す處に、信長其日岡崎に著陣せらる。鳥居は、信昌尚心許無くや候はん、忍び得て城に入る事を得ば、早後卷候べき事審に申さん、とて引き返す。鈴木は信昌が父美作守貞能に告べし、と鳥居に別れけり。鳥居かんほうが嶺に上り相圖の烟三度擧げて後、篠原と言ふ所に行き忍び入らばやとするに、柵重々にふりて砂を撒き、出入の人の足跡を改めしかば、中々入るべき樣無くて躊躇ひけるを、穴山の手の者見附て怪みて遂に搦められけり。勝賴逍遙軒信綱を以て子細を問はるゝに、鳥居、事の由を有の儘に答へしかば、勝賴鳥居を呼びて、汝が命を救くべし。汝城際に往きて信長は上方の軍にて、此城の後卷思ひも寄らずと言はば城兵降參すべし。然らば汝に厚く賞せん、と言はれしかば、鳥居則ち心得候とて城門近く至り、後卷とて信長父子岡崎迄昨日旗を出され、先陣は一の宮に陣せり。德川殿御父子、野田まで御馬を出されたり。此の城運を開かん事掌の內に有り、と言ひければ、甲州

ば石川伯耆守數正城に入りて政房を拽し出す。牢中に年久しく有りて足痿えければ、筵に乗せて東照宮の御前に出す。多年石の牢に有りし艱厄言ふ可からず、とて御涙を流され、御手づから刀、脇差、黄金を與へらるゝに、政房牛膚れし事を口惜く思へる色現れしかば、人々、敵の虜となる事は小笠原が不義にして武田に降參せし故なれば、何方に遁れ出づ可きや。志は比類有るまじき事なれば、牛虜と成りぬる事中々譽となりたり、と口々に言ひけるが、猶も其の心に憤りけん、剃髪して肖空と稱せしが、仰によりて尾張の津島の湯に浴し、足の痿も癒えければ、遠州稗原の地を賜りしが、長久手の戰に討死しけるとぞ。

○鳥居強右衞門忠節の事

天正三年勝頼、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻る。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後巻の謀を廻し玉ふ處に、城中粮米既に盡きんとせしかば、此旨を告け奉らん爲、鳥居強右衞門勝商に命じて密に城を出す。鳥居脫れ出る事を得ば、向のかんほうが嶺に烟を擧ぐべし。三日過ぎて又彼の山に烟を兩度擧げなば、後巻無しと知り給ふべし。三度擧げなば後巻有る事を知り給へ、と約しければ、信昌鈴木金七郎を鳥居に添へて遣す。五月十四日の夜、城の西なる山の

に入りたるを、氏政の軍兵見て、夜叉羅刹とは是なる可し、とて恐れて近づく者も無し。氏政圍を解いて引退くを、謙信驚て門を開かせ給へ共、氏政一軍もせで引き退きけり。

○大河内政房節義の事

天正二年勝賴高天神の城を圍まんと師を出す。小笠原與八郎長忠、軍の目附大河内源三郎政房と相議して防ぎけり。東照宮後詰を信長に乞はせ給ふ。勝賴城の巽の嶺に陣し、大文字の旗を中村の内公文といふ所に立つる、後まで其地を大旗と稱す。兵粮竭き士辛疲るれば後巻を待ち兼ね、姉川の戰功を捨てさせ給ふ、と怒りて七月二日城を出て降參す。軍の目附大河内政房は、應政公の妾華陽院の甥なり。勝賴に降らざりしかば、小笠原生虜て石の牢に入れ置きたり。勝賴降らば本領に倍して當て行ふべし、と說かせけれども志を變ぜず。勝賴怒つて牢の口を鎖す。政房、此年より高天神落城に及ぶまで八年の間牢中に在り。甲斐の士横田甚五郎高天神に來りて在番せしが、大河内が節義を深く感じ、殊に懇に勞したり。斯くて東照宮高天神を攻めさせ給ひて、天正九年三月二十二日の夜、城の守將岡部丹後眞幸、横田甚五郎尹松、相木市兵衛昌朝已下切つて出で、岡部は討死し、横田、相木は切り脫て甲府に落ち行きけり。城落ちけれ

しなり。

又一說、永祿五年九月參河の八幡にて、今川氏眞と三河の軍戰有りて利非ず、二手に分れて引き退く。敵急に追駈くる。半藏守綱、石川新九郎返し合せ三度鎗を合す。後には半藏一人十度に及びて小返しして又三度鎗を合す。矢田作十郎足を痛み引き兼ねたるを、半藏肩に引き掛けて退きけり。之より鎗半藏と人に言はれしと言へり。半藏、弟を半十郎政綱と言ふ。後新五左衞門と言ふ。三方ヶ原の軍に草鞋の緒の解けたるを下に居て結びけるを、半藏急け共心靜に結びて引き取れり。兄の半藏聞ゆる剛の者なるが、半十郎が如き志太き者は遂に見ず、と常に語りけるとぞ。

○謙信單騎佐野城に入られし事

天正二年北條氏政、三萬の兵をもて佐野政綱を圍まるゝと聞きて、謙信八千許の兵を率ゐ後詰せられけり。城危しと聞えければ、謙信、後卷は我に劣らぬ士大將數多有れば心易し。佐野の城こそ覺束なけれ。先我は城に駈け入りて力を添へなん、とて物具も著けず、黑き木綿の胴服を打冠ぶり、十文字の鎗を横たへ、僅に十三騎引き具し、氏政の陣の前を馬を靜に步ませ、佐野の城

郎右衛門は早退きたるぞ、と言ひて久藏を引き立て馬に打乗せ、艫て七郎右衛門に走り著きたり。七郎右衛門には兵藤彌惣と犬若といふ小者と三人打連れて、細道の崖を引き退きし處に、跡より退き來る者七郎右衛門を突き落す。二人も續いて飛びける所に、犬若揚羽の蝶の指物を持ちたるを投棄てたるを、敵見て之を取らんとする所を、彌惣走り懸り掻攫ぐり奪らんとすれば、敵彌惣を一刀切りたりけるに、七郎右衛門取つて返して敵三人討ち取つたり。東照宮、剛將の下に弱兵なし、と忠世を御賞美ありけり。

○渡邊守綱を鎗半藏といふ事

東照宮と武田の兵と大天龍にての戰に、近藤傳次郎手負ひて渡邊半藏守綱を見かけ、手負ひたるぞ連れて退けよ、と言ふ。心得たり、とて手に提げたる首を投棄てて、傳次郎を肩に掛け、三里餘引き退きて救けければ、東照宮聞し召し、味方一騎討たるれば敵千騎の強みと言ふ事あり。味方を救けたるは七度の鎗を合せたるよりも勝れり。今より後鎗半藏と言ふ可し、と仰あり。後に半藏人に語りて曰く、傳次郎を余なればこそ救けたれ。何として退け遂すべき。斯る時は大方救くる體に遇し、刺し殺して棄てらるべし。味方なればとて賴みにはならぬ者よ、と言ひ

○東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事

天正二年四月、東照宮天野宮内左衛門景貫が大井の城を攻めさせ給ふ時、霖雨にて兵粮運送の便宜からず。三倉の砦に引き取らせ給ふ處を、天野討つて出で附け慕ふ。高山光明の城々よりも出合ひ、田野大窪の鄕民も相加はり、此處彼處より鐵炮を打ち懸け、聲を擧げて攻懸る。後殿の人々數多討たれしを知し召さず。東照宮三倉にて聞し召し引き返させ給へば、早や敵引取りたり。玉井善太郎後殿しけるが、股を鐵炮にて打たせ、御後を慕ひて三倉に參りければ、手負ひたるか。後に鐵炮の音せしを怪しく思ひしに軍有りけるよ。此馬に乘れ、と仰せられ、御馬より下りさせ給ひけり。人々君の士を勞はらせ給ふに感ぜざる者なし。大久保七郎右衛門忠世が同心杉浦久藏一說、惣左衛門久勝に作る深手負ひたりしに、七郎右衛門馬より飛び下り、是に乘りて引き退け、といふ。久藏空けたる馬の下り所かな。我如き者は如何斗討たれたり共何事か有らん。大將たる人の馬離する物かは。八幡も照覽あれ、乘るまじい、と言へば、七郎右衛門禮儀も所に依るぞ疾く〳〵、と言へば、久藏、余此馬に乘りて生き、大將を捨殺しては如何せん、とて乘らざれば、七郎右衛門、否ならば馬を棄つるよ、と言ひ捨てて行かんとする處に、小玉甚內一說石上兎角馳來り、七

父子は外廓に在り。信昌信玄の死したる事を祕せるを悟り居し處に、東照宮より本多豐後守廣孝を以て歸降の事を勸め給ふ。信昌父と大父とに勸めて密約をなす。武田家奥平に人質を出せよ、と下知せらる。貞能如何にもすべき謀無くて、鹿子千丸十三歳になりけるを、黒屋甚九郎を添へて出しけり。東照宮を不意に襲ひ打つべき謀を家臣を以て告げ奉る。武田にも是を怪み、土屋右衛門貞村黒瀬に在りけるが、使を以て貞能を呼び寄せ、勝頼の檢使城所道壽も出向ひ、二心ある由聞ゆる處に、疾くも來られけるよ。神妙にこそ、と詞を掛くる。貞能、斯る時には父子の間も疑ひ思ふ事世の習なり。然れ共愛子にて候千丸を人質に出し候へば、何の子細の有べきや、と駭く色無ければ、いざ碁を打たん、と言ふ。貞能心靜に碁を打ち終り、暇乞して門外に出づるを、道壽又呼び戻し湯漬飯を出す。貞能之を食する暇に、道壽士を門外に出し、待ち居たる貞能が士に向ひて、主人叛逆顯れ、唯今討たれし由を言はせけれ共、奥平六兵衛打笑ひて更に駭く色無し。之れは貞能素より武田方にて如何なる事を言ふ共、吾首を見ざる中は驚く事勿れ、と固く言ひ含めし故なりけり。斯く謀り澄して、貞能馳せ歸り、其夜一旅打具して退散し、岩崎に赴きければ、松平主殿助伊忠、本多豐後守廣孝等、東照宮の仰を奉り出で迎ひて瀧山に引取りけり。

ん。今此馬得べしとは思ひも寄らざりき、と且は悦び且は恨む。妻仰の旨理にてこそ候へ。然り乍ら之は妾此御家に参りし時、父此鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ、世の常の事に努々用ふ可からず。汝が夫の一大事と有らん時に進せよ、と戒め給ひ候き。然れば家の貧しきも世の常なれば堪忍びても過ぎぬべし。誠に今度京にて馬揃有る可しと承れば、此事天下の見物なり、君も又仕への始なり。良い馬召して見参せさせ申さんと存じ候てこそ奉れ、と言ふ。一豊悦ぶ事限りなく、頓て其馬求めてけり。程無く京にて馬揃有りし時打乗りて出しかば、信長大に驚き、天晴馬や、とて事の由を聞き給ひ、東國第一の馬遙に我方に牽きて來りしを、空しく歸さんは口惜き事ぞとよ。夫に年比山内は久しく浪人して有りしと聞く。家も貧しからんに求め得たるは、信長が家の恥を雪ぎたる上、弓箭取る身の窘是に過ぎたる事や有る、と感じて、是より次第に用ひられしとぞ。

○奥平貞能父子歸降の事

天正元年三河作手筑手の城主奥平監物貞勝入道道文、其子美作守貞能、孫九八郎信昌皆勇氣逞き人にて有りしに、近頃道文は武田家に心を寄せ、勝賴の士大將甘利の作手の本丸に置き、奥平

を水涯に駐めて、昔の梶原佐々木も鬼神にてはよも在らじ、と言はるゝ處に、武者一騎川へ打入りたるを見て、梶川彌三郎高盛なるべし。梶川討たすな渉せ、と下知して、夫より我先にと打入りて渡しけり。此の戰の前に信長黒の馬を梶川に與へらる。其の時信長、梶川が志重ねての軍に眞先駈けんずる者なり、とあざ笑ひて言はれしが、果して其の詞に違はざりけり。

○山内一豊馬を買はれし事

山内土佐守一豊其始織田家に仕へたりけり。東國第一の駿馬なりとて、安土に牽き來りて商ふ者あり。織田家の士是を見るに、誠に無雙の駿足なれど、價餘に貴し、とて求むべき人無く、徒に牽きて歸らんとす。一豊其の比は猪右衛門と言ひしが、此の馬望みに堪へ兼ねたれ共、如何にも叶ふ可からざれば家に歸り、身貧き程口惜き事は無し。一豊奉公の初に天晴斯る馬に乘りて、家形の前に打出づべき物を、と獨言しければ、妻熟々と聞きて、其價は如何許にて候か、と問ふ。黄金十兩とこそ言ひつれ、と答ふ。妻聞きて、然程に思ひ給はんには、其馬求め給へ。其料をば進す可し、とて鏡の奩の底より取り出して、一豊が前に差し置きたり。一豊大に驚き、此年比身貧しくて苦しき事のみ多かりしに、此の金有りとも知らせ給はず。心強くも包み給ひけ

中川瀬兵衛重秀、此時は荒木村重に屬したりけるが、此の札を打見筆執りて、和田が名に點を掛け、自ら姓名を記し家に歸り、妻に向ひ事の由を語りて、萬一生て歸りなば又こそ見參すべけれ、と言ひしに、妻聊か患ふる色無く、然らば軍の門出祝ひ給へ、とて羹進め酒取り出したり。其の夜子の刻許に、伊賀守が首取つて來りけり。村重大に驚き、如何で斯く手易う和田をば討ち得たるぞ、と言ふ。重秀、然ん候。明日必ず戰を決すべし。然れば討たるゝ者少かるべからず。同じく死なん命を此夜の中に捨てなんには、和田が首取り得つべし。敵も明日の合戰を大事に思ひ淀河の淺深を踏み見んに、惟政然る大將なり、物見を賴む可からず。自ら來らんは必定なり、天晴討ち取らんず物を。若し又討死せば多くの敵の中に入りて、大將の首取らんとて討死したりと人言はん。去ば武名は朽ちじと思ひ定め、水を涉り彼方の岸の柳陰に伏し隱れて待つ。案の如く和田二陣に控へて出で來るを紛れ入り、終に討ち取りて、水中に飛び入り遁れ得て歸りぬ、と申しければ、人々感じ合へる事大方ならず。

○梶川彌三郎槇島先陣の事

天正元年信長靈陽院殿を宇治の槇島の城に攻むる時、折しも雨降りて川水岸を浸せり。信長馬

常山紀談　卷之四

○山崎長門守詫美越前守討死の事

天正元年江北の軍に朝倉敗れしかば、信長の兵追ふ事急なり。朝倉が士大將山崎長門守、詫美越前守柳瀬にて踏み止り支へけるに、勵まされて返し合せて討死する者多し。山崎も大軍の中に駈入りて討たれけり。詫美矢立の硯取り出し、詩一首書きて、落ち行く者に賴みて故鄕に返しけり。

萬恨千悲有二驀然一誰識今夜入二黃泉一故園更莫レ灑二愁涙一屍暴二戰場一唯是天

斯くて散々に戰ひて討死しける。其の間に義景遁れ得て、越府に引き取れり。

○中川重秀和田惟政を擊つ事

天正元年將軍義昭、織田信長と不和の事出來て、和田伊賀守惟政、將軍の味方して攝津の國に陣す。信長和田を始として、誰某が首取りたらん者には云々賞す可し、と書記して札を立てられたり。

康定、松平彌九郎景忠、平岩七之助親吉、大久保忠隣、菅沼定吉、都築惣左衛門秀綱等なり。都築が妻粥を持せ來りて御供の人々に配り與ふ。後に衣服を賜りて賞美あり。今日敵の跡を踏んで戰はば勝つべきに、味方早り過ぎて心ならず敗軍しぬ。口惜き事なり、と仰せ有り。湯漬飯を侍女久野奉りければ、三度換へ給ひ、我疲れたり、とて御枕を傾ぶけられ、鮮かきて御睡りあり。山縣城近く攻め寄せ、門の扉をたつるに暇なしと覺えたり。如何に攻め入らばや、といふを、馬場美濃守聞きて、打負けて引取りたれば、門を閉ぢ橋をも引く可きに、左は無くて篝火白日の如し。若し謀ある可きか、輕々しく攻め入る可からず。德川殿は海道一の弓取りなり。好く見屆けてこそ、とて猶豫しける處に、城中より鳥居彦右衛門、渡邊半藏、同半十郎、櫻井莊之助、勝屋甚五兵衛を始めとして、屈竟の剛の者共百餘人突いて出でしかば、甲斐の兵虎口を引き退きて攻めざりけり。

三方ケ原の軍に甲斐の兵激しく追ひ駈けたりしかば、東照宮幾度と無く御馬を返し給ふ。大久保五郎右衛門忠次手負ひて歩立になりしが、菅沼藤蔵定吉に詞を掛くれば、忠次を馬の前輪に乗らせて退たりけり。後に菅沼に長光の刀を賜はりて賞せさせ給ふ。菅沼又引き返して追ひ来る敵を防ぎけり。天野康景、長坂源次郎、坂部久十郎等も踏み止まりて防ぎ戦ふ。大久保相摸守忠隣十郎此時新馬を射られ、歩立に成りて危かりしを御覧じて、小栗忠蔵久次門と稱すに、新十郎若武者なり彼れ助けよ、と仰せられしかば、久次己が馬に忠隣を抱乗せて引き退く。敵透間無く追詰め奉りける武者有りけるを、野中三五郎重次返し合せて討取りければ、後に信國の刀を賜りぬ。畔柳助九郎御馬の側を離ねば、後に金の扇を賜りて賞せさせけり。猶敵手繁く追詰め奉りけるに、水野太郎作踏み止りて防ぎ戦ふを御覧じて、又御馬を引き返さる。成瀬吉右衛門正一は、兄が最後に汝は此邊の案内好く知れり。御供して恙なく引き取らせ奉るべき由云ひたりしかば、御側に附き奉りしが引き返して敵を追ひ退け、終に濱松の城に入らせ給ふ。鳥居彦右衛門元忠に御下知ありて、玄默口の御門を開きて引取る兵を入らせらる。假令敵慕ひ来るとも我籠る城に手易く討ち入るべきや。門を閉ぢずして篝火を所々に焚くべし、と仰せらる。此日は天曇り雪散りて寒氣殊に甚し。御供して馬より下り立ち、城中に入りし人は松平八郎三郎、

なり。信玄の慮淺からず、とて夜討はせざりけり。後に聞くに、其夜信玄の士卒一人も睡れる者無かりしとも言へり。

夜明けて信玄兵を返して、おさかべに越年あり。是れ元龜元年十二月二十二日遠州三方ヶ原の合戰なり。

○三方ヶ原合戰信玄遠謀の事

三方ヶ原の軍終りて、皆濱松の城を攻めんと言ひけるに、信玄、勝て胄の緒をしむると言ふ言有り、とて軍を返されけり。此時信長は、白須賀に毛利河内守、山中に瀧川伊豫守、吉田に稻葉伊豫守、其兵二萬餘にて置かれたり。若し信玄勝に乘りて引取らずば、信長二萬五千を率ゐて押寄せ、毛利瀧川等も思ひも寄らぬ所に打つて懸る程ならば、必ず濱松よりも切つて出で、中に取込めて軍せん、と吉田より岐阜まで一里に一人の忍の者を置いて待たれけるに、信玄引き返されしによりて、信長の謀空しくなりぬ。

○三方ヶ原合戰東照宮御退口の事

り。

水野左近大夫も引退り支へけれ共、敵猶競ひ懸れば又御馬を引返させ給ふ。成瀬吉右衛門、日下部兵右衛門、小栗忠蔵、鳥田治兵衛歩立にて御供し、敵六七騎進み來るを、成瀬一騎切つて落し、御馬を返させ給へば、六騎は追ひ留りぬ。大久保新十郎忠國御馬の側を離れ奉らず、大久保七郎右衛門忠世さいがかけの邊に御旗を押立て、敗軍の味方を集むる。其隙に濱松に引き取らせ給ひけり。敵城近く押寄すれば、鳥居彦右衛門元忠玄默口より討つて出で相戰ふ。渡邊半藏兄弟、勝屋甚五兵衛、櫻井庄之介名乘り掛けて鎗を入れ、敵五人討取り押懸る敵を追ひ拂ふ。石川伯耆守と大久保七郎右衛門と相謀り、鐵炮をつるべ放に打ちたてさすれば、詰め寄せたる敵も皆引き返す。味方疲果てけるに、天野三郎兵衛、大久保七郎右衛門と心を合せ、敗軍の中を求めて鐵炮只十六挺有りしを引き具し、信玄の陣さいがかけに向ひて打ち掛けしかば、甲斐の軍夜合戰に懸るかと周章て、暗さは暗し案内は知らず、さいがかけへ落つる者其數を知らず。

又一說、其の夜酒井左衛門尉忠次、今夜武田の軍兵疲れたらんは必定なり、夜討せん、とて忍を出し、信玄の陣屋の樣を見せけるに、爰には何色の旗の紋あり、彼處には此色の旗を立てたり、と言ひけるを忠次聞きて、疲れたる兵を後陣に引き退け、後陣を先に繰り換へたる

も言へり。是より前三河一向宗一揆の時、彼宗門を信ずる人々弊々と相集り、櫻井の松平監物、上野の酒井將監、大草の松平七郎も黨しけり。中にも夏目次郎左衞門は一族も多かりけるが、彼宗門に徒黨して己が知行所に要害を構へ楯籠りしを、松平主殿助伊忠不意に押寄せ、木戸を打破り攻め入りしかば、夏目防ぎかね窮藏の中に隱れ入りたるを、殺すは籠の中の鳥を殺すに似たり。救けてこそ、と仰せ有り。主殿、討殺して後申すべき物を、と言ひ乍人數を引き取りぬ。夏目岡崎の方を伏拜み、斯る仁愛深き殿に楯つきし事の悔さよ、とて其の日より宗門の本尊の前に至りて、殿の御爲に命を捨させ給はれと祈りけるが、果して義死を遂げにけり。又一說に、夏目大津半右衞門、同伊織乙部八兵衞等六千餘箱田郡野田の古城に楯籠りけるに、深溝の城より松平主殿助伊忠是を攻る。乙部は固より一向宗に非ざれ共、夏目と無二の知音たる故同じく籠りしが、遂に許す可からざる事を察し、夏目を助けん爲に久留善四郎と相謀り、伊忠に內通し、寄手を引き入れしかば、半右衞門は針崎へ落ち行き、夏目は藏の中に隱れしを、乙部、夏目を助け候へ、と伊忠に乞ふ。乙部が朋友を捨てざる事を伊忠感じ、夏目も亦武功有りし者故、藏を取巻きて此旨を歎き申しければ御赦ありけり。夏目愚にして一揆に黨せし事を後悔し、藏より出でて伊忠に降參しけるとも言へ

旗本を率て切つて懸らせ給へば、遠江の山家三方小山田追ひ立てられ敗れけり。申の刻より軍始りて、夜更くる迄の軍に、衆寡支へ難くて崩れ立ちしに、柚原は東の方西島に向ひて引き退く。信長の侍大將平手汎秀は、いなといふ所にて返し合せ討死す。鳥居四郎左衞門を始として、河澄源五郎、長谷川紀伊守、加藤二郎九郎等逞兵三百餘人討たれ、敵頻に追ひ來る。本多肥後守忠眞後殿して、敵近附かば取つて返し遂に討死す。甲斐の士大將秋山伯耆守晴近透間なく追ひ駈け來り、御馬廻殘り靜くなりしかば、東照宮御馬を引き返させられし時、夏目次郎左衞門吉信、此處は御討死の時にては候はず、と申して、御馬の口を濱松の方へ引向け、鎗を取直し、御馬のさんづを疊みかけて叩きければ、御馬駈け出しぬ。夏目踏み止り、多勢に取卷かれ、鎗の柄の折るゝ計に戰ひて討死す。

夏目は濱松の御留守なりしが、矢倉より軍の樣を見て急ぎ馳せ參り、疾く御城に歸らせ給へと申せ共、吾城下に於て打負けなば、命生きて何にかせん、とて御馬副の者に口を放せと仰せられしを、吉信、御馬の口な放しそ、と固く下知し馬より飛び下り、御諚を賜り候へ。討死仕るべし、とて御馬に附きたる畔柳助九郎に下知して、御馬を御城の方に引向けさせ、鎗の柄にて御馬のさんづを叩き、取つて返し十文字の鎗にて追ひ來る敵を支へて討死しけると

鳥居も一處に有り。二騎先駈けて二萬餘の敵に馳せ向ふ。鳥居冑首三つ取りて、成瀬も首三つ取りて行會ひ、共に打笑ひて首をば抛捨て、又駈け向ふ。鳥居又首取りて成瀬を問へば、只今山縣が陣に駈け入りて討死し、敵其首を取りたり、と言ふ聞きて、成瀬に先立たれしよ。汝は疾く歸りて朋輩に語り候へ、と從者に言ひ捨て、信玄の旗本を指して駈け入らんとせしを、土屋右衞門が手の者共取り圍みけり。鳥居は勝て逞しき剛の者にて、三尺餘りの野太刀を打ち振り、死狂に切つて廻る。土屋が冑を破れよ砕けよと斬たりけるに、目眩みて馬より落つる。多兵四方より鎗ずくめにして鳥居を討ち取りたり。敵も味方もおしなべて惜み合へり。

渡邊半藏守綱も物見して馳せ歸り、是も味方中々危く候。先陣を呼び返させ給へ、と申す。然れ共壯士等勇み懸りて、柴田七九郎、大久保治右衞門進み行くを、半藏ひらに止れと言へ共聞き入れず。甲斐の先陣小山田に向ひて足輕をかくる。軍始りて先陣亂れ足になりければ、石川伯耆守數正馬より下り立ち鎗を提げ、一足も引くまじ、と呼はり、一陣の士卒各折敷きて鎗ぶすまを作り待ちかけたり。甲斐の兵競ひ懸るを、近々と引き受け、一同に立ち上り、ゑい〳〵と聲を上けて追ひ返す。外山小作一番鎗を合せたり。日暮れければ甲斐の大軍進み懸る。東照宮御

は如何に申し候とも、今日の御合戦は然る可からず。敵は大軍なり、先陣に使を遣り兵を上けさせ給へ。若し是非御一戦とならば、敵ほつたの郷へ押行かん處を慕ひて懸らせ給へ、と申す。東照宮聞召し、汝は川にも立つべき者と思ひて、今日の物見に遣りたるに、何とて後れたるや。目前に敵をゑめ〳〵と通しては生甲斐も無し、と怒らせ給ふ。四郎左衞門承り、目の明きたる故にこそ、勝敗の利害をば見極めて申し候へ。御敗軍を知し召し、御懸りあらんは殿の御心の儘なる可きなり。勝敗の道を知ぬ人こそ後者よ、と以ての外に罵り、其處をつと乗り出す。成瀬藤蔵を尋ねけるに、功名したりと聞き、即晴なる討死したりけり。

三方ヶ原の前夜手分を定められし時、成瀬と鳥居と先後を爭ふ事有りて、既に刺違へて死すべき色顯れしを、傍の人々押止めたるに、鳥居成瀬に向ひて、明日信玄と一戦有る可きなり。織田家の援兵も來りぬ。士は一人も大切の時なるに、私の爭論して死なんは不忠ならずや。二人共犬死して殿に損かけ奉らんより、明日の軍に功名比べして討死せんは如何に。成瀬莞爾と笑ひ、いしくも申されたる哉。我も左こそ思へ、明日討死せん。いざ、とて酒汲み交し深更に及べり。東照宮之を知らせ給はで、成瀬は信長の加勢の目附としてあら井本坂に向ふべし。鳥居は濱松先陣の目附せよ、とぞ仰せられける。二人は必死を期したれば、

長常に怠る者を大ぬる山とて笑はれしとぞ。

○長野信濃守上野國箕輪城を守る事

上杉の舊臣上野の長野信濃守業正は、在五中將業平の後胤なりと言へり。世々上野箕輪に在り。此の城は大名明神の山の尾崎を採りて城の廓とす。廓の形箕の手に似たりとて箕輪といふ。上杉家衰へけれ共獨立して武威を振ひ、信玄に屬せず。信玄之を攻むる事五年、終に一度も後を取らず、病の後二年を經て落城すと言へり。

○三方ケ原合戰の事

元龜三年信玄參河遠江に軍を出し、二股の城を取卷き水の手を取り切りければ、中根平左衞門力の限り支へけれ共、竟にかなはで城落ちたりけり。信玄夫より三方ケ原に軍を進む。濱松には織田家の加勢も有り、と信玄聞いて遙々來りて、容戰はすまじきとて押を置くべきや、と言ふ處に、三河武者城を押出すと聞えければ、一戰に及ぶべし、と備配り有り。濱松の軍兵日既に暮なんとすれ共、勇み懸りて一軍すべし、と口々に申す。鳥居四郎右衞門物見して乘り歸り、人々

が、又金松彌五左衛門をも出されけり。猪子馬に白泡噛せて馳せ歸り、敵は引き退き候、と言ひも果てぬに金松乘歸り、敵押寄せ候、と言ひ捨てて、又先陣に行いて鎗を合せたり。信長後に二人を呼びて、汝等見し所は如何に、と問はるゝに、猪子、敵は荷着けたる馬を遙に遠く引退け候程に、引き退くと見て候、と申す。金松、承り見る處は猪子に同じく候。然共軍を志候長政、故無くして空しく退く可きや。押寄せて戰はん爲と存じ候ひき、と申せしかば、信長大に賞められけり。

○信長公朝倉を擊ち給ひし事

信長越前に攻め入りし時、朝倉義景二萬許の兵にて刀根山と言ふ大山に陣取り、麓に信長の先陣控へ居たり。或日信長井樓に上り敵を見渡し、敵は今夜必ず引き退くべし。先陣の者共勿怠そ、と使を度々遣りて下知せらる。是れを聞きて、殿は如何で斯くは仰せ候やらん。敵大軍にて山に據り地の利を得て且主戰なれば、何條引き退くべき、と怪みけり。夜に入りても信長は猶井樓に在りて、敵陣を睨んで目も離さずして有りしが、丑の刻許に、すはや敵は引くぞ、と言ふ程こそあれ、螺吹き立てさせ馬に乘り、先陣の大ぬる山の奴僕が油斷したるに、旗本の者共功名せよ、とて眞一文字に進まれしが、果して先陣は後れて信長の旗本にて勝利を得られけり。信

れば、今一度詮議して賜り候へ。證據け淺見藤右衛門に問はれなば、實否正しかる可し、と訟たり。淺見を安土より呼れけり。淺見は生瀨と久しき友なり。三井とは日比中好からず、不通なれば、疑も無く三井が僞に定るべし。三井惑亂して淺見を證人にしたり、と誹り笑ふ人多し。偖て聚樂の廣間に奉行列坐して、雀部淡路守をもて尋ね問る。淺見承り、生瀨は年比の知音なり。三井とは不通にて候。是非世の人の評せん事も迷惑なり。他人に仰せ附けられよ、と懇に辭し申す。中好からぬ三井が虛妄を言ふに、心快からぬは理なれ共、證人に引きたる上は疾く申せ、と勸められ共猶辭し申す。秀次聞きて、重ねて辭す可からず、とありければ、其時淺見、今は已事を得ず候。武義の論少も詐僞候まじ。坂井が首は三井が取りたるに紛なく、又其働も比類少く候。生瀨は何と存過ちたるにや、と言ひければ、一坐駭きて兎角言ふ人無く、之によりて三井を赦して賞せらる。生瀨は秀次に寵せらるゝの故に罪に及ばず。右近は信長の大將なり、三井、生瀨は朝倉、淺井兩家の士なり。淺見は後京極高次に仕へて、大津の城にて武名を顯しけり。

○金松彌五左衞門物見の事

信長淺井長政を討つ時、長政が木造の陣俄に騷ぐ體の見えしかば、猪子兵助を物見に遣れける

せしか共、畠の中なりし故認められず候、と申しければ、六人共信長感狀を與へらる。

○姉川合戰榊原二の手功名の事

姉川にて酒井左衞門尉忠次先陣たり。二陣は榊原康政なり。酒井を始め小笠原與八郎菅沼新八郎奥平等川を渉りて懸りけるに、岸高く上り兼たる處に、榊原眞一文字に進んで、上り難き岸を、無二無三に押上けよと、ゑいとう〳〵と言ひて押上り、酒井が先に進まんとするを見て、酒井が兵後れては無念なり、と競ひ懸りて利を得たり。東照宮、榊原が二の手の仕方以來の手本なり。二の手は斯くの如く仕度くこそ、と仰有りけり。

○三井角右衞門生瀨平右衞門功名穿鑿の事

姉川の戰に坂井右近が子久藏十六歲にて討死す。久藏は十二の時信長始て京に入りし比、近江北郡にて鎗を合せたる剛の者なり。三井角右衞門、生瀨平右衞門二人共久藏が首を得たりと言ふ。二人後闕白秀次に仕へければ此事沙汰ありて、三井が僞なりとて、廣部屋に押籠め置きて罪に行れんとす。三井、命を惜むに非ず、人の功名を盜みたる惡名の子孫の恥とならん事口惜け

紹恩を呼び寄せ、六千の兵を二陣として、千栗の渡に備へて川を渡る。隆信は謀りて敵の引退かん所を不意に撃たんと謀りしに、大友の設け有る事を聞きて追はざりしとなり。

○信長公東照宮に爲朝の鏃を進らせられし事

元龜元年六月信長朝倉を討つて龍が鼻に陣す。東照宮援兵の爲、二十四日江北に御着陣、評定の時、信長鎗を持ち出て、此の鎗は鎭西八郎の鏃なり。德川殿は源氏なれば進せ候。明日の軍に勝利候、と言はれけり。今の虎の皮投鞘の御鎗是なり。

○姉川合戰の事

姉川の軍に信長は、龍が鼻山を左にして淺井長政に向はる。東照宮は龍が鼻を右にして朝倉が二萬餘に向はせ給ふ時、小笠原與八郎氏助二千許先陣に進んで川を涉る。氏助が兵伏木久內、中山是非之助、吉原又兵衞、林平六、伊達與兵衞門、奈左近右衞門、渡邊金大夫照、七人鎗を合する中にも、渡邊は朱の傘に金の短册十八附たる指物を差し堤の上を進む。信長見て其夜召し出して、天下の鎗なりといふ感狀に貞宗の刀を添へて與へらる。殘る六人の者共憤りて、各猶進んで鉾を合

近き百姓老若男女をいはず駈り催し、手々に竹竿を持たせ大軍の體にもてなし、遂に氏家を攻ち破りしかば安藤等も亦龍興に降參し、丸毛父子に祿を增し感狀を與へられけり。

○馬場美濃守今川の館を燒く事

信玄駿河に攻入る時、朝比奈兵衞を始として軍する者無く、今川氏眞落ちられしかば、信玄疾く今川の館に馳せ行きて、名物の寶物ども奪ひ取り來れ、と下知せらる。馬場美濃守氏房聞きも敢ず、唯一騎鞭に鎧を合せて館に駈け入り、火を掛けて燒き拂ひけり。是れ寶物ども奪ひ取りて、貪慾の師なりと嘲られん事を慮りたるなるべし。

○大友義鎭肥前國退口の事

元龜元年の春大友左衞門督義鎭、肥前の龍造寺山城降信を討つ。降信和を乞ひしかば、大友兵を加へず。肥前と筑後の堺に千栗と言へる大川あり。吉岡下總入道宗觀と言ふ者、龍造寺は大敵なり勝負も分れず、故無く和を乞ひしは謀有るべし。千栗を渡らん事手易からじ、と言へば、義鎭も尤なりとて、豐後の留守に置きたる佐伯紀伊守惟教、其の子彈正少弼惟眞、田原近江入道

きて、百人許を菩提の徑より敵の後へ廻らせ、自四百許を以て、敵の怠るを夜討にしたりけり。徑よりの兵も馳せ來り、思ひも寄らぬ所より関の聲を擧げしかば、龍興、内通の者有るよと思ひ、周章てて岐阜に引き返す。長政大垣の邊所々に火を懸けさせければ、龍興、敵勝に乗りて大垣を攻むるならん。いざ援けよ、と岐阜を出でしかば、長政驕て引き返す時、足輕の物に慣れたるを三十人樽井の土民の家に隱したり。龍興樽井に入りて士卒も疲れしかば、兵粮つかうて怠りける時、隱したる足輕共、所々に火を掛けて焼き立つる。長政思ひも寄らぬ所へ押寄せ散々に討ち破り、驕て南宮山に登りて敵を待つ。龍興二度まで敗北し、口惜く思ひて、四面を取り巻きて剩さず討たん、と押寄せたり。長政見て、敵は大軍なり、十死一生の戰とは是なるべし。我下知なき内は箭の一筋も射る可からず、と言ひて攻め懸るを待ちて、山の上より一文字に切つて懸れば、龍興大に敗軍し、是れより長政を恐れて復軍する事無かりけり。

○丸毛兵庫助軍配の事

丸毛兵庫助長住其の子三郎兵衛長隆、龍興に奉公して、美濃の多藝郡大塚の城に在り。安藤伊賀守氏家常陸介龍興に叛きて大塚に押寄する。兵庫父子三百許大塚より一里餘出でて陣し、城

太田三樂が内に太田下野と言ふ士好く人を識る。其詞違はざりしかば、三樂、如何なる故ぞ、と問ふ。下野、別の子細も候はず。例へば連歌する者の古歌を覺え候は、我連歌の益にせんとなり。士の功名を志す者も又然なり。其の人々の嗜み好む所によりて察し候へば、十に八九は違ひ候はぬものなり、とぞ答へける。

○北條丹後指物の事

北條丹後、一尺四方の白絲に黒き蟻を繪に書きて指物にしけるを、謙信見て、汝が指物あまりに小きは如何なる子細ぞ、と問はるゝに、丹後誠に味方よりは見え難く候べし。さはあれ共進むに先駈けし、退くに旬度後殿せんには、他人の大なる指物も、此の小四半と敵の見る所は同じからんと存ずるなり、と申すをば、謙信、理なり、と言はれしとぞ。

○淺井長政齋藤龍興と軍の事

淺井備前守長政、玉瀧川を限りて齋藤龍興と軍す。或時長政五百許の兵を選り、關原野上の宿に火を懸け、樽井の前なる小川に、柵の木結ひて待ちかけたり。龍興一萬許にて出づると長政聞

敵白らむ故兩人又退く。斯くする事數度に及べり。斯くて左右沼にて一騎討の地になりて、此處ぞ良き所、と言ふ程こそあれ、高木踏留り、先駈たる敵を突き伏すれば、村越大音あげ、其首取れ、と言ふ儘に敵一人射倒す。敵ひるむ所を高木勇み進んで又一人突き伏せければ、村越も又一人射倒して、夫より追はざれば心靜に引取りけり。

清秀は水野下野守信元に屬せし時、三州苅屋の戰に度々功名有りしが、後德川家に仕ふ。水野に屬せし時、石が瀨と言ふ所にて、三河の兵と鎗を合する事一日に七度、石川伯耆守十七歳にて內記と言ひしが、互に名告りて鎗を合せ相引にしたりけり。長久手の軍には、清秀內藤四郎左衞門武者奉行たりき。清秀老年の後關が原の時隱居せしが、野州小山へ參りければ、度々の功名を仰せられ、台德院殿錦の御羽折を賜はりけるとぞ。戰國の時も一日に數度の鎗は罕なる事なり。高天神小笠原與八郎が士林平六郎、遠州豆大寺にて六度鎗を合せ、信玄伊豆薙山を放火し、山縣を押に置かれしに、城兵打つて出で引取り口に、三河の浪人河村傳兵衞白四方に船の字の指物にて敵を追散し、鎗を合する事一日に六度といへり

○太田下野識鑒の事

田家の刑罰仁者の道に非ず。其の暴逆終を令せざる事理なり。

○大久保忠隣功名の事

永祿十二年今川氏眞、遠州掛川の城没落の時、天王山にての合戰に、大久保治右衞門忠佐敵を突伏せ、甥の新十郎忠隣に、其の首取りて汝が功名にせよ、と呼はりければ、忠隣十七歳なるが、人の吳たる首何にかすべき、とて敵の中に駈け入りて首を取る。三方原にて諸軍散亂して東照宮に附き奉る人少かりしに、御側を離れず、後は歩立にて御供しけるを、小栗忠藏敵の馬を捕り來りて、夫に乘れ、と仰有りて、其の馬に乘りて御供申しけり。後に相摸守と申せしは此人なり。

○高木主水村越與三右衞門後殿の事

遠州にての事なりしが、何れの時の軍にや、東照宮の御内に、高木主水清秀、村越與三右衞門とて聞ゆる兵二人、味方に離れ細路を靜々と引き退く處に、敵十騎許追ひ來る。高木鎗おつ把り直し、一足も引くまじきぞ、と呼る。村越弓に箭を交ひ鎗脇を射ん。心強く鎗をせよ、と言ひければ、

天正四年十一月廿五日三瀦にて弑しけり。具房は信雄の養父なれば河内に押籠めて置きけるが、天正十六年に死去す。其の元祖親房卿より具房に至て十世に及ぶとなん。具教の弟南都東門院の住僧なりけるが、具教弑せられけるを聞き、南都を出て伊賀に赴き、還俗して北畠具親と稱し、三瀦河股多藝小梨の諸士を語ひ、仇を報ぜんとすれ共、利無くして中國に流落し、毛利家を賴み、備後の鞆に居たりけり。具親兵を起す時、天正六年信雄の兵波瀾峯の城を攻め落す。六呂木、山副、波多瀦三郎此の三人を生捕りたりければ、死罪にすべきと議せられしに、三郎が容貌世に勝れしかば、信雄救くべし、と言はれしを、三郎聞きて、三人同じく生捕られ罪又相同じ。二人死して一人救かる事面目なし。共に誅せられ候へ、といふ。二人は年老ぬ、惜むべき身に非ず。三郎は仰に從ひ候へ、と勸むれ共聞き入れず。遂に三人共に磔に懸けらるゝ時、三人、君の御爲に命を捨つる事士の思ひ出、面目之に過ぐる事無し、とて諸を唄ひ物語して誅せられけり。三郎此の時十五歳、惜まぬ人無かりしと言へり。玉井新次郎と言ふ者具親に心を合せ信雄に背きしが、父兵部少輔と母共に、神戸に隱れ居たりしを、搜し出して櫛田河原にて磔にせらる。兵部少輔子の新次郎を呼びて、汝今度君の御仇を報ひ、北畠の家を興さんと志しける事、士の本意吾生前の悦なり、とて水を乞ひて、父子三人盃を汲み交して、其の後殺されしとぞ。織

○清洲にて東照宮信長公御對面の事

永祿十二年尾張の清洲にて、東照宮信長に始て御對面の時、他の刀持ちたる士式臺に止たるに、植村庄左衞門家政御刀を持ちて通らんとす。之をも押止むれば、德川家の士に誰が下知にて止むるや、と言ひ捨てて押通り、御前の白洲に參りたるを、信長見て、何者ぞと問はるゝに、東照宮、我士にて候、と答給ふ。信長、植村は聞ゆる勇士なり。今日の會は大事に非ず。心安かる可し。天晴良き士數多候、とぞ感ぜられける。庄左衞門後出羽守といふ。

○信長公伊勢の國司を亡し給ひし事

永祿十二年信長伊勢の國司北畠中納言具敎を大河内の城に攻る。數月經て城强くして些ともひるまず。信長織田掃部介を使にして、信雄を以て具敎の子具房の養子として和平すべし、と言はせられしかば、人質を取るに同じ、とて和平事成りぬ。信長岐阜に歸り、一男茶筌丸十二歲なりしが、士數多附けて伊勢に行り、大河内に至りて國司に對面し船江にあり。具敎は世を具房に讓りて三瀨と言ふ所に閑居せられしが、尙信長に背く志有りければ、信長國司の家の者共を語ひ、

故に遠江をば徳川家より收むべし。信玄に取られたるよりは勝る可きなり。然ば小田原と相謀りて兩旗にて信玄と軍すべし、と氏眞に仰せられしかば、忝き由申して掛川の城を徳川家に渡し、氏政信玄薩埵山にて對陣し、足輕競合有り。東照宮の先陣駿河へ攻め入り、山縣三郎兵衛を追ひ落しければ、信玄前後に取り挾まれて勝利有るまじきを計りて、甲州へ兵を返されける故、東照宮も御歸陣あり。

堀川の城を打過ぎさせ給ふ時、大澤左衞門尉之より前永祿十一年、東照宮遠江を過半治め玉ひし時、降參しける者なり。

が手の者共、去年より落ぶれたる面々相計り、尾藤主膳村山修理兩人を大將にして堀川に窃に一揆を構へ、通らせ給ふを待ちかけて討ち奉らんと仕度しけるに、夫を知し召さずして七騎にて打過ぎさせ給ひぬ。一揆共、餘りに騎馬の少かりければ斯くとも知らず、後より石川伯耆守數正通りけるを見て、偖は先に通らせられしにや、手易く討つべき物を、と悔けるとぞ。創業の人君天の佑御座しけると覺えたり。其後堀川の一揆を攻めらるゝに、此城潮の滿したる時は船の出入自由なるに、折しも引潮にて唯一方口の城なりしかば、落つべき方無くて皆討取られけり。

ばず、七五三の饗膳の儀式良く知れる者なり。其上子供兩人は、餌に奉公申し候へば、許され候て、厨の事を司らせ申さん、と言ひけるを、信長聞きて、明朝の料理させよ。其鹽梅に依らん、と有りしかば、則坪内をして膳を出させけるを、信長食して、水嗅くて喰れざるよ。其誄せよ、と怒られしかば、坪内、畏り承り候。今一度仕らん。其にても御心に應ぜずば腹切らん、と言へば、信長許容せられたり。偖て其の翌日膳を出しけるに、味の甘き事殊の外に好かりければ、信長悦びて祿與へられけり。坪内辱き由申して、偖て昨日の鹽梅は三好家の風なり。今朝の鹽梅は第三番の鹽梅なり。三好家は長慶より五代公方家の事を執り、日本國の政を執り計ひぬれば何事も賤からず。其の好む所第一等の鹽梅を昨日奉りければ、賤み給ふ事理なり。今朝の風味は野鄙なる田舍風にて候へば、御心に入りたるなり、と言ひければ、聞く人、信長に恥辱を與へたる坪内が詞なり、と言ひ合へり。

○大澤左衞門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事

永祿十二年四月、東照宮濱松に歸らせ給ふ時、

是は今川氏眞を武田信玄攻め落し、氏眞ときの山家に引き籠りけるを、東照宮父義元の好

門を開き打て出る。佐々木思ひも寄らざれば、大に敗北しければ、勝家首八百餘級を得て岐阜に歸ず。勝家は猶長光寺に在り。信長感狀を與へ賞せらるゝ事大方ならず。是より勝家を缸破り柴田と世に稱しけり。

○勝家先陣の將となる事

信長勝家をもて先陣の大將とす。勝家固く辭すれども再三強ひられ、後仰を承りぬとて退出する時、安土の城下にて信長旗本の士に遭ひたりしに行き當れり。勝家無禮を責めて遂に切つて捨たりければ、信長怒られけり。其時勝家謹んで申しけるは、然ればこそ先陣をば是非共辭し申したるなれ。子細無くて辭し申すべきや。先陣の大將たる者威權無き時は下知行はれざる物なり。如何に、といへば、信長詞無かりけり。

○坪内某料理の事

三好家滅びし時、料理庖丁の上手と聞えし坪内某と言へる者生捕となりしが、放し囚にして有りしに、年經て後黄谷九右衞門に賄ひ申しける。市原五右衞門、坪内は鶴鯉の庖丁は云ふにも及

辱を雪ぎたり、と悦びけり。是信玄遠き慮ありて斯くは言はれしなり。左衛門大夫は其比勝れたる勇將なれば、嘲り笑はるゝと聞きて、必死の軍するならば、其鋒支へ難し、と察せられて其憤を散ぜん爲とぞ。

○柴田勝家水缸を破りて城を守りし事

永祿十二年佐々木承禎、柴田勝家が守る所の長光寺の城を圍みて攻め、遂に惣構を打破る。勝家本丸に有りて爰を專途と防ぎ戰ふ。鄉民佐々木が陣に往きて、此城は水の手遠く、遙なる所より水を取り候。夫を取切る程ならば城は保つ可からず、と告げ知らせければ、承禎悦びて水の手を取り切りたり。城中是に困め共弱れる色を現はさず。承禎之を見ん爲に和平せんとて、平井甚介を使にして城中に入れたり。平井勝家に對面し手水を請ふ。缸に水滿ちたるを小姓兩人して舁き出でたるに、平井手を洗ひければ、小姓殘れる水を庭に捨てたり。平井歸りて斯くと云へば、事の違ひたる故に怪み合へり。斯くて城中既に水竭きければ、勝家、明日は討つて出で切死せん、とて諸士を集め最期の酒宴す。殘れる水を問へば、二三斛許入るべき缸を舁き出す。然らば此間に渴をやめよ、とて人々汲飲てければ、勝家眉尖刀の石突にて缸を碎きたり。夜明方に

剛の者あり。我と思はん人有らば出されよ。人交もせで戰はせん、と言ひしかば、佐々木が内にて江州に隱れなき永原安藝守と言ふ者を選り出す。修覺寺村石地藏の前に出會ひて、永原は直鎗、中村は十文字の鎗にて散々に戰ひけるが、永原を突伏せ首を取る。中村は近江國の人なり。一日に鎗を合する事十七度、首四十一級を得たる事有りければ、世に鎗中村と稱しけり。

永原を討ち取りし時、室町將軍靈陽院殿義昭江州矢島にて是を聞し召し、感狀に朱塗の物の具朱柄の鎗を添へて賜りけると言へり。一說に、攝州を半分領しける松山新介が士にて、唐冠金纓の冑を著たりといふ。

○北條綱成地黃八幡の旗を捨つる事

相摸の深澤の軍に、北條家の先陣の大將北條左衞門大夫綱成敗北して、捨てたる旗を拾ひ取つて讒りけるを、信玄聞きて、逃走て穢く棄てたるに非じ。必ず地利を謀りて戰を心掛たるならん。旗を棄てしは旗さしの罪なり。如何でか嘲り笑ふべき、とて眞田一德齋が末子の源次郎に、左衞門大夫が武勇にあやかれ、とて彼旗を與へられけり。練絹三幅朽葉地黃にて八幡といふ二字を染めたる物にて、世に地黃八幡と稱へしなり。左衞門大夫斯くと傳へ聞きて、信玄の詞にて恥

待て共見えざれば、如何にと思ひ物見を出す所に、實休討死を告げ來る。然らば高政が陣に切つて入り討死せよ、とて駈向ひけるに、勝に乘りたる敵をかさに受け、鹽田も討死しければ、殘る兵共堺を指して敗北しけり。是永祿五年壬戌三月五日久米田合戰にて、實休三十六歳なりといへり。

○浦兵部高名の事

毛利元就豐前門司の城の圍を解きて引き返されし時、大友宗麟の士大將瀧田民部、只一騎波打際に馳せ來る。小早川隆景の士浦兵部宗勝船を差戻し、陸に上り瀧田を討取りて歸る。遠く是を見る人誰ならんと言ふに、元就、只一人陸に上りたらば必ず兵部なるべし、と言はれしに、果して違はざりけり。井上伯耆と浦と二人勇名世に高し。二人共千切れたる物の具を著たり。又定りたる得道具も無く、瀧田を討ちし時も人の鎗を取りて返せしとぞ。

○中村新兵衞永原安藝守一騎打の事

佐々木と三好と軍す。佐々木は糺に陣し、三好は赤山に在り。三好使を以て、中村新兵衞といふ

て討漏さん事口惜き事なり。山上へ押掛て一騎も剩すまじ、と下知するを、攝州高槻の城主入江左近大夫、鹽田采女正二人、京よりの使として來り居しが、敵を小勢なりと見て、左宣ひ候へど、今已の時なり。高政軍配よし、味方の爲には大凶なり。唯今懸らば十に十敗北すべし。暫時を移し東の谷より二手にてあひしらひ、午の時に及びて軍を進むるか、又敵を南山へ誘き出すか、此二の間に過ぎじ、と言へば、實休心安かれ。時を過さば敵に利有るべし。切つて懸りなば彼なる山を尾傳ひに東北へ下るべし。左なくば南へ下り右の尾崎へ引取るべし。入江鹽田二手に兵少ければ篠原を差添へなん。打連れて伏兵になられよ。高政夢にも知らずして、東北の道に出でなんを待ちかけて討たば安かりなん。高政若し物見を出して見附くる程ならば、南の山に登り横合に突懸られよ。高政は籠中の鳥なり、とて二人の詞を用ひず。入江等東北の山際に進んで待ち居たり。實休は篠原が兵をもて高政を誘せけるに、長房勇懸りて進み行く。山の上より根來法師、成田玄齋、雜賀孫市に、實休旗本僅に見ゆ。左へ廻りて切つて懸り、勝敗を一時に決すべし。阿讃淡の三國の兵を引き請けて一手立て無くばあらじ。若し實休を討漏さば、共に戰死すべし、と言へば、孫市子細にや及ぶ、とて山を下り立、眞一文字に實休旗本に押懸り、忽ち實休を鎗玉に上けて討取りたり。鹽田等は敵を

られしに、臆當に當りて缺けたると承り候、と申しければ、信長好く知りたり、と言はれしとぞ。

實休討死の時、長慶は飯盛にて連歌せしに、告來る。

すゝきにまじる芦の一むら

といふ句人々附わづらひたりしに、其書を披きて兎角を云はず差置き、

古沼のあさきかたより野となりて

と附け終りて、偖て實休討死なり、と告け來れり。今日の連歌是にて止べし、とて偖兵を出されしとなり。

信長都に攻め上るに及びて松永は降參し、三好長慶が養嗣義繼は河内にて自害し、三好の家滅亡せり。

一說、實休は泉州岸和田を安宅攝津守冬康に守らしめたり。畠山高政は紀伊國廣浦と言へる所に流落の體なりしが、熊野根來寺の法師を騙り催し、岸和田へ押寄する。實休後巻せんとて渡海し、堺の津にて勢揃せり。高政、岸和田を攻めんとする兵を城の上なる山に引取り、城を見下したり。四國の兵は篠原右京進長房、一宮長門守成助等岸和田の大手に陣し、實休、旗木は久米川に有りしに、高政が陣を見て、高政は東を指して引退くと覺ゆ。遙々爰に來

畿内の事を執る。第二の弟を聯後守之長、後實休と稱す。其弟を安宅攝津守冬康、其の弟を十河一存と言ふ。天文二十一年實休持隆を殺し、其の後室を己が妾とし、惡逆を恣にす。永祿五年佐々木義姻京に攻め上りしかば、萬松院殿は八幡に在りて防ぎ給ふ。畠山尾張守高政佐々木に黨し、紀州より泉州に討ち出づるにより、實休阿波より渡海し、岸和田の東久米田に陣す。久米田寺に橘諸兄公の墓あり。實休墓を堀り石の槨を取り出す。聞く人眉を顰めずと言ふ事なし。三月五日高政兵を分ち、先陣を額が原に押出す。實休山上より見下し、自眞先に進んで高政が先陣を打破る。槍木山に伏せ置きたる高政の兵に根來法師相加り、不意に切つて懸り、三木内匠一番鎗を合せ、實休が先陣敗北しけり。實休は將机に腰掛けて引くな者共と下知し、散々に戰ひ殘り少く討たれしが、實休をば根來左京打取りたり。高政大に利を得、河内に押入り、此の時長慶が籠りし飯盛の城を圍み攻む。冬康兄の弔軍を志し、且長慶を救はん爲に岸和田を打出で、高政と藤井寺の南葉引野にて軍あり。冬康勝利を得たり。實休討死の刀は光忠が作なり。信長光忠が刀を好み二十五腰まで集められしが、堺にて第一の好事木津屋と言へる商家に、彼の光忠の刀を殘らず見せて、此中に實休光忠や有る、と問るゝに、一腰を取り出して是ならんと言ふ。信長何とて見知りたるや、と問はるゝに、切先の少缺けて候は、實休打死の時根來左京を刎

はば、御運を開かせ給ふべき、と涙を流し申しければ、尤忠義の志神妙にも申しつるよ。然れ共汝等討死したる跡に殘り留る可きや、とて散々に防ぎ戰ひて終に自害有りける。其のきはに、

五月雨は露か涙かほとゝぎすわが名をあげよ雲の上まで

自ら筆を把りて書き殘し給ひけるとぞ。光源院殿の弟に鹿苑寺の周嵩と言ふ者有りしが、平田和泉守と言ふ者迎ひに遣し、北山より出でたる道にて討取りしに、供せし十三四の童忽ちに彼の平田を討取りければ、世の人褒め合へり。

是釋の義俊光源院殿追善和歌の序に見ゆ、と扶桑拾葉に見えたり。然れ共童の名見えず。後に信長記を見しに、此人の姓名を記せり。小川の住人美濃屋小四郎とて、容貌世に勝れしが供したりしに、此變に逢ひて三條吉則の刀を抽きて、和泉が首を打落し、手許に進む者五六人切り伏せて、腹切つて死せし由見ゆ。

○三好實休戰死の事附光忠の刀の事

三好修理大夫長慶は細川讃岐守持隆の臣なり。三好は其先甲斐の源氏小笠原の族にて、信州に住せしが、三好長房の阿波の守護として世々阿波に有り。京都に攻め上り、細川晴元に代りて五

場に曝すとも、運の盡きぬる所なり、と仰せければ、是を聞く人々、天晴頼敷き大將かな。此殿の御爲には命を捨てん事、露塵計も惜からじ、と勇み進む。其勢に乘りて二千許の兵にて後詰に打向はせ給ひ、信虎の八千にて控へたるを他所に見て、眞直に城際に押著け給ふ。城中競ひ悦ぶ事限なし。氏眞、然らば四方を取圍んで、一人も剩さず討取らん、と評定する。其の間に東照宮は百助を召具し給ひ、城を出て引返し給ふ。百助、今日の戰は身に賭けて勵むべく候、とて手の者四百餘をもて信虎の軍に駈け合せ、打破りて利を得たり。酒井左衞門尉忠次、石川伯耆守數正、牧野右馬允康成は後殿となる、追ひ駈くるほどならば忽ち切り崩すべき色現れて見えければ、氏眞も進み得ず。東照宮事なく歸陣せさせ給へり。此廿二歳の御時なり。

○三好松永光源院義輝朝臣を弑する事

永祿八年三好義繼、松永久秀、大和河内より京に打ち入り、五月十九日辰の刻、光源院殿の館を圍み亂入りければ、防ぐ者共或は討れ或は自害す。沼田上野介と福阿彌と言ふ者、敵の相印竹の葉を腰に挿して、外より紛れ入り、光源院殿の御前に參り、我等二人を始として防ぎ箭仕り、思ふ程戰ひ候はん。其間に日比愛せさせ給ふ早足の御馬に召され、東川原に駈け出でさせ給

笑はれ候はん事、骸の上の恥辱にて候へば、教を承り度こそとて習ひ傳へ、夜を日に次ぎて馳せ下り、三方原の軍にも殊に優れて武勇を振ひたりけり。其の後太閤に欺かれ、岡崎の城を出て下方に登り、豐臣家に奉公す。太閤和泉を與へ、武者修行を命ぜられぬ。數正德川家累代の君慈に叛き、一生の忠節武功を空しくす。血氣既に衰ふる時は是を戒むる事得るにあり、と言へる聖人の言知らざりけるこそうたてけれ。

○東照宮三河國一宮城御後卷の事

東照宮三河の一の宮の城に本多百助信俊を守りに置かせ給ふ。永祿七年五月今川氏眞二萬餘の兵を以て圍まれけり。其の中八千を引分ちて、武田信虎を大將として後卷の防ぎにせられぬ。東照宮斯くと聞こし召し、早打立て一騎駈けに馳せ向ひ給はんと見えしかば、敵は味方に比ぶれば十倍も有らん。殊に信虎は聞ゆる勇將に候ふ、と老臣共諫めけれ共、其理は然る可からん。然れ共人は貴賤に依らじ。信義の二つに因りてこそ身を立つる習なれ。敵の城攻め落し、其僞壞ち捨てなばさも有らんを、既に味方を入れ置きて、今更敵大軍なればとて驚くべきや。主の大事は從者が救け、從者の危難は主の救くるは弓箭取る道なり。今は後詰に打負け、屍を戰

起りて敵三百餘討ち取りたり。元行に防がれて尼子の軍引き返して、復攻むる事無かりけり。

○石川數正淺岡某に鞅の緒の結び樣を習ふ事

東照宮今川氏眞と御不快の事起りし時、兼て駿河に岡崎三郎君留め置かせ給ひしを生害すべき由聞ゆ。石川伯耆守數正此の由聞きて、幼なき御身の失はれさせ給はんに、御介錯に侍ふ人無からん事こそ口惜けれ。よし〳〵數正罷り向ひて、冥途の御供にこそ參らめ、とて唯一人駿府に赴く。斯る處に今川家の侍大將鵜殿が子二人生虜られ、氏眞歎き給ふと聞き、若君の御外祖關口刑部大輔と相謀り、若君返させ給はんには、鵜殿が子返し進せん、と望む。氏眞悦びて聽て若君を返し參らす。數正肩に載せ申し岡崎に歸りければ、御家人は言ふにや及ぶ、國中の貴賤御迎ひに參り集うて感ぜぬ者こそ無かりけれ。三方原合戰の時、數正は信長の加勢として遠州に向ひけるが、武田押寄すると聞き取つて返す。美濃の守護土岐家に有りと言ふ淺岡の某、弓箭を取りて然る古兵と聞えしかば、彼が許に行き、此度本國に歸りなば必ず討死仕るべし。數正弓箭を取り打物取りて、かたの如く軍に合ふ事度々なり。然れ共軍に臨むの日鞅の緒結ばん樣、故實ある事と承りて未だ學び候はず。然れば死後に鞅の緒止むる骨法知らざりしと、敵に

常山紀談　巻之三

○中島元行が母備中經山城を守る事

尼子伊豫守晴久、尼子刑部大賀駿河に兵一萬を添へて、備中經山の城を攻めさせらる。此城は中島加賀守が子大炊助元行が守る處なり。元行僅に二百許の兵なれ共些とも恐れず、頓宮次郎左衛門驚見九郎二郎に百姓僧二百人添へて、寺屋敷といふ地に伏せ置き、阿部左衛門二郎驚見五兵衛は鬼ヶ城といふ處に隠し置けり。敵侮りて押寄する時、門を開きて打つて出で、合圍の貝を吹けば、鬼ヶ城の伏兵後より廻り、又頓宮等百姓に紙旗を立てさせ、竹鎗を持せ関の聲を擧ぐる。尼子が軍兵共前後に敵有り、とて助け合はんとすれ共、道細く谷深く、頽れ落ちて亂れける。然れ共攻具を設け取圍みしに、元行が母物具の上に羽折を着刀を横たへ、女房二十人許相具し、元行本丸に在る時は母出丸を巡り、元行出丸を巡れば母本丸を守りて、士卒の怠を戒む。或夜風雨甚しかりければ、元行百人許にて夜討に出で、半を道に伏置きたり。斯くて亂れ入り、関の聲を擧げ火を懸けて静に引いて返る處に、敵追ひ來れば思ひも寄らぬ徑の傍より、伏兵どつと

益なし。引けや者共、と云ふ程こそあれ、主討たるれ共郎等之を顧みず。親擒にせらるれ共子之を救はず、我れ先きにと敗走しければ、馬に蹈れ人に押れて死する者山際に押詰められ、人手に掛らんよりは自害するも有りて、手負討死數知れず、散々になりて小田原までぞ引き退きける。然るに眞田方は一人も損せず、敵の捨てたる武具、馬具、旗幟、指物に至るまで悉皆取納め、甲府を指して悠々と凱旋なしにける。

勢之を見て、驚破夜撃を掛くると覺ゆるぞ。油斷すな、と用心してある所に、陣中に近づく事二町許にして、松明一時に打消ければ、四邊は忽ち闇夜となり、黒白も分たざるに、北條勢今や寄來るらん、と待て共〳〵何の沙汰もなく、其儘夜は明けたりければ、餘に訝しく思ひ、夜前松明の消えし邊へ人を出し見するに跡形もなく、不審乍らに偖て止みぬ。然るに其翌夜又々松明五百許燈しつゝ押寄せ來るの勢ひに、北條勢、今宵こそ攻來るぞ、と急ぎ用意をなす所に、犇と間近く攻め來るかと見れば、又も一度に消え失せたり。斯くする事五六日に及びければ、北條勢は大に心氣疲勞れ、晝夜寢る事能はず、心身茫然として居たりし。第八日目の夜は、松明も見えざれば、偖ては今宵は來らぬぞ。帶紐解きて眠れや、と前後も知らず臥したりけるに、眞田の斥候此體を窺ひ濟し、斯くと告け來りしかば、昌幸大に悦び、敵我が籌策に乘りたるぞ。今宵こそ北條勢を破るべし、と先づ一方へは長根肥後守千餘騎、一方へは眞田安房守昌幸千餘騎にて山手を廻り、左右二手に分れて押寄せたり。北條勢は思ひも寄らぬ不意を襲はれ、鯨波の聲を聞くよりも慌忙狼狽て、太刀よ物具よ、と云ふまゝに、鎧を着けても胄なく、繋ぎし馬に打乘りて鞭打つも有りて、上を下へと騒ぐ處へ、鐵炮を打掛け〳〵無二無三に攻め立つれば、北條勢一支へもあらず、我れ先きにと逃げ出したり。大將北條氏康、同氏忠大に駭き、今は戰ふも

不審なし給ふ方々能く聞き給へ。折角君の御彫刻ありし木像を打碎きて捨てんは、夫れこそ君の思召を反古になすと云ふものなり。斯く不動に造り直せば像も捨てず。敵兵も不動なれば罰を恐れて、迂濶には手を出すこと之れ有るまじ。然れば君の御姿損せずして後世にまで傳はらん。昌幸が捨てて捨てざるは先づ斯くの如し、と有りしかば、一座の諸將皆感じ入り、暫時は言句も無かりけり。其後善光寺に藏め置きしかば、果して天正十年の亂に、織田父子竝に德川甲府へ亂れ入ると雖も、此像有ることを知らざりしこと、誠に眞田が明智と謂ふべし。因て今に其像遺れりと云ふ。

○眞田昌幸北條勢を欺く事

眞田安房守昌幸僅に二千餘騎を以て、北條の大軍と屋布に對陣なしけるにぞ、北條右衞門之を見て大に笑ひ、甲府勢大軍にて向ふべきに、僅の小勢にて向ひけるこそ淺はかなり。一蹴に攻め破れ、と早々に用意なしければ、松田尾張守大に制し、小敵なりとて侮るは、兵道の誡むる所なり。敵の擧動を窺ひ機に乘りて攻掛るべし、と扣へたりしに、眞田安房守は別府若狹伊勢崎十郎石田郡次などに命じて、其夜陣中に松明三百許を燈し、那首這首徘徊致させければ、北條

熟之を聞き、誠に眞田が申す所至極せり。我れ既に病死とあらば近國の諸侯競ひ來り、先づ甲府に亂入り、是れこそ日頃の遺恨に思ふ信玄が像なりとて、必ず手足を切り離し首を落さん。敵の手足に掛けられん事こそ口惜けれ。由なき事なしたり、と太刀抜き放ち、己に彼の像を切り捨てんず勢ひなれば、昌幸之れを制し、暫時御待ちあられたし、可惜正像を今無解に切り捨て給はん事こそ本意ならず。願くは某に給はらば難有し、と謹んで申しければ、信玄何に致すや、と問はれしに、昌幸答て、臣所存御座候へば、何は兎もあれ賜はれたし、と乞けるにぞ、信玄も何か子細の有る事ならんと思され、然らば汝に與ふべし、と其まゝ眞田に賜ひける。辭て眞田御暇を告けて此の木像を我が館に持ち歸り、一間の閑所に引き籠り、一七日の後信玄竝に諸將を我が館に請待せしかば、皆々何事ならんかと到り見るに、座敷の正面に不動明王を安置し、香花燈明を供し、誠に生るが如きの尊像なれば皆々拜をなし、信玄公を招待するに、何故不動の像を祀られしや、など呟きつゝ、美酒珍肴の饗應に一同大に興を催し、酒既に酣に及んで信玄笑を含み、何故に不動明王の像を祀りしぞ。汝が信仰せし故なるか。昌幸答て、君には那を不動明王と御覽ありしや。信玄大に笑ひ、縄を持ち劍を携へ、後に炎火を負は何んぞ、不動明王にあらずや。昌幸笑うて、那こそ先達て乞ひ受け奉りし君の正像なり。是某が工夫を以て斯くは致せしなり。

つ其の像宛然生けるが如くなりければ、信玄喜悦こと限りなく、佛師には數多の金銀を與へ、其の後彼の像を中央に安置し、諸將を招きて申されけるは、我れ既に老ぬれば命數も近きにあらん。切ては後世に我姿形を遺さん、と豫て佛師に申し附け彫刻せし所既に成就せり。然れば我が無き後は各々力を協せ、悴勝賴を弱け、武田家の隆盛を謀るべし。又勝賴には老臣の輩諫ることあらば、父が命と思ひ愼んで之に從ふべし。必ず身を高ぶること勿れ、と最と懇切に遺命有りしかば、諸將等皆拜伏して唯落涙に及びける。中に長坂、跡部の兩人進み出で、誠に君の御姿を後世に遺し給はんこと、此像だに在まさば君御在世も同じからん。御當家萬々歲此上なし、と頻に譽しかば、眞田安房守昌幸、長坂跡部の兩人に向ひ、各方は君の肖像を造らせ給ふを譽給ふなれど、是れ大に然らず。隣國の諸侯國郡を奪はれし者は、今君の武威盛んなる故、小笠原村上諏訪の殘黨等首を屈めて、或は北條上杉等の處に身を隱し居れど、甲府に變も有らば日頃の鬱憤を散さんものをと、手に唾して待つ者其の數を知らず。今にもあれ君御病死とあらば、諸國の大軍此虛に乘りて押寄來るは必定なり。然るときは我々種々の手術を廻らし防戰なす共、若も敵兵亂入らば先づ此像を鞭打ん。愍に像を拵へ、却て後世に恥を殘す事有らんも、亦測るべからず。誠に益無き事、と申しければ、長坂跡部何と答ふる辭もなく閉口して居たりしが、信玄熟

夫れが何とて器用にて有るべきぞ。夫れは不器用者と申すものなり。下々が積りの外刀を吳れべきと思ふには小袖を吳れ、馬を取らす可き者と人の申すには一貫文斗取らせ、此の人には深き物は下さる間敷と取沙汰する其者に、却つて金子など澤山に取らせたるこそ國持ち將の法なり。敵と取合に必定此の地へ出づると思ふ所へは出ですして、敵に骨を折らせ、又出間敷と敵の思ふ所へは、如何にも輕々と出てこそ勝ちを得るものなり。待ち構へたる所へ出ては何として利は有るべきぞ。總別器用だてをする者は不器用の眞只中、分別だてをする者は無分別の九つ時ぞ。武士は手の外をして下より積られぬこそ眞の大將なれ、と云はれければ、聞く者信玄の賢智に感服なしにけり。

○武田信玄自己の像を造る事

武田信玄命數盡きて死なん事を前知しければ、茫然自失するもの良久しかりけるが、斯く女々しく嘆きたればとて天命は戻し難く、已を得ず、せめては武威を近國に振ひし我が姿形を遺さばや、と佛師運阿彌を呼んで我が像を彫刻せしに、日を經て成就しぬる程に、我が實體を鏡に照して篤と視比べけるに、似たりや似たり左も似たり、所謂瓜二つになせしが如くにして、且

聲に呼びけるは、此の手へ向ひしは、北條方に智將と聞えたる松田殿と覺えたり。斯く申す某は、武田家に於て直田一德齋が三男なる安房守昌幸なり。此度我々を小田原へ引き入れ給ふは、極めて良計有らんと存じ、先達て相摸川酒匂川の兩陣にて、擒にし置きたる北條方の諸卒を先陣に進ませ、地雷火の先驅致させたり。然るに因りて北條の方々此の火の手を見給はば、必ず此の道へ御出あらんと存じ、先刻より待ち受けしに遲かりし事哉。いざ昌幸松田殿へ見參に待ち受け、御馳走を振舞ひ申さん、と後の方を招きければ、數百挺の鐵炮一度に嘩と打掛けるにぞ、松田勢は思ひ設けぬ事なれば大に敗れて走りける。

○武田信玄夜物語の事

或時武田信玄近習の人々と夜話ありし時、諸國の大將の剛怯賢愚の論有りけるに、跡部大炊之介申すは、今川治部大輔義元の沙汰を承るに、器用なる大將にて候、と上下感じ候由を申す。信玄、夫れは何のやうなる器用ぞ、と尋ぬれば、跡部申すは、御客なんど有りし時、此人には馬を下さるべしと思ふに必ず馬を賜ひ、此の人には腰物を下さる可きやなど人の推量するに少しも違はず。腰物を與ふる由皆器用のなす所に候ふと上下噂致し居り候、と申しければ、信玄笑ひ、

返しけるを、北條方の松田大道寺は、すはこそ甲府勢落入りたり、と一聲の鐵炮を相圖に地雷火の口に火を移しければ、何かは以て堪るべき。大地より火焰と共に砂石を吹き上げ、四邊は一圓の火炎となりける程に、彼の者共は脫ぐる間も無く、面部手足の嫌なく焦爛らし、見る見るうちに三百餘人一人も殘らず燒死けるは憐と云ふも愚なり。遠く此の體を見たる松田大道寺は、小氣味よし、と手を拍つて笑ひ悅ひつゝ、時分は能きぞ者共、甲府勢の燒殘りし者酒匂川へ逃落ちん間、一人も遁すな、と大道寺の下知に、一萬五千餘騎は笹我山を廻り、酒匂川を指して進みけるに、北條氏忠も亦同じく一萬五千餘騎にて、笹我山を廻りて德間井より進みければ、大將氏康父子大に悅び、今や信玄の首擊ちて來るならん、と舌打鳴して待ち居ける。此方は信玄此火の手を見るよりも、山縣三郎兵衞、馬場美濃守の兩人、其勢都合五千餘騎にて德間井に向はせ、眞田安房守昌幸、同舍弟隱岐守の兩人は、同じく其勢五千餘騎にて笹我山の押へとなし、雙方へ手分をしてぞ遣はしける。偖ても眞田昌幸は田島村の地雷火を難なく避け、却りて兩道より攻掛る手術をなして待ち居しに、松田尾張守、大道寺駿河守は斯る事とは露知らず、猛みに揉んで進む所に、思ひも寄らぬ松蔭に、雁金の旗二流風に靡かし、許多の軍勢整々と控へたるを、松田先陣に進み之を見て、味方には見馴ぬ紋なり、と怪む折柄、若武者一騎其の間近く進み寄り、高

謙信信玄と和平を結ばんとせられし時、長遠寺の僧を使にせらる。此僧は遊說の人なり。謙信彼の僧に、甲斐の士に向井與左衞門と言ふ者や在る、と問るゝに、之有りと申す。又創の痕や有る、と問るゝに、面に刀の瘢有り、と申す。謙信の曰く、川中島の戰に名乘りかけて、我を後より突き通す處を、振り顧て一刀斬りたりしぞかし。よも助からじと思ひつるに存命へたるよな、とて、萌黃の胴肩衣に鎗の痕有るを取り出し、書簡を添て向井に贈られけり。此を世にかへり感狀といふ。其書中に川中島の事を載せたりと言へり。

〔補　遺〕（以下四章異本に據りて補ふ）

○眞田昌幸奇計の事

酒匂川の役北條方大敗して退き、種々計議を凝せし末、大道寺駿河守の意見により、田島村の此方に地雷火を伏せ置き、敵兵の之に當り、周章て騷ぐ所を驅け立てんと計りける。斯くとは夢にも知らぬ武田勢、勝に乘りて潮の涌くが如く押行けるは、劒呑至極の事なりけり。然るに眞田昌幸田島村の方に當りて、陽氣炎々として日に映じけるを見て、偖は敵兵地雷火を伏せしと覺えたり、とて主將信玄と謀り、相摸川酒匂川の兩役に擒にしたる敵兵三百餘人の命を助けて

りとも冥途に面目なかるべし、と言ひけるとぞ。戰國の時婦人の身も、弓箭取る家に生れたるは、志す所大に異るもの、想ひみつべき事なり。

○東照宮針崎合戰の事

永祿七年正月十六日、三河一向宗の黨と針崎にて終日の競合あり、中根彌藏と名乘りて一番鎗を合す。一揆の相手は渡邊半之丞なりしが、鎗を捨て刀を抜いて飛び込んだり。中根も刀を抜き互に手負ひ相引きにしける處に、鵜殿十郎三郎渡邊を目掛け追ひかけたるを、渡邊が父源五左衛門助け來て鵜殿を突伏せたるを、東照宮御覽じて御手づから鎗を提げ給ひ、鎗組みたまひて突伏せ給ふ。薄手なりしかば引き退くを見て、石川十郎左衛門、渡邊源五左衛門競ひ懸りて、東照宮に向ひ奉る。內藤甚市弓取り直し、源五左衛門が股を射貫きければ、半之丞父を掻き負ひて引き退き、夫より物別せり。內藤は渡邊が甥なりけれ共、御急難の時に當りける故、射倒したるとなり。

○向井與左衛門かへり感狀の事

れ、御身には引くまじい、と言うて取つて返し、金助を五六度も突き退けたりしが、蜂谷鎗を投突にして金助を突倒す。東照宮、蜂谷奴とて又御馬を乗著けさせ給へば、蜂谷引返し逃げ退きけるとぞ。

蜂谷其後は先だちて一向宗の黨を離れて降參し、夫より人々願ひ申して、終に一向宗の黨の者共罪を御赦有てけり。其後二連木の合戰に本多平八郎牧宗次郎鎗を合せけるに、蜂谷少し遲れたりしが、蜂谷早疾く鎗は合せたるに如何に、といふ者有りしを半之丞聞きて、他人鎗をしたらんに、我は切合ふまでよ、と言ひ捨てて、刀を提げて敵の中へ飛込んで二人薙ぎ伏せたるに、河井正德といふ者鐵炮を構へたる所に走り掛る。正德隱無き手練にて打ちたるに、痛手なりしに起き上りて其處をば引取りたれ共、蜂谷遂に死しけるとぞ。又此正德或時急しき場にて後殿しける時、後より其手負ひ討ち取れと呼る。之は正德生得跛なりし故、手負ひたると思ひて斯く言ひたるなり。其時蹈み止りて弓箭神に誓ひて手負にては無し。生得の跛ぞ、と言ひけるより、今川家に褒めて正德と言ひけるとなり。又蜂谷が痛手負ひたるを其老母の聞きて、如何に首尾の有りつるぞ、と問ふ。其樣是々なりと答ふれば、嬉しや士の戰場に出て、矢に當るは常の事なり。若し手負ひ樣の惡かりせば、死した

又一説に、此の時信玄兵を進め、太鼓を鳴し、軍威厳然たり。越後の軍兵も物の具し、早打向はんとせしを、謙信、否々信玄懸り来るに非ず、引取らん爲なり。馬の鞍を落し、甲冑を脱いで休息すべし、と言はれしが、果して信玄引返されたりと言へり。

○東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事

附蜂谷半之丞が事

永祿六年十一月十五日、一向宗の黨と厚木坂にて軍ありし時、一揆より蜂谷半之丞、渡邊源藏、眞先に進み、味方には上村庄右衞門黒田半平鎗を合せ、渡邊黒田を突き倒したるより、味方競ひ掛りて追立つれば、蜂谷も渡邊も引き退きて細曝にかゝるを、水野藤十郎、蜂谷如何に遁すまじ、と詞をかくれば、蜂谷蹈み止まり莞爾と笑ひて、藤十郎如何でか我等に敵すべき、いざ參らん、とて鎗を地に突き立てて手に唾を吐きかけ、然らば、といふ。水野も蹈み止めて近づき得ず。蜂谷然ればこそ、とて又靜に引き退く。蜂谷が鎗は三間柄の中を少太くして、長吉が鍛ひたる又なるが勝れて物を貫きけるといへり。東照宮御馬を乘出され、蜂谷奴返せ、と御詞を懸けらるれば、跡をも見ずして逃る。松平金助剩すまじと追詰むれば、蜂谷蹈み止まり、殿なればこそ逃けた

下知し、切り勝ちたる事実に見えたり。

（一）謙信松山城後巻の事

永祿五年三月、北條氏康父子、武田信玄父子、數萬の兵を以て、武州松山の城を圍まるゝと聞き、謙信八千の兵をもて後巻せられしが、十五日厩橋に着陣あれば、城落ちけると聞えければ、然れば之より山の根、城へ押寄せ打破るべし。敵後詰するならば、北條武田父子四將の大軍に打合せて軍せん事尤望む所なり、と言ふより早く刀根川を打渡り、架けたる船橋を切流させ、山の根の城に押寄せ、忽ち攻め落し、小田助三郎を始めとして皆撫切にしてけり。斯くて使を四將の陣に遣りて、松山の城に向はれ候由を承り、出向ひ候に城早く攻め取られ、軍仕る事無くて、弓箭の禮義に背きて候。唯今山の根の城を攻め候程に、後巻や仕り候へと言ひ送られしかば、氏康懸りて軍せんとす。信玄の曰く、今勝ちたり共、謙信には四人して勝ちたり、と人に誹れん事口惜き、とて強ひて止めてさて止みけり。信玄、實は然らず、日比謙信の勇氣倍々にても戰ひ難きに、松山城落ちて怒を含みたれば、其の鋒に向ひ難く、虎を恐るゝが如くなりし故とぞ。

鑑過半は贋物なり。又按ずるに、今世に專行るゝ書に、川中島五戰記といへるあり。此書は川中島の戰五度なりと錄せり、然れども其中に疑ふべき事無きに非ず。之も又正しき書とも信ぜられず。謙信鶴岡に詣でて忍の成田を打ちたりしかば、關東の諸將心々に離散し、小荷駄を敵に奪はれ、僅に謙信遁れ得て越後に歸りし、と甲陽軍鑑に記したるも心得られず。關東の諸將靡き從はずば、如何で其年京に上る事の有るべき。是事情時勢の寥然たる事にして、甲陽軍鑑の虛妄論をまたず。

○謙信軍中に青竹を持たれし事

謙信は長さのみ高からず。左の脚に氣腫有りて、歩む時足を引く如く見えしとなり。物の具する事は尠く、黑き木綿の胴服を著、鐵にて造りたる小き車笠を冠り、麾執る事も尠く、青竹を三尺計にして、杖の如く提げ持ちて、士卒を下知せられけり。梁の韋叡が竹如意の遺風なりとぞ。

北魏の兵鐘離城を攻めし時、梁より韋叡を以て後援させられけり。北魏の將楊大眼勇將にて、數萬騎を率ゐて戰ひしに、叡は素木にて造りし輿に乘り、白角の如意を執りて軍兵を

年八月十八日川中島に於て、槍鎗をもて信玄の旗本を突き崩したる由載せられたり。弘治二年三月廿五日にも川中島にて軍あり。謙信千曲川を渉りて夜軍に懸られしかば、板垣駿河、一條六郎、諸角豊後、初鹿源五郎、輪形月織部、山本勘介を始めとして、討死する者多し。甲斐の先陣上山より懸り来り前後に迫りける故、謙信川を渉りて引き取られけり。此の時に宇佐美駿河守先陣して功あり。又永祿四年九月十日川中島の戰に、武田の先陣敗北す。信玄の旗本を以て盛り返し、長尾政景等陣を亂して懸りける所に、渡邊越中一陣衆を越えて鎗を入れ、遂に甲斐の軍敗北せし事、皆謙信家臣に賜ひし感狀傳れり。甲陽軍鑑川中島數度の軍を附會して一度と爲すなるべし。又一說に、永祿四年九月十日の戰の事は、謙信の家に言傳へたる事無しと言へり。然れども、謙信の感狀を傳へて、謙信實記と符合するに似たれば、九月十日戰有りし事疑ふべからず。上杉義春入道入菴京都に閑居して有りしが、徒然の餘り甲陽軍鑑を讀せて聞かれしに、事實謬れる事のみなり。高坂が死後の事を多く書載せ、川越の軍も年月大に違ひ、人の姓名も以ての外謬れる事多く、又無き人の名を造り拵へたるも有り。謙信の世の事は予よく知りたるに、如此謬れるなれば、此の書更に信ずるに足らず、とて復讀まずろ事無かりしと言へり。今を以て是を視るに、甲陽軍

の合戦を始む。謙信旗本眞黑になりて切懸り、信玄の旗本を押崩す。甲斐の兵討たるゝ者數を知ず。斯る所に西條山の甲州の軍兵一騎駈に馳せ來るを見て、謙信兵を纏め勝を全くせられたり。甘粕備後陣の兵を進むるを見て、信玄の旗本踏み止まりたるが　又亂れ立ちて廣瀨の渡に引き退く。甘粕是に因りて西川邊に陣する事三日にして引き取れり。

景謙信實記に據りて錄す所なり。川中島の戰異說多く、分明ならず。一說に、天文廿三年八月十八日、川中島にて戰あり。謙信旗本半町許敗北する處に、宇佐美駿河守定行横間に懸り、信玄の兵大に亂れ、御幣川へ追ひ入れられ討たるゝ者多し。信玄は川の中に馬を立たる處に、謙信綠の曼子にて包みたる肩衣に臂鎧を差し、白き手拭をもて頭を包み、三尺許の刀を抽持ち、虎の暴れたる如くなる鹿毛の馬に打乘り、信玄は何處に在りや、と呼る。原大隅、信玄何事に爰に在る可きや。狼狽者よ、と罵り、鎗にて突きけれ共突外す。謙信川へ馬を乘込み信玄に駈け寄せ、三刀まで斬られしに、信玄持ちたる軍配團扇も切り折られ、手負ひて既に危かりしに、原大隅萩原彌右衞門鎗を取り伸べ、疊みかけて謙信を敲きけるに、馬のさんづに當り、馬川の深みに飛入りける。其の間に信玄の馬副の者共、信玄の馬を川岸に引揚けて物分したりとなり。宇佐美駿河守謙信より賜はりたる感狀にも、天文二十三

るといへり、是一つ。勞れたるに乘ずべき是二つ。八月に至りて師を川中島に出すべき、とて士大將を盡く呼び集め、各〻謀を問はるゝに、存ずる旨を書き記して出しけるを、擇び別ちて上中下の三等とし、其下策を用ゆ可し、と言はれしかば、此は如何候ふべき、と怪しみければ、謙信の曰く、上策は既に敵の察する處にて、我を待つべき謀、怠らざる由を聞き、待ち設けたる所へ攻入らんに如何でか勝つべき。中策は數年評議せし所なり。下策を用ひて貝津の城を蹈み越え、西條山に陣し、姑く敵の後卷を待たん。是兵を死地に陷るゝに非ずや。信玄押寄せなば、其の時勝負を一時に決すべし。もし信玄貝津の城に入らば圍み攻めん。又信玄川中島に陣取りて吾が歸路を塞ぐならば、吾軍雨の宮の渡りを涉らず、直に貝津の城に向つて攻め破らんに、信玄必ず救來るべし。其時又一戰して叶はずば討死すべし。是下策を用ふる謂なり、とて八月廿四日西條山に押入り陣したりければ、信玄後卷して暫對陣せられしが、廣瀨の渡を越えて、貝津の城に入りたりけり。斯くて九月九日の晚、謙信士大將を集めて、明日信玄必ず打出て戰ふ可きよ。今夜雨の宮の渡を逆寄して其の不意を擊つべし。用意せよ、とて寅の刻に至りて川中島に兵を押出す。先陣は柿崎和泉、後陣は甘粕備後なり。果して十日の卯の刻許に、信玄一萬餘の兵を率る千曲川に打て出で、善光寺の要路に待たれし處に、謙信軍を進めて一手切

て、三年を經て城落ちければ、治長染月毛といふ馬に乘り、三尺五寸有りける光重の刀を抽き持ちて、大軍の中に駈け入りて討死しけり。此の馬は極て色白き尾鬣なりしに、茜の汁を刷毛にて染めたれば、年月を累ねて後眞紅の絲を亂し懸けたるに似たりしとかや。非筒女之助此の馬を得て乘りしと言へり。又景勝治長を攻めらるゝ時、治長が士に波多野忠左衞門といふ強力の者あり。景勝の寄せらるゝ道二筋の中に、近き方を三淵と言うて、一騎打の險岨有りけるに、待て景勝の打通られん時、むずと組みて刺殺さんと思ひ、三淵の岩穴に隱れ居たりける。景勝既に打向ふ時、皆口々に、近き方より寄せ給へ、と申す。景勝聞かず、兵法に迂を以て直とすと言ふ事あり、危き道に不意の患あり、と言ひて三淵にかゝらず、道を廻りて進まれしかば、波多野が仕度空しく成りけり。

○信濃國川中島合戰の事

永祿四年七月、甲州に謙信より入れ置かれし間者共越後に歸りて、信州の士二心有る者數多有りしを、五月上旬信女川中島に赴きて死罪に行はれ、是れによりて疑を生ずる者多し。又和利が嶽の軍に士卒多く手負ひ討死しける由を告けけるを、謙信聞きて、三軍の禍は狐疑より生ず

所遊覽して國に歸るに及びて、光源院殿に三好松永謀叛の相顯れ見えて候。御書を賜はり候ふならば、馳せ上り誅罰すべき由、密に申されしを、三好松永も察しけるにや、深く恐れけり。程無く永祿七年三好長慶河内の若江にて病死しけるを、松永祕して翌年の春に至りて公方之を聞し召し、越後へ御書を賜はりける。松永之をや泄れ聞きけん、急ぎ光源院殿を殺しけると言へり。

○新發田治長の事

謙信小田原の蓮池まで攻入り、明日は鎌倉に赴くべし、とて軍評定有りし時、新發田因幡守治長其の比十五歳なりしが進み出で、斯る手配ならば、一定味方敗北すべし、と申す。謙信怒りて、舌の柔なるまゝに物な言ひそ、と言はれしかば、治長居直り謹んで、今日より君臣の義を絕せ賜り候なば、小田原に馳參り、北條家の先陣して君を追討ち參らすべし。酒匂川の此方にては手易く討ち取り奉らん物を、と申す。謙信其時色を柔げ、天晴剛の者よ。神妙にも申したる哉。明日の後殿をせよ、と命ぜられける。治長軍立云々爲可き、とて聽て事無く小田原を引き取りたり。治長後景勝の世に及びて二心有りければ、景勝之を討たるゝに、新發田、五十野兩城を守り

に送りけり。常山の山上今に其の城跡あり。

○上杉謙信小田原へ攻め入られし事附上京の事

永禄三年謙信八千の師を相州小田原に出さる。關東の諸將皆々靡き從ひて十五萬に及べり。族本は高麗寺山の麓に陣し、先陣太田三樂は小磯に陣す。北條の兵戰はずして城に引き入りければ、蓮池まで攻め入り、夫より鎌倉に赴き、鶴岡の八幡宮に詣でらる。上杉憲政の長臣等も皆群參す。成田長安警固の者と爭論の事あり。誅罰に及ぶ可きと雖も之を宥めらる。成田謙信の怒りを恐れ病して出ず。これを甲陽軍鑑に謙信成田を打つと錄せしは非なり同年六月謙信上京せらる。六月廿八日京都に至り、七月七日光源院殿輝義に謁し、吉光の太刀黃金三十枚を獻じけり。光源院殿より管領の任、又諱の字を賜り、兄弟の義に準ぜらるゝの命を承り、越後に歸られけり。謙信相州に攻め入る時、京都より近衞關白前久公を進められ、管領の職を承る事此の時より始るとも言へり。又鶴岡に參詣し、管領の職に任ず。近衞關白前久公下向ありて、光源院殿の公方より大和兵部少輔使たりとも言へり。孰か是なるを知らず。又謙信上京の事、三千許の人數にて、越後を出でられしと言へり。光源院殿に謁して後、京、堺、住吉、所

負ふ者數多あり。七日の曉に及びて、城中最後の酒宴の聲城外に聞えければ、我劣らじと攻め寄せたり。高德の母、我先づ先立たん、とて柱に刀の柄を結び附け、走り掛り貫かれて死しぬ。高秀十五歲、御後に殘らんは心掛りならん、と言ひて腹を切りぬ。二男八つに成りしを引寄せて刺殺しぬ。高德の妹有りしが、藝州鼻高山の城主は高德の弟なれば、其處に落行かれよと言へども、思ひも寄らぬ事よ、と言ひ捨てて、母の貫かれたる刀にて、乳の邊を刺通し、同じ枕に伏したりけり。高德の妻は三十三歲なるが、弓箭取の女房と成りて、最期に空しく死する事や有る。三村が一族と今を限に一軍をせん、とて紅の羅衣を甲の上に着て、薙刀押つ取りて出でけるを、局の女共押止むれば、早疾く立忍びて命を全うせよ。敵一人をも討取らずして空しく死する樣や有る、とて振り切つて走り出づれば、此の上は誰か殘らん、とて立てたる長柄の鎗を取り突いて出る。高德の恩顧の士八十三人、今日を限りに切つて出で、浦が七百許控へたる眞中に、死狂ひに戰ひければ、討たるゝ者多し。されども小勢にて戰ひ疲れければ、高德の妻兵部を呼びかけ、腰なる刀を抜き出し、是れは國平が造れるにて候ふ、我家重代の物なり。父に添ひ申す心にて身を離さず候ふが、武名聞えある兵部殿に進らするなり、と言ひて城に歸り自害す。高德も腹を切れば、弟の高重介錯して其の身も腹切りぬ。寄手亂れて首共を取り、鞆の津

殿へ注進す。

一說、元親城を攻落されし時、升彌助といふ士、元親の後を慕ひて安部山にて追著き、元親と名乘り城に歸りて討死せん。其間に爰を落延びて運を開き給へ、と言へども元親聞かず。兎ても遁れぬ所なり。使者を乞ひて來れ自害すべし、と言はれしに、再三諫め爭ひしか共、是非共にと言ひしかば、泣々今生の暇乞し、形見を取りて玉村に有りし元親の母に送り届け、偖て夫より城に至れば、元親が置れたる所を知りて告け來るにや、と門を開きければ内に入り、此の城を枕にせん爲に來れる由名乘りて散々に戰ひ、數多切り伏せて討死しけり。元親は使者を待たれしに音づれも無ければ、松運寺の道に出で、鄕民を賴み城中に云ひ送り、使者を待ちかけて自殺せられしといへり。

夫より兒島の常山を攻めんとて、毛利家の大將小早川伊豆守光重に三村父子相加り、成羽にて勢揃して、六月四日山村兒島に陣し、二手に分れて先陣浦兵部宗勝用吉より宇藤木にかゝりて押寄せ、六日の朝大手の木戸口へ攻め寄せたり。高德は後卷と賴む可き味方なく、殊に累年毛利家に弓矢を執りし三村家の謀主なれば、遁れんと思はばこそとて、嫡子源五郎高秀と共に鐵炮を打ち出す。高德の弟小七郎高重は、箭繼ぎ早に弓を射出す。寄手此の三人に防がれて手

に隨ひ、將軍を討參らせ、織田家の力を賴み、浮田を討滅すべし、と謀りければ、皆尤と一同す。三村孫兵衞親成同孫太郎義兼父子は、父の仇を報ゆるに、他人の力を借る事や候べき。弓箭取る躬は忠と孝との二つより外なし。君君たらずと雖も、臣は臣たらずば有るべからず、とこそ承り候へ。信長謀りて語らひて候ふを眞實なりと欺かれ、虎狼の如く世に稱する信長に從ひて將軍を討參らせ、毛利家を敵になさん事、惡逆不義の名遁るべからず。信長將軍の威を借りて五畿內を討ち從へ、後には將軍を侮り、都を追ひ出すに及ぶは惡逆に候はずや。斯る人を賴み給はん事有るべくも無し、と諫めけれ共、元親を始め皆、當家武運を開くべき時なるに、衆議に背く事よ、と人々怒りければ、三村父子は詮方無く成羽に歸りぬ。常山島郡の城主三村上野介高德が妻は元親の從弟にて高德元親の妹なり親成を捨て置きたらんには、必ず將軍へ告げ知らせ、逆寄すべし、とて信長の援兵を乞ひて、手始に成羽を攻め陷すべし、と言ひければ、此義に同じて信長の許に使を遣し、成羽に働く可き設をなせり。親成は如何すべきと案じ煩ひたる所に、靈陽院殿より偏に賴み思召す由聞えしかば、然らば兵を賜り候ひなば、松山を攻め申すべし、と申しけり。斯くて安藝備後の兵七千三百餘差向けられしかば、天正三年五月廿四日松山へ攻寄する。松山には思ひも寄らず城遂に陷り、元親も城を落ち去りて阿部山に在りけるを、同廿九日討取りて靈陽院

押下し高屋村まで進まれければ、石川は八幡村にて取つて返し、元家を目がけ二三度火を散して相戰ふ。浮田の兵數多討たれ、雄町村を東へ指して敗北す。元親は思ふ仇を討ち得ざるのみならず、言ひ甲斐無く兩陣の軍敗れ、兄も討死しける事口惜く、馬の頭を南に引き向け、血眼になりて眞先駈け、只死ねや、と罵りて面も振らず戰ひければ、明石飛驒守、岡信濃守此の鋒に破られてければ、元親、軍は勝たるぞ、とて鎗を提げ、逃ぐる敵を追つ立つる處に、國富村にて軍せし長船等、横間に駈け來り中に取圍めければ、元親敵の中に駈け入らんとせしを、士共譬に取附き、今日存命へ再び兵を起し、仇を報ゆる時有るべし、と強ひて諫めて引返す。猶追ひ掛くれば取つて返し、相支へて釣の渡を越え引取りけり。斯くて彌直家を討つて仇を報ゆべし、と志深くせし處に、光源院殿義輝を三好弑して靈陽院殿義照沒落し給ひ、織田信長を賴み給へども、京には信長村井長門を守護とし、靈陽院殿志伸べきに非ず、備後の鞆に落ち行き、毛利家を賴られしかば、信長元親の許へ使を以て、此の度將軍に黨せず、西國の通路を塞ぎ織田家に忠を致さば、還て信長師を出し中國を討平け、備中備後を元親に與ふべし、と誓紙を添へて言ひ送られしかば、元親一族を集め、將軍家に從ひたりとも、然許の大功も有る可からず。殊に浮田家將軍に隨ふならば、兼て思ひ設けたる仇を報ゆる事も叶ひ難かるべし。信長の望む所

胄を取つて着結びたる緒の端を、刀を抽いて切りて棄て、馬に打乗り二十餘町の田の中を眞一文字に妙禪寺の砦に駈向ふ。先陣の者共後れて砦を攻め取り得ず。今旗本にて、無二無三に乘れや者共、と下知するに力を得て、先陣の軍兵喚き叫んで攻めければ、思切りたる三村が士共引組引組討死しければ、直家城に火を懸けさせ、三棹山に打上り、山上より遙に敵を見下して扣へたり。元祐は春日の宮の前を渡り、玉井宮の前を過ぎ、國富村近く進みける處に、妙禪寺にて討漏されたる者共落來りて、敵はや三棹山に取り上りぬ、と言へば、騒ぎ立ちたる所に、戸川肥後守花房助兵衞、岡越前守長船紀伊守等、鐵炮を打掛け進み來る。備中の兵亂れ立ちて、國富より德兎寺の間にて討たるゝ者數を知らず。元祐五十騎許左右にたて勝誇りたる敵に向ひ、延原土佐守が兵を追立て、浮田左京が朱の四半に兒の字の馬標を目がけ、直家の旗本なりとや思ひけん、馳せ入りて討死しける。首をば能勢修理取りたりけり。元親は四御神村矢津の砦近く進む處に、妙禪寺の煙天をこがして燃え上るを見て、すはや城は落けるよ、と犇めき合へり。石川も合圖の皆違ひぬる上は、元親と一つになりて軍せん、と言ふ所に、浮田元家丸に兒の字附けたる旗山風に吹き靡けさせ、一足も引くな、と呼はりて押來り、原尾島を北南へ數度追つつ返しつ相戰ふ。備中の兵うら崩して、石川も竹田村に引き入らんと川上へ人數を纏む。直家兵を

が嫡子は備中猿掛の城に有り、莊野元祐といふ。二男は三村修理亮元親と言ひて備中松山の城に在り。父の弔軍せんとて先謀を廻らし、備前上道郡澤田の西妙禪寺の砦を攻め取るならば、直家沼の城を出て攻むべきなり。其の時後詰して軍すべし、とて撰りたる雜兵四百人、夜に紛れ三棹山より押寄せ、妙禪寺の砦を攻め取り、檠師寺彌五郎、根矢與七郎等を入れ置きたり。果して直家妙禪寺の砦を攻めたりければ、間に入りたる者松山に馳せ歸りて斯くと告げければ、三村、願ふ所の幸なり、とて一族相集り、其の兵二萬餘、備前辛川の驛にて兵を分ち、一手は元祐大將にて七千餘を率ゐて、萬成山の麓を繞り、春日明神の祠の前より旭川を渡り、旭山の下より艮に向ひて、三棹山へかゝり妙禪寺の後卷とす。一手は石川左衞門尉五千許にて、首村ひやけばなにかゝり、岡山の北を過ぎ、原尾島村に出て直家が旗本へ押寄せ、一時に勝負せんとなり。三村元親は一萬人を率ゐて、津島村より國府市場を過ぎて、釣の渡を越し四御神村の山を越え、沼の城を攻め取るべし、と謀を定めて押入りけり。直家は斯とも知らず、沼の城を出で古津の西宍井に陣して居ける處に、萬成山の砦より敵三方に分れて押寄すると告げ來る。前には敵死地を守りて城に籠りたり。又大軍攻め來ると聞えければ、色めき騷ぎけるに、直家少しも萎縮まず嘲笑ひ、此の城だに攻破らば、敵は幾萬もあれ蹴散して捨つべき物を、と言ひも敢ず、

萬死に一生も有るべからず。同じ枕に死なん、とて是も打連れけり。永祿六年三村は穂村の興禪寺といふ山寺に陣して有りけるを、遠藤兄弟衆に紛れ、後の竹林の中より忍び入り、椽の下に隱れ、夜更けて窃に障子の外に立寄り、内を指覗くに、家親柱に倚掛り居たり。天の與ふる所よ、と鐵炮を指當て火蓋を切れば、火繩の火消えけり。喜三郎呆れて居りしに、修理つと外に出で、夜廻の人に紛れ、篝の側を通りさまに、羽折の裾に火を附け、高聲に番の者共を戒しめ、元の所に行きて、兄が火繩に火を移せば、噪て三村が胸下を打貫きたり。其の鉛子の跡今に柱にありとかや。此の時三村が側に三村孫兵衛親成といふ老功の兵有りけるが、ちつとも騒がず、人々靜まり候へ、とて屏風を家親が前に立て、外の體を聞くに靜かなり。扨は夜討にては無りきとて物見を出すに、三星より打つて出でたるけしきもなし。親成下知して、今夜備中に引返すべし、とて松山に歸りて後、家親が死したる事を人皆聞きたりけり。親成無かりせば大に騒いで敗北すべきに、と人皆言ひ合へり。遠藤は元の竹林に隱れ居りしが、三村は死したりと覺ゆるに、あまりに靜かなるは心得ぬ事と思ひながら、忍びて出でけるに、鐵炮を忘れたり。後に狼狽へたりと譏られんも口惜くて又立歸り、忍び行き鐵炮を取りて、兄弟共に備前に歸りけり。後に一萬石與へて、宇垣の城に居らしめ、修理も中村正崎の城を預りけり。家親

て死しければ、直家火を掛けて燒拂ひけり。和田にも是が爲に士卒力を失ひて落ち散りければ、金川の城の松田が一族と一つにならんとて、和田の城も一時に陷りけり。又上道郡中島落城と龍口落城と一日の事なり。直家龍口より引返す時、中島の城を取り巻かれしに、城主中島大炊無勢にて防ぐ事能はず。榎の大木の洞の有りしに隱れたりしを、探し出して遂に討たれたり。中島が子孫今にあり。又其時の榎今に有りて、囘り三丈許なり。

○遠藤喜三郎三村家親を打つ事竝備前明禪寺合戰の事

浮田直家近國を攻め取らんとす。毛利元就備中松山の城主三村紀伊守家親に下知して、美作の三星の城を攻めさせらる。直家三村と戰ひなば、隣敵其の隙に寄せ來るべし。謀をもて三村を討ばや、と思ひ、遠藤喜三郎といふ新參の士を近づけ、

遠藤は元阿波の人なりとぞ。此の時備前國津高郡加茂といふ所に居たりとも言へり。

汝は三村成羽に有りける時、汝も成羽に有りて能く見知りたらん。美作に忍び行き三村が陣に入りて、討たん事を嬉む所なり、と言ひければ、遠藤三村は手易く討たるべき者に非ず。然れ共斯る仰を承る事面目なり。忍び入りてこそ見據はめ、とて作州に赴きけり。弟の修理も、兄は今度

んも志に非ずと思ひ返し、元常の脇指を執りて引寄せ、首を打落し、袴を脱ぎて首を包み、九十九折なる道を北の麓に落行きしに、早川左門来りて見るに、元常の尸は朱に染まりたり。大に驚きて、清三郎こそ殿を斬りたれ、と呼りて追ひ駈けて麓に下りけるが、清三郎は小舟の有りけるに乗らんとせしに、左門追ひ着たり。清三郎振返りて切り合ひけるが、早川が眉間を切つて切り伏せたり。城より追々馳せ来りけれ共、はや舟に棹さして向の岸に上りぬ。城兵は上の瀬地蔵岩の邊に繋ぎたる小舟に人数多取乗つて、押せども指せども動かず。其の内に清三郎岡山に易々と遁れ帰りけり。直家は、清三郎が若年にて事よく遂げん事叶ひ難かるべし、生て還らん事は思ひも寄らず。あはれ由なき謀をしつる物哉、と悔まれけるに、豊前清三郎を打連れて元常が首を出す。直家大に驚き、且悦び且怪みて、其の功を賞せらるゝ事並々ならず。是より岡剛介といへり。龍口には人々歯を噛みて怒れども詮方無し。和田の伊織を大将として、逆寄せに岡山に打つてや出でんと言へ共、和田も自らの城を捨てて無謀の軍すべきに非ず。皆呆れたる計なり。直家其の勢を料りて、龍口に押寄せたれば、城主を失ひたる者共心々になりて、防戦の術なく多くは落失せければ、元常が頼み切たる山口與市も詮方無く、士卒と共に落んも面目なし、とて三の廓にて腹切り

修理城下の流に漁獵せしが、尺八の聲聞えたり。人に見せしむるに、清三郎が有樣を告ぐれば、劍術の師加藤十藏小姓の早川左門彼是六七人、川向に渡りて其の樣を見るに、容貌勝れて美しかりけるが、見る人ありと尺八を納めて、庵の中に入らんとしけるを、止めて問ひけるに、宇喜多家の士岡清三郎と申す者なるが、無實の罪によりて、已に誅せらるべきを、家老憐みて爰に隱し置きたるにて候。洞簫は直家の猶子基家堪能にて、少し習ひて候ふなり、と申す。其有樣只人ならず覺えければ、元常打具して龍の口に歸りけり。人々敵方の者なり。用心有るべし、と諫めけれども、直家さへ恐るゝに足らず、假令間者たりとも、我又彼に附きて謀をなさん、とて岡山に間者を遣りて、事のやうを聞くに、清三郎が詞に違はざりければ、元常疑ふ心もなく清三郎を寵愛し、軍場に忘り、城上の北の樓に醉臥する事度々なり。赤坂郡和田の城主和田伊織之を聞き、龍の口に來りて誅むれど、聞き入れず。斯くて炎熱の比北樓の上に酒宴して、日頃好める尺八を代る〳〵吹きて、清三郎が膝を枕にして睡りたり。清三郎好き隙なれば、首取らん事い と易しと思ひけるが、如何樣過ぎつる比より、淺からず寵愛したる人を、空しく討たんは人情に非ず。如何せんと躊躇ひしが、否々仰を奉りて、身を捨てて此の城中に謀り入るからは、時を得て私の情に換

噬着く所にて一刀刺し、其の身も打損じければ、元常が首を取り、隠し置きたる小舟に乗り、遁れ得て直家の許に帰る。元常死して後龍の口の城落たいければ、直家軍兵を入れ換へて守らせけり。

又一説に、最所元常浮田家に従さりしかば、直家與太郎基家に長船紀伊守延原土佐守を添へて攻めさせらる。元常城を出で山の麓段の原に陣して、竹田河原にて軍せしに、勇氣當り難く、基家も岡山に引き帰せり。城は險阻に據たり。手易く攻め難し、と直家家臣共と相謀るに、長船紀伊守修理は武略餘りあれど色を好む病あり。天晴一手段して城に入り、謀り討たばや。なれ共才智賢き健者ならでは叶ひ難し、とて切りに岡清三郎を見やりければ、直家とかく物言はで止みけり。さて程經て直家清三郎を捕へて押籠置き、老臣共に、清三郎は不義の振舞あり。首を切れ、と怒られしに、皆彼幼少より奉公し、今年十六歳に及びて一度も過なし、と諫むれども聞入れず。奥に入りさまに、岡豊前を招き、清三郎を私に落せよ。清三郎には我よく謀を言ひ聞せたり、と言ひしかば、豊前斯く計ひたり。其明の日押籠めたる牢を開くれば、清三郎は見えざりければ驚きたる計なり。豊前は清三郎を盗み出し、龍の口の向枚石原に、緣の僧の草庵を結びて居たりしに頼みて隠し置きけり。或時

有つて元常と不和なり。或時須々木が東國より求め得たる黒の馬を盜み出して打乘り、山下へ馳せ下る。城中より、何とて馬に乘るや、と呼れ共耳にも聞き入れず。枚石川原を東へ駈け行きければ、須々木も矢倉に上り、之を見て、憎き奴哉。討止めよ、と下知しけれ共、疾く川を打渡り、龍の口の城に乘上り、船山の須々木が士にて候。故無きに死罪に合ひ申すべき由を人の知らせ候故、遁れ參りて候。あれ見給へ、追手の者共川向に充ちて候。城中に隱され候へ、と言ひければ、元常先づ山下に隱し置きけり。須々木が士共岡に誰れたるとは知らず、彼の乞食の老女を川原に引き出し、歸らずば母を殺すべし、と聲々に呼りけり。岡彼の老女は母にて候。今歸りたり共母子一所に死なん事定りたり。とても乘つべき命を君に奉り、此の憤を散じなん、と言ひける中に、彼の女をば磔にして殺しければ、鄉介悲み怒り、母の仇目前に有り。如何にして此の恨を報ゆべきか、と齒を嚙みて歎きければ、元常も心許してけり。岡飽く迄賢々しき者なれば、年月經ざる中に、元常が密謀をも聞くばかりに愛せらる。岡今は時を得たりと直家に、日を定めて矢津の砦の軍兵を龍の口の本丸北の川向に出され、小舟を隱し置かれよ、と告げ遣りて相圖しけり。本丸の北の方に閑所の有りけるに、元常軍評定する所なり。其の夜も元常は此の所の欄干に倚り居たるを、岡つと寄りて引組て下に轉び落つる。拳て思ひ設けたる事なれば、

島村斯る謀有りとも知らず本丸に入る處を、兼て計り合せたれば、取圍みて討取りたり。島村が軍兵一騎駈に疎に成りて來るを、道に待ち受けて討取り、驀て兵を出して鷹取山へ押し寄すれば、防ぐ者無くて退き、散々に成りぬ。直家の手段にて二人を殺し、之より勢強く沼の城に居りて、砥石には弟の春家を置き、終に浦上を滅して備前を悉く平均せり。

沼の城に居て元常と姻類なりしに、元常毛利家に談はれて直家に背く。直家討滅さんと思へども、龍の口は峯高く大川麓に繞り、要害よかりければ力攻にして落すべきやうもなく、矢津に砦を構へ、軍兵を籠め置きたり。直家岡鄉介と言ふ謀ある者に、密に手段を言ひ合せ、或時、直家、鄉介は云々の罪有り、搦來れ。首を刎ん、と言はれしかば、討手の士行向ふに疾く出奔してけり。直家僞りて怒る事大方ならず。鄉介は備中に匿れ居たりけるが、西郡の中にて、乞食の老女の道に伏し居たるに立寄り、こは抑不思議にも恙なく御座けるよ。年比心を盡し尋ね進らせしに、行會ひぬるこそ嬉しけれ。然ど淺ましの有樣や、さぞ見忘れ給ひしならん。幼き時立別れ懷しの母上よ、とて連れ歸りぬ。乞食の女は怪しき事に思へ共、俄に豐なる躬に成りければ、知らぬ體にてぞ有りける。稍有りて鄉介龍の口山の川向ひ、金山寺、山の谷山、船山の城主須須木攝前が許に仕へ、尋ね出せる乞食の老女を己が母と名附けて人質に出しけり。須々木は故

に川を渡らん爲に假橋を架けさせられよ。常は取置きて往來の時のみ架けなん物を、と言へば、備中易き程の事とて然したりき。直家謀り得たりと悅びて、宗景に告げて、沼より天神山の間に狼烟を擧ぐべし。然らば備中を討ち得たりと知られよ。狼烟擧げなば、島村が許へ使を馳せ、中山謀叛したる故、直家に下知して討せぬ。疾く沼に駈け向ひて、直家に力を合せよと下知あらば、島村年老たれども、遠く慮るに違なくて、一騎駈けに沼の城に來るべきを討たん事易かるべし、と日を約しぬ。斯くて其の日に及びて沼の鷹狩場に直家有りて、日暮に成りて城に入り、獲り得たる鳥を出し酒宴に及べり。夜も甚く深けぬ。備中も醉たり。直家、我今夜は爰に臥すべし、と言へば、備中が士も座を退出でぬ。直家打臥す體にもてなし、思ひもかけぬ不意に備中を只一刀に伐殺し、躍り出て大音聲を擧ぐれば、兼て相圖しける者ども、城下に忍びて待かけたれば、我先にと城内に馳せ入りしかば、城中何事ぞと驚きあへり。川向に伏したる兵も關を作り、彼の設けたる假橋を渡りて攻入り、狼狽へたる中山が士共を切り伏〳〵城を攻め取りけり。斯くて狼烟を擧げしかば、宗景即島村が許に使を馳せて告け遣りしかば、島村聞きて、續け者共とて馬に鞍置かせ打乘り、從兵七八人許にて沼の城に來る。城は疾く乘取りたれば、直家本丸に在りて門を閉ぢたり。

や。只是のみ心を苦め謀を廻らし、祖父の恥を雪がばやと存ずるなり。早や十五に成り候ひぬ。殿さまの宗景を殿さまに奉公仕らんやうを計らはせ給へ。假初にも此一大事口に出ださせ給ふな、と言ひたりしかば、母驚き且悦びて、密に宗景に告げて、直家初て仕へけり。直家斯る智謀有りし故、宗景寵愛し、乙子の城を預けたり。此の時三郎右衛門とぞ言ひける。此の比中山備中は沼の城に在りしが、宗景の心に反く事あり、宗景直家に密談す。直家、某は中山が女を妻とし、婚姻の好み深き者なるに、斯る仰を承る事不忠を存ずまじきと知召されしならん。力の限謀り見ばや。只一つの願の候。其を許し給はらんや、と申す。宗景悦びて、何事にもあれ望むべき事、其志に任せん物を、と言へば、祖父忠功の者にて候ひしに、島村私に殺したりき。君を輕むる者なれば、願ひ望まずとも必ず誅せらるべき者なり。祖父の仇に候へば、許を蒙りて殺し申さん、と告げければ、宗景聞きて、島村汝が祖父を殺せし時、予幼かりし故に、島村權威を恣にしたりき。今我も憎み思ふ處なり。謀よくして島村中山二人を討つべし、と許したりしかば、直家、沼の城川の東に茶園畑といふ所あり、爰に茶店を設け、鷹狩に出で、日暮れば此所に入りて臥し、又沼の城に往きて、いと打解けたる親みをなせり。或る時直家中山に、此の川隔りて南の方に廻れば道遠し。茶園畑より直

子を與家といふ、父死する時出奔し、甚だ愚かにて備中邊にさまよひ、乞食の體なりしが備前に歸り、西大寺福岡の側に有りけるを、父に懇なりける阿邊定善といふ者養ひ置き、愚なれば牛飼童とせり。年經て召使ふ下女を配せて子三人あり。貞家忠家春家是なり。天文五年與家死す。三子の中貞家八歳なるが定善が方にあり。弟二人六つと四つになりけるを、笠加の尼寺に、貞家の母の姉比丘尼となり居たるに頼み置けり。貞家物靜なる生得なりしが、十一歳の比より俄に愚昧になりて、誠に蔽蔘をも辨へず。天文十五年貞家十五歳に成りぬ。母の方に往けば母涙を流し、三人中にも兄なればせめて人並にもあれかしと思ひしに、すぐれたる愚さよ。人並ならば殿に申して草履をも取らせなん物を、如何なる因果にて、斯く愛きことを見るやらん、と打萎れたるを、貞家見て側近く居より、實に愚なるには候はず、といふ。母聞きて、汝ほど愚がらも猶賢しと思ふや、といよ〳〵歎く體なり。貞家、此處に一の大事あり。誰にも語らせ給ふな。若し洩し給ふ程ならば、其の事の叶ひ候まじ、と言へば、母其は如何なる事ぞ、と問ふ。貞家、よく聞き給へ。祖父泉州なれば島村が殺したりき。父仇を得討給はで口惜くこそ候へ。如何にもして一度祖父の弔を遂けんと存するに、島村を殺すに過ぎたる事や候。我れ若し賢きと島村聞きなば、其儘に助け置くべき

○信玄鹿島傳右衞門を呼ばれし事

鹿島傳右衞門といふは伊豆の人なり。若き比武名有りけるが、後に髪を薙ぎて久閑と稱し、伊東に引籠りて居たりけるを、信玄聞きて、三千貫の地を與へて招けり。久閑、我年老いたり。何の爲に奉公すべき、とて出でざりけるを、尋ね問べき事あり、とて强ひ呼出し、春より秋まで夜々軍物語せさせて聞かれ、自筆執りて是れを書記されけり。信玄四方に大國の敵ありて威名を振はれしも、斯く心を用ひられし故にや。

○備前國龍口落城の事附浮田直家の事竝岡剛助高名

永祿年中備前上道郡龍口山の城に、最所治部元常といふ者あり。此時浮田直家劒に浦上を滅し、直家は和泉能家の孫なり。能家は元浦上掃部助村宗に仕へ、備前邑久郡砥石の城に居れり。浦上の長臣島村豐後守、後入道して貫阿彌と言ひしは、鷹取山の城に有りて威勢ありて能家を殺害せり。之れ享祿四年の事なり。浦上細川高國の加勢として攝州にて討死す。其の子與次郎といひしは幼少にて、居城三石は播州の境敵に近き故、和氣郡天神山に移れり。與次郎は浦上遠江守宗景といへり。年長じて備前皆從ひ、美作も半ば屬せり。宇喜多能家の

所々一揆起りけるに、淺井馬を乘寄せ、水野下野守使者淺井六之助案内者たる由大音に呼りければ、皆道を開きて恙なく夜中に大樹寺まで引取らせたまひぬ。後殿は大久保五郎右衞門忠俊なり。翌日岡崎に歸入らせたまひけり。淺井をば池鯉鮒より返させ給ひ、後の證にとて御扇子を裂きて賜はりける。扇の骨六本なりし故、永く淺井が家の紋とするとかや。是より東照宮の信義厚き御事に人々懐き從ひ奉りける。

○武田信玄忍の者を討たれし事

甲斐の忍びの者數十人、信玄に叛く事有りて、山小屋に立籠る。信玄謀にて手易く討取ばやと思ひ、殘り居ける忍びの者に、城中に忍び入るに、如何なるが入り難きや、と問るゝに、内の守り嚴しく、夜廻の聲繁く、其の體明はなるは忘りもまた料り易く候、といふ。信玄今山小屋に忍び入らんは何に、と問るゝに、彼者共既に能其の理を知り、靜り反りて音もせず候へば、其便を得ず、と答ふ。信玄其より山小屋に向つて陣し、守り甚だ嚴しく夜廻り隙なく呼らせたり。日數を經てやゝ忘り出來ぬる時、山小屋より夜討に出でけるを、素より謀りたる事なれば、伏兵を置きて討ちとられけり。

汝等一々首を刎べし、とて刀の柄に手をかけ、はたと睨まれたる勢に、恐れ狼狽てて平伏しければ、信長散々に罵りて歸られけり。

○東照宮大高城を引取り給ふ事

義元討死の時、東照宮は大高の城に御座せしかば、苅屋の水野下野守信元、淺井六之助道忠をもて、桶狹間に義元敗軍命を落され候ひぬ。今川家の城々共皆開け退き候。疾く岡崎へ歸らせられ然るべからん、と告申されしかば、早や御歸あれ、と人々申しけるを聞召し、下野守は我が母の兄弟なるは、誰も知りたるよ。然れども今は敵と別れたる中なれば、若しや我れを欺からんとの謀なるを知らで、此の城を明退きなば、逃走りたりと言はれん事、弓箭取る身の恥辱、後世までも嗤ひ草たるべし。淺井を押留め置きて、味方の告を待ちて後こそ參河へは歸らめ、と仰ありて、其までは二の丸に御座せしが、本丸に入らせ給ひて、持口を御配り有りける處に、夜に入りて岡崎より鳥井伊賀守忠吉、義元の變を告げ奉り、今川家の人々も駿州へ引取る旨を聞し召し、此の上は兵を返すべし。なれども夜闇くて亂るべし、とて月の出づるを待ちて城を打出でさせ給ひ、淺井を嚮導に用ゐられ、池鯉鮒の驛に著かせ給へば、苅屋よりも討つて出で、

山陰より切つてかゝり、忽勝負を決すべき、と大音聲にて下知せられしかば、士卒皆競ひ勇みけり。旗を絞らせ山陰より桶狹間に打向ふ。義元は駿州の先陣打勝ちたりと悦び、酒宴して有りしに、折しも天俄に曇り、夕立うつすに似て風雷烈しかりければ、信長の兵掛り來る物音も聞きわかず。不意の戰に周章てたるばかりなれば、水野太郎作清久一番に首を取る。義元の網代の輿を信長見て、敵の旗本疑なし、とて追立て〳〵戰はれしかば、義元も返し合せて戰はれしを、服部小平太鎗つけ、毛利新助其の首を取りたりけり。左文字の太刀松倉獅の刀を分捕にすとぞ。

○信長上京の事

信長桶狹間にて義元を討取りて後、潛に士七八人召具し、京に上り帝都の事ども窺ひ見、それより三好が高屋の城に往きて、長慶に望まれけるは、信長が尾張にて領し候地を進せ候べし。其地に當る程畿內にて賜はりなば、三好家の先陣たるべし、と言はれしかば、三好聞き受くべきを、松永彈正諫めて其の事止みにけり。此の時齋藤義龍信長を殺さん爲に、士十二人堺の津に出したりと信長聞きて、堺に到り、義龍が士の旅宿に往き、何義龍が討手とや、憎き奴原なり。

り。新八郎忠俊後に五郎右衛門といふ。今川義元討れて、東照宮大高を引かけ給ふ時、夜半に大雨にて士卒亂れけるに、忠俊御側に附添ひ奉り、度々乘返し詞を掛け、人衆を纏めて引退きけるとなり。

○桶狹間合戰今川義元討死の事

永祿三年五月、今川義元大軍を率ゐ、織田信長を討つ。東照宮此の時陣せさせ給ひ、丸根の砦を攻め落し給ふ。今川家の軍兵も鷲津を攻落し、義元桶狹間に着陣せらる。信長は素より鳴海に打て出で、防戰せんとの志なり。老臣共、大敵なれば淸洲を守り給へ、と諫むれども聞き入れず、酒宴して猿樂に雜生門の曲舞を舞はせられし時、敵既に攻來る、と告げ來る。信長少も騷がず、人間五十年、下天內を競れば夢幻の如し、といふ處を、押返し謠ひて忽螺を吹き立てさせ、物の具して主從僅に六騎、歩卒二百人許駈出でて熱田の宮に詣で、願文を神殿に納めらるゝ中に、軍兵追續き來りけり。源大夫の祠より東を見れば、鷲津丸根攻め落されたりと覺えて黑烟立昇る。濱手は潮滿たれば、笠寺の東の道を一文字に進んで、砦々の味方に使を馳せ、其の兵を引き具し、中島の砦に至りて、我謀は、今川の大軍悉本道へ繰出し、旗本小勢ならん所へ、

掛けて、又梅坪に押寄せ、三の丸まで攻入り、火を放ちて焼き立つる。其の焔天を照し、関の聲響き渡りて聞えければ、丸根鷲津より是を見て、三河の敵遙々と踐み越えて攻め入りたるは、如何さま故有りと覺ゆるぞ。疾く後詰せよ、とて寺部梅坪に駈け向ふ。其間に東照宮麾を執らせ給ひ、米負せたる馬千二百匹打連れて、事無く大高に運び入れさせ給ひけり。丸根鷲津に殘る者共是を見れ共、大かた後卷に出でたれば詮方なし。東照宮軈て軍兵を引き纏ひ、岡崎に還らせ給ふ。人々今夜の謀略及ぶべきに非ず、と申しければ、聞召され、此甚知り易き手段なり。先づ思ひも寄らぬ寺部梅坪を攻めて火を掛け、丸根鷲津の軍兵を後詰に出させ、引き違へて兵粮を運び入れたりしなり。兵法に神速を貴ぶといひ、又其の不意に出づると言へる事有り、と宣ひければ、皆此殿臨濟寺の雪齋に兵書を讀み習ひ給ひしかども、斯る謀はよも出でじ、天性勝れて大將の道を得給へる、とぞ申ける。此れ十八の御歳の事なり。

○大久保忠俊の事

大久保藤五郎は越前の人なりしが、武者修行して三河に來り、吾姓を譲るべきは、宇津新八郎なり、とて大久保の姓を譲りしが、其印に功名せん、とて安祥の城攻に先駈して終に討死しけ

常山紀談　巻之二

○東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事

今河義元尾張國大高の城に、鵜殿三郎長持を置かれけり。織田信長も所々に城を構へ、丹家には水野帯刀、善照寺には佐久間左京、中島には梶川、驚津には飯尾近江守宗定、又丸根には佐久間大學助盛重を置きて、其の外寺部舉母廣瀬にも砦あり。大高に兵粮を入れなば、驚津丸根に貝を吹くべし。寺部舉母廣瀬の砦より馳せ集り、丹家中島より後詰せよとぞ定められける。義元東照宮の御許に使をもて、大高に兵粮を運入れさせたまへ、となり。東照宮、心得候と仰せて、驕て打立ち給ふを、酒井石川等、信長の手當由々しく候。中々大高に兵粮入れん事思ひも寄らず、と申せども、聞召し入れられず。我に謀有り、とて先兵を分ち、福釜の松平左馬助親俊、酒井與四郎忠親、石川與七郎等四千許、永祿二年四月九日の夜半に、大高、驚津、丸根を脇になし、寺部の砦へ押寄せよ、と下知し給ふ。東照宮は八百許の兵を率ゐ、兵粮米馬に取り積ませ、大高の城二十町許り脇に控へ給ひけり。先陣寺部に押寄せ、城中騒ぐ處を一の木戸口打破り、火を

の謀略なりと察して、斯る蛙の爲す如き事は、幾度行ふとも蔗分舟となりて、謀略の穴を見顯し立騒がせんとの事なるべし、と申しければ、秀吉直立ち上りて憤り、我れ遠からず彼れ昌幸が生首見ずんば有る可からず、と以ての外に立腹なしけるにぞ、竹中笑うて、昌幸は忠臣なり。君たる信玄ある事を知りて、他の信長公在す事を知らず。臣として君の爲めにするは理の當然なり。斯る智謀の士を味方になすこそ良將の工夫なれ。何故に左は怨り給ふぞ、と申しければ、秀吉大に笑ひ、是れ僞なり、斯る智將を何とて闇々亡はんや。見給へ、秀吉が恩を施し艸て幕下に附けんものとて、眞田が使者を重く饗應し、早々返翰を認めて返されける。深意の程こそ凄まじけれ。時に永祿十二年六月なり。斯くて眞田は使者の歸りしと聞き、急ぎ呼寄せ、京都の樣子を尋ね、秀吉より如何返事せしぞ、と披き見るに、其の文體甚だ叮嚀にして、怒の心少しも見えざりければ、昌幸心中に怖を懷き、誠に秀吉は地中の龍に等しき武士なり、と彌々内心に感じける。

れしと聞きつるに、何用有りて我が方へは書翰を送りしぞ。是れ武田は近頃織田の縁者となりぬれば、定めて通例の見舞なるべしと想ひつゝ、其の使者を呼入れ、昌幸が書翰を披き見れば、豈圖らんや、他の文言とては一つも無く、唯一首の和歌なり。卽ち其の歌に、

難波津の蘆わけ舟におどされて菅の庭鳥立ちさわぐなり

秀吉之を見て良暫し考へしと雖も、常時は軍事に紛れて未だ和歌の心懸無かりしかば、更に其の意を得ず、繰返々々讀み居たりし所へ、竹中半兵衞重治來りければ、秀吉大に悅び、竹中氏好き所へ來られたれ。今武田家の臣眞田昌幸方より斯く怪しの歌を送れり。某按ずるに、我が不學なるを侮り、體もなき歌を以て我れを迷し、返辭の樣子を探らん爲めなるべし。憎き眞田めが振舞哉。いでや引裂捨てんず、と大に怒りけるを、竹中押禁めて、眞田昌幸は未だ若輩なりと雖も、中々尋常の者に非ず。何ぞ童蒙の戲れをなさんや。して其歌は何と申し送りしぞ、と尋ねければ、秀吉彼の歌を出し竹中に見せければ、重治之を篤と視て眉を顰め、難波津の蘆わけ舟とは誰を指したる辭かは知らず。但し菅の庭鳥とは、歌道の祕密にして蛙の事とか聞き及びぬ。立騷ぐとは心得ず、と考へ居しが、暫く有りて手を拍ち、一度は驚き一度は感じ、偖怖しき眞田哉。先達君の遠計にて甲府表に童謠を流行せ、信玄が心を苦しめしを、彼れ必定此方

之を承り、君の御病氣の根元を直さん良藥有り。之を用る給はば忽ち平癒すべし、と聞き、信玄起き直りて、夫は如何なる良藥ぞ、と尋ねけるに、昌幸答へて、御病根は頼む甲斐なきにつけては誓なし。勝手の神の名こそ惜しけれの歌に候はん、と申せしかば、信玄驚き、汝我が病根を如何して知りたるぞ、と問ひけるに、昌幸笑うて、是れ信長の家臣羽柴秀吉が謀計にして、是れぞ人を欺く子房が智略なり。君欺かれて萬金にも替へ難き貴命を失ひ給ひそ、と申しければ、信玄はたと膝打叩き、我ながら愚なりき、と限り無く悦び、汝が一言に因りて我が疾病最早癒えたり。疾々北條を撃ちて上洛を遂げ、豫ての望みを果さんとあれば、昌幸も倶に欣喜び、童子が歌を以て我が君の命を縮めんとせし秀吉こそ面悪けれ。我れ此返報に一の書翰を以て、秀吉が肝を冷させ呉れんず、と大に怒れば、信玄昌幸が智略を感じ、古今に又も得難き名士なり、とて信州上田の城を與へしにより、昌幸恩を謝し、是により上田の城へ移轉しが、其後昌幸何やらん書翰を認めて京都へぞ送りける。此の時羽柴秀吉は京都の政事を掌り居たりしが、甲府へ入れ置きし間者より、信玄此方の謀計に當り、病床に打臥せし由の注進を聞きて心中大に悦び、我が謀略既になれり。信玄を亡ぶ事近きにあり、と獨り笑みして在りける所、信州上田の城主眞田安房守方より使者入來の由告げしかば、秀吉怪み、昌幸は漸く此頃上田の城を與へら

甲府へ歸陣の途中、信玄勝手大明神の前にて落馬せし事まで委しく告げ來りしかば、秀吉大に喜悦び、既に信玄が命數を縮むる時至れり、と密に一首の歌を作りて甲府へ遣し、間者に之を諷はせ、何國ともなく流行せける。卽ち其歌に

頼む甲斐なきにつけては誓ひてし勝手の神の名こそ惜けれ

信玄は落馬の後種々と心に掛けて晝夜案じ煩ひ、若しや我が命數の限りし兆候にもや有りなんか、と快々として樂まざりける。折から甲府近邊怪しき歌の流行りければ、信玄、偖は我が命數限れる前兆なること疑ひ無し。我が大望水の泡と成りぬるか、と此事を明け暮れとなく苦に病み、日增しに疲勞れけるにより、諸方の名醫を集へて種々治療を加へられけるに、全く其の甲斐無く、今は早や食事も進まぬ程に成りぬれば、甲府の諸將大に驚き、偖は此の程何國とも無く怪しき諷の流行出せしは、此の前表の始めにて有りけるか、と皆々恐を懷き、安き心地も無かりける。眞田昌幸之を聞きて、偖ては織田家の猿冠者めが所業にて、我が君を欺きしよな。いでや我君の病を癒さん、とて甲府へ來り、急ぎ登城して信玄の病床を訪ひ奉りしに、信玄賴み少なの體に在しければ、昌幸進み寄り、君の御病體は如何に候や、と伺ひしに、信玄答へて、甚だ苦し、我れ此度は所詮本復覺束なし、と絲の如き甚と細りし聲を振り放ちて宣へば、昌幸

りしかば、昌幸令して、早く小屋々々へ火を掛け、鎧武具は望み次第分取りせよ。各々高名は此時なり、と大音に呼はりければ、皆々勇氣日頃に十倍し、陣々に火を掛けしにぞ、北條勢大に肝を消し、殘りし兵士共我先きにと逃走りける。

○羽柴秀吉遠計を以て信玄を欺く事

武田信玄北條と戰ひけるに大に打勝ちければ、勝鬨の式を取行ひて、甲府へ凱旋せんとて諸勢を纏め引揚けつゝ、勝手大明神と云ふ社の前に來掛りしに、如何致しけん信玄の馬忽ち跳り上りて、信玄落馬なしければ、近習の諸將大に驚きて介抱せしに、左迄の事も無かりしかば、乘物に移られ、此の社は何と申す神なるぞ、と尋ねけるに、近習の者何氣無く答へて、是れは勝手大明神と稱し候、と申しければ、信玄思ふやう、勝手と云ふ神の前にて我が落馬せし事、如何にも不審や、と心に掛けつゝ甲府にぞ歸られける。爰に織田信長は當時近畿に威を震ひ、何卒天下一統の志を立てんと思ひける所に、何分にも信玄の威勢に當り難きにより、百方心を碎きけるが、家臣羽柴秀吉其身京都にありて、諸國に間者を入れて國々の變りを窺ひける所に、此度武田信玄今川を攻潰し、北條の後詰と戰ひしが、眞田の智計を以て北條家の大軍を破り、其後

と我れも〳〵と酒を呑み、舞ふも有れば謡ふも有りて、左も勇々しくぞ見えにける。信綱苦々しき體にて昌幸に對ひ、這は何等の擧措なるぞ。陣中に於て諸卒に酒を飲ましめば必定過ち有らん。此儀は無用なるべし、と云へば、昌幸答へて、先々見給ふべし、我胸に一計有り、とて士卒を呼び、何と皆々酒を飲み寒氣をも忘れしか、と問へば、皆一同に、然候ふ。大將の御情にて寒氣を凌ぎ手足暖まり候、と舌鼓を打鳴して笑ひ樂むの體なりしかば、昌幸指さし、那れ見よ方々。薩埵嶺倉澤山の峠等に備へし敵兵、左こそ寒き事ならめ。弓を引くにも鐵炮を發つにも、手屈まり進退自由ならざらん。平地に在る爾等さへも寒氣嚴烈しき故、酒にて暖まりしならずや。此勢にて那の敵を一當あてんは如何にぞや、と申しければ、皆々踊り上りて勇み立ち、是れこそ望む所なれ。酒を給ひし其代に功名して、敵の首を肴に又々祝ひの酒宴を仕らん、と力足を踏み鳴らしてぞ悦びける程に、昌幸令して、左らば打立つべし、と眞先駈けて馬を出しければ、誰か猶豫ふべき、我劣らじ、と三千餘人酒の勢に川を渡りて薩埵嶺へ押登りけるに、折節雨霰降りて其の寒き事云はん方なし。然れ共眞田勢は更に事ともせず、喚き叫んで押寄せけるに、昌幸が謀りしに違はず、雨霰降りて寒氣殊に嚴敷かりければ、峠に扣へたる北條勢、寒氣を凌がん爲め皆々峠を下りて民家に入り、陣所々々は唯旌旗指物のみ建て置きて一人も居らざ

守昌幸をして、次回の先鋒となしける程に、昌幸は手勢僅に二十八騎を従へ、敵陣を見積りけるに、山縣敗れて後は北條勢大に勇み、薩埵嶺倉澤山に陣を取り、山風に旗指物を飜へし、悠然として扣へたり。昌幸密に敵陣を窺ひ、何やらん打點頭くの體なりしが、驕て馬を返して我が陣にぞ歸られける。斯くて兄信綱を招かんとて使を遣はしけるに、早や信綱は穴山、木辻、淺見、根津、望月、樫山など一騎當千の兵八百餘人を従へて、昌幸の陣所に來りければ、善き所へ來られし、とて豫て設の酒宴の席を開きければ、信綱不審り、汝如何なる謀計を以て、此の大敵を破らんとするや。此の大敵を前に扣て、酒宴とは心得ぬ、と問ひければ、昌幸笑うて、計は密なるを以て良とす。故に今敢て爰に云はず。先づ氣を靜めて酒呑み給へ、と有りければ、信綱心に、此度は如何なる謀計をか用ふるならんか、と想ひつゝ居たりしが、昌幸暫くにして布下彌四郎を呼び近け　其方は是より此の近邊にて、酒を求め來るべし。いで疾々、と命じければ、布下は、畏り候、と急ぎ諸方を馳廻り、數多の酒を求め來るを昌幸大に悦び、悉皆酒樽の鏡を打抜かせ、是れに柄杓を添へ諸卒を呼び出し、如何に汝等今日は別けて餘寒堪へ難くはあらずや。因りて皆々打寄りて、此の酒を飲み寒氣を凌ぐ可し、とて兵粮炊の大釜に味噌汁を沸させ、一人毎に柄杓を與へければ、皆々悦ぶこと限り無く、大將よりの御免しにて寒氣を凌ぐ嬉しさよ、

盛を始め、數度軍功有りし人々は皆上座に据ゑ、晴信の舍弟武田孫六信連、今福善九郎、跡部大炊之介、長坂左衞門を始め軍功無き人々は、貴豪と雖も眞田が郎等相木森之助、筧十兵衞などの下座に据らせける程に、軍功無き人々は甚だ面目を失ひけり。其後饗應も三段に區別ち、上の部は朱椀にて三の膳附、中の部は朱椀にて二の膳附、下の部は黑椀にて本膳ばかりなり。上中の膳部は魚鳥を用ひて結構なりけるに、下の部は皆麁末なる精進料理を進めければ、武田跡部今福長坂を始め、大に赤面して不興氣にぞ見えにける。軈て信形席上に出て申しけるは、今日の饗應 僻事の樣なれ共、決して然に非ず。數度の合戰に一度も敵の首を取らざる方々は、慈悲心深くして後生を大事に懸け給ふ故に、殺生を好まざると覺ゆ。左樣なる人々は、平生五戒を保ちて精進し給ふらん。其御方に信形魚鳥を與へ、破戒をさせんは本意に非ず。夫れ故斯くは謀ひ候、と申しければ、軍功有る者は、一入興を催し賑ふと雖も、軍功無き人は彌々面目を失ひ、竊鼠々々と退出し、誠に稀有なる饗應や、と笑ひの種とぞなりにける。

○眞田昌幸智謀北條勢を破ぶる事

薩埵嶺の役初戰に、武田方の先鋒山縣昌景大に敗れければ、信玄其の先鋒を繰代へ、眞田安房

易きの情理なり。此の間將卒孰か信直の右に出づる者有らん。然らば吾れ之と鋒を聯ねて以て家君の先鋒とならば、向ふ所摧破らざる無きのみと。就忠之を聞きて慚服なし、猶て元就に告けて之を娶りけるにぞ、信直果して大に喜び、其の力を盡す事頗る勉めたりければ、是れより毛利氏の兵鋒益々鋭利かりける。

○板垣信形饗應黒白を分る事

武田信玄は豪雄にして近國に敵する者無く、向ふとして勝たざる事無かりけるに、天文十五年は別けて數度合戰有りしと雖も、甲府勢何時も勝利を得ければ、皆々勇まずと云ふ者無し。殊に板垣駿河守信形は剛勇の大將なれば、此の上にも甲府勢を何分勵まさんと思ふにより、廣き假屋を建て、來る十月六日諸將へ申入度旨あり、と觸れけるに依り、諸將士我も〳〵と參會なすにぞ、信形は亭主の役とて、衣服を改め立出で、禮畢りて後、此度各々へ申入るゝ事餘の儀に非ず。數度合戰に高名せられし方々を饗應仕り度く、一同を招待申せしに依り、今日は平常の例に拘はらず、陪臣たりと雖も手柄有る人には高座を與へ、其の優劣を分別ち申すなり。銘々恥辱を思ひ給はば、隨分高名致さるべし、とて先づ座を改めけるに、原美濃守、飯富虎昌、小幡虎

禁めたりける程に、甲信兩國の人民に固より兵士も亦大に困しみ、一種の兵粮攻に異らざりける。上杉謙信之を聞き、信玄に書を寄せて云ひけるやう、聞く、氏康氏眞君を困むるに鹽を以てすと、是れ不勇不義の極みなり。我公と爭ふ所は、弓箭にありて米鹽に非ず。請ふ今より以往鹽を我國に取られ候へ。多寡唯命の儘なり、と乃て賣人に命じ、價を平にして之を給しける。

○吉川元春醜婦を娶る事

吉川元春未だ伉儷有らざりける時、毛利元就兒玉就忠を以て、元春の意の嚮ふ所何れの女を欲するかと問はしめけるに、元春、吾熊谷信直の女を得んと欲す、と云はれければ、就忠呆然として大に驚き、君這は其美を誤聞きつらんか。彼の女の醜惡事云はん方無く、殆ど其の匹なし。君必ず後に之を悔いつらんと云ひけるに、元春哂うて云へるやう、然り、吾れ素より其の醜き事を知る。既に知りて之を望むものは、敢て奇を好むに非ず。抑も亦故ありて存する事なり。古來名將女色を以て其の勇を失ふ者多し。人の取る者吾れ之を取らず。人の取らざる者吾れ之を取らば、信直の心中さぞな嬉しき事ならん。其の感喜の情吾が爲めに死力を出さん事、最も親

向に指す所の九燈を外し、大導寺に授けて曰く、吾れ復此を用ふる事無し。之を用ゐて標と爲し、好く北條公に仕へよ、と乃ち死しける。大導寺是れより九燈を以て記幟になすと云ふ。

○上杉謙信大人氣ある事

德川家康使を發して好を上杉謙信に通じ、武田信玄を夾擊たんと請ひけるに、折しも村上義清及び其子國清越後に寓りしかば、力めて之を贊成し、遂に夾擊の議に決し、元龜三年四月謙信一萬人を將ゐて信州に打出でられ、火を長沼に縱つて遁に德川の聲援をなしけるに、此時信玄の子勝賴伊奈に在りけるが、其聲を聞き、直ちに兵八百を以て赴き防がんとなしけるを、謙信遁に此の體を見て曰く、彼れ敢て寡兵を以て我に當らんとす。信玄の兒たるに愧ぢず。吾其勇を成さしめん、と兵を引きて還りけるとなん。

○上杉謙信鹽を甲斐に送る事

武田信玄の領國は甲信二箇國にして、孰れも海に濱らざれば、鹽を自國に取る事能はずして、遠く東海北條の領國に仰ぐ事なり。氏眞北條氏康と謀りて、陰に其の鹽を閉ぢて甲信に送る事を

に當る。寡を以て衆に敵す、何んぞ必ず今日に始らんや。勝敗の決此一擧にあり。汝將士よ、其れ心を一にし、力を協せて唯吾が嚮ふ所を視よ、と其兵をして皆白布を鎗上に尚へしめ、之に約して曰く、白ならざる者に遇はば、輒ち斫り、敢て其首を取る事勿れ。首を取らん事に汲々たるは、一人の功名を貪るにて、全體の戰爭には其既に斫殺したる死首を揚ぐるの間を以て、又新たに活きたる敵を擊たば、大に勝利を增す事ならん。此意を心得よ、と令既に畢りしかば、人は枚を銜み馬には鑣子を被けて、此夜子二つの比及に河を渡り、咄とをめきて突然無二無三に上杉氏の軍に衝き入りけるにぞ、何かは以て堪るべき。怱り切りたる不意喰ひ、武者大に驚き、或は繫ぎし馬に鞭うち、或は弦斷れたる弓を執り、或は一條なる鎗に兩三人手を掛けて、相爭うて捫擇す。其擾亂云はん方なき所を、氏康の兵縱橫に奪擊したれば、一人百敵に當らざるは無し。遂に二萬餘人を殺傷し、朝定を虜にし、晴氏憲政を走らせけるにぞ、八州の豪傑即夜氏康に降る者九十餘姓に及びける。是夜難波小野など云へる將帥皆死しけるに、本間某單騎止まりて戰ひけるが、本間軀幹魁偉にして、九燈を竿に累けて以て脊旗となして曰く、吾れ此の燈旗を以て闇主の闇を燭すと。北條の部將大導寺駿河守と鬪ひけるに、孰れ優らず劣らず、其勝負何時果つべうも知れざる程に、本間先づ手を引き、如何に大導寺氏暫く留り候へ、とて背

共其猛威に恐れて、手指す事も無かりけり。是より三樂も誠に心服したりけるとかや。

〔補　遺〕（以下七章異本に據りて補ふ）

○北條氏康示弱乘　强の事

上杉憲政關東八州の豪傑八萬騎を率ゐて、北條氏康を擊たんとて南下しけるに、氏康も亦出でて入間河の南に陣しけるが、上杉氏の兵來り迎ふと聞き、氏康戰はずして走りて小田原に入り、間者の歸り來る者に向ひて、敵中何と云へるや、と問ひけるに、其者の云へるやう、敵皆笑うて云へるには、豎子走ると箇樣に申居り候と。斯くて氏康小田原に居ること五六日、又出でて河南に至りけるに、敵來りければ、前日の如く未だ一戰にも及ばずして走り、又間者を入れて敵狀を問ふに、其者の云へるやう、敵の云へるには、豎子復出づる事能はず。若し出づれば走るのみと。復顧みる者之れ無く候、と聞きて、氏康の云ふやう、敵既に驕る。時こそ良しと。其の夜將士を集へ、親ら之に誓つて曰く、吾れ聞く、戰の道衆しと雖も、未だ必ずしも勝たず。寡しと雖も、未だ必ずしも敗れず。唯士の心の和すると否との如何を顧みるのみ。故に智將は、時に或は小敵に怯れて大敵に勇めりと。吾屢々上杉氏と戰ふ。常に我が一人を以て敵の十人

輝虎武藏の私市の城を圍まれし時、此城は後に大なる沼有りて堅固の地なり。本丸を外より見ゆるやうに築きたりけるを、打巡り見られしに、本丸より二の廓に移る廊下の橋、簀子にて作りたるに、地白の帷子着たる人の顔、水に映ろひ見えたり。地白の帷子といふは、地を白く紋を黒く染めたる物にて、其比女の多く着たる物とぞ。輝虎是を見る事三度に及べり。斯れば本丸には人質の女童を籠め置つると察し、驀て柿崎和泉に下知して大手を攻めさせられけり。城中あはや唯今攻めらるゝと言ふ程に、我先にと防ぎける。其隙に近きあたりの民屋を壞ち、筏に組みて後の沼に打入れ、鬨の聲を擧げ臆き叫ぶ。本丸の女童大に驚き騷いで、二の廓を指して逃迷ふ。大手に有りて防ぎける兵共、さては内通の者有りて、本丸を打破られたると思ひ、或は自害し或は降人となる。輝虎の謀によりて、力を勞せずして城忽落ちたりけり。

○輝虎太田三樂が子を質に取られし事

輝虎と北條と武藏の忍にて陣を合す。此時太田美濃守資房入道三樂窃に謀を北條に通ず。輝虎斯くと聞きて馬副の者も具せず、唯一騎三樂が陣に行きて、三樂が三男安房守十二歳なりしを犇と捕へて、よくも生立ちつるよ。いざ我が子にせん、とて打連れて歸られけるに、三樂が軍兵

れば、松田物語竝に世に傳ふる所は誤なり。

○木全知矩連歌の事

安藝佐伯郡に木全知矩といふ者あり、後に宗哺といふ。毛利元就に從はざりければ、圍み攻めらる。兵粮已に乏くなりて、降參を勸めらるゝも、父祖より受け傳へたる城を手易く人に授くべきや、とて彌服從せず。宗哺は連歌に心を寄すると元就聞き傳へて、箭文を城中に射入れさせられけり。

秋風にかたき木またの落葉かな　（一說、秋風にまだき木またの落葉かな

と射返しけるに、

よせ來てしづむ浦浪の月

元就大に感じて圍を解きて引返し、程經て和を求められければ、宗哺、我より降參せばこそ恥辱ならめ。此上は、とて城を出でけるを、元就憐に思し、賓客の樣にせられけり。

○輝虎私市城を攻められし事

に平伏す。持資衣紋引繕ひ打過ぎたりければ、唯人に非ず、と大に驚かれたるとなり。彼猿を繋ぎたる戸を猿戸といふ。其より猿戸と言ふ名は起れるとなり。

道灌は讒言によりて殺されたり。文明十八年七月二十六日なり。辭世の歌とて世に云傳ふる、

かくる時さこそ命の惜しからめかねてなき身と思ひしらずば

松田が家の物語にも斯く錄したり。道灌の和歌の集に見えしは、戰士を悼み詞にて、康正元年の冬藤澤の役に至り、敵も味方も入混り、三日を重ねて挑み爭ふ事に成りぬれ共、屋形の武威強うして北條憲定の主終に自腹して、餘兵己が志空しうなり、或は仇に當りて互に死するも侍りし時、藤澤の側の松原の叢にて鬪ふ男ありしに、味方中村治部少輔藤原重顯とて、京家の人の世に沈みて屋形に扶持せられて侍りしになん。敵の男は栗毛なる駒に乘りて、二つ引き輪上り龍の紋附けたる指し物なりけり。遠目ながら鎧嚴しく見えける。誓し鬪うて鎗を合せしに、目の前に敵の男突き止められ、軈て中村が手づから首を取りて、我陣に來りて斯々なんと談りけるに、未だ壯年にも足らぬ男の色白くして丈高かるべき心持して、鬢の邊り只ならず燒きしめつゝ哀も彌增し、仇ながら憎からぬ面影なり。中村重顯此心ばへの優しき歌一首物して手向にと勸めければ、其首に向ひて斯る時云々と見えた

といふ歌有り。波音荒き所を渡せ、と言ひて事無く渡しけり。持資後に道灌と稱す。

雪玉實隆の歌に、

雨に著るみの無しとしや山吹のつゆにぬるゝは心つかじを　袖中後拾遺和歌集

小倉の家に住み侍る頃、雨降り侍りける日、蓑借る人の侍りければ、山吹の枝を折りて取らせて侍りけり。心も得でまかり過ぎて、又の日山吹心得ざる由言ひおこせて侍りける。返に言ひ遣しける。兼明親王、

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞあやしき　かなしき歟

○持資京に上りし時の事附かゝるときの歌の沙汰

持資京に上りし時、慈照院殿義政應せんとなり。慈照院殿に一つの猿あり。見知らぬ人をば必ず掻き傷ふといふ事を持資聞きて、猿使に賂して猿を借り旅亭の庭に繋ぎ、出仕の裝束して側を過ぐるに、猿飛び懸るを鞭を以て思ふさまに敲き伏せたれば、後には猿首を垂れて恐れ居たり。持資猿使の人に禮謝して猿を返したり。斯くて義政の日、かねて慈照院殿彼の猿を通るべき所に繋ぎ置きて、持資が狼狽するを見んと待たれけるに、彼猿持資を見ると等しく地

○太田持資歌道に志す事

太田左衛門の大夫持資は上杉宣政の長臣なり。鷹狩に出でて雨に逢ひ、或小屋に入りて蓑を借らんと言ふに、若き女の何とも物をば言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、花を求むるに非ず、とて怒りて歸りしに、是を聞きし人は、其れは、

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき

といふ古歌の意なるべし、といふ。持資驚きて其より歌に志を寄けり。宣政下總の廳南に軍を出す時、山涯の海邊を通るに、山上より弩を射懸けられんや又潮滿ちたらんや計り難し、とて危みける。折ふし夜半の事なり。持資、いざ我見來らんとて馬を馳出し、巡て歸りて、潮は干たりといふ。如何にして知りたるや、と問ふに、

遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴く音に潮の滿干をぞ知る

と詠る歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ、と言ひけり。又何れの時にや、軍を返す時、是も夜の事なりしに、利根川を渡らんとするに、暗さは暗し淺瀨も知らず。持資又、

底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀨にこそあだ波はたて

○元就伊豫の河野に船を借られし事

宮島合戦の前、陶伊豫の河野に船を借る。同じ時元就も又船を借りに使を遣られけり。陶は何となく借りたり。元就は、只一日貸したまはれ、宮島に渡りて即戻すべし。と言遣られければ、久留島通康聞きて、一言なれど思ひ入たる處あり。毛利必勝つべき事疑ふべからず。とて三百艘を貸したりけるが、果して陶敗れて滅亡しき。

○那須の臣大關夕安深慮の事

野州宇都宮の軍、那須に寄せ来りけるを撃破り、既に大將をも討取るべかりしを、那須の長臣大關夕安、兵を統めて北るを追はず。人皆今度宇都宮をも破る可きに、と言ふを夕安聞きて、

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな

といへる古歌あり。今味方にさせる根本の固も無くて、宇都宮を攻破らば、小田原より那須を敵とせん。然らば如何にして那須を守り固むべき。宇都宮を殘して小田原をあひしらはせ、其隙に那須の根を深く蒂を固くして、小田原を敵にもしつ可し、といふ。皆人之を感じけり。

て小荷駄共を先づ返して引退く體にもてなし、日も稍暮れければ俄に唯今宮島へ渡り、思ふ敵を討取るべし。疾く船に乗るべし、と下知し、ひた〳〵と打乗り篝なる點しそ。元就が船の火を標に艫舳の梶を守れ、とて酉の刻許に火立浦を出づる折ふし、北風烈しう吹きたりければ、追手の風ぞと勇み進んで、亥の刻許に宮島の西に著きて陸に上り、船をば一艘も殘らず火立浦に返されけり。元就彼の盲法師を引出し、汝故にこそ今日年頃の志をば遂けつれ、とて海中に沈められけるとかや。隆元は彌山島に打上り、元春は洲屋明神の前より押寄する。小早川隆景は搦手より向ひたるが、一度に鬨の聲を擧げ、彌山島の木末に結ひ附けたる松明に火を附けたれば、陶が軍兵驚き騒ぎける處を、元就をめいて先を駈けたれば、陶が者共數百人討死しけり。元春隆景も横ざまに進みて三浦越中守と隆景鎗を合せ、三浦を突き伏すれば、内藤内藏允落り合て首を取る。弓中三河守も討たれ、陶が軍散々に敗北しけり。陶も旗本を進めて隆景と戰ふ。元就の兵栗屋又四郎眞先駈けて討死す。元就脇より切つて懸り、終に打勝れければ、陶は引退きて道場山にあり。明れば十一月朔日、元就諸軍を集め、卯の刻より午の時まで十二度の戰に、互に討たるゝ者數を知らず。陶終に叶はで自害しけるを、首を取り出して梟せられぬ。討取る所の首四千七百八十餘、生捕八百五十餘人とかや。是より西國元就に靡き從ひけり。

れける。是れは陶を防がん地に櫻尾の城ならでは然るべき要害なし。宮島に渡らば乘り來る船を燒きたて、歸路を塞ぎて軍すべしと思ひける故なりけり。盲法師斯くと陶に告けければ、然らば宮島を攻なん、といふ。弘中參河守隆包然るべからずと言へ共、陶は弘中が二心を疑ひて聞き入れず。弘治元年十月、四萬餘大船にと乘りて宮島に打渡り、四方を取り圍みたり。元就も今度は十死一生の軍と思ひ定め、吉田の城を出でて僅に四千許の兵にて後卷せられけり。是に地御前の祝日毎に蛤船に乘り、宮島に渡りけるを近づけ、心を合せ、士一人祝のまねさせ、宮島に渡らせらる。陶が者共、元就は如何にと問ふ。祝、さん候。元就は草津廿日市へ陶殿押寄せたまはんには勝利なるべきを、宮島を攻めさせ給ふ故手段空しくなりぬとて、火立浦に呆れて御座し候が、引返され候らめ、と語る。是れより陶が者共意りぬ。元就は窃に軍の仕度をなし、一手は洲屋明神の前より船より上り、天本の御前を多寶如來の側を通り、宮島の町口へ向ふべし。一手は吉田郡山の百姓儕五千餘に嫡子隆元を大將として、彌山島より西の山々の木末に松明を結ひつけ、百姓儕に手々に松明二つ持たせ、夜半の鐘を相圖に同時に火を附けよ。吉川元春は船にとり乘り、浦口にかけ並べたる陶が船共を燒き沈よ、と謀を定めらる。十月晦日今日草津に引退くべし。風雨止まずば元就は今夜火立浦に滯るべし。二日の兵粮を物の具の上に附けよ、と

○北條早雲智計の事

北條早雲、盲人は無用の物とて小田原領分の盲法師を搦めて、海に柴漬に沈めんとせられしかば、盲人皆四方に逃げ散りける。其中を潜に間に用ひられしとぞ。

○毛利元就嚴島合戰附盲人間者の事

陶尾張守晴賢、大内義隆を弑しければ、毛利元就陶を打滅さんと謀られけり。陶盲法師一人を間者として元就の謀を知る。元就始は斯くとも知られざりしが、稍心附きぬ。或時陶が臣永來丹後守我に志を通ず。晴賢を討破らん事近きに有り、と語られけるを、彼法師聽て陶に告けたりけり。元就又書簡を贈らる。永來は周防の岩國の城に在り、彼の書簡を山口にて奪ひ取るべきやうに仕度せられければ、陶大に怒つて永來を殺しぬ。元就彌彼法師を近づけ、平家を語り習ふと稱し側を離されず。陶傳へ聞きて悦ぶ事限なし。元就また或夜軍評定せられけるが、敵大軍にて宮島に押渡らば如何はせん、是ぞ吾亡ぶべき運の極ぞと覺ゆるなり。又草津廿日市に押寄せなば、岩國の弘中參河守我に心を合すれば、裏切させて陶を討破るべし、とぞ語ら

賜はりけるともいへり。

○佐伯惟常高崎城を乘取る事

天文年中大友義鑑の臣朽網下野親満謀反して、高崎の城の二の丸を乘奪りて立籠りしに、佐伯惟常は大友家の旗下なるが、斯くと聞き杵築より馳せ來りぬ。佐伯平生鷹狩を好む。專狩の爲には非ずして軍立の爲なり。狩に出る時、ある日途中より使を走らせて士をよぶ。士に將たる者は騎馬の軍兵を引き率れて卽時に來る。歩士又は弓の物主たれば、組の卒を引率れて駈け集る。是故不意の時と雖も騒ぐ事なし。半時計の間あれば、數日前より下知せしよりも陣列整ひて靜かなり。使に走らかす者は、壯なる者を三十人撰びて馬の前に打ちつれたり。常に駈走りに慣れて息永く足健にして、馬にも劣らぬ程なり。此時佐伯が士杉谷次郎太郎、同次郎三郎とて兄弟あり。相共に一番乘を志し、城の堀何れの方が上るに宜しからん、と目を配りけるに、堀の隅あり。爰に目を附け、貝槍の柄を四五所繩にて足駄を結ひ、一同に攻掛る時、杉谷兄弟衆て心を附け置きし所に始より近づき居て、走り著と槍を立掛け、終に登り越えて一番に入りたり。

織田備後守信秀、松平三左衛門忠倫と密に謀りて、岡崎の城を攻め奪らんとす。岡崎に泄聞えしかば、應政公甚憤らせたまひて、筧平三郎重忠を召し、上和田に往きて偽りて降參し、三左衛門を刺殺し來れ。偏に汝を賴むよ、と仰ありしかば、筧承り候、とて上和田に至り、降參するよし謀りければ、三左衛門、岡崎の士心を通ずる者あれども、筧兄弟を味方にせばや、といふ折からなれば、大に悦びて懇に遇しにけり。斯くて夜深て後、案内をよく見届けつ、忍び寄りて賜りたる脇差にて三左衛門が脇腹を二刀刺て遁れ出る。平三郎が弟助大夫正重も兄が後を慕ひて上和田に至り、隍の中に隠れ居たりしが、待受けて打連て岡崎に歸る。上和田の者ども追ひ掛くれ共及ばず。應政公感狀を賜はり、羽栗にて百貫賜りぬ。天文十六年十月の事なり。應政公は東照宮の御父なり。

一說、脇差を賜はりける時、これを以て刺殺すべし。突貫きたる刃を拔かば必聲を立べし。然らば起き合せ、追ひ掛けて汝遁れ得じ。突棄て還歸れ、と仰せられしか共、賜はりたる脇差を捨てんこと本意に非ずと思ひ、拔いて出ければ、果して三左衛門聲をあげ、人を呼びける故、各起き合せて追駈くれども、とく逃れ得て歸るといへり。又一說に、平三郎は忠倫が平安城長吉の刀を奪り得て歸り、忠倫を刺殺せし證と申せしかば、卽其刀を平三郎に

骨髄に徹せりとなん。

○甲斐國韮崎合戰の事

武田晴信父を逐ふの後、諏訪頼茂小笠原長時多兵にて甲斐に攻め入り、韮崎にて一日の中に合戰四度に及べり。晴信韮崎に向ふ時、諏訪小笠原の許に縁有る者、原加賀守を始として數多甲府に殘されければ、原人々に向ひ、今日の合戰に各達功名を遂ぐべきに、留め置かれしは二心を疑ひての事なり。今日敵に向はずば長く弓箭取る躬の恥とならん。如何に、と言ふに、皆一心無く疑を蒙らんより、敵に會ひて討死せん事勇士の志に候、とて我先にと韮崎に馳せ行きけり。此時晴信軍する事三度、戰ひ疲れたる所に、頼茂長時一手になりて進み來りければ、既に危く見えしかども、原が來るに力を得て勇み進む。晴信原を呼びて其志を感じ、日向今井等を後に控へさせ、競ひ懸る敵に當りて打破られけり。是晴信士を激勵の策にて、態と原等を甲府に殘されしなるべし。

○覓平三郎功名の事

ずと覺え候。爭でか斯る時穢き振舞を爲べき、とて少も落ちるべき色なし。荒木、さぞ有らん、寔に主從の契此の世のみには非ざりけり、と打笑ひて、京軍の崩るゝを他所に見て犇と折敷き待ちかけたり。阿波丹波の兵競ひ懸るを間近く引受け、我を誰かと思ふ。管領の下に荒木安藝守といふ者ぞ、と呼はり、一同に立上り、先駈けたる敵十人許突き伏れば、退る處を追立つる事五六十間許を限とし、はなれ〴〵になるべからず。遠く追詰めて疲れなしそ、と又そこに折敷き、懸る敵を待ち受けて突き退け、幾度となく戰ひたるに、敵討るゝ者數を知らず。荒木主從一人も殘らず討死しける間に、高國僅に近江に遁れ得たり。荒木平生士卒を愛するに悃情を盡せり。古の食を分ち衣を解き、藥を同じくし苦を共にするの風あり。少しの功有人を捨てず。或時荒木が親き緣ある人と、荒木が士の輕き者と俱に疫痢を煩ひけるに、療養力の限に心を附けて、緣ある人よりも勝りければ、之を恨みけり。荒木、緣者は我問はずとも心を附くる人あり。我何某は賤し。賤しき者は人疎にせん。我心を盡さずば療養怠り有らん。緣者を疎にするには非ざれども、先重き處に心を盡せるなり。無事の時は緣者親と雖も、事有る時は士卒の切なる故なり。親しき一族緣有りとても、陣々別れたれば互に死生も知られず。士卒は戰場に死生を共にする者なれば、一人とても本意を失はん事我大なる患なり、と答へけるを、士卒聞きて、人々恩を思ふ事

守貞秀入道知閑、音羽の城に據りて澤倉と軍す。澤倉、音羽は山城なれば水乏しからん、とて水の手を取り切たり。知閑、敵より見ゆる矢倉の前に馬ども數多率出させ、白くしらげたる米を桶に入れ、汲み掛けて人々裸になりて馬を洗ふ。澤倉遙に見て、思ひの外に此城水多し。斯て久しく陣せば兵粮盡きなん、とて圍を解きて引退く處を、知閑案内はよく知りつ、小倉啜の要害に撃つて出で、一同に切り懸り、十分勝利を得たり。知閑は氏鄕の祖父なり。

○荒木安藝守討死の事

大永年中細川武藏守高國（入道道永と稱す）三好左衞門督と相戰ふ。三好桂川を渡りて高國の陣へ押寄する。波多野備後高國に怨ありて、丹波の兵を引具し高國に叛き、三好に與しければ、高國の軍敗れたり。高國の將荒木安藝守、百許の兵を引分ち、人々此有樣を見よ。月花酒宴の時の詞には似ざりしよ。恥を知る弓取無き世なりや。我只今道永の爲に命を捨てて恩を報ずべし。さらずば道永遁れ給はじ。此戰場を引退きたりとも、人並なれば強ち獨のみ誹らるべきに非ず候へども、義を義とせざるは弓箭取る身に非らず。各又眞の士となりて、我と同じく義を踐んや。否と思はんには強ゆべからず。如何、といへば、皆こは口惜き事をも承り候。日比の所存を知召さ

上野の城に在りて兵をも出さず。昨日まで屬せし國人ども、多く心變してけり。引返したる御家人等僅に八百人、若君に御暇乞して、一同にどつと泣叫びてこそ打出でけれ。二手に分ちて伊田の彼方に打て出づ。此人々の義心を神明感じ給ひけん、此所に見え給ひし八幡宮の鳥居の、敵の方に向ひて六尺餘り自ら動きけるこそ、不思議といふも餘りあれ。人々大に力を得て、寄せ來る敵を待つ程に、此所は、上は霜枯の野路遙に、下は賤が田の面に通ふ道一筋あり。織田家の軍も同じく二手に成りて、上道下道此方に向ひて寄せ來たる。八幡の寶殿の方よりして白羽の矢降り來り、敵の上に落ちかゝると見物の人の目には見えてけり。上に向ひし味方、野は廣し、眞中に取籠られ、一人も殘らず討死す。植村下道より向ひて眞先を駈く。味方僅に四百人、四千の敵を打破り、又上道に押し向ふ。野路の敵も散々に亂れ立ち、信秀辛き命生きて尾張國に引返す。これ伊田の合戰とて、十倍の敵に勝ちし事例少なし。況して大將座しまさぬ事して、幼なき君を立てしこと、古今に比類有るべからず、と義臣の節操を語り傳へて美談とせり。

○近江國音羽城軍の事

文龜三年細川武藏守政元の臣澤倉といふ者、武略ありて近江を半切り從へけれども、蒲生下野

ぜんさくこう御諱清康安祥二郎三郎と申す十幸を憐み、勇材御座しませしかば、人々其徳に靡き従ひ奉れり。尾善徳公郎殿と世に稱し申す。張國に向はせ給ひ、森山に陣せさせ給ひしに、不慮の事出來て、安部彌七郎弑し奉りける。植村出羽守、未だ新太郎一説新と申せしが、十六歳にて御側に有合せ、彌七郎をば立處に誅してけり。御家人馳集りて唯呆れ居たり。植村人々に向ひて、御敵をば既に切つて棄て候。思ひ置く事もなし。腹切て御供可仕といふ。人々、主君の敵たらん者を立所に討ちし其功いふに及ばず。是に候ふ者共、御側にだに候はば誰か御身に劣るべき。御身一人幸に御側に有し事、之神明の冥助とや言ふべき。されば腹切つて冥途の御供申さん事、又誰かは御身に劣るべき。されば各其處存の如くに振舞ひて然る可し。我等は必死近きにあり。今日徒に腹切らんとも存ぜず、と答ふ。植村聞きて、其必死は如何と問ふ。其時、抑我等必死は僅十日を過すべからず。殿斯ならせ給ひぬと敵の方に聞えなば、彈正忠信秀軍勢を率るて岡崎に攻來らん。我等爰にて腹切らば、誰か若君の御爲に矢の一筋もはかゝしく射出すべき。然れば我々が討死は此時に有りと覺ゆ。同じく死せん命、遲速は十日を隔つまじ。御身が切腹を強て止めんとにも非ず、といへば、植村聞きて、實に理かな。然らば人々と倶に同じく討死をせん、とて岡崎に引返す。案に違はず織田信秀、八千の兵を引率して三河の國に打入り、大樹寺に陣とりたり。此時内膳正信安も背き參らせ、

つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて哀なるかた少も候はぬに、君には御感涙に咽ばせられ候。今に不審なる事と申し合ひ候、といへば、天徳寺驚きて、只今迄は各を頼母しく思ひ候ひしが、今の一言にて力を落したるぞとよ。先佐々木が事をよく心に浮べて見られ候へ。右大將、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、龍田の梶原にも賜はらぬ生喰を、高綱に賜はるにあらずや。其甲斐も無くて、此馬にて宇治川の先陣せずして人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじき暇乞して出ける。其志哀ならぬ事かは、とて屢涙を拭ひつゝ、暫ありて言ひけるは、又那須與一も、人多き中より撰ばれて、只一騎陣頭に出しより、馬を海中に乘入れて的に向ふに至るまで、源平兩家鳴を靜めて是を見物す。若し射損じなば味方の名折たるべし、馬上にて腹掻切つて海に入らん、と思ひ定めたる志を察して見られよ。弓箭取る道ほど哀なるものはあらじ。我は毎も戰場に臨みては、高綱宗高が心にて鎗を取り候ゆゑ、右の平家を聞く時も兩人の心を思ひ遣り、落涙に堪へざりし。然るに各は哀に無かりしとや。思ふに各の武邊は只一旦の勇氣に任せて、眞實より出るにては無きやと思はれ候。夫にては頼母しからず、と歎きけるとぞ。

○參河國伊田合戰の事

○輝虎平家を語らせて聞かれし事附佐野天徳寺の事

輝虎或夜石坂檢校に平家を語らせて聞かれけるに、鵺の段を聞きて頻に落涙せられけり。側の者ども怪み思ひければ、輝虎の曰く、吾國の武徳も衰へたりと覺ゆるなり。昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪有りしに、八幡太郎鳴弦して鎭守府將軍源義家と名告りければ、妖怪忽消えぬ、といへり。其後賴政鵺を射たれども猶死せずして、井野隼人刺殺して止めたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは天仁元年の事なり。鵺の出しは近衞院仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武徳既に劣れる事遙なり。又今賴政に後るゝ事四百五十年、我又賴政に劣る事遠かるべければ、覺えず涙の流るゝよ、とぞ語られける。又相似たる物語有り、附記す。相州北條の幕下佐野城主天徳寺勇將なりしが、或時琵琶法師に平家を語らせて聞きけるに、未だ語らぬ先に、我は唯哀なる事を聞き度くこそあれ。其心得せよ、と言ひしに、法師承り候、とて佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出たりしに、天徳寺雨雫と涙を流して泣きたりけり。さて又、今一曲前の如く哀なる事を聞き度しといへば、那須與一が扇の的を語る。半に及びて天徳寺また落涙數行に及べり。後日に、側に仕へし者どもに、過ぎにし日の平家は如何聞きつる、といふに、皆面白き事に覺え候。但し一

行有る可くもなしとて、追ひ討つならば破竹の勢とは是れなるべしといへども、高鼾かきて眠られしかば、皆斯る時を失ふ事よ、と歎き合へり。稍有りて景虎つと起きあがり、三郎の軍兵山を三分の一彼方に越えたりと覚ゆ。いざ追討てや、とて馬に乗り、螺の貝吹きたてさせ、龜破坂より落しかけ、大に打勝たれけり。定行、今日北ぐるを撃つべき時、空眠せられしは、山を追上らんに敵をかさにうけなば利有るべからず。敵下り坂になりて引立たるを討たんとの事なり。是老臣等が及ぶべきに非ず。今年は僅十八歳。弓箭を取る事、誰やの人か肩を比べなん、とぞ語りける。景虎越後を治め得て高野山に出奔せんとす。長尾家の長臣相集まり、景虎無くば國を敵に奪るべし。いざ、とて關の山に追行きてさまざまに止めければ、景虎の曰く、我年若く威重からず。老臣等我を輕ぜば國の根本立たず。此國人の爲に利を求むるは我身の害を招くなり。是より後吾命を背くまじとならば、神文を書て得させよ。さらずば留まらじ、と言れけるに、固より君と仰ぎ奉るべきなり。いかで命を叛き申すべき、と申しければ、さらばとて立歸り、三郎を隱居させ、是より威を振ひ、越中に攻め入りて父の弔ひ軍を遂げられけり。長臣の中に二心ある者を、林泉寺といふ處にて腹切らせて、國を治められけり。晩年謙信と稱しぬ。

けり。猿松遙に頸城府内を眺めやり、やゝ打涙ぐみて、我かく落ぶるゝ事こそ口惜しけれ。猶て軍を起して志を遂ぐるならば、此の山に攀ぢ登り、府内を目の下に見下すべし。然べき軍の地なり、と言れしかば、乳母子なる本條美作守も舌をふるひ、其詞な忘れ給ひそ、と悦びけり。

一説に、爲景、猿松を憎みて其傳城越前守に預けらる。此時十二歳、それより諸國を巡りて風俗を見、人情を察し地の利を窺ふ、といへり。

斯て猿松、九年の間寺に在れども、僧になるべき志なし。天文十四年爲景越中にて討死あり。嫡子三郎暗弱にて越後亂れ、所々を敵に掠奪れたりしかば、父の弔軍せんと思ひ立ち、宇佐美駿河守定行を語らひ、天文十六年正月十八歳にて元服し、平三景虎と名乘、稼尾の城に族を擧られたり。三郎是を聞き、長尾越前守政景に七千の兵を添へて攻討たしむ。景虎矢倉に在りて、敵は今夜引返すべき物色あり、と言れけるを、定行聞きて、遙々と攻め來り空しく退くべきや、といふ。景虎、敵に小荷駄なし。久しく圍むべき計に非ず。引き退かん處を擊たば勝つこと疑なし、と言はれければ、定行も然るべしとて夜半に打て出づる。果して政景の軍亂れ立ちて敗北しけり。三郎又打向ふ。景虎栃崎の下濱に陣をとり、纏て三郎を打破る。三郎府内を指して引退く時、景虎米山の東阪本にて、我眠氣ざしたり。休みて後追ひ擊たばや、とて小家に入る。定

常山紀談

湯淺元禎輯錄

卷之一

○長尾輝虎越後を治められし事

長尾輝虎の幼名を猿松と申す。

輝虎始は景虎といふ。後京に上られし時、公方より輝の字を賜ひて輝虎と稱す。鎭守府將軍良兼四代の孫、左衞門尉致經二男村岡五郎忠通が末にて、其後長尾と稱す。後管領上杉の讓を得て上杉と稱す。甲陽軍鑑に梶原景時が末孫といへるは誤なり。

兄を三郎といふ、猿松暴者にて父爲景の心に背く。是繼母の讒言故とぞ聞えし。斯くて出家にせよとて、下越後の橡原淨安寺に追ひ遣られけり。金津新兵衞供して米山越にかゝる時、猿松八歲なれば徒の士肴に搔き負ひて山を登り、嶺なる堂におり居て、破籠やうの物取り出し進せ

べき道なきを知りたればとて、わが主君の明日禍にかゝるべき事を告ざるを、いかにして其時は褒めたりしにや、此は非義の義なるべし。さればかゝる類は、此書にしるさず。

記し傳へ、かたり傳ふるまゝにせるは、比校すべき典籍のなければなり。

一　戰國の武者詞一種あり。物わかれ、くひとめられたる、といふが如きこれなり。皆其傳へたるまゝにしるせり。又いひ傳ふる世の詞も、其傳ふるまゝにしるせり。文字を脩飾せざる事は、其世代によりて、記錄の實不實分明なるが故なり。左傳は、其世の實錄にて、公穀の二書は後の世にしるせるといふも、其詞によりて分るゝ處なればなり。然れども、大に謬れるに至ては、改め錄せるもあり、世人、甲をかぶと、冑をよろひ、とよむが如きは、皆改めしるせり。

一　賞譽すべき事にも非るをしるせるあり。是は、唯其世の有さまを想ひ見つべきが爲なり。昔賞譽したりと覺しき事にも、心得がたき事あり。天正年中、肥後の有動を、秀吉柳川にて殺されし時、立花宗茂有動が臣の供して來れる新田善良が、剛の者なりとて、惜みて告しらせられしに、善良其事を有動にかくして告しらせず、運をひらく

凡例

一 凡此書、天文永祿の比より泰平に及ぶまでの事實をあつめしるせり。戰國の時勢、國初の風俗、武人の言行、是皆世を觀る人の尤識るべき所にして、是輯錄の本意なり。明君、賢佐、亂臣、奸賊の勸懲に具ふべき、自ら其中に見ゆれば、必しも評論をしるさず。

一 吾國の士氣、源平の世と戰國の世と異同なきに非ず。凡古の風信を尙び、義を尊び、節操を重んじける事ども、古き物語に見えたり。戰國の士多くは利名を貪るにあり。今川氏眞の沒落、北條氏政の滅亡の時、死に殉たる人尠し。されば節義の士の姓名散逸せん事なけかしく、つとめて殉難忠臣の姓名をしるせるも、又此書の本意なり。

一 戰國の間記載詳ならず、相傳る所誤れる事少からず。一事にて異說多きあり、同異孰か是をしらざるは、其說々をも悉しるせり。人の姓名及年月の審ならざるも、只

之芬々。庶幾存十一於千百。匪有意於備不朽。蛟大史氏之所索也。近者取而閱之。其所識多國俗猩獷所慕。技擊相高。賈勇搏人之談。犬鷹之事哉。其人骨已朽矣。庸何足傳乎後世。予於是乎。重慨之。嗚乎。保平之間。源平迭興。上義尚死。尚信伏節。習以成性。孰與元天之際。士無常君。國亡定臣。朝委質。而夕倒戈。戕首者乎哉。風俗之道。士爲政。前言往行。得失之林。君子可以觀世矣。是爲序。

元文四年巳未五月九日　　湯元禎

予嘗慨往事之棼々。若滅若亡。傳於今者。何寥々哉。蓋載籍未備。世遠磨滅也。夫前言往行者。得失之林。君子可以觀世矣。載籍散泆。不獨吾邦爲然而已也。倚相之丘索。惠子之五車。向歆孟堅之所錄。逞々乎零墜。而況吾邦乎。於乎。室町氏以前亡論已。及群雄虓闘。並爲戰國。網漏吞舟之魚。疆場多壘。采山煑海。井夷竈。猖々乎沐猴哉。豐王以竊金。黔首攘臂乎草野。奮其威詐。雷震霆擊。鞭笞海內。三韓草靡。安知非炕龍絕氣。紫色擾聲。聖王之驅除乎。宜哉。不祀忽緒。其間仁人義士。齎志吞憤。以沒世者。卓行懿範。湮盡罔聞。豈不悲邪。迨吾神祖。聰明神武。革命創制。解民倒懸。列朝重熙。百年讜。如或遇大史氏采簡。錄謀臣經國之畧。武夫野戰之功。則何以哉。湮盡罔聞。豈不惜乎。予適每有勝國以來遺逸事。得諸敝篋斷簡。聞長老黃髮所謂記。廼削牘識之。往事

皆出自武騎。　國家待士。養其廉恥。使人人自喜。平生待以君子。則臨事不可徒以法令約束之也。故謂馳驅周旋。非當世所尚者。不通今也。士大夫不聞將士之談。則無以自勵。人君不聞將士之談。則無以作士氣。在今兵法之要。莫先於近古將士之談。今列國士大夫。莫不學兵法習武藝。而不用心於將士之談。教者之過也。世多野史。志戰國之事。眞僞雜糅。言無統紀。獨湯君。折衷百家。撮其雋永。以垂不朽。　國初以來。未之有也。其書務崇節義。雖小必錄。末又概載　國朝太平君臣言行之美。以翼名教。蓋其善志也。君世仕西藩。落落寡合。弗爲名計。世鮮知君者。爲人博學篤行。器識高邁。當世未見其倫。此書也行。人其庶幾窺豹之一班矣乎。常山備之望也。君常居常山樓。

明和丁亥九月甲子　　龜山松崎惟時撰

隋唐第一異邦俊民。皆從事科擧。椎魯亡識者。乃爲兵。我　邦則公卿世官。州郡之民。不與朝廷豪傑之士。不在南畝。則爲兵。東夷數叛。源氏世將。恩義下結。武人漸貴。保平之後。皇綱解紐。自鎌倉至室町氏。日尋干戈。時將皆賴士卒之勇。以決勝。人自爲戰。未暇講兵法也。至甲越二公。稍有節制。而士愈益自喜。以接勝國。名垂竹帛者。數百人。　神祖初起。尤名得士。一統宇內。封建諸侯。諸侯亦各建將帥。爲卿大夫。世其祿位。寬永以後。有兵家者流。潤色甲越遺言。以教人。擧世宗之。其人守一家所傳。不用心於將士之談話。戰國之事。往往失實。或又謂。戰國時多屬軍立功者。故諸將不吝爵祿。以畜士。太平已久。世無喋血。有如萬一邊圍有警。則莫如遵異邦之法。明法令。嚴賞罰以率之。近世將士之談。無所用也。殊不知異邦之兵。皆卒徒。故唯可以法使也。我　邦士大夫。

常山紀談序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士武功也。權謀形勢備矣。於馳驅周旋蓋獨詳焉。世之君子。動謂兵。顧將畧何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此不稽古者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出爲將。善射御。先士卒勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。士卒亦以武自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。至泯社稷。而死者不過千百。則先王之遺也。秦漢以來。文武異官。大將不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。擢至將萬人。而黥面刺臂。目不識字。士大夫視以爲奴隸。人人不自重。惟以賞罰威之耳。時將亦制陳法。明懸令以一切立功。終不能使士卒自喜焉。後世之戰。僵尸百萬。功唯數大將。而裨將以下。無一傳名者。兵制異也。故謂先王之世。不尚馳驅周旋者。不稽古也。昔者　皇朝。軍團取法

毛利元就大內義隆に諫言の事　竝
熊澤助右衞門格言の事……八四三
稻葉一徹文學に依りて死を免れし
事……八四四
中院內府幼き宮に後見の事　竝本
多佐渡守謀計の事……八四五
名將たち質素にして下情に達ぜら
れし事……八四八
威恩を以て國を治められし事……八五〇
佐藤五郎左衞門噴の事……八五一
奥書……八五二

直江山城守伊達政宗に加勢を乞ふ事……八一一
赤井照右衞門武勇の事……八一一
源君長久手御馬揃の事……八一二
大坂夏御陣眞田左衞門佐幸村勇戰の事……八一二
同時木村長門守敗北の事……八一五
同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事……八一五
信玄の士小幡豊後物見の事……八一六
島原一揆の時寺澤兵庫頭知計の事……八一六
源君御屆從中根左源太勘氣御免の事……八一七
島原一揆の時紀伊賴宣卿明知の事……八一八
大坂陣渡邊圖書卽知の事……八一八
島原攻並河九兵衞足輕下知の事……八一九
伴助右衞門水戶家へ召し抱へらるゝ事……八一九
島原落城足輕陣佐左衞門手柄の事……八二一
松山新助の勇將中村新兵衞が事……八二二
大坂攻の時平野村失火安藤治右衞門遲參の事……八二三
城和泉守長盛諫言の事……八二三

常山紀談 附錄 雨夜燈

權現樣豊臣太閤に御對面の時の事……八二七
權現樣花女を御使にて台德院樣へ菓子を進ぜられし事……八二七
新太郎樣夏目氏の忠死を御賞歎の事……八二八
本多三彌木下肥後守義經辨慶を批評せられし事……八二九
板倉周防守大猷院樣へ草鞋を獻ぜられし事……八三一
芳賀內藏允忠功の事……八三一
飯田角兵衞其主肥後守を諫めし事
並新太郎樣備後守樣へ御敎訓の事……八三三
松前伊豆守用意の事……八三五
古の名將學問和歌を嗜まれし事
並酒和田喜六器量の事……八三五
武邊は律義者にありといふ事……八四〇
常憲院樣越後家の訴訟御審斷の事……八四一
土倉市正中村忠左衞門を勸めし事……八四二

織政公關ヶ原行軍順見の事……七七九
大河を渉る心得の事……七八〇
大坂陣の時利隆武者奉行の事……七八〇
同役池田の諸士頻當無き事……七八一
胄の頭心得の事……七八一
上杉謙信馬印の事……七八一
大坂夏陣井伊家の士小笠原傳兵衛
手柄の事……七八二
信玄嫡子義信と不和の事……七八三
大坂にて石川宗左衛門江坂清次郎
組討の事……七八四
藤堂の士田中權右衛門組討の事……七八五
大坂冬陣上泉義鄉指物の事……七八五
東照宮と越前少將忠直卿御不和の
起原の事……七八六
大坂の役木村長門守を井伊家へ擊
取る事……七八六
松平靏岐守殿具足屋岩井孫四郎物
語の事……七八八
米倉丹後が子彦十郎鐵炮疵妙藥の
事……七八九
佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合
戰の事……七九〇
上杉彌五郎が事……七九一
佐久間河內守物語　竝渡邊內藏助
が狂歌の事……七九一

卷之四

岐阜攻の時川々洪水によつて後藤
又兵衛尋問の事……八〇〇
家康公慶長五年七月會津御發向の
事……八〇一
秀吉尾州進發の事……八〇四
朝鮮陣中加藤清正馬の幟下知の事……八〇六
秀忠公參州田原御狩の事……八〇六
細川家鐵炮口藥入の事……八〇七
秀吉岐阜攻の事……八〇七
源君久世三四郎坂部三十郎へ物見
仰附けらるゝ事……八〇八
豐前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事……八〇九
清正の士櫻兵根を持たずして不興
の事……八一〇

信玄豆州韮山取詰山縣同心辻彌兵衛働の事……七六二
三州吉田城迫合信玄廣瀨幸を得る事……七六二
攝州花熊城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事……七六三
輝政公武將の重寶を示さる事……七六三
家康公尾州小牧合戰御勝利の事……七六四
家康公同御合戰自讚の事……七六四
福島正則關ヶ原出陣日柄の事……七六五
同役吉村亦右衛門高名を失ふ事……七六五
同役岐阜落城の事……七六六
同役田中兵部太輔長胤の中間水練の事……七六七
同役石田三成浮田秀家が諫を用ひざる事……七六七
同御合戰毛利秀元戰場にて東方へ返る事……七六八
同御合戰終り御詮議の事……七六九
同翌十六日江州佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事……七七〇
同牧方表に御旗を立てられ首御實檢の事……七七〇
備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事……七七一
瀧川左近將監一益極暑に馬上にて川を渉す時水を飼ふ事……七七二

卷之三

相圖の旗といふ事……七七三
武田信玄相圖の旗を用ゐる事……七七三
保科彈正信州高遠に籠城の事……七七四
上杉ヶ勝最上義元と合戰の事……七七四
美濃大垣にて八月二十四日より九月四日まで鐵炮迫合の事……七七五
甲州山形同心長坂重左衛門の事……七七六
信玄小田原發向の時根來法師一番鎗の事……七七七
輝政公岐阜攻貝吹右衛門が事……七七七
朝鮮陣の時兵器を塗り馬糞にて乾せし事……七七八
松永彈正久秀が馬の事……七七八

野間左馬之進田螺を以て勝負占物語の事……七二五
老功の士相言葉物語の事……七二六
家康公駿府にて相討御吟味の事……七二六
柴田勝家守邊治上杉景勝出馬の事……七二七
紀伊大納言頼宣卿十三歳にて大坂攻御先手を望まるゝ事……七二八
高麗攻南大門合戰物語の事……七二九
越前黄門秀康卿代見御屋敷へ於國を召さるゝ事……七三三
津田長門入道道慶物語の事……七三四
島原落城の砌平塚勘兵衛比類なき働の事……七三四
大坂落城の時細川玄蕃頭綸合言上の事……七三五
伊藤伊右衛門武田勝賴を討ちしを津田幸庵物語の事……七三六
增圓右衛門持道具の事……七三八
筑前岩出城攻秀康卿御年十四歳にて武勇御心入の事……七三八
越後浪人大井田監物の事……七三九

卷之二

家康公駿府御花見の事……七四五
朝鮮攻に後藤又兵衛物見の事……七四六
加藤家足輕具足を著さる事……七四八
加藤家騎馬武者馬上鐵炮の事……七四八
藤堂高虎家中具足の事……七四八
藤堂家の士梅原庄右衛門指物頻當の事……七四九
讃州源英公の家士西尾右兵衛が事……七四九
高麗陣の時宍耳太郎兵衛南大門の一番乘の事……七五〇
同陣清正の家來矢木八右衛門矢疵の事……七五〇
大猷院樓日光山繪圖御覽の事……七五一
關ヶ原御一戰御勝利稻次右近高名の事……七五一
上杉浪人門田造酒之丞物語の事……七五七
丹羽五郎左衛門物語の事……七五九
榊原の家人黒田彦左衛門の事……七六〇
淺野左衛門家人永田治兵衛働の事……七六一

根來法師賞功の定　竝大澤仁右衞門が事……六六六
大音主馬助先登を論ずる事……六六六
永田治兵衞功名の事　附樫井合戰の事……六六七
於萬の方塙團右衞門を扶持せられし事……六七三
奥平家の士の妻髮を切つて節を守る事……六七四
僞裝塞の馬の事　附信玄馬を擇ばれし事……六七五
森寺藤左衞門池田家興立の事　竝森寺政右衞門武勇の事……六七六
伴玄札殉死を止る事……六七九
番大膳二條城へ使に參る事……六八〇

卷之二十四

熊澤了介の略傳……六八三
小櫃與五右衞門會津神公を諷諫せし事……六八六
水戸義公御事業の概略……六八七
渡邊數馬報讐始末の事……六九〇
多賀孫左衞門同忠大夫仇擊の事……六九六
大久保家の婢女主の仇を擊ちし事……七〇〇
林田左文劍術妙手の事　竝馬爪源五右衞門先見の事……七〇一

卷之二十五

石井兄弟報讐の事……七〇三
尼崎幸右衞門が女親の仇を擊ちし事……七一二
伊丹康勝格言の事……七一六
佐藤直方直言の事……七一八
跋……七二一

常山紀談拾遺

卷之一

長篠合戰に武田勝賴人數を出す事……七二三
家康公甲の心得御示の事……七二三
家康公合戰心掛御示の事……七二四
小幡景憲物語の事……七二四

く事……六三四
片桐丹後守一番首を取る事……六三四

巻之二十二

松平助十郎先登戦死の事……六三六
安藤彦四郎討死の事……六三六
本多忠朝討死の事……六三七
孕石備前廣瀬左馬助討死の事……六三九
廣田圖書が事……六四〇
毛利勝永軍配相違の事……六四〇
伊藤武蔵守馬嶺を拾ふ事……六四一
郡主馬が事……六四二
野村越中才覺の事……六四二
長曾我部盛親生捕らるゝ事……六四三
大野道軒生捕らるゝ事……六四五
渡邊内藏助が子城を落ちし事……六四五
斎藤織部落武者を助くる事……六四六
澤原孫太郎節義赦免を蒙る事……六四七
丹羽左平太才覺城を落つる事　附
　左平太初陣義氣の事……六四八
大坂御陣中御支度の事……六五〇
本多落合功を論ずる事……六五〇
後藤又兵衛が事……六五一
古田重勝滅亡大河内元綱先見の事……六五四
石川重之功名　並隊遁の事……六五四

巻之二十三

直江山城守關寛王に書を贈りて訴訟人を斬る事……六五八
安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事……六五八
土屋數直執政の事　並土屋忠直成立の事……六五九
塚原卜傳劍術鍛煉の事……六六一
東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事……六六二
鮭延越前組下に恙愛ありし事……六六二
烏丸光廣卿行狀の事……六六三
中院通村公江戸にて和歌を詠給ひし事……六六四
本多忠義書籍評論の事……六六四
義經の戰の事……六六五

勝軍器量の事……五八九
重宗訴訟を聞かれし心得の事……五九二
板倉重矩の事……五九四
毛利勝永大坂に入る事……五九六
池田忠繼朝臣士を懐けられし事……五九八
芳賀内藏允武者振の事……五九八
佐竹勢今福口を攻むる事　竝杉原
常陸武功の事……五九九
上杉景勝志貴野口合戰の事……六〇一
上杉家の士大将に御感状を賜ふ事……六〇三
井伊直孝陣代の事……六〇三
本多伊豆守出陣聯句の事……六〇五
東照宮御父子御陣替の事……六〇五
後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の
事……六〇六

巻之二十一

大坂にて台德院殿諸將の攻口御巡
見の事……六〇八
東照宮志貴野御巡見の事……六〇八
小田切所左衛門平野彌次右衛門武
者振の事……六〇九
眞田が丸を攻めたる時の事……六一〇
塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事……六一一
木村畑田屋牧野四士武功の事……六一四
木村重成感狀を辭せし說……六一五
稻田九郎兵衛武功を語らざりし事……六一五
細川三齋夜討評論の事……六一六
大坂城中軍評定の事……六一六
堀直寄見切の事……六一八
山本權兵衛功名の事……六一八
毛利孫左衛門野村越中を詰る事……六一九
井伊木村挑戰重成討死井伊家諸士
功名の事　竝横田甚右衛門藤堂
高虎を激す事……六一九
脇五右衛門某氏三彌武功の事……六二四
增田兵大夫討死の事……六二五
青木長屋生捕らるゝ事　竝井伊家
赤備の來由……六二五
藤堂家合戰渡邊勘兵衛功名の事
竝渡邊始末の事……六二六
横田佐久間井伊家の陣へ御使に行

卷之十九

細川忠興胄の立物の說……五五二
忠興飯河豐前同肥後父子を誅せられし事　竝肥後が妻節義に死する事……五五三
黒田滿德丸袴着の時母里但馬舞をまひし事……五五四
龜田大隅江戸の石壁を築きし事……五五六
吉岡建法狼藉太田忠兵衞手柄　竝太田武技を論ずる事……五五七
柳生宗矩劍術御師範の事　竝宗矩先見の事……五五八
板倉重昌肥前國島原の賊追討の事
竝周防守重宗先見の事……五六一
北川九大夫肥後國川尻を守る事……五六二
天草一揆夜討の事……五六三
鍋島榊原島原城先登の事……五六四
黒田勢天草丸を攻破る事　竝黒田睡鴎武略の事……五六六
水野勝重父子有馬永純本丸一番乘を論ぜられし事……五六七
陣佐右衞門一揆の長四郎が首を取る事……五七〇
松野龜右衞門鐵炮修煉の事　附松野才覺の事……五七一
藤堂高虎阿濃津にて勢揃ぜられし事……五七二
福島正則領國召放さるゝ始末の事……五七二

卷之二十

福島正則信濃國へ赴かれし時の事……五八二
正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事……五八三
井伊直孝直諫の事……五八四
明の鄭芝龍援兵を乞ふ事　竝褒葉正勝諫言の事……五八六
大納言賴宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事……五八七
酒井忠勝直言の事……五八八
墨田川に橋を掛けられし事……五八八
板倉重宗京都所司代の事　附板倉

られし事……五二二
本多忠勝功名を論ぜられし事……五二二
井伊家の附人連署して直政を諫めし事……五二三
堀秀政を名人太郎といひし事……五二三
大久保忠隣忠直の事……五二四
天野康景廉潔高國寺城を去られし事……五二六
井上正就駿府へ御使の事……五二七
東照宮諫言を容れ給ひし事……五二八
三河國矢矧橋を修造せられし事……五三〇
山名禪高敝衣を著られし事……五三〇
東照宮禮を正し給ひし事……五三一
駿府城中へ水を引かんとせられし時の事……五三一
東照宮御中指の事……五三二
金の七本骨の扇の御馬印の事……五三二
加藤忠廣物語　竝飯田覺兵衞が事……五三三
前田利常戰死の士を弔はれし事……五三四
黒田如水遺言の事……五三四
本多正信加藤嘉明を譏されし事……五三五
安藤直次先見　竝本多正信遺言の事……五三六
台德院殿御行狀の事……五三七
林道春格言の事……五三八
藤惺窩秀吉公を論ぜられし事……五三九
紀伊大納言賴宣卿諫言を歡び給ふ事……五三九
由井正雪叛逆の時賴宣卿出仕の事……五四〇
水野重長諫言の事……五四二
松野慥太郎前田檜之助賞せらるゝ事……五四二
佐々九郎兵衞經濟格論の事……五四四
不破彦三武備の事……五四五
井伊直孝衣服儉約の事　附戰國の時質素なりし事……五四六
永井尙政執政の用意を直孝に問はれし事……五四八
中院通茂公幼宮を教訓の事……五四八
松平信綱恭敬の事　附信綱幼年奉公の事……五四九

渡邊才兵衛武功の事……四四五
石田三成生捕らるゝ事……四四七
小幡助六郎忠死の事……四五一
河村權七郎が事……四五二
加藤清正の北の方大坂を忍び出でられし事……四五三
淺井曠合戰前田丹羽の將士功名の事　附松平久兵衛軍學鍛煉の事……四五五
山田勘六郎討死の事……四五九
黒田如水凶相の馬に乘られし事……四六〇
黒田大友石垣原合戰の事……四六〇
三宅喜藏武勇の事……四六五
肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事……四六七
福島家の士大將東照宮を拜する事……四六八
加藤清正治亂を論ぜられし事……四六九
黒田如水豪氣の事……四六九

卷之十六

浮田秀家八丈島へ配流の事……四七二
小早川隆景遺訓の事……四七三
佐竹義宣國替の事　竝車野丹波が事……四七四
杉原常陸智勇の事……四七五
前田慶次が事……四七六
出羽國長谷堂合戰上泉主水討死の事……四七九
伊達上杉陸奥國松川合戰の事　附永井善左衛門岡野左內が事……四八三
石田が子の僧助命の事……四九一
越後國一揆堀直寄武功の事　附千利休が事……四九一
世間太兵衛伏兵を知る事……四九四

卷之十七

眞田昌幸父子三人始末の事……四九五
西村孫之進武功の事……五一四
伽次鄭兵衛伊豫國松前城を守る事……五一六
大久保忠佐に三枚橋の城賜ひし事……五二〇

卷之十八

細川幽齋古歌を書きて忠興を誡め

林半介殿の事……三九九
伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事……四〇〇
毛谷主水物見の事……四〇一
關ヶ原合戰島左近討死の事……四〇二
飯尾甚大夫一騎先駈の事　附成合平左衛門が事……四〇四
蒲生備中父子戰死の事……四〇五
大谷吉隆平塚爲廣最後合戰和歌贈答の事……四〇六
瀧川內記功名の事……四〇九
本多正重の事……四一〇
梶左馬助御書を認むる事……四一一
田邊甚兵衛幼年功名の事……四一二
辻小作中黑道隨が事……四一二
島津義弘關ヶ原退口の事　附大坂の商賈義氣の事……四一三
東照宮勝閧の儀を延べ給ひし事……四一六

卷之十四

細川忠興の北の方義死の事……四一八
安養寺門齋三成を生捕らんとせし事　附姉川合戰の時門齋生捕られし事　竝遠藤喜右衛門討死の事……四二〇
大津城合戰京極家の士戰功の事　附赤尾伊豆が事……四二三
十時傳右衛門山田三右衛門死骸返の事……四三〇
高次大津の城を出でられし事……四三〇
立花家足輕鐵炮の用意　附細川家口藥入吉田大藏猿頭の事……四三一
伏見落城の事　附島居忠政雜賀孫市を討れし事……四三二
村上三右衛門大島源二武者振の事……四三六
三刀谷監物田邊城に籠る事……四三七
田邊城勅命に依りて和平の事　附細川幽齋古今集傳授の事……四三八
古田助左衛門思慮の事……四四〇

卷之十五

伊勢國阿濃津城軍の事　附佐治縫殿が事……四四二
長束大藏大輔降參の事……四四四

細川忠興忠告の事……三五九

巻之十二

東照宮細川家の難を救ひ給ひし事……三六二
七人の大將石田を討たんとせられし事……三六四
東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立たせ給へる事……三六七
東照宮花房助兵衛に起請文を書けと仰せられし事……三六七
下野國小山にて上杉入庵議論の事……三六八
渡邊惣左衛門野中市左衛門忍びて大坂に使する事……三七〇
上杉景勝會津表手配の事……三七五
東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事……三七五
伊達政宗髏氣相馬の城下に宿せられし事……三七六
竹村半兵衛田中長胤を押止むる事……三七八
岐阜城攻の事……三七九
森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事……三八三
南部越後母衣串をぬかざりし事……三八四
兼松又四郎一柳の陣見切の事　附兼松武功言上の事……三八四
山田多門兵衛幼年功名の事……三八七

巻之十三

米田助右衛門見積の事……三八九
後藤又兵衛決斷の事……三八九
合渡川合戰黒田三左衛門毛附の功名の事……三九〇
神谷小介先登の事……三九〇
藤堂玄蕃赤坂町を鎭むる事……三九一
寺澤廣高加藤嘉明度量の事……三九二
春日九兵衛見積の事……三九二
村上彦右衛門先見の事……三九三
土方三九郎武功の事……三九三
小栗又市谷々見廻の事……三九五
秀家夜討せんといはれし事……三九六
株瀨川合戰の事……三九六
稻次右近功名の事……三九七
淺香庄次郎働の事……三九八

加藤嘉明拔懸功名の事……三二五
淺野長政諫言の事……三二六
井口與市主從功名の事……三二八
清正の武備嚴重なりし事……三二八
朝鮮より虎と象とを渡す事……三三〇
清正の士卒土穴に住みし事……三三一
森本庄林黑白鳥毛の鎗鞘の事……三三一
清正の花押筆晝多かりし事……三三二
後藤基次龜甲の車を造る事……三三二
和寧館合戰栗山利安武功用意の事……三三三
栗山利安儉約の事　附日根野備中
守黑田家に銀を返す事……三三四

卷之十一

竹中重治心掛の事……三三六
峯澤某謙信を擊たんとせし事……三三七
久世三四郎坂部三十郎物見の事……三三八
野々口彦助物語の事……三三八
石谷定清御供に參る事……三三九
坪內玄蕃心得の事……三四〇
道化清十郎平野與兵衞に對面の事……三四〇
谷太郎右衞門物前心得の事……三四一
可兒才藏が事……三四二
石田三成が事……三四三
關白秀次公生害の事　附吉田修理
が事……三四三
木村常陸介最後の事……三四五
秀吉有岡城へ使者に行かれし事
附河原林越後山脇源大夫が事……三四六
成田助九郎誅せらるゝ事……三四八
秀吉公連歌の事……三四八
三木牛之介鍬形の詩歌の事……三四九
谷大膳武勇討死の事……三五〇
戶川肥後守秀吉公を賀ふ事……三五二
黑田如水先見の事……三五二
秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給
ひし事……三五三
直江兼續が事……三五三
石田三成直江兼續密謀の事……三五四
兼續惺窩先生に逢ひし事……三五五
石田が黨東照宮を謀り奉らんとせ
し事……三五五

成瀬正成忠信の事……二九五
東照宮相摸堺御打廻りの事……二九五
豊臣關白五腰の刀の主を察せられし事……二九六
竹俣兼光の刀の事……二九七
本庄正宗の刀の事……二九八
胄の名様々有りし事……二九九
伊藤七藏高名の事……二九九
井伊直孝用意の事……三〇〇

補遺

黒田孝高法體の事……三〇〇
眞田幸村謀計を以て大里を退く事……三〇一
眞田幸村稻苅陣の事……三〇二
太閤勇氣大言の事……三〇三
朝鮮蟇山の役加藤清正敵情を察する事……三〇三
黒田長政慢言の事……三〇四
曾呂利新左衛門屋領習の事……三〇四
上杉景勝大人氣なる事……三〇七

卷之十

馬場重介武功の事……三〇八
利家白雲の琵琶を種村に與へらるる事……三一二
桑桐若勇威の事……三一三
澤村大學朱柄の鎗を持する事……三一三
加藤清正天草の一揆退治の事……三一四
森本義大夫組討功者の事……三一五
朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事……三一六
伊達家の士卒異風出陣の事……三一六
朝鮮南大門合戰　附後向の備の事……三一七
岡富源右衛門組討の事……三二〇
加藤光泰大言の事……三二〇
吉田又助川幅を積る事……三二一
清正虎を狩られし事……三二二
清正船を取らせられし事……三二二
太閤名護屋にて大言の事……三二三
菅政利後藤基次虎を斬る事　附羅山先生南山銘の事……三二四
泗川の城に狹間を切る時の事……三二五

巖石の城合戰坂小坂先登の事……二六七
野矢甚右衞門功名の事……二六八
秋月種長降參の事……二六八
新納武藏守豪氣の事……二六九

卷之九

黑田家岐井谷合戰の事　竝小川傳右衞門野村太郎兵衞岐井友房を斬る事……二七二
豐臣關白北條征伐出陣の事　附本多重次放言の事……二七八
井伊直政關白を討たんと言はれし事……二七九
鳥井源八郎先登士志を論ずる事……二七九
南部越後政口の事……二八〇
上樣日和といふ事……二八〇
伊奈熊藏兵粮を司る事……二八一
蒲生氏鄕の陣夜討の事　附氏鄕金の三階菅笠の馬印を免されし事……二八一
武藏國八王寺城落つる事……二八三
大音藤藏雨森彦三郎功名の事……二八四
信雄卿那須に謫せらるゝ事……二八五
坂部岡江雪免さるゝ事……二八五
關白鶴ヶ岡參詣の事……二八六
關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事……二八六
蒲生氏鄕大志の事……二八七
奧州葛西大崎一揆の事……二八八
蒲生家の士大將軍兵調練の事……二八八
氏鄕伊達家の刺客を免されし事……二八九
氏鄕佐々木が鐙を細川忠興に贈らるゝ事　附黑塚の歌の事……二九〇
本多忠勝萬喜が舊臣を呼出されし事……二九一
東照宮武田北條の跡御制度の事……二九二
東照宮武田の舊臣を召して御物語の事……二九二
東照宮物具の御物語　附小野木笠の事……二九三
秤御定の事　附壹步金辨當挾箱始の事……二九三
酒井金三郎本を忘れざる事……二九四

し事……二〇八
東照宮蟹江御出陣の事……二〇九
東照宮の御軍略に依つて蟹江城降參の事……二一〇
九鬼嘉隆蟹江の港出船の事……二一〇
中村一氏紀州の一揆を追拂はれし事……二一一
竹中重治の事……二一三
戰國の士功を讓る事……二一三
羽柴勝雅敵を免す事……二一四

卷之七

前田利家末森城後卷合戰の事……二一五
利家鳥越城を攻めらるゝ事……二一六
本多重次強諫の事……二一七
秀吉東照宮に和を乞はれし事……二一九
東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事……二二二
本多正信遠謀言上の事……二二三
東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事……二二四
信長公平手政秀を惜給ひし事　附小瀬甫庵信長記太閤記を著せし事……二三五
讒信信玄二將の批評……二三七
甲陽軍鑑虛妄多き事……二三六

卷之八

仙石權兵衛九州に間者の事……二四四
島津家久島原合戰の事　附惠藤某が事……二四四
立花道雪行狀の事……二四六
道雪仁愛深かりし事……二四八
立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手に加はる事　附道雪死去の事……二四九
稻葉一徹罪人を免さゞる事……二五二
高橋紹運討死の事　附立花統增薩摩に囚るゝ事……二五三
紹運妻藤鎭實の妹を娶られし事……二六二
志賀親次山海が嶺に兵を伏する事……二六二
高畑三河功名の事……二六三
森迫親正討死辭世の事……二六四
薩摩勢根白の砦を攻むる事……二六四

事……一六六
森蘭丸才敏の事……一六七
光秀反狀の事……一六八
秀吉浮田を欺きて上洛の事……一六九
黑田孝隆思慮の事……一七〇
池田家の使者筒井順慶を試むる事……一七一
明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事……一七二
東照宮和泉國堺より御歸國の事……一七三
小寺黑田始末の事……一七五
井口兄弟武勇の事……一八〇
吉田六之助首供養の事……一八二
生田木屋之介武功の事……一八三
備前國福岡城合戰福井小次郎歌を遺して討死の事……一八三
再福岡合戰藥師寺額田片岡三士討死の事……一八六

卷之六

山崎合戰の時堀秀政寶寺の山をとる事……一八八
森寺政右衞門武名の事……一八八
則武三大夫功名の事……一八九
瀧川一益厩橋を退く事……一八九
光秀愛宕山にて連歌の事……一九二
幸田彦右衞門が母義死の事……一九三
賤が嶽合戰秀吉智謀の事……一九三
堀七郎兵衞見切の事……一九四
賤が嶽七本鎗の事……一九五
石川兵助戰死の事……一九五
佐久間盛政生捕るゝ事　附久右衞門安次源六郎實政が事……一九六
尼子家の十勇士……一九七
信雄長臣を誅せられし事……一九八
平松金次郎始末の事……二〇〇
水野勝成高名　附行狀の事……二〇二
本多忠勝忠勇の事　附忠信の胄の事……二〇四
榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事……二〇六
初鹿傳右衞門の事……二〇七
秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られ

長九郎左衞門能登國發向の事……一三一
越中にて謙信月を賞せられし事……一三三
信長公松永彈正を恥しめ給ひし事……一三四
山口六郎四郎奥田三河守高屋城を
　落つる事……一三四
長坂釣閑跡部大炊邪佞の事……一三五
東照宮勝賴と大井川にて御對陣の
　事……一三六
栗田刑部幸若が舞所望の事　附時
　田が首實檢の事……一三七
岡田竹右衞門見切の事……一三八
朝日千介西郷伊豫を討つ事……一三八
菅沼定盈膽氣　附山口五郎作後藤
　金助討死の事……一三九
岡崎三郎君の御事……一四一
攝津國花隈城落つる事……一四二
高天神落城仁科信盛戰死の事……一四六

補　遺

眞田昌幸卽謀の事……一四七
眞田幸村前後奇計の事……一五一
眞田幸村智謀の事……一五二

卷之五

勝賴の首穿鑿の事……一五五
秀吉勝賴の滅亡を惜まれし事……一五六
信玄の館の跡を信長公見給ひし事……一五七
勝賴天目山にて最後の事……一五七
禪僧廣嚴院勝賴の屍を葬むる事……一五八
信忠慧林寺を燒かるゝ事……一五八
東照宮依田信蕃を助け給ふ事……一六〇
武田信繼誅戮の事……一六一
戶田半右衞門山口小辨佐々清藏功
　名の事……一六一
小山田信茂誅戮の事……一六二
馬塲美濃が女召出さるゝ事……一六三
辻彌兵衞が事……一六三
明智光秀信長公を弑する事……一六四
秀吉備中にて光秀が書を取られし
　事……一六五
秀吉西國の米を買はれし事……一六六
光秀居城を築く事　附幸崎の松の

高木主水村越與三右衛門後殿の事……九四
太田下野識鑒の事……九五
北條丹後指物の事……九六
淺井長政齋藤龍興と軍の事……九六
丸毛兵庫助軍配の事……九七
馬場美濃守今川の館を燒く事……九八
大友義鎭肥前國退口の事……九八
信長公東照宮に爲朝の鏃を進らせられし事……九九
姉川合戰の事……九九
姉川合戰榊原二の手功名の事……一〇〇
三井角右衛門生瀨平右衛門功名穿鑿の事……一〇〇
金松彌五左衛門物見の事……一〇一
信長公朝倉を擊ち給ひし事……一〇二
長野信濃守上野國箕輪城を守る事……一〇三
三方ヶ原合戰の事……一〇三
三方ヶ原合戰信玄遠謀の事……一〇九
三方ヶ原合戰東照宮御退口の事……一〇九

卷之四

山崎長門守詫美越前守討死の事……一一二
中川重秀和田惟政を擊つ事……一一二
梶川彌三郎槇島先陣の事……一一三
山內一豐馬を買はれし事……一一四
奧平貞能父子歸降の事……一一五
東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事……一一七
渡邊守綱を鎗牛藏といふ事……一一八
謙信單騎佐野城に入られし事……一一九
大河內政房節義の事……一二〇
鳥居强右衛門忠節の事……一二一
酒井忠次鴫巢城を乘り取られし事……一二三
長篠合戰の事……一二四
內藤四郎左衛門返答の事……一二五
多田久藏が事……一二五
佐久間信盛僞りて勝賴に降る事……一二六
二股城攻內藤櫻井功名の事……一二七
鷹田信蕃二股城を退く事……一二八
信長公秋山伯耆を刑し給ふ事……一二九
松平忠次諏訪原城を守らるゝ事……一二九
山內治大夫進士清三郎功を讓る事……一三〇

東照宮大高城を引取り給ふ事……三九
武田信玄忍の者を討たれし事……四〇
信玄鬼島傳右衛門を呼ばれし事……四一
備前國龍口落城の事　附浮田直家
の事　竝岡剛助高名……四一
遠藤喜三郎三村家親を打つ事　竝
備前明禪寺合戰の事……五〇
上杉謙信小田原へ攻め入られし事
附上京の事……五八
新發田治長の事……五九
信濃國川中島合戰の事……六〇
謙信軍中に青竹を持たれし事……六四
謙信松山城後卷の事……六五
東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御
軍ありし事　附蜂谷半之丞が事……六六
東照宮針崎合戰の事……六八
向井與左衛門かへり感狀の事……六八

補遺

眞田昌幸奇計の事……六九
武田信玄夜物語の事……七一
武田信玄自己の像を造る事……七二
眞田昌幸北條勢を欺く事……七五

卷之三

中島元行が母備中經山城を守る事……七八
石川數正淺岡某に髮の緒の結び樣
を習ふ事……七九
東照宮三河國一宮城御後卷の事……八〇
三好松永光源院義輝朝臣を弑する事……八一
三好實休戰死の事　附光忠の刀の事……八二
浦兵部高名の事……八六
中村新兵衛永原安藝守一騎打の事……八六
北條綱成地黃八幡の旗を捨つる事……八七
柴田勝家水甕を破りて城を守りし事……八八
勝家先陣の將となる事……八九
坪內某料理の事……八九
大澤左衛門が手の者ども東照宮を
親び奉りし事……九〇
清洲にて東照宮信長公御對面の事……九二
信長公伊勢の國司を亡し給ひし事……九二
大久保忠隣功名の事……九四

常山紀談目錄

序……一
自序……五
凡例……一

卷之一

長尾輝虎越後を治められし事……一
輝虎平家を語らせて聞かれし事　附
佐野天德寺の事……四
參河國伊田合戰の事……五
近江國音羽城軍の事……七
荒木安藝守討死の事……八
甲斐國韮崎合戰の事……一〇
筧平三郎功名の事……一〇
佐伯惟常高崎城を乘取る事……一二
北條早雲智計の事……一三
毛利元就嚴島合戰　附盲人間者の事……一三
元就伊豫の河野に船を借られし事……一六
那須の臣大關夕安深慮の事……一六
太田持資歌道に志す事……一七
持資京に上りし時の事　附かゝる
ときの歌の沙汰……一八
木全知短連歌の事……二〇
輝虎私市城を攻められし事……二〇
輝虎太田三樂が子を質に取られし事……二一

補遺

北條氏康示弱乘強の事……二二
上杉謙信大人氣ある事……二四
上杉謙信鹽を甲斐に送る事……二四
吉川元春醜婦を娶る事……二五
板垣信形饗應黑白を分る事……二六
眞田昌幸智謀北條勢を破る事……二七
羽柴秀吉遠計を以て信玄を欺く事……三〇

卷之二

東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事……三五
大久保忠俊の事……三六
桶狹間合戰今川義元討死の事……三七
信長上京の事……三八

を服部南郭に受け、學成りて一時に盛名あり。常に文武兼備を以て士人の要道とし、孫吳の兵法と槍劍の術とは最も得意とする所たりしといふ。亦以て其爲人を觀るべし。天明元年正月歿す。齢七十四。著はす所、常山文集、文會雜記以下頗る多く、本書最も世に行はる。

本書異本數種ありて、記事の互に出入せるもの少からず。今は元文四年の板本を以て底本とし、底本に無くして異本に載する所は、悉く補遺として之を錄し、尙各項の題目を本文の前に揭げ、送假名を一定し、間、假名を漢字に改むる等、專ら閱讀の便宜を圖れり。

大正元年九月

校訂者　永井一孝

緒言

常山紀談は、備前岡山の碩學湯淺常山が、戰國時代より德川氏の初世に至るまで、百餘年間に於ける名將傑士の言行を拾摭載錄せるものにして、其の旨とする所、蓋し古武士の意氣精神を傳へて、士人修養の鑑戒たらしむるにあり。華麗絢爛の文藻に乏しと雖も、暢達の文、透徹の筆、よく其言はんと欲する所を盡し、百年の後、尙讀者をして感奮興起せしむるもの少からず。是れ本書が、幾多同種の載籍中にありて、獨り群を拔いて世に行はれ、永く讀者を失はざる所以なるべし。

常山名は元禎、通稱は新兵衞、藩侯に仕へて家老格に登りしが、謹嚴自ら持し廉介職を奉じ、遂に直言を以て免黜せらるゝに至れり。初め古文辭の學

LIBRARY
MAR 13 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

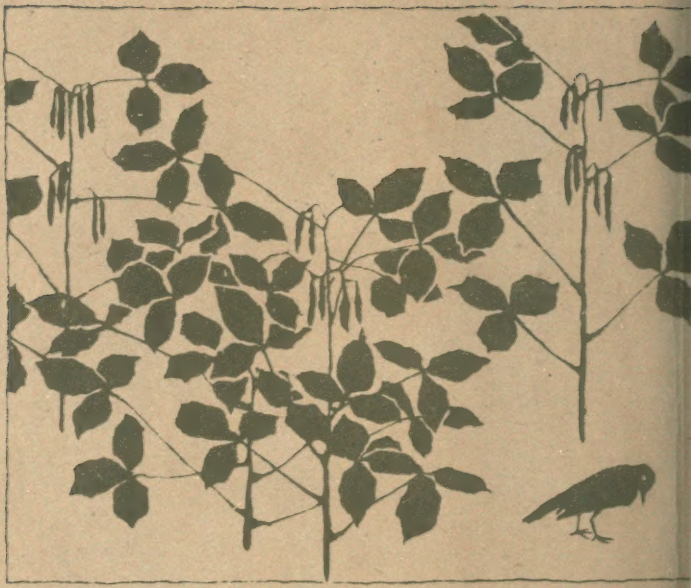
PL
795
Y8J6
1912

旅邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

常山紀談

全



PL
795
Y8J6
1912

Yuasa, Jozan
Jozan kidan

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY